

2013年度(平成25年度)  
博士論文

墓誌銘より見たる宋代女性像について

立命館大学大学院  
文学研究科人文学専攻  
清水嘉江子

# 目次

序章	1 頁
第一章 死亡年齢と結婚年齢	7 頁
第二章 婚姻関係と地理的範囲	24 頁
第三章 婚姻の階層的範囲	45 頁
第四章 守節、再婚、離婚	70 頁
第五章 宋代女性の出産と養育	86 頁
第六章 子どもの教育と学問	95 頁
第七章 家庭での行状	107 頁
第八章 近親者が記した墓誌銘	117 頁
終章	130 頁
参考史料、参考文献	133 頁

# 墓誌銘より見たる宋代女性像について

## 序章

本論では宋代の女性埋葬者の墓誌銘を基本史料として宋代の女性像を描いてみた。筆者が依拠した史料の墓誌銘について概略をまとめてみよう。墓誌銘とは死者の略歴・徳行などを石に刻んで墓側に建てるまたは埋めるものをいい、墓誌の文章の終わりに韻文をつけたものをいう。

墓誌銘の起源は、魏晋時代、さらに絞れば西晋の元康年間(291～99)前後までさかのぼることができる(注1)。

墓誌銘の成立過程は、『宋書』卷十五 志第五 禮二に記されている。

漢以後、天下の死を送ること奢靡にして、多く石室に石獸碑銘などの物を作る。建安十年、魏の武帝、天下の彫弊を以て、令を下して厚葬を得ざらしめ、又た立碑を禁ず。

(注2)

漢以後、葬式の風習が華美となり、多くの石室に石で作った獸や碑銘などがおかれた。建安十年(205)、魏の武帝(曹操)は天下が衰えることを懸念して、令を下して厚葬を行わないこと、さらに碑を建てることを禁じた。死者を弔うのに碑は必要であるが立碑の禁によって地上には置けない。そこで碑を地中に埋めたのが墓誌碑であり、これが後に墓誌銘へと変化し、地上に建てた墓碑に対して、地下の墓室内に置かれたのが墓誌である。

墓誌銘の定義は、①墳中に柩とともに埋める。②銘文を書き記した部分と表題を書いた蓋の二枚の石で一セットになっており、蓋の部分には必ず『○○墓誌銘』という記述がある。③石の形は正方形ないし方形である。④誌の内容は序と銘からできている。⑤序の部分に書くべき事項は、表題・諱・字・行跡・官歴・諡号・年齢・姓氏・籍里・世系・卒年・卒地・葬年・葬地・人柄についてである(注3)。

墓誌銘の文字は、墓誌は石が小さいから、あまり長い文章は書けないが、細字でビッシリ詰めて刻む。千古に伝えるための文章であるから、かりそめには作らない。一流の文章家に頼んで、できるだけ立派な文章を作ってもらう。その材料とするために行状や家伝が前もって作られる。これは歴代文人たちの重要な収入源となった(注4)。

墓誌銘の内容は、序と銘から成り立っている。序は行状など被葬者の生前の詳しい履歴を記した材料に依拠して作文されるのが常で、墓誌銘を依頼された撰文者にとって文章創作の上でさほど手のかかるものではない。撰文者がもっぱら自らの文章表現上での創作力を発揮しようとするのは、韻文形式の銘の部分である(注5)。

基本的に墓誌銘は、一流の文章家に執筆料を支払って依頼するものである。故に執筆されると直ちに巷間に広まり、少し時間がたてば執筆者の文集に収録されたり、筆記で論議

されたりして、同時代の人々が共有する話題となった(注 6)。さらに墓誌銘の流布に拍車をかけたのが、宋代における紙と印刷技術の発展である(注 7)。墓誌を書き終えて以後、墓誌銘が墓中に埋められる以外に、執筆者の文集に収められて世間に広まり、人々に読まれるようになったのである。

このように文集の現存数が著しく増加した宋代以降、女性墓誌銘の数も増加したため、宋代の女性埋葬者の墓誌銘を基本史料とした。最初に行ったことは、墓誌銘の表題が収録されている『宋人傳記索引』(注 8)から女性墓誌銘の表題を収集した。結果、既婚女性 1018 人、未婚女性 57 人、あわせて 1075 人の女性墓誌銘の表題を収録することができた。収録した 1075 人の女性墓誌銘は、四庫全書、四部叢刊、金石志、地方志などの文集および別集などに記載されており、そこに記されている銘文を基礎史料として活用した。これらは、宋朝下の著者の文集に収録された女性墓誌銘が殆どを占めるが、一部に金朝下で作成された文集に掲載された墓誌銘も含む。

また墓誌銘から復元された宋代女性像が、宋代女性全体を代表させることができるかという問題に言及しておかねばならない。この点については、第三章「婚姻の階層的範囲」において述べているが、墓誌銘をもつ女性の多くが宋朝から授けられた封号を有していたことからわかるように、一定の社会的地位を有した階層に属する女性たちであるからである(注 9)。したがって本稿における考察の結果は、そうした階層に属する女性に関するかぎり、蓋然性のたかいものとする。

本論では宋代の女性墓誌銘を基本史料として活用しているが、今までに墓誌銘を基本史料として使った研究は、その時代の墓誌銘すべてではなく、いくつかの墓誌銘を抽出しての研究である。

中国の陶晋生氏が「士族婦女 婚齡兒女及壽命」(『北宋士族 家族 結婚 生活』台北：中央研究院歷史語言研究所 2001 年)において、歐陽脩『歐陽文忠公集』、司馬光『溫國文正司馬公集』、范祖禹『范太史集』、曾鞏『曾鞏集』の四集に収録された婦女 137 人の墓誌銘を史料として用い、137 人の平均死亡年齢を算出し、宋代女性の平均寿命としている。

日本では野村鮎子氏が「蘇轍の生母に関する一考察」(『橄欖』早稲田大学文学部中国文学研究会 2002 年)において、蘇軾『東坡集』に収録された蘇軾の身近な女性である「亡妻王氏墓誌銘」「朝雲墓誌銘(蘇軾の妾)」「乳母任氏墓誌銘」「保母楊氏墓誌銘」について論じている。

このように墓誌銘のいくつかをとりあげての研究はみられるが、宋代女性墓誌銘を網羅しての研究は本論が初めてである。さらに墓誌銘の研究に関して歴史学者が対象としている墓誌銘の殆どは男性墓誌銘であり、筆者が対象としているのは女性墓誌銘である。男性墓誌銘に記されている内容は、本人の氏名、本籍地、祖先の官職、祖父母・父母・妻の氏名、幼少時の性格や行い、修学の履歴、科擧の可否、交友関係、官僚としての職歴などである。女性墓誌銘も本人の氏名から幼少時の性格や行いまでは男性墓誌銘と同様であるが、以後は何歳で誰に嫁いだか、嫁ぎ先の舅姑の氏名、夫の職業、嫁ぎ先での行い、周囲(族人)の評価、子供の数、男児は官職・女児は嫁ぎ先と夫の氏名及び職歴などが列記されている。

男性墓誌銘と女性墓誌銘の違いは、成人後、男性は交友関係や官職が主であるのに対し、女性墓誌銘は婚家での行いが主となっている。言い換えれば、男性は「外」、女性は「内」での行状に撰者は視点を置いて墓誌銘を執筆している。故に女性墓誌銘は、「内」での行状

を主として執筆しているため、墓主の性格や生活態度について、称揚している場合もみられる。被葬者を美化する理由は、文集に載ることによって、墓誌銘が世の人々に読まれ、死者のために書かれた墓誌が生者にとっても重大な意義をもち、墓誌の記述の中心が表面上は墓主であるにもわらず、その記述も十分満足がいくものであるよう求められ、生きている人間の関心事となっていたのである。このように美文化された墓誌銘を史料とすることに対して、研究者の見解はさまざまである。

宮崎市定氏は「神道碑、行述、家伝、墓誌は、故人の子孫が知人に依頼して書いてもらうものであるから、そこには絶対に悪口は書かず、若し故人に悪い評判があれば努めて弁護の辞を載せるのが常である(注 10)」。竺沙雅章氏は「墓誌銘等の伝記資料を用いる時には、その史料的限界を十分に心得ておかねばならない(注 11)」。梅原郁氏は「神道碑、墓誌銘などの文章は、名のある文筆家に、多額の潤筆料を渡して作ってもらうので、こうした種類の文章は、美辞麗句を巧みなレトリックでちりばめ、その人物のある一面しか光をあてていないのが普通である(注 12)」。鄧小南氏は「女性の墓誌のような文字資料は、女性の生活状況をかなり直接的に反映していると考えられる一方で、当該時期・当該地域における定型句で埋めつくされ、理念的な枠組みでもって当時の現実を規範化している場合もある(注 13)」と述べている。上記の研究者は「祖先の系譜、地方官としての治績、居住地における日常的活動は、たとえば義行・善行などの評価(行為自体への疑問というよりはそれについての評価部分)は、額面通りには利用できない。」と述べ、個人の伝記史料として年代記的史料として、墓誌銘は記述内容が希薄で信憑性に欠けるとし、墓誌銘を史料として活用するうえでの注意を促している。

一方、岡元司氏は「宋代は潤筆に対する道義的な考えがまだ広く存在しており、必ずしも報酬を得ることが第一義ではなかった。北宋期には知人・友人に執筆を依頼するケースが多く、南宋では葉適が墓誌銘の執筆にあたって、依頼者からの要望といえども筆を曲げることを拒否する事例があり、黄震ら後の文人から葉適の墓誌銘が高い評価を受けているのは、根拠のあることだとの指摘がなされている。数が多くとも、粗製乱造に走らず、執筆内容には一定の信憑性が得られていたとみなしてよいものと思う(注 14)」。黄寛重氏は「墓誌の記録は一個人の一生の重要な事跡である。人物の如何をくらべ論ずるのではなく人生の歷程である。更に当時の社会や政治が認識でき、経済の重要な基礎である(注 15)」。劉静貞氏は「墓誌は人の生から死までを書くもので、ひとつの著述活動の領域として、その文章はただ個人の思想や感情の吐露だけでなく、深い社会的な意義をも有している。墓誌の内容は当時の人々の知識体系のみならず、現実社会の理想に対する洞察と体験をも提示しているのである(注 16)」。カリフォルニア大学のベヴァリー・ボスラー氏は「中国についての歴史的探究の多くのタイプにとって、最も資源に富んだジャンルの一つに、葬礼伝記がある。これは子孫のために、または被葬者の人生を記念するために、個人の没後に編集された様々なタイプのテキストである。このカテゴリーは、墓誌のほか、行状、それに関連する銘、神道碑、墓表、墓記、墳誌を含む。葬礼伝記は、かなり個人的なものであり、家庭生活と個人間の関係についての詳細な情報を提供してくれる(注 17)」とある。

岡氏をはじめとする上記の四氏は、社会的存在としての士大夫を研究課題としているため、個人の資質に関する情報は重要視せず、本人の氏名、祖父・父の官職及び氏名、妻の

氏名、本籍地、科挙合否の事実、修学時の師弟関係、交友関係、官僚としての職歴、官途に就いていない場合は生前の善行・義行など(評価は別にして事実としては認定可能である)、王安石・秦檜・韓侂胄のような「歴史的(に評価が定まった)悪人」に対する反抗など被葬者の党派的立場、死亡年齢、死亡地、埋葬地、子・孫の氏名など脚色しにくい部分は利用し、墓誌銘は使い方次第で活用できるとしている。

筆者が求める宋代女性像は、個人的女性像ではなく、平均的女性像の解明を第一としている故に、岡氏、黄氏、劉氏らの研究とも重なり、墓誌銘は利用可能な情報源であると認識して活用した。

筆者が考えるに、墓誌銘を歴史史料として活用することへの賛否は活用目的にあり、活用の仕方では墓誌銘の史料的価値の有無が決まるのではなかろうか。これまで墓誌銘を基本史料として使った研究は、その時代の墓誌銘すべてではなく、いくつかの墓誌銘を抽出しての研究である。宋代の女性墓誌銘も研究史料として活用されているが、1075 人の女性を対象にした研究は今のところ見当たらない。

本稿の第一章から第八章までのうち「家庭での行状」を除く「死亡年齢と結婚年齢」「婚姻関係と地理的範囲」「婚姻の階層的範囲」「守節、再婚、離婚」「宋代女性の出産と養育」「子どもの教育と学問」「近親者が記した墓誌銘」については、基本的に誇張や改ざんを必要としない故、ここから得られる情報は信頼できると考えられる。

墓誌銘という限られた範囲のなかから求めた女性像のため、とりあげているのは士大夫・官僚・宗室関係の女性であり、宋代女性全てを網羅しているわけではないが、士大夫階層に属する女性の像は描くことができた。さらに女性墓誌銘から北宋と南宋の社会背景の違いも浮かび上がったのである。

宋代女性墓誌銘に記載されている 1075 人の女性像をまとめるに際して、以下の作業を行った。「墓誌銘表題」「死亡年の時期区分」「死亡年」「死亡年年号」「死亡年齢」「結婚年齢」「結婚年の時期区分」「結婚年」「子供の数」「男児数」「女児数」「位階官職」「位階」「祖父官品」「祖父官職」「父官品」「父官職」「夫官品」「夫官職」「子官品」「子官職」「出身地(出身地路)」「嫁ぎ先(嫁ぎ先路)」「移動範囲」「墓誌銘の記載内容(行状、教育、封号、守節、再婚、離婚など)」「撰者官職」「出典」の 27 項目をもとに、別表「宋代女性墓誌銘」を作成。そのうえで北宋・南宋ともに死亡年を基準として 1 期・2 期・3 期に分類した(注 18)。

宋代は 960 年～1126 年の北宋、1127 年～1279 年の南宋に分かれているが、10 年ごとの分類(別表 1「期別」参照)に従って 1129 年までを北宋、1279 年までを南宋とし両宋の違いを求めてみた。厳密には両宋の区切りは 1127 年であるが表の上では 1129 年とした。結果 2 年の誤差を生じたがその差は 10 人である。死亡年齢を基準とした分類では、北宋の墓誌銘に載る女性は 604 人、南宋の墓誌銘に載る女性は 471 人であるが、10 年ごとの表では北宋 610 人、南宋 465 人と、南宋の 6 人が北宋に属することになる。1075 人中の 6 人であるから、全体像へ及ぼす影響は少ないと考える。

別表「宋代女性墓誌銘」を作成するに当たり、「死亡年」と「結婚年」が不明な墓誌銘については、以下の方法で「死亡年」と「結婚年」を算出した。「死亡年」については、当該墓誌銘と同じ文集に収録されている、他の女性墓誌銘の死亡年の平均値を入れた。「結婚年」については、墓誌銘の記載から結婚した年齢が判明する 485 例の結婚年齢の平均が 18.4

歳になったため、18歳で結婚したと仮定して算出した。

前述の方法で作成した別表「宋代女性墓誌銘」及び別表 1～14 をもとに、「死亡年齢と結婚年齢」「婚姻関係と地理的範囲」「婚姻の階層的範囲」「守節、再婚、離婚」「宋代女性の出産と養育」「学問と子供の教育」「家庭での行状」「近親者が記した墓誌銘」の八項目について考察を試みた。

## 注

- (1) 福原哲郎「墓誌銘の起源」(『月刊しにか』特集：石で読む中国史 2001 年 3 月号) 32 頁
- (2) 『宋書』卷十五 志第五 禮二 「漢以後、天下送死奢靡、多作石室石獸碑銘等物。建安十年、魏武帝以天下雕弊、下令不得厚葬、又禁立碑。」
- (3) 久田麻美子「墓誌銘の成立過程について」(『中国学志』大有号 1997 年) 49 頁
- (4) 藤枝晃「碑誌の文章」(『文字の文化史』講談社学術文庫 1409 1999 年) 268～270 頁
- (5) 愛后元「唐代の墓誌銘」(『特集 石で読む中国史』SINICA 2001 年) 48 頁
- (6) 岡元司氏「水心文集墓誌銘の統計的分析」(『宋代人の認識』宋代史研究会研究報告第七集 汲古書院 2001 年) 302～303 頁
- (7) 劉静貞「文物、テキスト、コンテクスト—五代北宋期における墓誌資料の性質とその捉え方」(『大阪市立大学東洋史論叢別冊特集号』大阪市立大学大学院文学研究科 2006 年) 82 頁
- (8) 『宋人傳記索引』宋史提要編纂協力委員會 東洋文庫 1968 年  
宋人および遼・金朝支配下の漢人約八千人の傳記を検索し、かつ各人の出身、家族関係を知るための索引である。
- (9) 官僚の妻や母などが夫や息子の任官・昇進にしたがって封号を授与された士大夫階層の関係者だけでなく、封号の保有者は節婦や捐納で告身をえたものに授与された。宋代女性への封号授与については、第三章「婚姻の階層的範囲」に記している。
- (10) 宮崎市定「宋代の士風」(『宮崎市定全集』岩波書店 1992 年) 346 頁
- (11) 竺沙雅章「五代・宋研究史の概要」(『アジア歴史研究入門』第一巻中国 同朋社出版 1983 年) 235 頁
- (12) 梅原郁「『宋名臣言行録』の構成と名臣」(『宋名臣言行録』講談社 1986 年) 19 頁
- (13) 鄧小南「考古資料と唐宋女性史研究—唐代西北と宋代華北を事例として」(『大阪市立大学東洋史論叢』別冊特集号大阪市立大学大学院文学研究科東洋史研究室 2006 年) 67 頁
- (14) 注(6)参照
- (15) 黄寬重「墓誌史料の價值與限制」(『宋代的家族與社会』東大図書股份有限公司 2006 年) 61 頁
- (16) 劉静貞「北宋の墓誌著述活動における女性参加」(『上智史学』53 上智大学史学会 2008 年) 121 頁
- (17) ベヴァリー・ボスラー著、高津孝編訳「葬礼伝説とその他の伝記」(『中国学のパス・ペクティブ』勉誠出版 2010 年) 27 頁

(注 18)

北宋時期区分

北宋 1 期→ 960～1044 85 年間＝西夏との慶暦の和議：国内統一・對外戦争の終結

北宋 2 期→1045～1085 41 年間＝神宗歿、新法廃止：国内安定期

北宋 3 期→1086～1126 42 年間＝靖康の変：党争と政治に腐敗

南宋 1 期→1127～1162 36 年間＝高宗：再建期

南宋 2 期→1163～1194 32 年間＝孝宗・光宗：安定期

南宋 3 期→1195～1279 85 年間＝寧宗・理宗・度宗・恭宗他：衰亡期

# 第一章 死亡年齢と結婚年齢

本稿では宋代の女性墓誌銘をつかって、宋代女性の平均的な死亡年齢と結婚年齢について考察を加えるものである。これら二項目は人口史研究上の基本項目であるが、宋代女性の実相の解明という筆者の研究目的からも基本的な関心事項である。宋代女性の墓誌銘で年齢が明記されているのは、死亡年齢と結婚年齢である。死亡年齢から考察してみよう。

## (一) 先行研究にみえる死亡年齢

近代的センサスが行われる以前の中国社会における平均余命について、確実な数字は得にくく研究も少ない。袁貽瑾氏は、広東・中山県の李氏家譜を調査し、1800年～1849年、李氏一族中の20歳以上族員の生没情報を集計し、出生時(0歳時)平均余命(life expectancy)を算出した。それによると男子33.7歳、女子36.8歳であった(注1)。

またジョン・ロッシング・バック(John Lossing Buck)が1928年から1933年に行った調査によれば、同じく出生時平均余命は男子34.85歳、女子34.63歳となっている(注2)。下記の表1は、ジョン・ロッシング・バックが調査をもとに再計算してつくった余命表である。男女ともに出生時平均余命は1歳余低くなっているが、大きな違いではない。ちなみに同時代の日本が男43.06歳、女43.20歳、アメリカが男59.31、女62.83歳(注3)であったから、伝統中国社会は他の社会と比べて平均余命はかなり低かった。

表1 1929～1931年 中国郷村平均余命表

年齢	男女	男	女	年齢	男女	男	女
0	33.30	33.38	33.13	35－39	29.89	29.42	30.22
1	38.59	38.85	38.22	40－44	26.60	25.93	27.16
2	41.63	41.95	41.18	45－49	23.32	22.59	23.95
3	44.14	44.20	43.97	50－54	19.85	19.20	20.39
4	45.47	45.83	44.98	55－59	16.56	15.91	17.06
5－9	46.17	46.67	45.53	60－64	13.89	13.37	14.26
10－14	45.38	45.76	44.87	65－69	11.37	10.92	11.64
15－19	42.35	42.84	41.69	70－74	9.33	8.53	9.87
20－24	39.50	39.72	39.11	75－79	7.58	7.14	7.79
25－29	36.53	36.57	36.34	80－84	5.66	5.15	5.86
30－34	33.41	33.28	33.36	80以上	4.28	3.37	4.58

宋代女性の平均寿命については陶晉生氏による研究が既にある。氏は歐陽脩『歐陽文忠公集』、司馬光『温國文正司馬公集』、范祖禹『范太史集』の三集に収録された婦女112人の墓誌銘史料をもとに平均死亡年齢を37歳と算出し、またこれとは別に曾鞏『曾鞏集』所載の婦女24人の墓誌銘から平均死亡年齢が59歳であるとしている(注4)。上記三集と『曾鞏集』は同時代の文集であるにもかかわらず、三集と『曾鞏集』では平均死亡年齢に22歳も差が出ているのであるが、その理由についても陶氏は説明されていない。

そこで筆者は陶氏があげている歐陽脩『歐陽文忠公集』、司馬光『温國文正司馬公集』、

范祖禹『范太史集』の三集と曾鞏『曾鞏集』の女性墓誌銘の死亡年齢を一覧にした(下記の表 2 参照)。陶氏は三集及び『曾鞏集』に載る婦女、即ち既婚女性を対象として集計しているため、ここでは既婚女性のみを対象として集計した。筆者がこの作業を行ったところ、前記の三集に収録された女性墓誌銘は 112 人ではなく 117 人(うち死亡年齢不明 3 人)であり、平均死亡年齢は 37 歳ではなく 36.5 歳となり、『曾鞏集』24 人(うち死亡年齢不明 1 人)の平均死亡年齢は 59.5 歳である。(次頁、表 3 参照)。

表 2 三集および『曾鞏集』所載既婚女性の死亡年齢分布

死亡年齡	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30		
范太史集	2	1	4	6	2	8	5	7	4	1	2	1	4	4	3		
歐陽集		1	1	1				1		1			1	1			
司馬集									1								
三集合計	2	2	5	7	2	8	5	8	5	2	2	1	5	5	3		
曾鞏集					1						2						
死亡年齡	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45		
范太史集		2	1	2		1	3	2	1				1	1	2		
歐陽集			1			1	3						1				
司馬集																	
三集合計		2	2	2		2	6	2	1				2	1	2		
曾鞏集	1	1	1		1								1		1		
死亡年齡	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60		
范太史集					3		1		1		1	1	1				
歐陽集						1					1	1			1		
司馬集			1		1										1		
三集合計			1		4	1	1		1		2	2	1		2		
曾鞏集																	
死亡年齡	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75		
范太史集		2					1	1		1		1		1			
歐陽集							1								1		
司馬集																	
三集合計		2					2	1		1		1		1	1		
曾鞏集				1		1				2			1				
死亡年齡	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92
范太史集	1			1			1	1									
歐陽集											1						1
司馬集																	
三集合計	1			1			1	1			1						1
曾鞏集		2		2	1			1			1	1			1		

表3 三集と『曾鞏集』の平均死亡年齢

文集	総人数	総死亡年齢	平均死亡年齢
范太史集	89 人	3058 歳	34.4 歳
歐陽集	21 人	926 歳	44.1 歳
司馬集	4 人	182 歳	45.5 歳
三集合計	114 人	4166 歳	36.5 歳
曾鞏集	23 人	1369 歳	59.5 歳

陶氏の集計と筆者の集計とでは三集所載の女性数とその平均死亡年齢に若干の差があるが、これらは集計上の単純間違いで大きな問題ではない。しかし三集の 36.5 歳と『曾鞏集』の 59.5 歳では 23 歳の差があり、三集と『曾鞏集』の平均値の違いは単純な統計上の誤差の範囲内を超えている。どちらの数字が実態に近い数字なのであろうか。そもそも多くの宋人の文集のなかからこの四種の文集が選ばれた理由はなにか、なぜ三集と『曾鞏集』とが分けられたのか、どちらも説明されていなため、集計結果にも不安が残る。

陶氏が用いた四集の撰者である歐陽脩(1007~1072)、司馬光(1019~1081)、曾鞏(1019~1083)、范祖禹(1041~1098)の生存年は 1007 年から 1098 年であり、この間に偏在した四集から得られた数値をもって宋代を代表させるには問題が残る。

陶氏は三集 112 人と『曾鞏集』24 人と併せて 136 人の婦女の事例を以て、宋代女性の平均死亡年齢を算出している。墓誌銘に所載されている宋代女性の死亡年齢というならば、南宋の女性も含まれて当然であるが、陶氏は北宋の女性のみを対象とし、両宋の差については言及されていない。三集と『曾鞏集』との平均死亡年齢の差とともに、見過すことのできない問題と言わねばならない。そこで、筆者の検出した 1075 人の事例によって平均死亡年齢を検証してみよう。

## (二)墓誌銘事例の分析

宋代女性墓誌銘に所載の 1075 人の女性を対象に平均死亡年齢の集計を試みた。ただし陶氏は婦女(既婚女性)を対象としているため、筆者も既婚女性 1018 人を対象とした。既婚女性 1018 人のうち死亡年齢判明は 952 人(不明 66 人)、この 952 人を北宋 520 人と南宋 432 人に分類して集計した結果、平均死亡年齢は北宋 53.1 歳、南宋 63.7 歳であり、両宋で 10 歳の差が生じた(別表 4「死亡年齢」参照)。

陶氏が採用した北宋中期の四種の文集所載の 136 人の墓誌銘から推定された数値と比べると、サンプル数が多い分、時代的偏差などの資料に由来するバイアスは軽減されていると言えよう。次頁の表 4 は別表 4「死亡年齢」をもとに、既婚未婚女性の死亡年齢が判明している 1006 人を北宋と南宋に分け、死亡年齢の分布を表したものである。

表4 宋代女性の死亡年齢の年代分布 ()の数字は、未婚女性の死亡年齢

死亡年齢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	小計
北宋	(6)	(8)	(7)	(3)	(2)	(2)	(3)	(3)		(1)	35
南宋											
合計	6	8	7	3	2	2	3	3		1	35
死亡年齢	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	小計
北宋	(2)	(3)	(1)	(1)	(3)	(1)2	3	9	(1)11	3	40
南宋		(1)	(2)				1			(1)2	7
合計	2	4	3	1	3	3	4	9	12	6	47
死亡年齢	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	小計
北宋	(2)11	11	9	8	(1)7	9	8	9	7	5	87
南宋	1	2		3			5	1	3	5	20
合計	14	13	9	11	8	9	13	10	10	10	107
死亡年齢	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	小計
北宋	6	7	6	5	8	5	9	5	4		55
南宋	2		3	4	2	4	4	3	5	2	29
合計	8	7	9	9	10	9	13	8	9	2	84
死亡年齢	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	小計
北宋	4	5	8	7	7	1	3	6	8	9	58
南宋	2	3	1	2	3	3	4	4	5	7	34
合計	6	8	9	9	10	4	7	10	13	16	92
死亡年齢	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	小計
北宋	5	5	6	7	5	8	10	9	7	8	70
南宋	11	4	6	7	13	9	5	9	13	6	83
合計	16	9	12	14	18	17	15	18	20	14	153
死亡年齢	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	小計
北宋	6	6	3	6	6	8	10	15	16	11	87
南宋	4	2	12	11	8	5	9	12	13	9	85
合計	10	8	15	17	14	13	19	27	29	20	172
死亡年齢	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	小計
北宋	7	18	7	10	9	8	15	6	11	7	98
南宋	10	8	6	9	15	14	11	18	13	9	113
合計	17	26	13	19	24	22	26	24	24	16	211
死亡年齢	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	小計
北宋	5	6	7	4	3	4	2	2	3	1	37
南宋	6	7	3	13	8	8	4	2	1	2	54
合計	11	13	10	17	11	12	6	4	4	3	91

死亡年齢	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	小計
北宋		2									2
南宋	2	3	1	3	1						10
合計	2	5	1	3	1						12
死亡年齢	101	102	103	104	105	106		小計	合計	平均死亡年齢	
北宋全体									570	49.1 歳	
北宋既婚									520	53.1 歳	
北宋未婚									50	7.3 歳	
南宋全体									436	63.3 歳	
南宋既婚						1		1	432	63.7 歳	
南宋未婚									4	14.5 歳	
両宋合計						1		1	1006	55.2 歳	

表4の数字をもとに平均死亡年齢を計算すると、北宋の女性の平均死亡年齢は、49歳、南宋は63歳、両宋全体では55歳となる。ちなみに前掲の袁貽瑾氏とジョン・ロシング・バックの調査による0歳平均余命と比較すると、北宋は15.6歳、南宋は30.1歳も長い。北宋から南宋にかけて、これほどの死亡年齢の伸長を可能にする食生活の向上や、衛生環境の改良は想定しがたい。同様の問題は陶氏が言及した同じ北宋代の三集と『曾鞏集』との間にも存在している。

この表についてはさらにもう一つ問題がある。死亡年齢を10歳ごとに区切ってその数を比較すると、北宋は71~80歳代に最大値が存するが、21~30歳代にもう一つの山が存することである。南宋も最大値は同じ71~80歳代であるが、山は一つで、左右対称ではないものの標準分布曲線に近い。

『曾鞏集』の平均死亡年齢が59.5歳で南宋平均死亡年齢63.3歳に近いことからして、両宋で14歳の差がある要因は、死亡年齢が36.5歳である三集にあると予想できる。

### (三)北宋墓誌銘における宗室女性の存在

前節における推測に基づき三集の『范太史集』90人、『歐陽文忠公集』22人、『温國文正司馬公集』5人、合わせて117人の既婚女性墓誌銘のうち、生没年情報のある114人について再調査したところ、三集収録の墓誌銘に一つの共通点を見出した。それは墓誌銘のなかに多くの宋朝宗室関係者が含まれているということである。例えば、范祖禹『范太史集』巻四十五「皇族墓誌銘」には宗室に嫁いだ女性81人、巻五十三「皇族追封記」、巻五十四「皇族石記」には皇女すなわち公主をはじめとする未婚の宗室女性32人が記されている。このような宗室関係女性のうち既婚女性は『范太史集』には90人中81人、『歐陽文忠公集』には22人中10人、『温國文正司馬公集』には5人中1人を数える。合わせると女性墓誌銘117人中、約8割に当たる92人の墓誌銘が宗室関係の女性である。三集所載の女性について、宗室と非宗室に分けて死亡年齢の分布を示したのが次頁の表5である。

表5 三集所載既婚女性の宗室・非宗室別死亡年齢分布

死亡年齡	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	
宗室	2	1	4	7	2	8	5	8	5	2	2	1	5	5	3	
非宗室		1	1													
死亡年齡	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	
宗室		2	2	2		2	3	2	1				1	1	2	
非宗室							3						1			
死亡年齡	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	
宗室					3	1	1		1		2		1			
非宗室			1		1							2			2	
死亡年齡	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	
宗室		1					1	1						1		
非宗室		1					1			1		1			1	
死亡年齡	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	92	合計
宗室																91 人
非宗室	1			1			1	1			1				1	23 人

さらに陶氏は平均寿命の集計には入れていないが、『范太史集』には既婚の宗室女性 81 人の他に、前述のように巻五十三「皇族追封記」、巻五十四「皇族石記」には皇女すなわち公主をはじめとする未婚の宗室女性 32 人が記されている。そこで女性の死亡年齢分布を、既婚・未婚、宗室・非宗室に分けて示したのが下記の表 6 である。

表6 北宋女性の宗室・非宗室、未婚・既婚別死亡年齢分布

死亡年齢	～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～	計	死亡年齢
北宋既婚		25 (5%)	83(16%)	58(11%)	47 (9%)	298(58%)	511	53.1 歳
北宋未婚	34(68%)	13(26%)	3 (6%)				50	7.3 歳
北宋全体	34(6%)	38 (7%)	86(15%)	58(10%)	47 (8%)	298(53%)	561	49.1 歳
宗室既婚		20(14%)	57(41%)	26(19%)	9 (6%)	27(19%)	139	33.3 歳
宗室未婚	31(69%)	12(27%)	2 (4%)				45	6.8 歳
宗室全体	31(17%)	32(17%)	59(32%)	26(14%)	9 (5%)	27(15%)	184	26.8 歳
非宗室既婚		5 (1%)	26 (7%)	32 (9%)	38(10%)	271(73%)	372	60.3 歳
非宗室未婚	4 (66%)	1 (17%)	1(17%)				6	9.0 歳
非宗室全体	4 (1%)	6 (1.5%)	27(7%)	32(8.5%)	38(10%)	271(72%)	378	59.4 歳

表 6 をもとに宗室関係の既婚女性と非宗室関係の既婚女性の平均死亡年齢を比較すると、宗室女性は 33.3 歳であるのに対し、非宗室女性の平均死亡年齢は 60.3 歳となり、『曾鞏集』の 59.6 歳とほぼ同年齢になる。このことから三集の平均死亡年齢が低いのは、宗室女性を含んでいることによる。宗室関係者は南宋の女性墓誌銘には含まれていないので、対象は北宋期に限る。

さらに表6の宗室関係の既婚女性の死亡年齢の分布をみると、他のグループとくらべて、10～20歳代の人数が139人中77人と55%を占め、明らかに宗室関係グループが平均死亡年齢を押し下げていることがわかった。表6によると、宗室関係の女性は非宗室関係の女性とくらべて平均死亡年齢が著しく短く、両方で33歳もの差が存在するのであるが、現実の平均死亡年齢にそれほど差があったとは考えにくい。宗室女性の衣食住や衛生環境が非宗室女性とくらべて、33歳も短命になるほど劣悪であったとは考えられないからである(注5)。この平均死亡年齢は墓誌銘の記載に基づいて計算したものであることからすれば、おそらく宗室関係者の墓誌銘の作成過程のなかに平均死亡年齢が低くなる理由が存しているのではないだろうか。そこで、宗室関係女性が亡くなったときの墓誌銘作成手順についてみてみよう。

基本的に宗室関係者の墓誌銘は墓主の地位や皇帝との関係の親疎にしたがって、宋朝政府が特別手当を支給して学士や舎人らに執筆を命じて作成された。

例えば、北宋の沈括『長興集』巻十五に収録された二篇の墓誌銘「宗室故深州防禦使饒陽侯克巳妻長寧縣君武氏墓誌銘」「宗室右龍武軍大將軍萊州團練使克懋妻安壽縣君武氏墓誌銘」には、標題の下には「奉勅撰」と注がついている。これらの墓誌銘は勅命を受けて執筆されていた。たとえば范祖禹は元祐九年二月に、同三年七月に三十三歳で死亡した、英宗の第四子魏王顥の墓誌銘を撰した。その冒頭に「元祐八年冬十月庚午、上崇政殿に御し、輔臣を諭して曰く“故魏王墓、未だ誌有らず、其れ史臣祖禹に命じ以て銘せよ”と。臣太史を承乏す。…(注6)」と、執筆のいきさつを記している。

これによると、哲宗は視朝の際、魏王廷美の墓誌作成の遅れを叱責した。「奉勅撰」という形式では、最終的に皇帝の裁可が必要であるとしても、常に皇帝が直接執筆者を指名するのではなく、ふつうは予め事務方による人選がおこなわれ、裁可をへて実施されるものであったからであろう。この点で魏王墓誌銘は異例であった。その影響が異例な事態がつづく。魏王の子の懷州防禦使趙孝誥が潤筆として銀二百両、絹三百匹を送ると手紙で知らせてきたのである。驚いた范祖禹は翌日付で政府に笥子を提出し、送金をやめさせるよう趙孝誥に命じてほしい旨を願い出ている。その理由は、魏王墓誌銘は詔をうけ公務の一環として撰したもので、執筆料を受け取るわけにはいかないとしている(注7)。

民間人の墓誌銘の場合は、潤筆料は当然、依頼者が支払うことになるが、魏王ほどではないにしても、多額の出費が必要であった。(注8)。それ故三集などの著者を始めとする有名な文章家への墓誌銘の執筆依頼は、おのずと少なくならざるを得なかったと推測される。

非宗室で特に未婚の女性の墓誌銘は、本稿において調査した文集によると、北宋7人、南宋4人と11人が所載されているが、執筆者は父・祖父・兄・叔父などの近親者が記している。これに対し宗室の未婚女性は、北宋の墓誌銘に53人収録されている。先引の「基本的に宗室関係者の墓誌銘は墓主の地位や皇帝との関係の親疎にしたがって、宋朝政府が特別手当を支給して学士や舎人らに執筆を命じて作成された。」ことを裏付けている。

このように墓誌銘執筆の有無によって、宋朝関係者と一般民間(非宗室関係者)女性の、平均死亡年齢の集計結果の格差に影響をあたえたと考えるのが妥当であろう。宋代女性の死亡年としては、夭折者・未婚者をふくむ北宋の数値の方が実態に近いと考えられる。

先述のように、表6の北宋における死亡年齢の分布では、70～79歳のほかに20～29歳に

も山があった。表6では宗室既婚女性139人のうち10代～20歳代での死亡が77人と55%を占めており、これに対して非宗室既婚女性はその73%が50歳以上で死亡している。このことから、表6の20～29歳の山は主に宗室既婚女性が作っており、70歳代の山は主に非宗室既婚女性が作っていることがわかる。このように、宗室関係の既婚女性の多くは10代20代で亡くなっているが、それは宗室関係の女性だからではなく、宗室関係者は夭折しても自動的に墓誌銘が作成されることによる。

宋代女性の死亡年が記された墓誌銘は、979年までに1人、1029年まではすべて一桁数で16人。1030年から二桁数となるが、1080年～1089年は124人(北宋全体の20.3%)、1090年～1099年は106人(北宋全体の17.4%)となる。1080年～1099年の19年間に230人(北宋全体の37.7%)と三分の一以上を占めている(別表1「期別の死亡年」参照)。

そこで僅か19年間に230人の墓誌銘が記された背景には、北宋の第6代皇帝神宗の給事中であった范祖禹が皇族墓誌銘を記し、自分の文集『范太史集』に遺したことによる。范祖禹が記した女性墓誌銘は、『范太史集』巻四十五「皇族墓誌銘」に81人、巻五十三「皇族追封記」に2人、巻五十四「皇族石記」に30人、合せて113人の女性が墓誌銘に記載されている。1080年代では124人中55人、1090年代では106人中58人と113人が宗室女性であり、113人の死亡年は1085年～93年の8年間に集中している。

北宋の墓誌銘に見られる宗室女性は既婚者139人、未婚者46人、合せて185人存在する。北宋の女性墓誌銘604人中185人(30.6%)と三分の一近くを占めている。1100年代では51人中11人が宗室女性である。この11人は慕容彦逢(1067～1117)の文集『摘文堂集』巻十四に記載がある。

宗室女性を除くと士大夫層の女性は、1080年代は69人、1090年代は48人、1100年代は40人となり、宗室女性が死亡者数を増加させていることが判明する。宗室女性の存在が、墓誌銘に及ぼす影響はこのほかにも見えるが、それは該当する項目で記すとしよう。

1120年～49年の北宋末期から南宋初期にかけては、墓誌銘に載る死亡者数は24人・21人・27人と少ない。士大夫層も王朝の南遷に従ったが、当座は墓誌銘を創る余裕がなかったと考えられる。その後、士大夫層は江南の地に定着し、官僚となるよりも地域エリートとして活躍した。1150年～1239年までの死亡者数は妥当な数を示すが、南宋が滅亡に向かう1240年～1279年にかけては、墓誌銘数も減少している。

#### (四)先行研究にみえる結婚年齢

結婚年齢の昇降は、歴史人口学では、食糧の需給や穀物価格など景気の変動と連動し、死亡率と同じく人口の増減に影響をあたえる要因の1つとされている。たとえば15世紀イタリア中部トスカーナの結婚年齢は男性30歳・女性20歳であったが、17世紀になると同じく中部パルマ司教区では男性34歳・女性30歳に上昇し、とくに女性において晩婚化傾向が著しかった。結婚年齢の上昇傾向はヨーロッパ全域で認められ、人口の回復と長期的な経済の収縮に対応するものと説明されている(注10)。もちろん結婚は女性のみではなりたたない。歴史人口学の論点としての結婚年齢は男性も視野に入れたものでなければならないが、男性も含めた結婚年齢の問題は今後の課題として、本稿では女性の結婚年

齢に限定して考察をすすめる。宋代女性の実像の復元という本稿の目的からしても、結婚は一生を画する大きなイベントの一つであり、宋代女性の平均的な結婚年齢が何歳であったかは、宋代女性像を構成する重要な要素であるからである。

ただ歴史人口学上、信頼できる数値が得られるようになるのは、20 世紀以降に実施された近代的統計調査を待たねばならない。先引のジョン・ロッシング・バックの調査によれば、中国における平均結婚年齢は男 20.5 歳、女 18.2 歳で、同時代のオーストラリア(男 29 歳、女 25.2 歳)、イングランド及びウェールズ(男 29 歳、女 26.5 歳)、ニューヨーク州(ニューヨーク市を除く、男 28.8 歳、女 25.2 歳)とくらべて 7 歳～9 歳低かった。20 世紀前半の伝統中国社会では早婚習慣が濃厚に残っていた(注 11)。

下記の表 7 は、ジョン・ロッシング・バックの調査に基づく結婚年齢分布であるが、男女とも最頻値は 15 歳～19 歳の間に存し、19 歳までに女性の 8 割以上が結婚している。

表 7 結婚年齢別分布(1929 - 1931 年)

歳	～15	15～19	20～24	25～29	30～34	35～39	40～	不明	計
男	117(7%)	744(46.5)	517(32%)	138(9%)	44(3%)	16(1%)	24(1.5%)	0	1600
女	159(9%)	1269(72%)	294(17%)	30(2%)	2(0.1%)	3(0.2%)	0	3(0.2%)	1760

また中国における本格的な社会調査の嚆矢とされる華北省定県(定県)の調査でも結婚に関する諸項目の調査が行われた(注 12)。同県東亭郷の 766 組の夫婦について行った調査によれば、女性は 10 - 14 歳で結婚したもの 59 人(7.7%)、15 - 19 歳で結婚したもの 528 人(68.9%)、20 - 24 歳で結婚したものが 167 人(21.8%)であった。つまり全体の 77%の女性が 19 歳までに結婚していた。

一方男性は 10 人(1.3%)が 10 歳未満、307 人(40.1%)が 10～14 歳、273 人(35.6%)が 15～19 歳、88 人(11.5%)が 20～24 歳で結婚していた。男性の場合も 19 歳までに 77%が結婚していた。男女とも早婚傾向は同じだが、男性の約 40%が 10 歳から 14 歳の間に結婚しており、その傾向が強かった(注 13)。平均結婚年齢の算出はなされていないが、女性の数値は先述のジョン・ロッシング・バックの集計結果と大差ない。ただ夫が妻よりも年少である夫婦が全体の 7 割をしめていたことからわかるように、定県では男性の早婚傾向が著しかった点が特徴として指摘されている(注 14)。このように 20 世紀初頭の伝統的な中国社会における女性の平均結婚年齢は、早婚傾向が指摘される 15 世紀ヨーロッパにおける平均値に近いものであった。

漢代の平均結婚年齢に関しては彭衛氏の研究があり、庶人が 15.1 歳、地主・官僚が 14.7 歳、皇族関係者が 13～17 歳で、その多くは 13 歳に集中しており、所属階層が高いほど結婚年齢が低くなる傾向にあったと指摘されている(注 15)。

宋代女性の結婚年齢については、方建新氏が 61 人の墓誌銘史料を集計した結果、最高年齢が 27 歳、最少年齢が 14 歳、平均結婚年齢が 18 歳であった。下層階級の女性にくらべて士大夫層階級に属する女性自身が裕福であったので、配偶者に高い地位の男性を望んだため、結婚年齢が遅れる傾向にあったとされた(注 16)。方氏が算出された宋代女性の平均結婚年齢は、20 世紀の平均値とも一致し、本研究の出発点となるが、集計のサンプル数

が少ないことや、墓誌銘選択の基準が不明な点などなお不安がのこる。伊沛霞氏も次のように指摘している。『禮記』には女子は 15－20 歳で結婚とあり、宋代では法律条文によって婚齡の最低を規定していて、女は 13 歳、男は 15 歳であった。また司馬光と朱熹は結婚の適年について、女 14－20 歳、男 16－30 歳としている(注 17)。

このように宋代では女性の結婚適齡を 13 歳からとした背景について、顧鑒塘・顧鳴塘氏は以下のように述べている。女性の結婚年齢を 13 歳以上としたのは、宋の太祖が人口の増大を図ったことによるものである。開宝九年(公元 976 年)の調査によると、全国の民は 3,090,504 戸(《宋史・地理志》)で、唐朝の最高戸数の三分の一に相当し減少していた。そこで戸数を増やすために経済を発展させ、政権を強固にし、漏れている人口を掘り起し、朝廷の在籍戸口を増加させる人口政策を実施した。これに対応して男女の婚齡を、宋律は唐律を踏襲し、男年 15、女年 13 以上とした。南宋の嘉定年間(1208～1224)には、男女の婚齡を引き上げ 16 歳と 14 歳とした。この規定は明清時代にも踏襲され、清末に至りはじめて変化をみたのである(注 18)。

ちなみに人口を抑制している現代中国での婚姻年齢は、中華人民共和国婚姻法(2001 年 4 月改定)と婚姻登記条例(2003 年 8 月公布、10 月施行)によって管理されている。法的婚姻年齢は男性 22 歳以上、女性 20 歳以上である、と明記されている(注 19)。

## (五)墓誌銘事例の分析

結婚年が記されている墓誌銘は 994 人、死亡年が記されている 1075 人と比べると少ないが、死亡年には未婚女性 57 人が含まれているため、1075 人から未婚女性 57 人を除くと 1018 人となり差は 24 人である。ただし結婚年が記されている 994 人中、北宋の 716 人(72.0%)に対し、南宋は 278 人(28.0%)と約 4 分の 1 にすぎない。

南宋の女性墓誌銘に結婚年が記されていない理由の一つに平均死亡年齢が考えられる。平均死亡年齢は宗室関係の女性を除いた北宋の女性は 60 歳、南宋の女性は 64 歳と両宋では 4 歳の差がみられる(表 6「北宋女性の宗室・非宗室、未婚・既婚別死亡年齢分布」参照)。この差 4 歳は南宋の女性が長寿であったからではなく、北宋の女性墓誌銘には、男系祖先に有官者が多くみえ、南宋の女性墓誌銘には、男系祖先の有官者よりも夫・子の有官者によって墓誌銘が記されることによる。南宋の女性は子の出世によって墓誌銘が記されるため、長寿でないと墓誌銘が残されないことが多いのではなかろうか。ゆえに死亡年は記されるが何十年も前にさかのぼる結婚年は、墓誌銘執筆を依頼する際に省略したとも考えられる。

参考までに 70 歳以上の死亡者は、北宋は 604 人中 148 人(24.5%)、90 歳以上は 3 人、南宋は 471 人中 187 人(39.7%)、90 歳以上は 13 人と南宋に長寿者が多く、なかには 106 歳という長寿者もみえる(表 6「宋代女性の死亡年齢の年代分布」参照)。

両宋で墓誌銘に結婚年が記されている女性の 10 年ごとの平均は 34 人。999 年までの 40 年間は 36 人、1000 年から 1029 年までの 30 年間は 128 人と徐々に増え、1030 年から 1099 年までの 70 年間は 434 人と最多になっている。言い換えるとこの間に墓誌銘が多く記されたことを示しているが、ここでも宗室女性墓誌銘の影響がみえる(別表 1「期別」参照)。

宗室女性墓誌銘は范祖禹『范太史集』の 112 人が最も多く、うち既婚女性が 81 人をしめている。81 人のうち結婚年判明は 57 人、不明は 24 人。不明者 24 人の結婚年は、判明 57 人中 20 人が 15 歳であるため、この最多の 20 人の 15 歳を最頻値として算出してみた。結果、宗室女性の結婚年は、1060 年代が 12 人、1070 年代が 16 人、1080 年代が 37 人と 81 人中 65 人がこの 30 年間に集中している。死亡年と同様に結婚年においても、宗室女性の存在が結婚年にも影響しているといえる。

結婚年のピークは北宋の 1030 年代 69 人、1040 年代 63 人、1050 年代 67 人と 199 人、この 30 年間で北宋総数 716 人の約 27.8%をしめている。この時代の皇帝は北宋第四代の仁宗(1010~63、在位 1022~63)であり、在位 41 年間には文運発達し、多くの名臣文人が輩出した。後に西夏の興起と契丹の圧迫を受けるまでは、安定したよき時代であったと言える。士大夫層の結婚は、家と家とを繋ぎ父親の官職の安定や向上をはかるなど、家族の出世のための結婚が殆どであり、官僚間での交流が盛んであったことがうかがえる。

北宋末期の 1100 年代から南宋初期の 1150 年代にかけては、平均人数 34 人を多少上回るが、1160 年代以降は徐々に減少し、1240 年以降の墓誌銘 58 例には結婚年の記載はみられない。

## (六)宋代女性の平均結婚年齢

表 8「宋代女性の結婚年齢」は墓誌銘に初婚年齢の記載のあるものを集計した結果である。これによると宋代女性の平均結婚年齢は、北宋が 18.1 歳、南宋が 19.1 歳、南北両宋では 18.5 歳となる。最年少は北宋の 12 歳(注 20)、最高齢は南宋の 31 歳である(注 21)。北宋、南宋間の若干の差については後でふれるとして、南北両宋で 70%の女性が 19 歳までに結婚しており、20 世紀はじめの平均値、とくにジョン・ロッシング・バックの集計結果とほとんど同じである(表 7「結婚年齢別分布(1929 - 1931 年)」参照)。

表 8 宋代女性の結婚年齢

結婚年齢	12	13	14	15 (筭)	16	17	18	19	20	計				
北宋宗室		1	5	22 (11)	16	18	13	5	8	88				
北宋非宗室			6	30 (21)	19	26	32	27	17	157				
北宋合計		1	11	52 (32)	35	44	45	32	25	245				
南宋	1		3	26 (21)	9	21	27	25	18	130				
計	1	1	14	78 (53)	44	65	72	57	43	375				
結婚年齢	21	22	23	24	25	26	27	28	30	31	計	合計	不明	結婚年齢
北宋宗室	1	1	2								4	92	53	16.8 歳
北宋非宗室	9	12	6	4	3	4	2	2	2		44	201	205	18.6 歳
北宋合計	10	13	8	4	3	4	2	2	2		48	293	258	18.1 歳
南宋	13	7	10	3	4	8	2	2	1	1	51	181	286	19.1 歳
計	23	20	18	7	7	12	4	4	3	1	99	474	544	18.5 歳

(注)年齢 15 歳の欄の()内の数字は、墓誌銘に「筭」と表記されている事例の内数。

前頁の表 8 の墓誌銘にみえる結婚年齢は、13 歳～20 歳は北宋 245 人、南宋 130 人で、それぞれ全体の 83.6%、71.8%を占め、《禮記》の女 15 歳から 20 歳(注 22)、司馬光の「女子は 14 歳から 20 歳が適当な結婚年齢」(注 23)と合致する。宋代の士大夫階層は、子女の結婚も『禮記』や『司馬氏書儀』などにみえる礼法に準じて、娘は 13 歳から 20 歳の間に嫁がせたといえる。とくに宗室関係に嫁いだ女性の 92 人中 88 人(96%)が、13 歳から 20 歳までに嫁いでいる。宗室は「礼法を担うべきである」という自覚を強く持っていたために、礼法を遵守したのであろう。

表 8 にあるように宋代女性の結婚年齢は、北宋女性が 18.1 歳、南宋女性が 19.1 歳で、北宋と南宋とでは結婚年齢に 1 歳の差がある。そこで死亡年齢の項で試みたのと同じように、宗室関係者を抽出して集計したところ、平均結婚年齢は 16.8 歳となり、ここでも宗室関係者が結婚年齢の低下に関与していることがわかった。

死亡年齢では、若くして死亡した女性の場合、宗室と一般人では文章家への墓誌銘執筆の依頼数が異なっていたことが、両グループの数値の差をもたらしたのであり、宗室と非宗室の平均死亡年齢の差は必ずしも実態を反映しているのではなかったが、結婚年齢の高低は執筆依頼数と無関係であるので、宗室女性の結婚年齢の低さは実態とみてよい。南宋の女性墓誌銘に宗室関係者が見られない理由をここでは解明できないが、宗室女性を多く含む北宋の墓誌銘が、南宋の墓誌銘にくらべて結婚年齢が低くなるのは実態といえる。

さらに墓誌銘に載る既婚女性 1018 人のうち結婚年齢が判明する人数は、北宋が 551 人中 293 人(53.2%)、南宋が 467 人中 181 人(38.8%)と、南宋が北宋よりも 14.4 ポイント少ない。この差は、南北両宋期の相違点の一つとして注目されるが、南宋既婚女性の平均死亡年齢は 63.7 歳で北宋の 53.0 歳より、南宋の方が北宋より 10.7 歳(注 24)も高かった事と関係があるようにも思われる。この点については、今後の課題としたい。

## (七)「笄」について

墓誌銘における年齢表記は、数字をもってなされることが多いが、15 歳を「笄」(注 25)と表記した墓誌銘が 474 人中 53 人(11.1%)みえる。墓誌銘から結婚年齢を「笄」と表記している墓誌銘をあげてみよう。

(以下の番号は別表「宋代女性墓誌銘」の整理番号を示す。)

0257 陳浩『古靈集』卷二十 崇國太夫人符氏墓誌銘

夫人笄し給事に歸ぎて四十二年、享年五十七なり。(注 26))

0564 趙鼎臣『竹隱畸士集』卷十九 吳夫人墓誌銘

夫人既に笄すれば、侍中某公孫に嫁ぐ。正奉大夫南陽張公諱宗望の妻なり。(注 27))

0499 鄒浩『道鄉集』卷三十七 蓬萊縣君狄氏墓誌銘

幼くして淑慧にして父母之を愛しみ、既に笄すれば遂に以て吳君克禮に歸ぐ。(注 28))

最初に挙げた崇國太夫人符氏墓誌銘では、享年 57 歳から結婚期間の 42 年間を引くと 15 年となり、確かに 15 歳で結婚している。15 歳を「笄」と表記することに関連して、前掲の表 8 からは次の 3 点が読みとれる。

- 1) 南北両宋の合計では 15 歳の結婚が、474 人中 78 人(16.4%)と最大値を示す。
- 2) 15 歳で結婚する割合が、北宋の非宗室女性 201 人中 30 人(14.9%)であるのに対し、宗室女性 92 人中 22 人(23.9%)と高い数値を示し、宗室では 15 歳での結婚が多かったことがわかる。
- 3) 南宋では 15 歳で結婚した 26 人のうち 21 人が「笄」と表記している。

笄について司馬光は「女子許嫁笄。年十五雖未許嫁亦笄。主婦女賓執其禮。(注 29)」とある。朱子は「女子許嫁、笄、年十五、雖未許嫁、亦笄。母爲主。宗子主婦、則其中堂。非宗子、而與宗子同居、則於私室、與宗子不同居、則如上儀。(注 30)」と記している。

朱子は司馬光の言説を家礼に用い、その影響で南宋の墓誌銘には、15 歳を「笄」と表記されたと考えられる。宋代の士大夫が家礼を尊重し、娘が 15 歳になれば、許嫁をきめ嫁がせたことが墓誌銘からもうかがえる。

## おわりに

宋代女性の平均死亡年齢は 55 歳であるが、ただし南北両宋では差があり、北宋女性 49 歳、南宋女性 63 歳と 14 歳の差がある(12 頁、表 6「北宋女性の宗室・非宗室・未婚・既婚別死亡年齢分布」参照)。この差は宗室関係の女性(既婚・未婚)が、北宋の女性墓誌銘 604 人中 184 人(30.5%)と約三分の一を占め、宗室女性 184 人の平均死亡年齢が 27 歳と低年齢であることによる。宋代女性の死亡年齢としては、夭折者・未婚者をふくむ北宋女性の死亡年齢が実態に近い数値と考えられる。

また平均結婚年齢も北宋女性 18 歳、南宋女性 19 歳と南北両宋で 1 歳の差がある。これも宗室女性の平均結婚年齢 16.8 歳という低さが北宋女性全体の結婚年齢を引き下げ、北宋から宗室女性を除いた非宗室女性の結婚年齢は 18.6 歳となり、南宋女性の 19.1 歳と差は縮まる。このように宗室女性の存在は、南北両宋女性の平均死亡年齢と平均結婚年齢に大きな影響を及ぼしているのであるが、宗室女性墓誌銘は北宋の墓誌銘のみに存し、南宋の墓誌銘には見当たらない。それは何故だろうか。

宋王朝は周知のように開封から臨安へと南遷しているが、それは自らの意思ではなく、金国が開封に侵入したため、やむを得ず臨安に王朝を移し、逃げのびることができた徽宗の弟を皇帝にして体面を保持したのである。宗室関係者も皇帝に従って南渡したが、従来の権威は失われてしまったのである。

南宋における宗室の存在について、宋代宗室史を著した賈志楊氏は次のように指摘している。南宋宗室の社会的進化は、様々な問題と関わっている。伝記資料・墓誌銘・族譜などからみると、宗室は中国南方の各地に散在していった。宗室は家族的形式で発展し、時間的推移のなかで、“族”という形で見られるようになった。彼らは不動産を購入、地方の

上層階級と通婚し、地方の文化にも参与した。さらに入仕して官に就き、地方の士大夫社会と同化したとある(注 31)。

既に述べたように、宗室女性を除いた場合でも、既婚女性の平均死亡年齢は、12 頁の表 6 北宋の非宗室女性 60 歳、10 頁の表 4 南宋の女性 64 歳では、約 4 歳の差が生じた。この差 4 歳は何故なのか、ここでその原因を明示することはできないが、平均死亡年齢に関連して次のことが考えられる。それは南北両宋で、被葬者の女性についての記載内容が異なることである。具体的に言うと、北宋の女性墓誌銘は、父・祖父・曾祖父といった父につながる祖先の記述から始まるが、南宋の女性墓誌銘は、夫・子供の記述から始まる。つまり、北宋の女性墓誌銘には男系祖先に有官者が多く、南宋の女性墓誌銘には男系祖先に有官者が少ないことによるのではなかろうか。

墓誌銘に記された女性に対する見方が、北宋では血統の最後に位置する娘として見られていたものが、南宋では子や孫へと続く血統の最初に位置する母や祖母として見られるようになってきているからである。さきに、結婚年齢を記載する割合が北宋から南宋になると低下したことを指摘したが、そのような変化もこのような視点の変化を背景として出てきたものなのではないだろうか。そのような視点の変化は、直接的には、被葬者女性の墓誌銘を作成した主体が夫から子や孫へと変わっていったことがその原因であろうが、そこに北宋期と南宋期の女性に対する見方の変化が潜んでいる可能性もあるだろう。

これまで女性墓誌銘に記されている死亡年齢、結婚年齢を検討してきたが、北宋と南宋には大きな相違がみられたが、それは北宋と南宋の社会そのものの相違を反映したものであるだろう。

## 注

- (1) 葛劍雄主編、侯楊方著「人口の死亡及死因」(『中国人口史』第六卷 復旦大学出版社 2001年) 415~428頁
- (2) ジョン・ロッシング・バック「人口」(塩谷安夫・仙波泰雄・安藤次郎譯『支那の農業』改造社版 改造社 1938年) 474頁
- (3)(2)参照
- (4) 陶晉生「士族婦女 婚齡・兒女及壽命」(『北宋士族 家族 結婚 生活』台北：中央研究院 歴史語言研究所 2001年) 145~147頁
- (5) E.A.リグリィは平均余命と社会階層との関係について、次のように指摘している。「おそらく平均余命は、普通は社会の下層よりも上層の方が高かったであろう。・・・彼らは、非常に多くの不幸な男女の死の原因となった凶作や飢饉の際の物価のショックを大幅にやわらげられていたのである。さらに、栄養のよい人間は何ヵ月にもわたる不十分な食事で弱った人間よりも、病気にかかりにくいものである。したがって死亡率は、社会的階層が下がるに従って上昇するということは、おおざっぱな一般化としては真実であろう。」(E.A.リグリィ、速水融訳『人口と歴史』世界大学選書017 平凡社 1971年) 113~114頁。
- (6) 「宋皇叔故成德荆南等軍節度管内觀察處知等使守大尉開府儀同三司真定尹兼江陵尹上柱國荆王食邑一萬二千三百戸食實封參佰戸賜贊捍不名贈太師尚書令荆州牧徐州牧追封魏王墓誌銘并序「元祐八年冬十月庚午、上御崇政殿、諭輔臣曰、故魏王墓未有誌、其命史臣祖禹以銘、臣承乏太史、伏觀祖宗世世交友、而神宗尤篤。…」(周到「宋魏王趙頴夫妻合葬墓」『考古』1964年、第7期)。なお、当該墓誌銘は『范太史集』卷五十三 皇族追封記 故魏王追封記にも掲載されている。
- (7) 范祖禹『范太史集』卷二十六 潤筆を辭する筈子(十二月十五日)、「臣先に勅を奉じて故魏王墓誌を撰し、已に具して進呈す。今月十四日、懷州防禦使孝詒、臣に書を與え、潤筆銀二百兩、絹三百匹を送る。臣誤りて詔委を膺け、誌銘を撰述す。翰墨微や勤むるは、乃ち其の職業にして、豈に公に縁り、輒りに饋遺を受く可けんや。伏して望むらくは聖慈もて特に指揮を降し、(趙)孝詒に令し寝罷せしめんことを。臣懇切の至るに任えず、進止をとる。」
- 奉勅の墓誌銘だけでなく叙官の制書など個人向けの官文書を草した学士らは、関係者から現金や骨董などの物品を潤筆として受け取ることを例としていたが、元豐以降は手当の支給をもって廃止された。梅原郁訳『夢溪筆談 1』(東洋文庫 平凡社 1978年) 43頁
- (8) 宋、王明清『揮塵後錄』卷十一「孫仲益、每爲人作墓碑、得潤筆甚富。所以家益豐。有爲晉陵主簿者、父死、欲仲益作誌銘、先遣人達意於孫云「文成、縑帛良粟、各當以千濡毫也。」仲益忻然落筆、且溢美之。既刻就、遂寒前盟、以紙筆龍涎、建茗代其數、且作啓以謝之。仲益極不堪、即以駢儷之詞報之、略云「米五斗而作傳、絹千匹以成碑、古或有之、今未見也。立道旁碣、雖無愧詞、諛墓中人、遂成虛語。(孫仲益、毎に人の爲に墓碑を作り、潤筆を得て甚だしく富めり。所以に家益々豊なり。晉陵主簿たる者有り、父死し、仲益に誌銘を作らせんと欲し、先に人を遣わし孫に意を達して云う、「文成らば、縑帛良粟、各々當に千を以て濡毫すべし。」仲益忻然として落筆し、且つ之を溢美す。既に刻し就り、遂に前の盟に寒き、紙筆・龍涎・建茗を以て其の數に代え、且つ啓を作りて以て之に謝す。仲益極めて堪えず、即ち駢儷の詞を以て之に報い、略ぼ云う、「米五斗もて傳を作り、絹千匹を以て碑を成ること、古には或いは之有るも、今は未だ見ざるなり。道旁の碣を立つるに、愧詞無しと雖も、墓中の人に諛

はば、遂に虚語と成らん。」(翟無逸云)

- (9)七出とは、夫の一方的な意思による離婚であって、①無子 ②淫佚 ③舅姑に事えず ④口舌 ⑤盜竊 ⑥妬忌 ⑦惡疾なる七つの条件をいい、妻がこのうち一つに該当するとき、夫は妻を離婚することができる。(滋賀秀三『中国家族法の原理』「結婚と離婚」創文社 1967 年) 476 頁
- (10)竹岡敬温『アナール学派と社会史「新しい歴史」へ向かって』(同文館 1990 年)200 頁
- (11)ジョン・ロッシング・バック前掲『支那の農業』「人口」460~61 頁。ただしほぼ同時期、北京や上海などの都市部や女性労働者の結婚年齢は遅くなる傾向がみられた。
- (12)李景漢編『定県社会概況調査』『民国叢書』第 4 編 17(上海書店 1933 年) 144 頁

民国 18 年定県(華北省)初婚年齢分布 515 世帯 766

結婚年齢(夫妻)	男性(人)	男性 (%)	女性(人)	女性 (%)
10 歳未満	10	1.31	—	—
10-14 歳	307	40.08	59	7.70
15-19 歳	273	35.64	528	68.93
20-24 歳	88	11.49	167	21.80
25-29 歳	37	4.83	10	1.31
30-34 歳	25	3.26	1	0.13
35-39 歳	16	2.09	1	0.13
40-44 歳	7	0.91	—	—
45-49 歳	2	0.26	—	—
50-54 歳	1	0.13	—	—
	766	100	766	100

- (13)14 歳以下の男性の結婚はいわゆる童養媳ではなく、通常の結婚であるという。李景漢前掲『定県社会概況調査』144 頁。
- (14)李景漢前掲『定県社会概況調査』144 頁。定県の調査地が純農村地帯であることが理由の一つであろう。
- (15)彭衛『漢代婚姻形態』(三秦出版社 1988 年) 70~71 頁。
- (16)「爲了考察宋代男女通常的婚嫁年齢、筆者統計了十部宋人文集所載墓誌銘的女性結婚年齢：上表所列六十一名女性初婚年齢、最大的是 27 歳、最小的是 14 歳、平均年齢爲 18.07 歳。其中 17-19 歳結婚的有三十二人、佔總人數的百分之五十以上。這些數字雖然不能完全反映兩宋婦女的婚嫁情況、但也比較接近當時士大夫家庭女子通常的出嫁年齢。」(方建新「宋代結婚禮俗考述 婚儀 婚齡」『文史』第二十四輯 158 頁)
- (17)伊沛霞『內闈：宋代婦女的結婚和生活』「第三章 做媒 婚齡」(65 頁)
- 「《礼記》說女子应在 15-20 歳結婚、法律条文只規定最低婚齡、宋代爲女 13 歳、男 15 歳。宋代学者在法律定的最低婚齡和經典著作傾向的較べ高齡之間提出了折中点、司馬光朱熹建設：女 14-20 歳、男 16-30 歳結婚」
- (18)「宋初、社会經濟尚处于凋蔽之中、宋太祖開宝九年(公元 976 年)、全国僅有編民 3,090,504 戸(《宋史・地理志》)、只相当于唐朝最高戸數的 1/3。爲恢復和發展封建經濟、鞏固政

權、朝廷採取了包括檢括隱漏人口、增加朝廷在籍戸口等在內的人口政策。對於男女婚齡、宋律沿襲唐律、謂男年十五、女年十三以上、并聽婚家。“南宋嘉定年間(公元 1208—1224 年)、朝廷又將男女婚齡各自提高到 16 和 14 歲。南宋的這一婚齡規定、以後一直爲明、清兩代所採用、直至清末、才有變化。」(顧鑒塘・顧鳴塘『中国歷代結婚与家庭』「宋元明清時代的結婚与家庭 規定成婚年齡」)136~137 頁

(19)野村鮎子「現代中国の婚姻制度」(『中国女性史入門』人文書院 2005 年) 10 頁

(20)張孝祥『于湖集』卷二十九 高侍郎夫人墓誌銘

「太夫人諱靜明、廬州梁縣人、姓王氏、年十有二歸高氏、生三男子」

(21)呂祖謙『東萊集』外集卷五 方夫人誌

「生三十有一年而歸於先君。又十一年先君即世。」

(22)「十有五年而笄、二十而嫁。有故二十三而嫁。聘則爲妻、奔則爲妾。」〔十有五年にして笄し、二十にして嫁ぐ。故有れば二十三年にして嫁ぐ。聘せらるるものは則ち妻と爲り、奔るものは則ち妾と爲る。〕竹内照夫著『礼記』「内則第十二」 453 頁

(23)「男子年十六至三十、女子十四至二十。今令文、凡男年十五、女年十三以上。並聽婚嫁、蓋以世俗早婚之弊不可猝革。」司馬光『司馬氏書儀』(王雲五主編『叢書集成初編』卷第三「婚儀上」 29 頁

(24)南宋期女性の既婚・未婚別死亡年齢分布は以下の通りである。

死亡年齢	1~9	10~19	20~29	30~39	40~49	50~	計	死亡年齢
南宋既婚		1(0%)	17(4%)	33(8%)	31(7%)	357(81%)	439 人	63.89 歳
南宋未婚		3(75%)	1(25%)				4 人	14.50 歳
南宋全体		4(0.9%)	18(4.0%)	33(7.4%)	31(6.9%)	357(80.5%)	443 人	63.44 歳

(25)笄とは、かんざしのこと。転じて女子は十五歳になって婚約すれば、髪に金銀玉を飾った笄をつけて成人式をあげた。十五歳すなわち笄に及んで嫁するともいう。『禮記』内則に「十有五年にして笄し……」とある。

(26)陳浩『古靈集』卷二十 崇國太夫人符氏墓誌銘

「夫人笄而歸給事四十二年、享年五十七。」

(27)趙鼎臣『竹隱畸士集』卷十九 吳夫人墓誌銘

「夫人既笄而嫁爲侍中某公孫、正奉大夫南陽張公諱宗望之妻、華原燕王元儼之女。」

(28)鄒浩『道鄉集』卷三十七 蓬萊縣君狄氏墓誌銘

「既笄遂以歸吳君克禮龍図閣直学士、中復之子也。」

(29)司馬光『司馬氏書儀』卷第二「笄」(王雲五主編『叢書集成初編』商務印書館 1936 年) 24 頁

(30)朱傑人、嚴佐之、劉永翔主編『朱子全書』第柒冊「笄」(上海古籍出版社 2002 年) 893 頁

(31)賈志楊著、趙冬梅譯「中国歴史上の宋代宗室」(『天潢貴胄 宋代宗室史』江蘇人民出版社 2005 年) 257 頁

## 第二章 婚姻関係と地理的範囲

### はじめに

通婚圏は出身地から嫁ぎ先までの地理的通婚圏と、血縁・階層・職業などの属性間の通婚を対象とする社会的通婚圏に分けられる。本稿では社会的通婚圏を婚姻関係、地理的通婚圏を地理的範囲として、宋代女性墓誌銘に載る既婚女性 1018 人を北宋と南宋に分け考察してみよう。

### (一) 先行研究にみえる婚姻関係

通婚圏に関する研究は、小島泰雄著「通婚圏と配偶者選択」(注 1)、石田浩著「旧中国における市場圏と通婚圏」(注 2)、G.W. スキナー著；今井清一ほか訳『中国農村の市場・社会構造』(注 3)が存在するが、これらは中国の近現代における農村を対象とし、通婚圏の閉鎖性を指摘した研究である。前近代の通婚圏に関する研究は見当たらないが、「宋代高官における婚姻関係」についての研究は、中国では黄重寛氏、伊沛霞氏が、日本では青山定雄氏、清水茂氏、伊原弘氏、岡元司氏、遠藤隆俊氏らがすでに論述している。

筆者が対象としている女性は、士大夫層の女性であり先行研究の「宋代の高官における婚姻関係」と一致する。本稿では上記の論述をもとに、墓誌銘にみえる出身地から嫁ぎ先への移動と、婚姻関係を考察してみよう。

黄重寛氏は「宋代の名門や大族は嫁と婿を撰ぶことを重要視し、選擇の対象は新興士人に重きをおいた。とくに新興士人にとって婚姻は家族の発展に重要な要因であり、大家族の発展と拡大に影響を及ぼした(注 4)」。

伊沛霞氏も「北宋より南宋に至ると、婚姻の実態に変化があり、高官の間では地域を跨いでの婚姻関係は減少した(注 5)」と述べている。

青山定雄氏は「宋代には科举制度が整備され、科举出身者とりわけ進士及第者が重んぜられ、出世の登龍門とされた。それ故娘をもつ官僚は、その見込のある人物との縁談に関心をもったことも事実で、高官にあつては科举及第者の中から優秀なものを選ぶという気風も生じた。一家だけでは高官としての地位を保つことは困難であつたが、婚姻関係を結ぶことによって、永い期間に亘って高官としての権勢を保つことができた(注 6)」と述べる。

清水茂氏は「北宋時代の名臣連中の間に複雑な姻戚のつながりがある。娘にすぐれた婿を撰ぶことによって、自分の血のつながりのものに、高い地位を維持させようとする高官たちの努力は、一方、低い身分の出身者にとっても歓迎された。高官の婿君になることは、様々な点で利便が与えられるからである(注 7)」と述べる。

伊原弘氏は「宋代の士大夫官僚が結婚に際し、目安としたのが進士及第者を出しているか否か、高官となった者がいるか否かであつた。家柄や家格の高さよりも、科举及第者を出すことだけが家を維持する唯一の方法であつた。恩蔭の制も、その間をつなぐ方策にすぎない。高官となった者同士が通婚関係を結ぶのも、結局は科举及第者を出した家が続けるためである。女系による権勢の伝達は宋代官僚の裏の要素として注目される(注 8)」。

岡元司氏は「明州は温州とともに浙東に位置し、それぞれの名族が在地の官戸どうしの

婚姻関係で広く結びついていた。科挙による地位の再生産は、一族全体として捉える必要があり、次世代への学問的伝達が直系の親子関係だけでなく、傍系の親族や婚姻も含めて行われた(注 9)」と述べている。

遠藤隆俊氏は「門閥貴族の時代から新たな時代を迎えた宋代の官僚・士大夫層にとって、頼れるのは自分自身の実力である。彼らが地域や官僚社会のなかで地歩を築き守るためには、地縁・婚姻関係・官界における人脈に頼ることが有利であった(注 10)」とあり、婚姻関係は家を守るための手段の一つとして挙げている。

## (二)墓誌銘にみえる出身地から嫁ぎ先への移動

墓誌銘に記載の出身地・嫁ぎ先の地名は、女性・男性ともに現住所ではなく、貫籍(本籍地)を記載したものと理解する。墓誌銘を残すことができた女性の多くは、結婚の時点で夫が現役文武官僚であったか、もしくはその後、文武官僚となったので、その結果、官僚の妻として墓誌銘を残すことができたか、夫は生涯無官(贈官を除く)であったけれども、息子や孫が文武官僚になった結果、その母親または祖母として、墓誌銘を残すことができたことが想定できる。よって墓誌銘記載の嫁ぎ先の地名は、官僚もしくはその予備軍となる階層の家族の貫籍の所在地を示すものと考えてよい。したがって、別表 2「結婚年での出身地の地理的分布」、別表 3「結婚年での嫁ぎ先の地理的分布」、にみられる上位 5 路を下記の表 1、表 2 にまとめた。この表からみえることは、同時代の社会的経済的有力者層を多く輩出した地域、多く居住している地域とみてよい。各路の順位は表によって多少の移動はあるものの、2 つの表のマトリックスは同じ傾向を示している。以下、それぞれの路について考察してみよう。

表 1 結婚年での出身地の地理的分布

順位	北宋		南宋		両宋	
1	兩浙路	118 人	兩浙路	118 人	兩浙路	236 人
2	京畿路	103 人	福建路	39 人	京畿路	103 人
3	江南西路	60 人	江南西路	35 人	江南西路	95 人
4	京西北路	48 人	江南東路	14 人	福建路	76 人
5	福建路	37 人	淮南東路	6 人	京西北路	48 人
計		366 人		212 人		558 人

表 2 結婚年での嫁ぎ先の地理的分布

順位	北宋		南宋		両宋	
1	京西北路	143 人	兩浙路	117 人	兩浙路	228 人
2	兩浙路	111 人	福建路	46 人	京西北路	143 人
3	江南西路	69 人	江南西路	38 人	江南西路	107 人
4	福建路	40 人	江南東路	(10 人)	福建路	86 人
5	京畿路	39 人	成都府路	(4 人)	京畿路	39 人
計		402 人		201 人		603 人

### 〔京西北路・京畿路〕

北宋の嫁ぎ先には、京西北路と京畿路の2路が入っており、南宋にはこの二路が抜け落ちている。二路は地続きで、五代王朝・北宋の首都である洛陽・開封と近畿内にある。これら中原王朝を支える人々が多く居住した地域という地政学的条件の反映であろう。

斯波義信氏は「北宋期の慶暦のころ開封とその周辺には在京禁軍 32,400 人、開封府界 62,000 人、全官僚のおよそ4割にあたる1万人の官僚が在住していた(注11)」とある。

北宋にのみ登場する嫁ぎ先の第一位である京西北路は、「出身地」では第四位である。この落差は、京西北路の皇族・官僚・官僚予備軍といった有力者層の男性は、兩浙・江南西路など江南の新興有力者層の女性から、配偶者として望まれていたことを示すものといえよう。

京西北路に嫁いだ女性は、別表3「結婚年での嫁ぎ先の地理的分布」の嫁ぎ先判明者 593 人中 143 人(24.1%)とおおよそ四分の一を占めている。京西北路に嫁いだ女性が多い理由は、第一章「死亡年齢と結婚年齢」でもみられるように、ここでも范祖禹撰『范太史集』の墓誌銘に載る宗室女性 81 人の存在による。この 81 人の女性は全員が京西北路の永安縣に嫁ぎ、他の墓誌銘にみられる宗室女性 25 人も永安縣に嫁いでいる。さらに慕容彦逢撰『摘文堂集』に載っている宗室女性 11 人は、汝州梁縣に嫁いでいる。宗室女性 126 人中、117 人が永安縣と梁縣に嫁いでいる。

別表「宋代女性墓誌銘」による年代別では、1090 年代 45 人、1080 年代 26 人と 71 人とこの年代が最も多い。范祖禹が宗室女性の墓誌銘を記した年代が、1085 年～1093 年の 9 年間で、別表「宋代女性墓誌銘」の 1080 年、1090 年と時を同じくする。本稿の「嫁ぎ先」においても、歿すれば必ず墓誌銘が記された宗室女性の影響が大きいといえる。

京畿路には王朝の所在地である開封が存在する。開封に嫁いだ 37 人の女性は、位階の正一品では、太師中書令兼尚書令楚國公妣楚國太夫人馬氏、崇國太夫人符氏。正二品では、九嬪(皇帝の側室)順容邵氏、永嘉郡夫人富氏、安康郡太夫人胡氏。正四品では、長樂郡君尹氏、樂安郡君范氏、隴西郡君李氏らがみえる。隴西郡君李氏は唐王朝の子孫で名家として知られる。このように京畿路には、皇帝はじめ高位高官に嫁いだ女性が多くみられる。

### 〔兩浙路〕

北宋期に兩浙路に嫁いだ女性は、嫁ぎ先判明者 593 人中 111 人(18.7%)と約五分の一を占めている(別表3「結婚年での嫁ぎ先の地理的分布」参照)。宋は建国に際し華北官僚を中心に政權の統一をはかった。華北官僚は、宋初から真宗期にかけて財力を得、地方で有力な地位を占めるとともに儒教的教養を身につけ、科挙を通じて官僚となり家を起したのである。宋初においては華南官僚が宋に仕えるには不利であったと考えられる。北宋も中頃の仁宗から神宗期になると、華南官僚が抬頭してきた。華南でもとりわけ揚子江下流の兩浙路である江蘇・浙江・安徽の三省出身者が多い。仁宗時代には十数名、神宗以後は二十数名に達した。そのなかには范仲淹、王安石、歐陽脩などすぐれた政治家がみられる。王安石が宰相となり、新法党が勢力を得てからは、これまでの華北官僚間での通婚が、華南官僚にも広がり婚を通じたのである。北宋末には華南官僚の進出が著しく、華北・華南の地域的区別は減少した。

南宋期に兩浙路に嫁いだ女性は、別表 3 の嫁ぎ先判明者 239 人中 117 人(49.0%)と半数を占めている。兩浙地域は北宋時代すでに揚子江下流デルタ地帯をふくむ、江南における経済的最先進地域であり、多くの文武官僚、富裕層が抬頭していた事実と符合する。南宋期になると他を抜きんでて首位を占めるのは、経済的優先地域であると同時に、新たに政治的重心の所在地となったためである。

#### 〔福建路〕

北宋期に福建路に嫁いだ女性は、別表 3 の嫁ぎ先判明者 593 人中 40 人(6.7%)であるが、南宋期になると福建路に嫁いだ女性は、嫁ぎ先判明者 239 人中 46 人(19.2%)と三倍近くに増えている。福建は古来より中原から遠く離れた化外の地・瘴癘の地とされていたが、唐中期から中原人口の移住により急速に開発が進み、華南の重要な文化・経済の先進地となった。平地が少なく山がちという地理的条件ゆえに、人材養成が主要な産業の一つとなり、科举(官僚)、商人(福建商人)、僧侶、学者(閩学・福建学派)に多くの人材を輩出した(注 12)。

福建路の中心である福州は、読書が盛んであったとともに、州県学、書院などの公的性格をもつ学校に加えて、小学・村塾・書社・家塾などの私学が発達していた。ここでいう読書とは、科举受験を前提としての読書である。科举合格者が兩浙路に次いで多いことを裏付けている。化外の地とされた福建でも科举合格者が多いことが、士大夫層の女性との通婚に繋がったと考えられる。

#### 〔江南西路〕

北宋期に江南西路に嫁いだ女性は、別表 3 の嫁ぎ先判明者 593 人中 69 人(11.6%)、南宋期になると江南西路に嫁いだ女性は、嫁ぎ先判明者 239 人中 38 人(15.9%)。兩宋ともに 1 割以上で安定した数値を示している。江南西路も科举合格者を輩出した地域である。

唐末五代から宋初にかけて、江南東西路と福建の一部は、中国でもっとも急速に発展した地域である。開発の重心は唐中期に江南東路、五代宋初には江南西路に移動した。この開発の担い手は流入人口すなわち移住者たちで、彼らは土地を取得し定住に成功すると、族的結集につとめ、全国的に累世同居・義門・義荘の密集度の高い地域となった。彼らは土地経営だけでなく一族発展の手段の一つとして教育にも力をいれた(注 13)。

また江南は稲作によって繁栄した。気候は温暖にして多雨であり、中国の穀倉地帯として稲作が盛んであった。南宋期には田植法の採用と新品種の出現とによって著しく生産力を高めた。絹織物も蘇州・杭州の特産品となり、経済とともに文化の中心が江南に移ったのである。

#### 〔嫁ぎ先と科举合格者〕

南宋期は社会的流動性が増したなかにあつて、支配的集団をめぐる地縁や親族関係による人的結合のほかに、新たな形態として現れてきたのが科举をめぐる人的結合である。科举に合格した優秀な者と婚姻関係を結ぶ人的結合を軸として、官界における地位の地域的再生産が行われたと捉えることができる。

南宋期の科举合格者数をみると、兩浙路 5999 人をトップに、福建路 4213 人、江南西路

2154 人、江南東路 1339 人と、この四路が多くの中挙合格者を輩出している(注 14)。この数字は、25 頁の表 2「結婚年での嫁ぎ先の地理的分布」とまさしく一致する。

兩浙・福建・江西の 3 路が、墓誌銘における南宋の女性の嫁ぎ先と、南宋期の中挙合格者数の上位と同等であることは、嫁ぎ先・出身地・進士分布はほぼ同じ階層に属する人々の諸活動と考えられる。

中挙合格者が多い兩浙路のなかでも、温州と明州は多数の合格者を輩出している。温州は、柑橘・茶・蠶紙・漆器などの生産や造船業の発展にともなって、商品経済が発展した。この経済発展を背景にして、二程(程顥・程頤)の学問の伝統を受け継ぐかたちで、きわめて僅かであった中挙合格者が、徐々に増えて名族も形成された。

明州は、温州に次いで二番目に中挙合格者が多い州である。樓氏一族をはじめとする高官を代々輩出する名族がいくつか存在するなど、北宋末期以降、中央政權とのつながりが強い地域であった。名族は在地の官戸との婚姻関係を広く結び、さらに義荘の設置など、国家の保護を受けながら、族的財産の維持活動も盛んに行われた。

このように兩浙路は、南宋初期以来、政界とのつながりを保ち、中央官僚や学官とパイプを結んだことが、兩浙路最多の中挙合格者を生むことにつながったのである。

上記のような中挙合格者を多く出した地域は、経済的には裕福であり、文化的にも豊かであった。中挙を受験することは、長期にわたって経済的に恵まれていなければならない。中挙受験者は、身近に書物がある、家庭教師について学ぶことができる、太学を經由して中挙を受験するなどのルートを用いることができ、受験に有利であったと考えられる。

別表「宋代女性墓誌銘」から結婚年での嫁ぎ先への移動を、縣内・州内・路内・隣接路間・路間と移動の範囲に分けて、人数を集計したのが下記の表 3 である。

表 3 結婚年での嫁ぎ先への移動人数と範囲

期別	縣内(%)	州内(%)	路内(%)	隣接路間(%)	路間(%)	計
北宋 1 期	54 (26.7)	20 (9.9)	25(12.4)	28 (13.9)		202
北宋 2 期	51 (26.7)	10 (5.2)	11 (5.8)		45 (23.6)	191
北宋 3 期		12 (9.4)	10 (7.9)	19 (15.0)	26 (20.5)	127
計	165(31.7)	42 (8.1)	46 (8.8)	121 (23.3)	146(28.1)	520
南宋 1 期		12 (9.4)	15 (11.8)	11 (8.7)	22 (17.3)	127
南宋 2 期		5 (8.6)	13 (22.4)	2 (3.5)	6 (10.3)	58
南宋 3 期		4(10.8)	5 (13.5)		4 (10.8)	37
計		21 (9.5)	33 (14.9)	13 (5.9)	32 (14.4)	222

表 3 から以下のことが判明した。

北宋 1 期は、路を越えて嫁いでいる。

北宋 2 期は、路を越えてはいるが隣の路に嫁いでいる。

北宋 3 期は、縣内に嫁いでいる。

南宋は 1 期～3 期まで縣内に嫁いでいる。

嫁ぎ先の地理的範囲は、北宋 1 期は路間が 75 人(37.1%)、北宋 2 期は隣接路間に 74 人(38.7%)と路を越えている。北宋 2 期に隣接路間が多い理由は、宗室女性の存在による。范祖禹撰『范太史集』には 81 人の宗室既婚女性の墓誌銘が記載されているが、うち 61 人が京畿路の開封から隣の京西北路の永安に嫁いでいることによる。

表 3 から婚姻関係と地理的範囲についてわかることは、北宋のはじめから北宋 2 期までは、路から路を越えて遠距離間で通婚しているのに対し、北宋 3 期から南宋に至っては、縣内が圧倒的に多く近距離間で通婚している。先述の伊沛霞氏が「北宋より南宋に至ると、婚姻の実態に変化があり、高官の間では地域を跨いでの婚姻関係は減少した(注 15)」との見解と一致する。

次項では北宋の「萬壽縣令張君夫人蘇氏墓誌銘」から南宋の「胡夫人薛氏墓誌銘」まで 19 人の墓誌銘から、婚姻関係についてみてみよう。

### (三)北宋の女性墓誌銘にみえる婚姻関係

(墓誌銘の番号は別表「宋代女性墓誌銘」の整理番号を示す。)

#### (1) 呂氏一族を中心に王旦・韓琦・蘇頌・吳充との婚姻関係

##### ① 呂氏と蘇頌との婚姻関係

0230 蘇頌『蘇魏公文集』卷六十二 萬壽縣令張君夫人蘇氏墓誌銘

適亳州司法呂昌緒、故相許文穆公(呂蒙正)之孫也。甫三年而寡後、四年獲歸斯立。呂昌緒は亳州司、祖父の呂蒙正は参知政事、父の呂務簡は國士博士。蘇氏は尚書右僕射の蘇頌の妹で呂昌緒に嫁ぐ。呂氏は婚姻によって蘇頌と繋がりをもつが、呂昌緒は蘇氏を娶って三年後に亡くなる。蘇氏は四年後に張氏に嫁したと墓誌銘に記されている。

##### ② 呂氏と王旦

0233 王安禮『王魏公集』卷七 太師中書令兼尚書令楚國公妣楚國太夫人馬氏行狀

公(呂公弼)先娶扈氏贈贊皇郡夫人、再娶王氏太尉文正公(王旦)女贈清原郡夫人。馬氏は呂夷簡の妻であり、呂公弼・呂公綽・呂公著の母である。長男の呂公弼が王旦の女である王氏を繼室として娶ったことが記されている。呂公弼は觀文殿學士、祖父は大理寺丞の呂蒙亨、父は宰相の呂夷簡。呂公弼と王氏との間に生まれた呂氏は、韓琦の子である韓忠彦に嫁いでいる。なお呂夷簡と王旦は互いにその娘を長男に嫁がせ、二重の婚姻関係を結んでいる。

##### ③ 呂氏と韓琦

0163 韓琦『安陽集』卷四十八 東平縣君呂氏墓誌銘

余(韓琦)長子太常博士秘閣校理忠彦妻呂氏、故相文靖公夷簡之孫、觀文殿學士尚書吏部侍郎公弼之女也。

韓琦の長子太常博士秘閣校理忠彦の妻呂氏は、故相文靖公夷簡の孫、觀文殿學士尚書吏部侍郎公弼女である。呂氏は 16 歳で嫁ぎ、治平 2 年(1065)に 27 歳で亡くなっている。韓琦はこの

とき 57 歳。自分より先に亡くなった嫁の呂氏の墓誌銘を残している。

④ 呂氏と錢受

0651 汪慶辰『文定集』卷二十三 樞密院計議錢君嬪夫人呂氏墓誌銘

夫人其先東萊人。曾祖諱公著以司空平章事軍國事、祖諱希純嘗任中書舍人追復寶文閣待制、父諱聰問右朝請大夫直秘閣。夫人十有八而嫁爲右朝奉郎錢受之之妻。

呂氏の曾祖父は呂公著、祖父は呂希純、父は聰問、右朝奉郎の錢受之に嫁いでいる。

⑤ 韓億と王旦

0015 蘇舜欽『蘇學士文集』卷十五 太原郡太君王氏墓誌

太子少傅贈太子太保忠憲韓公(韓億)繼室。夫人王氏太尉文正公王旦之長女也。

韓億は文正公王旦の長女王氏を繼室に娶り、婚姻関係を結んでいる。

⑥ 王旦と蘇耆

0039 ⑥韓維『南陽集』卷三十 太原縣君墓銘

夫人姓王氏。刑部侍郎祐(王祐)之孫、太尉相國文正公旦(王旦)之女。工部郎中直集賢院蘇公耆之妻。

王氏は王旦の娘、蘇耆に嫁ぎ、王旦と蘇耆は婚姻関係で結ばれている。

⑦ 王旦と韓億と范令孫

0191 劉攽『彭城集』卷三十九 樂安郡君范氏墓誌銘

夫人姓范氏。相國司徒魯公諱質之曾孫、相國太尉諡文正王公諱旦外孫。今樞密副使吏部侍郎韓公(韓絳)之夫人。初文正公嫁二女適范氏諱令孫(墓誌銘なし)、適韓氏是忠憲公(韓億)。

范氏は范質の曾孫、王旦の外孫である。韓絳に嫁ぐが、夫の韓絳の父は韓億であり、韓億の妻は王旦の長女であるから、范氏の姑は伯母にあたる。王氏と韓氏は二重の婚姻関係にある。墓誌銘にも「二家(実家と婿家)相與恩好甚篤約世為婚媾故」と記されている。

⑧ 韓億と程琳

0200 程嗣弼『彭城集』卷三十九 韓刑部妻程氏墓誌銘(撰者・程嗣弼は程氏の兄)

尚書刑部郎中韓君玉汝(韓縝)娶于程氏。程氏其先中山博野人。夫人之考曰琳(程琳)、鎮安軍節度使檢校太師同中書門下平章事贈太師中書令兼尚書令、魏國公諡文簡。母陳氏號魏國夫人。

中書門下平章事・程琳の娘である程氏は、韓億の三男・韓縝に嫁ぎ、程億と程琳は婚姻関係で結ばれている。

⑨ 王旦と范仲淹

0490 畢仲游『西臺集』卷十四 魏國王夫人墓誌銘

夫人王氏大名人也。曾大父諱祐爲尚書兵部侍郎贈太師、太父諱某(王旭)爲尚書兵部

郎中贈太尉、父諱質爲天章閣待制、而宰相魏國文正公(王旦)者乃天章公(王質)之伯父也。始天章公(王質)與范文正公(范仲淹)相友善約以兒女爲婚姻。夫人其長女也。以歸高平公(范純仁)、而以次女歸今右丞公(范純禮・中大夫尚書右丞正議大夫)。

王旦の弟・王旭の孫の王氏は范仲淹の子・范純仁に嫁ぎ王旦は范仲淹とも繋がっている。

上記 9 人の女性の繋がりについて、33 頁の表 5「呂夷簡一族と王旦・韓琦・蘇頌・吳充との婚姻関係」にまとめた。

太宗に仕えた呂蒙正は、宋朝最初の科挙に及第し宰相となった。以後、科挙及第者を出し呂蒙正の甥にあたる呂夷簡も宰相となった。さらに呂夷簡は長男の呂公弼に王旦の娘の王氏を娶り、娘を王旦の長男の王雍に嫁がせ、二重の婚姻関係を結んでいる。

こうして呂氏一族は呂祖謙の曾祖父である呂好問が建炎 3 年(1129)に南渡するまで華北に居住し、王旦・韓琦・蘇頌・吳充などの有力な官戸と結び、長期間にわたって高級官僚としての地位を維持したのである。また呂氏一族と婚姻関係をもった、王旦・韓琦・吳充一族も王安石・歐陽脩・夏竦・文彦博らと婚姻関係で繋がっている。

その後呂好問が建炎 3 年(1129)に 66 歳で京師から南渡し、華南を転々として紹興元年(1131)に桂州で歿した。桂州に埋葬されたが、呂氏一族が婺州に居を構えたことにより、23 年後の紹興 24 年(1154)に婺州に改葬された。南渡後の呂氏は、呂祖謙に見られるように官戸としてよりも学者の家として存続した。呂祖謙は三人の妻に先立たれている。呂東萊先生本傳には「公三娶、皆先卒、一娶韓尚書元吉女、繼室卽配韓氏妹、繼娶芮氏、故國子祭酒芮公燁女。」とある。二番目の妻韓氏と、三番目の妻芮氏は墓誌が残されている。

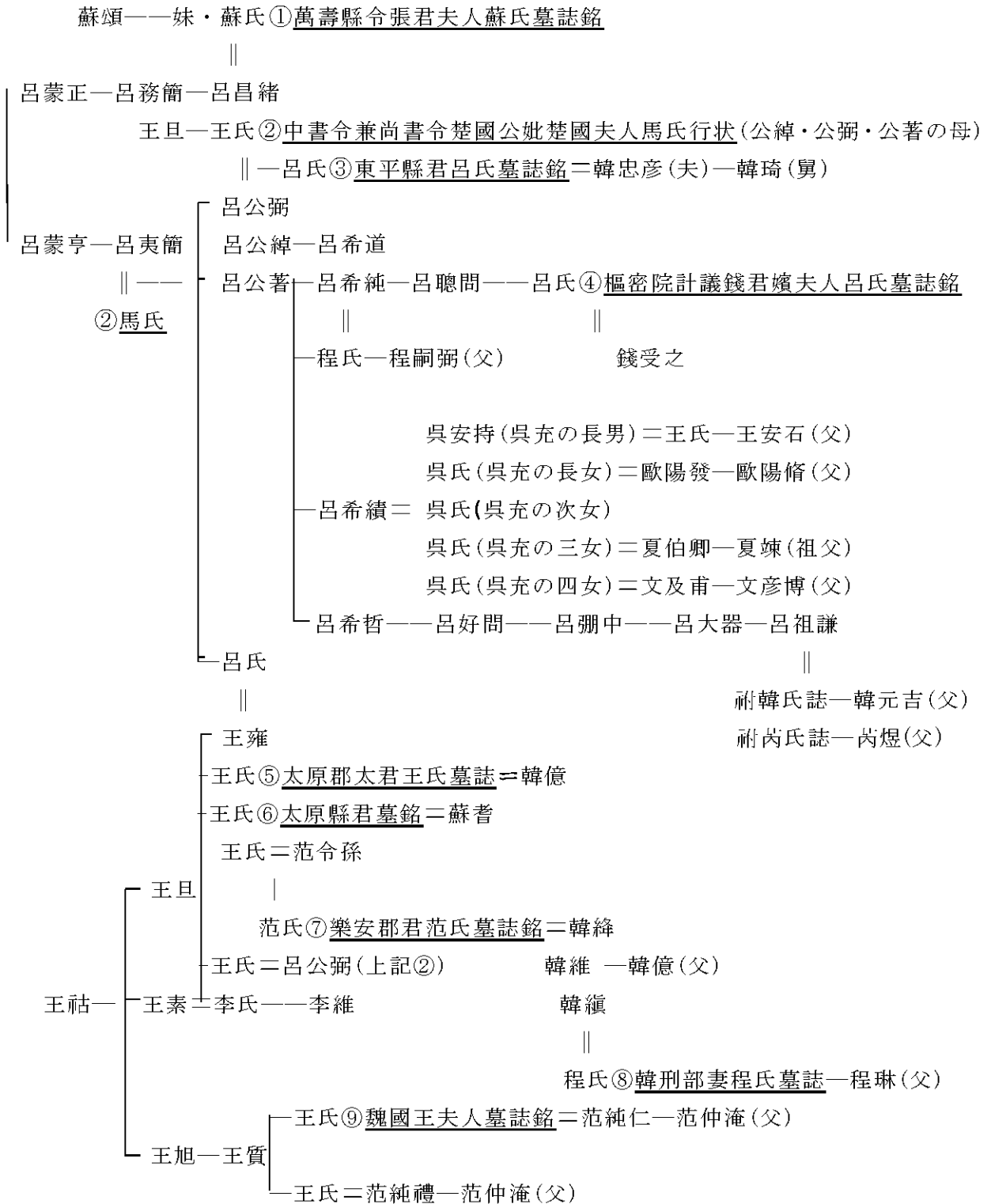
呂祖謙の最初の妻と二番目の妻の父である韓元吉は、尚書左司郎となり潁川郡公に奉ぜられた。韓元吉も南渡官僚であり、北宋期には高級官僚(吏部尚書)として、旧法党系であったことなど、呂氏と共通点を有している。

呂公著の子である呂希績に次女を嫁がせた吳充は、長女を歐陽脩の長男・發に、三女を夏竦の孫にあたる夏伯卿に、四女を文彦博の子・文及甫に嫁がせ、さらに息子の吳安持には、王安石の長女を娶らせ、婚姻というネットワークで繋がりを保っている。

34 頁の表 6「呂氏・王旦・韓琦・蘇頌・吳充・范氏の官職と出身地」からは、呂夷簡と王旦・韓琦・蘇頌・吳充ら一族は、宰相、参知政事、尚書右僕射、中書門下平章事など、北宋を代表する要職にあり、こうした名族がいかに婚姻関係によって、家を維持したかが推測できる。出身地をみると、呂夷簡が華南、王旦が四京大名府、韓琦が華北西路相州安陽縣で、呂夷簡、王旦、韓琦の三氏は華北出身、蘇頌は潤州、范仲淹は蘇州、蘇耆は縣州、吳充は建州、歐陽脩は吉州と華南出身である。

華南官僚の進出については、伊原弘氏が「北宋の中期から揚子江下流域の江南を出身地とする官僚層の進出が始まり、王安石のように宰相となったものもいた(注 16)」と記しているが、北宋も中頃以降になると華南官僚の進出が著しく、両者間の地域的区別がなくなったことが、34 頁表 6「呂氏・王旦・韓琦・蘇頌・吳充・范氏の官職と出身地」からも読み取れる。

表5 呂夷簡一族と王旦・韓琦・蘇頌・呉充との婚姻関係



王恚—李氏「李夫人墓誌」—李邁昭—李宗諒(父)—李昉之(祖父)

表6 呂氏・王旦・韓琦・蘇頌・吳充・范氏の官職と出身地

氏名	官職	卒年齢	生卒年	出身地	地域
呂蒙正	宰相	66 歳	開運 2 年(946)～祥符 4 年(1011)	華南	華北
呂蒙亨	大理寺丞			華南	華北
呂務簡	國士博士			華南	華北
呂夷簡	宰相	66 歳	興國 2 年(979)～慶曆 3 年(1044)	開封	華北
呂公弼	觀文殿學士	76 歳	咸平 1 年(998)～熙寧 6 年(1073)	開封	華北
呂公綽	翰林侍讀學士	57 歳	咸平 2 年(999)～至和 2 年(1055)	開封	華北
呂公著	尚書右僕射	72 歳	天禧 2 年(1018)～元祐 4 年(1089)	開封	華北
呂昌緒	亳州司法				華北
呂希道	中散大夫	67 歳	天聖 3 年(1025)～元祐 6 年(1091)	開封	華北
呂希純	中書舍人	60 歳		開封	華北
呂希績	朝奉大夫			開封	華北
呂希哲	光祿少卿	78 歳	寶元 2 年(1039)～乾道 2 年(1116)	開封	華北
呂好問	資政殿學士	68 歳	治平 1 年(1064)～紹興元年(1131)	開封	華北
呂祖謙	秘書閣著作郎	45 歳	紹興 7 年(1137)～淳熙 8 年(1181)	婺州	華南
蘇頌	尚書右僕射	82 歳	天禧 4 年(1020)～靖國元年(1101)	潤州	華南
蘇耆	工部郎中	49 歳	雍熙 4 年(987)～景祐 2 年(1035)	絳州	華南
范純仁	尚書右僕射	75 歳	天聖 5 年(1027)～靖國元年(1101)	華南	華北
范仲淹	參知政事	64 歳	端拱 2 年(989)～皇祐 4 年(1052)	蘇州	華南
韓國華	諫議大夫	55 歳	顯德 4 年(957)～祥符 4 年(1011)	安陽	華北
韓億	正奉大夫	73 歳	開寶 5 年(972)～慶曆 4 年(1044)	開封	華北
韓琦	宰相	68 歳	祥符元年(1008)～熙寧 8 年(1075)	安陽	華北
韓忠彥	尚書右僕射	72 歳	景祐 5 年(1038)～大觀 3 年(1109)	安陽	華北
韓元吉	吏部尚書	73 歳	重和元年(1118)～紹熙元年(1190)	安陽	華北
王旦	宰相	61 歳	顯德 4 年(957)～天禧元年(1017)	大名	華北
王旭	平部郎中	68 歳	顯德 6 年(959)～天聖 4 年(1026)	大名	華北
王雍	司封郎中	58 歳	端拱元年(988)～慶曆 5 年(1045)	魏	華北
王質	朝奉大夫	45 歳	咸平 4 年(1001)～慶曆 5 年(1045)	開封	華北
王安石	宰相	66 歳	天禧 5 年(1021)～元祐元年(1081)	撫州	華南
程嗣弼	朝議大夫	60 歳	天聖 5 年(1027)～元祐元年(1081)	華南	華北
程琳	中書門下平章事	69 歳	端拱元年(988)～嘉祐元年(1056)	中山	華北
吳充	中書門下平章事	60 歳	天禧 5 年(1021)～元豐 3 年(1080)	建州	華南
歐陽脩	觀文殿大學士	66 歳	景德 4 年(1007)～熙寧 5 年(1072)	吉水	華南
歐陽發	殿中丞	46 歳	康定元年(1040)～元豐 8 年(1085)	廬陵	華南
夏竦	中書門下平章事	67 歳	雍熙元年(984)～皇祐 2 年(1050)	江州	華南
文彥博	宰相	92 歳	景德 3 年(1006)～紹聖 4 年(1097)	汾州	華北

次項では北宋の女性墓誌銘にみえる 3 人の女性から、畢士安、陳堯叟兄弟及び賈昌朝との婚姻関係をみてみよう。

## (2) 畢士安と陳堯叟兄弟及び賈昌朝との婚姻関係

### ① 畢師古と陳堯叟

0373 蘇頌『蘇魏公文集』卷六十二 壽昌郡太君陳氏墓誌銘

故樞相文忠公堯叟之孫、尚書都官郎中師古之女、尚書駕部郎中畢公從古之繼室也。壽昌太君陳氏は、陳堯叟の孫、尚書都官郎中陳師古の娘で、尚書駕部郎中・畢公從古の繼室である。

### ② 陳堯咨と賈昌朝

0184 王珪撰『王華陽集』卷五十六 魏國夫人陳氏墓誌銘

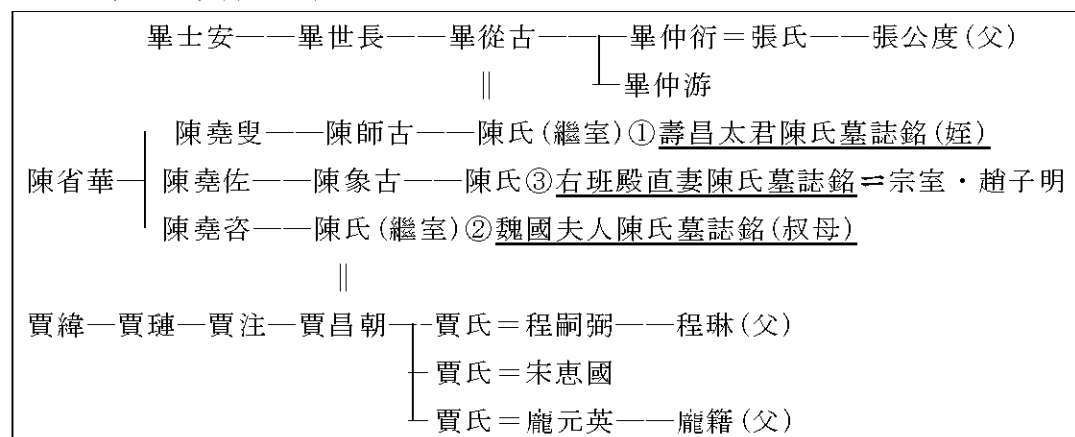
故觀文殿學士尚書右僕射魏國公贈司空兼侍中賈文元公諱昌朝之夫人姓陳氏、其先閬州人。曾皇祖諱昭汝、皇祖諱省華、皇考諱堯咨諡康肅皆太師書令兼尚書令。…六男子、三女子其嫁、尚書比部員外郎程嗣弼、太子右贊善大夫宋惠國、都官員外郎龐元英…。魏國太夫人陳氏は賈昌朝の夫人である。其の先は閬州人。皇祖は省華、皇考は堯咨、皆な太師書令兼尚書令である。三女子は尚書比部員外郎程嗣弼、太子右贊善大夫宋惠國、都官員外郎龐元英に嫁す。

### ③ 陳象古と宗室趙子明

0441 范祖禹撰『范太史集』卷四十九 右班殿直妻陳氏墓誌銘

君陳氏閬州人。曾祖省華贈太師尚書令兼中書令秦國公。祖堯佐相仁宗贈太師中書令兼尚書令鄭國文惠公。父象古右宣德郎。…適宗室右班殿直子明冀王之後也。曾祖は陳省華、祖父は陳堯佐、父は陳象古という北宋の高級官僚の家に生まれた陳氏は、宗室の右班殿直趙子に嫁いでいる。

表 7 畢士安、陳堯叟兄弟及び賈昌朝との婚姻関係



前頁の表 7「畢士安、陳堯叟兄弟及び賈昌朝との婚姻関係」によると、陳省華の曾孫、陳堯叟の孫、陳師古の娘である陳氏は、畢士安の孫である畢從古に嫁ぎ、陳省華の三男・陳堯咨の娘は賈昌朝に嫁いでいる。陳師古と陳堯咨は娘を嫁がせることによって、畢從古、賈昌朝と婚姻関係を結び、叔母と姪の関係にある二人の陳氏は、陳氏と畢氏および賈氏とを繋いでいる。さらに陳氏と夫の賈昌朝の間に生まれた三女のうち、長女は尚書比部員外郎・程嗣弼に、次女は太子右贊善大夫・宋惠國に、三女は都官員外郎・龐元英に嫁いでいる。程嗣弼の父・程琳は仁宗の世、宰相・陳堯佐の下で参知政事の任につき、後に中書門下平章事となっている。程琳は娘を韓億の子で宰相となった韓縝に、程琳の息子の程嗣弼は娘を呂夷簡の孫で呂公著の子の呂希純に嫁がせている。陳師古は娘を冀王の末裔である趙子明に嫁がせ、宗室との繋がりも保っている。

下記の表 8「畢士安・陳堯叟兄弟・賈昌朝の官職と出身地」からは、左諫議大夫の陳省華には三人の息子がおり、長男が堯叟で尚書右僕射、次男が堯佐で戸部侍郎同平章事、三男が堯咨で武寧軍節度使の官職にある。出身地は陳省華をはじめ陳兄弟が利州路閬州、畢士安・畢世長・畢從古が京西北路鄭州、賈昌朝が四京の開封府であることから、婚姻関係と地理的範囲は路から路へと、路を越えているが華北内に留まっていることがわかる。

表 8 畢士安・陳堯叟兄弟・賈昌朝の官職と出身地

氏名	官職	卒年齢	生卒年	出身地	地域
畢士安	宰相	68 歳	天福 3 年(938)～景德 2 年(1005)	鄭州	華北
畢世長	尚書郎	90 歳	乾徳 4 年(966)～至和 2 年(1055)	鄭州	華北
畢從古	尚書駕部郎中	58 歳	咸平 5 年(1002)～嘉祐 4 年(1059)	鄭州	華北
畢仲衍	起居郎	43 歳	康定元年(1040)～元豊 5 年(1082)	鄭州	華北
畢仲游	吏部郎中	75 歳	慶暦 6 年(1046)～宣和 3 年(1121)	鄭州	華北
賈注	中書門下平章事	47 歳	至道 3 年(997)～治平 2 年(1065)	開封	華北
賈昌朝	中書門下平章事	68 歳	咸平元年(998)～治平 2 年(1065)	開封	華北
陳省華	左諫議大夫	68 歳	天福 4 年(939)～景德 3 年(1006)	閬州	華北
陳堯叟	尚書右僕射	57 歳	建隆 2 年(961)～天禧元年(1017)	閬州	華北
陳堯佐	戸部侍郎平章事	82 歳	乾徳元年(963)～慶暦 4 年(1044)	閬州	華北
陳堯咨	武寧軍節度使	65 歳	開寶 3 年(970)～景祐元年(1034)	閬州	華北
陳師古	尚書都官郎中	78 歳		閬州	華北
程嗣弼	比部員外郎	60 歳	天聖 5 年(1027)～元祐元年(1081)	華南	華北
程琳	中書門下平章事	69 歳	端拱元年(988)～嘉祐元年(1056)	中山	華北
宋惠國	太子左贊善大夫			開封	華北
龐元英	都官員外郎			單州	華北
龐籍	宰相	76 歳	端拱元年(988)～嘉祐 8 年(1063)	單州	華北
趙子明	右班殿直			開封	華北

次項では、生涯で三人の妻を娶った歐陽脩の婚姻関係をみてみよう。

### (3) 歐陽脩の婚姻関係

#### ① 歐陽脩と胥偁

0022 歐陽脩『歐陽集』卷六十二 胥氏夫人墓誌銘

「天聖八年修以廣文館生舉中甲科、又明年胥公遂妻以女、公諱偁、世為潭州人、官至工部郎中翰林學士。」

歐陽脩は天聖八年(1030)に廣文館生を以て甲科に及第した。翌九年(1031)に歐陽脩の師であった胥偁の娘を妻にした。胥偁は潭州の人で官は工部郎中翰林學士である。妻の胥氏はこのとき14歳であった。三年後の明道二年(1033)に17歳で歿した。

#### ② 歐陽脩と楊大雅

0024 歐陽脩『歐陽集』卷六十二 楊氏夫人墓誌銘

廬陵歐陽先生之繼室曰楊氏者故右諫議大夫集賢院學士楊公之女也。

廬陵歐陽先生の繼室である楊氏は、故右諫議大夫集賢院學士の楊公(大雅)の女である。景祐元年(1034)に17歳で嫁ぎ、翌景祐二年(1035)に18歳で歿した。

#### ③ 歐陽脩と薛奎

0372 蘇轍『欒城集』卷二十四 歐陽文忠公夫人薛氏墓誌銘

初簡肅見文忠公、願以夫人歸焉、未及而薨、及文忠公貶夷陵令、金城以簡肅之志、嫁夫人于許州、不數日從公南遷。

簡肅(薛奎)は初めて文忠公(歐陽脩)を見て、娘を夫人にと願った。しかし願いが叶わないうちに薨った。文忠公は夷陵令に左遷させられた。簡肅の志を継いで薛氏は、景祐三年(1036)に20歳で歐陽脩に嫁ぎ公の南遷に従った。薛氏は元祐四年(1089)に73歳で歿した。

歐陽脩は最初の妻と二番目の妻には先立たれ、三度目の妻とは生涯添い遂げた。最初の妻胥氏と二度目の妻楊氏の墓誌銘は歐陽脩撰『歐陽集』に、三度目の妻薛氏の墓誌銘は蘇軾撰『欒城集』に載る。

表9 歐陽脩と胥偁・楊大雅・薛奎との婚姻関係

歐陽脩 = 胥氏① <u>胥氏夫人墓誌銘</u> — 胥偁(父)
歐陽脩 = 楊氏② <u>楊夫人墓誌銘</u> — 大雅(父)
歐陽脩 = 薛氏③ <u>歐陽文忠公夫人薛氏墓誌銘</u> — 薛奎(父)
歐陽發 = 吳氏 — 吳充(父)

表 10 歐陽脩・胥偃・楊大雅・薛奎の官職と出身地

氏名	官職	卒年齢	生卒年	出身地	地域
歐陽觀	泰州判官	59 歳	廣順 2 年 (952)～祥符 3 年 (1010)	吉水	華南
歐陽脩	觀文殿學士・太子少師	66 歳	景德 4 年 (1007)～熙寧 5 年 (1072)	吉水	華南
歐陽發	殿中丞	46 歳	康定元年 (1040)～元豐 8 年 (1085)	廬陵	華南
胥偃	工部郎中・翰林學士			潭州	華南
楊大雅	諫議大夫・集賢院學士	69 歳	乾德 3 年 (965)～明道 2 年 (1033)	杭州	華南
薛奎	資政殿學士・戸部侍郎	68 歳	乾德 5 年 (967)～景祐元年 (1034)	絳州	華北
吳充	中書門下平章事	60 歳	天禧 5 年 (1021)～元豐 3 年 (1080)	建州	華南

歐陽脩と三人の妻との関わりについて、小林義廣氏は「彼は生涯に三度の結婚をしている。側室をもった形跡は史料上からは窺われないので、この三人はいずれも正妻であって、しかも最初の二人は次々と病死してしまった。最初の妻は歐陽脩の科挙及第に重要な役割を果たした胥偃の娘で、科挙に合格した翌年の天聖九年 (1031) に結婚している。だが明道二年 (1033) 三月、歐陽脩が二か月ほど開封に出張して帰ってくると、胥夫人の訃報が彼を待ち受けていた。出張中、胥氏は初めての子供を生んで一か月も経たずに、十七歳の若さで亡くなったのである。生まれた子供も五年後の寶元元年 (1038) に母親の後を追っている。胥氏の次が右諫議大夫・楊大雅の娘で、胥氏の亡くなった翌年の景祐元年 (1034) に嫁いでいる。しかし楊氏も嫁いだ翌年の景祐 2 年 (1035) に病死している。享年十八。楊氏の次が戸部侍郎・参知政事にまでなった薛奎の娘を妻にする。薛氏は二十一歳の景祐四年 (1037) 三月に嫁いでいる。薛氏は歐陽脩と生涯に亘って添い遂げ、哲宗の元祐四年 (1089) に七十三歳で天寿を全うしている。三人の妻たちをみると、後になるに従って妻の父親の官位は高くなり、それは歐陽脩の官位の上昇と無縁ではない(注 17)」と記している。

さらに清水茂氏も「歐陽脩の妻は結婚するごとに高官の娘となっていることは注意してよい。歐陽脩の出身はあまりよくない。若い時ははなはだ貧しかったというはなしも伝わっている。彼の父である觀は泰州の判官で歿した。その上の世代は、南唐に仕えた下級官僚であった。故に歐陽脩は結婚するごとに高官の娘を妻としていることに注目すべきである。(注 18)」とある。

歐陽脩の幼少時の逸話として「歐母画荻」すなわち母が荻の枝で地面に文字を書いて教えたことは、「孟母三遷」とともに周知の故事となっている。『宋史』卷三百一十九 「歐陽脩」には「脩は四歳にして孤。母の鄭は自ら守節を誓い、脩には自ら教えた。家は貧しく荻を以て地に畫き書を学ばせた(注 19)」とあり、幼少時の貧しさがしのばれる。

出自が高官の家柄ではなく、さらに華南出身の歐陽脩にとって、胥偃、楊大雅、薛奎の娘婿になることは、種々の点で利便が与えられたことであろう。娘の父たちも将来性のある婿を選ぶことは、自分の血縁のもとに高い地位を維持できることに繋がる。高い地位を維持させようとする高官たちと、それら高官の婿になることは、双方が好都合であったことが窺える。

出身地についても、歐陽脩の最初の妻である胥氏の出身は荆湖南路潭州である。次に娶った楊氏の出身は兩浙路杭州である。三番目の薛氏の出身は河東路絳州。胥氏も楊氏も華南の出身だが薛氏は華北の出身である。歐陽脩は華南の江南西路吉州吉水縣の出身である

から、華南出身の官僚は高官となっはじめて華北の高官と婚姻関係をもてたのであろう。

歐陽脩の婚姻関係については、先の述べた黄重寛氏の「宋代の名門や大族は嫁と婿を撰ぶ選擇の対象は、新興士人に重きをおいた。」。清水茂氏の「高官の婿君になることは、種々の点で利便が与えられる。」。青山氏の「娘を持つ官僚は、科挙及第者の中から優秀な者を撰んだ。」との見解と一致する。

こうした意識は北宋に限らず南宋にもみられる。一例として葉適の場合をあげてみよう。

#### 0951 葉適『水心集』卷二十五 趙孺人墓誌銘

婦貴夫所倚也。夫富婦所安也。固世俗與宗室爲婚者之常也。

葉適は「婦の貴きは夫の倚る所なり。夫の富むは婦の安ずる所なり。固より世俗と宗室との婚を爲す者の常なり。」と記し、婚姻関係の成立に於いて、妻となる女性の家柄の貴さの持つ意味について言及している。さらに葉適自身も宗室の外戚の子孫に当たる女性を妻に迎えている。貧しい知識人の家に生まれた葉適にとって、妻の高氏は英宗の高皇后をだした外戚の一門である。宗室の外戚の子孫である妻の家柄は、葉適自身に箔をつけることになったと思える。また葉適の妻の父親である高子莫にとっても、淳熙5年(1178)に進士に及第した葉適を婿にすることは、歓迎すべきものであったと考えられる。

## (四)南宋の女性墓誌銘にみえる婚姻関係

### (1)樓氏と汪氏の婚姻関係

#### ①汪思温と樓璣

#### 0895 樓鑰撰『攻媿集』卷八十五 亡妣安康郡太夫人行狀(撰者樓鑰の母)

亡妣姓汪氏諱慧通字正柔。明之鄞人。曾祖元吉不仕、祖洙明州助教累贈正奉大夫、父思温左朝議大夫仕爲太府少卿直顯謨閣累贈少卿。妣恭人王氏累贈越國夫人。

#### ②趙汝鐸と樓諤

#### 0951 葉適撰『水心集』卷二十二 趙孺人墓誌

嘉定九年十二月壬寅、趙汝鐸葬其妻樓氏、於樂清縣永康鄉崇福山。樓氏在四明累世貴重。孺人父鐸知鄂州、從父鑰參知政事、皆以文學名當時。

#### ③樓琚と陳氏

#### 0874 樓鑰撰『攻媿集』卷一百五 從妹樓夫人墓誌銘

夫人姓樓氏名某字靚之。曾祖常左朝議大夫累贈金紫光祿大夫、祖异徽猷閣直學士左朝議大夫累贈少師、父琚右朝散郎。世爲明之鄞人。母安人陳氏。

上記の汪氏と樓氏の婚姻関係については、次頁の表11「樓氏と汪氏との婚姻関係」と表12「汪氏と樓氏の官職と出身地」にまとめた。

汪氏と樓氏の間に姻戚関係が結ばれたのは汪思温と汪大猷父子の時、汪思温の女が樓

璩に嫁ぎ、樓璩の姉妹の一人が汪大猷に嫁いでいる。樓氏一族は明州の有力な官戸である汪氏一族との間に婚姻関係を重ねて、緊密な関係を保った。趙孺人墓誌(樓鑰の弟・樓鏐の娘)に、葉適が「樓氏四明に在り世は貴重を累」と記しているとおり、樓氏は明州の名族であり樓鑰は二度の温州赴任などを通じて、温州の士大夫たちと幅広い交友関係を築き、姪の樓氏を樂清縣(温州)の趙汝鐸に嫁がせている。樓鑰は叔父である宣奉大夫・汪大猷が、乾道5年(1169)に金朝へ年賀の使者として遣わされたさい記録官として随行している。

表 1 1 樓氏と汪氏との婚姻関係

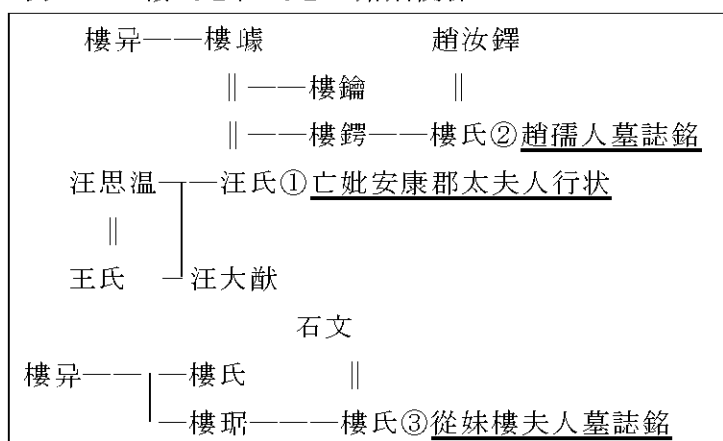


表 1 2 汪氏と樓氏の官職と出身地

氏名	官職	卒年齢	生卒年	出身地
樓璩	朝議大夫		？～淳熙 9 年 (1182)	鄞
樓諤	知江陰軍			鄞
樓鑰	資政殿學士	77 歳	紹興 7 年 (1137)～嘉定 6 年 (1213)	鄞
汪大猷	宣奉大夫	81 歳	宣和 2 年 (1120)～慶元 6 年 (1200)	鄞
汪思溫	左朝議大夫	81 歳	熙寧 2 年 (1077)～紹興 27 年 (1157)	鄞

## (2) 薛氏と胡氏の婚姻関係

### ①胡序と薛徽言

0910 葉適『水心文集』卷十五 胡夫人薛氏墓誌銘

「胡序少賓夫人曰薛氏、起居舍人徽言之女。二家永嘉望姓、世相婚姻、少賓於夫人實內外兄弟。」

胡序少賓の夫人薛氏は、起居舎人薛徽言の娘である。二家は永嘉の名高い家である。代々婚姻関係にあり、少賓と夫人の兄弟は実の兄弟のようである。

表 1 3 薛氏と胡氏との婚姻関係

児勸告——子誉める——子如	
——胡宗(進士及第)	
——胡守(進士及第)	
薛強立——薛徽言	薛氏① <u>胡夫人薛氏墓誌銘</u>
	薛季宣

表 1 4 胡氏と薛氏の

#### 官職と出身

氏名	官職	卒年齢	生卒年	出身地
胡序	湖州酒庫	49 歳	建炎 4 年(1130)～淳熙 5 年(1178)	永嘉
薛徽言	起居舎人	47 歳	元祐 8 年(1093)～紹興 9 年(1139)	永嘉
薛季宣	大理正	40 歳	紹興 4 年(1134)～乾道 9 年(1173)	永嘉

薛氏の夫の胡序は兩浙路温州永嘉縣の出身、薛氏の父・薛徽言も兩浙路温州永嘉縣出身で、胡氏と薛氏は同縣人であり、婚姻関係によって密接な関係にあったことがわかる。さらに陳傅良撰『止齋集』卷四十七の胡少賓墓誌銘には「少賓諱序姓胡氏。其祖諱觀國中散大夫、妣趙氏恭人。宗(長男)盡得外氏書、率諸弟力學。」とある。胡宗とその弟の胡守が外氏(母の生家)である薛一族の蔵書を活用して勉学に励んだ記述であり、婚姻関係によって地域有力者の後継者育成が読み取れる。

薛氏の実家である薛氏一族の蔵書について、岡元司氏は「永嘉学派が存在した温州における名族の相互関係は、思想・文学などの文化面に関わる交友関係と同時に、血縁や婚姻関係の要素も地域内部に関しては観察することができる。永嘉学派の思想家である薛季宣、陳傅良の一族などは、いずれも多数の書物を有する蔵書家であった(注 20)」と記している。

薛氏の蔵書については、陳傅良が「胡少賓墓誌銘」で「盡く外氏(薛氏)の書を得」とあるように、薛氏は蔵書を多数保有し、陳傅良も蔵書家として知られ「仙巖書院」を創設している。南宋に見られる思想及び学問を中心とした学派関係による繋がりを挙げてみよう。

### (3) 陳傅良と葉適との学派関係

陳傅良と葉適との関わりは、陳傅良撰「令人張氏壙誌」と葉適撰「張令人墓誌銘」からもうかがえる。(令人張氏と張令人は同一人のため、集計では「張令人墓誌銘」を採用。)

陳傅良撰『止齋集』卷五十 令人張氏壙誌

是爲陳子傅良之妻令人之墓。令人姓張氏諱幼昭字景惠、永嘉人。草堂先生國子小學錄輝之孫、主管禮兵部架閣文字孝愷之子、楊州泰興縣主簿東野之姉、蓋登進士第三世矣。以乾道七年歸於我、慶元元年八月丙子卒、享年五十以其年十有二月壬申葬。令人窮約時來歸我相從二十有五年、再以臺評罷食貧歲月視食祿爲長深入湖湘起居飲食非、其性多病所侵未嘗有毫髮不滿意見言色余敬如賓友今亡矣。嗚呼哀哉、余既走介、乞銘於太府卿葉君、適而自識其略、納之坎中。

#### 0857 葉適撰『水心集』卷十四「張令人墓誌銘」

夫人諱幼昭字景惠姓張氏、温州永嘉人。歸陳氏爲中書舍人傅良之妻。夫人父兄皆儒先生。自幼陶染詩禮間事絕異於他女。其夫有學行文詞經世之業遠近宗從登門請義通日夜歷寒暑室內常無坐處。…遂得疾慶元元年八月二十二日。享年五十封令人。

銘曰、同其夫之志意兮眇追古而逐今有迂而不達兮有微而莫尋人所不知兮。夫人知心嗚呼所謂好合兮所謂瑟琴老至不偕夫也。弗任山則壽矣。勒此崖陰。

陳傅良と葉適は永嘉學派を通じて親交があり、思想的・学問的な繋がりをもっていた。永嘉學派については、伊原弘氏が「永嘉學派とは北宋の元豐年間、11世紀末の太學にあった永嘉九先生から誕生し、周行己、鄭伯熊、鄭伯英、胡安國、薛季宣、陳傅良らを経て葉適に至って大成された(注21)」と述べている。永嘉學派は実用・經濟の学を主張したので、功利派・永嘉功利派ともいわれた。

南宋における婚姻関係と地理的範囲を墓誌銘からみたところ、樓氏と汪氏は明州鄞縣、薛氏と胡氏は温州永嘉縣、陳傅良と葉適は温州永嘉縣と、それぞれの名族同士が婚姻及び思想・学問で繋がっているが、それは同じ縣内に絞られている。本稿28頁の表3「結婚年での嫁ぎ先への移動人数と範囲」によると、南宋は移動者222人のうち縣内が123人(55.4%)と半数以上を占めている。南宋に於いての婚姻をはじめとする繋がり、在地内であったことがわかる。

## おわりに

士大夫層にとっての婚姻は、家の発展に重要な関わりを担っていたことが女性墓誌銘からも判明した。科挙試験に及第し官僚としての地位を確保したうえで、さらに権力の維持と拡張を図る士大夫層にとって、閨閥は地位を保全する次善の策として重要な役割を果たしていたのである。しかし婚姻による移動の地理的範囲は、北宋と南宋では異なっていた。女性の婚姻による移動の地理的範囲は、北宋1期～2期の960年代から1080年代頃にかけては、28頁の表3で示しているとおり路を越えてはいるが華北内に留まっていた。

前述の「呂夷簡一族と王旦・韓琦・蘇頌・吳充との婚姻関係」、「畢士安、陳堯叟兄弟及び賈昌朝との婚姻関係」からも、北宋初期から中期までの高級官僚は、華北出身者が殆どであり、婚姻は華北内の官僚間での通婚であったことがうかがえる。

南宋の士大夫層の婚姻関係は、北宋の婚姻関係とは明白な違いをみせている。南宋は政權が江南に移り、政治と經濟が合致したことにより、士大夫層が江南への在地性を強めた。婚姻関係においても南宋の士大夫層は、縣内での婚姻が半数以上を占め、同一地域内で通婚している。南宋は北宋に見られるような政治的有力者同士の婚姻が重視されなくなり、在地有力者との婚姻が重視される。前述の「樓氏と汪氏の婚姻関係」「薛氏と胡氏の婚姻関係」からも、婚姻による地理的移動範囲は、狭く単純であったことがわかる。

華北出身者は華北内で、華南出身者は華南内での通婚が一般的ではあるが、北宋も中期以降になると王安石、歐陽脩、范仲淹、吳充ら華南の出身者が高官となって活躍することにより、華南出身の男性と華北出身の女性との婚姻も見られるようになる。「歐陽脩の婚姻関係」にみえる最初の妻と二番目の妻の父親は華南出身であるが、三番目の妻の父親は華

北の出身である。歐陽脩は出世したことにより華北の高官と婚姻関係を結ぶことができたといえる。南宋における婚姻の地理的移動について先行研究をみてみよう。

岡元司氏は「温州・明州に地域をしぼり、科挙関係の試官の分析を行った結果、そこで浮かび上がってきたのは、それぞれの地域内における相互の婚姻関係や思想上のつながりを通じた密接な関係である。その人的結合を軸として、官界における地位の地域的再生産がおこなわれていたと捉えることができる(注 22)」と述べている。

伊原弘氏は「南宋に入ると政治的有力者同士の通婚が重視されなくなり、在地有力者との通婚が重視されるようになった。宗室の杭州への南遷によって、南宋における江南の比重は一層高まった。経済の発展は兩浙路から福建路へと拡大するが、この二つの地域が南宋官僚を輩出させた。江南においては、士大夫官僚のめざす中央政界のある場所と士大夫自身の経済的基盤のある場所とが合致していた。さらに領土が半減し就くべき官職も減少したが、進士及第者は増加した。進士に及第しても任官できず、士大夫の過密化をおこした。官職に依存し上層官僚同士の連繫を重んじるよりも、実質的な勢力基盤を重んじるようになり、自己の出身地である郷村内での通婚を重要視するようになった(注 23)」と述べている。士大夫の過密化について、ヒルデ・デ・ヴィールドト氏(オックスフォード大学)、ジョン・キング・フェアバンク氏(ハーバード大学)は、ともに伊原氏と同様の見解を示している。

ヒルデ・デ・ヴィールドト氏は「宮廷における殿試で頂点に達する階層化された科挙制度は、十一世紀には万を以て数えられ、十三世紀半ばには十万を以て数えられることになる科挙受験者の増加は、科挙というものを、広い適用範囲を有する政治的コミュニケーション・ネットワークへと変化させた。科挙は、ステート・アクティヴィズム(国家主導主義)からエリート・アクティヴィズム(地域主導主義)への変換が看取されうるサイト(現場)に繋がったばかりでなく、それを可能にし、促進する触媒にもなったのである(注 24)」とある。

北宋と南宋では科挙に合格することの意味が変化したのである。北宋の政治的エリートは、朝廷と首都に焦点を合わせていた。そこには朝廷政治に関する情報が集中していたからである。南宋以後、科挙への参加は政治的エリートへの道を保証しないうえ、進士の称号も官僚への道を保証するものではなくなったが、科挙への参加と進士の称号は、地域での権力と権威を与えてくれる社会資本を生み出したのである。

ジョン・キング・フェアバンク氏は「北宋における印刷技術の発展は書物を普及させた。南宋になると士大夫層は勉学に有利となり、科挙受験者を増大させる源泉となった。しかし受験者数が増えても合格者数は減少の一途をたどり、官僚への道は多くの志願者にとって塞がれていた。科挙試験の合格率の低下は志願者の数が増えるにつれて、合否の割合を法律で規制した(すなわ、布告した)ことに示されている。1023 年(天聖元年)には 10 人のうち五人が合格とされ、1045 年(慶暦 5 年)には 10 人のうち 2 人、1093 年(元祐 8 年)には 10 人のうち 1 人、1156 年(紹興 26 年)には 100 人のうち 1 人、1275 年(徳祐元年)には 200 人のうち 1 人であった。多くの人々が競い合うにつれ、合格者はますます少なくなった(注 25)」と述べている。

前述のヒルデ・デ・ヴィールドト氏が「十三世紀半ばには十万を以て数えられることになる科挙受験者の増加」と、ジョン・キング・フェアバンク氏が「南宋も終わり近くの 1275 年

(徳祐元年)には 200 人のうち 1 人」という数字とは合致する。

女性墓誌銘にみえる婚姻による移動からも、北宋は中央官僚が勢力を維持し、南宋は地域の有力者が勢力を維持したことがうかがえる。宋代における南遷とは、単なる王朝の移動に留まらず、女性の婚姻という地理的移動の範囲にまで影響を及ぼしたのである。本稿では女性墓誌銘を基礎史料としたが、史料的には充分とは言えない。男性墓誌銘も視野に入れば、さらに明確な事実が判明すると思える。男性墓誌銘は今後の課題としたい。

## 注

- (1) 小島泰雄「通婚圏と配偶者選択」(『研究年報』31 神戸市外国語大学外国学研究所、1963 年、71～102 頁)
- (2) 石田浩「旧中国農村における市場圏と通婚圏」(『史林』63-4、1986 年、102～126 頁)
- (3) G. W. スキナー著; 今井清一[ほか]訳『中国農村の市場・社会構造』(京都: 法律文化社、1979 年、51 頁)
- (4) 黄重寛「科舉社會下家族的發展與轉變」(『宋代的家族與社会』臺北東大圖書股份有限公司 2006 年) 255 頁
- (5) 伊沛霞著・胡志宏譯「变化中的女性角色」(『内閣』宋代婦女的婚姻和生活 江蘇人民出版社 2006 年) 266 頁
- (6) 青山定雄「宋代における華北官僚の婚姻関係」(『中央大学八十周年記念論文集』中央大学 1965 年) 363・386 頁
- (7) 清水茂「北宋名人の姻戚関係」(『東洋史研究』20 卷 3 号 東洋史研究会編同朋社出版 1961 年) 59 頁
- (8) 伊原弘「北宋官僚の婚姻と特質」(『歴史と地理』254 山川出版社 1976 年) 13 頁
- (9) 岡元司「南宋期温州の名族と科挙」(『広島大学東洋史研究報告』第 17 号 広島大学東洋史談話会 1995 年) 12～13 頁
- (10) 遠藤隆俊「宋代における同族ネットワークの形成—范仲淹と范仲温—」(『宋代社会のネットワーク』宋代史研究会研究報告第六集 汲古書院 1998 年) 104 頁
- (11) 斯波義信「宋代市糴制度の沿革」『青山博士古稀記念宋代史論叢』(省心書房 1974 年) 128 頁
- (12) 斯波義信「第六章商業資本の諸性質、第一節商業資本の形成—宋代における福建商人の活動とその社会的背景—」『宋代商業史研究』(風間書房 1968 年) 422～423 頁
- (13) 佐竹靖彦「第二章唐宋變革期における江南東西路の土地所有と土地政策—義門の成長をてがかりに—」「第三章宋代贛州事情素描、第一節江西地域‘開發’の歴史的沿革」『唐宋變革の地域的研究』(同朋舎出版 1990 年 353～354 頁、362～367 頁)
- (14) 岡元司氏「南宋期科挙の試官をめぐる地域性」(『宋代社会のネットワーク』宋代史研究会編第六集 汲古書院 1998 年) 252 頁
- (15) 注(2)参照
- (16) 伊原弘「南宋官僚の婚姻と特質」(『歴史と地理』254 山川出版社 1976 年) 15 頁
- (17) 小林義廣「歐陽脩小伝」(『歐陽脩 その生涯と宗族』創文社 2000 年) 31～32 頁
- (18) 注(7)参照

- (19)『宋史』卷三百一十九 列傳第七十八 歐陽脩 10375 頁  
「四歳而孤、母鄭、守節自誓、親誨之學、家貧、至以荻畫地學書。」
- (20)注(9)参照 265～66 頁
- (21)伊原弘「中国知識人の基層社会」(『思想』802号 岩波書店 1991年)92頁
- (22)岡元司「宋代地域社会における人的結合」(『アジア遊学』7 宋代知識人の諸相 比較の手法による問題提起 勉誠出版 1999年) 49頁
- (23)注(16)参照
- (24)ヒルデ、デ、ヴィールドト「南宋科挙の学術史」(『中国学(シノロジー)のパーспекティブー科挙・出版・ジェンダー』高津孝編訳 勉誠出版 2010年)156～157頁
- (25)ジョン、キング、フェアバンク「教育と科挙制度」(『中国の歴史』大谷敏夫・太田秀夫訳 ミネルヴァ書 1996年) 120頁

### 第三章 婚姻の階層的範囲

#### はじめに

階層性の考察に際しては、最初に墓誌銘に載る女性の被葬者が、官府から授与された位階に注目した。墓誌銘を有する被葬者は、有位階者と無位階者に分かれる。位階を有する場合、墓誌銘の表題もしくは墓誌本文中に明記されているものを使用した。表題にも墓誌本文にも位階が記されていない場合は、少なくとも墓誌銘の執筆時点で被葬者は、位階を有していなかったと解釈する。若干の例外はあるとしても大きな違いはないであろう。

女性への位階の授与は、皇室関係者やまれな事例である王朝国家への貢献を除けば、通例では配偶者または息子の任官、昇進の機会に付随して行われる。したがって、ここでいう被葬者の位階とは、配偶者や息子の位階とほぼ同義であり、被葬者が属する家族の社会的階層をあらわすものである。すなわち分析の結果得られた位階の高低分布の偏差は、被葬者の属する家族の階層を示すものとみてよい。本稿では墓誌銘に載る女性の位階及び夫と子の官職と品階、それに墓誌銘の撰者について検証してみよう。

#### (一)女性の位階

墓誌銘に載る女性 1075 人のうち、既婚女性 1018 人の位階、夫の品階、子の品階(子が複数の場合は、品階の高い子をあげた)を、正一品～正五品(常参官)、従五品以下(非常参官)、無位階・無品階に分類し、別表「宋代女性墓誌銘」をもとに下記の表 1 にまとめた。  
( )内の数は、夫の数に対して妻の数を、子の数に対して母の数を示したものである。

表 1 女性の位階、夫・子の官品

期別	正一品～正五品			従五品～従九品			無位階・無品階		
	女性	夫(妻)	子(母)	女性	夫(妻)	子(母)	女性	夫(妻)	子(母)
北宋 I 期	25	15 (10)	7 (7)	0	17 (0)	15 (0)	22	15 (9)	23(16)
北宋 2 期	131	65 (51)	22(19)	0	113 (0)	90 (0)	107	55 (43)	126(79)
北宋 3 期	112	75 (59)	21(17)	15	121(11)	90 (5)	139	66 (51)	147(107)
計	268	155(120)	50(43)	15	251(11)	195 (5)	268	136(103)	296(202)
南宋 I 期	20	10 (9)	5 (5)	34	41 (17)	35 (14)	47	50 (33)	63(37)
南宋 2 期	15	13 (9)	6 (1)	43	50 (28)	52 (20)	85	80 (63)	85(61)
南宋 3 期	27	29(16)	6 (3)	97	73 (47)	71 (41)	97	118(69)	145(80)
計	62	52(34)	17 (9)	174	164(92)	158(75)	229	248(165)	293(178)
合計	330	207(154)	67(52)	189	415(103)	353(80)	497	881(268)	589(380)

表 1 から北宋と南宋における女性の位階と夫・子の官品との関連性をみてみよう。

北宋の正五品以上の夫・子に対してその妻も母も正五品以上の割合が約 8 割と関連性が相当強い。従五品以下の夫・子に対してその妻も母も 4%弱と関連性は殆どない。

南宋の正五品以上の夫・子に対してその妻も母も正五品以上の割合が 6 割強と関連性はある程度ある。従五品以下の夫・子に対してその妻も母は 5 割強と関連性はある程度ある。

上記の数値から次のことがわかる。

- ・ 北宋では正五品以上の場合、夫や子の官品に合せて妻や母に位階が与えられるが、従五品以下の場合、夫と子の官品に合せて妻や母に位階が与えられることはない。
- ・ 南宋では正五品以上・従五品以下ともにある程度の関連性はあるが、北宋ほど顕著ではない。
- ・ 北宋から南宋にかけての時期的変化をみると、正五品以上については北宋から南宋では関連性が弱くなっているのに対し、従五品以下については北宋から南宋では関連性が強くなっており、正五品以上と従五品以下とでは逆の傾向がみられる。

また正五品以上の品階を持つ夫と子を合わせた数と女性の数とをみると、北宋では夫と子を合わせた数 205 人に対し女性は 268 人と女性の方が 63 人多い。この 63 人は正五品以上の官品を持っていない夫・子の妻・母であるということになるが、ではこのような女性は、どんな理由で正五品以上の位階を有しているのか、この点を考えるために女性の父と祖父の官品について別表「宋代女性墓誌銘」から集計したところ、下記の表 2 のような結果となった。

表 2 父・祖父の官品

正一品～正五品	父	祖父	計
北宋	56 人	99 人	155 人
南宋	30 人	36 人	66 人

表 2 からいえることは、夫・子が正五品以上の官品を有していないにもかかわらず、女性が正五品以上の位階を有しているのは、その女性の父や祖父が高い官品を有していたことに伴い、娘や孫娘に当たる女性にも位階が授与されたと考えられる。

位階が授与されている女性は、北宋 283 人、南宋 236 人、合せて 519 人。うち位階授与の記述がみえる墓誌銘は、北宋 59 人、南宋 75 人、合せて 134 人である(別表 5「位階授与の記述がみえる墓誌銘」参照)。別表 5 から位階授与の記述が見える墓誌銘を、北宋・南宋ともに期別ごとにあげてみよう。

#### < 北宋 1 期 >

北宋 1 期は 25 人の女性が位階を授与されている。960 年～1014 年まで約 50 年間に、位階を授与された女性は下記の 5 人であるが、この 5 人について位階授与の記述はみえない。

(以下の番号は別表「宋代女性墓誌銘」の整理番号を示す。)

0001	徐鉉『騎省集』卷三十	汝南縣太君周氏夫人墓誌銘(48 歳)	縣太君(正五品)
0004	徐鉉『騎省集』卷十七	故平昌郡君孟氏墓銘(43 歳)	郡君(正四品)
0005	楊億『武夷新集』卷八	劉氏太夫人天水縣太君趙氏墓碣銘(86 歳)	縣太君(正五品)
0006	歐陽脩『文忠集』卷六十二	漳南縣君張氏墓誌銘(37 歳)	縣君(正五品)
0008	曾鞏『元豐類藁』卷四十五	旌德縣太君薛氏墓誌銘(43 歳)	縣太君(正五品)

1018 年～1044 年までに位階を授与された女性は 20 人。位階授与の記述がある女性は 6 人。  
別表5「位階授与の記述がみえる墓誌銘」から 4 例あげる。

1. 范仲淹『范文正公集』卷十三 滕公夫人刁氏墓誌銘(72 歳)  
祠部君(長男)于朝廷夫人累封渤海縣太君。(刁氏・縣太君＝正五品、子・祠部外郎＝正七品)
2. 范仲淹『范文正公集』卷十四 胡公夫人陳氏墓誌銘(79 歳)  
夫人自公登朝、封上黨縣君、公為諫議大夫(從四品)進封潁川郡君。  
(陳氏・郡君＝正四品、夫・諫議大夫＝從四品)
5. 歐陽脩『文忠公集』卷六十一 長安縣太君廬氏墓誌銘(57 歳)  
夫人初用公封范陽縣君。後用其子封仁壽縣太君。又進封長安縣太君及卒也。  
(廬氏・縣太君＝正五品、夫・諫議大夫＝從四品)
6. 王安石『臨川文集』卷九十九 曾公夫人萬年縣太君黃氏墓誌銘(92 歳)  
凡受縣君封者四、蕭山・江夏・遂昌・雒陽、受縣太君封者二會稽・萬年。  
(黃氏・縣太君＝正五品、夫・諫議大夫＝從四品)

北宋 1 期の 1. 范仲淹『范文正公集』卷十三 滕公夫人刁氏墓誌銘は、子の官職によって縣太君を授与されているが、後は夫の官職によつての授与である。

#### < 北宋 2 期 >

正一品～正五品の位階を授与された女性は 131 人。位階授与の記述がある女性は 38 人。  
別表 5「位階授与の記述がみえる墓誌銘」から 12 例あげる。

7. 司馬光『司馬集』卷七十八 程夫人墓誌銘(48 歳)  
蘇軾(長男、次男は蘇轍)登朝追封武陽縣君。  
(程氏・縣君＝正五品、子(蘇軾)・翰林學士＝正三品、夫(蘇洵)・校書郎＝從八品)
9. 沈括『長興集』卷十四 長安縣太君高氏墓誌銘(77 歳)  
殿中丞(夫)預朝請。夫人格當封詔以為萬壽縣君、其子以善聞嘉祐七年(1062)用子蔭進封長安縣太君。(高氏・縣太君＝正五品、夫・殿中丞＝正五品)
14. 劉攽『彭城集』卷三十九 樂安郡君范氏墓誌銘(53 歳)  
樞密公(夫)始升朝、夫人封壽光縣君、及為翰林學士擬封高平郡君、南郊推恩進封樂安郡君。(范氏・郡君＝正四品、夫・翰林學士＝正三品)

- 10 晁補之『雞肋集』卷六十四 文安郡君陳氏墓誌銘(56 歳)  
韓公後貴為右諫議大夫。追封夫人潁川郡君、又追封文安郡君。  
(陳氏・郡君＝正四品、夫・諫議大夫＝從四品)
- 12 秦觀『淮海集』卷三十三 虞夫人墓誌銘(27 歳)  
元豐六年(1083)天子有事於南郊、夫人以承議君(夫)陞朝恩封仙源縣君(歿後 13 年)。  
(虞氏・縣君＝正五品、夫・承議郎＝從七品)
- 16 鄭獬『郕溪集』卷二十二 崔夫人墓誌銘(57 歳)  
夫人卒年五十七。以趙君(夫)登朝、封長安縣君。  
(崔氏・縣君＝正五品、夫・屯田員外郎＝正七品)
- 23 歐陽脩『文忠公集』卷三十六 渤海縣太君高氏墓碣(不明)  
夫人初以夫封文安縣君。後以其子封渤海縣太君。  
(高氏・縣太君＝正五品、夫・尚書兵部員外郎＝正七品)
- 26 蔡襄『端明集』卷三十九 瑞昌縣君孫氏墓誌銘(67 歳)  
公雅(夫)升郎位再以郊祀恩(天子が郊外で天地を祀る祭り)。夫人樂安・瑞昌二縣君。  
(孫氏・縣君＝正五品、夫・尚書職方員外郎＝正七品)
- 32 王安石『臨川文集』卷一百 同安郡君劉氏墓誌銘(不明)  
公當仁宗時(1067～84)、以御史、天章・龍圖・樞密三學士。夫人亦累封為同安郡君。  
(劉氏・郡君＝正四品、夫・尚書戸部侍郎＝從三品)
- 35 劉敞『公是集』卷五十二 皇姪故和州防禦使歷陽侯夫人安福縣君王氏墓誌銘(20 歳)  
君生十有七歳。歸于宗室故和州防禦使歷陽侯克周。既三年封安福縣君(20 歳)。  
(王氏・縣君＝正五品、夫・防禦使＝從五品)
- 43 蘇頌『蘇魏公集』卷六十二 彭城縣君錢氏墓誌銘(52 歳)  
享年五十二彭城之封、從夫貴也。  
(錢氏・縣君＝正五品、夫・通直郎＝正八品)
- 44 司馬光『傳家集』卷七十八 敘清河郡君(張氏、60 歳)  
清河郡君張氏、冀州信都人。禮部尚書致仕存女。端明殿學士司馬光之妻也。年十六適司馬氏。夫登朝封清河縣君、及為學士改郡君。  
(張氏・郡君＝正四品、夫・翰林學士＝正三品)

北宋 2 期の 7.程夫人墓誌銘は、長男の蘇洵の功績により母の程氏は縣君(正五品)を授与されているが、その他は夫の功績によって位階を授与されている。位階は存命中に授与される

ことが殆どであるが、天子が冬至に南郊で天を祀る祭りに夫が随行したことによって、12. 虞夫人墓誌銘は没後 13 年にして縣君の位階が授与されている。また宗室に嫁ぐと縣君の位階が授与されることにより、上記 35. 皇姪故和州防禦使歷陽侯夫人安福縣君王氏は、17 歳で嫁ぎ 3 年後の 20 歳にして縣君を授与される。

<北宋 3 期>

正一品～正五品までの位階を授与された女性は 112 人。北宋は 3 期になって初めて従五品以下の位階を授与された女性が 15 人みられる。正一品～正五品と従五品以下を合せて 127 人の女性が位階を授与されているが、位階授与の記述がみえる墓誌銘は 15 人である。別表 5「位階授与の記述がみえる墓誌銘」から 7 例あげる。

45 晁補之『雞肋集』卷六十四 安康郡君龐氏墓誌銘(77 歳)

夫人宜之始封南安縣君。郡君皆穎公(父)恩也。父・龐籍(丞相・正一品)。  
(龐氏・郡君＝正四品、父・龐籍＝丞相・正一品)

49 晁説之『嵩山集』卷二十 崇徳縣太君王氏墓誌銘(84 歳)

壽考(長寿、84 歳卒)、康定初(1040)以子封、廣徳縣太君。改封崇徳縣太君。  
(王氏・縣太君＝正五品、夫・金紫光祿大夫＝正二品、男子 8 人・朝散郎・軍事推官・朝儀大夫・宣徳郎＝正 6 品～従 8 品)

54 蘇頌『蘇魏公文集』卷六十二 仁壽郡太君陳氏墓誌銘(82 歳)

翰林學士承旨通議大夫知制誥兼侍講鄧公(三男)母、夫人壽安縣太君陳氏以疾終于京師。登朝追封贈府君(三男)爲光祿大夫。而夫人方在色養自壽安縣太君、再進郡太君。  
(陳氏・郡太君＝正四品、子・光祿大夫＝従二品)

55 蘇轍『欒城集』卷二十五 歐陽文忠公夫人薛氏墓誌銘(73 歳)

夫人始以文忠貴封壽安縣君、八遷爲仁壽郡夫人、復以其子三遷(官職が変わること)封安康郡太夫人。  
(薛氏・郡太夫人＝正二品、夫・參知政事＝正二品、子 8 人・承議郎、少府監丞、光祿寺丞、朝散郎、尚書職方員外郎、集賢校理、宣徳郎＝正七品～従八品)

56 陸增祥『八瓊金』卷一百五 安武軍節度使郝質妻朱氏墓誌(75 歳)

宋故殿前都指揮使安武軍節度使贈太師、追封永國公諡武莊郝公夫人京兆郡夫人。諸子陞朝進封郡太夫人。  
(朱氏・郡太夫人＝正二品、夫・殿前都指揮使、安武軍節度使＝従二品)

58 孫覿『鴻慶居士文集』卷四十一 宋故何碩人孫氏墓表(71 歳)

碩人以太中(夫)故自仁和縣君。三封至宜人。昌辰(次男・朝奉郎)登朝加號令人。再命而得今封碩人。(孫氏・碩人＝従三品、夫・朝奉大夫＝従六品、子・朝奉郎＝正七品)

59 葛勝仲『丹陽集』卷十四 徐太令人葛氏墓誌銘(73 歳)

夫恩封永昌縣君、以子恩封普寧縣太君、再封太令人。

(葛氏・太令人＝從四品、夫・中太夫＝正五品、子 3 人・朝請郎他＝正七品～從八品)

北宋 3 期は父が丞相の官職にあったことにより縣君を授与された、45.安康郡君龐氏墓誌銘を除いては、夫と子の官職によって位階が授与されている。

北宋も中期以降になると子の功績によって授与されるケースがみえてくる。歐陽文忠公夫人薛氏墓誌銘の薛氏は歐陽脩の妻である。歐陽脩の官位が上がるにつれて縣君から郡夫人に、また子の功績によって郡太夫人を授与されている。薛氏の子 8 人は承議郎、少府監丞、光祿寺丞、朝散郎、尚書職方員外郎、集賢校理、宣徳郎などの官職にある。薛氏は歐陽脩の三人目の妻であるが、73 歳と長寿であったため、歐陽脩が正二品の参知政事の官職についたとき、正二品の郡夫人の位階を授与された。さらに子によって郡太夫人を授与されている。しかし歐陽脩の最初の妻の胥氏は 17 歳、二番目の妻の楊氏は 18 歳で亡くなったため無位階である。44.敘清河郡君の張氏は司馬光の妻である。司馬光の登朝によって縣君を、さらに司馬光が翰林学士に任官すると郡君の位階が授与されている。司馬光は哲宗即位後の元祐元年(1086)、旧法党の首領として宰相に起用され新法を廃止したが、在任 8 ヶ月で病没した。妻の張氏が生存していたならば、正一品の國夫人の位階を授与されていたと推測できるが、張氏は司馬光が宰相になった元祐元年(1086)よりも、8 年早い元豐元年(1078)に 60 歳で歿している。故に張氏は郡君の正四品で終わっている。

<南宋 1 期>

正一品～正五品までの位階を授与された女性は 20 人、從五品～從九品までの位階を授与された女性は 34 人、合せて 54 人の女性のうち位階授与の記述がある墓誌銘は 22 人。別表 5「位階授与の記述がみえる墓誌銘」から 8 例あげる。

1 周必大『文忠集』卷三十六 先夫人王氏墓誌(37 歳)

壽止三十七。後某(子・周必大)爲書省正字。遇沛澤贈孺人。忝御史再贈安人。

(王氏・安人＝正七品、子・御史大夫＝從二品)

5 胡寅『斐然集』卷二十六 吳國太夫人王氏墓誌銘(75 歳)

初特封安康郡夫人、後封安定郡太夫人。子讜列職西清奉祠輦轂下、一日徽宗皇帝召見便殿顧問庭闈安否。讜再拜謝以壽康奉。翌日親御翰墨書永國太夫人。疾薨享年七十有五、贈吳國太夫人。

(王氏・國太夫人＝正一品、夫・太子少師＝從二品、子・寶文閣直学士＝從三品)

4 劉一止『苕溪集』卷五十 魏國太夫人向氏墓誌銘(63 歳)

二子登朝籍進封魏國太夫人。胡堯佐(次男)右承議郎、直敷文閣賜紫金魚袋。胡堯仁(三男)右宣議郎、直敷文閣賜紫金魚袋。

(向氏・國太夫人＝正一品、二子・承議郎、宣議郎＝正七品～從八品)

- 11 劉才邵『櫟溪集』卷十二 彭氏太孺人墓誌銘(106 歳)  
時夫人年九十餘、遇郊祀霈恩封太孺人。  
(彭氏・太孺人＝從七品、子・縣主簿＝從九品)
- 14 孫覲『鴻慶集』卷四十 呂恭人胡氏墓誌銘(68 歳)  
太恭人以夫貴凡三命賜號宜人。靖(次男)登朝乃得今封太恭人。  
(胡氏・太恭人＝從四品、夫・奉直大夫＝正六品、子・迪功郎＝從九品)
- 15 孫覲『鴻慶集』卷四十 太淑人劉氏墓誌銘(74 歳)  
敷文閣(子)登朝由卿寺擢承郎進位八坐。太淑人以子貴更七封而賜今號太淑人。  
(劉氏・太淑人＝從三品、子・敷文閣直學士→通奉大夫＝從三品)
- 16 孫覲『鴻慶居士文集』卷四十 恭人楊氏墓誌銘(60 歳)  
賜號宜人。又以詩書教其子而師尹(長子)者擢名第通朝籍遇郊祀恩而進今封恭人。  
(楊氏・恭人＝從五品、夫・翰林學士＝正三品)
- 22 劉一止『苕溪集』卷五十一 宋故太宜人莫氏墓誌銘(87 歳)  
郊祀恩封太安人。明年顯仁皇太后覃八十之慶。加今封太宜人。(莫氏 87 歳卒)  
(莫氏・太宜人＝從五品、夫・通直郎＝正八品)

南宋 1 期は夫と子の功績によって位階を授与されている。故に 1.先夫人王氏墓誌(撰者・周必大之母)の 37 歳を除けば、60 歳～106 歳まで長寿の女性が多い。位階が授与されるきっかけは、沛澤、冬祀、奉觴、郊祀など王朝の祀りごとの際に恩封として授与される。

#### <南宋 2 期>

正一品～正五品の位階を授与された女性は 15 人、從五品～從九品の位階を授与された女性は 43 人、合せて 58 人の女性のうち、位階授与の記述がある墓誌銘は 18 人。別表 5「位階授与の記述がみえる墓誌銘」から 6 例あげる。

- 24 周必大『文忠集』卷三十六 王給事母安人徐氏墓誌銘(69 歳)  
從其子官於朝者五年、初以乾道九年(1173)冬祀恩封太孺人。至是盖進封太安人。  
(徐氏・安人＝正七品、子・給事中＝正四品)
- 28 韓元吉『南澗甲乙稿』卷二十二 太宜人毛氏墓誌銘(58 歳)  
夫人以長子陞朝列封太安人。壽聖慶典封太宜人。  
(毛氏・太宜人＝從五品、夫・武義郎＝從七品、子・修武郎＝正八品)
- 29 楊萬里『誠齋集』卷一百二十八 太宜人蕭氏墓誌銘(87 歳)  
夫人年德高(87 歳)邵應書初封太孺人。再封太安人。新天子(淳熙 16 年、孝宗→光宗)

三封太宜人。(蕭氏・太宜人＝從五品、子・修職郎、保義郎、承節郎＝從八品～從九品)

23 陳亮『龍川集』卷三十 姚漢英母夫人墓誌銘(不明)

怡(子)入太學遇高宗皇帝慶壽覃恩得封孺人。(沈氏・孺人＝正八品、子・姚怡順)

36 張栻『南軒集』卷四十一 張氏墓表(不明)

淳熙二年(1175)天子奉觴前殿推恩海內、夫人以擢(次男・從政郎)故得封太孺人。

(張氏・太孺人＝從七品、子・從政郎＝從八品)

38 胡銓『胡澹庵文集』卷二十六 越國太夫人郭氏墓誌銘(71 歳)

享年七十有一。累封福國夫人。以昭祖(次男)遇郊祀恩加封越國太夫人。

(郭氏・國太夫人＝正一品、夫・武泰軍節度使・開府儀同三司＝從二品～從一品、子・惠州團練使＝從五品)

南宋 2 期は夫から子に功績が移り、母の立場で位階が授与されている。位階授与の機会  
は、冬祀、壽聖慶典、徳高、慶壽、慶壽覃恩、天子奉觴、郊祀恩加など、朝廷の祀りと  
を契機に恩封されている。また 29.太宜人蕭氏墓誌銘のように、本人の長寿を祝っての授  
与である徳高もみられる。

<南宋 3 期>

正一品～正五品の位階を授与された女性は 27 人、從五品～從九品の位階を授与された  
女性は 97 人、合せて 124 人の女性のうち。位階授与の記述がある墓誌銘は 34 人。別表 5  
「位階授与の記述がみえる墓誌銘」から 13 例あげる。

41 葉適『水心集』卷二十 虞夫人墓誌銘(77 歳)

子純(長男、中大夫)賜進士第一人、封夫人爲太碩人。

(虞氏・太碩人＝從三品、子・中大夫＝正五品)

50 黄榦『勉齋集』卷三十七 太安人林氏行狀(74 歳)

嘉定乙亥(8 年 1215)明禋安人。以子官封太安人。

(林氏・太安人＝從六品、夫・奉議郎＝正八品、子・朝散郎＝正七品)

44 度正『性善堂稿』卷十四 郭安人墓誌銘(94 歳)

既升朝遇慶元(1195～1200)郊封孺人。開禧(1205～1207)大饗明堂如今封安人。

(郭氏・安人＝正七品、夫・武翼郎＝從七品)

49 樓鑰『攻媿集』卷八十五 亡妣安康郡太夫人行狀(95 歳)

紹興十六年(1146)封孺人。

紹興二十三年(1153)封安人。

紹興二十八年(1158)封宜人。

乾道三年(1167)封恭人。

淳熙十二年(1185)鑰(次男)該郊祀恩封太令人。

淳熙十三年(1186)高宗慶霈封太碩人。

紹熙五年(1194)壽聖(37)皇太后慶壽恩封太淑人。

慶元五年(1199)光宗聖體清安天子行慶于下封信安郡太夫人。

慶元六年(1200)明堂恩進封大寧郡太夫人。

嘉泰三年(1203)郊禮進封安康郡太夫人(93 歲)。汪氏 95 歲卒。

(汪氏・郡太夫人＝正二品、夫・朝議大夫＝正六品、子・樓鑰・資政殿大學士＝正三品)

54 孫應時『燭湖集』卷十二 太安人方氏壙記(79 歲)

筭歸故修武郎台州兵馬都監趙公伯栻封孺人。晚以子遇錫類恩加今太安人。

(方氏・太安人＝從六品、夫・修武郎＝正八品、子 8 人・迪功郎、從事郎、通直郎、承節郎、  
保義郎、成忠郎、修職郎＝正八品～從九品)

57 文天祥『文山集』卷十六 王推官仇氏墓誌(83 歲)

子入太學甲寅(寶祐 2 年 1254)明禋封孺人。

(仇氏・孺人＝正八品、夫・迪功郎＝從九品、子・從政郎＝從八品)

67 袁甫『蒙齋集』卷十七 甘氏夫人墓誌銘(92 歲)

享年九十有二以慈明太后慶壽恩封太孺人。

(甘氏・太孺人＝從七品、夫・承事郎＝正九品、子・奉議郎＝正八品)

68 袁甫『蒙齋集』卷十八 縣尉楊君太孺人何氏墓誌銘(76 歲)

紹定四年(1231)該皇太后慶壽恩封太孺。(70 歲、76 歲卒)

(何氏・太孺人＝從七品、夫・縣尉＝從九品)

69 袁甫『蒙齋集』卷十八 林府君周夫人墓誌銘(82 歲)

夫人晚歲益康強兩該恩霈封太安人。(周氏・太安人＝從六品、子・宣教郎＝從八品)

71 袁甫『蒙齋集』卷十八 太孺人卞氏墓誌(92 歲)

紹定辛卯(4 年 1231)該慶壽恩封太孺人(88 歲、92 歲卒)。

(卞氏・太孺人＝從七品、子・承務郎＝從九品)

60 劉克莊『後村集』卷一百六十 忠訓陳君宜人李氏墓誌(69 歲)

澈(長男)以戰功通顯秩(高い位)至正使贈右迪功郎。李氏初封孺人。繼宜人。

(李氏・宜人＝從六品、子・迪功郎＝從九品)

61 劉克莊『後村集』卷一百六十一 程孺人墓誌銘(67 歳)

卒六十七、以子貴恩封孺人。(程氏・孺人＝正八品、子・宣教郎＝従八品)。

75 方逢辰『蛟峯文集』卷七 恭人邵氏墓誌銘(34 歳)

淳祐辛丑(元年 1241)歸(18 歳)。於我寶祐甲寅(2 年 1254)以夫有位。於朝封孺人(31 歳)。

越二年丙辰(寶祐 4 年 1256)八月有三日以疾卒。明年丁巳(寶祐 5 年 1257)贈安人(歿後 1 年)。咸淳丙寅(2 年 1266)贈宜人(歿後 10 年)。又三年己巳(咸淳 5 年 1269)贈恭人(歿後 14 年)。(邵氏・恭人＝従五品、夫・尚書吏部侍郎＝従三品)

南宋 3 期も子の功績によって位階を授与されている。卒年は 30 代 1 人を除いて、60 代 2 人、70 代 4 人、80 代 2 人、90 代 4 人と長寿である。しかし 75. 恭人邵氏墓誌銘は 34 歳で歿しているにもかかわらず、没後も位階を授与されている。邵氏は 18 歳で嫁ぎ、31 歳のとき夫の功績によって孺人(正八品)を授与されている。この 2 年後に 34 歳で亡くなった。このとき夫は 36 歳であった。その後、夫は尚書吏部侍郎(従三品)まで上り詰め 71 歳で歿している。その間、夫の功績によって、邵氏は歿後 1 年で安人(正七品)を、歿後 10 年で宜人(従六品)を、歿後 14 年で恭人(従五品)を授与されている。

49. 亡妣安康郡太夫人行狀の汪氏は、撰者・樓鑰の母である。19 歳で樓鑰の父・樓璩に嫁ぎ 95 歳で歿するまでの 74 年間に 10 回に及んで位階を授与される。最初は夫の功績によって 36 歳で孺人(正八品)、次いで 43 歳で安人(正七品)、48 歳で宜人(従六品)、57 歳で恭人(従五品)となり、以後は息子の樓鑰によって 75 歳で太令人(従四品)、76 歳で太碩人(従三品)、84 歳で太淑人(従三品)、89 歳で信安郡太夫人(正二品)、90 歳で大寧郡太夫人(正二品)、93 歳で安康郡太夫人(正二品)と、孺人から郡太夫人まで叙贈されている。位階授与のきっかけは、郊祀・慶霈・慶壽・壽聖・行慶・郊禮・大饗・明禋など王朝の祭祀を契機としている。

墓誌銘の執筆依頼は被葬者ではなく、残された夫・子供との関わりによって記される。北宋の女性墓誌銘は、父につながる祖先の官職及び政治的・社会的地位が列記されているが、南宋の墓誌銘は父につながる祖先よりも子や孫の官職や業績の記載が多い。南宋の女性は子供や孫が出世することによって、墓誌銘が記される故、長寿でないと墓誌銘には載りにくい。墓誌銘に載る女性の位階を分析した結果、得られた位階の高低分布の偏差は、被葬者の属する家族の階層を示すものと見てよい。女性の位階の殆どは、夫や子供の官職によっての叙贈である。次項では女性墓誌銘にみえる位階と、宋代叙封制度を照合してみよう。

## (二) 宋代叙封制度

墓誌銘に見える宋代女性の位階を理解するため、宋代叙封制度について『宋史』および『宋會要輯稿』から、所轄官庁をはじめ、位階叙贈の資格や機会、夫や子の官職との関連性などを列記した。

『宋史』卷一百六十三 志第一百一十六 職官三

1. 叙贈の所轄官庁は、尚書省、吏部、司封郎中・員外郎で掌る。(注 1)

司封郎中・員外郎は官封・叙贈・承襲の事を掌る。

2. 位階名は、内親王・命婦(女官)の位階の郡主以下のもの。

外内命婦の號は十四。

大長公主(天子の姑)、長公主(天子の姉妹)、公主(天子の娘)、郡主(太子の娘)、縣主(皇族の子女)、國夫人、郡夫人、淑人、碩人、令人、恭人、宜人、安人、孺人。

3. 位階の叙贈は、家族その他の申請により授与される。

元祐二年、詔すらく、「父及び嫡母存すれば、所生母の封贈を請うを得ず、所生の母未だ封ぜざれば、亦た先に其の妻に及ぶに許さず。」(注 2)

『宋會要輯稿』儀制 10-33

紹興十九年六月二十七日、詔すらく、「太師尚書左僕射秦檜の孫女孺人秦氏、令人の封を與える。」(注 3)

④本人の長寿

・官人の尊属の場合、官人が申請。

『宋會要輯稿』儀制 10-26

神宗熙寧二年二月、詔すらく、「知衛州太常少卿田沼鄰の母彭城縣君劉氏、年一百一歳を以て、特に仁壽郡太君を封ず。」(注 4)

・庶人の場合、州縣官衙が申請。

『宋會要輯稿』儀制 10-29

宣和三年十一月九日、南劍州奏沙縣百姓朱吟の妻李氏、見に年一百四歳、依って敕令として封号を合該す。詔すらく、「特に孺人を封す。」(注 5)

『宋會要輯稿』儀制 10-32

紹興十九年九月十日、明堂赦あり。應ずるは宣教郎以下、承務郎使臣選人に至り、父母の年九十以上、自ら所属を陳ずるを許す、俱もに奏を聞き保明し、當に議を特にして官封を與えるべし。士および庶の百歳以上の婦人に封號を與える。(注 6)

『宋會要輯稿』儀制 10-29

宣和四年五月十四日、詔すらく、「故孟京傑妻王氏、特に孺人に封ず。開封府尹王革の奏を以てするに、王氏年二十二にして夫を喪い、男方に四歳なる有り、志を守り嫁がず、父母其の年の幼にして依る所無きを以て、屢しば再適せしめんとし、王氏髪を剪り自ら誓いて以て明らかにし、終身窮處に深居し二十餘年、鄰里其の面を識らず。義節卓然たり。」故に是の詔有り。(注 7)

⑥本人の王朝国家に対する功勞

- ・王朝に対する医療活動に対する功勞。

『宋會要輯稿』儀制 10-34

紹興二十二年十月七日、詔すらく、「臨安府助教田潤の妻李氏、醫治に勞有り、特に孺人の封を與える。」(注 8)

『宋會要輯稿』儀制 10-31a

紹興四年六月二十一日、廣南西路提點刑獄司言う、「歸明官承信郎田承寬の妻王氏、家丁・佃客を遣わし、自備せる糧餉をもって官軍を助け、賊を計るに功有り。封叙するを與さんことを乞う。」詔すらく特に宜人に封ず。」(注 9)

5. 叙封されたる者には(官僚と同じく)「誥(身)」が交付される。

『宋會要輯稿』儀制 10-31a

紹興五年二月十七日、劉光世請う、「賜る所の孺人の誥を以て、男の堯佐等の所生母に與んことを。」吏部以て非法と爲す。詔すらく、「特に之を許す。」(注 10)

6. 叙贈の機會

- ①国家行事：皇帝即位、封禪、南郊、明堂、東封恩例、祀汾陰、籍田恩例。

明堂赦の場合、庶人は百歳以上、官僚は 90 歳以上。

『宋會要輯稿』儀制 10-32

紹興十九年九月十日、明堂赦あり。應ずるは宣教郎以下、承務郎使臣選人に至り、父母の年九十以上、自ら所属を陳ずるを許す、俱もに奏を聞き保明し、當に議を特にして官封を與えるべし。士および庶の百歳以上の婦人に封號を與える。(注 11)

『宋會要輯稿』儀制 10-14 陳制封贈

大中祥符二年二月二十九日、太常博士陳從易、以東封恩例、當封母妻、請廻封祖母詹氏、詔封河間縣太君。(注 12)

②夫・子の昇進

『宋會要輯稿』儀制 10-6~9 臣僚恩慶封贈

景祐三年三月十一日、詔すらく、「吏部侍郎知樞密院王隨をすなわち參知政事の任とする。今の知樞密院を除く。曾祖母・祖母・母に國太夫人を追封する。」(注 13)

7. 回授・回封

叙封の權利を他の親族に適用すること。本来は法令違反だが許される場合がある。

『宋會要輯稿』儀制 10-31b

紹興五年二月二十一日、太常博士陳確言う、「確、襁褓に在りしとき、兄已に壯にして室有り、確を養い子と爲す。怒二十一歳に至り、始めて有司の改正を経て、今兄亡し嫂年七十を逾え、確に待すに情は己の子と同じ。乞うらくは、去年の大禮恩霈を用いて、妻合に封叙するを得べきも、回授して嫂の楊氏に與え、其の平生撫養の恩に酬いんことを。」之に従う。(注 14)

『宋會要輯稿』儀制 10－36b

「隆興二年八月十六日。故武翼郎致仕劉漸の妻孺人王氏、亡夫致仕し、合に恩澤を得べきも、別に子孫無く、止だ一女の承節郎郝彦輝に嫁する有り。乞うらくは、條制の如く邑號を改授せんことを。之に従う。」（注 15）

『宋會要輯稿』職官九（政和二年十二月）

職官（夫・子）	品階	叙贈される女性（曾祖母・祖母・母・妻）
宰相	正一品	曾祖母・祖母・母＝國太夫人（正一品）、妻＝國夫人（正一品）
樞密院使	從一品	曾祖母・祖母・母＝郡太夫人（正二品）、妻＝郡夫人（正二品）
樞密院副使	正二品	同
參知政事	正二品	同
節度使	從二品	同
尚書以上	從二品	淑人（正三品）
侍郎以上	從三品	碩人（從三品）
給事中	正四品	母＝郡太君（正四品）、妻＝郡君（正四品）
諫議大夫	從四品	同
中書舍人	正四品	同
太中大夫以上	從四品	令人（從四品）
中散大夫以上	從五品	恭人（從五品）
朝奉大夫以上	從六品	宜人（從六品）
朝奉郎以上	正七品	安人（正七品）
通直郎以上	正八品	孺人（正八品）
執政官以上		夫人

### （三）墓誌銘にみえる宋代叙封制度

本稿では墓誌銘にみえる位階を、『宋史』職官と『宋會要輯稿』儀制に示されている位階授与の資格と機会とを照合し、宋代の叙封制度に沿っている墓誌銘をあげる。

（以下の番号は別表「宋代女性墓誌銘」の整理番号を示す。）

<位階叙贈の資格>

・皇后等の外戚

0450 范祖禹『范太史集』卷四十九 贈曹洲觀察使妻安康縣君王氏墓誌銘

母永嘉郡太君李氏章懿皇后之姪也。

0345 范祖禹『范太史集』卷五十一 右監門衛大將軍嘉州刺史妻永壽縣君向氏墓誌銘

向氏皇太后之姪女也。

0399 范祖禹『范太史集』卷五十二 右千牛衛將軍妻崇仁縣君高氏墓誌銘

君宣仁聖烈太皇太后之姪也。

0192 張方平『樂全集』卷三十八 右監門衛大將軍仲炎夫人秀勃縣君李氏墓誌銘  
皇后之姪也。

0187 張方平『樂全集』卷三十八 宗室右武衛大將軍黃州刺史令稼夫人壽昌縣君李氏墓誌銘  
今皇太后為外族。享年十有九、六月巳酉殯於普濟佛舍、八月從英宗皇帝靈駕。

・命婦

0160 張方平『樂全集』卷三十八 贈賢妃俞氏墓誌銘(仁宗皇帝昭儀)  
妃以載誕承恩、始封延安郡君、進拜美人・婕妤・充儀・昭儀贈。治平元年六月薨、  
享年四十有四、上惟先帝諸嬪之舊悼賻有加榮贈賢妃、用優典也

・公主(内親王)

0405 范祖禹『范太史集』卷五十一 蔡國長公主墓誌銘(趙氏)  
神宗皇帝之第九女、母曰武美人、生于元豐八年正月庚戌、上即位為皇妹封嘉國。薨于  
元祐五年正月壬辰、生六歲矣。

0302 范祖禹『范太史集』卷五十三 鄧國長公主追封記(趙氏)  
元豐 5～8 年(1082～1085) 四歲卒 父・神宗、母・朱氏(皇太妃)

0193 張方平『樂全集』卷三十八 秦國大長公主墓誌銘(趙氏)  
嘉祐 4 年～治平 4 年(1059～1067) 八歲卒 父・仁宗皇帝第九女、母・董氏(淑妃)

0063 張方平『樂全集』卷三十八 皇第八女追封韓國公主石記文(趙氏)  
慶曆中 死亡年齡不明 父・仁宗皇帝

0049 張方平『樂全集』卷三十八 故邳國公主石記文(趙氏)  
慶曆 2～3 年(1042～43) 二歲卒 父・仁宗皇帝、母・馮氏(御侍)

・本人の長寿

0568 晃説之『嵩山集』卷二十 崇德縣太君王氏墓誌銘  
壽考。康定初(1040)以子封、廣德縣太君。改封崇德縣太君。(84 歲卒)

0895 樓鑰『攻媿集』卷八十五 亡妣安康郡太夫人行狀  
紹熙五年(1194)壽聖、皇太后慶壽恩封太淑人。(95 歲卒)

0959 度正『性善堂稿』卷十四 張孺人墓誌銘  
歲在甲寅(紹熙 5 年・1194)天子推慶壽恩特封孺人。(89 歲卒)

0845 韓元吉『南澗甲乙稿』卷二十二 太恭人李氏墓誌銘  
二子皆舉進士。預薦送則喜曰其將有傳耶。以慶壽恩封太恭人。(74 歲卒)

0834 楊萬里『誠齋集』卷一百二十九 太令人方氏墓誌銘  
遇今天子正位儲官以子登朝三遇慶壽恩霈自孺人。累封太令人。(77 歳卒)

0869 周必大『周益國文忠公集』卷七十六 太宜人李氏墓誌銘  
朝廷連講慶壽禮一賜冠帔三封至太宜人。(85 歳卒)

1012 陳元晉『漁墅類稿』卷六 文溪先生致仕大夫陳公夫人黃氏墓碣  
先君中該大禮登極慶壽恩封贈至朝請郎。先妣安人。(76 歳卒)

1004 袁甫『蒙齋集』卷十七 甘氏夫人墓誌銘  
享年九十有二以慈明太后慶壽恩封太孺人。(92 歳卒)

1013 袁甫『蒙齋集』卷十八 縣尉楊君太孺人何氏墓誌銘  
紹定四年(1231)該皇太后慶壽恩封太孺人。(76 歳)

1014 袁甫『蒙齋集』卷十八 林府君周夫人墓誌銘  
夫人晚歳益康強兩該恩霈封太安人。(82 歳卒)

1008 袁甫『蒙齋集』卷十八 太孺人卞氏墓誌  
紹定辛卯(4 年 1231)該慶壽恩封太孺人。(92 歳卒)。

#### < 叙贈の機会 >

- ・国家行事：皇帝即位、封禪、南郊、明堂、東封恩例、祀汾陰、籍田恩例。(注 16)
- 国家行事によって位階を授与された墓誌銘を北宋、南宋別にあげる。

#### 北宋

0191 劉攽『彭城集』卷三十九 樂安郡君范氏墓誌銘  
枢密公始升朝、夫人封壽光縣君、及為翰林學士擬封高平郡君、南郊推恩進封樂安郡君。

0232 楊傑『無爲集』卷十四 仙源縣君陳氏墓誌銘  
熙寧 7 年(1074)明甫(夫)為太子中允直集賢院兼崇政殿說書管句國子監、遇郊祀追封夫人為仙源縣君(歿後 1 年)。

#### 南宋

0748 樓鑰『攻媿集』卷一百 盛夫人墓誌銘  
淳熙乙未(1175)秋七月二十八日卒。享年六十有三。明年(1176)以郊霈贈孺人。

0763 周必大『文忠集』卷三十六 王給事母安人徐氏墓誌銘  
從其子官於朝者五年、初以乾道九年(1173)冬祀恩封太孺人。至是盖進封太安人。子・給事中他。

- 0713 呂祖謙『東萊集』卷十 湯教授母潘夫人墓誌銘  
紹興二十九年(1159)正月朔旦天子稱觴慈寧宮勞問高年、以差受寵有秩者父若母慶賜有加孺人。
- 0754 張栻『南軒集』卷四十一 張氏墓表  
淳熙二年(1175)天子奉觴前殿推恩海內、夫人以擢(次男・從政郎)故得封太孺人。
- 0627 胡寅『斐然集』卷二十六 亡室張氏墓誌銘  
君受紹興四年(1134)明堂恩封宜人。
- 0891 周必大『文忠集』卷七十六 益國夫人墓誌銘(王氏)  
紹興末(1162)郊恩孺人、覃恩進安人。
- 0827 楊萬里『誠齋集』卷一百二十八 太宜人蕭氏墓誌銘  
新天子(淳熙 16 年 1189、孝宗→光宗)三封太宜人。
- 0867 楊萬里『誠齋集』卷一百三十一 太孺人劉氏墓誌銘  
淳熙 11 年(1184)壽聖皇太后壽邳降天子率百官奉卮上千萬歲壽上自公卿大夫下逮士之嘗與計偕者。其父母皆行封有差於是錢(長男)之母、賜紫詰象軸封太孺人。
- 0853 韓元吉『南澗甲乙稿』卷二十二 安人盧氏墓誌銘  
夫人以攷功遇郊恩封安人。
- 0808 韓元吉『南澗甲乙稿』卷二十二 太宜人毛氏墓誌銘  
夫人以長子陞朝列封太安人。壽聖慶典封太宜人。
- 0895 樓鑰『攻媿集』卷八十五 亡妣安康郡太夫人行狀(汪氏、撰者樓鑰之母)  
淳熙十三年(1186)高宗慶霈封太碩人(從三品)76 歲。  
紹熙五年(1194)壽聖皇太后慶壽恩封太淑人(從三品)84 歲。  
慶元五年(1199)光宗聖體清安天子行慶于下封信安郡太夫人(正二品)89 歲。  
慶元六年(1200)明堂恩進封大寧郡太夫人(正二品)90 歲。  
嘉泰三年(1203)郊禮進封安康郡太夫人(正二品)93 歲。
- 0777 呂祖謙『東萊集』卷十三 鄱陽王安母程氏墓誌銘  
淳熙三年(1176)、天子稱觴德壽宮。賜高年者爵孺人實始封。
- 0954 程秘『洛水集』卷十 王宗卿母夫人袁氏墓誌銘  
嘉定辛巳(14 年 1221)之歲、皇帝受元符玉璽。宗卿(三男)遣其弟夢錫(四男)、持表來賀朝廷官之初品拜命。夫人曰異恩也。

- 0944 黄榷『勉齋集』卷三十七 太安人林氏行状  
嘉定乙亥(8年1215)明禋)安人(70歳)。以子官封太安人。
- 0815 陳亮『龍川集』卷三十 姚漢英母夫人墓誌銘  
怡(子)入太學遇高宗皇帝慶壽覃恩得封孺人。
- 0922 袁燮『絜齋集』卷二十一 安人趙氏壙誌  
開禧二年(1206)大饗覃霈封孺人。嘉定五年(1212)郊恩封安人。
- 1012 陳元晉『漁墅類稿』卷六 文溪先生致仕大夫陳公夫人黃氏墓碣  
先君中該大禮登極慶壽恩封贈至朝請郎。先妣安人。
- 1033 劉克莊『後村集』卷一百五十三 方安人墓誌銘  
庚寅(紹定3年・1230)禋霈封孺人。辛卯(紹定4年・1231)慶典進安人。
- 0996 李遇孫『栝蒼金石志』卷七 齊國夫人潘氏納壙誌  
乾道3年(1167)先公(夫)郊霈初封孺人。

<回授・回封>

- 0178 秦觀『淮海集』卷三十三 徐氏夫人墓誌銘  
承制君元配劉氏無子早卒。既升朝故事得封妻為縣君。夫人請先劉氏承制君義而從之故。夫人未及封、而卒後二年(治平5年)以恩始追贈壽昌縣君。

「皇后等の外戚、命婦本人、公主(内親王)」

墓誌銘には、皇后等の外戚5人、命婦1人、公主(内親王)5人がみえるが、この11人は北宋の墓誌銘にみられ、南宋の墓誌銘にはみられない。北宋の墓誌銘にみられる宗室女性の存在は、神宗皇帝の給事中であつた范祖禹が『范太史集』に113人、張方平が『樂全集』に17人と両者で130人の宗室女性を記載したことによる。宗室女性は歿すると、自動的に墓誌銘が記されるため、先引の公主5人(58頁)は2歳～8歳の幼女であるが、墓誌銘が記されている。

「官僚の尊属(曾祖父母・祖父母・父母)と妻の位階は、官人の昇進に従い加贈される。」

墓誌銘が残る女性は士大夫層の女性である故、墓誌銘にのる既婚女性の殆どは、夫や子の昇進に伴って位階が授与、追封されると考えられるが、夫・子の品階が従五品以下になると、妻・母の位階との相関関係が分かりにくい。ただし正一品～正五品までは、妻・母の位階と比例している。詳細については後日の課題としたい。

「官僚の卑属(女・孫女)は特例。」

0483 晁補之『雞肋集』卷六十四 安康郡君龐氏墓誌銘

夫人宜之始封南安縣君。郡君皆穎公(父・龐籍、丞相・正一品)恩也。

「本人の長寿」

本人の長寿によって位階が授与された女性は 11 人。うち北宋 1、南宋 10 人である。南宋の 10 人の死亡年齢は、70 歳代 4 人、80 歳代 3 人、90 歳代 3 人、この 10 人の平均死亡年齢は 84 歳(83.8)である。南宋に長寿者が多いことは、南宋期になって女性の寿命が延びたのではなく、子の任官や昇進によって位階が授与され、墓誌銘も残されと考えられる。

第一章の「死亡年齢」からも、墓誌銘にみえる女性の平均死亡年齢は、北宋 53 歳に対し南宋は 64 歳と 11 歳の開きがみえる。両宋の 60 歳以上で死亡した女性を長寿者とみなし、下記の表 3「両宋の長寿者数」にまとめた。

表 3「両宋の長寿者数」

死亡年代	60 代	70 代	80 代	90 代	100 歳～	計	総人数(%)
北宋	84	102	43	3	0	232	604(38.4%)
南宋	82	113	61	12	1	269	471(57.1%)

表 3 によると、北宋は 604 人中 60 歳以上の長寿の女性は 232 人(38.4%)、南宋は 471 人中 269 人(57.1%)と、南宋は長寿の女性が半数以上を占めている。この現象は、北宋の女性の夫は官職に在り、南宋の女性は子が官職に在ると言える。墓誌銘に記されている系譜をみても、北宋は曾祖父・祖父・父に繋がる祖先から、南宋は祖先ではなく夫・子から記されている。系譜については、北宋は過去、南宋は現在からはじまるため、南宋の女性は早世した場合、子が若年のため墓誌銘を記してもらえないのではなかろうか。

「本人の貞節」

墓誌銘にみえる貞節を守った女性は、北宋 60 人、南宋 41 人、併せて 101 人の女性が守節を通して、位階を叙贈されている女性は皆無である。墓誌銘に載る女性は、官僚の妻・母であるため、守節の女性は、北宋 60 人中、國太夫人 2 人・國夫人 1 人・郡夫人 2 人・碩人 1 人・郡太君 2 人・縣君 16 人・縣太君 9 人の 33 人、南宋 41 人中、郡夫人 1 人・太淑人 1 人・太宜人 1 人・宜人 1 人・太孺人 2 人・孺人 3 人の 9 人、両宋では 42 人が位階を授与されている。

無位階の女性 59 人は「位階叙贈の資格」を有していたにもかかわらず無位階である。

先引の 55 頁『宋會要輯稿』儀制 10—29 に記されている王氏は、22 歳にして夫を喪い、4 歳の男児を抱えて、節を守り嫁さず。父母は再嫁をすすめたが、王氏は髪を剪って自らの意思を表明し志を貫いた。開封府の長官である王革が「義節卓然たり」と上奏したことにより、孺人の位階が授与された。無位階の女性 59 人も、長官の上奏があれば有位階者になれたと考えられる。

「本人の王朝国家に対する功労」

墓誌銘には該当する女性として呉氏が存在する。

0456 王令『廣陵集』附録 節婦夫人呉氏墓碣銘(姪朝請大夫擢發遣簡州軍州事王雲撰)

夫人呉氏、撫州臨川の人、廣陵先生元城の王公の妻。先生諱は令、字は畏原。道德文章一世に名あり、年二十八にして卒す。夫人始めて生まるるの孤を抱き、母兄に往歸す。喪除け適ぐ所を議す。雪涕して自ら誓い、別墅に屏居し、僅かに風雨を蔽い、惡衣糲食、人の能く堪えざる所なり。三十有五年、以て厥の身を終わり、凜然として古の節婦たり、天下之を稱う。家するに始て唐に來り、唐曠土多し。熙寧中、詔して、民を募り蓄墾して廢陂を治め、召信臣・杜詩の迹を復さんとするも、衆其の役の大なるを憚り、方略に燕く、睨して敢て舉ぐるもの無し。夫人因りて其の兄の占する田の陂旁にあるを見て、慨然として衆に謂いて曰く、「我徒に自ら謀るに非ず。陂興るは一州の利なり。當に是の如く作せば是の如く成るべし。」と。乃ち汚萊を闢き、均しく灌漑し、身ら其の勞に任じ、環堤を築き以て水を瀦め、徒門を疎し以て水を洩し、壤膏腴と化し、民は秔稻に飫き、而して其の家貲も亦た鉅萬を累ぬ。夫人一毫も私せず、服用の儉なること、猶お昔のごとし。方に且お汲汲として窮乏するものを賑わし、疾喪を周し貸して償う能わざれば、則ち為に券を焚き、德聲日びに聞え、遠邇信服し、訟は官に詣らず、一言に決す。之を久うし、四境復た凶歳無し。民深く夫人の恵を德とし、相い與に州に言を列ぬ。宋朝に聞し、優く米帛を賜う。而して郷人衿して以て榮と為す……疾を得て卒す。年五十九、實に元祐八年（1093）十二月二十七日なり。（注17）。

江寧府司法參軍王令夫人呉氏は夫との死後、唐州泌陽縣で実家の母兄につかえ、わすれがたみを養育した。折しも高賦が知唐州に就任し廢陂の修復を呼びかけたが、応じる者がいなかった。呉氏が郷民に、陂旁にある兄の田の肥沃なるを示して、陂興修の利を説いたため、当初負担の過大なるをおそれて工事への参加を躊躇していた郷民も皆な呉氏の意見に従い、遂に近隣は膏腴の地となり、秔稻を飽食できるようになると呉氏に感謝し、州に旌表を願い出て認められ、元祐7年(1092)朝廷は呉氏に絹十匹、米二十石を賜った。呉氏は翌年元祐八年(1093)十二月二十七日に疾を得て卒す。年五十九。

呉氏は、宋朝から旌表され絹と米を賜ってはいるが、位階は授与されていない。『宋史』の列女伝にも記載されていない。

その理由として考えられることは、夫の王令は王安石と同郷の親友であり、王安石はその早すぎた死(嘉祐4年、享年二十八)を悼んで墓誌銘を記している(王安石『臨川集』卷九十七、王逢原墓誌銘)。呉氏も同郷で王氏と通婚しており、呉氏は王安石の妻の従妹にあたる。王安石が新法を実施したのが熙寧2年(1069)。高賦が知唐州に就任し廢陂の修復を呼びかけたときが熙寧中である。王安石の新法と時を同じくして行われた。王安石が旧法党に敗れ、失脚して亡くなったのが元祐元年(1086)、呉氏が亡くなったのは元祐八年(1093)である。呉氏は王安石と極めて親しい立場にあった故に、王安石の失脚により位階の授与もなく、『宋史』にも記載されなかったのではと推測する。

#### 「叙贈の機会」

国家行事に関する叙贈は、皇帝即位、封禪、南郊、明堂、東封恩例、祀汾陰、籍田恩例の他、王朝の祝事など墓誌銘にみえる行事も付け加えた。結果、北宋 2 例に対し、南宋 19 例と南宋の墓誌銘には王朝の祝事が多くみられる。南宋に国家行事が多くみられる理由については、後の課題としたい。

#### 「夫・子の昇進」

北宋の墓誌銘では夫の功績によって、妻に位階が授与されているが、南宋になると子の功績によって母として位階を授与されている。

墓誌銘に載る女性の位階の高低分布の偏差は、被葬者の属する家族の階層を示すものと見てよい。次項では撰者の官職と品階をみてみよう。

### (四)撰者の官職と品階

墓誌銘を記した撰者の数は、北宋 102 人、南宋 104 人、両宋で 206 人である。撰者 206 人を別表 6 「撰者の官職と品階」にまとめ、この別表 6 をもとに下記の表 4 「撰者の品階と人数」と次頁の表 5 「撰者の品階と人数」を作成した。

表 4 撰者の品階と人数

品階	北宋	南宋	品階	北宋	南宋		北宋	南宋
正一品	7	3	従五品	2	0	無階	25	30
従一品	2	0	正六品	2	1	合計	102	104
正二品	5	8	従六品	7	5			
従二品	6	3	正七品	2	0			
正三品	12	16	従七品	3	3			
従三品	10	8	正八品	4	5			
正四品	5	5	従八品	6	7			
従四品	2	9	正九品	0	0			
正五品	1	0	従九品	1	1			
小計	50	52	小計	27	22			

表 4 では撰者 206 人のうち品階を有する人は、北宋 102 人中 77 人(75.4%)、南宋 104 人中 74 人(71.1%)、両宋 206 人中 151 人(73.3%)と、7 割以上の撰者が品階を有している。

正一品から正五品までの常参官は、北宋 50 人、南宋 52 人、従五品から従九品までは、北宋 27 人、南宋 22 人とほぼ同数である。しかし正一品から従二品までの高い官職に就いている撰者は、北宋 20 人に対し南宋は 14 人である。

表5 宗室墓誌銘を記した文集と撰者

文莊集	夏竦(985～1051)	宰相	正一
王華陽	王珪(1019～1085)	門下侍郎	從三
王魏公	王安禮(1035～1095)	翰林学士	正三
司馬集	司馬光(1019～1081)	宰相	正一
長興集	沈括(1029～1093)	翰林学士	正三
忠肅集	劉摯(1030～1097)	尚書右僕射	從一
范太史	范祖禹(1041～1098)	給事中	正四
景文集	宋祁(991～1061)	翰林学士	正三
摘文堂	慕容彦逢(1067～1117)	刑部尚書	從二
邱溪集	鄭獬(1022～1072)	翰林学士	正三
樂全集	張方平(1007～1091)	参知政事	正二
歐陽集	歐陽脩(1007～1072)	参知政事	正二
蔡忠惠	蔡襄(1012～1067)	端明殿学士	正三
臨川集	王安石(1021～1081)	宰相	正一
公是集	劉敞(1019～1068)	集賢院学士	從三
騎省集	徐鉉(917～992)	尚書右僕射	從一

表5は宗室墓誌銘を記した撰者である。官職と品階は宰相・正一品が3人、尚書右僕射・從一品が2人、参知政事・正二品が2人、六部尚書・從二品が1人、翰林学士など・正三品が5人と高官が殆どである。宗室墓誌銘は北宋のみにみられ、皇帝の妃である賢妃、皇帝の側室である順容、太祖皇帝の曾孫と太宗皇帝の外孫である郡主の墓誌銘もみえる。

賢妃、順容、郡主の墓誌銘を記した撰者は、張方平(参知政事)、夏竦(宰相)、鄭獬(翰林学士)、蔡襄(端明殿学士)の4人。4人の撰者が記した墓誌銘をあげてみよう。

(以下の番号は別表「宋代女性墓誌銘」の整理番号を示す)

#### 0160 張方平撰『樂全集』卷三十八 贈賢妃俞氏墓誌銘

贈賢妃俞氏仁宗皇帝昭儀也。吳越著姓世仕藩朝。曾祖承遜女爲錢忠懿王淑、夫人從淑歸國終於睦州刺史、祖仁祐東頭供奉官閤門祇候、父振左侍禁、妣陳氏贈東海郡王洪進之孫女。…館就三年始皇子生。太子今封周王越。二年生皇第二女號崇慶公主、四歲亦薨、追封楚越國、今贈唐國長公主。妃以載誕承恩始封延安郡君、進擇美人、婕妤、充儀、昭儀。…治平元年(1064)六月薨。享年四十有四。加榮贈賢妃用優典也。

#### 0010 夏竦撰『文莊集』卷二十九 故順容邵氏墓誌銘

大中祥符9年(1016)春二月甲午、順容邵氏薨。于京師太和宮本院之正寢。越三月壬子葬。于開封縣清遠鄉繁臺村奉先資福禪院之東北原。嗚呼哀哉順容諱昭明廣陵人也。順容とは皇帝の側室の名号。邵氏の死亡年月日はわかるが死亡年齢は不明。墓誌銘には皇帝の名はないが、邵氏が亡くなった大中祥符9年(1016)は皇帝眞宗(968～1022、在位期間997～1022)の時代であり、邵氏は眞宗皇帝の側室と推測できる。

0199 鄭獬『郕溪集』卷二十一 郡主趙氏墓誌銘(太祖皇帝之曾孫)

萬年郡主趙氏太祖皇帝之曾孫、永興軍節度使越懿王諱德昭之孫。威德軍節度使冀康孝王諱惟吉之子。妣為譙國夫人杜氏初封福安縣主。年十八嫁今濰州防禦使向侯傳範。後四十二年以疾終于京師敦義坊之私第。享年六十。

0080 蔡襄『蔡忠惠公集(端明集)』卷三十九 延安郡主李氏墓誌銘(太宗皇帝之外孫)

延安郡主李氏太宗皇帝之外孫。眞宗皇帝之甥齊國獻穆大長公主之女也。父爲鎮國軍節度使駙馬都尉贈太師中書令尚書令許國公諡和文諱遵最、大父運州刺史贈太師諱繼昌、曾大父樞密使鎮國軍節度使贈太師中書令尚書令隴西郡王諡元靖諱崇矩。家世勲業列在國史。大中祥符三年(1010)十一月主生、於永寧第彌月獻穆公主見主於帝所帝曰「女吾之所出也。」…天聖五年(1025)封長壽縣主、以歸今閭門使忠州防禦使錢君。…皇祐 4 年(1052)正月四日終春秋四十有三。…其年四月十日葬華南府洛陽縣邙山之原。

撰者と墓誌銘執筆依頼者との関わりについて、岡元司氏は南宋の葉適が執筆した墓誌銘をあげて次のように記している。「葉適が執筆した対象者 153 名のうち、約四分の三は、進士合格者及び恩陰・進納などによる任官者を含めた官員である。さらに子の官職保有に関連して贈官(死後)をされた者や、血縁に官員のいる者を併せると 140 人に達する。全体の九割以上が官員ないしその血縁者であることがわかる。墓誌銘執筆依頼が亡くなった本人よりも、官員となっている子どもなどと葉適との関係によって書かれたことを考えると、圧倒的多数が葉適と何らかの人間関係をもっていたと捉えることができる(注 18)」とある。

葉適の『水心文集』には、女性被葬者 25 人の墓誌銘が記載されている。そのなかに陳傅良から妻の張氏の墓誌銘執筆を依頼され「張令人墓誌銘」を記している(頁 40「陳傅良と葉適との学派関係」参照)。葉適と陳傅良は、永嘉學派(注 19)を通じての交友関係で結ばれている。

撰者と墓誌銘執筆依頼者との関わりについては、北宋においても友人などにも依頼している。一例をあげると歐陽脩が友人の梅堯臣の妻である謝氏のために記した「南陽縣君謝氏墓誌銘」、蘇軾・蘇轍が司馬光に母の墓誌銘を依頼した「武陽縣君程氏墓誌銘」、陳確が同年の進士である友人の沈遘に母の墓誌銘を依頼した「方夫人墓誌銘」などがみられる。

(本稿「第八章 近親者が記した墓誌銘」参照)。

## おわりに

女性墓誌銘に載る本人の位階、家族の官職と品階(祖父・父・夫・子供・娘婿)、被葬者の墓誌銘を記した選者の官職と品階を集計した結果、北宋の女性被葬者の家族は、南宋の女性被葬者の家族よりも高い官職に在り、それに合わせるように、被葬者である北宋の女性は、南宋の女性よりも位階は高い。ただし、高齢女性につけられる敬称は南宋に多く見られる。墓誌銘の執筆は残された子供または孫などの依頼によって記されるので、長寿の女性の墓誌銘の表題には、母・姑・媼・考妣・族嫂・伯姉などが付いている。

撰者の官職をみても、従一品以上の高い官職に就いている撰者は、北宋 10 人に対し南

宋は3人である。従三品以上は、北宋47人、南宋39人と北宋が多くを占る。北宋のみに見られる宗室墓誌銘は、正四品以上の選者16人が記し、宰相・尚書右僕射・参知政事・翰林学士などの官職に就いている(65頁 表5「宗室墓誌銘を記した文集と撰者」参照)。

位階を有する女性を10年毎に区切った年代別集計結果からも同様のことがうかがえる。北宋期において10年毎に位階を有する女性の平均は11人であるが、1060年代は突出して57人であり、そのすべてが正五品以上の位階を有している。

1070年代になると、正五品以上を有する女性は20人と減少する。

1080年代は49人、1090年代は46人と多いのは、范祖禹『范太史集』に載る宗室女性墓誌銘の存在による。位階を有する宗室女性は1080年代20人、1090年代23人と合わせて43人。この43人の位階は正五品の縣君38人、正二品の郡夫人1人、正四品の郡君4人である。宗室女性を除くと1080年代は29人、1090年代は23人と約半数になる。

その後、正五品以上の有位階者は1100年代17人、1110年代11人、1120年代7人となり、南宋に至ると各年代ともに一桁数になる。

北宋期に父・夫・子が官職に就いている総数は1065人、うち正五品以上を有する父・夫・子は229人(21.5%)、南宋期に父・夫・子が官職に就いている総数は574人、うち正五品以上を有する父・夫・子は75人(13.0%)と少ない。この数字からも北宋の墓誌銘に載る女性の父・夫・子は高官が多いことがうかがえる。

## 注

- (1)『宋史』卷一百六十三 志第一百十六 職官三、司封郎中・員外郎 3836~3837P  
掌官封、敘贈、承襲之事。凡三師、三公以下至升朝官褒贈祖考、母妻，親王、郡王・  
內外命婦以下保任宗屬・封爵諸親、皆因其位敘而為之等。凡宗室當賜名訓、具抄擬官。  
凡庶姓孔氏・柴氏・折氏之後應承襲者、辨其嫡庶。列爵九等：曰王、曰郡王、曰國公、  
曰郡公、曰縣公、曰侯、曰伯、曰子、曰男。分國三等、大國二十七、次國二十、小國  
二百二十。內命婦之品五、曰貴妃・淑妃・德妃・賢妃、曰大儀・貴儀・淑儀・淑容・  
順儀・順容・婉儀・婉容・昭儀・昭容・昭媛・修儀・修容・修媛・充儀・充容・充媛、  
曰婕妤、曰美人、曰才人・貴人。外內命婦之號十有四、曰大長公主、曰長公主、曰公  
主、曰郡主、曰縣主、曰國夫人、曰郡夫人、曰淑人、曰碩人、曰令人、曰恭人、曰宜  
人、曰安人、曰孺人。
- (2)『宋史』卷一百六十三 志第一百十六 職官三、司封郎中・員外郎 3837P  
元祐二年、詔：「父及嫡母存、不得請所生母封贈。所生母未封、亦不許先及其妻。」
- (3)『宋會要輯稿』儀制 10—33 2020p  
紹興十九年六月二十七日、詔太師尚書左僕射秦檜孫女孺人秦氏、與封令人。
- (4)『宋會要輯稿』儀制 10—26 2017P  
神宗熙寧二年二月、詔以知衛州太常少卿田沼鄰母彭城縣君劉氏年一百一歲、特封仁壽  
郡太君。
- (5)『宋會要輯稿』儀制 1—29 2018P  
宣和三年十一月九日、南劍州奏沙縣百姓朱吟妻李氏、見年一百四歲、依敕令合該封号。  
詔特封孺人。
- (6)『宋會要輯稿』儀制 10—32 2020P  
紹興十九年九月十日、明堂赦。應宣教郎以下、至承務郎使臣選人、父母年九十以上、  
許於所屬自陳、俱保明聞奏、當議特與官封、士庶百歲以上婦人與封號。
- (7)『宋會要輯稿』儀制 10—29 2018~19P  
宣和四年五月十四日、詔故孟京傑妻王氏特封孺人、以開封府尹王革奏、王氏年二十二  
喪夫、有男方四歲、守志不嫁、父母以其年幼無所依屢俾再適、王氏至剪髮自誓以明終  
身、深居窮處二十餘年、鄰里不識其面、義節卓然、故有是詔。
- (8)『宋會要輯稿』儀制 10—34 2021p  
紹興二十二年十月七日、詔、臨安府助教田潤妻李氏醫治有勞、特與封孺人。
- (9)『宋會要輯稿』儀制 10之31 2019P  
紹興四年六月二十一日、廣南西路提點刑獄司言、歸明官故承信郎田承寬妻王氏、遣家  
丁・佃客自備糧餉助官軍、計賊有功。乞與封叙詔特封宜人。
- (10)『宋會要輯稿』儀制 10—31 2019P  
紹興五年二月十七日、劉光世請、以所賜孺人誥與男堯佐等所生母。吏部以為非法。詔  
特許之。
- (11)『宋會要輯稿』儀制 10—32 2020p  
紹興十年九月十日。明堂赦。應宣教郎以下、至承務郎使臣選人、父母年九十以上、許

於所屬自陳、俱保明聞奏、當議特與官封。士庶百歲以上婦人與封號。

(12)『宋會要輯稿』儀制 10—14 2021p

大中祥符二年二月二十九日、太常博士陳從易、以東封恩例、當封母妻、請迴封祖母詹氏、詔封河間縣太君。

(13)『宋會要輯稿』儀制 10—6～9 臣僚恩慶封贈

景祐三年三月十一日、詔、吏部侍郎知樞密院王隨爲曾任參知政事。今除知樞密院、曾祖母祖母再經追封特與國太夫人。

(14)『宋會要輯稿』儀制 10—31 2019P

紹興五年二月二十一日、太常博士陳確言、確在襁褓時、兄已壯有室、養確爲子、至二十一歲、始經有司改正、今兄亡嫂年逾七十、待確情同已子。乞用去年大禮恩需、妻合得封叙、回授與嫂楊氏、酬其平生撫養之恩。從之。

(15)『宋會要輯稿』儀制 10—36 2022p

隆興二年八月十六日。故武翼郎致仕劉漸妻孺人王氏、亡夫致仕、合得恩澤、別無子孫。

止有一女嫁承節郎郝彥輝。乞如條制改授邑號。從之。

(16)・封禪＝天子の行う祭り。封は土を積んで壇を造り天を祭ること。禪は地をはらって山川を祭ること。封祀、封礼、封壇。

・南郊＝天子が冬至に南郊で天を祀る祭り。北郊は天子が夏至に北郊で地を祀る祭り。

『宋史』卷九十九志第五十二禮二「南郊」 南郊壇制。梁及後唐郊壇皆在洛陽。宋初始作壇於東都南薰門外、四成、十二階、三壇。北郊。宋初、方丘在宮城之北十四里、以夏至祭皇地祇、別爲壇於北郊、以孟冬祭神州地祇。

・明堂＝王者の太廟で政務を行う堂。古代、上帝を祀り、先祖を祭り、諸侯を朝せしめ、老を養い、賢を尊ぶなど国家の大典禮に関することを行う。

・恩例＝吉事などのあった場合に、朝廷から例として賜るもの。

・汾陰＝縣名。武帝のとき、宝鼎を得たところ。

・籍田＝天子が祖先に供える米を自ら耕作する田地。天子が農事を励まし、上帝先王を祭るために親ら田を踏み耕す儀式。

(17)本田治「北宋時代の唐州における水利開発」(『立命館東洋史學』第28號 2005年) 11～12頁

(18)岡元司「南宋期の地域社会における知の能力の形成と家庭環境—水心文集墓誌銘の分析から—」(『宋代人の認識』相互性と日常空間 宋代史研究会研究報告7集 汲古書院 2001年) 302～303頁

(19)永嘉學派とは北宋の元豊年間、11世紀末の太學にあった永嘉九先生から誕生し、周行己、鄭伯熊、鄭伯英、胡安國、薛季宣、陳傅良らを経て葉適に至って大成された。

## 第四章 守節、再婚、離婚

### はじめに

宋代における女性の婚姻、再嫁についてはこれまで多くの研究がなされてきたが、陳東原氏は、宋学の礼教の説の影響で婚姻形態は一夫一妻(多妾)制を原則とし、再嫁はいちじるしく制限を受けるようになったと指摘している(注1)。こうした見解は多くの研究者の支持を得ているが、近年修正を迫る研究が出ている。例えば張邦煒氏は、宋代での事例を引きつつ離婚、再婚は少なくなかったと主張された(注2)。また大澤正昭氏も、宋代再嫁は礼儀的イデオロギーの圧力に強く影響され束縛されたものの、まだ自由が存していたとされた(注3)。同じ時代の社会を考察の対象にしながら、なぜこうした見解の違いが生じたのか。背景には宋代社会をどのように見るかという問題があり、必ずしも単純ではないが、依拠する基本史料の違いによる見解の相違と考えられる。

本稿は、この古くて新しい宋代女性の再嫁、守節の問題を宋代の女性埋葬者の墓誌銘を基本史料として考察した。結果、寡婦 74 人に対し再婚した女性が 7 人と少ない。これは陳氏が記す「宋儒の婦女に対する貞節觀念の厳しさ」をはじめ、多くの研究者が支持してきた「程頤の説が宋代社会に強い影響を与えた」という通説と、数字の上では合致する。しかし再婚した女性 7 人の墓誌銘を見る限り、再婚は失節とされてはいない。

寡婦の再婚が 7 人(別表 5「再婚した女性」参照)と少ないことを知る手がかりとして、宋代女性の生活について論じた先行研究と、墓誌銘に載る寡婦となった女性の再婚とを比較した。参考までに女性墓誌銘に載る被葬者の母と娘の再婚例は 11 人、男性墓誌銘に載る被葬者の母と娘の再婚例は 25 人(別表 5「再婚した女性」参照)である。この 11 人と 25 人については、参考までの数字とし考察は本人のみとした。

### (一) 寡婦の再婚に対する先行研究の見解

陳東原氏は宋代を三時期に区分し、次頁の表「宋儒の婦女に対する貞節觀念」について説明している(注4)。表の説明によると第一時代は「非常に寛泛」であり、第二時代は「嚴格と寛泛が入り混じり」、第三時代は「非常に嚴格」であったことがわかる。

寡婦の再婚には、中国の研究者 14 人が陳氏の「宋儒の婦女に対する貞節觀念」を支持し、程頤の説「餓死は極めて小事、節を失うは極めて大事(『近思錄』卷六 齋家)」に因るとしている(注5)。陶晉生氏も「宋人が寡婦の守節を宣揚した名言として、程頤の『節を失う事は大』を除いては、外には多くを見ない。北宋士族の婦女は夫の死後みな守節の道を一路走った(注6)。」とする。同じく江寶叙氏は「宋にいたって儒者は理学を崇めた。程子の名言を朱子が発揚強調した後、〈勸論文〉として強調され、夫の死後改嫁することは恩が無く、嫁母は廟に入ることはできないとした(注7)。」と記している。

日本の研究者は、湯淺幸孫氏、末次玲子氏、秦玲子氏が程頤の説を支持し(注8)、小島毅氏は祭祀、仁井田陞氏は法、滋賀秀三氏は財産の面から、寡婦が再婚することによる不利益を論じている(注9)。

陳東原氏による「宋儒の婦女に対する貞節観念」

第一時代	建隆元年(960)～大中祥符 4 年(1011) 51 年間
諸儒	范仲淹、胡瑗、歐陽脩、蘇子美、李覲、蘇洵
貞節観念	<p>宋が興ってから五十年間に生まれた邵雍以前の諸人は第一時代に属し、この時代より前期及びこの期の幾人かは婦女の貞節観念に対して非常に寛泛であった。</p> <p>范仲淹は貞節観念に対して極めて寛泛であった。彼の義莊田約には寡婦に再嫁の費用を給與している。彼の子純祐は早世したが、門生王陶の妻が死んだので、純祐の妻であった嫁を王陶に嫁がせている。彼の母は貧しいため朱家に改嫁した。彼は母に従い朱家に到り名を朱と改めた。このように再嫁を恥としなかったのである。</p>
第二時代	大中祥符 4 年(1011)～明道元年(1032) 21 年間
諸儒	邵雍、周敦頤、司馬光、張載、蘇頌、王安石
貞節観念	<p>宋が興ってから五十年以後、七十年以前に生まれた人は邵雍より王安石に到る第二時代で、この変化期の幾人かの見解は甚だ一致を欠いた。これは学派が蛻分し出した時で、婦女に対する観念も同様ではない。或者は寛泛で或者は厳格であった。</p> <p>王安石は息子の嫁を改嫁させている。邵雍の母はかつて江隣幾の家婢であつて、邵氏に再嫁して邵雍を生んだのである。蘇頌は妹を再嫁させている。一方、周敦頤と張載は宋代理学を重んじ、二程の説に従い厳格であった。</p>
第三時代	明道元年(1032)～建炎 4 年(1130) 98 年間
諸儒	程顥、程頤、黄庭堅、游酢、楊時、羅從彦、李侗、朱熹
貞節観念	<p>程顥、程頤以後生まれた人は第三時代に属し、宋代理学の成立した時代である。程頤は『婦が貧窮で寄るべがない場合は再婚してもよいか』という問いに対し『これはただ餓死するを怕れるからだろうが、餓死は極めて小事、節を失うは極めて大事である。』といい、餓死しても節を守らなければならなかった。</p>

そこで実情はどうであったのか、次項では墓誌銘の記述から寡婦の再婚について考察しよう。

## (二)墓誌銘にみえる寡婦の再婚

墓誌銘に載る再婚した寡婦 7 人を、陳氏の三つの時代ごとに検討してみよう。墓誌銘に載る既婚女性 1018 人中、第一時代に相当する墓誌銘には、4 人の女性(注 10)が載っているのみで、再婚した女性は見当たらなかった。

第二時代に相当する再婚した女性は、北宋の蘇頌撰『蘇魏公文集』に載る蘇氏と鄭獬撰『鄧溪集』に載る崔夫人の 2 人である。(以下の番号は別表 5「再婚した女性」の番号を示す。)

北宋

1. 蘇頌撰『蘇魏公文集』卷六十二 萬壽縣令張君夫人蘇氏墓誌銘

蘇氏は予(選者・蘇頌)の長妹である。我が先人太尉公の翰林府君は晩くに娘(蘇氏)を得た。娘は秀でて慧なるゆえに特にいつくしみ愛された。成長し亳州司法の呂昌緒に嫁いだ。呂昌緒は故相許文穆公の孫である。三年後に寡婦となった。それから四年後に張斯立に再嫁した。又七年後の治平二年(1065)に斯立が亡くなった。熙寧五年(1072)に吾が妹は四十二歳で亡くなった。(注 11)

撰者の蘇頌は「第二時代」の宋儒であるが、再婚を「節を失うは大事」とはせず、再婚の事実をあきらかにし、寛泛というより兄の立場で、墓誌銘に「長江之陽蜀岡西為斯立之世墓、嗚呼吾妹今從之」と哀切の情を表している。陳東原氏も第二時代の宋儒の貞節觀念に言及する際に「蘇頌は妹を再嫁させている。」と記している。

2. 鄭獬撰『鄧溪集』卷二十二 崔夫人墓誌銘

夫人崔氏は初め大名の孫廣に嫁いだ、孫君諱は廣、樂安郡王漢韶の子孫なり。…孫君は亡くなった。夫人は孤居を続けたが、暮らしは益々貧しくなり、京師の姨を頼って身を寄せた。久しくして姨も又卒した。夫人は二兒に泣きながら言うには「私は貧しくて兒を育てることができない」と。そして高密の屯田員外郎・趙扶に再嫁した。二兒は成長し、長男の勉は遂に進士に及第、二男の季はよく学び朋友に推誉された。夫人は趙氏に嫁いで二十六年の間、礼を以て夫にしたがい、趙氏の先妻の子三人も均しく愛しんだ。夫人は五十七歳で亡くなっている。(注 12)

撰者の鄭獬は崔夫人の再嫁の理由を貧しさとしている。程頤は「餓死の事は小、節を失う事は大」として再嫁に反対したが、再嫁に関して寛泛と嚴格が同居しているこの時代のなかで、鄭獬は寛泛の立場から貧しさ故の再婚を容認している。

第三時代に相当する再婚した女性は、北宋の秦觀撰『淮海集』の蔡氏、鄒浩撰『道郷集』の臧氏、南宋の汪藻撰『浮溪集』の施氏、鄭剛中撰『北山集』の外姑(謝氏)、韓元吉撰『南澗稿』の李氏の5人である。

3. 秦觀撰『淮海集』卷三十六 蔡氏夫人行狀

夫人姓は蔡氏、楚州山陽の人。故潭州寧郷主簿徐君諱某の妻。秘書省校書郎致仕諱中正の娘である。幼にして聡敏、才芸が有り、父母はもっぱら他の娘と異なるこの娘を愛した。十四歳にして同郡の環生に嫁いだ。環生は婚礼から十六日後に病気で亡くなった。夫人雖幼居喪事舅ここに於いて蔡氏の母は兄弟と親族数十人を率いて環館へ娘を奪いに来た。そこで言うには「お前は十四歳で嫁し、夫が亡くなって十六日しかたっていない。」と。蔡氏は夫の喪に三年、舅の喪に又三年服した後、悲しみつつ遂に環氏を去った。そして一年後に高郵の人、徐氏のもとに嫁いだ。蔡氏は最初の婚家では舅姑に孝を尽くし、再嫁した後は先妻の張氏と妾の生んだ一女一男を自分が生んだ一女と同様に愛しんだ。夫人は夫の徐氏が亡くなった二日後の熙寧八年(1075)、三十九歳で亡くなった。(注 13)

撰者の秦觀は再婚に厳しい第三時代に属するが、蔡氏を賞賛し再婚を容認している。

4. 鄒浩撰『道郷集』卷三十七 夫人臧氏墓誌銘

夫人臧氏は越州山陰の人。嘗て嫁したが寡婦となり孀居した後、通仕郎で撫州金谿縣令の姚斐忱に嫁いだ。姚斐忱には七男三女がいた。臧氏は前母と変わらず子供の世話し愛しんだ。(後に男の子七人のうち四人が進士に及第し、女の子三人も嫁がせた。)大觀四年、三十九歳で亡くなった。(注 14)

撰者の鄒浩は第三時代に属するが臧氏の再嫁を認め、先妻の子を愛しんだと賞賛の言葉を記している。

南宋

5. 汪藻撰『浮溪集』卷二十八 令人施氏墓誌銘

令人は毗陵の施氏、朝奉郎知臨安軍諱辨の子、贈殿中丞諱洵の孫。同郡の朝請郎孫庭臣に継室として嫁いだ。令人は父母の家に在るときは、よく父母に仕え兄弟と仲良くし聡明であると聞こえていた。十七歳で胡氏に嫁いだが翌年寡婦となった。孫庭臣に出会い継室にと求められた。令人は其の志を父に強奪され孫庭臣に嫁いだ。夫の孫庭臣には元の妻王氏との間に子供が数人いた。施氏は家政を専らにすること六十八年、冠婚賓祭の費用、尊卑長幼の序には皆規則があり、一切私用に供することはなかった。幼い時から読書を好み、老いても変わることがなかった。六経孔孟の書に通じ、司馬溫公家範をひいて子孫の訓育とした。春秋九十四卒。(注 15)

撰者の汪藻は、施氏が家政をこなし、宗族の面倒も見、子供も教育し、子孫を残して家を繁栄させたことは、嫁・妻・母としての務めをすべて果たしているとして「自宋興二百年間如令人殆一二見也。」と賞賛の言葉を記している。令人の男子七人は皆官職に就き、女子五人も進士や官僚に嫁いだ。孫は男子十五人、女子十六は皆士大夫の妻となっている。曾孫二十六人、玄孫七人と六十餘人の子孫に恵まれている。

6. 鄭剛中撰『北山集』卷十五 外姑墓誌銘(謝氏)

浦江の進士・杜禪の妻であった謝氏は、女の子が生まれたた四年の後、杜禪が亡くなった。女の子を携えて、朝請郎の何至に再嫁した。女の子を育てて十年後、同邑の士人石子文に再々嫁した。夫人は慎み深くて寡黙であり、立居振舞が作法にかなっていた。婦道をもって家を治め、女子ながら儒学の貴さを理解し、その知恵は天性のものであった。紹興六年三月に臨安に嫁いだ女を訪ね、六月に病気で亡くなり、七月に三男が棺を引き取った。享年六十三(注 16)

撰者の鄭剛中は妻の母、すなわち姑の墓誌銘を記している。姑の謝氏は再々婚であり、選者は陳氏の時代区分では、「再婚は失節」と見なすとされる第三時代に属すとされるにも関わらず、墓誌銘に再々婚を明記している。

7. 韓元吉撰『南澗稿』卷二十二 太恭人李氏墓誌銘

夫人姓は李氏、祖先は上黨の人、開封に住んでいた。七世祖の李崇矩は宋朝の開国勲臣で樞密使であった。夫人は世族に生まれ、富貴でみな清儉で禮を好くし儒学の知識は模範であった。李氏は初め符寶郎の錢端義に嫁ぎ一女を生んだ。しかし寡婦となり、朝請大

夫秘閣修撰の韓球の継室となった。夫人は「治家吾職也」といって家を治めた。…淳熙四年、長子の官に従って行った官舎で病を得て六月十日に亡くなった。享年七十四。  
(注 17)

撰者の韓元吉は第三時代に属するが、李氏のことを銘に「順婦長賢母」と称えている。

1の北宋の萬壽縣令張君夫人蘇氏の墓誌銘には、蘇氏の行いについて具体的な記述はないが、他の6人の墓誌銘には行いが記されている(上記の傍線部分参照)。6人に共通して挙げられた賞賛の理由は、婦として舅姑に仕え、夫に従い、宗族と和し、家事を全うしたことの一般的な妻の美德のほかに、先妻の子を我が子と同様に慈しんでいることである。先妻の子を慈しんだことを墓誌銘で賞賛している背景には、後妻と先妻の子との不和が珍しくないという現実があり、それが後妻を娶る際の一定の歯止めにもなっていた。

例えば『司馬溫公家範』巻三には「再婚はきっと身を滅ぼし、家を破滅させる。……後漢の尚書令朱暉は五十歳で妻を亡くした。兄弟が後妻を娶らせようとすると、朱暉が慨嘆して言った。世間では、後妻に家を滅ぼされたくない者は娶らずにいるのである。いま年老いて子孫もできた者が、先賢を鑑とせずにいられようか(注 18)。」とあり、また『袁氏世範』巻一には、妻と死別した中年の再娶について、「前夫の子がいれば心に掛かって忘れられぬであろうし、自らの子を生めば、二心を起こすのを免れない。それゆえ中年男の再娶はとりわけ難しいのである(注 19)。」と、家範や世範でも再娶を否定している。

墓誌銘に載る既婚女性 1018 人の死亡年齢を集計すると、10 代から 30 代で亡くなった女性は北宋 168 人、南宋 50 人、両宋では 218 人存在する(第一章 死亡年齢と結婚年齢 8～9 頁「北宋・南宋既婚女性死亡年齢」参照)。

南宋の撰者である韓元吉が、6. 太恭人李氏墓誌銘で李氏のことを「順婦長賢母」と記しているが、墓誌銘に書かれてある「賢母」とは「先妻の娘三人を育て朝散大夫と朝請大夫に嫁がせた」ことを評価したうえでの言葉である。1018 人の墓誌銘にも「賢母」という記述がある場合、その殆どが継母として前妻の子を慈しみ育てている女性に対する賞賛の言葉として記されている。再婚した女性 7 人のうち、5 人までが継子を慈しみ立派に成人させている。再婚を失節とみなす風潮のなかで、婦として母としてとくに継母としての行いを認めての記述である。

### (三)墓誌銘にみえる寡婦の守節

程頤が唱えた守節は、男女を問わず道德的徳目とされていた。程頤は男性の再娶も失節とみなしていたのである(『近思録』巻六 齋家)。女性における守節は「不再婚」を意味した。

墓誌銘に載る守節の記述は北宋 68 人、南宋 43 人、両宋では 111 人である(別表 6「守節を通した女性」参照)。北宋で守節を通した 68 人のうち 9 人は、有力者から求婚される、親や兄弟に再婚を勧められるが、本人は断乎として拒み通している。南宋で守節を通した 43 人のうち 5 人は、有力者から生計を見ると強要されたり、父母に再嫁を勧められたりしているが、「自分の髪を断つ」とまで言って再嫁を拒否している(別表 6「守節を通した女

性」一重線部分参照)。守節を通した女性 111 人中、14 人の親または周囲が、以下の理由で再婚を勧めている。

- (1) 父母が貧しい暮らしを哀れんで嫁ぐように迫る(別表 6「守節」 21、34、76、81)。
- (2) 若くして寡婦になった娘を母が不憫に思い再婚を促す(別表 6「守節」 31、41)。
- (3) 亡夫の喪があけると、兄が再婚を勧める(別表 6「守節」 23)。
- (4) 父の季父(末の弟)が嫁にと望む(別表 6「守節」 34、45)。
- (5) 有力者から求婚される(別表 6「守節」 20、65)。
- (6) 族党が再婚を勧める(別表 6「守節」 88)。
- (7) 改嫁をすすめた人が不明(別表 6「守節」 62)。

程頤の説による「餓死しても節を守らねばならなかった」時代にもかかわらず、上記の再婚を勧めている親や周囲は「節を失うは大事」よりも再婚を大事としている。寡婦自身は、家族や親族は再婚を勧めているなかで自主的に守節の道を選んでいる。宋代では再嫁は失節と見なされてはいたが、それは観念上のことであって現実には再婚を許容していたのである。守節を通した女性 111 人の墓誌銘を記した選者 62 人は宋代儒学者であるが、陳氏の三時期区分ではいつの時代に該当するか分類すると下記のようになる。

\* 第一時代＝徐鉉、李觀、張方平、歐陽脩

\* 第二時代＝王安石、王珪、曾鞏、文同、陳襄、沈括、蘇頌、強至、鄭獬

\* 第三時代＝王令、晁説之、畢仲游、范祖禹、黃庭堅、張耒、沈與求、胡銓、葉適、朱熹、黃榦、張九成、孫覿、張孝祥、張元幹、舒璘、方大琮、黃公度、楊萬里、劉弇、鄒浩、晁補之、陳師道、劉宰、葉夢得、孫應時、陳宓、李石、陳亮、樓鑰、呂南公、呂祖謙、韓元吉、劉克莊、陸游、袁燮、楊簡、李彌遜、馬廷鸞

撰者の時代分布は、貞節観念が寛泛であった第一時代が 4 人、寛泛と厳格が同居していた第二時代が 9 人、厳格であった第三時代が 39 人である(不明 10 人)。第三時代に属した撰者 39 人にとって、守節は墓主を称賛する格好の褒め言葉であったと考えられるが、墓誌銘に守節を称えた記述は見当たらない。撰者は守節よりも「舅姑に仕え、上下の者とも睦み、祭祀を奉じ、勤儉を以て家を富ませる」(別表 6「守節」 16、17、49、50、61、70、72、73、82、83、84、86 参照) など良婦であり、「嫁入り道具や宝石を売り、子供の教育に役立てる、嫡子も庶子も均一に慈しむ」(別表 6「守節」 10、41、63、65、78 参照) など賢母であったことを重視している。

守節を通しつつ自活の道を歩んだ女性もいる。北宋では 5 人、南宋では 2 人存在する。自活した 7 人の女性は、農業、紡績、養蚕に携わったが、うち 1 人は近所の子供に読み書きを教えるなど持てる能力を発揮している(別表 6「守節」二重線部分参照)。女工の技能や学問があつてこそその自活である。全漢昇氏は「宋代の女子は女工では裁縫・織布などに従事し、農業では桑を育て養蚕に役立てた(注 20)。」といい、田嶋美喜氏は「河朔・山東方面では、養蚕は穀物を作るより利があつた。女性の養蚕・紡織の副業が、農家の経営を助けた(注 21)。」と記している。

さらに若くして寡婦となり兄の再婚話を断り、農作業をして守節を通しつつ自活をし、郷村の水利開発を率先して行った女性が存在する。前項の墓誌銘にみえる宋代叙封制度「本人の王朝国家に対する功労」でとりあげている節婦夫人呉氏墓碣銘である(63頁参照)。

夫の王令と夫人呉氏とは、王安石と極めて近い関係にあり、王令は王安石より11歳若い同郷の親友であった。王安石は王令の早すぎた死(嘉祐4年、享年28)を惜しんで墓誌銘を記し、多くの文章を残している(王安石『臨川文集』卷九十七、王逢原墓誌銘)。王安石が王令を評価したのは、王令の博愛思想であった。王令の博愛思想がみえる詩「暑旱、熱に苦しむ」をあげてみよう。

崑崙の高きに雪を積む有り  
蓬萊の遠きに常に寒を遺す  
手に天下を掲げて往くこと能わざれば  
何ぞ忍びん身ら去きて其の間に遊ぶを

西方の崑崙山の高みには万年雪が積り、東方はるか遠い蓬萊山にはいつも寒気がある。それらの仙界楽天地に、世の中の人をみなひきつれて一緒に行くことができなければ、わたしひとりだけでそこに行くなどということが、どうしてできようか(注22)。と、この詩から民衆と苦しみを共有したいという王令の博愛思想が読み取れる。

呉氏と王氏はもともと同郷で互いに通婚しており、王安石は王令の才能と識見を愛して自分の妻の従妹を王令に嫁がせている(宋、張邦基『墨莊漫錄』卷五)。

呉氏は夫・王令の影響を受け、博愛思想の志を継いだのかは定かではないが、全く無関係とは言い難い。「陂興るは一州の利なり」と村民に説き、率先して水利工事を推進したことにより、1018人の既婚女性墓誌銘の中でただ一人「節婦」と記されている。宋代に呉氏のようなたくましい女性の存在が、墓誌銘の記載によって、いまこうして歴史の裏面から浮かび上がることができたのである。

#### (四)墓誌銘にみえる離婚

女性が寡婦になる理由は、夫との死別がほとんどであるが、離婚による場合もある。先行研究では離婚に関して次のように述べている。

陶希聖氏は「婦と夫との関係は、一つの宗廟関係及び宗族関係に過ぎない。それ故、婦女の運命を決定するものには、三つの勢力がある。第一は宗廟及び宗統であり、第二は舅姑であり、第三は夫である。夫が悦ばざれば出す。夫が悦ぶも、父母が悦ばざれば出す。夫と父母とが悦ぶも、宗統・宗廟の要求に合わねばこれも亦離婚の一つとなる(注23)」と。

滋賀氏は「妻が七出といって、不順父母、無子・淫・妒・惡疾・多言・竊盜(大戴禮、本命)を犯した場合でも、1.舅姑の喪を経持する。2.娶るときは賤にして、後に貴となる。3.受くる所は有っても、帰する所はない。この三不去のなかの一つにでも該当すれば、七出の事由があっても、夫は妻を離婚できない。ただし七出のうちでも特に妻が姦淫を犯したときは三不去を問う限りでない。妻の持参財産は家産とは区別され、夫妻一体の財産、す

なわち「房」の財産として形成される。顕著な罪過がない妻との離婚においては、持参財産はもち去ることができた(注 24)」と。

蘇冰氏は「宋代になると離婚を恥とする道徳的意識が形成強化され、士大夫をはじめ世人は離婚を醜陋不徳として隠そうとした。宋儒は貞節の倡導に尽力し、離婚を恥とし悪とした(注 25)」と。

上記三氏の論では、離婚には夫と妻の意思よりも、家族をはじめとする周囲の思惑、持参財産、世間の目が影響していたことがうかがえる。とくに士大夫層では離婚を醜聞としたのであろう。それ故か墓誌銘の中には直接離婚について記された文言はない。しかし後妻になった女性の墓誌銘から前妻が離婚させられたことがわかる墓誌銘がある。

#### 0259 鄭俠撰『西塘集』卷四 謝夫人墓表

其の前に娶りし某氏、廣の人、資橐を以て自負し、頗る訓言を知らず。門に入り未だ幾くならず、舅姑悦ばざる所有り、文初の少きを以て且つに新たに婦を納れんとするも、忍んで言はず。文初曰く「吾が親の悦ばざるは、則ち烏を用て汝爲すや。昔曾參 藜蒸の熟せざるを以て不順と爲し、而して其の妻を出だす。況んや吾が親悦ばざること有るにおいておや。之を出す。(注 26)

前妻某氏の記述に対して、謝夫人の記述は「予(撰者鄭俠)の友、譚文初の其妻謝夫人潁川汝陰の人。曾祖泌は諫議大夫、祖父衍は駕部郎中、父立は南雄軍事推官。謝家は代々儒家で子弟には経術を教えるばかりでなく、諸女にも同様に教育した。そのうえ諸女には古今の義婦烈女の伝記を学習させ、其の理義を理解させた。謝家では女子にもこのように教育を施したので、謝家の子女の賢は世間によく知られていた。なかでも謝夫人は最も学問に熱心であったので、父母に鍾愛され求婚者が十人もいたが、与えることはなかった。」と賞賛の言葉が綴られている。

前妻某氏の離別はまさに七出のなかの「不順父母」に当たる。後妻になった謝夫人の墓誌銘に何故、先妻某氏の離別理由を記したのか。それは撰者と謝夫人の夫である文初とは友人であるため「父母は謝氏を鍾愛し求婚者十数のなかから文初に與えた」と文初を賞賛し、さらに文初が先妻を離別したことを正当化するために記したのではと考えられる。

陸游が亡くなった妻・王氏のために記した墳記には、必要事項が記されているのみで、妻を失った哀しみの情がみられない。南宋を代表する詩人・陸游にしては無味乾燥とした墳記である。

#### 0865『渭南文集』卷三十九 令人王氏墳記

令人王氏は中大夫の山陰陸某の妻。蜀郡の王氏は慶元丁巳歳(3年)五月甲戌七十一歳にして卒す。令人に封せられる。五月七月己酉に、舅の少傅、姑の魯國夫人の墓の南に埋葬する。子供有り、長男子虚は烏程丞、次男子龍は武康尉、三男子憐、四男子担、五男子布、六男子聿、孫は元礼、元敏、元簡、元用、元雅、曾孫の阿喜は幼にして未だ名をつけず。(注 27)

そこで陸游について、一海知義『陸游』、吉川幸次郎『宋詩概説』、佐藤保『はじめての宋詩』を紐解いてみた。

一海知義氏は「陸游は二十歳の頃、母方の姪唐琬と結婚する。二人の仲は睦まじかった。だが母は唐琬を気に入らず、やがて二人は離婚させられる。数年後、陸游は王氏と再婚し、唐琬もまた新しい夫のもとに嫁ぐ。だが唐琬の姿は陸游の臉から去らなかった。三十一歳のとき、陸游は故郷にある禹跡寺の南、沈氏の花園で唐琬と再会する。そのときの鮮明なイメージは一生陸游からはなれず、八十数歳の晩年に至るまで、折に触れて回想の詩『沈園二首』をつづったのである。(注 28)」と。

吉川幸次郎氏は「さいしょの妻との、母の命令による離婚は、にがい追憶として、六十三歳の彼に、『菊枕』と題する詩を作らせている(注 29)」と。

佐藤保氏は「陸游が親戚筋の唐琬と結婚したのは二十歳前後と推測されているが、彼の母が唐琬を嫌ったためにすぐに離婚させられてしまい、彼は王氏と再婚、唐琬もまた再婚した。ふたりは互いに愛し合っていたにもかかわらず、母の意向にはさからえなかったのである。ところがこの二人が沈園で偶然会ったのは紹興二十五年(1155)、陸游三十一歳のときであった。唐琬はこのとき陸游に酒肴を贈って胸のうちを伝え、陸游は彼女への思いを釵頭鳳調の詞一首に託して園中の建物の壁に書き記した。それから更に四十四年後、また訪れた沈園で、いまだに消えやらぬ唐琬への思い出を詠じたのが、『沈園二首』である。」とある(注 30)。『沈園二首』と『菊枕』をあげてみよう。

沈園其一：城上の斜陽 画角哀し 沈園 復た旧池台に非ず  
傷心す 橋下 春波の緑なるに 曾て是れ驚鴻の影を照し来たれり

沈園其二：夢は断え 香は消えて 四十年 沈園 柳は老いて 綿をふかず  
此の身 行くゆく稽山の土と作らんも 猶お遺蹤を吊いて一たび泫然たり

菊枕：黄花を采り得て枕囊を作る 曲屏 深幌 幽香を鎖ざす  
喚び回す四十三年の夢 灯暗くして人の断腸を説く無し

陸游の「令人王氏壙記」には、妻を失った哀惜の思いがみられない理由は、前述の三首の詩にもみられるように、最初の妻唐氏への思慕が断ち切れなかったことによると考えられる。陸游はまた次のような詩も詠んでいる。

姑悪：姑の色少しく怡ばざれば 衣袂涙痕に湿る 冀う所は妾の男を生まんことなり  
庶幾わくは姑の孫を弄せんことを 此の志竟に蹉跎たり(注 31)

陸游の最初の妻唐氏は七出ではないが、姑に気に入られず離婚に至っている。陸游と唐琬の間に男児がいれば、二人は添い遂げられたのではなかろうか。

墓誌銘に離婚の記述が見られない理由として以下のことが考えられる。

- (1)墓誌銘に載る女性には、七出は該当しにくいため、安易に離婚はさせられない。
- (2)離婚する妻の持参財産も手放さなければならない。士大夫階級の子女ならば持参財産も少なくはないであろう。婚家では嫁を出すと持参財産も失うことになり、経済的には損失となる。
- (3)墓誌銘に見る賞賛の言葉の多くは「舅姑に仕え、夫に従い、宗族と和す」とあるが、これは嫁の務めというより、婚家で自身の存在を維持させるためと考えられる。女性は嫁して家族の成員と認められても、夫、舅姑、宗族によって去就が左右される。「女三界に家無し」である。嫁した女性の仕える・従う・和すといった従順な行いによって離婚は避けられたとも推測できる。
- (4)士大夫層では離婚を恥とし悪と見なしたため、離婚が行われたとしても、墓誌銘への記述は避けたのではと推測できる。

## おわりに

墓誌銘にみえる既婚女性 1018 人中、寡婦 101 人であったのに対し再婚した女性は 7 人と少ないが、これは陳氏が記す「宋儒の婦女に対する貞節観念の厳しさ」をはじめ、多くの研究者が支持してきた「程頤の説が宋代社会に強い影響を与えた」という通説に、数字の上では合致する。しかし再婚した女性 7 人の墓誌銘を見る限り再婚を失節とはしていない。

再婚した女性 7 人の墓誌銘を記した選者は宋儒であるが、陳氏のいう「宋儒の婦女に対する貞節観念の厳しさ」の時代区分に当てはめると、寛泛であった第一時代には見当たらず、寛泛と厳格が同居した第二時代に 2 人、厳格であった第三時代に 5 人が属している(下記の表 再婚の女性 7 人の墓誌銘を執筆した撰者参照)。この 7 人の撰者は「宋儒の婦女に対する貞節観念」が厳しい時代であったにもかかわらず、再婚した女性に対し賞賛の言葉を記している。貞節観念よりも婦として母としての務めを果たした女性の生き方を重視したのでであろう。墓誌銘に載る女性は士大夫層の夫人であり、一般庶民の女性ではないという制約もあるが、墓誌銘を見る限り陳氏の論とは一致をみない。

### 再婚の女性 7 人の墓誌銘を執筆した撰者

撰者 (生卒年)	陳氏の時代区分(宋儒の貞節観念)	官職	文集
鄭獬 (1022~1072)	第二の時代 (寛泛と厳格)	翰林学士	鄧溪集
蘇頌 (1020~1101)	第二の時代 (寛泛と厳格)	太子少師	蘇魏公文集
秦觀 (1049~1100)	第三の時代 (非常に厳格)	太学博士	淮海集
鄒浩 (1060~1111)	第三の時代 (非常に厳格)	龍圖閣直学士	道郷集
汪藻 (1079~1154)	第三の時代以降 (非常に厳格)	頭諫閣学士	浮溪集
鄭剛中 (1088~1154)	第三の時代以降 (非常に厳格)	資政殿学士	北山集
韓元吉 (1118~1181)	第三の時代以降 (非常に厳格)	龍圖閣学士	南澗稿

参考までに男性墓誌銘から、再嫁を選び出した結果、男性の母の再婚が4人、娘の再婚が20人存在した(別表7「再婚した女性」参考 男性の墓誌銘に載る母と娘の再婚10～34)。

この24人の男性の官職は、丞相、参知政事、少師觀文殿大学士といった高級官僚である。その墓誌銘の子供の項に娘の再婚が記され、再再婚の娘も二人いる。「再婚は失節」とはみなしていない。宋代の男性墓誌銘から見ても、やはり程頤の説とは合致しない。高級官僚である父が娘を再婚させる理由は、娘は結婚によって家と家とを取り結ぶ綱の役割を果たしているからと考えられる。再婚の事例ではないが、娘の再婚が政略的である顕著な例として、歐陽脩の墓誌銘から3人の妻を娶った事例を挙げよう。

韓琦撰『安陽集』卷五十 故觀文殿學士太子少師致仕贈太子太師歐陽公墓誌銘

初めて娶った胥氏は翰林學士・偃の女、繼室の楊氏は集賢院學士・諫議大夫大雅の女、今の夫人薛氏は資政殿學士・戸部侍郎簡肅公奎の女。(注32)

歐陽脩が娶った妻の父の官職は、最初は翰林學士、2人目は集賢院學士・諫議大夫、3人目は資政殿學士・戸部侍郎であり、後になるほど高くなっている。歐陽脩の官位が上がるにつれて、妻の父の官位も上がっていることがわかる。

このように宋代では「再婚は失節」とはみなされていなかったが、元・明・清と時代を経るにつれ「宋儒の婦女に対する貞節觀念」は厳しさを増し、その結果として列女(賢母・孝女・孝婦・賢婦・節婦・貞婦・貞女・烈婦などの諸婦を含む)の数が増えることが『正史』からうかがえる。『宋史』『元史』『明史』『清史稿』所載の列女の数と列女伝の序文を挙げよう。

\*『宋史』列女伝所載の列女39人、宋代320年間(960～1279)

「古者天子親耕、教男子力作、皇后親蠶、教女子治生、王道之本、風俗之原、固有在矣。……故歷代所傳列女、何可棄也？考宋舊史得列女若干人、作列女傳。」

\*『元史』列女伝所載の列女187人、元代108年間(1260～1367)

「元受命百餘年、女婦之能以行聞於朝者多矣、不能盡書、采其尤卓異者、具載于篇。其間有不忍夫死、感慨自殺以從之者、雖或失於渦中、然較於筍生受辱與更適而不知愧者、有間矣。故特著之、以示勸厲之義云。」

\*『明史』列女伝所載の列女294人、明代277年間(1368～1644)

「婦人之行、不出於閨門、故詩載關雎・葛覃・桃夭・采芣・皆處常履順、貞靜和平、而內行之修、王化之行、具可考見。……明興、著為規條、巡方督學歲上其事。大者賜祠祀、次亦樹坊表、烏頭綽楔、照耀井閭、乃至僻壤下戸之女、亦能以貞白自砥。其著於實錄及郡邑志者、不下萬餘人、雖間有以文芸顯、要之節烈為多。嗚呼！何其盛也。」

\*『清史稿』列女伝所載の列女613人、清代297年間(1616～1912)

「積家而成國、家後置恆男婦半。女順父母、婦敬舅姑、妻助夫、母長子女、姊妹娣姒、各盡其分。人如是、家和、家是如、國治。……清制、礼部掌旌格孝婦、孝女、烈婦、列女、守節、殉節、未婚守節、歲會而上、都數千人。軍興、死寇難役輒十百萬、則別牘上請。捍強暴而死、爰書定、亦別牘上請、皆謹書於實錄。」

このように『宋史』、『元史』、『明史』、『清史稿』の列女伝に見る列女の数、宋代 39 人、元代 187 人、明代 294 人、清代 613 人と、時代を経るにつれ増えている。清代は孝婦、烈婦、列女、守節、殉節、未婚守節をあわせると数千人になると『清史稿』には書かれている。正史に挙げられている列女のなかには、宋代の李觀の母である鄭氏や王令夫人呉氏(別表 8「守節」2、23)のような生活力のあるたくましい女性の記載はみえない。男性以上に活躍した女性は、この当時の男性が考えた列女のイメージと合わなかったからではないだろうか。正史に載る列女はあくまで男性が理想とする列女であったのであろう。

オルガ・ラング氏は「寡婦は世間の口を憚って再婚もできなかった。中国の街頭にはいまでも帝政時代に建てられた貞節な寡婦の碑が無数に見られる。しかも、この貞節の徳は寡婦だけにではなく、一度婚約した娘にも要求されたのである(注 33)。」と述べており、程頤の説を朱熹が提唱したことにより、世の中に定着していったことがわかる。「貞婦は二夫に見えず」という風習が一般化し、清代では未婚の女性までも婚約者が亡くなった場合、守節を通したとされている。

正史以外でも、宋より元・明・清と時代を経るにつれ、自殺した列女や守節の節婦の事例が増えてゆく。この点について蘇冰、魏林氏は「程頤の説に朱熹が追従し宣揚に努めたため、極端な道德主義として広まり社会の一般常識となった。宋元時代は婚姻文化の重要な転折期であり過渡的階段であった。以後、再嫁は非とされ、明清時代に達して頂点を極めた。宋代では列女の自殺者は 71 人であるが、元代では 311 人となる(注 34)。」と述べ、列女の自殺は元代になると宋代の 4 倍以上に増えている。また顧鑒塘、顧鳴塘氏は「北宋仁宗時の理学家程頤は貞節観念を極端に推進した。『餓死の事は極めて小にして、節を失う事は極めて大なり』。この話は理学家によって度々宣揚され、理学の一句として名言となり、正史に載る列女は清代で 613 人とあるが、顧氏の研究では清代の節婦は 9,482 人、列女は 2,841 人で、両者を合わせると 12,323 人となる(注 35)。この数字からも、程頤の説は、宋代以後に世の中の通念として浸透していったことが裏付けられる。

婦・烈女数量変化表

朝代	宋	元	明	清
節婦(守志)	152	359	27141	9482
烈女(殉身)	122	383	3688	2841

離婚については、後妻になった夫人の墓誌銘に前妻が離婚させられたことが書かれ、それによって離婚が判明した事例があった。宋代の士大夫階級は、離婚を恥とし悪と見なしていたので、現実には離婚が行われていたとしても、墓誌銘には記載されなかったと考えられる。しかし庶民の間では、再婚や離婚が一般的に行われていたことが、南宋の裁判記録である『名公書判清明集』に記されている。『清明集』には再婚 23 例、離婚 12 例が挙げられている。再婚は「舅に迫られて実家に逃げ、父が再婚させる」、「夫の死後再婚し、またその後再々婚する」、「夫の死後、息子・娘を連れて再婚する」。離婚は「夫の家が貧乏なので、兄が離婚させる」、「夫によって売り渡される」、「夫婦仲が悪く離婚、のち再婚する」、「妻が離婚を要求、官が承認する」「嫁が舅に仕えないので、官が離婚を承認する」「子無

しなどの理由で離婚される」「胥吏と姦通して離婚させられる」など、再婚も離婚も理由は様々であり、ここには庶民の女性のしたたかな生き様が描かれている。(注 36)

宋代の既婚女性墓誌銘からは、「男は外、女は内」という父権や夫権のもとに隷属してきた従来の儒教的道徳観念に従属した女性像とは異なる像が、少数ではあるが浮かび上がってきた。北宋の王令夫人呉氏のように、社会参加をして郷村の水利工事に尽した女性がいたことは特記に値する。墓誌銘に載る既婚女性の殆どは士大夫の夫人であり、幼少のころから教育を受けてきた。婦となり母となった後は、自分の才覚で家を守り、子供の教育にも尽力したのである。

さらに寡婦となり守節を通した女性は、婦としての道・母としての道を遵守した。夫亡き後も舅姑に仕え、家族と睦み、宗族と和し、さらに子供の教育に当たるなど、士大夫の妻としての責任を果たしている。言い換えれば守節を通した女性は夫の役割も果たしているのである。夫婦の立場を表すときに用いられる「男は日、女は月」「男は天、女は地」は、宇宙の原則から夫婦は一体であることをいっている。「男は外、女は内」は一体の夫婦の役割を表している。墓誌銘に載る女性も夫が生存中は、「月」および「地」としての存在であった。しかし夫亡きあと守節を通す女性は、「日」であり「天」であり「外」であると言えるような生き方をしている。墓誌銘の記述によると 1018 人の既婚女性の多くは儒教の教え通りに生きているが、妻となり母となって困難がふりかかると、持てる能力を発揮する、嫁入りの持参品を処分するなどして家計を維持している。

## 注

- (1)陳東原「宋代的婦女生活」(『中國婦女生活史』臺一版 臺灣商務印書館 1927 年)  
129～139 頁  
陳東原著・村田孜郎訳「宋儒の婦女に對する觀念」(『支那女性生活史』大東出版社 1941 年) 115～118 頁
- (2)張邦煒「宋代婦女的再嫁問題和社会地位」(『中國婦女史論集 三集』稻鄉出版社 1993 年) 71 頁
- (3)大澤正昭「問題の所在『名公書判清明集』の場合」(『唐宋時代の家族.婚姻.女性』明石書店 2005 年) 50 頁
- (4)注(1)参照
- (5)劉紀華「宋元明的貞節觀 宋的時代」(『中國婦女史論集 四集』稻鄉出版社 1995 年)  
110～113 頁  
張邦煒「宋代婦女的再嫁問題和社会地位」(『中國婦女史論集 三集』四集 稻鄉出版社 1995 年) 82 頁  
陳顧遠「夫死與再嫁」(『中國婚姻史』民族民間文學影印資料 上海文藝出版社 1936 年) 228～230 頁  
陳顧遠著・藤澤衛彦訳「夫の死と再婚」(『支那婚姻史』大東出版社 1941 年)  
269～270 頁  
顧璽、顧鳴塘「貞節觀」(『中国歷代婚姻与家庭』商務印書館 1996 年) 137～139 頁  
蘇冰、魏林「離婚和再婚」(『中國婚姻史』文律出版社 1994 年) 265～266 頁  
汪玢玲「宋代理学家的貞節觀」(『中国婚姻史』上海人民出版社 2001 年) 247 頁  
徐吉軍、方建新、方建、呂風棠「離婚与再婚」(『中国風俗通史 宋代卷』上海文芸出版社 2001 年) 396～397 頁  
鮑家麟「序言」(『中國婦女史論集 五集』稻鄉出版社 1993 年) 1 頁  
徐秉愉「遼金元三代婦女節烈事蹟與貞節觀念之發展」(『中國婦女史論集』稻鄉出版社 1991 年) 215～216 頁
- (6)陶晉生「北宋士人對守節和再嫁的看法」(『北宋士族一家族・婚姻・生活』中央研究院歷史語言研究所 2001 年) 183～186 頁
- (7)江寶叙「‘考驗貞潔’之故事類型與貞節觀念之演變」(『中國婦女史論集 五集』稻鄉出版社 1993 年) 84 頁
- (8)湯淺幸孫「シナに於ける貞節觀念の變遷」(『中國倫理思想の研究』同朋舎出版 1981 年)  
155～159 頁  
末次玲子「女子 理念と現実」(『中国思想文化事典』東京大学出版局 2001 年) 192 頁  
秦玲子「宋代の皇后制からみた中国家父長制」(『アジア女性史比較の試み』明石書店 1977 年) 297～298 頁
- (9)小島毅「婚礼廟見考」(『中国の伝統社会と家族—柳田節子先生古希記念』汲古書院 1993 年) 324 頁  
仁井田陞「第八節 再婚」(『中國身分法史』東京大學出版会 1983 年) 708～10 頁

滋賀秀三「寡婦の改嫁」(『中国家族法の原理』創文社 1967年) 422~25頁

- (10)徐鉉撰『徐公文集』卷三十 汝南縣太君周氏夫人墓誌銘 開寶9年(976)卒 48歲

楊億撰『武夷新集』卷八 劉氏太夫人天水縣太君趙氏墓碣銘 景德2年(1005)卒 86歲

歐陽脩撰『歐陽文忠公集』卷六十二 漳南縣君張氏墓誌銘 景德3年(1006)卒 37歲

曾鞏撰『元豐類藁』卷四十五 試秘書省校書郎李君妻太原王氏墓誌銘 大中祥符3年(1010)卒 80歲

- (11)蘇頌撰『蘇魏公文集』卷六十二 萬壽縣令張君夫人蘇氏墓誌銘

蘇氏予長妹也。我先人太尉公翰林府君晚得女。以其秀且慧故特撫愛之始稚。…及笄擇配且久乃以適亳州司法呂昌緒。昌緒故相許文穆公之孫也。甫三年而寡後、四年獲歸斯立。…又七年而後斯立卒且葬矣。…熙寧五年(1072)吾妹四十二卒。

- (12)鄭獬撰『郕溪集』卷二十二 崔夫人墓誌銘

夫人崔氏初歸大名孫君、孫君諱廣、樂安郡王漢韶之後也。…及孫君卒、夫人孤居益貧挈二稚兒入京師依姨氏久之姨又卒。夫人撫二兒以泣曰、吾不忍兒之無以毓也。乃再歸於高密趙君二兒迺得成立。長曰勉遂中進士第、李曰過尤能苦學朋友推譽之。夫人歸趙氏二十六年至其亡如初歸也。趙君性高嚴、而夫人能以禮順之、諸子不一出、而夫人能以愛均之。

- (13)秦觀撰『淮海集』卷三十六 蔡氏夫人行狀

夫人姓蔡氏、楚州山陽人。故潭州寧鄉主簿徐君諱某之妻。而守秘書省校書郎致仕諱中正之娘也。幼聰敏、有才藝、父母獨奇愛之異於他女。年十四歲適同郡環生。生故疾病成禮十六日而卒。夫人雖幼居喪事舅孝謹如成人已而其舅又卒。…於是其母與諸昆弟率親族數十人即環館奪之曰、若十四而適人十六日、而夫死。爲夫之喪三年、舅之喪三年、若爲人婦亦至矣。…夫人悲哀迫不得已遂去環氏。一年而歸除君、徐君高郵人。…除君沒二日而夫人亦卒矣。…除君前娶張氏妾生一女一男、夫人所出才一女而已既撫諸子猶已之子。

- (14)鄒浩撰『道鄉集』卷三十七 夫人臧氏墓誌銘

夫人臧氏世爲越州山陰人、嘗嫁而孀居後乃歸今通仕郎新撫州金谿縣令姚君柴忱。金谿有男七人皆舉進士(4人)尚幼(三人)、女三人。…夫人各隨其分極意調護如已出諸子安之悉如前母無恙。…大觀四年九月十五日感疾卒。享年三十九歲。(注14)

- (注15)汪藻撰『浮溪集』卷二十八 令人施氏墓誌銘

令人毗陵施氏、朝奉郎知臨安軍諱辨之子、贈殿中丞諱洵之孫。歸同郡孫氏朝請郎致仕贈中奉大夫諱庭臣之繼室。…令人在父母家即以孝友聰明聞。年十七歲適胡氏逾年而嫠。會中奉求繼室。…令人者乃彊奪其志歸之令人入孫氏。…中奉元配王氏有子數人、專其家政六十八年、養生送死冠婚賓祭野用、尊卑長幼之序皆有成規非其一毫不私也。…令人少喜讀書老而不衰、六經孔孟之書略通其大旨。…司馬溫公家範乃并以授其子孫或不如訓者引家範。春秋九十四而終。

- (16)鄭剛中『北山集』卷十五 外姑墓誌銘

浦江進士杜言壘妻謝氏、生女啐而言壘死後四年。謝攜其女、[REDACTED]故贈朝請郎何至。至育之十年、擇同邑士者石子文婦之。今孤子石知彰之母夫人是也。…夫人莊靚寡言動有儀則凡婦道治內之美無一不備蓋、以女子而知儒學之貴其資性可知也。…紹興戊午三月來訪

其女於に臨安、六月甲子感微恙而卒。七月甲子知言輟柩以歸。…夫人享年六十三。

(17)韓元吉撰『南澗稿』卷二十二 太恭人李氏墓誌銘

夫人姓李氏、其先蓋上黨人、而家開封七世祖諱崇矩爲皇朝開國勲臣樞密使。…夫人生世族襲富貴皆清儉好禮出天性而外家本儒學見聞有典型。初適符寶郎錢端義、生一女子矣。而寡婦爲朝請大夫秘閣修撰韓公繼室。…夫人曰、治家吾職也。…淳熙四年從其長子官于行在所得疾以逝六月十日也。享年七十有四。

(18)夏家善主編・王宗志注釈「父母一父」(『溫公家範』卷三 天津古籍出版社 1995 年) 39 頁

(19)袁采撰「再娶宜擇賢婦」(『袁氏世範』卷一 藝文印書館 1964～1966 年) 24 頁

(20)全漢昇「宋代女子職業與生計 實業方面」(『中國婦女史論集』稻鄉出版社 1979 年) 194 頁

(21)田嶋美喜「宋代の小農経営における女性労働」(『論集中国女性史』吉川弘文館 1999 年) 23～24 頁

(22)佐藤保「暑旱苦熱」(『はじめての宋詩』明治書院 2012 年) 106～107 頁

(23)陶希聖「離婚制度」(『婚姻與家族』上海書店 1934 年) 48～49 頁

陶希聖著・天野元之助譯補「離婚制度」(『支那に於ける婚姻及び家族史』生活社 1939 年) 73～74 頁

(24)注(9)参照

(25)注(5)参照

(26)鄭俠『西塘集』卷四 謝夫人墓表

其前娶某氏、廣人、以資橐自負、頗不知訓言。入門未幾、舅姑有所不悅、以文初少且新納婦也、忍不言。文初曰、吾親之不悅、則烏用汝爲。昔曾參以藜蒸不熟爲不順、而出其妻矣。況於吾親有不悅哉。出之。

(27)陸游『渭南文集』卷三十九 令夫人王氏壙記

於虔令人王氏之墓。中大夫山陰陸某妻。蜀郡王氏享年七十有一。封令人以宋慶元丁巳歲五月甲戌卒。七月己酉葬祔。君舅少傅、君姑魯國夫人墓之南岡。有子、子虛・烏程丞、子龍・武康尉、子惔、子坦、子布、子聿。孫元禮、元敏、元簡、元用、元雅。曾孫阿は幼未名。

(28)一海知義注(『陸游』[中国詩人選集二集 8] 岩波書店 1962 年) 3 頁

(29)吉川幸次郎「第一節 陸游」(『宋詩概説』岩波書店 1962 年) 192 頁

(30)佐藤保「沈園二首」(『はじめての宋詩』明治書院 2012 年) 170～172 頁

(31)一海知義注(『陸游』[中国詩人選集二集 8] 岩波書店 1962 年) 59 頁

(32)初娶胥氏翰林學士偃之女、繼室楊氏集賢院學士諫議大夫大雅之女、今夫人薛氏資政殿學士戸部侍郎簡肅公奎の女。累封仁壽郡夫人。

(33)オルガ・ラング著、小川修訳「寡婦」(『中国の家族と社會 1』岩波書店 1953 年) 66 頁

(34)注(5)参照

(35)注(5)参照

(36)注(3)参照

## 第五章 宋代女性の出産と養育

### はじめに

宋代における子供の生育数についての先行研究は、陶晉生氏の『北宋士族 家族・婚姻・生活』のみである。そこには「婦女は結婚後、子を産み育てることが、重要な役割である。平均生育数は 6.4 人。最高記録は 35・その次 29・25・21・18・17・15 と 14。李氏二十歳の時に出嫁、24 歳の時に去世、男女児共に 8 人。花氏 9 年中に男女児 12 人生育。張氏 9 年中に 9 人生育。このように短時間内に頻繁に生育したのは、雙の懷妊を許していたことになる。妾の生む子供も計算に入れている(注 1)」と記している。

平均生育数が 6.4 人は妥当と思えるが、一人の女性の子供数が 35 人・29 人は納得いく人数ではない。さらに大澤正昭氏が子供の男女比について『太平広記』を分析し、階層ごとの家族のデータを挙げ、次のように述べている。「上流階層では男女比がほぼ 8 対 5 となっているのに対し、庶民階層では 10 対 3 という比率になっている。いずれの数値も自然の出生率からいえば不可解であるが、とくに後者の数値は異常といえる。両者ともに何らかの調節が行われた結果だと見られる。もしこうした操作が行わなければ男女比は、ほぼ 1 対 1 になるはずである(注 2)」と分析している。

本稿では既婚女性 1018 人の墓誌銘にみえる子供の数と、陶氏が記す子供の数、大澤氏が記す男女比について比較検証を試み、墓誌銘にみえる子供の数について考察した。

### (一)墓誌銘にみえる子供の数

墓誌銘にみえる子供の数を、別表「宋代女性墓誌銘」をもとに集計し、表 1 にまとめた。

表 1 子供の数

	北宋女性	宗室女性	宗室除く北宋女性
出産判明者	491 人(不明 60 人)、	124 人(不明 20 人)	367 人(不明 40 人)
総出産数	2862 人	841 人	2021 人
男女比	男 1646 人 女 1216 人 男 5.75 女 4.25 [6:4]	男 434 人 女 407 人 男 5.16 女 4.83 [10:9]	男 1212 人 女 809 人 男 6.00 女 4.00 [6:4]
平均子供数	5.8 人	6.8 人	5.5 人
	南宋女性	両宋女性	宗室除く両宋女性
出産判明者	426 人(不明 41 人)	917 人(不明 101 人)	793 人(不明 81 人)
総出産数	2077 人	4939 人	4098 人
男女比	男 1252 人 女 825 人 男 6.03 女 3.97 [6:4]	男 2898 人、女 2041 人 男 5.87 女 4.13 [6:4]	男 2464 人 女 1634 人 男 6.01 女 3.98[6:4]
平均子供数	4.9 人	5.4 人	5.2 人

表 1 によると墓誌銘にみえる士大夫層の既婚女性のうち、北宋は 491 人の女性が 2862 人を養育、南宋は 426 人の女性が 2077 人を養育している。女性一人の平均子供養育数は、

北宋 6(5.8)人、南宋 5(4.9)人となる。おおまかに言えば、北宋は約 6 人、南宋は約 5 人と北宋が 1 人多いことになる。

北宋の平均子供数は、陶氏の云う 6.4 人と筆者の集計上の 5.8 人の差は 0.6 人であるが、陶氏の記す北宋女性の平均子供数 6.4 人について、陶氏が依拠する史料から筆者も集計を試みた。

陶氏は「本章で採用した資料は、歐陽脩『歐陽文忠公集』、司馬光『溫國文正司馬公集』、范祖禹『范太史集』中の墓誌で、統計部分を主要な根拠とした(注 3)」と記している。

陶氏が依拠した上記三集の墓誌銘に収録されている女性は 117 人であり、このうち宗室関係の女性が 91 人を占めている。筆者が既婚女性 1018 人の墓誌銘から集計した結果によると、宗室関係の女性は 144 人存在し、陶氏の 91 人より 53 人多い(別表 9「宗室女性の子供数」参照)。

墓誌銘にみえる宗室女性 144 人のうち、子供の数が判明した女性は 124 人、女性一人の平均子供数は 6.8 人となり、陶氏の 6.4 人よりも 0.4 人多い。宗室女性が士大夫層の女性よりも子供が多いことは、前頁の表 1「子供の数」からも明らかとなった。

ここでは『范太史集』の墓誌銘に載る女性から、子供数の多い女性を下記の表 2 にした。

表 2 『范太史集』の子供数の多い女性

『范太史集』にみえる子供数の多い女性		卒年(嫁年)	結婚年数	子供数(男・女)
1	保寧軍節度觀察留後東陽軍公妻仁壽郡夫人李氏	68 歳(15 歳)	53 年間	35 人(16・19)
2	贈開府儀同三司昌國公妻同安郡君安氏	56 歳(17 歳)	39 年間	29 人(9・20)
3	右監門衛大將軍天水郡開國侯妻新安縣君陳氏	62 歳(20 歳)	42 年間	25 人(9・16)
4	随州觀察使漢東侯妻陳留郡君吳氏	74 歳(17 歳)	57 年間	21 人(15・6)
5	安化郡節度觀察留後高密郡公妻德安縣君郭氏	44 歳(14 歳)	30 年間	18 人(9・9)
6	右監門衛大將軍嘉州刺史妻永壽縣君向氏	34 歳(15 歳)	19 年間	18 人(10・8)
7	楚州防禦使楚國公贈奉國軍節度使夫人宋氏	52 歳(17 歳)	35 年間	17 人(8・9)
8	右監門衛大將軍榮州團練使妻金華縣君石氏	43 歳(不明)	不明	15 人(8・7)
9	右武衛大將軍慶州刺史妻德安縣君王氏	39 歳(不明)	不明	14 人(6・8)
10	右武衛大將軍榮州刺史妻大寧縣君花氏	27 歳(18 歳)	9 年間	12 人(5・7)
11	太子右監門率府率妻張氏墓誌銘	27 歳(18 歳)	9 年間	9 人(4・5)
12	右監門衛大將軍妻長壽縣君李氏墓誌銘	24 歳(20 歳)	4 年間	8 人(1・7)
13	右監門衛大將軍妻仁和縣君曹氏墓誌銘	19 歳(18 歳)	1 年間	6 人(2・4)

上記の表 2『范太史集』の女性墓誌銘に載る 13 人のうち、子供数が多い理由について記されている墓誌銘は、13「右監門衛大將軍妻仁和縣君曹氏墓誌銘」だけである。そこには「曹氏は十八歳で右監門衛大將軍仲弄に嫁ぐ。夫婦は互いに賓客の如く敬い、夫の前妻の子供を愛しんだ。」とあり、曹氏は継室で前妻の子供も含めての子供数であるがゆえに、結婚期間が一年間で 6 人という子供数は納得できる。

このような前妻が存在したことが記されている墓誌銘は少なく、殆どは継室の女性の子に前妻の子も加え、その女性の子としての数が記されている。さらに考えられることは、

宗室関係の女性が多産な背景には、墓誌銘には浮かび上がってこないが、男児尊重によって妾をも容認する家族制度が確立されていたのであろう。

『范太史集』以外の宗室関係の女性墓誌銘にも多産な女性がみえる。墓誌銘をいくつかあげてみよう。(以下の番号は別表「宋代女性墓誌銘」の整理番号を示す。)

0155 王珪『王華陽』卷五十四 宗室延州觀察使夫人京兆郡君宋氏墓誌銘

宋氏は、15歳で延州觀察使の趙從古に嫁ぎ、治平元年(1064)に61歳で歿す。子供は男12人、女13人の25人。

0516 慕容彦逢(宜興)『摘文堂集』卷十四 故德安縣君彭氏墓誌銘

彭氏は、21歳で濮州防禦使の趙叔干に嫁ぎ、崇寧2年(1103)に58歳で歿す。子供は男10人、女5人の15人。」

0064 張方平『樂全集』卷三十八 徐國太夫人墓誌銘(和氏)

和氏は、侍中・英國公に嫁ぎ、慶曆7年(1047)に56歳で歿す。子供は男4人、女12人の16人。

0943 黃榦『勉齋集』卷三十七 太恭人李氏行狀

李氏は、朝散郎の趙公賓に嫁ぎ、嘉定12年(1219)に65歳で歿す。子供は男13人(4人卒)、女9人(5人卒)の22人のうち、生存者は13人である。

0260 章惇撰『東都冢墓遺文』 趙仲伋夫人故彭城縣君劉氏墓誌

劉氏は、14歳で羽林大將軍の趙仲伋に嫁ぎ、元豐2年(1079)に38歳で歿す。子供は男9人、女5人の14人。

墓誌銘にみえる宗室関係者の子供数は、実子のほか、媵妾の子供も含んでの人数である。宗室の子供数が多いことの裏付けとして、ジョン・W・チェイフイー氏(ニューヨーク州立大学)は「太祖と彼の二人の兄弟は23人の息子と59人の孫を持ち、四世代で226人、五世代で1,078人、六世代で3,488人に宗室は拡大した。宗室の住居は徽宗朝の1120年までに、44,000頃土地と23,600室以上の建物を取得した。(注4)」と記している。宗室の人口と住居の増加は宗室女性の出産数と比例する。

## (二)子供数に「生」が記されている墓誌銘

前述の結果から宋代士大夫階層の子供の出産と養育に関しては、前妻・媵妾・妾の子供も墓誌銘にみえる女性の子として記されていることが明らかとなった。墓誌銘の筆者は被葬者の子としてよりも、その夫の子として、その家の子として認識していたと考えられる。

女性の子供数に関しては、殆どの墓誌銘が前妻・媵妾・妾の子供を含めての総数で記しているが、なかには下記の「卓氏墓誌銘」のように、先妻と繼室の子を分けて記している

墓誌銘もある。(以下の番号は別表「宋代女性墓誌銘」の整理番号を示す。)

1031 趙汝騰撰 庸齋集卷六 卓氏墓誌銘

王君居仁先室林氏畊及六女中道歿。繼室夫人生二子及二女。夫人撫諸子均一無前後之間也。

王君居仁の先妻である林氏は男 1 人・女 6 人を遺して歿す。繼室の夫人(卓氏)は二子及び二女を生んだ。夫人は先妻の子も自分の子も均しくいつくしみ区別をしなかった。と賞賛の言辞が記されている。

そこで既婚女性 1018 人の墓誌銘から「生」の文字が子供の数の上に記されている墓誌銘を抽出し、別表 10 「子供数に『生』が記されている墓誌銘」を作成、その数を下記の表 3 にまとめた。

表 3 「生」が記されている子供数

	出産女性数	子供総数(平均)	男児(平均)	女兒 (平均)
北宋	96 人	473 人(4.9 人)	291 人(3.0 人)	182 人(1.9 人)
南宋	85 人	380 人(4.5 人)	221 人(2.6 人)	159 人(1.9 人)
両宋	181 人	853 人(4.7 人)	512 人(2.8 人)	341 人(1.9 人)

表 3 によると、出産数が分かる女性 917 人中 181 人(19.7%)と、約 2 割の女性に「生」の文字が記されている。女性一人の平均子供数は異腹の子を含めた場合、表 1 「子供数」の北宋 5.8 人・南宋 4.9 人に対し、「生」が記された場合は北宋 4.9 人・南宋 4.5 人となり、子供数は北宋 0.9 人・南宋 0.2 人減少する。

子供数が北宋は南宋よりも 0.7 人多い理由は、北宋の女性墓誌銘のみにみえる宗室女性の存在による。北宋の出産判明者 491 人のうち宗室女性が 124 人(25.3%)と四分の一を占めている。北宋女性から宗室女性を除くと子供数は 5.5 人となり、南宋の 4.9 人との差は 0.6 人に縮小する。さらに表 3 からは、宋代女性 181 人が実際に出産した子供数は 853 人、平均子供数は 4.7 人であることが判明した。

中国における平均子供数については、定縣社會概況調査『民國叢書』「人口」(注 5)の項に明記されているのであげてみよう。この調査は民國 17 年(1928)に行われたもので、14—29 歳の青年婦女 301 人、30—45 歳の中年婦女 314 人、46 歳及び以上の婦女 366 人、合せて 981 人の子供に関する統計である。調査項目には子供の平均出産数・平均死亡数・平均現存数が明記されている(次頁表 4 「平均每婦女產生・死亡及現存子女数」参照)。

表 4 平均每婦女產生・死亡及現存子女数

婦女年齢	婦女総数	平均每婦產生子女数	平均每婦死亡子女数	平均每婦現存子女数
14—29	301	1.27	0.36	0.92
30—45	314	4.27	1.38	2.89
46 以上	366	4.78	1.68	3.09
総合	981	3.54	1.18	2.36

表3『生』が記されている子供数」と、表4 平均毎婦女産生・死亡及現存子女数から女性一人の平均子供数についてみてみよう。

表4では婦女年齢を14-29、30-45、46以上と三つの年代に分けている。

墓誌銘にみえる女性の死亡年代は、両宋とも50~70代が最も多い。そこで表4の「婦女年齢46以上」を対象にして比較を試みた。

結果、宋代女性の平均子供数は表3では4.7人、対し表4の民国の平均毎婦産生子女数は4.78人でほぼ一致する。宋代と民国17年では約650年の時代差はあるが、子供数には変化がみられない。子供数については国家が人口の増減などによって、出産を制限する、または出産を奨励するなどの規制がない限り、女性一人が出産する子供数は、いつの時代でも4人から5人ではなかろうかと推測できる。

上記の子供数を妥当な数とすると、宋代の北宋女性は5.8人、宗室女性は6.8人と平均子供数が多いことになる。とくに宗室関係の女性墓誌銘にみえる子供数は、結婚年数よりも子供数が多いこともあり、明らかに異腹の子供を加えての子供数であることがわかる。次項では子供数に影響を及ぼした異腹としての妾の存在について述べてみよう。

### (三)墓誌銘にみえる妾について

妾について滋賀秀三氏は「妾とは、閨房の伴侶として娶られ、日常生活の上では家族の一員たる地位を認められながら、宗という理念的な秩序のうちには地位を与えられていない女性をいう。中国古来の婚姻制度は、一夫一妻多妾制と称すべきものであった。夫と一体関係に結ばれて夫宗のうちに侵すべからざる地位を占める正規の配偶者、すなわち妻は、同時に二人以上あることを許されず、他面に、宗の秩序とはかかわりをもたない事実上の閨房の伴侶、すなわち妾をおくことが、原理的には数に制限なく認められていた。日と月にたとえられる夫と妻に対して、妾は衆星にたとえられた(注6)」とし、夫の日に対して、妻は月として唯一の存在であるが、妾は夜空に浮かぶ星とみなしている。

大澤氏は宋代の家族形態を考察した結果から「男児を重視し、女兒を軽視する傾向が強まり、父系相続制度がいつそう明確になった。これをより長いスパンで見ると、北朝以来の厳格な一夫一妻制を守る家族制度の影響が一掃され、妾を許容する父系家族制度が再度確立されつつあった(注7)」と述べている。

野村鮎子氏は墓誌銘にみえる妾の存在について「宋までの士大夫が自分の侍妾のために書いた墓誌銘には亡妾という言葉が用いられていないことである。侍妾については姓や名のみを称するのが普通であった。墓文や祭文に『亡妾』と云う字を冠するようになったのは、元以降のことである。それは、妾が士大夫の家制度のなかに組み込まれていったことの証左でもある。妾は正妻に対する絶対服従を条件として、家制度のなかである程度安定した地位を得るに至った(注8)」と記している。

妾の存在がわかる墓誌銘は両宋ともにみられるが、そのなかからいくつかあげてみよう。

(以下の番号は別表「宋代女性墓誌銘」の整理番号を示す。)

0526 慕容彦逢『摘文堂集』卷十四 故仁和縣君王氏墓誌銘

王氏は諸子を均一にいつくしみ、人は嫡子と庶子と異なることを知らず。(注9)

王氏の子供は男10人・女9人。王氏は59歳で死去しているが、1人の女性が子供19人を出産することは不可能と思える。庶子は異腹の子であると考えられる。

0508 慕容彦逢(宜興)『摘文堂集』卷十四 華陰侯妻杜氏墓誌銘

杜氏は17歳で華陰侯に嫁ぎ、舅姑に孝を以てつかえ、媵妾を率い、子や孫を正しく訓えた。(注10)

子供は男11人・女12人、男女あわせて23人。17歳で嫁ぎ66歳で死去しているから結婚年数は49年に及ぶが、子供23人は多すぎる。「媵妾を率い」とあることから、媵妾の子供も含んでの人数といえよう。

0481 黄庭堅『山谷外集』卷八 永安縣君金氏墓誌銘

夫人は繼母には孝を以て事え、姑には母に事える如く、…夫には賓客を處するが如く、姫妾には娣姒の如く諸子を撫しむ。(注11)

子供は男6人・女4人。結婚年齢も死亡年齢も不明なため、結婚年数は不明だが、子供10人には姫妾の子も含まれていると思える。

0505 楊時『龜山集』卷三十二 令人吳氏墓誌銘

吳氏は家を治めるに常に法あり、妾媵を遇するにいつくしみの心あり。(注12)

子供は男4人・女3人。44歳で死去しているが結婚年齢が不明なため、結婚年数はわからない。44歳で7人の子は妥当な人数といえるが、妾媵の子も含まれているとも考えられる。

治家有常法、遇妾媵有恩意。

0898 葉適『水心集』卷二十一 李宜人鄭氏墓誌銘

鄭氏は子を愛しむこと庶子も嫡子も異ならず、妾媵を遇するに尤もいつくしみあり。(注13)

結婚年数は不明だが、77歳で子供10人は鄭氏の子とも思えるが、妾媵の子も含んでの人数とも推測できる。

上記の例からも、正妻は妾媵に対して、いつくしみの心をもって導いたとある。宋代でも妾媵の存在は正当化されていたのであろう。男児が家を継ぐ宋代社会において、正妻に男児がいない場合、宗室や士大夫層の家ならば妾をおくことは当然だったといえよう。

宋代既婚女性1018人の墓誌銘は正妻に限られているなかで、妾の墓誌銘が一例みえる。

0484 蘇軾撰『東坡全集』卷八十九 朝雲墓誌銘

東坡先生の侍妾朝雲と曰う。字は子霞、姓は王氏、錢塘の人なり。敏にして義を好み、先生に事えること二十有三年、忠敬一の若し。紹聖三年(1096)七月、惠州にて卒す。

年三十四。八月庚申、豊湖の上棲禪山寺の東南に葬る(注 14)。

蘇軾が記した「朝雲墓誌銘」は、侍妾名の「朝雲」となっている。朝雲は 11 歳で蘇軾の侍妾となる。蘇軾は政変で紹聖元年(1094)に 59 歳で惠州に流罪となった。朝雲は紹聖 3 年(1096)惠州で卒す、とあるから蘇軾の流罪にも随い 2 年後に亡くなっている。蘇軾の妻も朝雲と同じ王氏といい、治平 2 年(1065)27 歳で没している。

妻の王氏が亡くなったとき蘇軾は 30 歳であった。士大夫層の男性が 30 歳で妻を亡くした場合、繼室を娶ると考えられるが、蘇軾は繼室を娶らず、11 年後の熙寧 9 年(1076)、41 歳のとき 11 歳の朝雲を侍妾にしている。妾の朝雲は「敏にして義を好み、先生に事えること二十有三年、忠敬一の若し。」とある。

妻と妾の違いは、墓誌銘の記し方にも表れている。妾は正妻になることはできない。妻は夫と対等であり、夫に対して「事える」という表現は用いられてはいない。「事える」という表現は、舅姑に用いられ、夫には「従う」という表現が用いられる。それに対して侍妾は「忠敬」という表現が用いられ、「忠敬」であることが美德として称えられた。上記の蘇軾が記した朝雲墓誌銘には「従う」という表現は見られず、「忠敬」が用いられている。

夫と妻は横の関係であるが、妾の場合は臣下が君主に仕える縦の関係となる。妻は「夜空の月」という唯一の存在であるが、妾は「夜空の星」という不特定多数の存在であった。

#### (四)墓誌銘にみえる子供の男女比

子どもの男女比については、本稿 85 頁「はじめに」で記載している大澤正昭氏の分析によると、上流階層では 8 対 5、庶民階層では 10 対 3。両者ともに何らかの調節が行われた結果だと見られる。こうした操作が行わなければ男女比は、ほぼ 1 対 1 になるとある。

臧建氏は数値を挙げていないが「宋元の社会には嫁入り支度を派手にする風潮があったので、嫁入りの時の方が嫁取りよりも、一族から各家庭への支給額がやや多い。結婚前の娘は結婚資金の点で息子と同等の権利を有することができたのだ。ただ、嫁入りを派手にする風習は、同時に女兒に災い、つまり女兒を生まれてすぐ溺死させるという風潮をもたらすことになった。とくに娘を嫁がせる力のない家庭では、女兒は生存の権利さえ奪われたのである。女兒を生まれてすぐ溺死させる結果、男女の比率は異なる(注 15)」とある。

墓誌銘にみえる子供の男女比は、北宋・南宋ともに 6 : 4 である。大澤氏と本稿集計結果では依拠する史料が異なるが、氏の『太平広記』による上流階層の比率 8 : 5(100% : 62.5%)と本稿集計結果 6 : 4(100% : 66.7%)の差は 4.2%と僅かである。士大夫層の子供は上流階層に属する故に『太平広記』の上流階層の子供の比率 8 対 5 と近い数字になるのであろう。さらに墓誌銘のなかには、男児よりも女児が多い墓誌銘がある。男児よりも女児が多い墓誌銘をあげてみよう。(以下の番号は別表「宋代女性墓誌銘」の整理番号を示す。)

0678 王庭珪『廬溪文集』卷四十三 故段夫人墓誌銘

段氏は紹興 25 年(1155)に 84 歳で歿す。男 4 人、女 12 人。

1005 劉克莊『後村集』卷三十八 柯孺人墓誌銘

柯氏は端平元年(1234)に 72 歳で歿す。男 1 人、女 9 人。

1029 劉克莊『後村集』卷四十一 陳安人墓誌銘

陳氏は淳祐8年(1248)に86歳で歿す。男2人、女6人。

1031 趙汝騰『庸齋集』卷六 卓氏墓誌銘(繼室)

卓氏は淳祐己酉(1249年)に78歳で歿す。男3人(先夫人1人)、女8人(先夫人6人)。  
(先夫人の出産数は、男1人、女6人で女兒が多い。)

女兒が生存の権利を奪われない理由の一つに、第二章「婚姻関係と地理的範囲」で述べているが、家と家を繋ぐ役割を担っていることも理由の一つであろう。87頁の表1「子供数」では、南北両宋の男女比は6対4となり、大澤正昭氏が『太平広記』から算出した比率「上層階級8対5、庶民階級10対3」の上層階級の数値とほぼ同じである。宗室関係の男女比は10対9で1対1に近い。宗室では生まれてきた男女児の調節は行わず、妾の出産も容認され、子供数の多いことが宗室の人口と住居の増加につながったことがわかる。

## おわりに

男児尊重の時代に生きる女性は「出嫁外人」(嫁入りすれば他家の人)といわれ、実家での成員権は一時的なものとみなされ、婚姻後は婚家の新たな成員として組み込まれてゆく。その地位は子供とくに男子を出産することにより安定したものとなって、子供との永続的な情緒的紐帯を築き、死後は息子によって夫とともに婚家の位牌で祀られる。身分の高い家に嫁いだ女性ほど子孫を残すこと、とくに男子を出産することが重要な役目となる。墓誌銘を見ても男子は名前が記されているが、女子は長・次と順番で記されている。順番のみの娘が嫁ぎ、その婿が任官している場合は、婿の名前と官職が明記されている。

筆者の研究テーマである「墓誌銘より見たる宋代女性像」のなかの「死亡年齢、結婚年齢」「婚姻関係と地理的範囲」「婚姻の階層的範囲」の項目では、北宋と南宋の社会背景による差が判明したが、本稿では女性1人の子供数は北宋6人、南宋5人と両宋の差は1人である。この1人の差も北宋の墓誌銘のみに見られる宗室関係の女性の多産が影響している。宗室に嫁いだ女性は、男児を産むことが重要な課題であり、さらに宗室には妾が存在したことも墓誌銘から窺える。家柄の高い家に嫁ぐほどに、男児を産む必要性があった。男児は家の祖先祭祀を司り、家業を引き継ぎ、家産を守り、次世代に引き継ぐという役割を担っていたため、家の存続には男児はなくてはならない存在だったことがわかる。宗室関係の女性を除くと平均子供数は、北宋は5.5人となり、南宋の4.9人との差は0.6人に縮まる。本項目の「宋代女性の出産と養育」からは、南北両宋の社会背景による差はみられない。

さらに子供数の前に「生」の文字がついている女性墓誌銘からみえたことは、平均子供数は両宋で4.7人、この4.7人は民国17年の調査による46歳以上の婦女の平均出産数4.78人と共通している。時代が変わっても女性が生涯で出産する子供数には、大差ないことが墓誌銘から推測できる。

## 注

- (1)陶晉生「士族婦女 婚齡・兒女及壽命」(『北宋士族 家族・婚姻・生活』中央研究院歷史語言研究所 2001年) 146頁
- (2)大澤正昭「『太平広記』の分析」『唐宋時代の家族・婚姻・女性一婦は強く』(『唐代史研究』第六号 唐代史研究会編 2003年) 167頁
- (3)注(1)参照
- (4)ジョン・W・チェイフィー(ニューヨーク州立大学ピンガムトン校)「宋代宗室の政治的社会的変容」(『中国学のパースペクティブ』高津孝編訳 勉誠出版 2010年) 90~93頁
- (5)李景漢編 定縣社會概況調査『民國叢書』第四編「第四章 人口」(上海書店 1933年) 290~291頁
- (6)滋賀秀三「不正規な家族員 妾」(『中国家族法の原理』創文社 2000年) 551~552頁
- (7)大澤正昭「宋代の家族構造と唐代との比較」(『唐代史研究』第六号 唐代史研究会編 2003年) 195頁
- (8)野村鮎子「士大夫が語る家の中の女たち—ジェンダーの視点からの古典研究の試み」(『ジェンダーからみた中国の家と女』関西中国女性史研究会編 東方書店 2004年) 163頁
- (9)慕容彦逢『摘文堂集』卷十四 故仁和縣君王氏墓誌銘  
撫諸子均一人不知嫡庶之異
- (10)慕容彦逢(宜興)『摘文堂集』卷十四 華陰侯妻杜氏墓誌銘  
年十七歸華陰侯、事舅姑以孝、率媵妾、以正訓子孫
- (11)黃庭堅『山谷外集』卷八 永安縣君金氏墓誌銘  
夫人事繼母以孝聞、其姑如事其母、…梁君如賓客處、姬妾如娣姒撫諸子。
- (12)楊時『龜山集』卷三十二 令人吳氏墓誌銘  
治家有常法、遇妾媵有恩意。
- (13)葉適『水心集』卷二十一 李宜人鄭氏墓誌銘  
愛子不異庶嫡、遇妾媵尤有恩。
- (14)蘇軾『東坡全集』卷八十九 朝雲墓誌銘  
東坡先生侍妾曰朝雲、字子霞、姓王氏、錢塘人。敏而好義、事先生二十有三年、忠敬若一。紹聖三年(1096)七月壬辰卒于惠州。年三十四。八月庚申葬之豐湖之上棲禪山寺之東南。
- (15)臧建「宋元から明清時代の家法が規定する男女の役割」(『ジェンダーからみた中国の家と女』関西中国女性史研究会編 東方書店 2004年) 75頁

## 第六章 子どもの教育と学問

### はじめに

旧中国では「男子才有れば便ち是れ徳、女子才無ければ便ち是れ徳(注 1)」と云われていたにもかかわらず、宋代士大夫層の女性は、子供を家庭で教育できる教養を備えていた。その背景には女性も学問を受け、書物を読んでいることが墓誌銘から判明した。本稿では墓誌銘にみえる女性と家庭教育及び学問と読書との関わりからみえることをのべてみよう。

### (一)墓誌銘にみえる家庭教育

家庭教育のなかでも男子と女子の教育を比べると、士大夫層の家では男子の教育をより重視している。それは家の祖先祭祀を絶やさず、家の大業を引き継ぎ、家の繁栄の責任を負うことができるのは、男子によるからである。別表 11「学問と読書と子供の教育」によると、男子の家庭教育に携わった女性は、北宋が 551 人中 116 人(21.0%)、南宋が 467 人中 106 人(22.7%)、両宋では 1018 人中 222 人(21.8%)と二割以上の女性が子供の教育に携わっている。墓誌銘から子供を教育した例をいくつか挙げてみよう。

(以下の番号は別表「宋代女性墓誌銘」の整理番号を示す。)

北宋

0189 曾鞏『元豊集』卷四十五 天長縣君黃氏墓誌銘

屯田府君乃ち漳州・泉州・興化軍に従事すること、二十年を踰え、修養して而る後に去る。夫人能く其の力を盡し、飲食・衣服を治め以て進め、喪に及べば、能く其の哀を盡し、皆な其の夫の志の如くす。其の子既に學に就けば、夫人常に夜絲枲を治め、其の旁に居り以て勉ます。其の後に至り、子遂に文學を以て天下に名ゆ。(注 2)

0218 王珪『王華陽』卷五十七 皐氏墓誌銘

先人進士に擧せらるるも、志就さずして以て没す。先妣日夜諸子をして讀書せしめ、先人の志をして墮ること母からしむ。後十餘年にして、克始めて行間し一地を得たり。(注 3)

0108 司馬光(陝州夏)『溫國文正公文集』卷七十八 程夫人墓誌銘

夫人讀書を喜び、皆な其の大義を識る。軾・轍の幼きとき、夫人親ら之に教え、常に戒めて曰く、「汝讀書せよ、曹耦に効う勿れ、止だ書生を以て自ら名あらしむるを欲するのみ。」毎に古人の名節を稱引して以て之を勵し、曰く、「汝果して能く直進に死せば、吾れ戚ることなし。」と。(注 4)

0091 王安石『臨川集』卷九十九 永安縣太君蔣氏

兵部君没す。太君諸子を學に進め、惡衣惡食、これを御して愠まず、均しく嫡庶を親しみ、鳴鳩之徳(注 5)有り。(注 6)

0074 王安石『臨川集』卷九十九 仙居縣太君魏氏墓誌銘

太君十九歳で沈氏に歸ぐ、歸いで十年子二人生まれる。沈君進士甲科に進み廣徳軍判官と為るも卒す。太君親ら詩經・論語・孝經を以て兩子に教す。兩子外学(学校名)に就き時数歳なるのみにして、則ち已に能く此の三經を誦す。(注 7)

南宋

0816 葉適『水心集』卷十三 太碩人臧氏墓誌銘

大夫終し、諸子皆幼にして、必ず書を執り、旁に従わせて曰く“我婦人なり、書の義を知る能わず。“其の玩誦反復するを觀れば、清切にして寝ねざるは、学に於いて深きの驗なり。(注 8)

0850 葉適『水心集』卷十四 楊夫人墓表

夫人二子に告げて曰く「爾、学成らざれば、歸するを庸ちいざるなり。」と。(注 9)  
(呂祖謙のもとで二子を学ばせる際の言葉)

0929 葉適『水心集』卷二十 虞夫人墓誌銘

夫人生まれながらに、英悟にして夙成たり、勁き畫、麗しき語は、学ばずして、詩書古文を能くし、素より習いたるごとく有り。夫死し、ますます其の子を学義に趣ながして曰く「爾、未だ解さずとも、他質を庸いること無かれ」と。(注 10)

0835 葉適『水心集』卷二十三 夫人錢氏墓誌銘

臨海の錢氏、三王の孫なり、而して以て儒顯に付す。諸子方に携抱して、習う所の『經書』皆口授し、以て師を煩わさず。(注 11)

0927 劉宰『漫塘集』卷三十 澹軒先生艾公及其妻李氏墓誌銘

先生(夫)没す。夫人猶夜諸子に書を讀むを課すこと少しも懈らず、能く其の子皆三與と成す。(注 12)

0986 劉克莊『後村集』卷三十八 顧安人墓誌銘

二子の儒學奮いて第に科すは、安人の力なり。(注 13)

0682 員興宗『九華集』卷二十一 夫人員氏墓誌銘

夫人泰若として獨り諸子を教え力を盡くし曰く「詩書は吾家の衣鉢なり」と。(注 14)

0811 袁説友『東塘集』卷二十 故太淑人葉氏行狀

夫人未だ五歳にして女工を解す。兄弟と偕に句誦を課し、日に數百言を記す。通奉(夫)卒。夫人僅か三十餘歳。守節を通す。田二百畝有り勤儉に暮す。夫人曰く「是の兒らを父鐘愛す、今教えるべきなり。」乃ち良師を訪ね書史を買い廬舎を闢らく。(注 15)  
葉氏は二百畝すなわち二頃の田を有していた。青山定雄氏によると「当時五頃あれば一応不自由なく、士人の生活ができた(注 16)」とあり、葉氏は裕福とはいえないが勤儉に暮し

たので『書史』を求めることができ、子に教えることができたのであろう。

宋代士大夫層の女性が家庭で子供の教育をした目的は、科挙に及第させるためである。宋王朝は科挙の及第者を官僚に採用し、科挙官僚を重用する文治政治を確立した。宋代の官僚制度は科挙によって常に優秀な人材を確保することであった。このため男子にとっての出世は科挙試験に及第し官途につくことであり、士大夫階級をはじめ、地主や商人でも経済的基盤が確立していれば、科挙に及第して官僚になる道は開かれていた。故に士大夫層や裕福な家庭の男児は幼少のころから受験勉強をさせられた。教える役割は家庭教師をはじめ父や祖父、それに母親にも課せられた。士大夫の家の母親は男児の「知」の能力を向上させる家庭教師の役目も担っていたのである。

墓誌銘には母親に知識があれば直接教える、子供の教育に携わり叱咤激励する、知識が充分でなくとも学問に対する心構えを教える、母が子を敢えてつき放して奮起を促すなど、母親が子供の教育に力を尽くしている。とくに女性は寡婦となると再婚せずに、男児を科挙に及第させるため、自ら教える、夜遅くまで子供が学ぶ傍らで女工の仕事をしつつ見守る、子が長ずれば師のもとで学ばせるなど子供の教育に熱心であったことが記されている。

## (二)墓誌銘にみえる読書

宋代士大夫層の女性が子供の教育に携わることができたのは、母親自身に学問があつてこそのことであり、学問のある女性が評価されている。司馬光は「六歳にして、男子始めて字を書くを習い、女子始めて女工の小なる者を習う。七歳にして男女席を同じくせず、共に食せず。始めて孝経・論語を誦し、女子と雖も亦立ちて之を誦す。八歳にして、男子尚書を誦し、女子中門を出ず。九歳にして、男子春秋及び諸史誦し、始めて之が為に講解し、義理を曉にせしむ。女子も亦之が為に、論語・孝経及び列女傳・女誡の類を講解し、ほぼ大意を曉にすべし(注 17)」と、女子の教育についても言及している。士大夫階層の女性は、経書や女訓書を読むことも大切な徳目の一つでもあった。墓誌銘から読書をした女性をあげてみよう。(以下の番号は別表「宋代女性墓誌銘」の整理番号を示す。)

北宋

0169 曾鞏『元豊集』卷四十五 夫人周氏墓誌銘

夫人独り図史を喜び、文章を為るを好み日夜倦まず。学ぶこと士大夫の如し。(注 18)

0479 呂陶『浄徳集』卷二十七 静安縣君蒲氏墓誌銘

夫人年十九で蘇氏に歸ぐ。資は稟として慈和たり、女功に勤め婦道に循い、亦た書を読むを喜びとす。(注 19)

0536 晁説之『嵩山集』卷十九 文安縣子碩人范氏墓誌銘

自から書を読むを喜ぶは成人の如し。(注 20)

0523 慕容彦逢『摘文堂集』卷十四 仙源郡君鄭氏墓誌銘

夫人幼にして聡慧……書を誦することを喜び、能く詩章を為る。(注 21)

0567 許翰『襄陵集』卷十二 蔣氏夫人墓誌銘

夫人其の夫を佐け諸子を教養し、躬ら其の書を読むを視る。(注 22)

0068 王珪『王華陽集』卷五十三 趙宗旦妻賈氏墓誌銘

書を読むを喜び、論語・孝經の大義に通ず。(注 23)

0546 程俱『北山小集』卷三十一 德興縣君宋氏墓誌銘

夫人諸子に孝經・論語を以て口授す。(注 24)

0156 沈遼『西溪集』卷十 長壽縣太君魏氏墓誌銘

夫人浮屠書を学び、其の書の説に通意す。(注 25)

0082 王安石『臨川集』卷九十九 李君夫人盛氏墓誌銘

易經・論語・孝經・諸子の書を能く読み、親ら以て子に教す。(注 26)

南宋

0809 葉適『水心集』卷十三 孟夫人墓誌銘(仲氏)

夫人諱は靈湛、六歳にして周召南詩を誦し、其の意に通じ、識度は人に過ぎる。  
(注 27)

0971 洪咨夔『平齋集』卷三十一 孺人吳氏墓誌銘

孺人幼にして尤も敏悟なり、書を誦し倫を知り、大義を類識す。(注 28)

0813 朱熹『朱文公』卷九十二 潘氏婦墓誌銘(王氏)

論語・大学・中庸・孟子の諸書を讀むを喜び大義に略通す。(注 29)

0799 周必大『周益國』卷七十六 太恭人司徒氏墓誌銘

幼きより聰慧にして人に過ぎ、儒釋書に通ず。(注 30)

0981 劉克莊『後村集』卷三十七 孺人鄭氏墓誌銘

孺人諱懿柔、少くて經傳を習い、釋老諸書に至り、皆口誦心記し多くを識る(注 31)

0944 黄榦『勉齋集』卷三十七 太安人林氏行狀

夫人端重にして警敏なり、書を誦み一覽して語を忘れず、孟諸の經悉く大義に通ず。  
(注 32)

別表 12「読まれた書物」によると、書物を読んだ女性は北宋が 551 人中 80 人(14.5%)、南宋が 467 人中 70 人(15.0%)、両宋では 1018 人中 150 人(14.7%)の女性が書物に親しんでいる。女性が読んだ書物のベスト 5 を次頁の表 1「女性が読んだ書物」にまとめた。

表 1 女性が読んだ書物

	北宋	南宋
1	佛書 17 人、浮屠書 8 人	詩経 18 人
2	詩経 12 人	書経 12 人
3	書経 11 人	論語・孝経・佛書 11 人
4	経史・書史 9 人	孟子 10 人
5	論語 8 人	女誡・図史 4 人

北宋では佛書・浮屠書を筆頭に、詩経・書経・経史・書史・論語が読まれ、南宋では詩経・書経・論語・孝経・佛書・孟子・女誡・図史が読まれている。両宋とも詩経・書経・孝経・論語とともに佛書も多く読まれている。佛書を読んでいる女性は、両宋ともに死亡年齢が 50 代から 90 代までの寡婦となった女性に多くみられる。

北宋の女性に佛書と浮屠書が読まれている理由の一つとして、北宋の女性は唐代の女性の佛を信仰する流れを継承していたと考えられる。下記の唐代女性墓誌銘からも、唐代の女性は佛に対する信仰心が篤いことがうかがえる

大唐故臨川郡長公主墓志銘「年別手写板恩経一部，自画佛像一鋪」

『唐代墓誌匯編續集』上、(上海古籍出版社 2011 年)

趙郡李公亡夫人高陽郡君許氏墓志「尤精佛理」

『隋唐五代墓誌匯編』洛陽卷、第九冊、(天津古籍出版社 2009 年)

唐故太原王夫人墓志「夫人性孝敬、依歸佛」

『隋唐五代墓誌匯編』陝西卷、第二冊、(天津古籍出版社 2009 年)

唐故静禾寺尼惠因墓志銘并序「婦依十方諸佛」

『隋唐五代墓誌匯編』陝西卷、第四冊、(天津古籍出版社 2009 年)

唐故臨淄郡豐齊縣李夫人張氏墓志銘并序「母儀是則，佛性爰修」

『隋唐五代墓誌匯編』洛陽卷、第十一冊、(天津古籍出版社 2009 年)

孟子を読んだ女性は北宋では 1 人であるが、南宋では 10 人が読んでいる。孟子が南宋で読まれるようになった理由は宋学との関わりにある。北宋では范仲淹・歐陽脩らが既存の權威を否定し、経書に没入してその精神を体得し、現実にかそうとする理想に燃えていた。これを受けた周敦頤は新儒学を唱え、その学説は張載、程顥、程頤に受け継がれ、南宋の朱熹に至って大成された。朱熹の思想の中心課題は、社会的責任を担う士人としての人間の生き方を律する実践倫理をつくりあげることであり、その生き方が読み取れる文献として四書(論語・孟子・大学・中庸)に注目した。従来の五経(詩経・書経・易経・春秋・礼記)よりも、むしろ四書を堯・舜以来の聖人の伝統を受けた書であるとみなし、自身の思想大綱をこれらの注釈として著わしたことにより、孟子は南宋で読まれるようになった。

東一夫氏は「王安石は孟子礼讃者。著に《孟子解四卷》あり、老莊思想の受容者。司馬光は孟子排斥者。《疑孟》の著あり。老莊の排斥者。科挙の答案に老莊思想を取り入れた者は不合格にせよと強調した(注 33)」と述べている。

### (三)墓誌銘にみえる学問

女性墓誌銘には、幼少のころ兄弟の勉強を傍らで見ていた、父親の朗読を聴いて暗誦した、読書を好み読み書きができたなど、学問に接する機会に恵まれ、女子にも祖父母や父母が直接教授するなど、家族も積極的に「知」の伝授を施していたことが記されている。読書や教育ができた背景には、家に蔵書があり書物を手にとる機会がある、兄弟が勉強する傍らで聴講するなど、本人の向学心に加えて祖父母・父母らの理解があったと考えられる。四書五経、女訓書などを教材にして、母のほか父や祖父、祖母によって女兒の教育が行われたことが、墓誌銘からもうかがえる。該当する墓誌銘をいくつかあげてみよう。

(以下の番号は別表「宋代女性墓誌銘」の整理番号を示す。)

北宋

0155 王珪『王華陽』卷五十四 宗室延州觀察使夫人京兆郡君宋氏墓誌銘

夫人生十年にして母が剪製の事、音律の法、詩書の言を教える。(注 34)

0256 陳襄『古靈集』卷二十 崇國太夫人符氏墓誌銘

夫人幼にして柔慧たり…嘗て屯衛(父)に侍し漢唐史を読むを聴き之を悦ぶ。(注 35)

0566 孔武仲『宗伯集』卷十九 吳氏夫人墓誌銘

夫人の大母曾氏諫議大夫致堯の女、博学持論を善くす。夫人少にして之を習い、故に文字多くを通解す。尤も佛書及び唐人歌詩を読むを喜ぶ。(注 36)

0500 晁補之『晁雞肋集』卷六十六 李氏墓誌銘

夫人幼にして慧…十歳にして詩を能く為す、大夫公(父)に代わりて削牘す。(注 37)

0039 韓維『南陽集』卷三十 太原縣君墓銘(王氏)

夫人才數歳、文正(父)特に其の明悟を喜び、親ら孝経・白氏・諷諫及び雜詩賦數百篇を教え誦す。(注 38)

南宋

0857 葉適『水心集』卷十四 張令人墓誌銘

夫人の父兄は皆な儒先生たり、幼きより詩禮間事に陶染し、絶えて他女より異なる。(注 39)

0616 朱熹『朱文公集』卷九十一 建安郡夫人游氏墓誌銘

夫人資は静たり、族母阮氏婦徳を以て女師と為る。夫人幼にして嘗て焉に学び、『班昭女訓』を受かり、其の大義に通ず。(注 40)

993 方大琮『鐵菴集』卷三十五 妣太安人林氏墓誌

父、女誠を教える。(注 41)

1013 袁甫『蒙齋集』卷十八 縣尉楊君太孺人何氏墓誌銘

父、之を愛すること尤とし、教うるに孝經・論・孟・詩書・左氏傳及び内則・女誡を以てし、終身遺忘せず。(注 42)

0867 楊萬里『誠齋集』卷一百三十一 太孺人劉氏墓誌銘

父、孝經・論語・孟子を授ける。一過にて能く誦し、大義に畧通す。終身忘れず、父諸女と異なる之を愛す。(注 43)

0863 楊萬里『誠齋集』卷一百三十二 夫人劉氏墓銘

父文蘊、孝經・内則・劉向列女傳を授える。一読にして成誦し之を奇とす。(注 44)

0843 陸游『渭南集』卷三十五 夫人孫氏墓誌銘

夫人幼にして淑質、故趙建康明誠の配、李氏文辞名家を以てその学を夫人に伝えんとす。時に夫人十餘歳、謝して曰く『才藻(詩文の才能の豊かなこと)は女子の事にあらず』と。宣義(父)之を奇とし、乃ち書を手にし、古の列女の事數十を夫人に授す。夫人、日夜誦して廃めず。(注 45)

孫氏が「才藻は女子の事にあらず」と言った背景には、司馬光が「女子に歌詩を作ること教えるは、俗樂にとられることであり、宜しくない(注 46)」と記していることによる。唐以後、妓女に詩文歌謡などを能くする者が多かったため、士大夫層の子女が詩文歌謡を能くすることは、輕蔑される風潮があった故に、司馬光は「才藻は女子の事にあらず」と唱えたのであろう。

上記の故趙建康明誠の配、李氏とは宋詞の代表的作家である李清照のこと。李清照の卒年は不明だが、墓誌銘にみえる孫氏は、紹興 11 年(1141)生まれで、このとき十餘歳とあり、十餘歳を十一歳とした場合、紹興 21 年(1151)となる。李清照は元豐 6 年(1083)生まれであるから、紹興 21 年ならば李清照は六十八歳の高齡である。夫の趙明誠は建炎 3 年(1129)に赴任先の湖州で亡くなっている。このとき李清照は四十七歳である。寡婦となってから 22 年後の六十八歳にして家庭教師をしていたことになる。

宋代士大夫層の家では、男子を科挙に及第させ官僚の道を歩ませることが、家を存続させ繁栄させるための必要な手段であった。そのためには父親のほか母親も男児の教育に携わる役目があったのである。科挙に及第し官途につくことが男子の出世とみなされた宋代にあつては、「女は才無きが徳」といった旧来の觀念は影をひそめ、女性も学問に励んだことが墓誌銘からもうかがえる。

このように科挙試験を目指して子供の教育を盛んに行うことができた背景には、科学技術が発達し、製紙業や木版印刷が盛んであつたことも要因となっている。宋代は読書人たる士大夫にふさわしい書物が刊行され、教育の一端を担つたのである。

張詔勛氏は「宋代は製版印刷の黄金時代であつた。宋朝は教育を重視した。中央には国子監・武学・律学・算学・医学などの各種学校があり、地方には郡学・府学・縣学与書院・家塾・舍館などの学校があつた。1093 年、北宋の太学生的人数は 3100 人余りであつたが、

1203 年、南宋の太学を受験する受験生は 37,000 人にも達していた。教育の発展により、必要とされる書物の量も増加し、出版業の発展をうながし政府も大いに書物の出版を奨励した。こうして宋代の製版印刷は、官刻・家刻・坊刻のいずれの面においてもめざましい発展をした。士大夫たちは自己の著作・祖先の著作・先生友人の著作・家蔵の善本・名家の著述などの刊行が行われた(注 47)」と記している。

陶晉生氏は「韓琦は任を終えた後〈酔白堂〉を建て、書籍一萬巻を収蔵し、家族子弟の鑽研に供えた。歐陽脩は子供の頃家が貧しく、書物は借りて読んだ。名を成した後、自らを〔六一居士〕と号した。六一の一は蔵書一萬巻を為したことによる。名族の呂氏も家の裏に私塾を有し、家中の男児に教育を受ける機会をあたえ、女兒も聴講することができた。此の他の官僚や士大夫も数千巻から数万巻を蔵している(注 48)」と張氏の論と同一である。

ジョン・キング・フェアバンク氏は「宋朝下の教育の発達についての技術的な鍵は、印刷された書物であった。北宋は印刷された書物を持った最初の社会であった。印刷物は教養あるエリートを増大させる源泉であった(注 49)」と述べている。

印刷技術が発達した恩恵を受けて、士大夫層の家には蔵書が豊富に存在し、女子でも身近にある書物を手にとることができたことがわかる。

女性が受けた学問は、男性の学問を継承した儒教倫理にのっとった学問であったが、この流れは元代にも引き継がれていく。大島立子氏は「元代における女性教育の内容は、儒学の教養であり、教育を施されて女性は元代の一般女性ではなく、士大夫と言われる知識階層の女性を中心であった。元代の文人の書のなかには、多くの賢明かつ教養あふれる女性が見られる。」と述べ、次に記す元代士大夫層の女性墓誌銘をあげている(注 50)。

#### 王逢『梧溪集』巻四 劉節婦

歳十二にして古文・孝経に通じ、小学の書を見、固よりこれを読むを請うも、母許さず。一日、諸兄の誦するを聴き、姆教に至り、婉婉として聴従す。復た母に謂いて曰く、此も亦女子のとなり、と。遂に内外篇に通ず。

#### 陳旅『安雅堂集』巻十一 故魯郡夫人趙氏墓誌銘

幼き時、古文・歌詩耳にいればすなわちよく記す。七歳にして周易書を倍誦し、善く対を屬す。九歳にして専ら女事を学び、すなわち論語・孟子・小学の書皆成誦す。

#### 任士林『松郷集』巻三 鄭夫人墓誌銘

子六歳になるに及び、夫人読書を教う。

#### 呉澄『呉文正集』巻八十六 故臨川逸士于君玉汝甫妻張氏墓誌銘

婦徳ありて、よく里中の女子のために礼記の内則、曹大家の女誡を説く。

宋代の女性墓誌銘にも、周辺の子女を教化した女性、寡婦となり生計を立てるために、塾を開いて近所の子に教えた女性など、受けた教育を活かしている女性が存在する。

## おわりに

筆者の研究テーマである「墓誌銘より見たる宋代女性像」の第一章「死亡年齢、結婚年齢」、第二章「婚姻関係と地理的範囲」、第三章「婚姻の階層的範囲」では、女性墓誌銘にも、北宋と南宋の社会背景による違いが判明した。しかし本稿においては、南宋では孟子と女訓書が多く読まれていることだけで違いはみられない。

孟子は、北宋では 1 人にすぎないが、南宋では 10 人が読んでいる。孟子が南宋で読まれた理由は、南宋の朱熹に至って大成された宋学との関わりによる。

女訓書・列女伝・女誠・内則は、南宋 14 人に対し、北宋は 3 人である。女訓書・列女伝が南宋で多く読まれた背景には、程頤の学説や朱子学が宋儒の婦女に対する観念に影響を与えた結果、南宋期には貞節観念が厳格化され、道徳として浸透していったことによる。

家庭教育では、士大夫の家では男児の教育をより重視している。男性は家の祖先祭祀を司り、家業を引き継ぎ、家産を守り、次世代に引き継ぐという役割を担い、女性は祭祀を引き継ぐ男児を産み育てるという役割を担っていた。科举制度を重視した宋代において、家の繁栄は男児を科举に及第させ官途に就かせることであった。墓誌銘にみえる女性は、婦としての役割の他に、男児を持てば科举に及第させるため、母としての教育も課せられていた。女性が子供の教育に携わることができたのは、学問があつてこそのことである。

宋代士大夫の学問の目的は「修身(身を修める)、齐家(家を斉える)、治国(国を治める)、平天下(天下を平定する)」をめざして、儒教的教養と価値観を身につけるためのものである。そのためには「古典(経書)に通曉すること」「詩文が作れること」「策論のための歴史的知識をもつこと」。この三つの条件を具備しなければならなかったのである。

女性が受けた学問も男性の学問を継承した儒教倫理にのっとった学問であった。墓誌銘にみえる学問を受けた女性は、幼少の頃は兄弟の勉強を傍らで見ていた、父親の朗読を聴いて暗唱した、書物を読むことが好きであったなど、学問に接する機会に恵まれていた。

学問を受けた女性が母親になると、子供を叱咤激励して、学問をさせていることである。とくに夫が亡くなっていながら、子供が進士及第を果たした場合、そこには母親の関わりがみられる。子供を教育した女性 222 人中 44 人(19.8%)が寡婦となっても子供の教育に関わり、子供は大成している。夫の死によって、家庭が危機に瀕すれば瀕するほど、母親の役割は増したのであろう。知識があれば直接教える、知識が十分でなくとも学問に対する心構えを教える、母が子を敢えて突き放し奮起を促す、貧しければ奩(嫁入り道具)などを売り、母親は子供の教育に力を注いだのである。母親自身に学問があつてこそその発言も多く、学問のある女性が評価されている。

## 注

- (1) 褚人穫著、嚴文儒校注 第七十六回「結綵樓嬪御評詩 游燈市帝 行樂」(『隋唐演義』大北：三民書局 1998年) 938頁「人亦有言、男子有德是才、女子無才便是德。蓋以男子之有德者、或兼有才；而女子之有才者、未必有德也。」
- (2) 曾鞏『元豐集』卷四十五 天長縣君黃氏墓誌銘  
屯田府君乃從事漳州・泉州・興化軍、踰二十年、終養而後去。夫人能盡其力、治飲食・衣服以進、及喪、能盡其哀、皆如其夫志。其子既就學、夫人常夜治絲枲、居其旁以勉之。至其後、其子遂以文學名天下。
- (3) 王珪『王華陽』卷五十七 皐氏墓誌銘  
先人舉進士志不就以沒。先妣日夜諸子讀書、使母墮先人之志、後十餘年克始行間得一地。
- (4) 司馬光(陝州夏)『溫國文正公文集』卷七十八 程夫人墓誌銘  
夫人喜讀書、皆識其大義、軾・轍之幼也。夫人親教之常戒曰、汝讀書勿、効曹耦止欲以書自名、而已每稱引古人名節、以勵之曰、汝果能死直道、吾無戚焉。
- (5) 王安石『臨川集』卷九十九 永安縣太君蔣氏墓誌銘  
兵部君沒。太君進諸子於學、惡衣惡食、御之不慍、均親嫡庶嫡庶、有鴈鳩之德。
- (6) 鴈鳩は鳥の名。フウドリ・ヤツガシラ・ツツドリ・ムギウラシ・ヨブコドリをいう。  
鴈鳩之徳は鴈鳩之仁ともいい、鴈鳩が子を養う仁愛のこと。
- (7) 王安石『臨川集』卷九十九 仙居縣太君魏氏墓誌銘  
太君年十九歸沈氏、歸十年生兩子、而沈君以進士甲科爲廣德軍判官以卒。太君親以詩・論語・孝經教兩子。兩子就外學、時數歲耳則已能誦此三經。
- (8) 葉適『水心集』卷十三 太碩人臧氏墓誌銘  
大夫終、諸子皆幼、…夜必令執書、從旁曰「我婦人也、不能知書之義。觀其玩誦反復、清切不寢者深於學之驗也。」
- (9) 葉適『水心集』卷十四 楊夫人墓表  
夫人告二子曰、爾、學不成無庸歸也。(呂祖謙のもとで二子を学ばせる際の言葉)
- (10) 葉適『水心集』卷二十 虞夫人墓誌銘  
夫人生英悟夙成、勁畫、麗語、不學而能詩書古文、有若素習。…夫死、益趣其子於學義曰、爾、未解無庸他質。
- (11) 葉適『水心集』卷二十三 夫人錢氏墓誌銘  
臨海錢氏三王之孫也、而以儒顯。…諸子方携抱所習經皆口授、不以煩師。
- (12) 劉宰『漫塘集』卷三十 澹軒先生艾公及其妻李氏墓誌銘  
先生沒、夫人猶夜課諸子讀書不少懈、用能成、其子皆三與鄉舉。
- (13) 劉克莊『後村集』卷三十八 顧安人墓誌銘  
二子儒學奮科第、安人力也。
- (14) 員興宗『九華集』卷二十一 夫人員氏墓誌銘  
夫人泰若獨教諸子甚力曰、詩書吾家衣鉢也。
- (15) 袁說友『東塘集』卷二十 故太淑人葉氏行狀  
夫人聰悟間靜未五歲女工。…偕兄弟課句讀、日記數百言。…通奉(夫)卒。夫人年僅踰

三十。…有田二百畝薄入。…夫人悲喜曰、是兒父所鐘愛、今可教也。乃訪師之良者買書史闢廬舍。

- (16)青山定雄「北宋を中心とする士大夫の起家と生活倫理」(『東洋学報』第57巻 東洋文庫 1976年) 41頁
- (17)司馬光「居家雜儀」(『司馬氏書儀』卷四 叢書集成初編 主編者・王雲五 商務印書館 1936年) 45頁 「六歳、男子始習書字、女子始習女工之小者。七歳、男女不同席、不共食。始誦孝經論語、雖女子亦宜誦之。八歳、男子誦尚書、女子不出中門。九歳、男子讀春秋及諸史、始爲之講解、使曉義理、女子亦爲之講解論語孝經、及列女傳女戒之類、略曉大意。今人或教女子以作歌詩執俗樂、殊非所宜也。」
- (18)曾鞏『元豐集』卷四十五 夫人周氏墓誌銘  
夫人獨喜圖史好、爲文章日夜不倦。如學士大夫。
- (19)呂陶『淨德集』卷二十七 靜安縣君蒲氏墓誌銘  
夫人年十九歸于蘇。資稟慈和、勤女功循婦道、亦喜讀書。
- (20)晁說之『嵩山集』卷十九 文安縣子碩人范氏墓誌銘  
自喜讀書如成人。
- (21)慕容彥逢『摘文堂集』卷十四 仙源郡君鄭氏墓誌銘  
夫人幼聰慧…喜誦書、能爲詩章。
- (22)許翰『襄陵集』卷十二 蔣氏夫人墓誌銘  
夫人佐其夫、教養諸子、躬視其讀書。
- (23)王珪『王華陽集』卷五十三 趙宗旦妻賈氏墓誌銘  
夫人喜讀書、通論語・孝經大義。
- (24)程俱『北山小集』卷三十一 德興縣君宋氏墓誌銘  
夫人諸子口授以孝經・論語。
- (25)沈遼『西溪集』卷十 長壽縣太君魏氏墓誌銘  
夫人學浮屠書、通其書之說。
- (26)王安石『臨川集』卷九十九 李君夫人盛氏墓誌銘  
夫人能讀易・論語・孝經・諸子之書、親以教子。
- (27)葉適『水心集』卷十三 孟夫人墓誌銘(仲氏)  
夫人諱靈湛、六歳誦周召南詩、通其意、識度過人。
- (28)洪咨夔『平齋集』卷三十一 孺人吳氏墓誌銘  
孺人幼尤も敏悟、誦書知倫、類識大義。
- (29)朱熹『朱文公』卷九十二 潘氏婦墓誌銘(王氏)  
喜讀論語・大學・中庸・孟子諸書、略通大義。
- (30)周必大『周益國』卷七十六 太恭人司徒氏墓誌銘  
自幼聰慧過人、通儒釋書。
- (31)劉克莊『後村集』卷三十七 孺人鄭氏墓誌銘  
孺人諱懿柔、少習經傳、至釋老諸書、皆口誦心記多識。
- (32)黃榦『勉齊集』卷三十七 太安人林氏行狀  
夫人端重警敏、誦書一覽不忘語、孟諸經悉通大義。

- (33)東一夫「王安石,司馬光対照表と対照事項」(『王安石事典』国書刊会 1980 年) 237 頁
- (34)王珪『王華陽』卷五十四 宗室延州觀察使夫人京兆郡君宋氏墓誌銘  
夫人生十年、母教之剪製之事、音律之法、詩書之言。
- (35)陳襄『古靈集』卷二十 崇國太夫人符氏墓誌銘  
夫人幼而柔慧、…嘗侍屯衛(父)讀漢唐史聽而悅之。
- (36)孔武仲『宗伯集』卷十九 吳氏夫人墓誌銘  
夫人之大母曾氏諫議大夫致堯之女、博學善持論。夫人少習之、故于文字多通解。尤喜讀佛書及唐人歌詩。
- (37)晁補之『晁雞肋集』卷六十六 李氏墓誌銘  
夫人幼慧…十歲能爲詩、代大夫公削牘。
- (38)韓維『南陽集』卷三十 太原縣君墓銘(王氏)  
夫人才數歲、文正特喜其明悟、親教誦孝經・白氏・諷諫及雜詩賦數百篇。
- (39)葉適『水心集』卷十四 張令人墓誌銘  
夫人父兄皆儒先生、自幼陶染詩禮間事、絕異於他女。
- (40)朱熹『朱文公集』卷九十一 建安郡夫人游氏墓誌銘  
夫人資靜、淑族母阮氏以婦德爲女師。夫人幼學嘗焉、受班昭女訓、通其大義。
- (41)方大琮『鐵菴集』卷三十五 妣太安人林氏墓誌  
父教以女誠。
- (42)袁甫『蒙齋集』卷十八 縣尉楊君太孺人何氏墓誌銘  
父、愛之尤、教以孝經・論・孟・詩書・左氏傳及び內則・女誠終身不遺忘。
- (43)楊萬里『誠齋集』卷一百三十一 太孺人劉氏墓誌銘  
父授以孝經・論語・孟子。一過能誦、畧通大義。終身不忘、父愛之異諸女。
- (44)楊萬里『誠齋集』卷一百三十二 夫人劉氏墓銘  
父文蘊、授孝經・內則・劉向列女傳。一讀成誦奇之。
- (45)陸游『渭南集』卷三十五 夫人孫氏墓誌銘  
夫人幼淑質、故趙建康明誠之配、李氏以文辭名家欲以其學傳。夫人時夫人始十餘歲、謝不可曰才藻非女子事也。宣義奇之乃手書、古列女事數十授夫人。夫人日夜誦服不廢。
- (46)(注 4)参照
- (47)張紹勛著・高津孝訳「教育の重視と物質的基盤」(『中国の書物と印刷』日本エディタースクール出版部 1999 年) 42~43 頁
- (48)陶晉生「士族婦女的教育」(『北宋士族 家族・婚姻・生活』中央研究院歷史語言研究所 2001 年) 67~71 頁「韓琦做了大官後、建醉白堂、收藏書籍一萬卷、供家族子弟鑽研。歐陽脩少時家貧、借書讀。成名以後自『六一居士』。六一之一爲藏書一萬卷。名族呂氏家裏有私塾、供家中男孩受教育的機會。有的女孩也可聽講。」
- (49)J・K・フエアバンク『中国の歴史』「中国の最も偉大な時代—北宋と南宋」(『中国の歴史』大谷敏夫・太田秀夫訳 ミネルヴァ書房 1996~7 年) 116 頁
- (50)大島立子「元代における女性と教育」(『論集中国女性史』中国女性史研究会編 吉川弘文館 1999 年) 40~44 頁

## 第七章 家庭での行状

### はじめに

墓誌銘にみえる既婚女性 1018 人の家庭での行いから宋代の女性像を求めてみた。結果、「事舅姑」を筆頭に「従夫」「睦叔妹」「和宗族」「慈子供」などの記載が多い。一口で言うに宋代士大夫層の女性は、嫁ぐと賢婦、賢妻、賢母になると記されている。しかし上記 5 項目の行いについての信憑性は、疑問視しなければならない。もともと墓誌銘は、死者の行跡を後世に残すために、家族が有名人または名のある知人に執筆料を支払って、墓誌銘の執筆を依頼するため、依頼された撰者は依頼主への配慮もあり、墓主の行いを賞賛することがあり得るからである。墓主の家族も賞賛されることを期待しての依頼であろう。墓誌銘に記されている賞賛の言葉から、宋代女性の真実の姿を描くことは難しいが、宋代社会および撰者が理想とする女性像は描くことができる。

「事舅姑」を筆頭に「従夫」「睦叔妹」「和宗族」「慈子供」については、宋代になってから士大夫層の間で実施された「家法」や「家礼」にもとりいれられ、さらに宋代に読まれた女訓書にも必ず記載されている。司馬光は著書『司馬氏書儀』のなかで「女子は九歳にして、『論語』『孝経』及び『列女傳』『女誡』の類を講解し、大意を略曉すべし(注 1)」と、『列女傳』や『女誡』などの女訓書を読み大意を理解することを奨励している。

以下、家庭での行いにみえる筆頭の「事舅姑」とそれに次ぐ「従夫」を中心に、女訓書の記述とも照合し、宋代女性の家庭内での行状をみてみよう。

### (一)墓誌銘にみえる「事舅姑」

墓誌銘にみえる賞賛の言葉は「事舅姑」がトップを占める。「事舅姑」が記されている墓誌銘は、北宋 551 人中 206 人(37.4%)、南宋 467 人中 150 人(32.1%)、両宋では 1018 人中 356 人(35.0%)と、三分の一以上の女性が舅姑に仕えている(別表 11「墓誌銘に見る賞賛の言葉」参照)。「事舅姑」が記されている 356 人の墓誌銘からいくつかあげてみよう。

(以下の番号は別表「宋代女性墓誌銘」の整理番号を示す。)

北宋

0201 曾鞏撰『元豊集』卷四十五 沈氏夫人墓誌銘

姑長興縣太君賈氏に事へ婦の道を盡し、夫に事へ妻の道を盡す。(注 2)

0219 韓琦撰『安陽集』卷四十八 安康郡太君陳氏墓誌銘

其姑秦國太夫人に事へ婦の道を曲盡し～中略～秦國亦愛し之を遇すこと猶お息女の如しなり。(注 3)

0240 呂頤浩撰『忠肅集』卷十四 壽安縣許夫人墓誌銘

其舅姑に善く事へ、其の族姻と睦し内外に間言無し。(注 4)

0497 唐庚撰『眉山集』卷五 徐夫人墓誌銘

舅姑之を得て喜び、即ち以て家政を委ねたり。(注 5)

0426 范祖禹撰『范太史集』卷五十 右武衛大將軍處洲刺史妻壽光縣君王氏墓誌銘

姑に事へ礼を盡し温恭なり、朝夕少しも懈り無く家事を勤め、凡そ十七年一の如し。  
(注 6)

南宋

0898 葉適撰『水心集』卷二十一 李宜人鄭氏墓誌銘

舅姑に事え違うこと無く、子を愛むこと庶嫡異ならず、妾媵を遇すること尤も恩有り。  
(注 7)

0681 朱熹撰『朱文公集』卷九十一 夫人徐氏墓誌銘

生は柔順にして静正たり、父母之を愛む。既に歸す、舅姑に事え禮を盡す。(注 8)

0972 劉宰撰『漫塘集』卷三十 澹軒先生艾公及其妻李氏墓誌銘

夫人孝を以て舅姑に事え、和を以て娣姒に處し、順を以て其の夫に事え、嚴を以て其の子を教す。(注 9)

0675 史堯弼『蓮峯集』卷十 楊君夫人彭氏墓誌銘

舅姑春秋高く疾多く、悉く夫人夙夜湯劑を治め飲食を進む。(注 10)

0855 樓鑰『攻媿集』卷一百三 孺人俞氏墓誌銘

嫁した時、舅姑已に歿す。事えるに逮よばず恨みに思う。(注 11)

上記の孺人俞氏墓誌銘には「舅姑が歿して、いないことを恨む」とあり、嫁した女性にとって「舅姑に事える」が、いかに重要な努めであったことかをうかがうことができる。

## (二)女訓書にみえる「事舅姑」

宋代に読まれた女訓書は、後漢に班昭が著した『女誡』、唐代に宋若莘が著した『女論語』及び侯莫陳邈妻鄭氏が著した『女孝經』である。墓誌銘の女性が読んだ書物にも、『女訓書』、『女誡』が挙げられている。この三冊から「事舅姑」に該当する項目をみてみよう。

班昭『女誡』(後漢)

後漢の班昭が『礼記』を基にして自分の経験から嫁ぎ行く娘たちのために書いたもの。班昭は班固の妹で兄が未完のまま残した『漢書』を完成させた。十四歳で曹世叔に嫁ぎ、寡婦になると後漢朝の後宮で師範をつとめ、曹大家と尊称された。『女誡』は「卑弱」「夫婦」「敬順」「婦行」「専心」「曲從」「和叔妹」の七章からなり、「事舅姑」に該当する項目は、「曲從」である。

「曲従」

夫れ意を一人に得る、是を永く畢ると謂い、意を一人に失う、是を永く訖ると謂うは、人の志を定め心を専にせんと欲するの言なり。舅姑の心、豈に当に失う可けんや。物には恩を以て自ら離るる者あり、亦義を以て自ら破るる者あるなり。夫を愛すると云うと雖も、舅姑非なりと云わば、此れ所謂義を以て自ら破るる者なり。然らば則ち舅姑の心には奈何せん。故より曲従より尚きは莫し。姑「不なり」といいて是ならば、固より宜しく令に従うべし。姑「是なり」と云いて非なるも、猶を宜しく命に(注 12)。

宋若莘『女論語』(唐)

唐の女学士、宋若莘が『論語』に準じ、韋宣文君を孔子に代え、班昭を顔回として婦道を説く。「立身」「学作」「学礼」「早起」「事父母」「事舅姑」「事夫」「訓男女」「営家」「待客」「和柔」「守節」の 12 章からなる。四文字でまとめ暗記できるよう配慮してある。

「事舅姑」

阿翁阿姑は、夫家の主なり。既に他門に入れば、合に新婦と称すべし。供承看養、父母に如同す。敬しんで阿翁に事え、形容を覩ず、敢えて随行せず、敢えて對語せず。如し使令あらば、其の囑咐を聴け。姑座すれば則ち立ち、使令すれば便ち去る。早に起き門を開き、驚忤せしむ莫かれ。庭堂を灑掃し、巾布を洗濯し、齒藥・肥皂、温涼所を得、階前に退歩し、其の浣洗を待ち、萬福一聲、即時に退歩す(注 13)。

侯莫陳邈妻鄭氏『女孝経』(唐)

侯莫陳邈の妻鄭氏が、永王(玄宗の第十六子・李璘)の妃となる姪に、婦道を教えるために記した書。『孝経』にならい孔子の代わりを班昭に託し、班昭と姪との問答形式で記し、「開宗明義」「后妃」「夫人」「邦君」「庶人」「事舅姑」「三才」「孝治」「賢明」「紀德行」「五刑」「広要道」「広守信」「広揚名」「諫諍」「胎教」「母儀」「挙悪」の 18 章からなる。

「事舅姑」

女子の舅姑に事うるや、敬は父と同じく、愛は母と同じ。之を守る者は義なり。之を執る者は礼なり。雞初めて鳴けば、咸な盥い漱ぎて、衣服して以て朝す。冬は温かにして夏は清くし、昏に定し晨に省す。敬以て内を直し、義以て外を方しくし、礼・信立ちて而る後に行わる(注 14)。

『詩』に云う、「女子行有り、兄弟父母に遠ざかる(注 15)」。

宋代の女性にも読まれた『女誡』『女論語』『女孝経』にも「事舅姑」が記されていて、女訓書の記述と墓誌銘に見られる女性の行いは合致している。墓誌銘に載る女性は女訓書を読み、自ら女訓書に書かれているような行いをする、父母や舅姑に躰けられるなど、儒教の教えに従う行いをしたと考えられる反面、撰者が墓誌銘を記す際に、宋代の社会通念に合わせて、女性の道德教育の書である女訓書に記されている言辞を、賞賛の言葉に引用したとも考えられる。いずれにしても墓誌銘にみえる賞賛の言葉に関しては、事実かどうか立証できないが、「事舅姑」がいかに重要であったかは確認できる。

### (三)墓誌銘にみえる舅姑の存在

班昭『女誡』は、舅姑に仕えることを「曲從」とし、姑の言は正否を問わず従えとしている。宋若莘『女論語』と侯莫陳邈妻鄭氏『女孝經』は、舅姑の傍で早朝からお世話をせよとある。墓誌銘にみえる「事舅姑」と、女訓書の「事舅姑」は相通じていて、舅姑の存在の重要性がわかる。七出(注 16)のなかの一条にも、「舅姑に事へざるは去る」とあり、女性墓誌銘にもその事例が記されている。とくに姑の存在は、婦となった女性の立場を左右し、夫よりも強力な支配力をもっている。舅姑の気にいられず離婚させられた女性は、第四章 守節、再婚、離婚の「(四)墓誌銘にみえる離婚」であげている謝夫人墓表に載る先妻某氏だけである。先妻の某氏は、七出の「舅姑に事へざるは去る」に該当し、夫によって離縁させられている。舅姑に気にいられず離婚となった先妻・某氏の墓誌銘からも、嫁に対する舅姑の権限の大きさがうかがえる。

### (四)墓誌銘にみえる「從夫」

墓誌銘にみえる賞賛の言葉は「事舅姑」に次いで「從夫」が記されている。「從夫」は、北宋 551 人中 48 人(8.7%)、南宋 467 人中 29 人(6.2%)、両宋では 1018 人中 77 人(7.6%)の女性が夫に仕えている(別表 11「墓誌銘にみる賞賛の言葉」)。「從夫」が記されている 77 人の墓誌銘から例を挙げる。(以下の番号は別表「宋代女性墓誌銘」の整理番号を示す。)

北宋

0054 韓琦撰『安陽集』卷四十六 新婦賈氏墓誌銘

夫に能く事え、婦の道を盡す。(注 17)

0420 范祖禹撰「范太史集」卷四十六 三班奉職妻史氏墓誌銘

舅には父の如く事え、夫を佐すけ以て法度を敢えて懈らず。(注 18)

0597 汪藻撰『浮溪集』卷二十八 吳國夫人陳氏墓誌銘

舅姑には孝を以て事え、子には義を教え、僮使には恩を有して遇し、夫を敬うこと賓の如し。(注 19)

0117 呂陶撰『淨徳集』卷二十七 夫人文氏墓誌銘

舅姑には孝を以て事え、夫には順を以て事え、子を訓し家を治め、愛しみて法有り。(注 20)

0481 黃庭堅撰『黃文外』卷八 永安縣君金氏墓誌銘

其の姑に事えること其の母の如く、梁君(夫)に賓客の如く處す。(注 21)

0056 歐陽脩撰『歐陽文忠公集』卷三十六 渤海縣太君高氏墓碣

夫人孝力を以て其の舅に事え賢婦と為す。柔順を以て其の夫に事え賢妻と為す。恭儉を以て其の子を均一に教育し賢母と為す。(注 22)

南宋

0874 樓鑰撰『攻媿集』卷一百五 從妹樓夫人墓誌銘

姑には敬い仕え、夫には謹んで補佐す。(注 23)

0919 曹彦約撰『昌谷集』卷十八 梅坡孺人曹氏墓誌銘

婦の道を以て秦氏(姑)に事え終りまで扶養し、妻の道を以て先生(夫)に事え尽く敬い、母の道を以て其の子を撫む。(注 24)

1027 劉克莊撰『後村集』卷四十一 張碩人墓誌銘

夫に事え敬い、然りて苟順ならずなり。(注 25)

0607 胡寅撰『斐然集』卷二十六 吳國太夫人王氏墓誌銘

舅姑は婦の道をまもって事え、少師(夫)には謹んで妻の禮で遇す。(注 26)

0972 劉宰撰『漫塘集』卷三十 故澹軒先生艾公及其妻李氏墓誌銘

孝を以て舅姑に事え、和を以て娣姒を處し、順を以て其の夫に事え、巖を以て其の子に教える。(注 27)

0678 王庭堅撰『廬溪文集』卷四十三 故段夫人墓誌銘

孝にして謹んで其の姑に事え賢婦と稱され、賓禮を以て其の夫を遇し賢妻と為す。(注 28)

## (五)女訓書にみえる「從夫」

班昭『女誡』(後漢)

「敬慎」(夫には敬い從え)

陰陽性を殊にし、男女行を異にす。陽は剛を以て徳と為し、陰は柔を以て用と為す。男は彊きを以て貴しと為し、女は弱きを以て美と為す。故に鄙諺有りて云う。男を生まば狼の如きも、猶お其の兎を恐る。女を生まば鼠の如きも、猶お其の虎となるを恐る、と。然らば則ち身を修むるは敬に若くは莫く、彊きを避くるは順に若くは莫し。故に曰く「敬順の道は、婦人の大禮なりと。(注 29)

宋若莘『女論語』(唐)

「事夫」(夫に仕えるには)

女が嫁に一たびゆけば 夫主に愛していただけるのは 前の世からの定めのもとに 今の世になり縁組みしたから 夫を天になぞらえるのも 重い道義があつてのことよ 夫は剛く妻は柔しく たがいには相手をいつくしみあい 家に在つてのやりとりとても賓客をもてなすように敬え 夫がことばをかけてくれたら 耳をそばだてよく聴くように 夫が悪事を犯したならば 心をこめてお諫めなさい。(注 30)

宋若莘『女論語』(唐)

「三才(夫に仕えるには)」

諸女曰く「甚しき哉、夫の大なるや」と。大家曰く「夫は天なり。務めざるべけんや。古者、女子出嫁するを、歸りて天を移すと曰う。夫に事うるは其の義遠し。天の経なり。地の義なり。人の行なり。天地の性にして、人は是れ之れに則る。(注 31)

『女誡』には「敬慎」、『女論語』には「事夫」、『女孝経』には「三才」という項目で、夫に仕えることが記されている。そのうち『女論語』の「事夫」には、「夫が悪事を犯したならば、心をこめてお諫めなさい」とある。さらに『女孝経』のなかに「諫諍」(注 32)という項目があり、そこにも「夫を諫める」ことについて記されている。

侯莫陳邈妻鄭氏『女孝経』「諫諍」

諸女曰く、「敢えて問う。婦は夫の令に従はば、賢と謂うべきか」と。大家曰く、「是れ何の言ぞや、……夫に諍妻有れば、則ち非道に入らず。是を以て、衛女は齊の桓公を矯して、淫樂を聴かしめず。齊姜は晋の文公を遣りて、覇業を成さしむ。故に夫非道なれば、則ち之を諫む。夫の令に従う、又焉んぞ賢と爲すを得んや。『詩』に云う、『猷の未だ遠からざる。是を用いて大いに諫む。』(注 33)

『女孝経』は唐・侯莫陳邈の妻鄭氏が、永王(玄宗の第十六子、李璘)の妃となる姪に、婦道を教えるために記した書である故、王の妻としての心得として「諫諍」の項目を挙げたのであろう。宋代女性墓誌銘のなかにも、「諫諍の妻」ともいえる墓誌銘が存在する。次項の第八章「近親者が記した墓誌銘」でとりあげる。

## おわりに

宋代の既婚女性墓誌銘 1018 人に対する賞賛の言葉は、家庭内に限られている。男は「外」女は「内」と言われた時代だからこそ当然のことといえよう。女性の行状に関して一般的な墓誌銘は序論であげたように、宮崎氏、竺沙氏、梅原氏の見解どおり、脚色された記述が多く見られる。墓誌銘にみえる女性は、生家にあつては「事父母」、婚家にあつては「事舅姑」、次いで「従夫」「睦叔妹」「和宗族」「慈子供」と記されている。父母や舅姑、そして夫に仕えることは、すなわち「孝」である。男は「外」で「孝」を、女は「内」で「孝」を行つたのである。宋代では家の内で「孝」がもっとも重要視されたことが墓誌銘からもわかる。「孝」は家の内の秩序であり、常に下の世代による上への服従を意味したのである。

「孝」を家の内において実践させるために、宋代では「家法」がつくられ重視され、家人の生活を規制するようになった。家内における日常の倫理規範を記した文書が盛んに作られた。『歐陽氏族図』や『蘇氏族譜』に代表される族譜、「家規」「族規」「規約」などと呼ばれた家法、『司馬溫公書儀』や『朱子家礼』などの「家礼」、さらに「家訓」「家範」「家誡」「家教」「世範」など様々な書名の文書が存在した。

袁采は『袁氏世範』の「舅姑當奉承」の項で次のように記している。「人の婦も性行は誰しもそう異ならないが、小姑のある者に限って舅姑に好かれない。これは勿論、舅姑の愛が片寄っているからであるが、婦として要は専心従順にすべきで、かくすれば舅姑も長

い間には自然と悟であろう。父や舅姑が万一いつまでも察してくださねば、子たり婦たる者はどうも致し方がない。いやが上にも敬意を払い、あとは成り行きに任せるばかりである(注34)」と、舅姑には従順にせねばならぬと説いている。

オルガ・ラング氏は著書『中國の家族と社會』で次のように記している。「現代中国でも伝統的な層の姑は、昔のとおりに口やかましい。専制的な気難しい存在である。昔のとおりに、嫁は家の奴隷で、朝は誰よりも早く起き、姑だけでなく小姑たちや男たちにも仕えなければならない。金持ちの家では召使たちの仕事の監督も嫁の責任になっている(注35)」と。この記載はオルガ・ラング氏がおよそ60年前の著書である『中國の家族と社會Ⅱ』に記した一部である。女性墓誌銘に記されている「事舅姑」は、嫁となった女性に課せられた永遠の課題ともいえよう。

柳田節子氏は著書『宋代庶民の女たち』の「宗室・官僚の妻たちと訴訟」の項で「宋代の女たちは、自ら訴え主となって訴訟を起こし、妾婢が主人や主人一族を、妻が夫を、母が子を、嫁が姑を、姑が嫁を訴え、嫂叔相争い、宗室、士大夫の女たちも官を相手取って訴えを起こした。しかし宋代文集類の墓誌銘等には、士大夫・官僚の妻たちが取り上げられているが、そこに記されている女性像は、祖先の祀を絶やさず、舅姑に孝、夫に柔順、女工婦事につとめ、古典に通じて子弟を教育し、科擧に合格させ、身の貧を顧みず施しを惜しまないといった女性である。これらは士大夫・官僚が求めた、妻や女たちの望むべき姿だったのであろう(注36)」と記している。

柳田氏は宋代裁判における女性の訴訟をもとに、したたかに生きる宋代女性を活写しているが、士大夫層にもしたたかな女性がいたからこそ、撰者は墓誌銘のなかに理想とする女性を描いたともいえよう。さらに墓主の家族から執筆料をもらっての執筆であれば、墓主を美化こそすれ貶める表現はできず、依頼する家族も美化した表現を期待したのであろう。墓誌銘には賞賛の言葉が記された女性だけが載っているが、したたかに生きた女性も皆無ではなかろう。その比較は今後の課題として、本稿では墓誌銘のみに止めることにする。

墓誌銘にみえる女性の家庭内での行いは、信憑性に乏しいが、しかし見方によっては、それとてもそこから撰者が理想とする女性像や宋代社会の女性観が窺え、士大夫階層では儒教を重んじ、家法を生活の規範としたことが女性墓誌銘からも知ることができる。

## 注

- (1)司馬光「居家雜儀」(『司馬氏書儀』叢書集成初編 主編者:王雲五 商務印書館 1936 年)  
45 頁「女子則爲其講解『論語』、『孝經』及『列女傳』、『女誡』、使略曉大意。」
- (2)曾鞏撰『元豐集』卷四十五 沈氏夫人墓誌銘  
姑長興縣太君賈氏盡婦道、事夫盡妻道。
- (3)韓琦撰『安陽集』卷四十八 安康郡太君陳氏墓誌銘  
事其姑秦國太夫人曲盡婦道、～中略～、秦國亦愛而遇之猶息女也。
- (4)呂頤浩撰『忠肅集』卷十四 壽安縣許夫人墓誌銘  
善事其舅姑、睦其族姻內外無間言。
- (5)唐庚撰『眉山集』卷五 徐夫人墓誌銘  
舅姑得之喜、即委以家政。
- (6)范祖禹撰『范太史集』卷五十 右武衛大將軍處洲刺史妻壽光縣君王氏墓誌銘  
事姑盡禮溫恭、朝夕無少懈勤于家事、凡十七年如一。
- (7)葉適撰『水心集』卷二十一 李宜人鄭氏墓誌銘  
事舅姑無違、愛子不異庶嫡、遇妾媵尤有恩。
- (8)朱熹撰『朱文公集』卷九十一 夫人徐氏墓誌銘  
夫人生柔順靜正、父母愛之、既歸、舅姑盡禮。
- (9)劉宰撰『漫塘集』卷三十 澹軒先生艾公及其妻李氏墓誌銘  
夫人孝以事舅姑、和以處娣姒、順以事其夫、嚴以教其子。
- (10)史堯弼『蓮峯集』卷十 楊君夫人彭氏墓誌銘  
舅姑春秋高多疾、悉夫人夙夜治湯劑進飲食。
- (11)樓鑰『攻媿集』卷一百三 孺人俞氏墓誌銘  
嫁時舅姑已歿。恨不逮事。
- (12)山川麗著「女誡」(『中国女性史』笠間選書 78 笠間書院 1977 年) 119～120 頁  
「夫得意一人、是謂永畢、失意一人、是謂永訖、欲人定志專心之言也。舅姑之心、豈當可失哉。物有以恩自離者、亦有以義自破者也。夫雖云愛、舅姑云非、此所謂以義自破者也。然則舅姑之心奈何。故莫尚於曲從矣。姑云「不爾」而是、固宜從令。姑云「爾」而非、猶宜順命。勿得違戾是非、爭分曲直矣。此則所謂曲從矣。」
- (13)「阿翁阿姑 夫家之主 既入他門 合稱新婦 供承看養 如同父母 敬事阿翁 形容不靚 不敢隨行 不敢對語 如有使令 聽其囑咐 姑座則立 使令便去 早起開門 莫令驚忤 灑掃庭堂 洗濯巾布 齒藥肥皂 溫涼得所 退步措前 待其浣洗 萬福一聲 即時退步」  
(山川麗著『中国女性史』「女論語」129 頁)
- (14)「女子之事舅姑也、敬與父同、愛與母同。守之者義也。執之者禮也。雞初鳴、咸盥漱、衣服以朝焉。冬溫夏清、昏定晨省。敬以直內、義以方外、禮信立而後行。  
(山崎純一著『教育からみた中国女性史資料の研究』第五章 侯莫陳邈妻鄭氏「女孝經」354 頁)
- (15)「女性は実家にいることは許されず、夫家に嫁して身を立てねばならない」  
(石川忠久著『詩經』邶風・泉水「女子有行、遠父母兄弟」113 頁)

- (16)七出とは、妻を離縁し得る七つの条件。父母に柔順でない・子供がない・品行が淫ら・妬み深い・悪い病気がある・おしゃべり・盗みをする。妻がこの条件のいずれかに当たれば、夫はその妻を離縁してもよいとされた。  
(滋賀秀三『中国家族法の原理』「結婚と離婚」476頁)
- (17)韓琦撰『安陽集』卷四十六 新婦賈氏墓誌銘  
事夫能盡婦道。
- (18)范祖禹撰「范太史集」卷四十六 三班奉職妻史氏墓誌銘  
事舅如父、佐夫以法度不敢懈。
- (19)汪藻撰『浮溪集』卷二十八 吳國夫人陳氏墓誌銘  
事舅姑孝、教子義、遇僮使有恩、敬夫如賓。
- (20)呂陶撰『淨德集』卷二十七 夫人文氏墓誌銘  
事舅姑以孝、事夫以順、訓子治家、愛而有法。
- (21)黃庭堅撰『黃文外』卷八 永安縣君金氏墓誌銘  
事其姑如事其母、梁君(夫)如賓客處。
- (22)歐陽脩撰『歐陽文忠公集』卷三十六 渤海縣太君高氏墓碣  
夫人以孝力事其舅為賢婦。以柔順事其夫為賢妻。以恭儉均一教育其子為賢母。
- (23)樓鑰撰『攻媿集』卷一百五 從妹樓夫人墓誌銘  
仰奉其姑、謹相夫子。
- (24)曹彥約撰『昌谷集』卷十八 梅坡孺人曹氏墓誌銘  
以婦道事秦氏(姑)終其養、以妻道事先生畢其敬、以母道撫其子。
- (25)劉克莊撰『後村集』卷四十一 張碩人墓誌銘  
事夫敬、然不苟順也。
- (26)胡寅撰『斐然集』卷二十六 吳國太夫人王氏墓誌銘  
事舅姑執婦道、待少師(夫)謹妻禮。
- (27)劉宰撰『漫塘集』卷三十 故澹先生艾公及其妻李氏墓誌銘  
孝以事舅姑、和以處娣姒、順以事其夫、巖以教其子。
- (28)王庭堅撰『廬溪文集』卷四十三 故段夫人墓誌銘  
孝謹事其姑稱賢婦、以賓禮遇其夫為賢妻。
- (29)陰陽殊性、男女異義行。陽以剛為德し、陰以柔為用。男以彊為貴、女以弱為美。故鄙諺有云。「生男如狼、猶恐其尪。生女如鼠、猶恐其虎。然則修身莫若敬、避彊莫若順。」故曰「敬順之道、婦人之大禮也。」
- (30)女子出嫁 夫主為親 前生緣分 今世婚姻 將夫比天 其義匪輕 夫剛妻柔 恩愛相因 居家相待 敬重如賓 夫有言語 側耳詳聽 夫有惡事 勸諫諄諄……
- (31)諸女曰「甚哉夫之大也。」大家曰「夫者天也。可不務乎。古者、女子出嫁、曰歸移天。事夫其義遠矣。天之契經也。地之義也。人之行也。天地之性、而人是則之。」
- (32)『孝經』の同名の章にならって設けられた章。「目上を諫めることから転じて、夫を諫めることを言う。」
- (33)諸女曰「若夫廉・貞・孝・義、事姑敬夫、揚名、則聞命矣。敢問。婦從夫之令、可謂賢乎。」大家曰「是何言歟、是何言歟。～中略～夫有諍妻、則不入於非道。是以、

衛女矯齊桓公、不聽淫樂。齊姜遣晉文公、而成霸業。故夫非道、則諫之。從夫之令、又焉得爲賢乎。)詩云「猷之未遠、是用大諫」

(山崎純一著『教育からみた中国女性史資料の研究』第五章 侯莫陳邈妻鄭氏『女孝経』371~2 頁)

(34)袁采「舅姑當奉事」(『袁氏世範』百部叢書集成 芸文印書館 1964~66 年) 11~12 頁

袁采「舅姑には従順にせねばならぬ」(『袁采世範』譯者・西田太一郎 創元社 1941 年) 24~25 頁

(35)オルガ.ラング「しゅうとめ一よめ」(『中國の家族と社會Ⅱ』 岩波現代叢書 岩波書店 1954 年) 58 頁

(36)柳田節子「宗室・官僚の妻たちと訴訟」(『宋代庶民の女たち』汲古選書 36 汲古書院 2003 年) 55~7 頁

## 第八章 近親者が記した墓誌銘

### はじめに

序文でも述べているが、墓誌銘は被葬者の生涯を記したもので、いわば履歴書のようなものである。一般には被葬者の家族が、名のある文筆家に被葬者の行状を渡し、執筆料を支払って執筆の依頼をするのが通常である。こうした一般的な墓誌銘のほかに、夫や子供をはじめ祖父・父・弟・甥など近親者が記した墓誌銘が北宋 54 人、南宋 76 人と、両宋では 130 人存在する(別表 1 2「近親者が記した墓誌銘」参照)。

近親者が記した墓誌銘のなかには、一般的な墓誌銘と変わらない墓誌銘もみられるが、多くは被葬者への哀惜の情が記され、読み手の心に響くものが多い。さらに近親者のみが知り得る家庭内における夫婦の姿も垣間見ることができる。

1075 人の墓誌銘をみると、士大夫が自ら亡妻、亡母、亡姉、亡女、亡孫のために記した墓誌銘のうち、亡妻墓誌銘が最も多く北宋 19 人、南宋 29 人、両宋で 48 人と 130 人中(36.9%)三割以上を占めている。亡妻墓誌銘について野村鮎子氏は「亡妻墓誌銘自体は既に六朝にその例を求めることができるものの、これが発展したのは唐代であり、亡妻に対する哀悼が古文の一つのテーマとして確立したのは、中唐以後のことである。唐代では現存の文集も少ないため、一部の文学者を除いて亡妻墓誌銘や祭亡妻文が別集に収載されて伝わることは稀である。しかし、宋代になると、妻に先立たれた文学者は、かなりの割合で墓誌銘もしくは祭文を書いたらしく、別集に収載されるようになる(注 1)」と述べている。

亡妻墓誌銘は北宋では蘇舜欽、李覲、曾鞏、韓琦、蘇軾、南宋では胡寅、劉宰、陸游、周必大、葉適らが記している。

亡母墓誌銘は北宋では胡宿、李覲、陳師道、陸佃、劉弇、南宋では胡銓、袁燮、樓鑰、文天祥、劉克莊らが記している。

亡娘・亡孫のために記した墓誌銘が、北宋と南宋で 4 人ずつみえる。北宋では王安石、曾鞏、程顥、唐庚、南宋では周必大、周南、衛涇、元好問らが記している。

未婚女性の墓誌銘は 1075 人中 57 人存在するが、うち 49 人は宗室関係の未婚女性である。上記 8 人の墓誌銘は父や祖父が自ら記した数少ない墓誌銘である。

本稿では、撰者に執筆を依頼した墓誌銘と、近親者が自ら記した墓誌銘、家族が親交のある知人に被葬者の行状を文書または口述で伝え、執筆してもらった墓誌銘をあげ、依頼墓誌銘と近親者が自ら記した墓誌銘とを比べてみよう。

### (一) 撰者に依頼した墓誌銘

撰者に依頼した墓誌銘とは、遺族が官僚・名士・文筆家などに墓主の行状または履歴を渡して、序と銘を記してもらい墓誌に刻んだものである。撰者は最初に父を始めとする祖先の名と官職が列記され、生家を称揚している。墓主への賞賛の言葉は、儒教の教えに基づいた「孝」と「貞」で表されている。ここでは北宋の謝逸が依頼されて執筆した「彭夫人墓誌銘」をあげる。

0540 謝逸『溪堂集』卷九 彭夫人墓誌銘

年十有八にして陳氏に歸ぐ。陳氏大族にして、堂を合わせ食を同うする者畜に數百指のみならず。夫人舅姑に事え、娣姒と睦み、媵妾を撫し、和して禮有り。内外の宗族を待するに、一に忠誠を以てし、貧富を以て其の心を輕重せず。其の尤け貧しくして自存する能わざる者、衣を解いて食を推め以て之を濟う。故に死するの日、哭く者の聲色相い屬く。(注2)

夫人は舅姑につかえ、娣姒と睦み、媵妾を撫しみ和し、そして礼を有して内外宗族と侍し、一に忠誠を以てす……。と、理想的な女性として記されている。

近親者が記した墓誌銘には、夫や子が妻や母の在りし日の行状を自ら記したものと、親しい友人または尊敬する知人に妻や母の事状を持参する、または口述で伝えて執筆を依頼したものもと二通りがある。いずれの場合も、墓主の姓・名・本貫(本籍地)・父に至る祖先の官歴・母の出自と姓・墓主の性格と生活態度・死亡年月日と死亡年齢・埋葬年月日と埋葬地・子供の数・男子は官職・女子は嫁ぎ先など、典型的な墓誌銘の書き方を踏襲しているが、夫や子が心をこめて妻や母の在りし日の行状を記す、または述べているため、そこには墓主を忍ぶ哀惜の情がみられ、近親者が記した墓誌銘ならではの内容となっている。

以下、近親者が記した墓誌銘、夫や子が親交のある友人・知人の有名人に、被葬者の行状を記した書面を持参する、または口述で述べるなどの墓誌銘をいくつかあげてみよう。

## (二) 夫が記した亡妻墓誌銘

0164 蘇軾『東坡全集』卷八十九 亡妻王氏墓誌銘

治平二年(1065)五月丁亥、趙郡蘇軾の妻王氏、京師に於いて卒す。六月甲午、京城の西に殯し、其明年六月壬午、眉の東北彭山縣安鎮郷可龍里、先君先夫人の墓西北八歩に葬る。軾其の墓に銘して曰く「君諱は弗、眉の青神の人なり。郷貢進士方の女たり。生れて十有六年にして軾に歸ぐ。子邁有り。君未だ嫁せざるに父母に事へ、既に嫁して吾が先君先夫人に事ふる。皆謹肅を以て聞こゆ。」。其の始末だ嘗て自ら其の書を知るを言うなり。軾の書を読むを見れば則ち終日去らず、亦其の能く通ずるを知らざるなり。其後軾忘るる所有れば、君輒ち能く之を記す。其他書を問えば、則ち皆畧ぼ之を知る。是由りて始て其敏にして静なるを知るなり。軾鳳州に官たるに従う。軾外に為す所有り、君未だ嘗て其詳知るを問わず。曰く「子親を去る遠し。以て慎まざる可からずと。」日に先君の軾を戒むる所以を以て相語るなり。軾客與外に於いて言う、君屏間に立ちて之を聴き、退けば必ず其の言を反覆して曰く「某人やなり。」言輒ち兩端を持し、惟だ子が意の嚮(むかう)ふ所、子何ぞ是人與言うを用いん。來たり軾與親厚を求むる甚き者有り。君曰く「恐くは久き能わず、其人に與する鋭なるも、其人去る必速ならんと。」已にして果して然り。死なんと將に歳なり。其言聴く可き多し。識有る者に類す。其れ死するなり。蓋し年二十有七にして始めて死する。先君軾に命じて曰く「婦汝の艱難に従う、忘る可らざるなり。他日汝必ず諸(これ)を其の姑の側に葬れと。」未だ期年ならず。而して先君没す。軾謹んで遺令を以て之を葬る(注3)。

蘇軾の妻王氏は、慎み深いことで知られるうえに学問のある女性であった。故に「軾の書を讀むを見れば則ち終日去らず、亦其の能く通ずるを知らざるなり。其後軾忘るる所有れば、君輒ち能く之を記す。其他書を問えば、則ち皆畧ぼ之を知る。是由りて始て其敏にして静なるを知るなり。」と記されている。

また蘇軾の鳳州赴任に従い、軾客與外に於いて言う、君屏間に立ちて之を聴き、退けば必ず其の言を反覆して曰く「某人やなり。」言輒ち兩端を持し、惟だ子が意の嚮(むかう)ふ所、子何ぞ是人與言うを用いん。來たり軾與親厚を求むる甚き者有り。君曰く「恐らくは久き能わず、其人に與(くみ)する鋭なるも、其人去る必速ならんと。」已にして果して然り。と記されているように、蘇軾の言動について意見を述べている。夫ならではの視点から記された墓誌銘である。

#### 0915 葉適『水心集』卷十八 高令人墓誌銘

蒙城の高氏、六歳のとき、父京山尉と為り、能く其の母を助け、父を思い輒ち涕泣し、父帰れば乃ち已む。知象山縣に従い、父の思慮の及ばざる所あれば、必ず之を左右(たす)く。余の妻と為り、舍を賃し甚だ貧しく、一間を閉ざし、終日聲を聞かず。親ら粥飯十餘盤を饌し、魚肉鮭采略ぼ具う。人以て為らく“難し”と。官は禄の上下に視し、月儲もて以て舅を奉じ、伯叔羣従を次にし、餘無し。食う所は太湖葱・城東の苽芥のみ。服飾・進止常に儼然たり、見る者皆其の華整を尚し、其の敝故の洗刷して然るを知らざるなり。晩歳にして三子始めて育ち、始めて宅居有り、稍や田を墾き、市糴せず、然して自處すること一に其の初めの如し。蓋し其の剛簡にして無欲、余の憚るる所なり。其の静蜜にして知有り、余の服する所なり。其の能多くして解し易く、緩急程に中り、事の本末を識り、大抵余の資(もたら)す所以て家の為にするなり。嘉定四年(1211)十二月初十日、年五十二にして卒す。五年三月二十日、開元觀の後山に葬る。余の觀るに、古自り特立獨行の士にして、復た世に望む所無く、旅泊して其の身は以て苟免する者、固より已に衆し。是れ悲しむに足らざるなり。然れども豈に亦た夫れ親に順い戚の屬に和して之が託と為ること有らざらんや。今余敢えて特立して獨行するを謂うに非るも、然れども既に老い且つ病み且つ衰え、且暮に盡きん。而るに高氏迫(いそ)ぎて余を待たず、遂に余を棄て(死)し、是を以て余をして親に順い、戚に和し之が託と為ること無からしむ、是れ亦た悲しむに足らざらんや。銘に曰く、千世の遠く、百年の長き。天寛く地闊し。此れ何の祥為るや(注4)。

葉適は父が書を教え、母が糸を紡ぎ布を織るという貧しい家庭で育ったが、勉学に励み『宋史』の伝によると、淳熙5年(1178)に榜眼(進士第二位)で合格している。妻の高氏の父は京山尉・知象山縣で、裕福な家とはいえないが、祖先に英宗の高皇后をだした家である。貧しい知識人の家に生まれた葉適にとって、宗室の外戚の子孫である妻の家柄は、葉適自身に箔をつけることになったと思える。また葉適の妻の父親である高子莫にとっても、進士に及第した葉適を婿にすることは、歓迎すべきものであったと考えられる。

しかし嫁いでみると、葉適の家には舅をはじめ伯叔が同居し、食べ物は「太湖葱・城東

の菰芥のみ」とあるように貧しい暮らしであったが、高氏は所帯を切り回し内助の功をつくし52歳で歿した。このとき葉適は62歳であった。糟糠の妻とも言える高氏の死は、葉適に無常感を抱かせたのであろう。故に「今余敢えて特立して獨行するを謂うに非るも、然れども既に老い且つ病み且つ衰え、旦暮に盡きん。而るに高氏迫(いそ)ぎて余を待たず、遂に余を棄て(死し)、是を以て余をして親に順い、戚に和し之が託と為ること無からしむ、是れ亦た悲しむに足らざらん。」と恋慕の情を連ねている。妻に先立たれた夫の悲哀がにじむ墓誌銘である。

### (三) 夫が友人に口述で依頼した亡妻墓誌銘

0051 歐陽脩撰『文忠集』卷三十六 南陽縣君謝氏墓誌銘

慶曆四年(1044)の秋、予(歐陽脩)の友、宛陵の梅聖俞、吳興自り来たり。其の内(妻)を哭するの詩を出だして悲しんで曰く「吾が妻謝氏亡せりと。我銘を丐い而して葬らんことを。」予(歐陽脩)之を諾して未だ作るに暇あらず。居ること一歳の中、書七八至る。未だ嘗て謝氏の銘を以て言うを為さずんばならず。且つ曰く「吾(梅聖俞)妻は故の太子賓客諱は濤の女なり、希深の妹なり。希深父子時の聞人(ぶんじん)にして世顯榮たり。謝氏盛族に生まれ、年二十にして吾に帰ぐ。凡十七年にして卒す。卒するの夕、斂むるに嫁する時の衣を以てす。甚しいかな吾が貧知る可しなり。然れども謝氏怡然として之に處り、其の家を治むるに常法有り。其の飲食器皿(きべい)豊侈に及ばずと雖も而れども必ず精にして以て旨し。其の衣故新無し。而れども澣濯縫紉必潔にして以て完す。至所の官舎庠陋と雖も而れども庭宇灑掃(さいそう)肅にして以て嚴なり。其の平居語言容止必ず從容として以て和ぐ。吾れ世に窮する久しきかな。其れ出でて幸に賢士大夫與遊んで楽しみ、入れば則ち吾が妻の怡怡たるを見て、其の憂を忘る。吾をして富貴貧賤を以て其の心を累ねざらしむは、抑(そもそも)吾妻の助なり。」

吾嘗て士大夫と與に語たる。謝氏多くは戸屏従り竊に之を聽き、問あれば則ち盡く能く其の人の才能賢否及び時事の得失を商推するなり。皆條理有り。吾(梅聖俞)吳興に官す。或いは外自り酔うて歸る、必ず問うて曰く「今日孰(いづれ)と與に飲んで楽しみりやと。」其の賢者なるを聞いて則ち悦ぶなり。否ずんば則ち歎じて曰く「君の交る所一時の賢雋、豈其れ己を屈して之に下らんや。惟だ道德を以てす。故に合う者尤も寡し。今是の人と飲んで歡まんや」と。是歳南方旱す、仰いで飛蝗を見る。歎じて曰く「いま西兵未だ解けず、天下重困、盜賊暴に江淮に起る。而して天旱し且つ蝗する此の如し。我は婦人爲り。死して君我を葬ることを得ば幸なりと。其れ能く貧に安居して困まざる所以の者は、其の性識明にして道理を知る、此の類多ければなり。嗚呼其れ生くるや、吾の貧に迫りて没するや。又以て厚うする無しか。謂うに惟だ文字以て其の不朽(ふきゅう)を著す可し。且つ其の生平尤も文章の貴ぶ可しと爲すを知る。歿して此れを得ば庶幾(こいねがわく)は以て其の魂を慰め且つ予が悲を塞(ふさ)がん。此に我れ銘を子に請う勤むる所なりと。此の若くんば予銘せざるに忍びんや。」夫人享年三十七、夫の恩を用いて南陽縣君に封ぜらる。二男

一女あり。其の年七月七日を以て高郵に卒す。梅氏世宛陵に葬る。貧を以て帰する能はざるなり。某年某月某日、潤州の某縣某原に葬る(注5)。

歐陽脩が梅堯臣の依頼に応じて、梅堯臣の妻の謝氏のために記した墓誌銘が上記の南陽縣君謝氏墓誌銘である。謝氏の生家は立派な家柄で、父は東宮職の太子賓客にまで上った謝濤であり、兄は皇帝の側近くで詔勅の起草などを掌る秘書役知制誥の謝絳である。このような名門出身の女性が、華南縣主簿の梅堯臣に嫁いだのか、結婚の詳しい経緯については定かでない。二人が結婚した年は、天聖五年(1027)、謝氏の死は慶曆四年(1044)七月七日の未明、高郵の三溝であった。この年、呉興の監税官をやめて一時帰郷した梅堯臣が、また都の開封に上がる途中、大運河沿いの高郵で、謝氏の病死という思いがけない事態に遭遇したのである。それは結婚十七年目、梅堯臣は四十三歳、謝氏は三十七歳であった。愛妻を失った梅堯臣の悲しみは、彼の詩「悼亡」三首(注6)からも察することができる。

其の一：髪を結びて夫婦と為り 今に於て十七年 相看れども猶お足らず  
何ぞ況んや是に長く捐つるをや 我が鬢は已に白きもの多く  
此の身寧んぞ久しく全からん 終に当に与に穴を同じうすべし  
未だ死せずして涙は漣漣たり

其の二：出づる毎に身は夢の如く 人に逢うも彊意多し 帰り来たるも仍お寂寞たり  
語らんと欲するも誰何に向かわん 窓は冷かにして孤螢入り  
宵は長くして一鴈過ぐ 世間には最なる苦しみは無く 精爽此に銷磨す

其の三：從來修短有り 豈に敢えて蒼天に問わんや 人間の婦を見尽すも  
美しく且つ賢なるに如くは無し 譬令えば愚者は寿なりとせば 何ぞ其の年を  
仮さざる 此の連城の宝の 沈み埋もれて九泉に向かうに忍びんや

上記の詩三首には、梅堯臣の謝氏を慕う思いが切々と記されているが、其の三では「人間の婦を見尽すも 美しく且つ賢なるに如くは無し」と、「この世の妻たる人を見尽くしたなかで、あなたほど美しく賢い人はいなかった」と述べている。

歐陽脩と梅堯臣とは親しい友であり、ともに西崑体(注7)といわれる、ありきたりの形容詞を使わない詩をつくり、詩文の改革運動によって新しい古文を提唱した。梅堯臣が詩友である歐陽脩に亡妻の墓誌銘の序を依頼したが、歐陽脩は暇がなく記することができなかった。梅堯臣の催促により、梅堯臣が口頭で語った言葉を借りて構成されている。そのため謝氏の家庭生活における言動が具体的に現実味を帯びて書き記されている。最後の「夫人は享年三十有七なり。……潤州の某縣某原に葬る。」は歐陽脩が記している。

歐陽脩が執筆した墓誌銘には21人の女性が載っているが、謝氏墓誌銘のように具体的な歴史事実をもって墓誌銘を記すという形式は、唯一これだけである。さらに21人のなかには、歐陽脩の最初の妻である胥氏と二番目の妻である楊氏の墓誌銘もみえるが、この二人の墓誌銘の執筆は、歐陽脩が門人に命じて書かせている。故に墓誌銘の冒頭は「廬陵歐陽先生…」から始まっている。歐陽脩自身の記述でないことは、後の課題としたい。

## (四)子が記した亡母墓誌銘

李觀『吁江集』卷三十一 先夫人墓誌

夫人姓は鄭氏、其の先は蓋し郷の大姓たり。曾祖某、祖某、考某、皆仕えず。夫人初めて二男有り。無服の瘍と為す。觀生まれて十四年にして、先君没す。是の時家甚だ貧しく山中に屏居す。城を去ること百里、水田二三畝其の餘にて高陸を栽す。故に常に食わざるなり。夫人は剛正にして計筭有り。僮客を募り燒薙耕耨し、同に其の利に與る。晝は農事を閱し、夜は女功を治む。作を賣り以て財用を佐く。盍月は蓋だし未だ嘗て寝ず。勤苦竭蓋し、以て凍餒を免かる。而るに觀は出游して師友を求めるを得れば、家事を為さず其の心用いること罔く、業を卒え成人と成らん。然らざれば、菽爾たる小子、傭保となり、負販となるも、供養して猶お足らざらん。何の暇か孳孳として學問する間あらんや？ 復た舊居に還り、婦を娶り孫有り、平人の家の如し。夫人滋々倦まず、門内の細碎、觀尚お知るに及ばず。慶曆中、科目に應じるも罷め歸り、洒ち自ら念じ、親老し、しかれども數々棄去し、江湖に舟し、京國に客し、以て之が憂と為す、抑も又た空を窮み、以て甘脆を備えること無きは、人の子の宜くする所に非ず。困りて決して仕進を求めず、恥を忍び衣食を業とし、終養を庶い、憾み有ること無し。既に八九年して智淺く力少く、志の如くするあたわず。夫人の性設施すること多く、義を好み人を信ず。祭祀、賓客、婚姻の禮、貧なる故を以て之を略さず。人の緩急もてきたり求むること有るを聞かば、之に應じ唯だ逮ばざるを恐れるのみ。衣服の身に在れば必ず假し、飲食の前に在れば必ず輟む。況や錢穀において、固より吝心無し。此れに由り困乏し、百計效あらず、夫人も亦た之を厭む(注8)。

李觀は、女手一つで育ててくれた母に対し、自分は「家事を為さず」と記しているが、『宋人傳記資料索引』によると「俊辨、文を能くし、茂才異等に挙げられる。親が老いたので、教授を以て自ら資し、学ぶ者常に數十百人。」とあり、後年には母に孝を盡している。

## (五)子が知人に書面を持参した亡母墓誌銘

蘇洵撰『嘉祐集』 武陽縣君程氏墓誌銘

治平三年(1066)夏、蘇府君(蘇洵)京師に於いて終わる。光(司馬光)往きて弔う。二孤軾轍哭きて且つ言いて曰く「今將に先君を奉じて、柩を歸し蜀に於いて蜀人とあわせ葬るや」。同壟に壙異なる日、吾が母夫人の葬なり。未だ之れ銘は、子の我れ其の壙に銘を為らず。光は固辞し命に困りて獲し曰く「夫人の徳は人と異なり能く知る所と非ざるなり」。願いを聞く。二孤は其の事状を奉り、拝して光に授く。光拝受し退して次に之れ曰く「夫人姓は鄭氏、眉山大理寺文應の女なり、生十八年にして蘇氏に歸す、程氏富し蘇氏極貧たり。…府君年二十七にして猶ほ學ならず、一日慨然として謂いて夫人曰く「吾れ視(じ)しし今猶ほ學ぶ可し、然らば家は我が待する」と。「而して學を生かし且つ生を廢するは奈何せん」。夫人曰く「我れ之れ言うを欲して久しきかな。いづくんぞ子を使し(養う)困りて為す、我れ學は子苟にして志有り、

以て生を累なぐは我れ可なり」。即ち服玩を罄出し之にて鬻う、以て治生數年とせず、遂に富家と為す。府君是れ由り専ら志を得、学び卒へ大儒と為るなり。……夫人能く開發輔導其の夫子成就、皆文學を以て天下に顕重ならしめ識慮高絶ならるに非ず。能く是の如くならんや(注9)。

程氏の子である蘇軾と蘇轍が、母の行状を記した書を司馬光のもとに持参して、墓誌銘の執筆を依頼している。故に程氏富み蘇氏極めて貧なり。府君年二十七にして猶ほ學ばず、一旦慨然として夫人に謂いて曰く、「吾自ら視て、今猶お學ぶべし。然れども家我を待ちて生く、學べば且に生を廢すべし、奈何せん？」夫人曰く、「我之を言わんと欲して久し、悪んぞ子をして我に因りて學ぶ者と為さしめんや！子苟志有れば、生を以て我を累わすも我可なり。」即ち罄く服玩を出して之を鬻い以て生を治め、數年ならずして遂に富家と為る。府君是に由り専ら學を志すを得、卒に大儒と成る。夫人讀書を喜び、皆な其の大義を識る。軾・轍の幼きとき、夫人親ら之に教え、常に戒めて曰く、「汝讀書せよ、曹耦に効う勿れ、止だ書生を以て自ら名あらしむるを欲するのみ。」毎に古人の名節を稱引して以て之を勵して、曰く、「汝果して能く直道に死せば、吾れ戚ることなし。」このような言行は身内のみが知ることであり、家庭の様子がありのままに記され、蘇洵一家の状況をしのぶことができる。しかし最後の「已にして、二子同年に進士第に登り……」以後は司馬光自身が記し、「夫人能く開發輔導、其の夫子成就、皆文學を以て天下に顕重ならしめ識慮高絶ならるに非ず。能く是の如くならんや。」は、程氏が内助の功によって夫や子を成就させたことで、墓誌銘の記述を固辞した司馬光が、程氏に対し賞賛の言葉を呈している。

## (六)子が記した書面による亡母墓誌銘

沈遘撰『西溪集』卷十 方夫人墓誌銘

夫人姓は方氏、東陽の人たり。贈尚書屯田員外郎允の女なり。母は南陽縣太君施氏と曰う。夫人二十一にして郡人の陳君爽生に歸ぐ。五男は曰く盤、曰く舜臣、曰く寶臣、曰く嘯、曰く確。年七十、嘉祐元年十二月某甲子寢疾、以て明年八月某甲子、金華縣の先塋に葬る。次確は余(撰者・沈遘)と同年の進士なり。書を以て來たりて曰く「確は不孝にして母への孝養を究め得ず、死を恨み無念である、以て其の心を盡し、幸いにして母の懿を銘するを得、以て諸幽に蔵し後世に聞く有り、確の望みなり。」敢えて以て請う(注10)。

方夫人の末子である確が同年の進士である友人の沈遘に書面を持参して、亡母の墓誌銘執筆を依頼。書き出しは姓・出身地・父の官職と名・母の名と規定通りの書きき方をしているが、子である確の言葉を記した「確は不孝にして母への孝養を究め得ず、死を恨み無念である、以て其の心を盡し、幸いにして母の懿を銘するを得、以て諸幽に蔵し後世に聞く有り、確の望みなり。」は、親孝行できなかった子の悲しさが綴られた墓誌銘である。

## (七) 弟が記した亡姉墓誌銘

汪慶辰『文定集』卷十八 夫人汪氏墓誌銘

夫人吾が姉なり。姓は汪氏、信州玉山の人。父諱は某、贈通議大夫たり。母魯氏、淑人に追封される。夫人十有九歳にして同縣の程昂に嫁す。躬ずから俟約に勤め難に堪え、しかも夫人は安の性は質直にして、未だ嘗て色辞を偽り人欺かず。蓋し嘗(つね)に曰く「吾れ老い且つ衰しても家事を致すことを欲すと。而して自ずと佚(いつ)なり。人亦宜しく饗をなすべし。其れ報いるに皆未だ及ばず。乾道六年(1170)九月巳丑卒す。年六十有三、三子男三人、長克勤、次克和蚤卒、次克成。孫男八人、女三人。其の孤将に七年十有二月壬寅を以て、夫人玉山の塘田社に葬むらんとす。來たりて銘を請う。嗚呼吾が兄(夫人汪氏の夫)哭し、一年たちて又吾が姉哭すなり。子然(げつぜん)此の身幸と雖も僅かに存す、亦何ぞ聊哉。銘に曰く「其の艱、其の勤以て終わり、其の身容(ああ)爾(なんじ)、後人尚顕かに其の親を能くす(注11)。

汪氏は「吾れ老い且つ衰しても家事を致すことを欲すと。……」は、主婦の本音である。主婦である筆者もいつまでも家事ができることを願っている。姉の言葉がそのまま記され、現実味を帯びた墓誌銘といえる。

## (八) 甥が記した亡叔母墓誌銘

黄庭堅撰『山谷外集』卷八 叔母章夫人墓誌銘

叔母章氏 洪州分寧縣の人、處士諱な積の女なり。夫人幼きとき誦書を喜び筆墨を弄ぶ。父母之を禁じ、諸女と相い従はしむ。夜績(う)み其の寢息するを待ち、乃りて自ら課を程(はか)り、是由り書知る。父母に事え、其の喪に居りては、純孝を以て聞ゆ。年若干にして叔父に帰ぐ。叔父の性高朗にして酒を嗜み、客を賓くを好み、客饌咄嗟に辨を責めらるるも、夫人怡然として令に従い、未だ嘗て肅給せざるんばあらざるなり。叔父平日大率(おおむね)常に酔い、或いは使酒して嫚侮するも、夫人之を承け、未だ嘗て礼を以てせずんばあらざるなり。夫人嘗て叔父の甚しくは酔はざる時を間(うかが)い諫めて曰く、「君終日是の如し。諸子をして皆な法象せむるに何を以てが家を為(おさ)めんや。」叔父曰く、「吾が兄弟の子多く賢なり、家を克(おさむ)る者 自ら當に我に法(ならは)ず彼に法うべきなり(注12)。

酒の好きな黄庭堅の叔父を妻が諫めている会話が記され、黄庭堅は甥ならではの視点で、墓誌銘に記している。

## おわりに

近親者が記した墓誌銘と、名のある人に執筆を依頼した墓誌銘とを読みくらべると、第七章の「家庭での行状」に記されている行いが、いかに定型句で飾られているかが推測できる。前述の「彭夫人墓誌銘(0540)」には、生家では父母に孝、婚家では舅姑に仕え、夫に従い、兄弟姉妹と睦み、宗族と和し、子を慈しんだと、儒教の教え通りの理想的な女性像が描かれている。まさに宮崎氏、竺沙氏、梅原氏の指摘のように、墓主を称揚するための脚色された記述とも読みとることができる。

しかし蘇軾と葉適が記した亡妻墓誌銘、梅堯臣が歐陽脩に口述で依頼した亡妻墓誌銘、蘇軾と蘇轍兄弟が司馬光に書面で依頼した亡母墓誌銘、黄庭堅が記した叔母章夫人墓誌銘には、当時の女性の家庭内での本当の姿を描いている。「夫は陽」「妻は陰」、「夫は外」「妻は内」といわれた時代に在って、ここにあげた女性たちは、「内」と「陰」の範疇の中で、夫に従いつつも最大限に自分の考えを通しつつ、内助の功をつくしている。夫の意のままになるのではなく、自分の意志で行動している。こうした行動ができるのも、学問があり教養があつてこそのことである。先引の女性墓誌銘から該当する箇所をあげてみよう。

蘇軾撰 亡妻王氏墓誌銘には、「其の始末だ嘗て自ら其の書を知るを言うなり。軾の書を読むを見れば則ち終日去らず、亦其の能く通ずるを知らざるなり。其後軾忘るる所有れば、君輒ち能く之を記す。其他書を問えば、則ち皆畧ぼ之を知る。」

葉適撰 高令人墓誌銘には、「其の静蜜にして知有り、余の服する所なり。其の能多くして解し易く、緩急程に中り、事の本末を識り、大抵余の資す所以て家の為にするなり。」

歐陽脩撰 南陽縣君謝氏墓誌銘には、「吾(梅聖俞)妻は故の太子賓客諱は濤の女なり、希深の妹なり。希深父子時の聞人(ぶんじん)にして世顯榮たり。謝氏盛族に生まれ、年二十にして吾に帰ぐ。……其の性識明にして道理を知る。」

蘇洵撰 武陽縣君程氏墓誌銘には、「夫人能く開發輔導其の夫子成就、皆文學を以て天下に顯重ならしめ識慮高絶ならるに非ず。能く是の如くならんや。」

黄庭堅撰 叔母章夫人墓誌銘には、「夫人幼きとき誦書を喜び筆墨を弄ぶ。父母之を禁じ、諸女と相い従はしむ。夜績(う)み其の寢息するを待ち、乃りて自ら課を程(はか)り、是由り書知る。」

司馬光は人妻の在り方について、人妻たるものは六つの徳を有していなければならない。それは「一に従順・二に清潔・三に不妒・四に儉約・五に恭謹・六に勤労」と。さらに夫と妻については「夫は天なり、妻は地なり」「夫は日なり、妻は月なり」「夫は陽なり、妻は陰なり」(注13)と説いている。

このような家法が遵守されていた宋代において、前述の妻たちは夫に意見をし、さらに指図までしている。「男は外、女は内」によって、「内」が守備範囲であつた女性は、家の中では夫と対等であつたとも思える。妻が対等の行いをするためには、それなりの教養が必要であるが、士大夫層の女性は学問があり教養があつた。生家での成長過程において、兄弟が勉学に勤しんでいる、身近に蔵書がある、祖父母や父母が勉学の手ほどきをするなど、知的環境に恵まれ「知」の能力を向上させることができた。

女子にも学問をさせた理由は、嫁いで生まれた子が男児ならば科挙に合格させるため、

母として男児に学問の手ほどきをする役割があったためである。女性は自ら科挙の試験を受けることはできないが、男児に科挙合格の望みを託し、男児の幼少時には家庭教師の役目も果たしていたのである。

夫や子が記した墓誌銘には、妻や母の家庭における姿が生き生きと描かれていて、千余年の時空を超えて、読み手の前に生き生きと立ち現われる。宋代においても現代においても、妻や母としての生き方に変わらないことがわかる貴重な墓誌銘といえよう。

## 注

(1)野村鮎子「唐代亡妻墓誌銘考」(『學林』28・29 中國藝文研究会 1998 年) 271 頁

(2)謝逸『溪堂集』卷九 彭夫人墓誌銘

年十有八婦陳氏、陳氏大族合堂同食者不啻數百指。夫人事舅姑、睦娣姒、撫媵妾和、而有礼待内外宗族、一以忠誠、不以貧富輕重其心其尤貧、而不能自存者解衣推食以濟之、故死之日哭者聲色相屬也。

(3)蘇軾『東坡全集』卷八十九 亡妻王氏墓誌銘

治平二年五月丁亥、趙郡蘇軾之妻王氏、卒於京師。六月甲午殯于京城之西、其明年六月壬午、葬於眉之東北彭山縣安鎮鄉可龍里、先君先夫人墓之西北八步。軾銘其墓曰「君諱弗、眉之青神人。鄉貢進士方之女。生十有六年而歸于軾。有子邁。君之未嫁、事父母、既嫁事吾先君先夫人、皆以謹肅聞。其始末嘗自言其知書也。見軾讀書、則終日不去、亦不知其能通也。其後軾有所忘、君輒能記之。問其他書、則皆畧知之。由是始知其敏而靜也。從軾官於鳳州。軾有所為於外。君未嘗不問知其詳。曰「子去親遠、不可以不慎。日以先君之所以戒軾者相語也。軾與客言於外君立屏間聽之、退必反覆其言曰「某人也。言輒持兩端。惟子意之所嚮。子何用與是人言、有來求與軾親厚其者。君曰「恐不能久、其與人銳。其去人必速。已而果然。將死之歲、其言多可聽。類有識者、其死也。蓋年二十有七而已」始死。先君命軾曰「婦從汝于艱難、不可忘也。」他日汝必葬諸其姑之側。未期年、而先君沒。軾謹以遣令葬之。銘曰「君得從先夫人于九原。余不能嗚呼哀哉。余永無所依怙。君雖沒。其有與為。婦何傷乎。嗚呼哀哉。」

(4)葉適『水心集』卷十八 高令夫人墓誌銘

蒙城高氏、六歲、父為京山尉、能助其母、思父輒涕泣、父歸乃已。從知象山縣、父思慮所不及、必左右之。為余妻、賃舍甚貧、閑一閒、終日不聞聲。親饌粥飢十餘盤、魚肉鮭菜略具、人或以為難。官視祿上下、月儲以奉舅、次伯叔羣從、無餘。所食者、太湖葱、城東菰芥爾。服飾進止常儼然、見者皆尚其華整、不知其敝故洗刷而然也。晚歲、三子始育、始有宅居、稍墾田、不市糴、然自處一如其初。蓋其剛簡無欲、余所憚、其靜密有智、余所服、其多能而易解、緩急中程、識事本末、大抵余所資以為家也。嘉定四年十二月初十日、年五十二卒。五年三月二十日、葬開元觀後山。余觀自古特立獨行之士、無所復望於世、而旅泊其身以苟免者、固已衆矣、是不足悲也、然而豈亦不有夫順親和戚之屬而為之託焉！今余非敢謂特立而獨行也、然既老而休、且病且衰、旦暮且盡、而高氏迫不余待、遂棄余、以是使余無順親和戚而為之託也、是亦不足悲乎！

銘曰 千世之遠兮、百年之長。天寬而地闊兮、此為何祥。

(5)歐陽脩撰『文忠集』卷三十六「南陽縣君謝氏墓誌銘」

慶曆四年秋、予友宛陵梅聖俞來自吳興、出其哭之詩而悲曰「吾妻謝氏亡矣、丐我以銘而葬焉」。予未暇作。居一歲中、書七八至、未嘗不以謝氏銘為言。」且曰「吾妻故太子賓客諱濤之女、希深之妹也。希深父子為時聞人而世顯榮。謝氏生於盛族、年二十以婦吾凡十七年而卒。卒之夕斂以嫁時之衣甚矣。吾貧可知也。然謝氏怡然處之其治家有常法其飲食器皿雖不及、豐侈而必精以旨其衣無故新而澣濯縫紉必潔以完所至官舍雖庠

芮庫陋而庭宇灑掃必肅以嚴其平居語言容止必怡以和吾窮於世久矣。其出而幸與賢士大夫遊而樂入則見吾妻之怡怡而忘其憂使吾不以富貴貧賤累其心者抑吾妻之助也。吾嘗與士大夫語、謝氏多從戶屏竊聽之、間則盡能商榷其人才賢否、及時事之得失皆有條理。吾官吳興或自外醉、而婦必問曰「今日孰與飲、而樂乎、聞其賢者也。」則說否則歎曰「君所交皆一時賢雋豈其屈已下之耶惟以道德焉。故合者尤寡、今與是人飲而歡耶。」是歲南方早仰見飛蝗、而歎曰「今西兵未解、天下重困、盜賊暴起、於江淮而天旱且蝗如此吾為婦人死、而得君葬我幸矣。」其所以能安居貧而不困者性識明而智道理多此類。嗚呼其生也。迫吾之貧而歿也。又無以厚焉。謂惟文字可以著其不朽且其平生尤知文章為可貴歿。而得此庶幾以慰其魂且塞。予悲此吾所以請銘於子之勤也。若此予忍不銘。夫人享年三十七、用夫恩封南陽縣君、二男一女以某年七月七日卒。于高郵梅氏世葬宛陵以貧不能歸也。某年某月某日葬、于潤州之某鄉某原。銘曰「高崖斷谷兮京口之原山蒼水深兮土厚而堅居之可樂兮卜者。曰然骨肉雖土兮魂氣則天何必故鄉兮然為安。」

(6) 佐藤保「悼亡三首」(『はじめての宋詩』 明治書院 1012 年) 60~68 頁

(7) 詩体の一つ。晩唐の李商隱の詩にならって、故事を用い、修辭を工夫した宋代初期の詩風。李商隱の作品集を『西崑唱酬集』といいこれに基づく。

(8) 李觀『盱江集』卷三十一 先夫人墓誌

有宋皇祐三年冬十有二月乙酉、李氏之孤觀奉其母。夫人柩葬于所居西先父府君墓東南隅實建昌軍南城縣鳳凰山之麓也。夫人姓鄭氏、其先蓋鄉大姓。曾祖某祖某考某皆不仕。夫人初有二男。為無服殤、既而生觀十四年、而先君(父)沒。是時家破貧甚屏居山中。去城百里、水田裁二三畝其餘高陸、故常不食者。夫人剛正有計筭。募僮客燒薙耕耨與同其利。晝閱農事、夜治女功、斥賣所作以佐財用。蠶月蓋未嘗寢、勤苦竭盡、以免凍餒、而觀也。得出游求師友不為家事罔其心用卒業為成人不然茲爾小字為傭保為負販供養猶不足何暇孳孳學問間邪復還舊居。娶婦有孫如平人家。夫人滋不倦門內細碎觀尚未及知。慶曆中應科目罷歸迺自念親老矣。而數棄去舟江湖客京國以為之憂抑又窮空無以甘脆非人子所宜因決不求仕進忍恥業衣服庶乎。終養無有憾焉。既八九年而智淺力少不克如志。夫人性多設施好義而信人祭祀賓客婚姻之禮不以貧故累之聞人緩急來有求者應之唯恐不逮衣服在身者必假飲食在前者必輟況於錢穀固無吝心由此困乏百計不效。

(9) 蘇洵撰『嘉祐集』 武陽縣君程氏墓誌銘

治平三年夏蘇府君終於京師光往弔焉。二孤軾轍哭且言曰「今將奉先君之柩歸葬於蜀、蜀人之附也」。同壟而異壙日者吾母夫人之葬也。未之銘子為我銘其壙、光固辭不獲命因曰「夫人之德非異人所能知也」。願聞。其略二孤奉、其事狀拜以授光。光拜受退而次之曰「夫人姓鄭氏、眉山大理寺文應之女、生十八年歸蘇氏、程氏富而蘇氏極貧。……府君年二十七猶不學一日、慨然謂夫人曰「吾自視今猶可學、然家待我」、而生學且廢生奈何。夫人曰「我欲言之久矣。惡使子為因、我而學者子苟有志以生累我可也」。即啓出服玩鬻之、以治生不數年、遂為富家。府君由是得專志於學卒為大儒。……夫人能開發輔導成就其夫子、使皆以文學顯重於天下非識慮高絕能如是乎。」

(10) 沈遘撰『西溪集』卷十 方夫人墓誌銘

夫人姓は方氏東陽人。贈尚書屯田員外郎允之女。母曰南陽縣太君施氏。夫人二十一歸于郡人陳君爽生、五男曰盤曰舜臣曰寶臣曰嘯曰確、三女適張氏曹氏王氏。年七十嘉祐

元年十二月某甲子寢疾以明年八月某甲子葬於金華縣先塋之。次確余同年進士也。以書來曰「確不孝不得究母之養、恨死念無、以盡其心幸得銘母之懿、以藏諸幽使後世有聞確之望也。」敢以請。

(11) 汪慶辰『文定集』卷十八 夫人汪氏墓誌銘

夫人吾姊也。姓汪氏、信州玉山人。父諱某、贈通議大夫。母魯氏、追封淑人。夫人年十有九嫁同縣程昂。躬俟服勤人所難堪、而夫人安之性質直未嘗偽色辭以欺人也。蓋嘗曰吾老且衰欲致家事而自佚矣。人亦以為宜饗其報皆未及而以乾道六年九月巳丑卒。年六十有三。三子男三人、長克勤、次克和蚤卒、次克成。孫男八人、女三人。其孤將以七年十有二月壬寅、葬夫人于玉山之塘田社、來請銘。嗚呼其哭吾兄甫期月而又哭吾姊也。子然此身雖幸而僅存、亦何聊哉。銘曰、其艱其勤以終其身、咨爾後人尚能顯其親。

(12) 黃庭堅撰『山谷外集』卷八 叔母章夫人墓誌銘

叔母章氏、洪州分寧縣人、處士諱積之女。夫人幼喜誦書弄筆墨、父母禁之、與諸女相、夜續待其寢息乃自程課由是知書事父母居其喪以純孝聞。年若干歸叔父。叔父性高朗嗜酒好賓客、客饌咄嗟責辦。夫人怡然從令未嘗不肅給也。叔父平日大率常醉或使酒嫚侮。夫人承之未嘗不以禮也。夫人嘗問叔父之不甚醉時諫曰「君終日如是使諸子皆法象何以為家。」叔父曰「吾兄弟之子多賢克家者自當。」

(13) 司馬光「妻(上)」(夏家善主編『溫公家范』卷之八 天津古籍出版社 1995 年)164 頁

## 終章

宋代女性墓誌銘にみえる 1075 人の女性を対象に、銘文に記されている事項から宋代の女性像について考察した。宋代女性墓誌銘の研究は、内外の研究者によって論述されているが、それらは宋代女性墓誌銘の一部を用いているのであって全てではない。本稿では現存する宋代女性墓誌銘 1075 人を収集し、八項目に分類した結果を先行研究と照合してみた。

宋代女性の平均寿命については、陶晉生氏による研究がある。陶氏は歐陽脩『歐陽文忠公集』、司馬光『溫國文正司馬公集』、范祖禹『范太史集』の三集に収録された婦女(既婚女性)112 人の墓誌銘史料をもとに平均死亡年齢を 37 歳と算出し、またこれとは別に曾鞏『曾鞏集』所載の婦女 24 人の墓誌銘から平均死亡年齢が 59 歳としている。三集と『曾鞏集』では平均死亡年齢に 22 歳も差があるにもかかわらず、その理由についても陶氏は説明されていない。

筆者は三集と『曾鞏集』の既婚女性墓誌銘の死亡年齢を集計した結果、三集に収録された女性墓誌銘は 112 人ではなく 117 人(死亡年齢不明 3 人)、平均死亡年齢は 37 歳ではなく 36.0 歳、『曾鞏集』24 人(死亡年齢不明 1 人)の平均死亡年齢は 56.7 歳である。筆者の集計でも三集と『曾鞏集』では、20.7 歳の差がみられた。

そこで筆者は三集と『曾鞏集』の平均死亡年齢の差が、陶氏 22 歳、筆者 20.7 歳という結果について考察したところ、歐陽脩『歐陽文忠公集』、范祖禹『范太史集』には、宗室女性墓誌銘が含まれていることによって、三集と『曾鞏集』の死亡年齢に差が生じることが判明した。宗室女性は卒すると自動的に墓誌銘が記されるため、一歳の皇女の墓誌銘もあり、宗室既婚女性の平均死亡年齢は 33 歳と短命である(12 頁、表 6「北宋女性の宗室・非宗室、未婚・既婚別死亡年齢分布」参照)。

宗室女性墓誌銘は北宋の墓誌銘のみに掲載されている故に、墓誌銘にみえる宋代女性の平均死亡年齢は、北宋女性 49 歳、南宋女性 63 歳と 14 歳の差が生じたが、宗室女性を除くと、北宋の既婚女性は 60 歳、南宋の既婚女性は 63 歳と、両宋の年齢差は 3 歳と縮まる。

宋代の婚姻関係については、中国の黄寛重氏・伊沛霞氏、日本の青山定雄氏・清水茂氏・岡元司氏・遠藤隆俊氏が下記のような見解を述べている。

北宋の士大夫官僚は嫁と婿を撰ぶことを重要視した。高官にあつては科挙及第者の中から優秀なものを選ぶという気風も生じた。一家だけでは高官としての地位を保つことは困難であったが、婚姻関係を結ぶことによって、永い期間に亘って高官としての権勢を保つことができた。女系による権勢の伝達は宋代官僚の裏の要素として注目された。北宋の士大夫官僚は婚姻によって、家の権勢保持を図ったのである。

南宋になると婚姻関係に変化がみえた。北宋より南宋に至ると、婚姻の実態に変化があり、高官の間では地域を跨いでの婚姻関係は減少した。明州は温州とともに浙東に位置し、それぞれの名族が在地の官戸どうしの婚姻関係で広く結びついていた。科挙による地位の再生産は、一族全体として捉える必要があり、次世代への学問的伝達が直系の親子関係だけでなく、傍系の親族や婚姻も含めて行われた。南宋になると科挙合格者をだすことは、一家から一族に拡大されていったのである。

上記の研究者の見解と本稿の「婚姻関係と地理的範囲」、「婚姻の階層性」とはほぼ一致

をみた。

女性の再婚・守節・離婚については、既婚女性 1018 人の墓誌銘から集計作業を行った。結果、再婚 7 人に対し守節 101 人と、宋代女性の貞操観念を主張した程顥・程頤の兄弟が推進した説「餓死の事は極めて小にして、節を失う事は極めて大なり」と比例し、圧倒的に守節が多い。しかし再婚した 7 人の女性の墓誌銘を記した選者 7 人は、宋儒の婦女に対する貞節観念が厳しい時代に属していたにもかかわらず、再婚した女性の生き方を尊重し、再婚を失節とはみなしていない。

寡婦となり守節を通した女性は、婦としての道・母としての道を遵守した。夫亡き後も舅姑に仕え、家族と睦み、宗族と和し、子供の教育に当たるなど、士大夫の妻としての責務を果たしている。妻となり母となって困難がふりかかると、持てる能力を発揮する、嫁入り道具を処分するなどして家計を維持している。歴史の表舞台には登場しないが、陰で夫や子供を支えた宋代女性の見事な生き方が墓誌銘から見る事ができた。

宋代女性の平均子供数は北宋 6 人、南宋 5 人と北宋が 1 人多い。これは北宋の女性墓誌銘にのみにみられる宗室女性の存在による。宗室女性は多産であり、結婚年数よりも子供数が多い場合もみられ、妾など異腹の子を含めての子供数といえる。宗室女性は男児を出産することが重要な役目であったと推測できる。妾の存在について滋賀秀三氏は、中国古来の婚姻制度は、一夫一妻多妾制であった。妻は同時に二人以上あることを許されず、事実上の閨房の伴侶、すなわち妾をおくことが、原理的には数に制限なく認められていた。子供数からも妾の存在が明らかとなった。

墓誌銘の被葬者が実際に出産した子供数を知りたいと、墓誌銘の子供数の前に「生」の文字がつく墓誌銘を検出し集計作業をしたところ、181 人の女性墓誌銘に「生」の文字がついていて、女性一人の平均子供数は 4.7 人となった。

出産数に関する資料として、民国 17 年(1928)に行われた定縣社會概況調査の李景漢編『民國叢書』がある。この調査によると平均子供数は 4.78 人とあり、宋代と民国では 650 年以上の時代差があるが、女性が出産する子供数は国家の規制がない限り、いつの時代であっても、あまり差がないと考えられる。

子どもの家庭教育に携わった女性は、北宋が 551 人中 116 人、南宋が 467 人中 106 人、両宋では 1018 人中 222 人と、二割以上の女性が子供の教育に携わっている。女性が子供の教育に携わることができたのは、母親自身に学問があつてこそそのことであり、学問のある女性が評価されている。司馬光は「六歳にして、男子始めて字を書くを習い、女子始めて女工の小なる者を習う。七歳にして男女席を同じくせず、共に食せず。始めて孝経・論語を誦し、女子と雖も亦立ちて之を誦す。八歳にして、男子尚書を誦し、女子中門を出ず。九歳にして、男子春秋及び諸史誦し、始めて之が為に講解し、義理を曉にせしむ。女子も亦之が為に、論語・孝経及び列女傳・女誡の類を講解し、ほぼ大意を曉にすべし。」と、著書『司馬氏書儀』で女子の教育についても言及している。

墓誌銘にみえる女性が学んだ書物は、詩経・五経などの儒教に関する書物が殆どで、これらは科挙の受験科目でもあるため、男児を教えるには必須の書物であった。さらに宋代は紙と活版印刷の技術が発達し、書籍が多数出回るようになり、書物にも接する機会にも恵まれていた。学問のある女性が母親になると、男児には科挙試験をめざして、幼少のこ

ろから母親自身が受験勉強の一端を担ったのである。女性が読んだ書物は、詩経・書経・論語・佛書であるが、孟子と女訓書は北宋よりも南宋で読まれている。その理由として、孟子は朱熹によって大成された宋学にとりいれられ、女訓書は程顥・程頤の学説及び朱子学が宋儒の婦女に対する観念に影響を及ぼし、貞節観念として浸透していったことによる。

家庭での行状は、生家にあつては「事父母」、婚家にあつては「事舅姑」と、父母と舅姑に孝を盡すことである。とくに「事舅姑」は両宋では 1018 人中 356 人と、約三分の一以上の女性が舅姑に仕えている。次いで「夫に従い」「叔妹と睦み」「宗族と和し」「子供を慈しみ」と記されている。儒教では男は「外」、女は「内」で「孝」を実践することであり、「孝」を実践してこそ、内外の秩序が保たれたのであろう。

女性の「家庭での行状」は、女訓書に書かれている模範的な女性と一致する。撰者によっては女性の行状に対する表現が画一的で、女訓書の言葉を引用したのでは、と思われる墓誌銘もみられる。撰者が墓誌銘に記した家庭での行状は、宋代社会および士大夫層が女性に求めた理想の姿ともいえる。

墓誌銘からみえる宋代女性像をまとめると、生家にあつては父や母に孝をつくし、父からは儒教の四書五経を主に書物を読むことを、母からは女工の技を教えられた。嫁すれば舅姑に事え、夫に従い、叔妹及び宗族と和した。母となれば子供は 5～6 人を養育し、男児には科挙及第のための受験勉強を施した。婦としては婦人の四徳である婦徳・婦言・婦容・婦功を実践し、60 歳～64 歳くらいまで生存した。寡婦になっても守節を通し、家を守り夫の役目も果たした。老後は鶏鳴とともに起き、堂を清め香を焚き佛書を読んでいる。女性の生涯を要約すれば、男性が外で「孝」を実践したことに対し、女性は内で「孝」を実践したことが墓誌銘からうかがえる。

このような記述は、被葬者の家族に依頼され執筆した撰者の墓誌銘に多くみられるが、1075 人中 130 人の墓誌銘は、祖父・父・夫・子供・弟・甥など近親者が執筆している。近親者が執筆した墓誌銘には、被葬者の真実の姿が描かれていて、研究者が墓誌銘に対して懸念するような、被葬者を賛美するための美辞麗句は見られない。夫が記した妻の墓誌銘、子が記した母の墓誌銘からは、千年の時空を超えて生き生きとした女性が読み手の前に立ち現れる。夫や子に対する妻として母としての姿は、時代を超えても変わらないということが墓誌銘から読みとることができたのである。

## 参考史料

- 梁沈約撰『宋書』第二冊 中華書局 1974 年  
徐松撰『宋會要輯稿』北京・中華書局 1957 年  
『宋人傳記索引』宋史提要編纂協力委員會 東洋文庫 1968 年  
脱脱等撰『宋史』卷 3 1 9 中華書局 1985 年

## 参考文献

- 青山定雄『中央大学八十周年記念論文集文学部』中央大学 1965 年  
青山定雄『東洋学報』第 57 卷 東洋文庫 1976 年  
石川忠久著『詩經』新釈漢文大系；110—112 明治書院 1997—2000 年  
石田浩『史林』63—4、史学研究会 京都大学内 1986 年  
一海知義注『陸游』〔中国詩人選集二集 8〕 岩波書店 1962 年  
伊原弘『思想』802 号「中国知識人の基層社会」 岩波書店 1991 年  
伊原弘『歴史と地理』254 山川出版社 1976 年  
梅原郁『宋名臣言行録』講談社 1986 年  
梅原郁訳『夢溪筆談 1』東洋文庫 1978 年  
遠藤隆俊『宋代社会のネットワーク』宋代史研究会研究報告第六集 汲古書院 1998 年  
岡元司『広島大学東洋史研究室報告』第 17 号 広島大学文学部東洋史談話会 1995 年  
岡元司『史学研究』第 212 號 広島史學研究会 広島大学 1996 年  
岡元司『宋代社会のネットワーク』宋代史研究会編第六集 汲古書院 1998 年  
岡元司『アジア遊学』勉誠出版 1999 年  
岡元司『宋代人の認識』相互性と日常空間 宋代史研究会研究報告第七集 汲古書院 2001 年  
大島立子『論集 中国女性史』中国女性史研究会編 吉川弘文館 1999 年  
大澤正昭『唐代史研究』第六号 唐代史研究会編 2003 年  
大澤正昭『名公書判清明集』明石書店 2005 年  
愛后元『特集 石で読む中国史』SINICA 2001 年  
高津孝編訳『中国学のパースペクティブ』勉誠出版 2010 年  
小島毅『中国の伝統社会と家族—柳田節子先生古希記念』 汲古書院 1993 年  
小島泰雄『研究年報』(31) 神戸市外国語大学外国学研究所 1963 年  
小林義廣『歐陽脩 その生涯と宗族』創文社 2000 年  
佐竹靖彦『唐宋變革の地域的研究』 同朋舎出版 1990 年  
佐藤保『はじめての宋詩』明治書院 2012 年  
滋賀秀三『中国家族法の原理』創文社 1967 年  
斯波義信『青山博士古稀記念宋代史論叢』 省心書房 1974 年  
斯波義信『宋代商業史研究』風間書房 1968 年  
清水茂『東洋史研究』20 卷 3 号 東洋史研究会編 同朋社出版 1961 年  
末次玲子『中国思想文化事典』東京大学出版局 2001 年

竹岡敬温『『アナール』学派と社会史「新しい歴史」へ向かって』同文館 1990 年  
竹内照夫訳『礼記』新釈漢文大系二十八 明治書院 1977 年  
田嶋美喜『論集中国女性史』吉川弘文館 1999 年  
竺沙雅章『アジア歴史研究入門』第一巻中国 同朋社出版 1983 年  
仁井田陞『中國身分法史』東京大學出版会 1983 年  
野村鮎子『ジェンダーからみた中国の家と女』関西中国女性史研究会編 東方書店 2004 年  
野村鮎子『中国女性史入門』人文書院 2005 年  
野村鮎子『學林』中國藝文研究会 1998 年  
秦玲子『アジア女性史比較の試み』明石書店 1977 年  
東一夫『王安石事典』国書刊行会 1980 年  
久田麻美子「墓誌銘の成立過程について」『中国学志』大有号 1997 年  
藤枝晃『文字の文化史』講談社学術文庫 1999 年  
福原哲郎『月刊しにか』3月号 2001 年  
本田治『立命館東洋史學』第28號 2005 年  
宮崎市定『宮崎市定全集』岩波書店 1992 年  
柳田節子『宋代庶民の女たち』汲古選書36 汲古書院 2003 年  
山川麗著『中国女性史』笠間選書78 笠間書院 1977 年  
山崎純一著『教育からみた中国女性史資料の研究』明治書院 1986 年  
湯浅幸孫『中國倫理思想の研究』同朋舎出版 1981 年  
吉川幸次郎『宋詩概説』岩波書店 1962 年

伊沛霞著、胡志宏譯『内闈：宋代婦女的結婚和生活』江蘇出版社 2006 年  
袁采撰『袁氏世範』藝文印書館 1964～1966 年  
汪玢玲『中国婚姻史』上海人民出版社 2001 年  
王明清『揮塵後録』卷十一 中華書局 1961 年  
賈志楊著、趙冬梅譯『天潢貴胄 宋代宗室史』江蘇人民出版社 2005 年  
黄寬重『宋代的家族與社会』東大圖書股份有限公司 2006 年  
江寶叙『中國婦女史論集 五集』稻鄉出版社 1993 年  
夏家善主編、王宗志注釈『温公家範』天津古籍出版社 1995 年  
顧鑒塘、顧鳴塘『中国歴代結婚与家庭』商務印書館 1996 年  
侯楊方著、葛劍雄主編『中国人口史』第六卷 復旦大学出版社 2001 年  
司馬光『司馬氏書儀』叢書集成初編 王雲五主編 商務印書館 1936 年  
朱傑人、嚴佐之、劉永翔主編『朱子全書』第柒冊 上海古籍出版社 2002 年  
徐吉軍、方建新、方建、呂風棠『中国風俗通史 宋代卷』上海文芸出版社 2001 年  
徐秉愉『中國婦女史論集』稻鄉出版社 1991 年  
全漢昇『中國婦女史論集』稻鄉出版社 1979 年  
臧建『ジェンダーからみた中国の家と女』関西中国女性史研究会編 東方書店 2004 年  
蘇冰、魏林『中國婚姻史』文律出版社 1994 年

張紹勛著、高津孝訳『中国の書物と印刷』日本エディタースクール出版部 1999 年  
 張邦煒『中國婦女史論集 三集』稻郷出版社 1993 年  
 張邦煒『中國婦女史論集 四集』稻郷出版社 1995 年  
 褚人穫著、嚴文儒校注『隋唐演義』大北：三民書局 1998 年  
 陳顧遠『中國婚姻史』上海文藝出版社 1936 年  
 陳顧遠著、藤澤衛彦訳『支那婚姻史』大東出版社 1941 年  
 陳東原『中國婦女生活史』臺灣商務印書館 1927 年  
 陳東原著、村田孜郎訳『支那女性生活史』大東出版社 1941 年  
 陶希聖『婚姻與家族』上海書店 1934 年  
 陶希聖著、天野元之助譯補『支那に於ける婚姻及び家族史』生活社 1939 年  
 陶晉生『北宋士族 家族・結婚・生活』台北：中央研究院歷史語言研究所 2001 年  
 鄧小南『大阪市立大学東洋史論叢 別冊特集号』大阪市立大学大学院文学研究科東洋史研究室 2006 年  
 方建新『文史 第二十四輯』中華書局 1985 年  
 彭衛『漢代婚姻形態』三秦出版社 1988 年  
 鮑家麟『中國婦女史論集 五集』稻郷出版社 1993 年  
 李景漢編『民國叢書 第四編.17.社會科学總類』上海書店 1933 年  
 劉紀華『中國婦女史論集 四集』稻郷出版社 1995 年  
 劉静貞『上智史学』53 上智大学史学会 2008 年  
 劉静貞『大阪市立大学東洋史論叢 別冊特集号』大阪市立大学大学院文学研究 2006 年

E.A.リグリオ、速水融訳『人口と歴史』平凡社 1971 年  
 G.W. スキナー『中国農村の市場・社会構造』今井清一・中村哲夫・原田良雄訳  
 法律文化社 1979 年  
 J.キング、フェアバンク『中国の歴史』大谷敏夫・太田秀夫訳 ミネルヴァ書房 1996 年  
 J.ロッシング、バック編、塩谷安夫・仙波泰雄・安藤次郎訳『支那の農業』改造社 1938 年  
 ベヴァリー、ボスラー著、高津孝編訳『中国学のパースペクティブ』勉誠出版 2010 年  
 オルガ、ラング『中國の家族と社会 I』上海書店 1933 年  
 オルガ、ラング著、小川修訳『中国の家族と社会 1』岩波書店 1953 年

2013 年度(平成 25 年度)

博士論文

墓誌銘より見たる宋代女性像について

資料

別表 1 ～ 14

別表「宋代女性墓誌銘」

立命館大学大学院

文学研究科人文学専攻

清水嘉江子

## 目次

別表 1	期別……………	1 頁
別表 2	結婚年での出身地の地理的分布 ……	2 頁
別表 3	結婚年での嫁ぎ先の地理的分布 ……	3 頁
別表 4	死亡年齢……………	4 頁
別表 5	位階授与の記述がみえる墓誌銘……………	6 頁
別表 6	撰者の官職と品階 ……	16 頁
別表 7	再婚した女性 ……	19 頁
別表 8	守節を通した女性 ……	22 頁
別表 9	宗室女性の子供数 ……	30 頁
別表 10	子供数に「生」が記されている墓誌銘 ……	32 頁
別表 11	学問と読書と子供の教育 ……	37 頁
別表 12	読まれた書物 ……	49 頁
別表 13	墓誌銘に見る「賞賛の言葉」……………	54 頁
別表 14	近親者が執筆した墓誌銘 ……	66 頁
別表	「宋代女性墓誌銘」……………	66 頁以降

別表1 期別

	0.0%	4	0.4%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%
	0.0%	1	0.1%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%
1	0.1%	6	0.6%	1	0.3%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	1	0.2%		0.0%		0.0%
1	0.1%	11	1.1%		0.0%		0.0%		0.0%	1	0.2%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%
1	0.1%	14	1.4%		0.0%		0.0%	1	0.8%		0.0%		0.0%	1	0.2%		0.0%		0.0%
3	0.3%	39	3.9%	3	0.9%		0.0%		0.0%	1	0.2%	1	0.6%	1	0.2%	1	1.5%	1	0.3%
6	0.6%	41	4.1%	2	0.6%		0.0%	2	1.6%	1	0.2%	0	0.0%	3	0.7%	1	1.5%		0.0%
5	0.5%	48	4.8%	4	1.2%		0.0%	2	1.6%	3	0.7%	1	0.6%	2	0.5%		0.0%	1	0.3%
19	1.8%	69	6.9%	10	3.0%		0.0%	4	3.1%	10	2.3%	10	5.8%	4	1.0%	4	6.0%	6	1.7%
36	3.3%	63	6.3%	16	4.8%		0.0%	10	7.8%	15	3.4%	7	4.1%	14	3.5%	4	6.0%	12	3.3%
57	5.3%	67	6.7%	32	9.5%		0.0%	4	3.1%	33	7.5%	17	9.9%	24	5.9%	7	10.4%	19	5.3%
88	8.2%	49	4.9%	57	17.0%		0.0%	18	14.0%	42	9.6%	29	16.9%	37	9.2%	6	9.0%	36	10.0%
46	4.3%	58	5.8%	20	6.0%		0.0%	2	1.6%	20	4.6%	5	2.9%	12	3.0%	5	7.5%	12	3.3%
124	11.5%	67	6.7%	49	14.6%		0.0%	18	14.0%	65	14.8%	7	4.1%	45	11.1%	7	10.4%	45	12.5%
106	9.9%	61	6.1%	46	13.7%	1	0.5%	24	18.6%	56	12.8%	31	18.0%	47	11.6%	9	13.4%	31	8.6%
51	4.7%	46	4.6%	17	5.1%	2	1.0%	3	2.3%	27	6.2%	8	4.7%	24	5.9%	4	6.0%	17	4.7%
42	3.9%	38	3.8%	11	3.3%	6	3.1%	4	3.1%	15	3.4%	5	2.9%	17	4.2%	2	3.0%	13	3.6%
24	2.2%	34	3.4%	7	2.1%	7	3.6%	2	1.6%	11	2.5%	4	2.3%	11	2.7%	1	1.5%	10	2.8%
	56.7%		72.0%		81.8%		8.2%		72.9%		68.3%		72.7%		60.1%		76.1%		56.5%
21	2.0%	42	4.2%	5	1.5%	6	3.1%	6	4.7%	16	3.6%	2	1.2%	10	2.5%	2	3.0%	7	1.9%
27	2.5%	32	3.2%	5	1.5%	11	5.6%	5	3.9%	8	1.8%	2	1.2%	13	3.2%	1	1.5%	15	4.2%
38	3.5%	48	4.8%	8	2.4%	12	6.2%	3	2.3%	13	3.0%	5	2.9%	12	3.0%	1	1.5%	12	3.3%
34	3.2%	31	3.1%	6	1.8%	10	5.1%	2	1.6%	7	1.6%	4	2.3%	11	2.7%	2	3.0%	10	2.8%
47	4.4%	35	3.5%	3	0.9%	12	6.2%	4	3.1%	11	2.5%	5	2.9%	19	4.7%	1	1.5%	17	4.7%
44	4.1%	23	2.3%	3	0.9%	15	7.7%	1	0.8%	14	3.2%	2	1.2%	12	3.0%	1	1.5%	11	3.1%
51	4.7%	15	1.5%	7	2.1%	21	10.8%	2	1.6%	12	2.7%	7	4.1%	19	4.7%	2	3.0%	21	5.8%
40	3.7%	19	1.9%	3	0.9%	13	6.7%	4	3.1%	9	2.1%	3	1.7%	13	3.2%	0	0.0%	11	3.1%
33	3.1%	18	1.8%	6	1.8%	12	6.2%	3	2.3%	11	2.5%	3	1.7%	9	2.2%	4	6.0%	7	1.9%
41	3.8%	8	0.8%	4	1.2%	18	9.2%	2	1.6%	16	3.6%	5	2.9%	12	3.0%	0	0.0%	20	5.6%
31	2.9%	7	0.7%	4	1.2%	19	9.7%	1	0.8%	10	2.3%	3	1.7%	14	3.5%	0	0.0%	8	2.2%
19	1.8%		0.0%	2	0.6%	13	6.7%	1	0.8%	6	1.4%	1	0.6%	11	2.7%	0	0.0%	7	1.9%
16	1.5%		0.0%	1	0.3%	8	4.1%	0	0.0%	4	0.9%	3	1.7%	2	0.5%	0	0.0%	5	1.4%
16	1.5%		0.0%	2	0.6%	6	3.1%	1	0.8%	2	0.5%	1	0.6%	3	0.7%	1	1.5%	4	1.1%
7	0.7%		0.0%	2	0.6%	3	1.5%		0.0%		0.0%	1	0.6%	1	0.2%	1	1.5%	1	0.3%
	43.3%		28.0%		18.2%		91.8%		27.1%		31.7%		27.3%		39.9%		23.9%		43.5%
					100.0%												100.0%		100.0%

別表2 結婚年での出身地の地理的分布(期別)

19	6	14	2	24	7	7	7	4	4	42	11	5	5	20	5	5	15	12	1	2				40	257
63	2	8	2	20	1	5	11	5	1	34	7	1	3	19	6	1	11	3	2	2	1			46	254
21	1	2	1	4	2	4	1	1	1	42	3	3	8	21	1	3	11	7	2	1				52	192
3	1	3		1	2	4				72	3	4	4	22	2	1	14	2	1					12	151
	1			1			1			32	1		5	5			13		1				1	20	81
				1		1				14	2		5	8			12							19	62

別表3 結婚年での嫁ぎ先の地理的分布(期別)

[illegible]

## 別表 4 死亡年齢

### 北宋既婚女性

年齢	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
年代							2	3	9	11	25
10							32	51	162	209	454
20	4	11	11	9	8	7	9	8	9	7	83
	80	231	242	207	192	175	234	216	252	203	2032
30	5	6	7	6	5	8	5	9	5	4	60
	150	186	224	198	170	280	180	333	190	156	2067
40		4	5	8	7	7	1	3	6	8	49
		164	210	344	308	315	46	141	288	392	2208
50	9	5	5	6	7	5	8	10	9	7	71
	450	255	260	318	378	275	448	570	522	413	3889
60	8	6	6	3	6	6	8	10	15	16	84
	480	366	372	189	384	390	528	670	1020	1104	5503
70	11	7	18	7	10	9	8	15	6	11	102
	770	497	1296	511	740	675	608	1155	468	869	7589
80	7	5	6	7	4	3	4	2	2	3	43
	560	405	492	581	336	255	344	174	176	267	3590
90	1		2								3
	90		184								274
人数	45	44	60	46	47	45	45	60	61	67	520
総年齢	2580	2104	3280	2348	2508	2365	2420	3310	3078	3613	27606

総人数＝551 人、死亡年齢判明 520 人総死亡年齢＝27,606 歳、520 人の平均死亡年齢＝53.08 歳

### 北宋未婚女性

年齢	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
1～9 歳、人数		6	8	7	3	2	2	3	3		34
総年齢、人数		6	16	21	12	10	12	21	24		122
10～19 歳人数	1	2	3	1	1	3	1			1	13
総年齢	10	22	36	13	14	45	16			19	175
20～29 歳、人数		2				1					3
総年齢		42				25					67
人数計	1	10	11	8	4	6	3	3	3	1	50
年齢計	10	70	52	34	26	80	28	21	24	19	364

総人数＝53 人、死亡年齢判明 50 人総死亡年齢＝364 歳、50 人の平均死亡年齢＝7.28 歳

北宋既婚女性総年齢 27606 歳 ÷ 520 人＝53 歳(53.08)

北宋未婚女性総年齢 364 歳 ÷ 50 人＝7 歳(7.28)

北宋既婚未婚総年齢 27970 歳 ÷ 570 人＝49 歳(49.07)

## 南宋既婚女性

年齢	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
年代								1			1
10								17			17
20	2	1	2		3			5	1	3	17
	40	21	44		72			135	28	87	427
30	5	2		3	4	2	4	4	3	5	32
	150	62		99	136	70	144	148	114	195	1118
40	2	2	3	1	2	3	3	4	4	5	29
	80	82	126	43	88	135	138	188	192	245	1317
50	7	11	4	6	7	13	9	5	9	13	84
	350	561	208	318	378	715	504	285	522	767	4555
60	6	4	2	12	11	8	5	9	12	13	82
	360	244	124	756	704	520	330	603	816	897	5354
70	9	10	8	6	9	15	14	11	18	13	113
	630	710	576	438	666	1125	1064	847	1404	1027	8487
80	9	6	7	3	13	8	8	4	2	1	61
	720	486	574	249	1092	680	688	348	176	89	5102
90	2	2	3	1	3	1					12
	180	182	276	93	282	95					1108
100							1				1
							106				106
総人数	42	38	29	32	52	50	44	43	49	53	432
総年齢	2510	2348	1875	1996	3418	3340	2974	2571	3252	3307	27519

総人数＝467 人、死亡年齢判明 432 人総死亡年齢＝27,519 歳、432 人の平均死亡年齢＝63.70 歳

## 南宋未婚女性

年代	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
1～9 年齢											
10～19 年齢			1	2							3
			12	26							38
20～29 年齢	1										1
	20										20
人数計	1		1	2							4
年齢計	20		12	26							58

南宋既婚女性総年齢 27519 歳 ÷ 432 人＝63 歳(63.70)

南宋未婚女性総年齢 58 歳 ÷ 4 人＝14 歳(14.50)

南宋既婚未婚総年齢 27577 歳 ÷ 436 人＝63 歳(63.25)

両宋既婚女性総年齢 55125 歳 ÷ 952 人＝58 歳(57.90)

別表5 位階授与の記述がみえる墓誌銘

No.	撰者 『文集』 墓誌銘	卒年、卒年齢	位階授与の説明
<b>北宋1期 960~1044 6人</b>			
1	范仲淹『范文正公集』卷十三 滕公夫人刁氏墓誌銘	景祐4(1037) 72歳	祠部君(長男)干朝廷夫人累封渤海縣太君。
2	范仲淹『范文正公集』卷十四 胡公夫人陳氏墓誌銘	寶元元(1038) 79歳	夫人自公登朝、封上黨縣君、 公為諫議大夫(從四品)進封潁川郡君。
3	歐陽脩『文忠公集』卷三十六 南陽縣君謝氏墓誌銘	慶歷4(1044) 37歳	夫人享年三十七。用夫(梅聖俞)恩封南陽縣君。
4	歐陽脩『文忠公集』卷三十六 北海郡君王氏墓誌銘	天聖元(1023) 37歳	夫人初用子恩追封福昌縣君、其後長文(子)貴 顯以夫人為請天子曰「近臣吾所寵也。」有請 其可不從乃特追封夫人為北海郡君。長文号泣 頓首曰「臣奎不幸竊享厚祿不得及其母、而天 子寵臣以此俾以報其親、臣奎其何以報。」當 是時朝廷之士大夫吳氏、之鄉黨鄰里皆咨嗟歎 息曰「吳氏有子矣。」
5	歐陽脩『文忠公集』卷六十一 長安縣太君盧氏墓誌銘	景祐3(1036) 57歳	夫人初用公封範陽縣君。後用其子封仁壽縣太 君。又進封長安縣太君及卒也。
6	王安石『臨川文集』卷九十九 曾公夫人萬年縣太君 黃氏墓誌銘	慶歷4(1044) 92歳	凡受縣君封者四、蕭山・江夏・遂昌・雒陽、 受縣太君封者二曾稽・萬年。
<b>北宋2期 1045~1085 38人</b>			
7	司馬光『司馬集』卷七十八 程夫人墓誌銘	嘉祐2(1057) 48歳	蘇軾(長男、次男は蘇轍)登朝追封武陽縣君。
8	韓琦『安陽集』卷四十八 安康郡太君陳氏墓誌銘	熙寧3(1070) 68歳	始封保寧縣君、次封保寧縣太君、次封安康郡太 君以正彥(子)升朝遇郊恩。
9	沈括『長興集』卷十四 長安縣太君高氏墓誌銘	治平2(1065) 77歳	殿中丞預朝請。夫人格當封詔以為萬壽縣君。 嘉祐七年(1062)用子蔭進(1)封長安縣太君。
10	晁補之『雞肋集』卷六十四 文安郡君陳氏墓誌銘	熙寧元(1068) 56歳	再封夫人潁川仁壽二縣君。韓公後貴為右諫議大 夫(從四品)追封夫人潁川郡君、又追封文安郡君。
11	秦觀『淮海集』卷三十三 徐氏夫人墓誌銘	治平3(1066) 53歳	承制君元配劉氏無子早卒。既升朝故事得封妻為 縣君。夫人請先劉氏承制君義而從之故。夫人未 及封而卒後二年(治平5年)以恩始追贈壽昌縣君。
12	秦觀『淮海集』卷三十三 虞夫人墓誌銘	熙寧3(1070) 27歳	元豐六年(1083)天子有事於南郊(2)、夫人以承議 君(夫)陞朝恩封仙源縣君(歿後13年)。
13	劉攽『彭城集』卷三十六 林氏母黃氏夫人墓表	治平4(1067) 77歳	夫人從夫仕宦登朝、累封嘉興・天長二縣君。
14	劉攽『彭城集』卷三十九 樂安郡君范氏墓誌銘	治平4(1067) 53歳	樞密公(夫)始升朝、夫人封壽光縣君、及為翰林 學士擬封高平郡君、南郊推恩(3)進封樂安郡君。
15	劉攽『彭城集』卷三十九 韓刑部妻程氏墓誌銘	熙寧元(1068) 49歳	夫人嘗從母(陳氏・魏國夫人)入謁禁中、仁宗皇 帝以大臣女錫之冠帔(4)、及刑部君登朝封萬年縣 君。

16	鄭獬『郎溪集』卷二十二 崔夫人墓誌銘(再嫁)	不明 57 歲	夫人卒年五十七。以趙君登朝、封長安縣君。
17	鄭獬『郎溪集』卷二十二 李夫人墓誌銘	嘉祐 6(1061) 42 歲	夫人卒、享年四十二。累封壽安縣君。
18	鄭獬『郎溪集』卷二十二 職方郎中鮑公夫人陳氏墓誌銘	至和 3(1056) 74 歲	夫人累封萬壽縣君。子 2 人(杭州昌化令、睦州錄事參軍)。夫人陳氏於某(撰者・鄭獬、翰林學士正三品)為外祖母。
19	張方平『樂全集』卷三十八 贈賢妃俞氏墓誌銘 (仁宗皇帝妃)	治平元(1064) 44 歲	妃以載誕承恩、始封延安郡君、進拜美人・婕妤・充儀・昭儀贈。治平元年六月薨、享年四十有四、上惟先帝諸嬪之舊悼賻有加榮贈賢妃、用優典也。
20	張方平『樂全集』卷三十八 徐國太夫人墓誌銘(和氏)	慶歷 7(1047) 56 歲	丙辰歲(大中祥符 9 年=1016)英公(夫)捐館(夫人 25 歲)。 乾興初(1022)封汝南郡君(31 歲)。 明道二年(1033)進昌國夫人(42 歲)。 慶歷丁亥(7 年 1047)孟春感疾享年五十有六。追封除國太夫人。
21	歐陽脩『文忠公集』卷三十六 長沙縣君胡氏墓誌銘	不明 75 歲	享年七十有五。又用其子之恩追封長沙縣太君。
22	歐陽脩『文忠公集』卷三十六 長壽縣太君李氏墓誌銘	慶歷 7(1047) 86 歲	用夫封隆平縣君、後以其子徙封長壽縣太君。子 3 人、職方員外郎、太子中舍、太常博士。
23	歐陽脩『文忠公集』卷三十六 渤海縣太君高氏墓碣	不明 不明	夫人初以夫封文安縣君。後以其子封渤海縣太君。
24	歐陽脩『文忠公集』卷三十七 雍國太夫人馮氏墓誌銘	皇祐 5(1053) 67 歲	夫人臨汝侯惟和(太祖の孫、節度使)之配。居十有二年而臨汝侯卒。夫人居喪哀毀真宗嘉其行封譚國夫人。皇祐五年(1053)正月癸亥以疾卒。享年六十有七。追封雍國太夫人。男 2 人(節度使)。
25	歐陽脩『文忠公集』卷三十七 東萊侯夫人平原郡夫人米氏墓誌銘	皇祐元(1049) 51 歲	夫人年十七選配東萊侯(夫)、累封平陽郡君。皇祐元年(1049)二月癸酉以病卒。享年五十有一。追封平原郡夫人。
26	蔡襄『端明集』卷三十九 瑞昌縣君孫氏墓誌銘	至和 2(1055) 67 歲	公雅(夫)升郎(尚書職方員外郎)位再以郊祀(5)恩。夫人樂安・瑞昌二縣君。
27	蔡襄『端明集』卷三十九 延安郡主李氏墓誌銘	皇祐 4(1052) 43 歲	李氏太宗皇帝之外孫、眞宗皇帝之甥齊國獻穆大長公主之女也。天聖五年(1027)封長壽縣主(18 歲)、以歸今閣門使忠州防禦使錢君晦錢氏。明道 2 年(1033)進延安郡主封。
28	王安石『臨川文集』卷九十九 楚國太夫人陳氏墓誌銘	嘉祐 7(1062) 71 歲	夫人用公(夫)自臨潁縣君、子封而為衛國夫人、用公子 4 人、尚書屯田員外郎他。加號陳國夫人、再封而得楚國夫人。
29	王安石『臨川文集』卷九十九 寧國縣太君樂氏墓誌銘	嘉祐 8(1063) 75 歲	夫人以婦嬪陳氏封萬年縣君。又以其子封寧國縣太君。子・太常博士、秘書丞、秘書省著作佐郎。
30	王安石『臨川文集』卷一百 高陽郡君齋氏墓誌銘	治平 2(1065) 55 歲	始封縣文安。又封郡高陽。

31	王安石『臨川文集』卷一百 樂安郡君翟氏墓誌銘	治平 3(1066) 57 歲	始封長安縣君。進京兆・樂安二郡君。男 5 人，翰林學士、軍事判官、將作監主簿、縣主簿。
32	王安石『臨川文集』卷一百 同安郡君劉氏墓誌銘	治平 4(1067) 不明	公當仁宗時(1067~1084)、以御史、天章・龍圖・樞密三學士。夫人亦累封為同安郡君。
33	王安石『臨川文集』卷一百 仁壽縣太君徐氏墓誌銘	治平 3(1066) 77 歲	夫人以職方(三男、尚書職方員外郎・正七品)、故封金堂・壽安二縣君。又封仁壽縣太君。
34	蘇舜欽『蘇學士集』卷十五 太原郡太君王氏墓誌	天聖 5(1027) 44 歲	景祐郊祀(1034~1037)追封太原郡太君(沒後 10 年)。
35	劉敞『公是集』卷五十二 皇姪故和州防禦使歷陽侯 夫人安福縣君王氏墓誌銘	皇祐 2(1050) 27 歲	君生十有七歲。歸于宗室故和州防禦使歷陽侯克周。既三年封安福縣君(20 歲)。
36	劉敞『公是集』卷五十二 皇兄故深州團練使承訓妻 安定郡夫人張氏墓誌銘	嘉祐 4(1059) 66 歲	明道中(1032~1033)以恩封上谷郡君。皇祐三年(1051)進封安定郡夫人。男 5 人(右屯衛大將軍・右千牛衛大將軍・右監門衛大將軍・左侍禁)
37	劉敞『公是集』卷五十二 皇姪右屯衛大將軍克戒妻 太寧縣君李氏墓誌銘	至和 2(1055) 35 歲	慶歷中(1044~1045)封太寧縣君。
38	劉敞『公是集』卷五十二 皇姪右監門衛將軍克淳妻 追封仙遊縣君李氏墓誌銘	皇祐 3(1051) 18 歲	年十有四慶歷八年(1048)以禮稱來婦。皇祐三年(1051)五月庚午感疾卒。享年十有八。以未及賜邑封詔特以仙遊縣君。
39	劉敞『公是集』卷五十二 皇姪右監門衛將軍克常妻 濮陽縣君盧氏墓誌銘	至和 2(1055) 29 歲	年十有六以禮聘為克常婦。克常天子再從兄弟之子。曾祖・祖・父封皆至王公親近族。夫人稱為能孝其宗沈靜謙順樂于為善封濮陽縣君。
40	劉敞『公是集』卷五十四 皇再從姪孫右千衛將軍叔 策妻萬年縣君王氏石記	至和 3(1056) 不明	年十有六以禮成婚。至和二年(1055)封萬年縣君。明年(1056)六月庚申得病死。
41	楊傑『無爲集』卷十四 仙源縣君陳氏墓誌銘	熙寧 6(1073) 28 歲	熙寧 7 年(1074)明甫(夫)為太子中允直集賢院兼崇政殿說書管勾國子監。遇郊祀追封夫人為仙源縣君(歿後 1 年)。
42	黃庭堅『山谷外集』卷八 單卿夫人張氏墓誌銘	元豐 8(1085) 84 歲	夫人歷封安定・壽安二縣君。仁壽郡君。
43	蘇頌『蘇魏公集』卷六十二 彭城縣君錢氏墓誌銘	元豐 4(1081)	享年五十二。彭城之封、從夫貴也。
44	司馬光『傳家集』卷七十八 敘清河郡君(張氏)	元豐元(1078) 60 歲	清河郡君張氏、冀州信都人。禮部尚書致仕存女。端明殿學士司馬光之妻也。年十六適司馬氏。夫登朝封清河縣君、及為學士改郡君。
北宋 3 期 1086~1126		15 人	
45	晁補之『雞肋集』卷六十四 安康郡君龐氏墓誌銘	紹聖 2(1095) 77 歲	夫人宜之始封南安縣君(正五品)。郡君皆穎公(父)恩也。父・龐籍(丞相・正一品)
46	汪藻『浮溪集』卷二十四 夫人陳氏行狀(77 歲)	政和 5(1115) 77 歲	汪氏祭四十年以今上登極恩封壽光縣君。用政和三年九月制改封孺人。
47	汪藻『浮溪集』卷二十八 吳國夫人陳氏墓誌銘	宣和 5(1123) 54 歲	丞相彭城郡徐公處仁之夫人陳氏、以宣和五年(1123)正月己卯薨。越三年(靖康元年 1126)彭城

48	汪藻『浮溪集』卷二十八 周夫人墓誌銘	宣和元(1118) 不明	公薨。夫人歷封溫・福・陳・吳四國夫人。 初封榮德縣君。今封宜人
49	晁説之『嵩山集』卷二十 崇德縣太君王氏墓誌銘	不明 84 歳	壽考(6)、康定初(1040)以子封、廣德縣太君。改 封崇德縣太君。男 8 人(朝散郎・軍事推官・朝儀 大夫・宣德郎(正六品～從八品)。
50	鄒浩『道卿集』卷三十七 高平縣太君范氏墓誌銘	大觀 3(1109) 79 歳	初封蓬萊縣君、後改封高平縣太君。男子 3 人(承 議郎、縣尉)。范氏(范仲淹の姪)
51	鄒浩『道卿集』卷三十七 壽昌縣太君嚴氏墓誌銘	大觀 4(1110) 72 歳	初封華陽縣君、後改封壽昌縣太君。男子 8 人(通 直郎・通仕郎)
52	楊時『龜山集』卷三十二 令人吳氏墓誌銘	靖国元(1101) 44 歳	初封仁和・仁壽二縣君。李公(夫)之舅右丞黃公 以夫人之賢奏賜冠帔。既歿累贈永喜・濮陽郡君。 改贈令人。
53	張仲炘『湖北金石志』九 通直郎李公夫人時氏墓誌銘	元祐 9(1094) 66 歳	故通直郎致仕李公諱楊庥(夫)之夫人、元祐八年 (1093)四月以公恩例封昌樂縣君。
54	蘇頌『蘇魏公文集』卷六十 二 仁壽郡太君陳氏墓誌 銘	元祐 2(1087) 82 歳	翰林學士承旨通議大夫知制誥兼侍講鄧公(三男) 母、夫人壽安縣太君陳氏以疾終于京師。 登朝追封贈府君(三男)爲光祿大夫。而夫人方在 色養(7)自壽安縣太君、再進郡太君。
55	蘇轍『欒城集』卷二十五 歐陽文忠公夫人薛氏墓誌 銘	元祐 4(1089) 73 歳	夫人始以文忠貴封壽安縣君、八遷爲仁壽郡夫 人、復以其子三遷(8)封安康郡太夫人。 子男八人(承議郎、光祿寺丞、朝散郎、尚書職方 員外郎、集賢校理、宣德郎)
56	陸增祥『八瓊金』卷一百五 安武軍節度使郝質妻朱氏 墓誌	元祐 3(1088) 75 歳	宋故殿前都指揮使安武軍節度使贈太師、追封永 國公諡武莊郝公夫人京兆郡夫人。諸子陞朝進封 太夫人。男子 5 人(左藏庫副使、東頭供奉官、內 殿承制、閣門通事舍人、率府率)
57	趙鼎臣『竹隱集』卷十九 伯姉墓誌銘	崇寧 2(1103) 50 歳	元符二年(1099)封太和縣君(46 歳)。崇寧二年 (1103)六月七日以疾卒。後十年追贈宜人。
58	孫覲『鴻慶居士文集』卷四 十一 宋故何碩人孫氏墓 表	宣和 6(1124) 71 歳	碩人以太中(夫)故自仁和縣君。三封至宜人。 昌辰(次男・朝奉郎)登朝加號令人。再命而得今 封碩人。
59	葛勝仲『丹陽集』卷十四 徐太令人葛氏墓誌銘	政 7(1117) 73 歳	夫恩封永昌縣君、以子恩封普寧縣太君、 再封太令人。

(注)

(1) 蔭進＝父祖の功績のお陰で子孫が官爵を授けられる。

(2) 南郊＝天子が冬至には南郊で天を祀る祭り。北郊＝天子が夏至には北郊で地を祀る祭り。

『宋史』卷九十九志第五十二禮二「南郊」

南郊壇制。梁及後唐郊壇皆在洛陽。宋初始作壇於東都南薰門外、四成、十二階、三壇。

北郊。宋初、方丘在宮城之北十四里、以夏至祭皇地祇、別爲壇於北郊、以孟冬祭神州地祇。

(3) 推恩＝恩愛を広く推し及ぼす。故に[孟子・梁惠王上]恩を推さば以て四海を保んずるに足る。

(4) 冠帔＝夫人の礼服。

(5) 郊祀＝天子が郊外(北郊・南郊)で天地を祀る祭り。郊祭と同じ。

(6) 壽考＝長寿。考は老に同じ。

(7) 色養＝親の顔色を見、その心を察して孝養をつくすこと。一説に常に顔色をやわらげ親に孝行する。

(8) 三遷＝官職が変わることを言う。

南宋 1 期 1127~1162 22 人			
1	周必大『文忠集』卷三十六 先夫人王氏墓誌	紹興 8(1138) 37 歲	壽止三十七。後某(子,周必大)爲書省正字。遇 沛澤(1)贈孺人。忝御史(御史大夫)再贈安人。
2	汪慶辰『文定集』卷二十三 樞密院計議錢君嬪夫人呂 氏墓誌銘	紹興 18(1148) 49 歲	累封至安人、以紹興十八年(1148)三月二日卒。 于袁州。享年四十九。
3	劉一止『苕溪集』卷五十 永嘉郡夫人高氏墓誌銘	建炎 4(1130) 77 歲	夫人初封永和縣君。改封令人後以子彥昭贈永嘉 郡夫人。生二男彥昭其長也。今爲右朝請大夫兩 浙路轉運判官。
4	劉一止『苕溪集』卷五十 魏國太夫人向氏墓誌銘	紹興 21(1151) 63 歲	二子登朝籍進封魏國太夫人。胡堯佐(次男)右 承議郎、直敷文閣賜紫金魚袋(2)。 胡堯仁(三男)右宣議郎、直敷文閣賜紫金魚袋。
5	胡寅『斐然集』卷二十六 吳國太夫人王氏墓誌銘	建炎 2(1128) 75 歲	初特封安康郡夫人、後封安定郡太夫人。子讜(三 男寶文閣直學士)列職西清奉祠輦轂下、一日徽 宗皇帝召見便殿(3)顧問(4)庭闈(5)安否。讜再 拜謝以壽康奉。 翌日親御翰墨書永國太夫人。疾薨享年七十有 五、贈吳國太夫。
6	胡寅『斐然集』卷二十六 亡室張氏墓誌銘	紹興 7(1137) 30 歲	君受紹興四年(1134)明堂(6)恩封宜人。
7	汪藻『浮溪集』卷二十八 令人施氏墓誌銘	紹興 18(1148) 94 歲	中奉大夫諱庭臣之繼室以夫封縣君。以子封宜 人、恭人、令人。
8	胡寅『斐然集』卷二十六 太孺人李氏墓誌	紹興 23(1153) 76 歲	齊(子)通籍左奉議郎(正八品)、遇郊祀赦令恩追 贈其父右承事郎、而封太孺人今號。
9	洪迂『盤州文集』卷七十五 鄭宜人墓誌	紹興 27(1157) 60 歲	四十有五年從夫爵封自孺人爲宜人。
10	王庭珪『盧溪文集』卷四十 二 令人劉氏墓誌銘	紹興 28(1158) 54 歲	夫人自紹興丁巳(7 年・1137)以冬賜恩封孺人。 隆興甲申(2 年・1164)上初郊加贈令人。歿後 6 年。(夫・胡銓、兵部侍郎、子・承務郎)
11	劉才邵『槧溪集』卷十二 彭氏太孺人墓誌銘	紹興 22(1152) 106 歲	時夫人年九十餘、遇郊祀霽恩封太孺人。
12	劉才邵『槧溪集』卷十二 太碩人薛氏墓誌銘	紹興 15(1145) 84 歲	元祐間宣仁聖烈皇后與政外家命婦歲時入賀。 夫人進對詳雅宣仁嘉之錫以冠帔又特封寧國郡 君蓋異數(7)也。
13	孫覿『鴻慶集』卷四十 秦國夫人王氏墓誌	紹興 19(1149) 54 歲	夫人用公貴自碩人。進嘉國夫人。加號衛國・ 丹徒・楚國。更五命得今封秦國夫人。 (夫・孟忠厚、保寧軍節度使、顯謨閣直學士) (子 3 人、朝進郎、宣教郎、承事郎)、
14	孫覿『鴻慶集』卷四十 呂恭人胡氏墓誌銘	紹興 19(1149) 68 歲	太恭人以夫貴凡三命(8)賜號宜人。 靖(次男)登朝乃得今封太恭人。
15	孫覿『鴻慶集』卷四十 太淑人劉氏墓誌銘	紹興 27(1157) 74 歲	敷文閣(子・從三品)登朝由卿寺擢承郎進位八坐 (9)。太淑人以子貴更七封而賜今號太淑人。
16	孫覿『鴻慶集』卷四十 恭人楊氏墓誌銘	紹興 11(1141) 60 歲	三錫而賜號宜人。又以詩書教其子而師尹(長子) 者擢名第通朝籍遇郊祀恩而進今封恭人。

17	洪适『盤州集』卷七十六 朱安人墓銘	紹興 27(1157) 84 歳	子恩封太孺人、又進太安人。 男 2 人左朝奉郎(正七品)
18	洪适『盤州集』卷七十七 慈瑩石表 (鄱陽郡夫人沈氏)	紹興 8(1138) 50 歳	太夫人以先君恩封令人、贈碩人、以遵入翰苑(翰林)、贈淑人。以四子恩追封鄱陽郡夫人。 子 8 人朝請大夫、戸部郎中、中大夫、朝奉大夫、起居舍人、承議郎、宣義郎、承奉郎。
19	張山泉『紫微集』卷三十五 先夫人歸祔誌(駱氏)	紹興 2(1132) 77 歳	先君遇恩封孺人安人。後以其孤某(子)升朝及爲中書舍人、遇恩贈宜人、令人、碩人。
20	曾協『雲莊集』卷五 代從兄作伯母事述(蘇氏)	紹興 17(1147) 76 歳	享年七十有六。封太宜人。 (子 6 人承事郎、朝奉郎、從事郎、迪功郎)
21	張九成『橫浦集』卷二十 陳氏考妣墓銘(潘氏)	紹興 25(1155) 76 歳	紹興丙寅(16 年 1146)郊祀以一鶚(子)升朝錫恩贈右承事郎。三封至右奉議郎。潘氏封太安人。
22	劉一止『苕溪集』卷五十一 宋故太宜人莫氏墓誌銘	紹興 30(1160) 87 歳	郊祀恩封太安人。 明年顯仁皇太后覃八十之慶。加今封太宜人。
南宋 2 期 1163~1194 18 人			
23	陳亮『龍川集』卷三十 姚漢英母夫人墓誌銘(沈氏)	淳熙 14(1187) 不明	怡(子)入太學遇高宗皇帝慶壽覃恩得封孺人。
24	周必大『文忠集』卷三十六 王給事母安人徐氏墓誌銘	淳熙 3(1176) 69 歳	從其子官於朝者五年、初以乾道九年(1178)冬祀恩封太孺人。至是蓋進太安人。子・給事中。
25	周必大『文忠集』卷七十六 太恭人司徒氏墓	淳熙 9(1182) 85 歳	初該德壽恩封太孺人。郊禮封太恭人。
26	呂祖謙『東萊集』卷十三 鄱陽王安母程氏墓誌銘	淳熙 6(1179) 不明	淳熙三年(1176)、天子稱觴(10)德壽宮。 賜高年者爵孺人實始封。
27	韓元吉『南澗甲乙稿』卷二十二 太恭人李氏墓誌銘	淳熙 4(1193) 74 歳	既二子皆舉進士。預薦送則喜曰其將有傳耶。 以慶壽恩封太恭人。(子 2 人・從事郎、迪功郎)
28	韓元吉『南澗甲乙稿』卷二十二 太宜人毛氏墓誌銘	淳熙 11(1184) 58 歳	夫人以長子陞朝列封太安人。 壽聖慶典(11)封太宜人。(子 2 人修武郎他)
29	楊萬里『誠齋集』卷一百二十八 太宜人蕭氏墓誌銘	紹熙元(1190) 87 歳	夫人年德高邵應書初封太孺人。再封太安人。 新天子(淳熙 16 年 1189、孝宗→光宗)三封太宜人。(子 3 人修職郎、保義郎、承節郎)
30	楊萬里『誠齋集』卷一百二十九 太令人方氏墓誌銘	紹熙 2(1191) 77 歳	初遇今天子正位儲官以子登朝三遇慶壽恩霈(12)自孺人。累封太令人。(子 2 人朝散大夫他)
31	楊萬里『誠齋集』卷一百三十一 太恭人董氏墓誌銘	紹熙 3(1192) 81 歳	司農少卿君(長男・穎)甫冠遂以進士起家。 夫人享其養蓋(13)三十有六年累封至太恭人。
32	楊萬里『誠齋集』卷一百三十一 太宜人郎氏墓誌銘	紹熙 2(1191) 85 歳	太宜人生長儒素歸大家見其子豸冠(14)爲部使者又以高宗慈福慶恩三封至太宜人。 (子 5 人兵部侍郎、迪功郎他)
33	金・王寂『拙軒集』卷六 清河張氏夫人墓誌銘	大定 6(1169) 35 歳	卒後五年進封太原縣君。
34	林之奇『拙齋文集』卷十八 榮國太夫人王氏墓銘	乾道 5(1169) 78 歳	封令人。歷永嘉・大寧・永寧三郡太夫人。進封榮國太夫人。宋皇叔故贈昭慶軍節度使追封豫章公諱士棫之夫人王氏、世開封人、五世祖仁瞻左右藝祖有功位樞密副使、曾祖漢卿贈右金吾衛大將軍、祖公弼供備庫副使、父・脩內殿崇班。夫人崇班次女也。子・朝請郎他。

35	呂祖謙『東萊集』卷十 湯教授母潘夫人墓誌銘	隆興 2 (1164) 73 歳	紹興二十九年(1159)正月朔旦天子稱觴(10)慈寧宮勞問高年、以差受寵有秩者父若母慶賜有加孺人。
36	張忞『南軒集』卷四十一 張氏墓表	淳熙 2 (1175) 不明	淳熙二年(1175)天子奉觴(15)前殿推恩海內、夫人以擢(次男・從政郎)故得封太孺人。
37	陸游『渭南集』卷三十六 呂從事夫人方氏墓誌	淳熙 3 (1176) 49 歳	祖平(子)恩贈從事通直郎(正八品)。 夫人亦追封孺人。
38	胡銓『胡澹庵文集』卷二十六 越國太夫人郭氏墓誌銘	乾道元(1165) 71 歳	享年七十有一。累封福國夫人。以昭祖(次男)遇郊祀恩加封越國太夫人。(夫、武泰軍節度使・開府儀同三司。子、團練使、武功大夫、成忠郎。)
39	舒璘『舒文靖集』卷上 汪母鄔氏墓銘	紹熙元(1190) 不明	有宋紹熙元年正月十有六日先妣太孺人鄔氏歿。(子 3 人將仕郎他)鄔鄔鄔
40	樓鑰『攻媿集』卷一百 盛夫人墓誌	紹熙 2 (1175) 63 歳	紹熙乙未(1175)秋七月二十八日卒。享年六十有三。明年(1176)以郊霽(16)贈孺人。
南宋 3 期 1195~1279 35 人			
41	葉適『水心集』卷二十 虞夫人墓誌銘	嘉定 6 (1213) 77 歳	子純(長男、中大夫)賜進士第一人、封夫人爲太碩人。
42	眞德秀『西山文集』卷四十五 夫人蔡氏墓誌銘	嘉定 16 (1223) 70 歳	奉直大夫知吉州諱萬樞之配。今朝散郎知邵軍兼福建路招捕使司參議官遂(子)之母。累封太令人。
43	周必大『文忠集』卷七十六 益國夫人墓誌銘(王氏)	嘉泰 3 (1203) 69 歳	紹興末(1162)郊恩孺人、覃恩(17)進安人。封恭人淳熙中(1182~83)封碩人、淑人。安康・文安・咸寧三郡夫人。
44	度正『性善堂稿』卷十四 郭安人墓誌銘	嘉定 15 (1222) 94 歳	既升朝遇慶元(1195~1200)郊封孺人(67 歳)。開禧(1205~1207)大饗(18)明堂如今封安人。
45	度正『性善堂稿』卷十四 張孺人墓誌銘	嘉定 16 (1223) 89 歳	歳在甲寅(紹熙 5 年・1194)天子推慶壽恩特封孺人(60 歳)。
46	韓元吉『南澗甲乙稿』卷二十二 安人盧氏墓誌銘	淳熙 6 (1195) 64 歳	夫人以攷功遇郊恩封安人。 (子 3 人迪功郎他。)
47	程秘『洛水集』卷十 王宗卿母夫人袁氏墓誌銘	嘉定 15 (1222) 92 歳	嘉定辛巳(14 年 1221)之歳、皇帝受元符(19)玉璽(20)。宗卿(三男)遣其弟夢錫(四男)、持表來賀朝廷官之初品拜命。夫人曰異恩(21)也。終於嘉定壬午(15 年 1222)。年九十二。累太安人。
48	劉宰『漫塘集』卷三十四 吉州王使君夫人蔡氏行狀	嘉定 16 (1223) 70 歳	使君階終奉直夫贈中散大夫及吉州無恙時封宜人。後以子官陞朝再封太令人。 (子・承議郎、文林郎、迪功郎)
49	樓鑰『攻媿集』卷八十五 亡妣安康郡太夫人行狀 (汪氏、撰者樓鑰之母)	嘉泰 4 (1204) 95 歳	紹興十六年(1146)封孺人(正八品)36 歳。 紹興二十三年(1153)封安人(正七品)43 歳。 紹興二十八年(1158)封宜人(從六品)48 歳。 乾道三年(1167)封恭人(從五品)57 歳。 淳熙十二年(1185)鑰(次男)該郊祀恩封太令人(從四品)75 歳 淳熙十三年(1186)高宗慶霽(22)封太碩人(從三品)76 歳。紹熙五年(1194)壽聖皇太后慶壽(23)恩封太淑人(從三品)84 歳。 慶元五年(1199)光宗聖體(24)清安(25)天子行

			慶于下封信安郡太夫人(正二品)89 歳。 慶元六年(1200)明堂恩進封大寧郡太夫人(正二品)90 歳。嘉泰三年(1203)郊禮(26)進封安康郡太夫人(正二品)93 歳。
50	黄椽『勉齋集』卷三十七 太安人林氏行狀	嘉定 12(1219) 74 歳	嘉定乙亥(8 年 1215)明禪(27)安人(70 歳)。以子官封太安人。(子 6 人朝散郎他)
51	楊萬里『誠齋集』卷一百三十一 太孺人劉氏墓誌銘	慶元 4(1198) 86 歳	淳熙 11 年(1184)壽聖皇太后壽到降天子率百官奉扈上千萬歳壽上自公卿大夫下逮士之嘗與計偕者。其父母皆行封有差於是錢(長男)之母、賜紫詰象軸封太孺人(72 歳)。
52	孫應時『燭湖集』卷十二 宜人史氏墓誌銘	慶元 3(1197) 59 歳	初以文惠王(父)故特封孺人。 李公(夫)遇郊恩封安人。再封宜人。
53	袁燮『絜齋集』卷二十一 安人趙氏墳誌	嘉定 6(1213) 50 歳	開禧二年(1206)大饗覃霈封孺人 嘉定五年(1212)郊恩封安人
54	孫應時『燭湖集』卷十二 太安人方氏墳記	嘉泰元(1201) 79 歳	修務郎(夫)台州兵馬都監趙公伯。拜封孺人。 晚以子遇錫類(28)恩加今封太安人。 子 8 人・通直郎、從事郎、修職郎、保義郎、成忠郎、承節郎、迪功郎
55	周必大『文忠公集』卷七十六 太宜人李氏墓誌銘	慶元 5(1199) 85 歳	朝廷連講慶壽禮一賜冠帔三封至太宜人。
56	林希逸『鹿齋集』卷二十一 林孺人墓誌銘	咸淳 2(1266) 75 歳	次子以留上庠遇禋恩封迪功郎。戊辰(嘉定元年 1208)轉承奉郎賜緋魚袋(12)。林氏封孺人。
57	文天祥『文山集』卷十六 王推官仇氏墓誌	咸淳 7(1271) 83 歳	子入太學甲寅(寶祐 2 年 1254)明禪封孺人(正八品)66 歳。從子赴永州戶曹祿養(29)壽康(30)稱其命服(31)。咸淳七年(1271)二月十九日終家。子(王國望・從政郎前袁州軍事推官)。
58	劉克莊『後村集』卷四十一 劉君方氏墳銘	淳祐 6(1246) 31 歳	孺人方氏鄉貢進士君菜之女、母劉氏。 淳祐丙午(6 年 1246)四月癸未卒。
59	劉克莊『後村集』卷一百五十三 方安人墓誌銘	淳祐 9(1249) 57 歳	庚寅(紹定 3 年・1230)禋霈封孺人(38 歳)。 辛卯(紹定 4 年・1231)慶典進安人(39 歳)。
60	劉克莊『後村集』卷一百六十 忠訓陳君宜人李氏墓誌	景定 3(1262) 69 歳	澈(長男)以戰功通顯秩(32)至正使贈右迪功郎。李氏初封孺人。繼宜人。
61	劉克莊『後村集』卷一百六十一 程孺人墓誌銘	不明 67 歳	卒六十七、以子貴恩封孺人。 (子 3 人宣教郎他)。
62	劉克莊『後村集』卷一百六十一 夫人宗氏墓誌銘	寶祐 4(1256) 84 歳	三封至太宜人累太恭人。 (子 2 人朝請大夫、從事郎)
63	劉克莊『後村集』卷一百五十二 魏國太夫人林氏墓誌 (撰者・劉克莊の母)	淳祐 8(1248) 88 歳	太夫人及先君時封宜人。 嘉定甲申(17 年 1224)以子陞朝進太碩人(64 歳) 紹定辛卯(4 年・1231)進太淑人(71 歳) 紹定癸巳(6 年・1233)封宜春郡太夫人(73 歳) 端平丙申(3 年・1236)進文安郡太夫人(76 歳) 嘉熙己亥(3 年・1239)封崇國太夫人(79 歳) 淳祐壬寅(2 年・1242)進福國太夫人(82 歳) 淳祐乙巳(5 年・1245)進魏國太夫人(85 歳) 淳祐戊申(8 年・1248)進齊國太夫人(88 歳) (子 4 人朝議大夫、朝散大夫、朝奉郎他)

64	劉克莊『後村集』卷一百五十八 趙孺人墓誌銘	寶祐 6(1258) 73 歲	府(夫)陸朝恩封孺人。
65	陳元晉『漁墅類稿』卷六 文溪先生致仕大夫陳公夫人黃氏墓碣	嘉熙元(1237) 76 歲	至紹定辛卯(4 年 1231)十一月初六日而先君卒。享年八十有一。又後七年至嘉熙丁酉(元年・1237)正月十八日而先妣卒。 先君中該大禮(33)登極(34)慶壽恩封贈至朝請郎。先妣安人。
66	趙汝騰『庸齋集』卷六 朱夫人墓誌銘	淳祐 11(1251) 84 歲	歿於淳祐辛亥(11 年 1251)年八十四。累封至宜人。(子 3 人宣教郎、奉議郎、迪功郎)
67	袁甫『蒙齋集』卷十七 甘氏夫人墓誌銘	端平元(1234) 92 歲	端平改元(1234)季夏十八日終於官舍。享年九十有二以慈明太后慶壽恩封太孺人。
68	袁甫『蒙齋集』卷十八 縣尉楊君太孺人何氏墓誌銘	嘉熙元(1237) 76 歲	紹定四年(1231)該皇太后慶壽恩封太孺人。
69	袁甫『蒙齋集』卷十八 林府君周夫人墓誌銘	嘉熙 2(1238) 82 歲	夫人晚歲益康強(35)兩該恩霈封太安人。(子 4 人宣教郎他)
70	袁甫『蒙齋集』卷十八 撫機關君安人郭氏墓誌	嘉熙 2(1238) 70 歲	郭孺人既嫠居(夫人 50 歲)。該紹定辛卯(4 年・1231)東朝錫慶恩加封安人。
71	袁甫『蒙齋集』卷十八 太孺人卞氏墓誌	端平 2(1235) 92 歲	紹定辛卯(4 年 1231)該慶壽恩封太孺人(88 歲)。(1 子 1 人承務郎)
72	馬廷鸞『碧梧玩芳集』卷十九 咸寧郡段太夫人墓誌	咸淳元(1265) 74 歲	夫人從其子登朝執經承華侍言邇英爲兩朝詞臣擢拌宥府。景定元年(1260)封太孺人。三年封太令人。咸淳元年(1265)封太夫人。(子・端明殿學士)
73	劉黻『蒙川遺稿』卷四 母昌元郡太夫人解氏墓誌	咸淳 10(1274) 84 歲	劉黻(撰者)先母封孺人。暨召試館職除正字遷校書郎兼樞密院編脩官遇郊禮封安人。壬申(咸順 8 年 1272)試吏部侍郎陞侍讀封太令人。甲戌(咸淳 10 年 1274)典貢舉試吏部尚書封太淑人。
74	李遇孫『枯蒼金石志』卷七 齊國夫人潘氏納壙誌	紹定 4(1231) 88 歲	乾道 3 年(1167)先公(夫)郊霈(8)初封孺人。乾道 6 年(1170)封安人。淳熙 13 年(1186)封宜人。紹熙 4 年(1193)封恭人。慶元元年(1195)封令人。慶元 6 年(1200)封碩人。嘉定 2 年(1209)恩封齊安郡太夫人。嘉定 5 年(1212)封吉國太夫人。嘉定 8 年(1215)封衛國太夫人。嘉定 11 年(1218)封齊國太夫人。
75	方逢辰『蛟峯文集』卷七 恭人邵氏墓誌銘	寶祐 4(1256) 34 歲	淳祐辛丑(元年 1241)歸(18 歲)。於我寶祐甲寅(2 年 1254)以夫有位。於朝封孺人(31 歲)。越二年丙辰(寶祐 4 年 1256)八月有三日以疾卒。明年丁巳(寶祐 5 年 1257)贈安人(歿後 1 年)。咸淳丙寅(2 年 1266)贈宜人(歿後 10 年)。又三年己巳(咸淳 5 年 1269)贈恭人(歿後 14 年)。

(注)

南宋

- (1) 沛澤＝めぐみ、恩澤
- (2) 魚袋＝金銀を以て飾とした魚形の符契。左右二片に分かれ、左は宮廷に置き、右は身に帯びて官名及び姓名を刻し、宮廷に出入りの時これを合わせる。袋に入れてあるので魚袋という。宋代は身分別の袋だけを用いた。
- (3) 便殿＝休息のために設けられた御殿。正殿の対。
- (4) 顧問＝天子が臣下をかえりみてその意見を聞くこと。気にかける。
- (5) 庭闈＝親のいる部屋。闈は奥座敷。転じて父母。
- (6) 明堂＝王者の太廟で政務を行う堂。古代、上帝を祀り、先祖を祭り、諸侯を朝せしめ、老を養い、賢を尊ぶなど国家の大典禮に関することを行う。
- (7) 異数＝異例。普通と異なること。
- (8) 三命＝天子の上士に任ぜられること。中士、下士に対して最上位の階級。
- (9) 八座＝宋は五尚書、二僕射と一令を八座とした。左右僕射と六尚書となす説もある。
- (10) 稱觴＝盃を挙げること。
- (11) 慶典＝国家の慶賀の典礼。祝賀の式典。
- (12) 恩霈＝君の恵み。大雨の降るごとく、恵みの広く及ぶこと。
- (13) 養蓋＝老人を養う。養老。
- (14) 豸冠＝司法官の冠。獬豸という神獣の象形。
- (15) 奉觴＝盃をささげる。盃を差上げる。
- (16) 郊霈＝郊祀の恩恵。
- (17) 覃恩＝君主の施す恩。賞賜あるいは赦恩などをいう。
- (18) 大饗＝天子が祖先を祭る儀式。
- (19) 元符＝大きな祥瑞。転じて天子の位。
- (20) 玉璽＝天子の印鑑。御璽。
- (21) 異恩＝特別な厚い恵。殊恩。
- (22) 慶霈＝恩澤。めぐみ。いつくしみ。天子の寵愛。
- (23) 慶壽＝天子の誕生日の祝い。
- (24) 聖體＝天子の體。玉體。
- (25) 清安＝清く安らかなこと。
- (26) 郊禮＝郊祭の禮。
- (27) 明禋＝神に仕える禮。明は潔、禋は敬。
- (28) 錫類＝子孫に善いことがあるようにする。
- (29) 祿養＝仕えて扶持を得て親を養う。
- (30) 壽康＝長生きで健康なこと。
- (31) 命服＝諸侯などが爵位とともに天子から賜る位階相当の官服をいう。
- (32) 顯秩＝高い位。
- (33) 大禮＝朝廷の重大な禮式。君臣間の大きな禮。
- (34) 登極＝天子の位に就くこと。
- (35) 康強＝健やか、丈夫、健康。

## 別表6 撰者の官職と品階

北宋 墓誌銘 546 人 撰者 102 人

南宋 墓誌銘 482 撰者 104 人

文集	撰者（生卒年）	官職	品階	文集	撰者（生卒年）	選者官職	品階
	劉渙(1000～1080)	文林郎	從八	九華集 1	員興宗(不明)	著作郎	從七
三劉集(1)	劉恕(1032～1078)	秘書丞	從七	山房集 1	周南(1159～1213)	池州教授	
	劉義仲(不明)	宣教郎	從八	丹陽集 1	葛勝仲(1072～1144)	國子祭酒	從四
丹陽集 3	葛勝仲(1072～1144)	國子祭酒	從四	文山集 2	文天祥(1236～1286)	宰相	正一
丹淵集 8	文同(1018～1079)	太常博士	正八	文定集 2	汪慶辰(1119～1176)	端明殿學士	正三
元豐類藁 24	曾鞏(1019～1083)	中書舍人	正四	方舟集 11	李石(1108～?)	太學博士	從八
文恭集 2	胡宿(996～1067)	吏部侍郎	從三	方壺集(2)	汪莘(1155～1227)	朱熹門人	
文莊集 2	■(985～1051)	宰相	正一	止齋集 4	陳傅良(1137～1203)	寶謨閣待制	從四
華陽集 12	■(1019～1085)	門下侍郎	從三	水心集 24	葉適(1150～1223)	寶文閣待制	從四
王魏公 5	■(1035～1095)	翰林學士	正三	北山集 3	鄭剛中(1088～1154)	資政殿學士	正三
北山小集 5	程俱(1078～1144)	中書舍人	正四	平齋集 5	洪咨夔(1176～1236)	翰林學士	正三
古靈集 3	陳襄(1017～1080)	給事中	正四	本堂集 2	陳著(1214～1297)	秘書監	正四
傳家集 5	■(1019～1086)	宰相	正一	先天集 2	許月卿(1216～1285)	提學常平事	
伊川集(1)	程頤(1033～1085)	儒學者		朱文公 16	朱熹(1130～1200)	寶文閣待制	從四
安陽集 7	韓琦(1008～1075)	宰相	正一	江湖集 6	陳造(1133～1203)	淮南安撫使	
竹隱集 5	趙鼎臣			艮齋集 1	薛季宣(1134～1173)	大理寺主簿	從八
西塘集 2	鄭俠(1014～1119)	朝奉郎	正七	西山集 2	眞德秀(1178～1235)	參知政事	正二
西臺集 5	畢仲游(1047～1121)	吏部郎中	正六	克齋集 2	陳文蔚(1154～1239)	迪功郎	從九
宋文鑑(3)	呂祖謙(1137～1181)	秘書閣著作郎	正八	玫瑰集 10	樓鑰(1137～1213)	中書舍人	正四
西溪集 2	沈遵(不明)	龍圖閣學士	正三	周益國 13	周必大(1126～1204)	太子少傅	正一
長興集 13	■(1029～1093)	翰林學士	正三	性善堂 3	度正(不明)	禮部侍郎	從三
雲巢編 2	沈遼(1032～1085)	將作監主簿	從八	拙軒集 1	金・王寂(不明)	不明	
姑溪集 2	李之儀(不明)	太學博士	從八	拙齋集 2	林之奇(1112～1176)	校書郎	從八
宗伯集 2	孔武仲(不明)	禮部侍郎	從三	昌谷集 8	曹彥約(1157～1228)	兵部尚書	從二
忠肅集 5	■(1030～1097)	尚書右僕射	從一	東牟集 1	王洋(1087～1154)	徽猷閣直學士	從三
東坡集 5	蘇軾(1036～1101)	翰林學士	正三	東塘集 3	袁說友(1140～1204)	參知政事	正二
東堂集 3	毛滂(不明)	知秀州		東萊集 11	呂祖謙(1137～1181)	秘書閣著作郎	從七
武夷集 1	楊億(974～1020)	翰林學士	正三	松隱集 1	曹勛(1098～1174)	節度使	從二
武溪集 1	余靖(1000～1064)	工部尚書	從二	南軒集 2	張栻(1133～1180)	吏部侍郎	從三
河東集 1	柳開(947～1000)	贊善大夫	正八	南澗稿 6	韓元吉(1118～1181)	龍圖閣學士	正三
河南集 3	尹洙(1001=1047)	起居舍人	從六	屏山集 2	劉子翬(1101～1147)	朱熹門人	
直講集 9	李觀(1009～1059)	太學助教	從九	建康集 1	葉夢得(1077～1148)	秘書丞	從七
南陽集 1	韓維(1017～1098)	翰林學士	正三	後村集 34	劉克莊(1187～1269)	中書舍人	正四
後山集 4	陳師道(1053～1101)	太學博士	從六	後樂集 2	衛涇(不明)	參知政事	正二
柯山集 4	張耒(1054～1114)	起居舍人	從六	毘陵集 1	張守(1084～1145)	資政殿學士	正三
毘陵集 1	張守(1084～1145)	資政殿學士	正三	祇水集 2	程秘(1164～1242)	端明殿學士	正三
眉山集 3	唐庚(1070～1120)	承議郎	從七	相山集 1	王之道(1093～1169)	朝奉大夫	從六
苕溪集 1	劉一止(1078～1160)	敷文閣直學士	從三	秋崖稿 2	方岳(1199～1262)	不仕	
范太史 90	■(1041～1098)	給事中	正四	胡澹庵 2	胡銓(1102～1180)	工部侍郎	從三
范文正 2	范仲淹(989～1052)	參知政事	正二	苕溪集 7	劉一止(1078～1160)	敷文閣直學士	從三
范忠宣 1	范純仁(1027～1101)	觀文殿大學士	從二	香溪集 2	范浚(1102～1151)	學者	

騎省集 1	徐鉉(917~992)	吏部尚書	正二	勉齋集 6	黃榦(1152~1221)	朱熹門人	
晁雞肋 15	晁補之(1053~1110)	禮部郎中	從五	浣川集 1	戴栩(不明)	太常博士	正八
浮沚集 3	周行己(不明)	本州教授		浮山集 1	仲并(不明)	光祿丞	正八
浮溪集 5	汪藻(1079~1154)	顯謨閣學士	正三	浮溪集 4	汪藻(1079~1154)	顯謨閣學士	正三
祠部集 5	強至(1022~1076)	尚書祠部郎中	從六	庸齋集 2	趙汝騰(?~1261)	翰林學士	正三
高峯集 2	廖剛(1071~1143)	工部尚書	從二	梅溪集 1	王十朋(1112~1171)	龍圖閣學士	正三
張右史(4)	張耒(1054~1114)	太常少卿	從五	雪坡集 3	姚勉(1216~1262)	校書郎	從八
梁谿集 2	李綱(1083~1140)	兵部侍郎	從三	敝帚稿 1	包恢(1182~1268)	資政殿學士	正三
淨德集 6	呂陶(不明)	集賢院學士	從三	斐然集 6	胡寅(1098~1156)	徽猷閣直學士	從三
淮海集 4	秦觀(1049~1100)	太學博士	從八	渭南集 12	陸游(1125~1209)	寶章閣待制	從四
陶山集 20	陸佃(不明)	尚書右丞	正一	繫齋集 8	袁燾(1144~1224)	國子祭酒	從四
彭城集 9	劉敞(1023~1089)	中書舍人	正四	舒文靖 2	舒璘(1136~1199)	徽州教授	
景文集 4	■(991~1061)	翰林學士	正三	蛟峯集 2	方逢辰(1221~1291)	吏禮二部尚書	正二
無爲集 5	楊傑(不明)	禮部員外郎	從六	象山集 2	陸九淵(1139~1192)	台州崇道觀	
山谷外集 18	黃庭堅(1045~1105)	起居舍人	從六	黃四如 1	黃仲元(1231~1312)	國子監簿	正八
嵩山集 6	晁說之(1059~1129)	徽猷閣待制	從四	鄂州集 1	羅願(1136~1184)	知鄂州 朱熹門人	
摘文堂 13	■(1067~1117)	刑部尚書	從二	慈湖書 5	楊簡(1141~1226)	寶謨閣學士	正三
溪堂集 8	謝逸(不明)	文學者(詩作)		筠谿集 1	李彌遜(1089~1153)	起居郎	從六
跨龍集 3	李新(不明)	承議郎	從七	鉛刀編 2	周孚(1135~1177)	眞州教授	
道卿集 11	鄒浩(1060~1111)	龍圖閣直學士	從三	漁墅稿 1	陳元晉(不明)	安撫使	
郎溪集 9	■(1022~1072)	翰林學士	正三	漢濱集 1	王之望(1103~1170)	參知政事	正二
嘉祐集 1	蘇洵(1009~1066)	校書郎	從八	漫塘集 23	劉宰(1166~1239)	太常丞	從八
演山集 5	黃裳(1146~1194)	禮部尚書	從二	碧悟集 4	馬廷鸞(1222~1289)	右丞相	正一
清獻集 1	趙抃(1008~1084)	參知政事	正二	網山集 3	林亦之(不明)	學者	
廣陵集 3	王令(1032~1059)	學者		蒙川稟 2	劉黻(不明)	吏部尚書	正二
樂全集 9	■(1007~1091)	參知政事	正二	蒙齋集 7	袁甫(不明) 袁燾子	國子祭酒	從四
樂圃餘藁 1	朱長文(1039~1098)	秘書省正字		誠齋集 22	楊萬里(1127~1206)	寶謨閣學士	正三
樂靜集 3	李昭玘(不明)	起居舍人	從六	橫浦集 2	張九成(1092~1159)	禮部侍郎	從三
橫塘集 2	許景衡(1072~1128)	尚書右丞	正一	潛齋集 1	何夢桂(不明)	太常博士	正八
文忠集 21	■(1007~1072)	參知政事	正二	盤洲集 2	洪适(1117~1184)	觀文殿大學士	從二
潛水集 2	李復(不明)	中大夫	正五	綠督集 3	曾手(1142~?)	朝散大夫	從六
端明集 4	■(1012~1067)	端明殿學士	正三	蓮峯集 1	史堯弼(不明)	文學者	
學易集 5	劉跂(不明)	朝奉郎	正七	閩風集 1	舒嶽祥(1236~?)	承直郎	從八
龍雲集 3	劉弁(1048~1102)	著作佐郎	正八	廬溪集 10	王庭珪(1080~1172)	敷文閣學士	正三
龍學文集 1	祖無擇(1006~1085)	龍圖閣直學士	從三	貧窗集 2	陳耆卿(1180~1236)	國子監司業	正六
龜山集 5	楊時(1053~1135)	龍圖閣直學士	從三	遺山集 3	金·元好問(不明)	尚書員外郎	從六
濟南集 1	李廌(1059~1109)	蘇軾門人		嶠齋集 4	林希逸(不明)	中書舍人	正四
臨川文集 28	■(1021~1086)	宰相	正一	龍川集 18	陳亮(1143~1194)	健康府判官	正八
襄陵文集 2	許翰(?~1133)	資政殿大學士	從二	龜谿集 1	沈與求(1086~1137)	翰林學士	正三
竹友集 2	謝口(不明)	文學者		嶽溪集 4	劉才邵(1086~1158)	吏部尚書	正二
鴻慶集 1	孫觀(1081~1169)	翰林學士	正三	燭湖集 6	孫應時(1154~1206)	黃巖尉	
蘇學士集 3	蘇舜欽(1008~1048)	集賢校理		鴻慶集 8	孫觀(1081~1169)	翰林學士	正三
蘇魏公集 7	蘇頌(1020~1101)	太子少師	正一	蘆川集 1	張元幹(1091~?)	將作少監	從六
灌園集 4	呂南公(1047~1086)	薦士		追加 40 人			

追加 20 人				紫微集 1	張山泉(1096～1148)	敷文閣待制	從四
公是集 7	■(1019～1068)	集賢院學士	從三	艾軒集 1	林光朝(1114～1178)	中書舍人	正四
騎省集 5	■(917～992)	尚書右僕射	從一	于湖集 1	張孝祥(1132～1170)	學者	
伐檀集 1	黃庶(不明)	知康州		柳塘外 1	釋道璨(不明)	寺僧	
樂城集 2	蘇轍(1039～1112)	文學者		模塋集 1	徐元杰(1194～1245)	將作監	從四
石門文字禪 1	釋惠洪(1071～1128)	圓明禪師		北海集 1	蔡崇禮(1083～1142)	翰林學士	正三
				應齋雜 1	趙善括(不明)	學者	
錢塘集 3	韋驥(1033～1105)	朝議大夫	正六	雲莊集 1	曾協		
伊川集 1	程頤(1033～1085)	儒學者		靈巖集 1	唐士恥		
金石文 20 人				舒文靖 2	舒燐		
古誌石華 4	清・黃本驥	教諭		矩山存 2	除經孫		
八瓊金 2	清・陸增祥	翰林院修撰		鶴林集 2	吳泳		
金石苑 1	清・劉善海			蒙川遺稿 2	劉黻(不明)	吏部尚書	正二
藝文志 1	蕭稷			鐵菴集 5	方大琮(1118～1247)	直學士	從三
金石攷 1	鍾離景伯	知壽州制		鶴山集 11	魏了翁		
鞏縣志 1	舒雅			浪語集 1	薛季宣(1134～1173)	大理寺主簿	從八
芒洛冢墓遺文 3				知稼翁 1	黃公度(1109～1156)	秘書正字	
江蘇金石志 1	清・羅振玉			龍圖集 5	陳宓		
湖北金石志 1	闕名			金石文 17 人			
光緒慈谿縣志 1	清・張仲炘			古誌石華 3			
東都冢墓遺文上虞 1	清・羅振玉			金石苑 1			
東都冢墓遺文 1	章惇			八瓊金 2	清・陸增祥	翰林院修撰	
民國鞏縣志 2	鄭居中			台州金石錄 2	黃端		
南宋 文集追加 32 人				枵蒼金石志 2	清・李遇孫		
文天祥『文山集』 1	胡銓『胡澹庵』 1 2			永嘉縣志 1			
鄭剛中『北山集』 4	楊簡『慈湖書續』 1			東甌金石志 1			
周必大『周益國』 1	洪适『盤州集』 5			民國福建金石志 2			
呂祖謙『東萊集』 2	曾手『緣督集』 2			閩中金石略 1			
韓元吉『南澗甲乙稿』 1	孫應時『燭湖集』 1			光緒諸暨縣志 1			
劉克莊『後村集』 1	孫覿『鴻慶集』 1			越中金石記 1			

注：選者の生卒年と官職は、『宋人伝記資料索引』を参照。■

参考文献

那珂通世「宋百官品秩表」『支那通史』岩波文庫

『中国歴代官制大辞典』『中国官制大辞典』『宋代官制辞典』

撰者の品階と人数

品階	正一品	從一品	正二品	從二品	正三品	從三品	正四品	從四品	正五品	小計	從五品	正六品	從六品	正七品	從七品	正八品	從八品	正九品	從九品	小計	無階	合計
北宋	7	2	5	6	12	10	5	2	1	50	2	2	7	2	3	4	6	0	1	27	25	102
南宋	3	0	8	3	16	8	5	9	0	52	0	1	5	0	3	5	7	0	1	22	30	104

別表7 再婚した女性

	撰者(生卒年) 文集 墓主(卒年)	墓誌銘
北宋 1	蘇頌(1020～1101)撰 『蘇魏公集』卷六十二 萬壽縣令張君夫人蘇氏(1072)	撰者の妹である蘇氏は、故相許文穆公の孫である呂昌緒に嫁したが、三年後に呂昌緒が亡くなったので、四年後に萬壽縣令である張挺卿に再嫁した。
2	鄭獬(1022～1072)撰 『鄧溪集』卷二十二 崔夫人(不明)	崔氏は夫・孫廣が亡くなった後、都に住む姨のところに身を寄せたが姨も亡くなった。夫人は二兒に言うには「私は貧しくて兒を養うことができない。二兒を連れて高蜜の趙君に再嫁する」と。崔氏は貧しさ故に趙扶に再嫁。
3	秦觀(1049～1100)撰 『淮海集』卷三十六 蔡氏夫人(1075)	蔡氏は年十四で同郡の環生に嫁した。結婚後わずか十六日で寡婦となり、婚家を去って一年後に徐某に再嫁した。それから十八年後に徐某が没した。蔡氏は二日後に自殺。
4	鄒浩(1060～1111)撰 『道郷集』卷三十七 夫人臧氏(1110)	臧氏は寡婦になって後、通仕郎新撫州金谿縣令・姚棐忱に再嫁した。姚棐忱には七男三女がいた。
南宋 5	汪藻(1079～1154)撰 『浮溪集』二十八 令人施氏(1148)	施氏は十七歳で胡氏に嫁したが、胡■が翌年亡くなった。孫庭臣から縁談があり、父により「奪志」され再嫁した。
6	鄭剛中(1088～1154)撰 『北山集』卷十五 外姑墓誌銘(謝氏)	謝氏が一女を生んだ後、夫がなくなった。四年後、謝氏は一女を携えて朝請郎・何至に嫁いたが、何至も亡くなり十年後、同邑の士人・石子文に嫁ぎ、三男三女を生んだ。(撰者は長女の婿)
7	韓元吉(1118～1181)撰 『南潤稿』卷二十二 太恭人李氏(1193)	李氏は初め符寶郎・錢端義に嫁し■生まれた。寡婦となり朝請大夫秘閣修撰・韓球に再嫁し継室となり二子の継母となった。(韓球も最初の妻・陳氏を亡くした。)

1～7 女性墓誌銘に載る被葬者の母の再婚

参考 1	強至(1022～1076)撰 『祠部集』 卷三十五 安府君妻趙氏	幼くして父を亡くし、母が張氏に嫁するに随った。
参考 2	范祖禹(1041～1098)撰 『范太史集』卷四十五 右監門衛大將軍妻長安縣君蔚氏	蔚氏は幼くして父を亡くした。母の萬年君李氏は蔚氏を連れて宋氏に改嫁した。
参考 3	唐庚(1070)～1120)撰 『眉山文集』卷五 徐夫人	十二歳で母を亡くし、迎えた継室の母によく順応した。
参考 4	闕名撰『江蘇金石志』金石十 朱君夫人范氏	幼くして母を失ったが、継母にしたがった。
参考 5	清張仲炘撰『湖北金石志』 金石九 鄭公夫人李氏	幼くして母を失ったが、継母にしたがった。
参考 6	沈括(1029～1093)撰 『長興集』卷十七 玉山縣縣君施氏(1076)	縣君施氏は継母に事えた。継母も施氏を我が子の如く慈しんだ。
参考 7	李昭圻(不明)撰 『樂靜集』卷二十八 蓬萊縣君趙氏墓誌銘	母の崇徳縣太君孫氏は早卒した。継母は榮徳縣太君門氏である。

## 8～11 娘の再婚

参考 8	林之奇(1112～1176)撰 『拙斎集』卷十七 榮國太夫人王氏	太夫人には男六人、女三人の子がいた。長女と次女は早世。三女は周璩に嫁いだが無くなったので、呂大琮に再嫁した。
参考 9	洪适(1117～1184)撰 『盤州集』卷七十七 慈瑩石表(陳氏)	太夫人陳氏には八男七女がいた。三女は早世、四人のうち一人は、従事郎に嫁いだが無くなり、朝奉郎に再嫁した。
参考 10	朱熹(1130～1200)撰 『晦庵集』卷九十二 榮國夫人管氏	夫人には女が四人いた。三女は承直郎に嫁いだ後、奉議郎に再嫁した。(再嫁の理由は不明)
参考 11	黄裳(1146～1194)撰 『演山集』卷三十四 夫人林氏	黄氏には女が四人いた。四女は郷貢進士李耕に嫁いだが無くなり、再び鄭氏に嫁した。

## 12～15 男性墓誌銘に載る被葬者の母の再婚。

参考 12	范純仁(1027～1101)撰 『范忠宣集』卷十五 内殿承制閤門祇候衛君	衛君が幼少のとき、父の密が亡くなった。母は衛君を連れて吳氏に嫁した。
参考 13	楊時(1053～1135)撰 『龜山集』卷三十四 孫龍圖(諤)	孫諤の父・迪が亡くなった。母の黄氏は游氏に再嫁した。
参考 14	孫覿(1081～1169)撰 『鴻慶居士集』卷三十二 王龜年狀	王龜年が幼い時、父が亡くなった。母は龜年を連れて高氏に再嫁した。
参考 15	周必大(1126～1204)撰 『文忠集』卷二十 資政殿學士戸部侍郎文正公	范仲淹が二歳の時、父が亡くなった。母は貧しいうゑに頼るところもなく、長山の朱氏に再嫁した。

## 16～36 男性の墓誌銘に載る娘の再婚。(注 24、25 は娘二人が再嫁)

参考 16	范祖禹(1041～1093)撰 『范太史集』卷三十九 朝請郎致仕張公	張公には女が六人いた。次女は初め将作監主簿■皇甫僖に嫁した。再び衛尉寺丞・馬鼎に嫁した。
参考 17	孫覿(1081～1169)撰 『鴻慶居士集』卷三十四 右中奉大夫直秘閣致仕朱公	朱彦美には女が四人いた。次女は右従事郎・莫偁に嫁いだ。莫偁が無くなり、右修職郎・洪時に再嫁した。
参考 18	陸游(1125～1209)撰 『渭南集』卷三十四 尚書王公(佐)	王佐には女が四人いた。長女は温州平陽縣主簿・梁叔括に嫁した。叔括が無くなった。長女は提舉湖北路常平茶鹽・張孝曾に再嫁した。
参考 19	周必大(1126～1204)撰 『文忠集』卷三十三 靖州太守李君發	李發には女が一人いた。右朝奉郎知邕州・葛永慶に嫁した。再び奉議郎前知南安軍南康縣・彭邦光に嫁した。
参考 20	周必大(1126～1204)撰 『文忠集』卷三十七 皇從姪筠州團練使安陸侯	趙宗訥には女が八人いた。長女は右侍禁・蔚世庸に嫁した。のち右侍禁・郭昭簡に再嫁した。
参考 21	周必大(1126～1204)撰 『文忠集』卷六十二 中大夫贈特進蔡公(周樞)	周樞には女が二人いた。長女は張調に嫁した。再び文林郎福州録事參軍・俞世昌に嫁いだ。

参考 22	周必大(1126～1204)撰 『文忠集』卷六十七 敷文閣學士宣奉大夫贈特進汪公	汪大猷には女が四人いたが、三人は早世した。残った一人は奉議郎知福州永福縣・樓錡に嫁いだ。再び脩武郎東南第六副將・趙善琮に嫁した。
参考 23	周必大(1126～1204)撰 『文忠集』卷六十八 左中奉大夫敷文閣待制特進林公(	林保には女が七人いた。三女は宣教郎・史純臣に嫁したが、純臣が早世した。迪功郎主湖州武康簿・吳曦に再嫁した。
参考 24	周必大(1126～1204)撰 『文忠集』卷六十九 資政殿學士 中大夫參知政事太師李文敏公(邴)	李邴には女が五人いた。次女と五女の二人は再嫁。次女は左迪功郎・趙如川に嫁いだ。朝請郎・晁子闔に再嫁した。五女は迪功郎・馬諒に嫁いだ。再び迪功郎・傅伸に嫁した。
参考 25	周必大(1126～1204)撰 『文忠集』卷七十七 朝議大夫賜紫金魚袋王君(鎮)	王鎮は女四人のうち三女と四女を再嫁させた。三女は刑鑄に嫁ぐが刑鑄が卒し、胡文定公の孫の荊に再嫁。四女は謝壽孫に嫁ぐが、謝壽孫が卒し曾之謹に再嫁。
参考 26	楊萬里(1127～1206)撰 『誠齋集』卷一百二十三 丞相太保魏國正獻陳公(俊卿)	陳俊卿には四人の女がいた。次女は著作佐郎・鄭鑑に嫁した。鄭鑑が亡くなった。次女は太常少卿・羅點に再嫁した。
参考 27	朱熹(1130～1200)撰 『晦庵集』卷九十六 少師觀文殿 大學士致仕魏國公贈太師諡正獻陳公	同上
参考 28	呂祖謙(1137～1181)撰 『東萊集』卷九 朝散潘公(好古)	潘好古には四人の女がいた。長女は右承奉郎兩浙東路安撫司主管機宜文字・湯玘に嫁いだ。再び右通直郎新知太平州蕪湖縣・蘇誦に嫁した。
参考 29	葉適(1150～1223)撰 『水心集』卷十五 翁誠之(翁忱)	翁忱には女が三人いた。次女は文林郎嚴州分水縣令・馮遇に嫁した。馮遇が亡くなった。再び進士・何某に嫁した。
参考 30	葉適(1150～1223)撰 『水心集』卷十五 華文閣待制知廬州錢公(錢望)	錢望には女が一人いた。女は先に戎・知剛に嫁した。再び某官に嫁いだ。
参考 31	劉宰(1166～1239)撰 『漫塘集』卷三十一 趙訓武(崇悉)	趙崇悉は太宗皇帝の九世孫にあたる。三人の女のなかで、長女は諸葛鑑に嫁いだ。再度、貢士・範燮に嫁した。
参考 32	魏了翁(1178～1237)撰 『鶴山集』七十五 宣教郎致仕宋君(祁仲)	宋祁仲には二人の女がいた。長女は忠翊郎監潭州南嶽廟・趙時剪に嫁した。趙時剪が亡くなり、史良能に再嫁した。
参考 33	魏了翁(1178～1237)撰 『鶴山集』八十 孫和卿(調)	孫調には二人の女がいた。長女は郭德彰に嫁した。再び黃復に嫁いだ。
参考 34	魏了翁(1178～1237)撰 『鶴山集』八十二 迪功郎致仕程君(南金)	程南金には女が一人いた。初めは史德麟に嫁した。再び杜嗣賢に嫁いだ。
参考 35	魏了翁(1178～1237)撰 『鶴山集』八十四 知富順監致仕家侯炎	家炎には二人の女がいた。次女は從事郎邛州大邑縣丞・虞珏に嫁した。虞珏が亡くなった。再び宣教郎新知成都府新繁縣・李溫に嫁いだ。
参考 36	劉克莊(1187～1269)撰 『後村集』卷一百五十六 林經畧(朝散大夫直秘閣林公)	林行知には三人の女がいた。長女は承直郎鎮南軍節度推官・洪搏に嫁した。再び宣教郎大理評事・任永年に嫁した。

## 別表8 守節を通した女性

表中の二重線は「自活」、波線は「教育」、一重線は「再婚拒否」、点線は「子供」

北宋 60 人

1	徐鉉『騎省集』卷三十 汝南縣太君周氏	夫が早世した。四人の子は皆な幼く、夫人は子供を養育し、自ら <u>経書及び外伝・孝教・論語</u> を教えた。
2	李觀『直講集』卷三十一 先夫人	李觀は十四歳で父親を亡くした。家は非常に困窮していたので、 <u>母親の鄭氏は城から百里も離れた山中に水田を作るため、小作人を募集し山の荒地を開墾した。日中は農事の監督を、夜は裁縫や紡績など女功の仕事をしながら家計を維持し、息子の李觀に勉強をさせた。</u>
3	文同『丹淵集』卷四十 文安縣君劉氏	夫が亡くなった。子供を携え地元の成都に帰り家を借り、 <u>近所の子供を集めて塾を開き、十年間教師の仕事をしてその収入で家計を支えた。</u> 夫人は清らかな風格を家風にし、貧苦でも心を潔白にし、 <u>子供に昼も夜も勉強させた。</u>
4	文同『丹淵集』卷四十 壽安縣太君何氏	夫が亡くなった。夫人は弟の右贊善大夫絳の家の一室で、静かにひっそりと暮らした。 <u>日夜子に書物を読む、文字を書くことを教え、長じては師につけ詩文や文章を学ばせた。子は嘉祐某年の進士に及第した。</u> 夫人の訓導の力と評価された。
5	陳襄『古靈集』卷二十 夫人呉氏	夫人が三十七歳のとき大理君(夫)が亡くなった。家は益々困窮し、諸子はまつわりついた。 <u>夫人は苦境と戦い粗食に甘んじ、子供に勉強させた。二人とも学問を好み、其の後同時に進士になった。</u>
6	陳襄『古靈集』卷二十 秦國太夫人竇氏	令公(夫)が亡くなった。夫人は子供に朝早くから夜晩くまで勉強させ、正言と善行を教えた。故に孟母と比べられた。 <u>子供は進士に及第、後に丞相集賢殿大学士に、女は屯田郎中に嫁した。</u>
7	曾鞏『元豐類藁』卷四十五 天長縣君黃氏	夫の死後、夫人は力を盡くし、飲食衣服を治め、喪に服した。夫の意志を継ぎ子供は就学した。 <u>夫人は毎夜子供が勉強する傍らで糸を紡いだ。後に子供は文学で天下に名を成した。</u>
8	曾鞏『元豐類藁』卷四十五 池州貴池縣手簿沈君夫人元氏	貴池君(夫)早世。無兄弟、太夫人(姑)春秋(年齢)高、諸子尚幼。事姑能盡其孝教養諸子至其後皆為成材能世。
9	王珪『華陽集』卷五十 望都縣太君倪氏	夫が任期中に亡くなった。倪氏は幼い子供三人と宣城に寄居した。 <u>日夜子供たちを教育し将来出世できることを期待した。次子の府君逖は兒童の時から秀で、詩作に堪能であった。</u>
10	王珪『華陽集』卷五十三 壽安縣太君呂氏	不幸にして少卿(夫)が早世した。夫人は三十歳過ぎであった。自ら廣陵で喪に服した後、子供を連れて伯父のもとに身を寄せた。 <u>自分の宝石を手放して、書籍を購入し、自ら子供に勉強を教えた。</u>
11	王珪『華陽集』卷五十一 丹陽夫人李氏	夫が并州で亡くなった。夫人は毘陵に居住し、 <u>子供に家事などをさせず、ひたすら勉強に専念させた。</u>
12	王珪『華陽集』卷五十三 丹陽郡王夫人任城郡夫人魏氏	夫歿後の二十年間、夫人は簡素な生活をし、諸子は母の訓を守った。

13	王珪『華陽集』卷五十五 永壽郡太君朱氏	夫没後、夫人は子供を連れて鄂州に住み、自ら子供に書を読むことを教えた。 <u>子供は皇祐元年、天子の親試に及第。進士となり文章を以て天下第一となる。帰郷すると里巷の人々は歓呼した。夫人は独り動じなかった。後に翰林学士となる。</u>
14	王珪『華陽集』卷五十七 辜氏	先人(夫)は進士に及第せずに没した。 <u>夫人は日夜、諸子に読書を教えた。試験に堕ちた先人(父)の遺志は、十余年の後に始めてかない長男の愈充は進士に及第し、著作佐郎知司農寺丞事となる。</u>
15	蘇頌『蘇魏公集』卷六十二 壽昌郡太君陳氏	正議(夫)が没した。子供は成人しておらず家は貧しかった。 <u>睢陽の親族から帰るようにとの招きを断った。夫人は自ら紡績をしながら自給自足の生活をした。子供には経史・文章・法書及び近代の名臣の善言を教えた。その後三子は進士に及第した。</u>
16	王安石『臨川文集』卷九十 鄱陽李夫人	李氏は一男二女を生んだ。長女の夫は早世したが、再婚せずに姑によく仕え孝婦の名声が広まった。州の士大夫が皆言うには「 <u>母の教育がよいからである。娘が良いのは母の力による。</u> 」守節の娘を育てた李氏が評価された。
17	王安石撰 『臨川文集』卷九十九 永安縣太君蔣氏	兵部君(夫)が没した。太君は諸子に学問をすすめるため、悪衣悪食の貧しい生活に耐えた。嫡子も庶子も均一にいつくしみ鳴鳩の徳があった。 <u>子供は高い官職に就き、里巷の士は太君の榮とした。</u>
18	王安石『臨川文集』卷九十九 仙居縣太君魏氏	嫁いで十年、二人の子が生まれたが沈君(夫)は廣徳軍判官で没した。太君は自分が親しんできた詩経・論語・孝経を二人の子に教えた。 <u>二人の子供は就学するときには、すでに詩経・論語・孝経の三種の古典が暗唱できた。</u>
19	王安石『臨川文集』卷九十九 建陽陳夫人(繼室)	余君(夫)有子四人有り。其のうち二人は夫人の子である。夫人の少子翼は生れて三歳にして余君卒。余氏の世は大姓なり。夫人は先母の子にも仁を以て盡す。翼が四方に遊学するに戒めて曰く「 <u>汝遊学するからには必ず志を成しとげよ。翼年十五、蓋十二年後に進士となる。</u> 」
20	王安石『臨川文集』卷一百 永嘉縣君陳氏	陳氏は夫が亡くなったとき家は貧しかった。 <u>有力者からの求婚を断り、守節の意思を表明した。</u>
21	王安石『臨川文集』卷一百 壽安縣太君李氏	夫人は二十二歳で三男一女を生んだが寡婦となった。節を守り嫁がずにいた。 <u>父母は李氏を奪おうとしたが得ることはできなかった。後に息子は官途に就き娘も士大夫に嫁し、郷人に称えられた。</u>
22	沈括『長興集』卷十八 壽安縣君林氏	夫が早世した。夫人は書物を読みその説を誦し、子供たちにもその説を誦することを勧めた。 <u>子供たちは学力をつけ後に皆な進士から補束となり、郷人の榮となった。</u>
23	王令『廣陵集』附録 節婦夫人呉氏	夫が病死。呉氏は二十五歳にして遺腹の女兒を連れ、唐州の母兄に帰往した。 <u>兄からの再婚話を断り守節を選んだ。別墅に屏居し、悪衣悪職に耐えた。唐州は曠土多く蓄墾し廢陂を治めるため、陂旁にある兄の田が肥沃なことを示し慨然と衆を率いた曠土は壤膏腴と化し民は秔稻を飽食できた。呉氏は州から絹・米を賜った。</u>

24	范祖禹『范太史集』卷四十五 右監門衛大將軍妻長安縣君蔚氏	夫の河内侯が亡くなり、蔚氏は <u>子供たちに専ら経史を教えた。</u>
25	范祖禹『范太史集』卷四十五 安化軍節度使榮國公妻馮翊縣君郭氏	榮公(夫)薨。禮を盡して葬る。諸子を均しく慈愛をもって撫育した。
26	范祖禹『范太史集』卷四十五 華洲觀察使妻永福縣君郭氏	郭氏は二十歳で華洲觀察使・仲寂に嫁いだ。五年後に夫が没した。其の後、二十年間孀居を通し男子五人、女子五人を育てた。 <u>男子は右監門衛大將軍、右監門率府率、右侍禁の官に就き、女子は左侍禁、節度推官、左班殿直、承務郎に嫁いだ。</u>
27	范祖禹『范太史集』卷四十七 華洲觀察使華陰侯永安縣君陳氏	夫人が嫁いで六年後に夫は卒した(二十二歳で嫁ぎ二十八歳で寡婦となる)。 <u>夫人は窮乏生活にも憂えず十七年間にわたり子供を教育し、長男は左班殿直となった。</u> 夫人は見識があると称えられた。
28	范祖禹『范太史集』卷四十九 曹洲觀察使妻安康縣君王氏	夫が病没した。夫人は悲しみ病気になった。男五人、女三人の子供等を戒めてして言うには、 <u>「幼くとも勉学に励み身を修め、先王の教えを守ること。」</u> 子供等は慎んで其の教えに従った。夫人は十余年間、孀居で暮らした。 <u>男子五人は右千衛將軍・内殿崇班・左班殿直・右班殿直になり、女子三人は三班奉職に嫁した。</u>
29	范祖禹『范太史集』卷五十 右屯衛大將軍妻平原縣君張氏	屯衛(夫)捐館。平原縣君まだ若く子が無く、父が再嫁を欲した。君は泣いて自ら死すとも許さずと誓った。
30	范祖禹『范太史集』卷五十 右屯衛大將軍妻崇徳縣君張氏	屯衛(夫)卒。崇徳縣君は孀居し、其の生を楽しまなかった。
31	范祖禹撰『范太史集』卷五十一 右屯衛大將軍妻吉安縣君楊氏	夫が早世したとき楊氏は二十歳であつた。 <u>母親が孀婦を憐れんで再婚をすすめたがそれを断り、飾りのない質素な暮らしをした。早起きし一室を潔め香を焚き仏書を誦し、昼も夜も子供の教育に専念し、少しでも怠ると厳しく教え導いた。</u>
32	范祖禹『范太史集』卷五十二 右屯衛大將軍妻静安縣君鄭氏	嫁して六年にして屯衛(夫)卒。奉舅姑を奉り、夫が亡くなった悲しみ憂いを人には見せなかった。
33	畢仲游『西臺集』卷十四 田孺人	夫の郭守度が没し、孺人二十七歳まで夫の喪に服した。 <u>父母は実家に戻して再嫁を欲したが、孺人は守節を通し許さなかった。</u>
34	畢仲游『西臺集』卷十四 清源王太君宋氏	夫人は十六歳で嫁ぎ二十二歳で寡婦となり実家に戻った。 <u>季父の清臣が嫁にと欲したが断った。</u>
35	黄庭堅『山谷外集』卷八 叔母章夫人墓誌銘	夫人三十有四而叔父捐館舍、二男二女皆幼、毀瘠殆不勝。(毀瘠＝悲しみのあまり、やせおとろえる。勝＝たえる)
36	黄庭堅『山谷外集』卷八 湖州烏程縣主簿胥君夫人謝氏	烏程(夫)が早世。生まれた二子は父を失った。
37	黄庭堅『山谷外集』卷九 程氏夫人墓表	夫死す。三男三女は未だ未婚である。
38	黄庭堅『山谷外集』卷九 南陽黃府君夫人温氏	夫四十二歳で没す。夫人は子供を携えて郷里に帰り苦難の四十年を過ごす。 <u>男四人のうち一人は承務郎に、女二人は通直郎と将作監主簿に嫁し、孫十数人は宣徳郎や知縣になった。</u>

39	劉弁『龍雲集』附録 周夫人	夫が亡くなった。夫人は四十余歳であつた。 <u>金銭を惜し まず書籍を購入し、子供の勉強に役立てた。地元廬陵で も子供を勉学に勤しませたことで名高い歐陽文忠公の母 (注)と併称し称えられた。</u>
40	晁補之『雞肋集』卷六十六 羅氏墓誌銘	嫁いで四年、一子が生まれたが李君(夫)が亡くなった。 <u>母が夫人を憐れに思い再婚をすすめたが、夫人は拒んだ。</u> 李君には前妻苗氏との間に男女八人の子供が居た。李君 が亡くなったときはまだ幼く、夫人は自ら養育し、異母 であることを人は知らなかった。
41	晁補之『雞肋集』卷六十五 穆氏	夫は二十八歳で亡くなった。男子の敏修は六歳であつた。 <u>夫人は日夜勉学に励ませた。敏修は遂に学問を好み、称 えられて四方の游士や豪傑が表敬に訪れた。</u> ...
42	晁補之『雞肋集』卷六十六 闕氏墓誌銘	侯(夫)亡くなった。子を教育し内外の法度に従った。
43	張耒『柯山集』 卷五十 李夫人墓誌	夫が没した。夫人は一男と柩を抱え喪を行うため京師へ 還るため舟に乗った。舟が破損し舟人は舟を捨てた。夫 人は毅然として舟人に官府に鞭罰を与えるよう訴えると 言い、艱危しつつ数千里を旅した。寡婦が無事に還った ことを知る者は其の才に感嘆した。
44	晁説之『嵩山集』 卷十九 承義郎知楚州張公碩人范氏	張琬(夫)元祐間(1086~1093)以承議郎知楚州捐館。時に 夫人(25~32歳の間)。家は貧しかったが、夫人は晩年に 田を幾百頃も有した。
45	晁説之『嵩山集』 卷二十 崇徳縣太君王氏	夫が亡くなり夫人は舒州の実家に戻った。 <u>夫人の季父で ある淮南轉運使の舉元が夫人を嫁に欲した。夫人は身を 飾ることができなくても、食事が一日一飯でもよいから、 死すとも嫌だと断った。</u>
46	鄒浩『道郷集』 卷三十七 徳興縣君曾氏	夫が亡くなった。周囲に身を置く所がなく、子供たちを 連れて仲兄を頼り、慈しみ教え導いた。 <u>男子は科擧の試 験に及第し、女子は良縁を得た。男子は皆学問をもって 名を成し著名人となった。</u>
47	陳師道『後山集』 卷十六 李夫人	康州(夫)が亡くなった。子供は稚なく貧しかった。夫人 は喪に服した後、 <u>豫章に還り遺子を就学させ勉学に勤し ませた。後に其の子・黄庭堅は集賢校理佐著作となり名 を成した。</u> ...
48	劉跂(不明)撰『学易集』 卷八 夫人李氏(1111)	居士(夫)没。夫人は自力で家を守り節を通し、 <u>貧しいな か励んで子供に学問を受けさせた。男子二人は進士に擧 がった。</u>
49	李昭玘『樂静集』 卷三十 壽安縣君卞氏	寡婦となり困窮した。 <u>家の四方で耕作と養蚕に励み、勤 儉に暮らし、親に仕え祭祀を守り、子供を善教し、艱難 を克服。</u>
50	陸佃『陶山集』 卷十五 長壽縣太君陳氏	良人の徐氏はおとろえ且つ貧しく、また不幸にも早世し た。男児五人女児二人が委ねられた。夫人は節を守り子 供を養育した。苦節十余年、 <u>男子は進士に及第し朝奉郎、 奉議郎の官に就いた。</u>
51	清・黄本驥『古誌石華』 卷二十八 夫人朱氏	夫が没した。このとき子供はまだ幼く、夫人の兄に教育 を依頼。成人の後、兄は路の仕事ができるようにした。

52	呂南公『灌園集』卷二十 陳處士妻葉氏	處士(夫)早世。夫人夫の志を遵守し、子を教え飭した。
53	強至『祠部集』卷三十五 太常 少卿楊公夫人福昌縣君王氏	太常(夫)卒。二子に學問をさせた。元崇(長子)は前大名府内黄縣尉、元忠(次子)は太廟齋郎に至った。
54	謝逸『溪堂集』卷九 甘夫人	夫人十八歳にして居士諱某の妻となる。又十八年にして居士卒(夫人 36 歳)。夫人躬から儉約し諸子を訓育した。
55	鄒浩『道卿集』卷三十七 德興縣君曾氏	嫁して九年にして嫠となる(夫人 29 歳)。嫠居四十年。夫人性は莊重にして又た家法を積習した。
56	鄭獬『郕溪集』卷二十二 霍國夫人康氏	歸して七年、郕公墓。家政に専念して凡そ五十年、諸孤を撫育し皆な成就させた。以て子孫は百餘人、之を一に愛した。
57	張方平『樂全集』卷三十八 徐國太夫人(和氏)	英公(夫)卒。太夫人 25 歳。未亡人になってからは『貝葉書』を誦え、之れを諸孤に教え、幼兒も一の如く養育し、瑩居二十年、上下で間言する者はなかった。
58	歐陽脩『文忠集』卷三十七 東萊侯夫人平原郡夫人米氏	東萊(夫)亡くなる。諸孤はまだ幼く、夫人は家を治め子を訓え家法を守った。
59	歐陽脩『文忠集』卷三十七 右監門衛將軍夫人李氏	凡そ若干年にして世堅(夫)卒。夫人は子が無かったが、自ら守節を誓った。
60	歐陽脩『文忠集』卷六十一 長安縣太君廬氏(繼室)	夫人楊公(夫)に歸す。時に年は十七歳の始めなり。公の前夫人張氏は三男を生んでいたが皆まだ幼かった。夫人は三男四女を生んだ。右諫議大夫(夫)薨(夫人(32 歳))。諸子は母の慈撫を怡怡とした。

#### 南宋 41 人

61	孫覿『鴻慶居士文集』卷十四 胡夫人孫氏	夫三十九歳で病死。夫人は嫠居四十年、婦道を尽くし母として子供を慈しみ内外の族姻から賞賛された。
62	沈與求『龜谿集』卷十二 朱夫人	嫁いで十年経ち三人の男子がいた。藩侯(夫)が亡くなり夫人は盛年であった。喪に服した後、改嫁をすすめられた夫人は <u>慟絶したが、自ら二子を育てることを誓った。</u>
63	張元幹『蘆川歸來集』卷十 晉安黃夫人	夫が亡くなった。夫人はまだ四十歳前であった。夫人は夫の志を守り、 <u>嫁入り道具を売って子供に勉強させた。</u>
64	張九成『横浦集』卷二十 陳氏考妣(藩氏、太安人)	太安人は三十歳を過ぎ寡居になった。太安人は獨りで家のことを一切まかない、 <u>艱難を乗り越え諸子を就学させた。寒暑に拘わらず懈ることなく勉学に励ませた。三人の男子は左朝散郎、左奉議郎、進士に、女子五人は左奉議郎ほかみな進士に嫁した。</u>
65	胡銓『胡澹庵先生文集』二十四 易氏夫人	夫が没した。 <u>有力者が生計を見ると強要したが夫人は断った。夫人は諸子呼んで戒め諭すには「汝の父は陰徳を積んでいる。後には必ず栄える。私は嫁入り道具を売り汝らの教育に役立てる。先君の志を継ぎ詩書で家を起し貧しくても憂うことはない」と。</u>
66	李石『方舟集』卷十七 龐氏母	夫が蚤世した。以後二十三年間、 <u>未亡人として機織をし、周囲と睦み夫家の儒業は衰えることはなかった。一子は將仕郎、五女は左通直郎・忠訓郎・武翼郎及び進士に嫁した。</u>
67	李石『方舟集』卷十七 杜氏太孀人	筭年歸宣教公蚤卒。誓志自撫二子、為師慈而以儉儀其家其子克立。

68	黄公度『知稼翁集』下 穎川太夫人卓氏行状	夫が早くに亡くなった。夫人は閉門し嫠居すること二十四年、諸子に命じて勉学を促した。 <u>晩年に次男は甲課に登第した。郷人は其の子の積学は夫人の教育の賜であると言った。</u>
69	方大琮『鐵菴集』卷三十五 判院方公孺人鄭氏	夫は僅か四十一歳で没した。この時子供たちは幼稚であった。夫人は幼い子供たちの養育に専念した。
70	楊萬里『誠齋集』卷一百二十六 浩齋先生劉公向夫人	先生(夫)卒。夫人は家の責任を一身に背負い、子供をはじめ家族七人の面倒を見た。夫人は生まれつき明るく楽しい性格で姉姪とも睦んだ。 <u>十二年後男子は進士に及第し、女子は承信郎の嫁した。</u>
71	楊萬里『誠齋集』卷一百二十九 夫人李氏	季永(夫)は不幸にして早世。夫人は三十三歳であった。子供は幼かったが華侈に飾り立てることをせず <u>質素な暮らし</u> をすることを誓い子供を就学させた。 <u>男子は承事郎、修職郎となる。</u>
72	朱熹『朱熹集』卷九十一 夫人呂氏	夫人は孀婦となった。幼子を抱え、家を守り、祭祀を奉じ、上下の者とも睦み、内外ともに悪く言う者はいなかった。
73	張孝祥『于湖集』卷二十九 高侍郎夫人	夫薨。長子はまだ幼かった。 <u>長子は学問に優れ志を高く持ち続け名声を上げた。夫人が母として教えた賜物である。</u>
74	舒璘『舒文靖集』卷上 汪母鄆氏	夫太学に遊学し十六年。太孺人は躬ら家政を切り盛りし礼も違わなかった。夫は禄が無く蚤世した。 <u>太孺人は子供の教育に勤め励んだ。</u>
75	陳亮『龍川集』卷三十 凌夫人何氏	夫人 20 歳のとき夫が没した。夫人はそのとき妊娠していた。生まれたのは男児で堅と名付けた。 <u>父母は再婚を望んだが、毅然として拒み、堅を育てることを誓い、守節を通した。</u>
76	葉適『水心集』卷十三 太碩人臧氏	夫の死後、子供は皆な幼いが夜は必ず書物を持たせ、傍らに從い「我、婦人なり、書の義を知る能わず。其の玩誦反復するを觀れば、清切にして寝ねざるは、学に於いて深きの驗なり」と言った。
77	葉適『水心集』卷十四 楊夫人	夫歿。夫人二十六歳。二子(豐・嶸)が稍や長じた時、婺州に大儒の呂公(呂祖謙)有りと聞き、 <u>夫人二子に告げて言う「爾、学成らざれば、歸するを庸いざるなり。」二子は前後して進士に及第した。豐は文で尤も名をなした。豐は従事郎に、嶸は奉議郎になった。</u>
78	葉適『水心集』卷二十 虞夫人	夫の死後、子をより学問に向わせ、言うには「 <u>爾、未だ解けずとも、他を庸いて質すこと無かれ</u> 」と。
79	葉適『水心集』卷二十一 夫人陳氏墓誌銘	夫が急死した。穀物のでき具合が悪く、田は枯れ果てた。しかし猶を力めて其の子に学を課すことを怠らなかった。
80	葉適『水心集』卷二十二 太孺人唐氏	臨海の王棐の母唐氏は寧海の農女であった。校書郎王夷中は清廉潔白な士だが甚だ貧しく、其の室の賈夫人は年老いてなお炊事洗濯をした。舅族がこれを憐れみ唐氏にさせた。唐氏は纔十二歳であった。十六年後、棐が生まれた。三年後に夷仲・賈夫人とも相次いで没し、家は益々衰え兄弟で農耕に励んでも数斛にもならなかった。 <u>唐氏の父母は嫁ぐようにと迫った。唐氏は許さず「吾必ず自分から其の髪を断つ」と。この後、父母はなにも言わなくなった。又三十年、棐は上舍に及第し、官吏となり、唐氏を迎えた。</u>

81	黄榦『勉齋集』卷三十八 郭夫人	夫人三十歳にして夫没す。子は幼なり。夫人礼節を守り子供を訓導、勤儉を以て家を富ませた。夫人が賢だからこそ為せたことである。夫人は孀居四十八年にして七十九歳で没した。
82	黄榦『勉齋集』卷三十八 方夫人	夫人は二十六歳で夫を亡くした。姑につかえ夫の弟妹の世話も良くし、毅然として守節をとおした。
83	孫應時『燭湖集』卷十二 莫府君夫人(葉氏)	夫人は二十六歳で莫府君に嫁いだ。夫は不幸にして早世。夫人は三十歳の始めであつた。粧いもせずひっそりと一子二女を守った。 <u>礼法を訓え男子は就学させ、日夜紡織に励んだ。</u> 大族間では上下ともに夫人のことを悪く言う者は無かった。
84	劉宰『漫塘集』卷三十 澹軒先生艾公及其妻李氏	夫が没した。 <u>夫人は夜には子供たちに読書を課すことを懈らなかつた。子供は三人とも進士となった。</u>
85	陳宓『龍圖集』卷二十一 呉氏夫人	夫人は寡婦になって二十年。舅は没し姑は老いたが初めて嫁いだ時のように礼を盡くした。長男が役人となって赴任することになったが、夫人は家を去らず、 <u>昼間は諸子に教え、夜は婦工をした。</u>
86	葉夢得『建康集』卷八 趙夫人慕容氏	夫人三十歳にして朝議君(夫)卒。 <u>夫人躬ら艱苦にたえ子供を養育、学問は名儒に托した。男子は二子ともに進士に及第、長男は朝奉郎、次男は承議郎となる。</u> 女子五人は賢士に嫁す。
87	清・黄本驥『古誌石華』卷二十八 趙孺人牟氏墓誌銘	孺人が 30 歳を過ぎたとき夫が亡くなった。男児も女児も幼稚で、 <u>族黨は再婚をすすめた。孺人は守節を通した。</u>
88	清・張文虎『閩中金石略』卷第十 宋宣教余公孺人張氏	嫁いで十二年、夫は病気で亡くなった。孺人は艱難辛苦に耐えて家を守り、 <u>二人の子に読み書きを教えた。</u> 二人は立派に成長した。
89	樓鑰『攻媿集』卷一百九 文安郡夫人房氏	銀青(夫) 卒。夫人三十有二、諸子皆な幼にして葬を送る。以後子に教えること専意し昼夜怠らず。
90	呂祖謙『東萊外集』卷五 方夫人誌	夫人三十一年にして先君に帰す。又十一年先君即世す。是の時伯姉五歳、祖平財四歳。夫人は艱苦して子供を養育すること十八年、然る後伯姉は迪功郎の曾栄に適し、祖平は臨安府司戸參軍になった。
91	韓元吉『南澗甲乙稿』卷二十二 太宜人毛氏	夫人は歸して僅か十年にして武義(夫)即世。夫人は二十七歳であつた。二男一女子が生まれていた。釋老子經を日課とし、其の像を刺繡によって製作した。
92	劉克莊『後村集』卷三十八 李節婦墓誌銘	李節婦は二十八歳で寡居になった。姑に事え、子には禮法を誨しえた。年五十六にて病卒。
93	劉克莊『後村集』卷一百五十七 方君薛氏	大鏞(夫) 年僅三十九卒。この時方氏二十五歳。孺人は少くして空閨を守り、自ら兒女を撫育することを誓い、子に厳しく學に力めることを訓えた。
94	陸游『渭南集』卷三十四 楊夫人	楊氏年二十一歳で嫁し、二十三歳で子を生み、二十六歳で寡婦となる。寡居四十三年、六十八歳にて卒。夫人皆に親ら孝經・論語・毛詩國風を授ずけ、二子未だ外塾に従わず。
95	袁燮『絜齋集』卷二十一 林太淑人袁氏	通議官中都(夫) 卒。淑人は時二十七歳。守節を誓い子を教育した。後に其の子祖洽(次男)は丞司農守三郡となり、人は賢母の教と其の勞を顯にした。

96	楊簡『慈湖遺書』卷五 宋母墓銘(王氏)	三十にして寡婦となる。長子は十二歳、次男は五歳。王氏は泣いて曰うには「女は禮史を読めずとも婦徳を信ずる」と。
97	李彌遜『筠谿集』卷二十四 朝奉大夫朱公宜人葉氏	夫人二十歳にして朝奉大夫朱璣に歸す。歸して十八年公亡くなる(夫人三十八歳)。大夫の喪に諸孤を携え、自ら京師まで嶮阻千里を力を盡して歸った。公が亡くなって二十年、夫人五十八歳にして没す。
98	劉宰『漫塘集』卷三十 李氏	吾れ聞く其の母盛年(33歳)にして寡居となる。貧しくともを守り、姑を奉り、子を教育した。族人は間言を言わず。
99	馬廷鸞『碧悟玩芳集』卷十九 咸寧郡段太夫人墓誌	夫人二十五歳にして同邑の馬氏に歸す。歸して十二年(37歳)にして寡居となる。厳しく子を教育した。又十九年、伯仲季(長男・次男・末男)相い継いで書に拔薦され、仲子(次男)は冠禮闈となる。
100	林希逸『嶠齋集』卷二十一 陳夫人	儀眞(夫)歿。李曹(子)方に亂(幼年)であつた。夫人は貧しとも節を守り、子に學を課し壬戌兵科に擢した。夫人喜んで曰うには「吾れ吾が夫に愧じること無し」と。
101	陳亮『龍川集』卷三十 汪夫人曹氏	主簿(夫)没。時に夫人年方に四十四歳。男二女皆な幼なかつた。朝早くから夜遅くまでよく働き、男子には學問を、女子には女工を習わせた。

別表9 宗室女性の子供数

卒年齢(嫁年)		婚姻年数	子供数(男・女)	卒年齢(嫁年)		婚姻年数	子供数(男・女)
『范太史集』		81 人	(不明 6 人)	41	37 歳(17 歳)	20 年間	12 人(6・6)
1	19 歳(18 歳)	1 年間	6 人(2・4)	42	28 歳(19 歳)	9 年間	1 人(0・1)
2	24 歳(20 歳)	4 年間	8 人(1・7)	43	30 歳(不明)	不明	3 人(2・1)
3	27 歳(18 歳)	9 年間	12 人(5・7)	44	24 歳(不明)	不明	1 人(0・1)
4	32 歳(不明)	不明	12 人(11・1)	45	27 歳(18 歳)	9 年間	9 人(4・5)
5	34 歳(15 歳)	19 年間	18 人(10・8)	46	22 歳(19 歳)	3 年間	1 人(0・1)
6	37 歳(不明)	不明	12 人(7・5)	47	36 歳(16 歳)	20 年間	4 人(2・2)
7	38 歳(16 歳)	22 年間	12 人(5・7)	48	21 歳(18 歳)	3 年間	2 人(1・1)
8	23 歳(不明)	不明	4 人(3・1)	49	21 歳(15 歳)	6 年間	2 人(0・2)
9	43 歳(不明)	不明	15 人(8・7)	50	29 歳(不明)	不明	5 人(2・3)
10	26 歳(16 歳)	10 年間	5 人(3・2)	51	19 歳(17 歳)	4 年間	不明
11	30 歳(不明)	不明	4 人(0・4)	52	22 歳(16 歳)	6 年間	3 人(2・1)
12	23 歳(17 歳)	6 年間	不明	53	22 歳(不明)	不明	不明
13	52 歳(17 歳)	35 年間	17 人(8・9)	54	29 歳(不明)	不明	3 人(3・0)
14	56 歳(17 歳)	39 年間	29 人(9・20)	55	19 歳(19 歳)	0 年間	0 人
15	62 歳(不明)	不明	25 人(9・16)	56	18 歳(不明)	不明	1 人(1・0)
16	68 歳(15 歳)	53 年間	35 人(16・19)	57	23 歳(不明)	不明	3 人(2・1)
17	74 歳(17 歳)	57 年間	21 人(15・6)	58	33 歳(不明)	不明	3 人(0・3)
18	18 歳(不明)	不明	3 人(2・1)	59	不明(不明)	不明	8 人(7・1)
19	19 歳(16 歳)	3 年間	1 人(1・0)	60	23 歳(不明)	不明	2 人(0・2)
20	23 歳(不明)	不明	3 人(2・1)	61	45 歳(22 歳)	23 年間	4 人(2・2)
21	19 歳(17 歳)	2 年間	3 人(1・2)	62	19 歳(15 歳)	4 年間	0 人
22	21 歳(15 歳)	6 年間	2 人(1・1)	63	16 歳(不明)	不明	1 人(0・1)
23	18 歳(不明)	不明	3 人(2・1)	64	17 歳(15 歳)	2 年間	1 人(0・1)
24	20 歳(16 歳)	4 年間	2 人(1・1)	65	22 歳(20 歳)	2 年間	2 人(0・2)
25	50 歳(18 歳)	32 年間	8 人(5・3)	66	21 歳(不明)	不明	2 人(1・1)
26	39 歳(不明)	不明	14 人(6・8)	67	37 歳(15 歳)	22 年間	4 人(1・3)
27	28 歳(20 歳)	8 年間	6 人(4・2)	68	58 歳(不明)	不明	9 人(6・3)
28	28 歳(15 歳)	13 年間	7 人(5・2)	69	26 歳(不明)	不明	1 人(1・0)
29	32 歳(16 歳)	16 年間	6 人(0・6)	70	23 歳(23 歳)	0 年間	不明
30	54 歳(16 歳)	38 年間	8 人(5・3)	71	30 歳(20 歳)	10 年間	7 人(4・3)
31	45 歳(20 歳)	25 年間	10 人(5・5)	72	25 歳(不明)	不明	2 人(1・1)
32	44 歳(14 歳)	30 年間	18 人(9・9)	73	34 歳(不明)	不明	5 人(3・2)
33	21 歳(18 歳)	3 年間	1 人(0・1)	74	29 歳(不明)	不明	6 人(3・3)
34	38 歳(17 歳)	21 年間	8 人(1・7)	75	23 歳(19 歳)	4 年間	1 人(1・0)
35	24 歳(23 歳)	1 年間	1 人(1・0)	76	50 歳(不明)	不明	3 人(2・1)
36	50 歳(不明)	不明	12 人(6・6)	77	18 歳(不明)	不明	不明
37	16 歳(不明)	不明	不明	78	28 歳(18 歳)	10 年間	7 人(4・3)
38	21 歳(15 歳)	6 年間	1 人(1・0)	79	21 歳(不明)	不明	3 人(1・2)
39	20 歳(不明)	不明	2 人(2・0)	80	22 歳(不明)	不明	2 人(1・1)
40	21 歳(18 歳)	3 年間	2 人(1・1)	81	24 歳(不明)	不明	1 人(0・1)

『文莊集』 不明 2 人				『摛文堂集』 11 人			
82	不明	不明	不明	112	31 歳(不明)	不明	14 人(7・7)
83	19 歳(不明)	不明	不明	113	59 歳(不明)	不明	19 人(10・9)
『華陽集』 4 人(不明 1 人)				114	27 歳(不明)	不明	2 人(0・2)
84	57 歳(不明)	不明	14 人(7・7)	115	58 歳(21 歳)	37 年間	15 人(10・5)
85	35 歳(16)	19 年間	10 人(7・3)	116	66 歳(17 歳)	49 年間	23 人(11・12)
86	61 歳(15)	46 年間	25 人(12・13)	117	55 歳(16 歳)	39 年間	5 人(3・2)
87	36 歳(不明)	不明	不明	118	35 歳(不明)	不明	2 人(1・1)
『王魏公集』 不明 3 人				119	28 歳(20 歳)	8 年間	3 人(1・2)
88	22 歳(不明)	不明	不明	120	50 歳(不明)	不明	4 人(2・2)
89	22 歳(不明)	不明	不明	121	35 歳(不明)	不明	9 人(4・5)
90	22 歳(不明)	不明	不明	122	28 歳(19 歳)	9 年間	5 人(3・2)
『傳家集』 1 人				『文忠集』 9 人(不明 1 人)			
91	24 歳(16 歳)	8 年間	5 人(3・2)	123	67 歳(不明)	不明	7 人(2・5)
『長興集』 2 人				124	51 歳(17 歳)	34 年間	9 人(6・3)
92	72 歳(不明)	不明	9 人(4・5)	125	56 歳(不明)	不明	13 人(10・3)
93	55 歳(不明)	不明	5 人(3・2)	126	23 歳(15 歳)	8 年間	不明
『忠肅集』 1 人				127	28 歳(14 歳)	6 年間	5 人(2・3)
94	41 歳(18)	23 年間	2 人(1・1)	128	33 歳(不明)	不明	4 人(4・0)
『樂全集』 8 人				129	19 歳(不明)	不明	3 人(3・0)
95	44 歳(不明)	不明	2 人(1・1)	130	25 歳(17 歳)	8 年間	3 人(2・1)
96	56 歳(不明)	不明	16 人(4・12)	131	29 歳(17 歳)	12 年間	4 人(1・3)
97	19 歳(18 歳)	1 年間	1 人(0・1)	『蘇魏公集』 1 人			
98	24 歳(15)	9 年間	6 人(3・3)	132	23 歳(16 歳)	7 年間	3 人(2・1)
99	37 歳(14 歳)	23 年間	不明	『鄖溪集』 3 人(不明 1 人)			
100	21 歳(17 歳)	4 年間	3 人(3・0)	133	60 歳(18 歳)	42 年間	9 人(3・6)
101	17 歳(16 歳)	1 年間	1 人(1・0)	134	19 歳(17 歳)	2 年間	不明
102	24 歳(不明)	不明	6 人(5・1)	135	67 歳(20 歳)	47 年間	18 人(10・8)
『臨川文集』 3 人(不明 2 人)				『公是集』 6 人(不明 1 人)			
103	25 歳(不明)	不明	不明	136	66 歳(18 歳)	48 年間	8 人(5・3)
104	2 歳(16 歳)	10 年間	1 人(1・0)	137	27 歳(17 歳)	10 年間	4 人(2・2)
105	18 歳(不明)	不明	不明	138	35 歳(17 歳)	18 年間	16 人(7・9)
『景文集』 2 人				139	18 歳(14 歳)	4 年間	1 人(0・1)
106	不明(不明)	不明	1 人(1・0)	140	29 歳(16 歳)	13 年間	6 人(2・4)
107	34 歳(15)	19 年間	4 人(4・0)	141	不明(16 歳)	不明	不明
『騎省集』 2 人				『古誌石華』 1 人			
108	43 歳(不明)	不明	不明	142	7 歳(14 歳)	60 年間	5 人(5・0)
109	33 歳(不明)	不明	不明	『東都冢墓遺文』 1 人			
『民國鞏縣志』 2 人				143	38 歳(14 歳)	24 年間	14 人(9・5)
110	5 歳(13 歳)	46 年間	7 人(4・3)	『端明集』 1 人			
111	45 歳(不明)	不明	6 人(4・2)	144	43 歳(17 歳)	26 年間	4 人(3・1)

宗室女性 144 人、出産判明者 124 人 不明 20 人

子供数 841 人(男 434 人・女 407 人) 平均子供数 6.78 人

別表10 子供数に「生」が記されている墓誌銘

北宋 撰者 文集	墓誌銘	男	女	計
文同『丹淵集』 卷四十	長壽縣太君楊氏墓誌銘	4	2	6
	張夫人墓誌銘	4	3	7
	華陽縣君楊氏墓誌銘	2		2
曾鞏『元豐類藁』 卷四十五 曾鞏『元豐類藁』卷四十六	夫人周氏墓誌銘	1	2	3
	旌德縣太君薛氏墓誌銘	1	2	3
	江都縣主簿王君夫人曾氏墓誌銘		2	2
王珪『華陽集』卷五十三	趙宗旦妻賈氏墓誌銘	7	3	10
程俱『北山小集』 卷三十一	宋故德興縣君宋氏墓誌銘	4	6	10
	宋奉議郎孺人曾氏墓誌銘		2	2
程俱『北山小集』卷三十二	宋故安人戴氏墓誌銘	2	1	3
司馬光『傳家集』 卷七十八	玉城縣君楊氏墓誌銘	2		2
	彭城縣君劉氏墓誌銘	1		1
	程夫人墓誌銘	3	3	6
	仁和縣君潘氏墓誌銘	3	2	5
韓琦『安陽集』卷四十六 韓琦『安陽集』卷四十八	太夫人胡氏墓誌銘	2		2
	東平縣君呂氏墓誌銘	3		3
趙鼎臣『竹隱集』卷十九	吳夫人墓誌銘	4	1	5
	東邦憲母李氏墓誌銘	2		2
毛滂『東堂集』卷十	吳氏埋銘	1		1
尹洙『河南集』卷十四	故永安縣君李氏墓誌銘	5	4	9
尹洙『河南集』卷十五	故夫人黃氏墓誌銘	4	2	6
李觀『直講集』卷三十 李觀『直講集』卷三十一	鄭助教母陳氏墓誌銘	2		2
	陳府君夫人聶氏墓誌銘	8	1	9
陳師道『後山集』卷十六	仁壽太君廬氏墓誌銘	5		5
張耒『柯山集』卷五十	王夫人墓誌銘	3	3	6
晁補之『雞肋集』卷六十六	闕氏墓誌銘	4	4	8
晁補之『雞肋集』卷六十七	永寧縣君李氏墓誌銘	1	2	3
晁補之『雞肋集』卷六十八	夫人閻氏墓誌銘	7	1	8
周行己『浮沚集』卷七	壽昌縣君胡氏墓誌銘	5	3	8
強至『祠部集』卷三十五	汝南周氏夫人墓誌銘	4	3	7
強至『祠部集』卷三十五	太常少卿楊公夫人福昌縣君王氏墓誌銘	2		2
廖剛『高峯文集』卷十一	太宜人蕭氏墓誌銘	2	1	3
呂陶『淨德集』卷二十七	仁壽縣太君魏氏墓誌銘	5	4	9
	長安縣君祝氏墓誌銘	4		4
新刊『淮海集』卷三十三	除氏夫人墓誌銘	5	2	7
	虞夫人墓誌銘		1	1
陸佃『陶山集』卷十五	王氏夫人墓誌銘	6		6
	王氏夫人墓誌銘	7		7
陸佃『唐山集』卷十六	汪氏夫人墓誌銘	2	1	3
	仁壽縣君鮑氏墓誌銘	5	3	8
陸佃『唐山集』卷十六	壽昌縣君陸氏墓誌銘	3	6	9

	周氏夫人行狀	2		2
	邊氏夫人行狀	4		4
劉敞『彭城集』卷三十九	孫氏母莊夫人墓碣并銘	7	3	1 0
楊傑『無爲集』卷十四	故錢夫人墓誌銘	2	4	6
	故王夫人墓誌銘		1	1
黃庭堅『山谷外集』卷八	黃氏二室墓誌銘(謝氏)		1	1
	任夫人墓誌銘	2	1	3
	烏程縣主簿胥君夫人謝氏墓誌銘	2		2
	王氏墓誌銘	1	1	2
慕容彥逢『摘文堂集』卷十五	單氏夫人墓誌銘	6	3	9
謝逸『溪堂集』卷九	張夫人墓誌銘	2	1	3
李新『跨黿集』卷二十九	丁夫人墓誌銘	3	2	5
	任夫人墓誌銘	3	1	4
鄒浩『道鄉集』卷三十七	夫人嚴氏墓誌銘		2	2
	夫人程氏墓誌銘	1	1	2
蘇洵『嘉祐集付錄』	程氏墓誌銘	3	3	6
王令『廣陵集』附錄	節婦夫人吳氏墓碣銘		1	1
張方平『樂全集』	贈賢妃俞氏墓誌銘(仁宗皇帝昭儀)	1	1	2
李昭玘『樂靜集』卷三十	壽安縣君卞氏墓誌銘	3	2	5
許景衡『橫塘集』卷二十	丁昌期妻蔣氏墓誌銘	3	1	4
	陳孺人述	1	4	5
歐陽脩『文忠集』卷三十六	萬壽縣君徐氏墓誌銘	5	1	6
	長沙縣君胡氏墓誌銘	2	1	3
	廣平郡太君張氏墓誌銘	4	1	5
	長安郡太君盧氏墓誌銘	4		4
歐陽脩『文忠集』卷三十七	右監門衛將軍夫人東陽縣君鄭氏墓誌銘	3		3
	右監門衛將軍夫人周氏墓誌銘	1	3	4
歐陽脩「文忠集」卷六十一	趙安縣太君盧氏墓誌銘	3	4	7
	前妻張氏	3		3
歐陽脩『文忠集』卷六十二	漳南縣君張氏墓誌銘	2	3	5
	胥氏夫人墓誌銘		1	1
蔡襄『端明集』卷三十八	葛處士夫人墓誌銘(承氏)	5	3	8
劉跂『學易集』卷八	夫人龐氏墓誌銘	1	3	4
楊時『龜山集』卷三十	張氏墓誌銘	8	4	1 2
李廌『濟南集』卷七	李母王氏墓誌銘	1		1
王安石『臨川文集』卷九十	鄱陽李夫人墓表	1	2	3
王安石『臨川文集』卷九十九	太常博士楊君夫人金華縣君吳氏墓誌銘	3	7	1 0
	李君夫人盛氏墓誌銘	3	4	7
	仙居縣太君魏氏墓誌銘	2		2
	仁壽縣君楊氏墓誌銘	3		3
王安石『臨川文集』卷一百	樂安郡君翟氏墓誌銘	5	3	8
	仁壽縣太君徐氏墓誌銘	4	7	1 1
	王夫人墓誌銘	2		2
	右監門衛大將軍世耀故妻仁壽縣君康氏墓誌銘	1		1
	壽安縣太君李氏墓誌銘	3	1	4

孫觀『鴻慶集』卷四十一	宋故何碩人孫氏墓表	3	1	4
蘇舜欽『蘇學士集』 卷十五	太原郡太君王氏墓誌	7	6	1 3
	廣陵郡太君墓誌銘	4		4
呂南公『灌園集』卷二十	陳處士妻葉氏墓誌銘	7	4	1 1
隆敞「公是集」 卷五十二	皇兄故深州團練使承訓妻安定郡夫人張氏墓誌銘	5	3	8
	皇姪右屯衛大將軍克戒妻太寧縣君李氏墓誌銘	7	9	1 6
	皇姪右監門衛將軍克淳妻追封仙遊縣君李氏墓誌銘		1	1
	皇姪右監門衛將軍克常妻濮陽縣君盧氏墓誌銘	2		2
	翰林學士吳君前夫人趙氏墓誌銘	1	2	3
黃庶『伐檀集』卷下	徐君處士妻周氏墓誌銘	5	5	1 0
北宋 96 人		291	182	473

## 南宋

南宋 撰者 文集	墓誌銘	男	女	計
李石『方舟集』卷十七	故宜人薛氏墓誌銘	3	2	5
陳傅良『止齋集』卷四十七	趙夫人墓誌銘	3	2	5
葉適『水心集』卷十四	安人張氏墓誌銘	3	1	4
葉適『水心集』卷十八	高令人墓誌銘	3		3
鄭剛中『北山集』卷十五	外姑墓誌銘	3	3	6
洪咨夔『平齋集』卷三十一	孺人吳氏墓誌銘	2	1	3
	鍾孺人墓誌銘	1	1	2
朱熹『晦菴集』卷九十	令人羅氏墓表	2	4	6
朱熹『晦菴集』卷九十一	夫人徐氏墓誌銘	3	3	6
朱熹『晦菴集』卷九十二	榮國夫人管氏墓誌銘(元配黃氏夫人)	2	2	4
	夫人許氏墓碣銘	1	1	2
	潘氏婦墓誌銘(王氏)	1		1
朱熹『晦菴集』卷九十四	尚書吏部員外郎朱君孺人祝氏壙記	3	1	4
陳造『江湖長翁集』卷三十五	安人張氏墓誌銘	2		2
陳文蔚『克齋集』卷十二	鄭孺人墓誌銘	5	1	6
樓鑰『攻媿集』卷一百五	從妹樓夫人墓誌銘	4	2	6
周必大『文忠集』卷三十六	伯母安人尚氏墓誌銘	4	4	8
	靖州推官張廷傑妻李夫人墓誌銘	3	3	6
	王給事母安人徐氏墓誌銘	3	1	4
	程給事母宜人胡氏墓誌銘	3	2	5
周必大『文忠集』卷七十六	太恭人司徒氏墓誌銘(繼室)	2	2	4
	汀州田使君妻宜人尚氏壙誌	1		1
	(生子多不育今惟一男)			
金王寂『拙軒集』卷六	清河張氏夫人墓誌銘	2	1	3
曹彥約『昌谷集』卷十八	姪女曹氏墓誌銘	3		3
曹彥約『昌谷集』卷二十	王氏壙銘	2	1	3
袁說友『東塘集』卷二十	惠夫人墓銘	2	2	4
張枋『南軒集』卷四十一	宣人王氏墓誌銘	2	1	3

韓元吉『南澗甲乙稿』卷二十二	太宜人毛氏墓誌銘	2	1	3
韓元吉『南澗甲乙稿』卷二十	沈氏考妣墓誌銘	7		7
劉子翬『屏山集』卷九	熊氏令人墓表	2	5	7
	陸氏孺人墓表		1	1
劉克莊『後村集』卷四十	王孺人墓誌銘	1	1	2
劉克莊『後村集』卷一百五十八	弟婦方宜人墓誌銘	2		2
劉克莊『後村集』卷一百六十	忠訓陳君宜人李氏墓誌銘	2		2
劉克莊『後村集』卷一百六十一	山甫生母墓誌銘	3		3
王之道『相山集』卷二十九	孫宜人墓誌	3	2	5
劉一止『苕溪集』卷五十	宋故太孺人朱氏墓誌銘	1	4	5
	宋故永嘉郡夫人高氏墓誌銘	2		6
范浚『香溪集』卷二十二	安人胡氏墓誌銘	3	1	4
	右通直郎范公夫人章氏合祔誌	5	2	7
仲并『浮山集』卷四	夫人陳氏墓銘	1	1	2
趙汝騰『庸齋集』卷六	卓氏墓誌銘	2	2	4
	先室林氏	1	6	7
胡寅『斐然集』卷二十六	蔡氏墓誌銘	3	1	4
	王氏墓誌銘	2	1	3
	太孺人李氏墓誌銘	2	2	4
陸游『渭南文集』卷三十二	費夫人墓誌銘	2	2	4
陸游『渭南文集』卷三十六	呂從事夫人方氏墓誌銘	1	1	2
	夫人陳氏墓誌銘	3	3	6
	留夫人墓誌銘	1	3	4
舒璘『舒文靖集』卷上	汪母鄔氏墓誌	3	4	7
楊簡『慈湖遺書』卷十八	陳夫人墓誌銘	2	2	4
劉宰『漫塘集』卷三十四	吳夫人行狀	3	2	5
楊萬里『誠齋集』卷一百二十六	曾時仲母王氏墓誌銘	4	2	6
	林夫人朱氏墓誌銘	3	1	4
張九成『橫浦集』卷二十	陳氏考妣墓銘	3	5	8
王庭珪『廬溪文集』卷四十四	故彭夫人墓誌銘	3	2	5
	故王氏夫人墓誌銘	3	5	8
王庭珪『廬溪文集』卷四十五	故孔氏夫人墓誌銘	3	2	5
林希逸『庸齋集』卷二十一	陳夫人墓誌銘(繼室)	1	2	3
	娶前夫人林氏		1	1
	庶子	1	1	2
陳亮『龍川集』卷三十	劉夫人陳氏墓誌銘	3	3	6
	呂夫人夏氏墓誌銘(繼室)	1		1
	呂君先娶夏氏	1	1	2
沈與求『龜谿集』卷十二	朱夫人墓誌銘	3		3
劉才邵『樹溪居士集』卷十二	彭氏太孺人墓誌銘	3	1	4
孫覿『鴻慶居士文集』卷四十	宋故秦國夫人王氏墓誌銘	3	1	4
	宋故呂恭人胡氏墓誌銘	4		4
	宋故太淑人劉氏墓誌銘(繼室・元配某氏)	3	1	4
	宋故令人傅氏墓誌銘	4	1	5
	宋故胡夫人孫氏墓誌銘	2	1	3

	宋故孫夫人強氏墓誌銘	6	5	1 1
	恭人楊氏墓誌銘	2	4	6
	楊國夫人趙氏墓表	3	6	9
劉克莊『後村集』卷一百五十六	雪觀居士墓誌銘(趙庚夫妻・顧氏、孺人)	1	2	3
胡銓『胡澹庵先生文集』卷二十四	易氏夫人墓誌銘	6	1	7
	林宜人墓誌銘	1	5	6
胡銓『胡澹庵先生文集』卷二十五	趙謙仲妻李氏墓誌銘	4	4	8
	彭夫人墓誌	6		6
胡銓『胡澹庵先生文集』卷三十	孺人張氏墓誌銘	2	3	5
張孝祥『于湖集』卷二十九	高侍郎夫人墓誌銘	3		3
舒璘『舒文靖集』卷上	汪母鄔氏墓誌	3	4	7
魏了翁『鶴山集』卷七十	太孺人賜冠帔黎氏墓誌銘	6		6
清・陸增祥『八瓊金』卷一百十四	楊夫人權厝誌	1	1	2
清・黃本驥『古誌石華』卷二十八	趙孺人牟氏墓誌銘	2	2	4
南宋	85 人	221	159	380
兩宋	181 人	512	348	853

# 別表 1 1 学問と読書と子供の教育

北宋 116 人(寡婦 30 人)

撰者・文集	墓誌銘	卒年	学問と子供の教育
文同『丹淵集』 卷三十九	任郎中夫人宋氏墓誌銘	5 歳	夫人諸子と其の壻に學を教え、至りて夜分書を読む聲未だ絶えず。
	壽安縣太君何氏墓誌銘	8 歳	夫人歸十四年、秘書丞君(夫)不歸者。夫人其の弟右贊善大夫絳の家に依り、専ら寥然として一室に居す。日夜其の子に書物を読む、文字を書くを教え、長じて師につき詩文や文章を学ばす。子は嘉祐某年進士及第。夫人訓導の力なり。
卷四十	文安縣君劉氏墓誌銘	48 歳	夫人長じて書を学ぶことを好み、左氏春秋を尤も能く通誦す。夫卒。夫人諸子を携え成都に帰す。一椽の屋無く以て人の舍下に居寄し、閭巷の親族良家の兒女を合聚し訓戒を授け、書や字を教えること十年を逾ゆる。以て僅かな給営みに足す。夫人清風満家、寒苦霜雪にして諸子の學を督し晝夜廢めず。故に其の子官途に就くは夫人の教えなり。
卷四十	華陽縣君楊氏墓誌銘	79 歳	夫人幼くして孤となり、外祖の張崇文春卿が養育す。春卿若くして秀才たり、五經に通じ博極し鏗然と聲有り、夫人左右に在って之を聞く。夫人亦た章句、字画を諸女及び里中内外の甥姪に教す。二子を愛しみ、二子進士に及第す。
卷四十	張夫人墓誌銘	58 歳	希元(夫)子弟に經史を教す、夫人亦た班班成誦し、之れの講解と義訓によく通じ理解す。
曾鞏『元豐類藁』 卷四十五	天長縣君黃氏墓誌銘	77 歳	夫去、其れ夫の志もて、其の子既にして就学するに、夫人常夜絲枲を治め、其の旁に居し以て之れ勉む。其の後に至り、子遂に文学を以て天下に名たり。子の名は概、太常博士集賢校理。
	夫人周氏墓誌銘	26 歳	夫人独り図史を喜び、文章を為るを好み、日夜倦まず。学ぶこと士大夫の如し。詩七百篇有り。
卷四十六	壽昌縣太君許氏墓誌銘	83 歳	夫人書を読み大意を知る、其の兄と文を能く成誦す。
	仁壽縣太君吳氏墓誌銘	66 歳	夫人学を好み強記し、倦きることなし。
	試秘書省校書郎君妻太原王氏墓誌銘	80 歳	王氏見識あり、強記博覧にして、図籍(書籍)子孫に教え、自ら師と為す。
	池州貴池縣主簿沈君夫人元氏墓誌銘	70 歳	夫人諸子を教養し、至りて其の後皆な材を成しす名を為す。
	福昌縣君傅氏墓誌銘	64 歳	男子八人學立脩立、五子同時に皆な進士。人は寔さしく夫人の教えの賜と言うなり。
	江都縣主簿王君夫人曾氏墓誌銘	33 歳	夫人聡にして能く書を読み古今の言を知る。
	鄆州平陰縣主簿妻曾氏墓誌銘	32 歳	夫人已に戲弄(戯玩)を好まず。長ずるに読書を喜とし、女工の事教えずとも為す。

王珪『華陽集』卷五十 王珪『華陽集』卷五十一	<u>望都縣太君倪氏墓誌銘</u>	85 歳	夫卒。倪氏は幼児三人と宣城に寄居。日夜子供を教育、将来の出世を期待。次子の逖は兒童の時から秀で、詩作堪能なり。
	<u>丹陽郡夫人李氏墓誌銘</u>	62 歳	夫并州にて卒。夫人毘陵に居住、子供に家事などをさせず、ひたすら勉強に専念させる。
	<u>壽安縣太君呂氏墓誌銘</u>	70 歳	不幸にして少卿(夫)早世。夫人三十餘歳。廣陵にて喪に服し後、子連れで伯父のもとに身を寄す。自分の宝石を手放し、書籍を購入し、自ら子供に勉強を教える。
卷五十三	趙宗旦妻賈氏墓誌銘	35 歳	書を讀むを喜び、論語・孝經の大義に通ず。
卷五十三	<u>宗室丹陽郡王任城郡夫人魏氏墓誌銘</u>	57 歳	旦陽(夫)之捐館舎。後二十年、夫人は簡素に暮らす。諸子亦た母の訓を守り以て立つ。
卷五十四	宗室延州觀察使夫人京兆郡君宋氏墓誌銘	61 歳	夫人生十年にして、母が音律の法、詩書の言を教える。其の性は聡悟にして学ぶところは輒ち人に過ぎる。
卷五十五	<u>永壽郡太君朱氏墓誌銘</u>	72 歳	夫卒、夫人子供を連れ鄂州に居住す。自ら子供に書を読むことを教える。子供は皇祐元年、天子の親試に及第。進士となり文章を以て天下第一となる。帰郷すると里巷の人々は歎呼す、夫人独り動じず。子は後に翰林学士と成す。
卷五十七	<u>皐氏墓誌銘</u>	54 歳	先人(父)進士に舉せらるるの志就さずして以て没す。先妣(母)日夜諸子に書を読むを教え、母をして先人の志を墮さしめ、後十餘年にして、充(子)始めて行間して一地を得たり。子は著作郎と成す。
王安禮『王魏公集』卷七	相州寬觀察使宗景夫人同安郡君李氏誌銘	52 歳	夫人性は莊靜にして、書を読み大方を知り伝略す。
程俱『北山小集』卷三十二	安人戴氏墓誌銘	44 歳	戴氏幼少にして才知にすぐれ賢たり、縫紉組繡(裁縫や刺繡)の事一見にして能くす、書を誦えるを聞くと黙して覚え、忘れることあらず。諸子に孝經を口授す。
卷三十一	德興縣君宋氏墓誌銘	67 歳	夫人諸子に孝經・論語を以て口授す。
卷三十二	尚書吏部員外郎鄭公安人錢氏墓誌銘	59 歳	幼少にして秀悟、父母早世、自力で女功の事を能くし、書を学び詩を誦す。
陳襄『古靈集』卷二十	<u>夫人吳氏墓誌銘</u>	74 歳	夫人始三十七歳而大理君(夫)早世、家益困。…夫人苦境と戦い粗食に耐え子勉学す。子二人は学問を好み、其の後、官途に就く。
	<u>秦國太夫人符氏墓誌銘</u>	88 歳	令公(夫)卒。夫人子に朝早くから夜晩くまで勉強させ、正言と善行を教す。故に孟母と比べらる。子は進士に及第、後に丞相・集賢殿大学士と為し、天下名宰相と称すなり。
	崇國太夫人符氏墓誌銘	57 歳	夫人幼にして柔慧なり、屯衛(父)漢唐史を読むを聴いて悦ぶ。
司馬光『傳家集』卷七十八	程夫人墓誌銘	48 歳	夫人讀書を喜び、皆な其の大義を識る。軾・轍の幼きとき、夫人親ら之に教え、常に戒めて曰く、「汝讀書せよ、曹綯に効う勿れ、止だ書生を以て自ら名あらしむるを欲するのみ。」毎に古人の名節を稱引して以て之を勵し、曰く、「汝果して能く直進に死せば、吾れ戚ることなし。

沈括 『長興集』 卷十八	<u>壽安縣君林氏墓誌銘</u>	54 歳	夫早世。夫人書物を読みその説を誦し、子にもその説を誦するを勧める。子は学力をつけ、後に皆な進士から補吏と為す。郷人の荣誉となるなり。
沈遼『雲巢編』卷九	萬府君夫人朱氏墓誌銘	83 歳	夫人浮屠書を好み、終日手に取り誦するを懈たらず。
沈遘『西溪集』卷十	長壽縣太君魏氏墓誌銘	73 歳	夫人浮屠書を学び、其の書の説に通意したり。
孔武仲 『宗伯集』 卷十九	吳夫人墓誌銘	50 歳	夫人の大母曾氏は諫議大夫到堯の女。博学であり持論を善くす。夫人は少にして曾氏より習い、故に文字を多く通解、『佛書』及び『唐人歌詩』を読むを尤も喜びとす。子有り皆な進士に擧す。
劉摯『忠肅集』卷十四	壽安許夫人墓誌銘	88 歳	夫人性は慈にして、尤も佛事を喜び、其の書凡よそ十八萬卷を誦す。
蘇軾 『東坡集』 卷八十九	亡妻王氏墓誌銘	27 歳	軾書を読むを見て則ち終日去らず、亦た其の能く通ずるを知らざるなり。其の後軾忘るる所有り君輒ち能く之れを記し、其の他の書を問ひ則ち皆な之れを畧知す。由りて是れ始めて其の敏を知るなり。
毛滂『東堂集』卷十	牛氏夫人墓誌銘	35 歳	夫人亦た孟子・論語を能く読む。
李觀 『直講集』 卷三十一	<u>先夫人墓誌</u> (鄭氏・李觀の母)	69 歳	李觀十四歳にして父歿す。家非常に困窮す。母鄭氏は城より百里離れたる山中に水田を作るにより小作人を募集、山の荒地を開墾す。日中は農事監督、夜は裁縫、紡績など女工を為して家計を維持、李觀勉学に励みたり。
韓維『南陽集』卷三十	太原縣君墓銘(王氏)	55 歳	夫人年数歳にして文正(父)其の明悟を特に喜び、親ら孝經・白氏及び雜詩賦數百篇を誦える。
陳師道 『後山集』 卷十六	<u>李夫人墓銘</u>	72 歳	康州(夫)卒、子稚く貧なり。夫人喪に服し、豫章に還り葬す。遺子に就学を勧め、勉学に勤しま。其の後校理朝に於いて名を成す。(黄庭堅・集賢校理佐著作)
	<u>仁壽太君盧氏墓銘</u>	82 歳	大夫(夫)卒。家益々乏す。而して夫人力をつくして教えること七年、而して兩子は官途に就き為御史と殿中と為す。
唐庚『眉山文集』卷五	徐夫人墓誌銘	52 歳	二子に書を読むに甚力するを課す。二子以て進士に及第し、元符三年、長子は合州司理参軍と為る。
趙鼎臣『竹隱集』卷十九	東邦憲母李氏墓誌銘	80 歳	晩年浮屠書を喜び、燕坐(くつろぐ)して香を焚き、其の書声を出だして読むなり。
范祖禹『范太史集』 卷三十八 卷五十一  卷四十八	工部尚書李莊公夫人葬錢氏墓誌銘	83 歳	夫人歌詩多く數百言為くる、平生著する所千餘首、『經史』『佛道書』を読み、博聞強記し、談論清辨なり。
	<u>右屯衛大將軍妻</u> <u>吉安縣君楊氏墓誌銘</u>	50 歳	夫早世、楊氏二十歳。母親が孀婦を憐れんで再婚をすすめたがそれを断り、飾りのない質素な暮らしをなす。早起し一室を潔め香を焚き仏書を誦し、昼夜子供の教育に専し、怠ると厳しく教え導くなり。
	右監門衛大將軍妻 崇安縣君石氏墓誌銘	33 歳	石氏は幼にして非常に賢明、班大家の『女誡』を能く読むなり。

卷五十一	右監門衛大將軍貴州刺史妻永興縣君程氏墓誌銘	29 歳	子に教えることを日課となし、奩具(嫁入り道具)を売り、『書史』を置き、其の夫の学を助け、古の賢女の風あり。
卷五十一	右監門衛大將軍妻仁和縣君曹氏墓誌銘	19 歳	儒者の書を読むを好み、五七言の詩百有餘篇を作り多くを誦す。筆札(筆跡)は亦た精妙なり。
卷四十六	左承議郎妻崇徳縣君宋氏墓誌銘	21 歳	翰墨(文学)を喜び、浮屠書を誦す。
卷四十六	太子右内率府副率妻呂氏墓誌銘	23 歳	書を誦し詩を歌い、筆札音律学ばずして能くす。
卷四十九	右監門衛大將軍妻長安縣君蔚氏墓誌銘	33 歳	河内侯(夫)卒。蔚氏子に専ら経史を教す。
卷四十八	曹州觀察使妻安康縣君王氏墓誌銘	50 歳	濟陰侯(夫)病且卒。夫人悲泣感疾、諸子に勅して曰く「爾曹(なんじら)幼孤にして宜しく力學し身を治め、先王の訓を守せ。諸子恭慎し其の教に能たう。夫人嫠居十餘年。男五人、右千衛將軍・内殿崇班・左班殿直・右班殿直、女三人嫁三班奉職。
卷四十八	右侍禁妻劉氏墓誌銘	19 歳	女工を巧にし、文史に通じ能く詩を為す。
卷四十七	贈華州觀察使陰侯永安縣君陳氏墓誌銘	45 歳	永安縣君嫁六年而觀察(夫)捐館(二十二歳で嫁ぎ二十八歳で寡婦)。奉祿亦薄く以養給殆ど無し。夫人窮乏にも憂えず、幼子を鞠育し其の勤愛を盡す。嫠居十七年始終一の如し。子既長以左班殿直監泰洲税乃迎侍之官、夫人子を教えること見識有りと称せらる。
卷五十	右千牛衛將軍妻永和縣君張氏墓誌銘	32 歳	性は樂にして『詩書』を尤も喜び文を屬くる。
卷五十二	右監門衛大將軍天水郡開國侯妻新安縣君陳氏墓誌銘	62 歳	天水公(夫)老儒を門下に宿し師とす。夫人厚遇し故に諸子皆な進士に挙がる。
卷五十二	右千牛衛將軍妻崇仁縣君高氏墓誌銘	30 歳	子に義を教え、儒書を読むを喜び、翰墨を尤も能くす。 汝南縣太君周氏墓誌銘
徐鉉『騎省集』卷三十	汝南縣太君周氏墓誌銘	48 歳	夫早卒。四子皆幼なり。夫人提携教誨し、親から経書及び外伝を授す。已に孝経・論語に通ず。
晁補之『雞肋集』卷六十六	李氏墓誌銘	不明	夫人は幼にして慧、書を見てはただちに誦し、十歳にして詩を能く作り、大夫公(父)添削したり。
卷六十四	文安郡君陳氏墓誌銘	56 歳	夫人幼にして警恵、嘗て白居易の詩を閲覧、一目通し能く誦ず。
卷六十五	穆氏墓誌銘	不明	年二十有一歸于吳君二十有八而吳君没。…其子敏修六歳なり。夫人日夜勉学に励ませり。敏修遂に学問を好み、称され四方の游士豪傑必見に至るなり。
汪藻『浮溪集』卷二十四	夫人陳氏行状	77 歳	夫人二子少にして章句・翰墨(文学)を学ばず。皆な夫人親ら指授しす。長子崇寧二年進士に及第、今宣教郎なり。
	吳夫人墓誌銘	57 歳	父『詩書』と筆墨を教し、夫人筆墨・女工ともに善くす。諸豪争いて之(女)に求婚したり。
卷二十八	吳夫人墓誌銘	57 歳	父『詩書』と筆墨を教し、夫人筆墨・女工ともに善くす。諸豪争いて之(女)に求婚したり。

李綱『梁谿集』卷一百七十	龍頭張公夫人黃氏墓誌銘	59 歳	夫人幼にして穎悟(才知がすぐれかしこい)。書を誦すこと日に數萬言、輒ち其の義をさとる。凡そ女工の之は学ばずとも能くす。
呂陶『浄徳集』卷二十七	静安縣君蒲氏墓誌銘	68 歳	夫人資は稟として慈和たり、女功に勤め婦道に循い、亦た書を読むを喜びとす。
	仁壽縣太君魏氏墓誌銘	80 歳	夫人仁孝にして敏恵、自ら天稟を得る。前世の賢婦烈女事を聞き、歴歴と誌記し、以て自ら規飭す。佛書を好み大略を知とる。寺丞君(夫)亡、屯田君(子)幼なり。寡を慎み日を過ごす、琦(子)以て孝を行い郷里称すなり。皇
陸佃『陶山集』卷十五	壽安縣君張氏墓誌銘	67 歳	祐中進士第に登る。夫人『西方之書(佛書)』を読み、その理を句にして掲げたり。
	壽安縣君王氏墓誌銘	53 歳	夫人書を読むを好み、専ら静かに詩を作ったり。
劉攽『彭城集』卷三十九	聶夫人墓誌銘	不明	夫人幼にして明悟。七歳にして書史を読み、詩を能く為くり、音律に曉し聰警は人に過ぎる。
	永安縣君張氏墓誌銘	57 歳	夫人晩にして佛書を喜ぶ。
宋祁『景文集』卷六十	隴西郡君李氏墓誌銘	53 歳	夫人諸子に孝経・古詩・方田之數を授す。
黃庭堅『山谷外集』卷八  卷八	永安縣君金氏墓誌銘	不明	書を読むを喜び、筆札を善くし、諸子に経書を授す。
	叔母章夫人墓誌銘	62 歳	夫人幼にして書を誦すを喜び筆墨を弄す、父母之を禁ず、諸女と與に相い従う。夜其の寢息を待ち、乃ち自から課すを程める。
	趙夫人墓誌銘	31 歳	夫人幼にして敏慧、書を読み詩を誦え、其の意義と説に通ず。
鄭獬『鄖溪集』卷二十二	李夫人墓誌銘	42 歳	善く伝記を読み、古の烈女の遺事を見、之れを畏れ悚然とす。
晁説之『嵩山集』卷十九 卷二十	文安縣子碩人范氏墓誌銘	69 歳	自から書を読むを喜ぶは成人の如し。
	崇徳縣太君王氏墓誌銘	84 歳	経史・釋老書・陰陽卜筮之書を読む。
慕容彦逢『摘文堂集』卷十四 卷十五	徳安縣君彭氏墓誌銘	58 歳	喜誦釋氏書を誦るを喜び、朝夕懈らず。
	和義郡君胡氏墓誌銘	55 歳	晩に『釋氏書』を喜び、手に持ち誦えること懈らず。
	仙源郡君鄭氏墓誌銘	35 歳	幼にして聡慧…書を誦することを喜び、能く詩章を為る。
	孫氏墓誌銘	76 歳	子幼にして書を読むを課し善く教す。子四人相繼ぎ進士及第す。
鄒浩『道卿集』卷三十七	夫人林氏墓誌銘	79 歳	諸子を訓しえ、且つ善士を招き之れを師と為す。
	夫人程氏墓誌銘	32 歳	書を読むを喜び、一覽し輒ち成誦す。
	夫人鄒氏墓誌銘	82 歳	幼にして警慧、古今の文章を聴き輒ち成誦す。
	壽昌縣太君巖氏墓誌銘	72 歳	歌詞を子孫に示し、陶淵明・白樂天を称慕(仰ぎ慕う)す。
張方平『樂全集』卷三十八	徐國太夫人墓誌銘(和氏)	56 歳	英公捐館。太夫人二十五歳。貝葉書を誦す。諸孤幼稚にして均しく養し、榮居二十年一の如し。上下間言する者無し。
歐陽脩『文忠集』卷三十七	右監門衛將軍夫人東陽縣君鄭氏墓誌銘	19 歳	浮屠書を誦えるを喜ぶ。

卷三十七	右監門衛將軍夫人金堂縣君錢氏墓誌銘	28 歳	字を書くを喜ぶ。
卷三十七	右監門衛將軍夫人武昌縣君郭氏墓誌銘	33 歳	書史を能く読み、書畫を善くし、浮屠之説を喜ぶ。
蔡襄『端明集』卷三十九	瑞昌縣君孫氏墓誌銘	67 歳	喜んで浮圖書を誦す。
劉跂『學易集』卷八	夫人李氏墓誌銘	77 歳	居士(夫)没。夫人家計を支え節約に励み以て貧ならず。故に其の子學問に従事させ、二子進士に挙がる。
	朝散郎李公安人王氏墓誌	56 歳	安人性は端惠、其の親之れ他子より異なるを鍾愛す。『佛書』を持ちて誦するを喜るこぶなり。
劉侖『龍雲集』附録	周夫人墓誌銘	69 歳	夫卒。夫人纔四十餘、書萬卷を収め以て諸子に授す。歐陽文忠公母の賢に代わり、天下に母の助有りと名を著くす。
李廌『濟南集』卷七	李母王氏墓誌銘	68 歳	白首(老年)にして晩くまで『佛書』を読むこと変わらず。大義を能く知とる。
呂南公『灌園集』卷二十	伝夫人墓誌銘	82 歳	諸兒が能く書を誦す傍らに坐す。
王安石『臨川文集』卷九十九	長安縣太君王氏墓誌銘	56 歳	詩を作り、書を善くし、強記博聞(記憶力が能く見聞が広い)、明辨(はっきり見分ける)、敏達(ものごとの道理に通ずる)、人に過ぎる。
卷九十九	李君夫人盛氏墓誌銘	不明	易經・論語・孝經、諸子の書を能く讀み、親ら以て子に教す。
卷九十九	寧國縣太君樂氏墓誌銘	75 歳	少くして書を読むを知り、能く其の大指を略識す。
卷九十九	仙居縣太君魏氏墓誌銘	64 歳	太君年十九歸沈氏。歸十年生兩子而沈君(夫)卒。太君親から詩經・論語・孝經を兩子に教す。兩子外學に就き、時數歳にして已に能く誦此の三經を誦す。其後子進士と為す。
卷九十九	永安縣太君蔣氏墓誌銘	70 歳	夫没す。太君諸子を學に進め、惡衣惡食、これを御して慍まず、均しく嫡庶を親しみ、鴈鳩之徳有り。其子官に就き朝に於いて顯す。里巷の士以て太君榮と為す。
卷一百	高陽郡君齊氏墓誌銘	55 歳	書を読むを好み、文章を能くし、高節美行有り。
卷一百	壽安縣太君李氏墓誌銘	68 歳	年二十有二にして三男一女子を生ず。而して寡、節を執り嫁がず。父母之を奪うを欲するも卒いに得ず。其の男宦學に就き、其の女士に歸す。郷人歸みして高稱す。
許翰『襄陵文集』卷十二	蔣氏夫人墓誌銘	72 歳	其の夫を佐け諸子を教養し、躬ら其の書を読むを視たり。
	龔夫人墓誌銘	68 歳	幼き自り西方聖人之書を読み、能く其の要を得る。…又た論語・孟子を躬ら其の子に授ける。夜は膏火のもと縫紉に力とめ其の書を読むを視る。寒暑変わらざるなり。
蘇舜欽『蘇學士集』卷十五	廣陵郡太君墓誌銘(高氏)	81 歳	夫人幼にして敏悟たり。人誦する『詩書』を聞き、一過にして盡ごとく記すを忘れず。
蘇頌『蘇魏公集』卷六十二	彭城縣君錢氏墓誌銘	52 歳	文史を隸(習)い、至りて筆札書計の事に過ぎる。
	壽昌縣太君陳氏墓誌銘	74 歳	正義卒。子に經史、文章法書及び近代名臣善言懿行を教え、其の學に資し益々倦まず。其の後三子並な進士登科に及第。

陳師道『後山集』卷十六	李夫人墓誌銘	72 歳	康州卒。子稚なく貧なり。夫人喪豫章に還り葬す。遺子就学。其の後校理(庭堅・集賢校理佐著作)朝を補佐し名をなす。
劉敞『公是集』卷五十二	深州團練使承訓妻安定郡夫人張氏墓誌銘	66 歳	夫人の大王父、王父は世の儒者たり。夫人禮義を為し能く書を知り、又た音に通じ、溫柔にして良母なり。
徐鉉『騎省集』卷十七	隴西李氏夫人墓銘	25 歳	夫人紉組之工、翰墨之妙、稟自天性能必過人。
黄庶『伐檀集』卷下	徐君處士妻周氏墓誌銘	49 歳	周氏幼にして賢、女誠の七篇を既に習うなり。
程頤『伊川文集』卷八	上谷郡君家傳(侯氏)	49 歳	夫人幼にして聡悟、書史を読むを好み博く古今を知る。丹徒君(父)之を愛す。
陸增祥『八瓊金』卷一百三	安平縣君崔氏墓誌銘	69 歳	夫人筆札を習い、書史を読むを喜び誦す。
黄本驥『古誌石華』卷二十七	仁壽縣君蘇氏墓誌銘	不明	夫人少にして詩書、黄老(黄帝と老子)の言を誦するなり。
鐘離景伯『金石攷』第十五	安康郡君楊夫人墓誌銘	49 歳	夫人女工音律を善くし、餘力を有り則ち經史を誦し、諸子、醫藥陰陽筭術之書を閲し、至りて數千萬言皆其の大義に通ず。
蕭稷『藝志金石』金石	崇德縣太君段氏墓誌銘	62 歳	佛事を志し竺典(佛教の經典)を誦す。

南宋 106 人(寡婦 16 人)

員興宗『九華集』卷二十一	夫人員氏墓誌銘	48 歳	夫人泰若として獨り諸子を教え力を儘くす、曰く「詩書は吾家の衣鉢なり。」と。
文天祥『文山集』卷十六	王推官仇墓誌銘	83 歳	子が学問を始め、仇氏夜分に篝燈のもとで督厲す。子を師に遊学させ、寒暑にかかわらず紉綴に励む。子は大学に入学す。
李石『方舟集』卷十七	田氏墓誌	79 歳	六經・子史、諸書に通ず、晩年、佛書を読み、よって性理は自ずと能く悟る。
	杜氏太孺人墓誌銘	66 歳	宣教公蚤卒。自ら二子を養育するを誓う。師に学ばせ家計は儉素にし、其の子克立す。夫人は『佛書』を読み理を悟る。
	故宜人薛氏墓誌銘	61 歳	宜人、女訓書・經伝・子史及び樂天・東坡の語を皆な成誦す。
陳伝良『止齋集』卷四十七	叔祖母韓氏墓誌銘	不明	夫人獨り子に書を読むを教す。
葉適『水心集』卷十三 卷十四	孟夫人墓誌銘(仲氏)	52 歳	夫人諱は靈湛、六歳にして周召南詩を誦し、其の意に通じ、識度は人に過ぎる。
	太碩人臧墓誌銘	87 歳	大夫終し、諸子皆幼にして、必ず書を執り、旁に従わせて曰く「我婦人なり、書の義を知る能わず。其の玩誦反復するを觀れば、清切にして寝ねざは、学に於いて深きの驗なり。」
	安人張氏墓誌銘	75 歳	夫人自ら蒙求。孝經を教え誦す。晝は先生に従い、夜は歸すと膏火のもとで、親から勤惰を課す。既に長子は猶然と立つ。

	高夫人墓誌銘	58 歳	夫人賢にして南北之俗に能く通ず。
	張令人墓誌銘	50 歳	夫人の父兄皆な儒先生たり。幼きより詩礼間事に陶染し、絶えて他女より異なる。
	<u>楊夫人墓表</u>	68 歳	鞏君(夫)死、夫人年二十六、子長は曰く豊、三歳幼は嶸なり。…二子稍長、盡く房中物を売り小宅を買う、娶婦立ちて家室と為す。時に嫠に大儒呂公有り、夫人二子に告げて曰く：「爾、学成らざれば、 <u>歸するを庸いざるなり。</u> 」二子既に先後して進士に及第、皆な知る所なり。豊尤も文名有り。豊は従事郎、嶸は奉議郎と為る。夫人終身嫁がず。
卷二十	<u>虞夫人墓誌銘</u>	77 歳	夫人生まれながらにして英悟、勁き畫、麗しき語は、学ばずして能くし、詩書古文をは素習のごとく有り。夫卒、ますます其の子を学義に趣ながして曰く「爾、未だ解けずとも、他を庸い質すこと無かれ」と。
卷二十一	<u>林夫人陳氏墓誌銘</u>	74 歳	夫死、猶お力めて其の子も學問を課し怠らず。
卷二十三	夫人錢氏墓誌銘	80 歳	臨海の錢氏、三王の孫たり、儒を以て顯なり。諸子方にを携抱され、習う所の経は皆口述し、以て師を煩わさず。
洪咨夔『平齋集』卷三十一	孺人吳氏墓誌銘	59 歳	孺人幼にして尤も敏悟、書を誦し倫を知り、大義を類識す。其の子未だ学に就かずして外伝、孝経、論語を口授す。
陳 著『本堂集』卷九十二	江陰教授史君妻陸氏墓誌銘	41 歳	幼少より書を能く読み、大義をさとり。則ち父母之を鍾愛す。
許月卿『先天集』卷十	李太安人行状	60 歳	夫人幼にして書を読み終身忘れず。
朱 熹『朱文公』卷九十一	建安郡夫人游氏墓誌銘	56 歳	族母の阮氏、婦徳を以て女師と為り、夫人幼にして学び、班昭の『女誡』を受け、大義に通意す。
卷九十二	潘氏婦墓誌銘	33 歳	論語・大学・中庸・孟子の諸書を読むを喜び、大義に略通す。
卷九十三	宜人黃氏墓誌銘	不明	佛書を好み、讀誦拝跪し、終日倦むことなし。
陳 造『江湖集』卷三十五	熊氏墓誌銘	71 歳	子に古の孟母を教え、固よりかくのごとくにて起家す。
樓 鑰『攻媿集』卷一百九	<u>文安郡夫人房氏墓誌銘</u>	59 歳	銀青(夫) 卒。夫人三十有二、諸子皆な幼にして葬を送る。以後子に教えること専意し昼夜怠らず。
周必大『周益國』卷三十六	亡姉尚氏夫人墓誌	47 歳	天性にして敏、書を知り物ごとの道理に達す。
卷七十六	程給事母宜人胡氏墓誌銘	75 歳	宜人慈恵にして肅敬たり、四徳を兼ね茂知し、古今の『釋氏書』に通じ、常に敬を以て其の賢を仰ぐ。
	先夫人王氏墓誌	37 歳	先夫人幼にして女工を善くし経史に通じ、古今の事博知す。
	孟媼葬記	75 歳	書を読むを喜び子に教す。媼年三十五已に受戒す。時には取『佛書』を取りて之を誦る。葷酒の時亦た不深泥せず、笑歌嬉遊して陶然と自ら楽しむ。如是は數十なり。
	汀州田使君妻宜人尚氏壙誌	58 歳	宜人和順にして勤儉、書を知り理に達す。
	太恭人司徒氏墓誌銘	85 歳	幼きより聰慧にして人に過ぎ、儒釋書に通ず。
度 正『性善堂』卷十四	郭安人墓誌	94 歳	安人性は恬淡にして勤儉。自ら將に鶏鳴きて起き、香を焚き『佛書』を誦し、明遅き婢僕を戒め、堂戸を掃す。

曹彦約『昌谷集』卷十八	蕭孺人黃氏墓誌銘	71 歳	孺人早くに父母を失う。猶お能く羣書を博覽し、兩藏經を手に往往にして多くを成誦す。
呂祖謙『東萊集』卷十三	金華時湮母陳氏墓誌銘	不明	其の子里にて藏書を有する者を見、歸えりて羨色を有す。夫人簪珥直數十萬を出だし工費を工面す。且て曰く「吾家は非常に窮空なり。汝、吾の此の意を忘れることなく、此の書を見るを特に欲するなり」。
袁説友『東塘集』卷二十	<u>故太淑人葉氏行狀</u>	82 歳	夫人五歳にして女工を解す。兄弟と偕に句読を課し、日に數百言を記す。夫卒。夫人三十餘歳。守節を通す。田二百畝有り勤儉に暮す。夫人曰く『是の兒らを父鍾愛す、今教えるべきなり。乃ち良師を訪ね『書史』を買い廬舎を闢らく。
韓元吉『南澗稿』卷二十二  卷二十	安人張氏墓誌銘	39 歳	夫人性は静専、且つ書を知り能く佛經を誦す。
	安人盧氏墓誌銘	64 歳	夫人日夜子に詩書を誨え、其の子は賢なる師友を俾求し学ぶ。
	<u>太宜人毛氏墓誌銘</u>	58 歳	夫人幼にして令聞有り。女工を善くし、詩書を習う。夫人歸して僅十年、武義(夫)即世。夫人年二十有七。釋老を讀むを日課とす。
	沈氏考妣墓誌銘	59 歳	長じては孝經・論語を教す。趙夫人慕容氏墓誌銘
葉夢得『建康集』卷八	<u>趙夫人慕容氏墓誌銘</u>	65 歳	夫人三十歳にして朝議君(夫)没す。夫人躬ら艱苦にたえ子を養育し、学は名儒に托す。故に男子二子ともに進士に及第す。
劉克莊『後村集』卷四十 卷四十 卷一百五十三  卷一百五十三 卷一百五十四  卷一百五十六  卷一百六十一	孺人鄭氏墓誌銘	51 歳	少くして經伝を習い釋老諸書を皆な口誦心記し、多くを識る。
	顧安人墓誌銘	87 歳	二子の儒学奮いて第に科すは、安人の力なり。
	周夫人墓誌銘	86 歳	夫人の賢は孟母の如く、潔は陶母(注1)の如く、家を成すは巴寡婦(注2)の如し。図史を書き記し、筆力は余りて衰惰することなし。
	陳孺人墓誌銘	46 歳	孺人少にして警慧、儒釋書に通じ古今の佳き文章皆な記誦す。
	魏國太夫人林氏墓誌銘	88 歳	太夫人少にして孤となり、伯姉と図史を博誦、班馬二書(班固と司馬遷)を熟読、忠臣孝子貞女烈婦の言行を琅琅と成誦したり。
	阮安人墓誌銘	82 歳	安人幼にして孝敬を知り、図史を渉す。
	雪觀居士(顧氏)墓誌銘	53 歳	夫人は百家の伝記、老佛之書に至り多く貫通す。古今の佳き文章悉く成誦す。
	夫人宗氏墓誌銘	84 歳	夫人幼にして能く内則の説悟を誦す。
劉一止『苕溪集』卷四十八  卷五十	恩平郡夫人劉氏墓誌銘	63 歳	夫人は周南之詩を婦人の行実とし能く勉めるなり。
	宋故孺人錢氏墓誌銘	65 歳	長卿(長男)太學進士甲科に登り名を馳す、是に於いて里人は之れを始めての榮とし、孺人の見識は女子にしては非凡なりと歎えるなり。
	永嘉郡夫人高氏墓誌銘	77 歳	夫人莊静にして淑懿、少小より戯を為さず……『六經』を諸子に觀めし、其の大指を識きす。

卷五十一	太宜人莫氏墓誌銘	87 歳	太宜人は少小より書を知り、詩論を作ることに浸長した。文は慧男子の如く、女工の事は学ばずとも能くす。
黄椽『勉齋集』卷三十七	太安人林氏行状	74 歳	夫人端重にして警敏なり、書を誦み一覽して語を忘れず、孟諸の経悉く大義に通ず。羣兒少にして従い家塾に聚る。
卷三十八	郭夫人墓誌銘	79 歳	夫人端静にして敏慧たり。講誦を聞き輒ち大旨に通ず。
姚勉『雪坡集』卷五十	譚氏孺人墓誌銘	46 歳	書史を誦し袁氏世範を甚も善く習い、夫を相すけ子に教え、吾が族の賢婦人なり。
	梅莊夫人墓誌銘	不明	夫人静重にして寡言。孝経・論語・孟子に通ず。偕に書を読む。
胡寅『斐然集』卷二十六	吳越國濟陽郡夫人江氏墓表	不明	夫人子に詩書を教え、成に至り、後世にして遂に蕃衍盛大となるなり。
陸游『渭南集』卷三十三	青陽夫人墓誌銘	不明	夫人幼にして書を読み大義をさとる。
卷三十四	陸孺人墓誌銘	74 歳	孺人端靖にして淑柔たり、書を読み大義を略知す。
卷三十五	楊夫人墓誌銘	68 歳	夫人親ら孝経・論語・毛詩・國風を授え、二子未だ外塾に従わず。
	夫人孫氏墓誌銘	53 歳	夫人幼にして淑質、故趙明誠の配、李氏、文辞名家を以てその学を夫人に伝えんとす。時に夫人十餘歳、謝して曰く「才藻(詩文の才能の豊かなこと)は女子の事にあらず」と。父之を奇とし、乃ち書を手にし、古の列女の事數十を夫人に授える。夫人日夜誦して廃めず。
袁燮『絜齋集』卷二十一	何夫人宣氏墓誌銘	77 歳	夫人天資穎悟、五六歳時にして書を読む聲を聞き、即ち歴歴と成誦す。曾わち教えを待たず。二子に論語・孟子を能く言授す。
	太淑人袁氏墓誌銘	76 歳	淑人自ら諸兒に書を読み聲琅琅たるを課す。
羅願『鄂州集』卷四	宜人趙氏墓誌銘	不明	諸子に書を読むを課し、三子以て進士に入貢す。
黄仲元『黄四如』卷四	太孺人林氏墓誌銘	77 歳	太孺人「孟母三遷之教」の如し。子は孟軻(孟子)の如く賢なり。
楊簡『慈湖遺書』卷五	宋母墓銘(王氏)	74 歳	王氏、詩禮・史傳に通ず。世婦見るとおころの辞章(詩歌や文章)を為らず。
周孚『鉛刀編』卷二十八	徐氏墓誌銘	68 歳	雞初鳴すと起床、金剛觀音両經を誦え、祁寒盛暑と雖も変わらず。
王之望『漢濱集』卷十五	故萬氏夫人墓誌銘	67 歳	夫人、書史を知り、能く其のあらましに通じ、毎に古今の篇を詠じ、兒輩に口授す。居家に法度有り、盛暑と雖も必ず衣冠を正すなり。
陳元晉『漁墅稿』卷六	文溪先生致仕大夫陳公夫人黃氏墓碣	76 歳	端重にして妄だりに言笑せず。少長にして書を読み頻悟なり。
劉宰『漫塘集』卷三十	故澹軒先生艾公及其妻李氏墓誌銘	69 歳	夫没。夫人猶夜諸子に書を読むを課すこと少しも懈らず、能く其の子皆三與に進士と成す。
	故孺人項氏墓誌銘	37 歳	稟姿にして淑慧、女工教えるを待たず。六歳にして能く句讀し、師に従い内則・女誡・列女伝及び韓柳歐蘇諸詩文を歴ねく聞き輒ち成誦、稍や成すと深居して司馬公『資治通鑑』を閲するなり。
袁甫『蒙齋集』卷十八	林府君周夫人墓誌銘	82 歳	夫人夜尤も厳しい渠簾(きまり)を課す。諸子俱に進士に挙す。

卷十八	縣尉楊君太孺人何氏墓誌銘	76 歳	父之を愛すること尤とし、孝経・論語・詩書・佐氏伝及び内則・女誡を教す。太孺人終身遺忘せず。
楊萬里『誠齋集』	夫人歐陽氏墓誌銘	50 歳	諸子に学問を訓え、毎夕燈をともし書を読むを視、黙して古人の語を聴くなり。
卷一百二十六	太孺人劉氏墓誌銘	86 歳	幼より柔恵にして警敏。父以て孝経・論語・孟子を授す。 — 過にして能く誦し大義に畧通、終身忘れず。父諸女と異なる 之を愛す。
卷一百三十	夫人張氏墓誌銘	51 歳	夫人警敏、笄にして婉媳、孝経・女訓を授し、大義に略通す。
二	夫人劉氏墓誌銘	59 歳	穉齒より靖恭にして明淑。父、孝経・内則・劉向列女伝を授え、一読にて成誦す。
何夢桂『潛齋集』卷十	宋夫人何氏墓誌銘	不明	幼にして聡慧、書史を觀、文義に粗通す。
洪适『盤洲文集』卷七十五	鄭宜人墓誌	60 歳	宜人家に在りては警慧、圖史・箴戒之書を喜んで習うなり。
王庭珪『廬溪集』	段夫人墓誌銘	84 歳	夫人幼きより父に習い、蘇黄之門に出入す、蘇黄之文を能く誦し其の大意に通ず。六経・国語等の書を皆な涉獵したり。
卷四十三	彭夫人墓誌銘	58 歳	夫人名儒家に生し、書伝を涉獵した。
卷四十四	王氏夫人墓誌銘	77 歳	老儒王遵道(父)初にして詩礼・論語等の書を自から教え、夫人數過を読み輒ち成誦し、耳聞目染し勤苦を待たず。
卷四十五	孔氏夫人墓誌銘	67 歳	夫人三子を日るは師に遣從して問学させ、夜は則ち短檠(燭台)を置き、座して隅で書を誦えるを聴く。
卷四十六	故李夫人墓誌銘	54 歳	夫人幼にして父兄に従い、句讀を学び通ず。稍長にして古の『列女伝』を觀し大概を曉とる。
陳亮『龍川集』卷三十	凌夫人何氏墓誌銘	51 歳	書を読むを好み、義理を知る。
劉才邵『樹溪集』	羅無競妻朱氏墓誌銘	72 歳	夫人方に幼にして孝経・女訓諸書を読むを喜び、およそ其の大意に通ず。
卷十二	曾氏墓誌銘	52 歳	夫人生は禮義之家なり。日々、圖史に親しみ耳に飽かず。
孫應時『燭湖集』	莫府君夫人墓誌銘(葉氏)	69 歳	夫人年二十有六歸莫府君。夫不幸早世。夫人年三十始、抱其の一子二女を養育す。禮法を教え男子は就学させ、日夜紡織に励む。大族間に於いて上には承、下には接、間言無し。
卷十二	宜人史氏墓誌銘	59 歳	賢甚少にして異にし、書を読み義理を識り、慧は男子の如きなり。
孫覲『鴻慶集』卷四十	楊國夫人趙氏	44 歳	詩書を読み能く通じ、日夜諸子に学ぶことを課す。
元好問『遺山集』卷二十五	贊皇郡太君梁氏墓銘	51 歳	夫人は父母の家にとりて、已に書を読むを知り、字を書き楷法有り。
張元幹『蘆川歸來集』卷十	晉安黃夫人墓誌銘	78 歳	處士(夫)歿。夫人時に年四十に至らず、諸孤方に齟齬なり。夫人處士の志を守り、奩具を売り郊外に舍數を得る。三遷して皆な儒の業を果たす。孟母の如し。

鄭剛中『北山集』卷七	楊氏女弟墓石書丹(鄭氏)	31 歳	年七歳にして書を誦し字を寫し、稍長して能く詩を吟じ音楽を習う。
胡銓『澹庵文集』卷二十四 卷二十五	<u>易氏夫人墓誌銘</u>	77 歳	夫人歸二十有八年而劉君卒。夫人諸子を呼び戒めて曰く「汝の父陰徳多し、後に必ず興す者有り。吾れ奩(嫁入り道具)を傾け、汝らの教えに用いる、以て『詩書』にて門戸を起し、貧にても慮うに足らず。
卷三十	趙謙仲妻李氏墓誌銘	51 歳	夫人、佛書をこのみ、日々孜孜として然り。
	饒州進士胡鎬母李氏墓誌銘	59 歳	曾祖京師に於いて学び書萬卷有り、太学にて五年許り積し歸す、舉進士に挙がり試礼部に再す…諸孫を能く自抱し古詩を口授す。
卷三十一	孺人曾氏行状	77 歳	性儉勤にして自ら能く刻苦す。佛書を読むを喜び寒暑廢めず。
洪适『盤州集』卷七十七	俞淑人墓誌銘	57 歳	淑人幼にして嬉弄せず、孟莊諸子書を暗誦、婦人法度の事を知る。
張山泉『紫薇集』卷三十五	先夫人歸附誌	77 歳	先夫人初め書を知らず、而して言行皆な道義に合致す。
方大琮『鐵菴集』卷三十五	妣太安人林氏墓銘	75 歳	父、女誠を教える。父卒。毎に展卷し感泣す。母楊氏に孝を以て事え謹稱す。
	孺人趙氏墓誌銘	不明	『佛書』を喜び誦す。
魏了翁『鶴山集』卷七十三	顧夫人墓誌銘	不明	吾が母且て戒しんで五經・論・孟を習得し能く誦す、親ら以て重珍(男児)に授ずく。
黄公度撰『知稼翁集』下	<u>潁川太夫人卓氏行状</u>	71 歳	陳公(夫)早卒。夫人閉門婺居二十四年、諸子の学を督す。晩年俊卿(子)以て甲課登第を果たす。郷人雖其の子の積學に服す、而して尤も多くは夫人の教えなり。
陳宓『龍図集』卷二十一	<u>吳氏夫人墓誌銘</u>	58 歳	婺居二十年、舅歿姑老にして初め嫁した時のごとく婦礼を盡す。夫人の長子宦遊、夫人去るに忍びず。晝は諸子の側に侍して教え、夜は婦工を課すこと寒暑変わらず。
卷二十一	王氏夫人墓誌銘	79 歳	夫人老にして、浮屠老子之説を喜び少しも懈らず、其の書の萬言を盈すことを課す。
卷二十一	蜀郡夫人黄氏行状	69 歳	少長にして書を觀るを喜び、一見『袁氏世範』を一見し曰く「美しきかな」。是れ自り成誦、終身之に服行す。
民国福建金石志卷十一	宋故昭武戸曹潘公孺人劉氏墓誌銘	84 歳	夫人独り好むは書を觀るを喜び、論語・孟子・詩書、皆な其の大略を能くす。夜は諸孫に誦聲を聴くを課し、其の句を読ます。
張文虎『閩中金石略』卷第十	<u>宋宣教余公孺人張氏墓誌銘</u>	29 歳	嫁して十二年、夫病歿。孺人艱苦に耐え、門戸を立て、二子に読み書きを教える。是れ以て皆な成したり。

## 注

- (1) 陶母は陶侃の母。晉、新淦の人。姓は湛氏。侃の父の丹の妾。范逵が其の家を訪れた時、臥薦を以て馬に秣い、髪を切って酒肴に易えた。(晋書六十六)
- (2) 巴寡婦は巴寡婦清。秦の人。其の夫、丹穴を得、家富む。婦、其の業を守る。始皇帝、貞婦となす。(前漢書九十一)

## 別表 1 2 読まれた書物

北宋 80 人

撰者 文集	墓誌銘	卒年	読まれた書物
文同『丹淵集』卷四十	文安縣君劉氏	48 歳	左氏春秋
	華陽縣君楊氏	79 歳	五經(易經・書經・詩經・礼記・春秋)
	張夫人墓誌銘	58 歳	經史(經書と歴史書)
曾鞏『元豐類藁』卷四十五	夫人周氏墓誌銘	26 歳	図史(河図洛書の略 注 1)
王珪『華陽集』卷五十三  卷五十四  卷六十	壽安縣太君呂氏墓誌銘	70 歳	詩書(詩經と書經 注 2)
	趙宗旦妻賈氏	35 歳	論語、孝經(注 3)
	宗室延州觀察使夫人京兆郡君宋氏墓誌銘	61 歳	詩書、浮図書(仏教の書)
	泗州盱眙縣尉向君夫人李墓記	19 歳	書史(經書と史書 注 4)
王安礼『王魏公集』卷七	宗室右監門率府率叔妻翁氏墓誌銘	22 歳	佛書
程俱『北山集』卷三十一	宋故德興縣君宋氏墓誌銘	67 歳	孝經、論語
陳襄『古靈集』卷二十	崇國太夫人符氏墓誌銘	57 歳	漢唐史
韓琦『安陽集』卷四十六	太夫人胡氏墓誌銘	63 歳	釋氏藏典(釈迦の經典)
趙鼎臣『竹隱集』卷十九	東邦憲母李氏墓誌銘	80 歳	浮図書
鄭俠『西塘集』卷四	謝夫人墓表	29 歳	詩書、義婦烈女伝記
沈遼『雲巢編』卷九	夫人朱氏墓誌銘	83 歳	浮屠書(浮図と同じ、佛教の書)
沈溝『西溪集』卷十	長壽縣太君魏氏墓誌銘	70 歳	浮屠書
孔武仲『宗伯集』卷十九	吳夫人墓誌銘	50 歳	佛書、唐人歌詩
劉摯『忠肅集』卷十四	仁壽趙夫人墓誌銘	61 歳	佛書
毛滂『東堂集』卷十	牛氏夫人墓誌銘	35 歳	孟子、論語
韓維『南陽集』卷三十	太原縣君墓銘(王氏)	55 歳	孝經、白氏文集、雜詩賦數百篇(注 5)
范祖禹『范太史集』 卷三十八  卷四十五	工部尚書李莊公夫人葬錢氏墓誌銘	83 歳	經史、佛書
	右武衛大將軍康州團練妻安平縣君江氏墓誌銘	36 歳	佛書
卷四十六	右監門大將軍妻長安縣君蔚氏墓誌銘	45 歳	經史
	左承議郎妻崇德縣君宋氏墓誌銘	21 歳	浮屠書
卷四十七 卷四十七  卷四十八	右千牛衛將軍妻墓誌銘李氏	21 歳	書史
	保寧軍節度觀察留後東陽軍公妻仁壽郡夫人李氏墓誌銘	68 歳	經史
	仁壽郡夫人李氏墓誌銘	68 歳	經史
卷四十八  卷四十八	右千牛衛將軍妻 仙源縣君王氏墓誌銘	19 歳	釋氏書
	右監門衛大將軍妻崇安縣君石氏墓誌銘	33 歳	班大家女誡
卷五十	左侍禁妻范氏墓誌銘	23 歳	書史

卷五十	右千牛衛將軍妻永和縣君張氏墓誌銘	32 歲	詩書
卷五十一	右監門衛大將軍妻仁和縣君曹氏墓誌銘	19 歲	儒書、作五七言詩百有餘篇
卷五十一	右屯衛大將軍妻吉安縣君楊氏墓誌銘	50 歲	佛書
卷五十一	右監門衛大將軍貴州刺史妻永興縣君程氏墓誌銘	29 歲	書史
卷五十二	右千牛衛將軍妻崇仁縣君高氏墓誌銘	30 歲	儒書
范純仁『范忠宣公集』卷十二	比部杜君夫人崔氏墓誌銘	72 歲	經史、佛書
徐鉉『騎省集』卷三十	汝南縣太君周氏	48 歲	經書、孝經、論語、外伝(注 6)
晁補之『雞肋集』卷六十四	文安郡君陳氏墓誌銘	56 歲	白居易詩
卷六十五	穆氏墓誌銘	不明	佛書
汪藻『浮溪集』卷二十八	吳夫人墓誌銘	57 歲	詩書
	安人王氏墓誌銘	74 歲	佛書
呂陶『淨德集』卷二十七	仁壽縣太君魏氏墓誌銘	80 歲	佛書
	長安縣君祝氏墓誌銘	68 歲	佛書
陸佃『陶山集』卷十五	壽安縣君張氏	67 歲	西方之書
卷十六	周氏夫人行狀	65 歲	浮屠書
劉攽『彭城集』卷三十六	林氏母黃氏夫人墓表	77 歲	詩史
	永安縣君張氏墓誌銘	57 歲	佛書
	聶夫人墓誌銘	不明	書史
宋祁『景文集』卷六十	隴西郡君李氏墓誌銘	53 歲	孝經、古詩(注 7)、方田之數(注 8)
楊傑『無爲集』卷十四	故錢夫人墓誌銘	47 歲	佛書
黃庭堅『山谷外集』卷八	趙夫人墓誌銘	31 歲	詩書
晁說之『嵩山集』卷十九	文安縣子碩人范氏墓誌銘	64 歲	論語、毛詩
卷二十	崇德縣太君王氏墓誌銘	84 歲	經史、釋老、陰陽卜筮之書
慕容彥逢『摘文堂集』	故德安縣君彭氏墓誌銘	58 歲	釋氏書
卷十四	故和義郡君胡氏墓誌銘	55 歲	釋氏書
鄭獬『郾溪集』卷二十二	李夫人墓誌銘	46 歲	列女伝
	職方郎中鮑公夫人陳氏墓誌銘	74 歲	浮屠書
鄒浩『道卿集』卷三十七	壽昌縣太君巖氏墓誌銘	72 歲	陶淵明、白樂天
張方平『樂全集』卷三十八	徐國太夫人墓誌銘(和氏)	56 歲	貝葉書(注 9)
許景衡『橫塘集』卷二十	丁昌期妻蔣氏墓誌銘	64 歲	浮屠書
歐陽脩『文忠集』	雍國太夫人馮氏墓誌銘	67 歲	浮屠書
卷三十七	右監門衛將軍夫人武昌縣君郭氏墓誌銘	33 歲	書史、浮屠書
歐陽脩『文忠集』	右監門衛將軍夫人東陽縣鄭氏墓誌銘	19 歲	浮屠書
卷三十七			
蔡襄『端明集』卷三十九	瑞昌縣君孫氏墓誌銘	67 歲	浮屠書
劉跂『學易集』卷八	夫人龐氏墓誌銘	77 歲	佛書
	朝散郎李公安人王氏墓誌銘	56 歲	佛書
李廌『濟南集』卷七	李母王氏墓誌銘	68 歲	佛書

王安石『臨川文集』卷九十 卷九十九 卷九十九	外祖母黃夫人	72 歳	書史
	李君夫人盛氏墓誌銘	不明	易經、論語、孝經、諸子之書
	仙居縣太君魏氏墓誌銘	64 歳	詩經、論語、孝經
許翰撰『襄陵文集』卷十二	蔣氏夫人墓誌銘	72 歳	西方聖人之書、論語、孟子
蘇舜欽『蘇學士集』卷十五	廣陵郡太君高氏墓誌銘	81 歳	詩書(詩經・書經)
蘇頌『蘇魏公集』卷六十二	壽昌太君陳氏墓誌銘	74 歳	經史
黃庶『伐檀集』卷下	徐君處士妻周氏墓誌銘	49 歳	女誠
黃本驥『古誌石華』卷二十七	仁壽縣君蘇氏墓誌銘	不明	詩書、黃老(黃帝と老子)之書
陸增祥『八瓊金』卷一百三	宋故安平縣君崔氏墓誌銘	69 歳	書史
鍾離景伯『金石攷』第十五	安康郡君楊夫人墓誌銘	49 歳	經史、醫藥陰陽筭術之書
蕭稷『藝文志』金石	崇德縣太君段氏墓誌銘	62 歳	竺典(佛教の經典)
韋驥『錢塘集』卷十六	德清縣君胡氏墓誌銘	不明	佛書
程頤『伊川文集』卷八	上谷郡君家伝(侯氏)	49 歳	書史

## 南宋 69 人

員興宗『九華集』卷二十一	夫人員氏墓誌銘	48 歳	詩書(詩經・書經)
李石『方舟集』卷十七	田氏墓誌銘	79 歳	六經(注 10)、佛書、子史(注 10)
	杜氏太孺人墓誌銘	66 歳	佛書
	故宜人薛氏墓誌銘	61 歳	女訓書、經伝、子史、樂天、東坡
	袁氏墓誌銘	56 歳	詩書、佛書
	蔡氏母葬墓誌	79 歳	詩書
葉適『水心集』卷十三 卷十四 卷二十	孟夫人墓誌銘	52 歳	周召南詩
	安人張氏墓誌銘	75 歳	蒙求(注 11)、孝經
	虞夫人墓誌銘	77 歳	詩書
洪咨夔『平齋集』卷三十一	孺人吳氏墓誌銘	59 歳	外伝、孝經、論語
朱熹『朱文公』卷九十一 卷九十二 卷九十三	建安郡夫人游氏墓誌銘	56 歳	班昭女誠
	潘氏婦墓誌銘	33 歳	論語、大學、中庸、孟子
	宜人黃氏墓誌銘	不明	佛書
周必大『周益國』卷三十六  卷七十六	先夫人王氏墓誌	37 歳	經史
	程給事母胡氏墓誌銘	75 歳	釋氏書(佛書)
	太恭人司徒氏墓誌銘	85 歳	儒釋書(儒教と仏教の書)
度正『性善堂』卷十四	郭安人墓誌墓誌銘	94 歳	佛書
曹彦約『昌谷集』卷十八	蕭孺人黃氏墓誌銘	71 歳	兩藏經(大藏經の略)
韓元吉『南澗稿』卷二十 卷二十二	沈氏考妣墓誌銘	59 歳	孝經、論語
	安人張氏墓誌銘	39 歳	佛書
韓元吉『南澗稿』卷二十二	安人廬氏墓誌銘	64 歳	詩書
	太宜人毛氏墓誌銘	58 歳	釋老
劉克莊『後村集』卷三十七 卷三十八 卷四十 卷一百五十三 卷一百五十四 卷一百五十六 卷一百六十一	孺人鄭氏墓誌銘	51 歳	經伝、釋老諸書
	周夫人墓誌銘	86 歳	図史
	陳孺人墓誌銘	46 歳	儒釋書
	魏國太夫人林氏墓誌銘	88 歳	図史、班馬二書(班固と司馬遷)
	阮安人墓誌銘	82 歳	図史
	雪觀居士墓誌銘(顧氏)	53 歳	百家伝記、老佛(老子、釈迦)之書
	夫人宗氏墓誌銘	84 歳	内則

方岳『秋崖小集』卷四十	操處士葉夫人墓誌銘	不明	詩書
劉一止『苕溪集』卷四十八 卷五十 卷五十一	恩平郡夫人劉氏墓誌銘	63 歳	周南之詩(詩經、国風の編名)
	永嘉郡夫人高氏墓誌銘	77 歳	六経
	太宜人莫氏墓誌銘	87 歳	経史
胡銓『胡澹庵』 卷二十五	趙謙仲妻李氏墓誌銘	51 歳	佛書
胡銓『胡澹庵』 卷三十 卷三十一	饒州進士胡鎬母李氏墓誌銘	59 歳	古詩
	孺人曾氏行狀	77 歳	佛書
范浚『香溪集』 卷二十二	通直郎范公夫人章氏墓誌銘	71 歳	佛書
黄榦『勉齋集』 卷三十七	太安人林氏行狀	74 歳	孟子、諸経
姚勉『雪坡集』卷五十	梅莊夫人墓誌銘)	不明	孝経、論語、孟子
	譚氏孺人墓誌銘	46 歳	書史、袁氏世範
胡寅『斐然集』卷二十六	吳越國濟陽郡夫人江氏墓表	不明	詩書
陸游『渭南文集』 卷三十四	楊夫人墓誌銘	68 歳	孝経、論語、毛詩国風
袁燮『絜齋集』卷二十一	何夫人宣氏墓誌銘	77 歳	論語、孟子
黄仲元『黄四如』卷四	太孺人林氏墓誌銘	77 歳	歐陽氏母家訓「瀧岡阡表」(注 12)
楊簡『慈湖遺書』卷五	宋母墓銘	74 歳	詩、礼、史伝(歴史の書物・史書)
周孚『鉛刀編』卷二十八	徐氏墓誌銘	68 歳	金剛観音兩経
王之望『漢濱集』卷十五	故萬氏夫人墓誌銘	67 歳	書史
劉宰『漫塘集』卷三十	故孺人項氏墓誌銘	37 歳	内則、女誡、列女伝、資治通鑑、韓柳歐蘇諸詩(注 13)
袁甫『蒙齋集』卷十八	林府君周夫人墓誌銘	82 歳	経史
	縣尉楊君太孺人何氏墓誌銘	76 歳	孝経、論語、孟子、詩経、書経、内則、左氏伝、女誡
楊萬里『誠齋集』 卷一百二十八 卷一百三十一 卷一百三十二	太宜人蕭氏墓誌銘	87 歳	詩礼(詩経・礼記)
	太孺人劉氏墓誌銘	86 歳	孝経、論語、孟子
	夫人張氏墓誌銘	51 歳	孝経、女訓書
	夫人劉氏墓誌銘	59 歳	孝経、内則、劉向列女伝
何夢桂『潛齋集』卷十	宋夫人何氏墓誌銘	不明	書史
洪适『盤洲文集』卷七十五 卷七十七	鄭宜人墓誌	60 歳	図史、箴戒之書(戒めの書)
	俞淑人墓誌銘	57 歳	孟莊諸子
王庭珪『廬溪集』卷四十三 卷四十四  卷四十六	段夫人墓誌銘	84 歳	六経、国語、蘇黄之文(注 14)
	彭夫人墓誌銘	58 歳	書伝(書籍)
	王氏夫人墓誌銘	77 歳	詩礼、論語
	李夫人墓誌銘	54 歳	列女伝
劉才邵『樹溪集』卷十二	羅無競妻朱氏夫人墓誌銘	72 歳	孝経、女訓書
孫覲『鴻慶集』卷四十一	楊國夫人趙墓表	44 歳	古詩書
方大琮『鐵菴集』 卷三十五	妣太安人林氏墓誌	75 歳	女誡
	徐母孺人趙氏墓誌銘	不明	佛書
魏了翁『鶴山集』 卷七十三	顧夫人墓誌銘	不明	五経、論語、孟子
陳宓『龍図集』 卷二十一	王氏夫人墓誌銘	79 歳	浮屠書、老子
	蜀郡夫人黄氏行狀	69 歳	袁氏世範
民国福建金石志卷十一	宋故昭武戸曹潘公孺人 劉氏墓誌銘	84 歳	論語、孟子、詩書
袁説友『東塘集』卷二十 故	太淑人葉氏行狀	82 歳	書史

## 注

- (1)河図は、中国古代の伝説で、伏羲(フッキ)の時、黄河から出た竜馬の背に現れていた図で、易の卦のものととなったもの。洛書は、禹の時、洛水から出た神龜の背にあった文字で、『書経』の洪範編のものととなったもの。伏羲も禹も古代伝説上の聖王。『易経』繫辞上に「河出図、洛出書、聖人則之」。(河図を出だし、洛書を出だし、聖人は之にのつとる。)
- (2)『詩経』は、儒教の五つの経典の一。中国最古の詩集で、儀式用(小雅・大雅)・祭典用(頌)の歌もあるが、その半分以上は民謡(国風)である。もと、王者が各地の歌謡三千余編を集めさせたが、その中から孔子が三百十一篇(うち六編は題名のみ現存)を撰んで儒教の経典としたものという。別称『毛詩』。漢初に先秦時代の古文の『詩経』を、毛亨(モウコウ)が伝えたので毛詩という。二十卷。『書経』も儒教の五つの経典の一。『尚書』の宋代以後の称。
- (3)儒教の経典の一。天子から庶人に至る孝道を説いている。孔子の門人の曾氏、またはその門流の著といわれるが、成立年代とともに不詳。一卷。
- (4)経書は、聖賢の言行や教えを記した書籍。四書(大学・中庸・論語・孟子)と五経(易経・書経・詩経・礼記・春秋)。史書は歴史の書籍。
- (5)雑詩は、古人の作で其の題目を失ったものを、編選するとき名づけて雑詩という。
- (6)国語をいう。春秋外伝の略(春秋内伝は春秋左伝)。
- (7)漢詩の一体。古体詩。唐代の近体詩に対して、隋以前の詩をいう。平仄(ヒョウソク)や句数に制限がなく、五言・七言・長短句などがある。
- (9)インドに産する多羅樹の葉、厚くて硬い。インドで仏教の経文を針で書いた仏教の経典。
- (10)六経は、易経・書経・詩経・礼記・春秋・樂経。子史は、諸子百家の書と歴史書。
- (11)書名。三卷。唐の李瀚の著。古書のなかから古人の逸話を類集し、四字句の韻語を標題として配列し、記憶しやすいようじした初学者向けの教科書。
- (12)歐陽脩が父を瀧岡に葬り、墓に捧げた文章
- (13)唐の韓愈・劉宗元と、宋の歐陽脩・曾鞏・王安石・蘇洵・蘇軾・蘇轍の、八人の古文の大家。
- (14)蘇軾と黄庭堅を并称している

# 別表 1 3 墓誌銘にみる「賞賛の言葉」

北宋 206 人

撰者 文集	墓誌銘	賞賛の言葉
葛勝仲 『丹陽集』 卷十四	張太安人王氏墓誌銘	事姑欽愛兼至凡尊嫜行若、姻戚媼御咸慶、其姑得孝婦泪専家政。
	妻碩人張氏墓誌銘	事皇姑温國夫人、事先人盡孝。
文同『丹淵集』 卷三十九	長壽縣太君楊氏墓誌銘	事其姑尤孝謹。夫人服之為終身太博(夫)。
	華陽縣君楊氏墓誌銘	奉養舅姑無闕禮。撫育諸叔一盡乎仁愛。
曾鞏 『元豐類藁』 卷四十五	金華縣君曾氏墓誌銘	養姑盡婦道、輔其夫盡妻道。
	壽安縣君錢氏墓誌銘	事夫能成其忠教子能成其孝行是皆可傳者也。
	仁壽縣太君吳氏墓誌銘	夫人其平生養舅姑甚孝。
	夫人周氏墓誌銘	既嫁無舅姑、順夫慈子。
	永安縣君李氏墓誌銘	事父母不違其教事舅姑不違其志事夫順。
	池州貴池縣主簿沈君夫人元氏墓誌銘	事姑能盡其孝。教養諸子至其後皆為成材能世。
	沈氏夫人墓誌銘	事姑長興縣太君賈氏盡婦道、事夫盡妻道。為母及與内外屬人接一皆盡其道、故其處也。
曾鞏 『元豐類藁』卷 四十六	鄆州平陰縣主簿關君妻曾氏墓表	養父母、舅姑皆孝。
	知處州青田縣朱君夫人戴氏墓誌銘	舅姑曰能順吾志、夫受其助。
	亡妻宜興縣君文柔晁氏墓誌銘	事姑遇内外屬人。
王珪『王華陽』 卷五十五 卷五十六	魏國夫人陳氏墓誌銘	事其姑其孝。
	泗州盱眙縣尉向君夫人李氏墓記	夫人性質淑柔事舅姑。
王安禮『王魏公集』 卷七	宗室右監門率府率叔痕妻翁氏墓誌銘	事舅姑以孝聞内外宗族不見喜愠之色。
陳襄『古靈集』 卷二十	崇國太夫人符氏墓誌銘	夫人歸嘗、以不逮事舅姑為恨春秋享祀必躬。
司馬光『司馬集』 卷七十八	敘清河郡君	上承舅姑。
韓琦『安陽集』 卷四十六 卷四十八	太夫人胡氏墓誌銘	夫人上奉仁壽(姑)、下睦宗婣内外無間言。
	新婦賈氏墓誌銘	事夫能盡婦道、姑寢疾躬侍湯采劑夙夜不懈。
	安康郡太君陳氏墓誌銘	事其姑秦國太夫人曲盡婦道。…中略…秦國亦而遇之猶息女也。
	壽安縣君王氏墓誌銘	事其姑、年踰二紀柔順之道終始不懈。
趙鼎臣『竹隱集』 卷十九	吳夫人墓誌銘	夫人既歸修婦道、事姑舅垂四十年竭誠盡。
	孫令人墓誌銘	事其姑賈碩人。
畢仲游『西臺集』 卷十四	田孺人(田氏)墓誌銘	事其舅姑 衛國太夫人(姑)寡居、而老以嚴聞。
	清源王太君宋氏墓誌銘	事其舅殿中君姑長安縣君不怠。
沈括『長興集』 卷十三 卷十四 卷十四 卷十七	太康縣君商氏墓誌銘	事舅姑、以孝睦子其庶猶的也。
	夏侯夫人墓誌銘	夫人事舅姑無所愛斷
	故長安縣太君高氏墓誌銘	夫人性修謹慈、順舅姑樂得
	宗室故深州防禦使饒陽侯克己妻 武氏墓誌銘奉勅撰	其夫以為宜、而舅姑以為有禮。
	玉山縣君施氏墓誌銘	事舅姑以為有禮。

呂頤浩『忠肅集』 卷十四	壽安縣許夫人墓誌銘	事其舅姑、睦其族姻內外無間言。
蘇軾『東坡集』 卷八十九	劉夫人墓誌銘	事其姑、能委曲順其意、嘗侍疾不解。
	亡妻王氏墓誌銘	事吾先君先夫人、皆以謹肅聞其始末。
余靖『武溪集』 卷十九	宋故准翔縣太君王夫人墓誌銘	事其舅姑如其母而加謹焉。
尹洙『河南集』 卷十四	故永安縣君李氏墓誌銘	事先夫人能勤禮自持承顏下色無少怠。
李觀『直講集』 卷三十 卷三十一	聶夫人墓銘(王氏)	事姑三十年未嘗帶芥。
	亡室墓誌(陳氏)	事姑瞻相顏色惟先意之為吾母固愛之。
陳師道『後山集』 卷十六	昌樂縣君劉氏墓銘	夫人事舅姑如母視
張耒『柯山集』 卷五十	李夫人墓誌	夫人性純孝敏靜。其事舅姑能先意。
唐庚『眉山文集』 卷五	徐夫人墓誌銘	舅姑得之喜即委以家政。
	史夫人行狀	夫人逮事舅姑。
劉一止『苕溪集』 卷五十一	太碩人傅氏墓誌銘	事舅姑惟其所適、恭其夫如賓。
范祖禹『范太史集』 卷三十八 卷三十九 卷四十一	工部尚書李莊公夫人葬錢氏墓誌銘	孝事舅姑、禮接族人。
	梁國郡君王氏墓誌銘	夫人事姑備盡婦道、內外無間言。
卷四十二	長壽縣太君楊氏墓誌銘	夫人性仁孝謹甚、鷄初鳴立舅姑戶外候侍。
	宋君夫人史氏墓誌銘	夫人事舅中散公姑壽安郡太君盡婦道。
卷四十三 卷四十五	安康郡太夫人胡氏墓誌銘	夫人孝於姑、順於夫、和於姊妹。
	壽昌縣太君王氏墓誌銘	夫人逮事太府奉舅姑盡婦道。
卷四十六	長壽縣太君聶氏墓誌銘	夫人事舅歷事皇姑前後如一。
	安化軍節度使榮國公妻馮翔縣君 郭氏墓誌銘	事舅姑、晨昏有常節接、夫相敬如賓。
卷四十七	右監門衛大將軍妻長壽縣君李氏墓誌銘	事舅姑盡、禮家人上下雍睦。
	右武衛大將軍榮洲刺史妻大寧縣君 花氏墓誌銘	事舅姑孝、謹奉祭祀、嚴敬接族人以睦、為繼母(花氏は繼室)以慈宗室稱焉。
卷四十八	左班殿直妻王氏墓誌銘	奉舅姑惟勤能、睦其族人、精于音律女工之事。
	右千牛衛將軍妻劉氏墓誌銘	奉舅姑盡婦道、事夫以禮閨門用雍睦。
卷四十九	三班奉職妻史氏墓誌銘	事舅如父、佐夫以法度不敢懈。
	太子右內率府副率妻呂氏墓誌銘	事舅彭城公孝、和其夫族以睦。
卷五十	右千牛衛將軍妻李氏墓誌銘	事舅姑孝、而謹接幼少和。
	右監門率府率妻劉氏墓誌銘	事舅姑盡孝、割股肉為粥以愈舅疾、宗族稱之。
卷五十一	左班殿直妻呂氏墓誌銘	舅至孝、宗族長幼皆得其歡心。
	右監門衛大將軍榮洲團練使妻金華縣 君石氏墓誌銘	事舅姑孝、接親族恭、教育子孫均一。
卷五十二	右千牛衛將軍妻仙源縣君王氏墓誌銘	事舅姑孝、睦夫、族曲有禮意。
	右千牛衛將軍妻崇德縣君郭氏墓誌銘	孝盡婦道、與夫相待如賓、平居無戲言。
卷五十三	右監門衛大將軍妻壽安縣君張氏墓誌銘	奉祭祀無違禮、其家宜之事寡姑朝夕不懈。
	右侍禁妻劉氏墓誌銘	奉舅姑孝、事夫順族人稱之。
卷五十四	右侍禁妻鄭氏墓誌銘	事舅姑孝以勤從夫順、姊妹稱其賢。
	右監門衛大將軍妻崇安縣君石氏墓誌銘	事皇姑彭城郡君盡婦道。

<p>范祖禹『范太史集』卷四十八</p>	<p>右侍禁妻翟氏墓誌銘 左班殿直妻錢氏墓誌銘 隨州觀察使漢東侯妻陳留郡君吳氏墓誌銘 左班殿直妻吳氏墓誌銘 右班殿直妻林氏墓誌銘 欽州防禦使妻安康郡君柴氏墓誌銘 賀洲團練使妻長安縣君侍其氏墓誌銘 右監門衛大將軍妻孫氏墓誌銘 右武衛大將軍慶洲刺史妻德安縣君 王氏墓誌銘</p>	<p>事舅姑盡婦道、從夫。 事舅姑盡婦道、處閨門之內肅如也。 事舅姑盡婦道治家恭勤節儉。 事舅姑孝、接姊妹睦約、于奉已至躬自澣濯。 事舅姑孝與姊妹輯睦、恭儉溫惠治家有法。 逮事舅姑如父母、皆得其歡心。 事舅姑孝、閨門雍穆無慍色怨言、治家有常法。 事寡姑盡婦道、居家雍睦。 事舅姑、盡婦道、治閨門以禮法、奉祭祀敬。</p>
<p>卷四十九</p>	<p>左班殿直妻李氏墓誌銘 左班殿直妻李氏墓誌銘 右侍禁妻張氏墓誌銘 右屯衛大將軍妻安樂縣君陳氏墓誌銘 右班殿直妻陳氏墓誌銘 左班殿直妻翟氏墓誌銘 左武衛大將軍貴洲刺史妻渤海縣 高氏墓誌銘 三班奉職妻安氏墓誌銘 贈開府儀同三司昌國公妻同安郡君 安氏墓誌銘 右屯衛大將軍妻康氏墓誌銘 右監門衛大將軍贈蘄州防禦使蘄春侯妻 長壽縣君杜氏墓誌銘</p>	<p>事舅姑孝敬嫁之、明年姑病扶持躬承湯藥。 事舅淮康孝敬、衣服飲食不務華侈見。 事舅姑孝敬嫁之。 奉姑孝謹、撫育子孫。治家和柔從夫官於汜水。 適以孝敬為舅姑所愛、族人莫不宜之。 事姑謹而敬、治家嚴而理、相其夫以正而順。 事舅姑如父母、相夫以正而順。前夫人男女十八人、夫人鞠育一如。(高氏は繼室) 事舅如父母、奉夫如長上。 事舅姑、謹肅治家有法、待內外親屬無貴賤、長幼一以禮。 不逮事舅、事姑以孝聞。 事舅姑孝接、親族和、雖媵妾遇之必以禮。</p>
<p>卷五十</p>	<p>左奉議郎妻旌德縣君彭氏墓誌銘 右武衛大將軍處洲刺史妻壽光縣君 王氏墓誌銘 右屯衛大將軍妻崇德縣君張氏墓誌銘 左班殿直妻杜氏墓誌銘 右監門衛大將軍嘉州史妻永壽縣君 程氏墓誌銘</p>	<p>事舅姑勤敬。尚清素有儒者者風。 事姑盡禮、溫恭朝夕無少懈勤、 于家事凡十七年如一。 事父母以孝聞。既歸不及其舅、事姑如事母。 事舅姑盡孝、閨門肅然。 侍姑疾、夫婦衣不解帶、宗族稱之。</p>
<p>卷五十一</p>	<p>左侍禁妻范氏墓誌銘 楚洲防禦使楚國公贈奉國軍節度使夫人 宋氏墓誌銘 右屯衛大將軍妻吉安縣君楊氏墓誌銘 右監門衛大將軍貴洲刺史妻永興縣君 程氏墓誌銘 右監門衛大將軍嘉州刺史妻永壽縣 向氏墓誌銘 贈祗洲防禦使廣平侯妻王氏墓誌銘 右武衛大將軍鳳州刺史妻永安縣君 郭氏墓誌銘</p>	<p>事舅姑謹孝、姑愛之如已女。 奉舅姑恭順、接姊妹以和、撫諸子均一。  敬其夫如賓客、事舅姑以孝聞。 事舅姑、循法度以禮、自防安素樂儉不喜紛華。</p>
<p>卷五十二</p>	<p>右監門衛大將軍嘉州刺史妻永壽縣 向氏墓誌銘 贈祗洲防禦使廣平侯妻王氏墓誌銘 右武衛大將軍鳳州刺史妻永安縣君 郭氏墓誌銘 右侍禁妻王氏墓誌銘 右屯衛大將軍妻靜安縣君鄭氏墓誌銘 右千牛衛將軍妻崇仁縣君高氏墓誌銘 左班殿直妻楊氏墓誌銘</p>	<p>事舅姑勤孝、溫謙敬慎族人稱之。  既歸不及其舅、事姑如事母、族人稱焉。 既嫁又能孝事其姑。  君郭氏在家事父母、事舅姑如事父母。 不逮事舅、事姑勤孝。 敬事舅姑如事父母。 事舅姑孝敬。</p>

范祖禹『范太史集』卷五十二	右監門衛大將軍妻孫氏墓誌銘 右武衛大將軍嘉洲刺史妻同安縣君馬氏墓誌銘 右千牛衛將軍妻夏氏墓誌銘	勤共婦道、閨門之內上下皆得其歡心姑復愛焉。奉舅姑敬、接娣姒睦、長幼稱之。姑馮翊君久病侍醫藥、積憂戚成疾未幾、姑沒君執喪哀毀疾益侵。
范純仁『范忠宣公集』卷十二	比部杜君夫人崔氏墓誌銘	事舅姑至孝曲盡婦道。
晁補之『雞肋集』卷六十六	李氏墓誌銘	舅曰「婦事我順」、娣姒曰「幼龜和少」、且勞者曰「夫人遇我慈也」
汪藻『浮溪集』卷二十八	吳國夫人陳氏墓誌銘 安人王氏墓誌銘 周夫人墓誌銘	事舅姑孝、教子義、遇僮使有恩、敬夫如賓。安人勤舅姑之養也。舅姑以為孝、宗族以為順。
強至『祠部集』卷三十五	尚書虞部郎中曾府君夫人廣陵縣君朱氏墓誌銘  汝南周氏夫人墓誌銘 安府君妻趙氏人墓誌銘 贈衛尉卿梁公夫人李氏墓誌銘	事舅姑能左右不懈。  姑曰「能孝我」。 盡婦道舅姑喜。 事舅姑、終日無惰容。
廖剛『高峯文集』卷十一	太宜人蕭氏墓誌銘	奉舅以孝、助其夫、以順治其家。
呂陶『淨德集』卷二十七	夫人文氏墓誌銘 夫人呂氏墓誌銘 長安縣君祝氏墓誌銘	事舅姑以孝、事夫以順、訓子治家、愛而有法。孝敬奉舅姑以禮義、事夫以節行、教子遵聖之考。其姑以孝、從其夫以禮友、其夫之妹以和。
秦觀『淮海集』卷三十三	虞夫人墓誌銘	事舅姑旁接內外之宗姻下撫僮使之衆殆無一人。
陸佃『陶山集』卷十六	鮑氏夫人墓誌銘 仁壽縣君鮑氏墓誌銘 蔣氏夫人墓誌銘	事姑如大母、雞鳴而起率至夜分就寢。逮事舅姑其孝不衰焉。事父以事舅而舅曰「尊我資于擇」而姑曰「親我又能」以義相其夫以仁道其子。
劉敞『彭城集』卷三十六 卷三十九	林氏母黃氏夫人墓表 德清縣君周夫人墓誌銘 孫氏母莊夫人墓碣并銘 韓刑部妻程氏墓誌銘 永安縣君張氏墓誌銘	逮事祖姑夫人致養。宗族稱之曰孝婦。逮事舅姑恭順、舅姑繼歿、服喪六年以孝稱。事舅姑飲食衣服必手調飪縫紉之未嘗以委他人。及嫁逮事舅忠憲公、婦道修備宗族懷而愛之。張氏歸果稱良婦、事舅姑以孝聞。
宋祁『景文集』卷六十	故贈太師章公夫人追封鄧國太夫人張氏墓誌銘	夫人移其孝、以安舅姑移、其友以和、娣姒勤身、以助宗事盡愛。
楊傑『無爲集』卷十四	故仙源縣君陳氏墓誌銘  故廬江田府君夫人趙氏墓誌銘 故錢夫人墓誌銘 故王夫人墓誌銘	舅姑安其孝、夫子諧其順、娣姒尚其和、宗族稱其欽、媵侍懷其仁、家人上下莫不宜之。事奉舅姑、盡禮事繼姑益、孝謹內外稱賢。事姑盡婦道、教子有法度、內外稱其賢。事舅姑盡禮、閨門肅雍內外親族稱以為法。
黃庭堅『黃文外』卷八  卷九	單卿夫人張氏墓誌銘 趙夫人墓誌銘 陳夫人墓誌銘 永安縣君金氏墓誌銘 黃氏夫人墓銘	事嚴姑如事繼母。 夙夜舅姑之所恭順。 不及皇姑事長姒如姑。 事其姑如事其母、梁君(夫)如賓客處。 事其姑樂夫人、樂夫人學問明智常稱、夫人事我如我事先姑也。

慕容彥逢『摛文堂集』 卷十四	故仁和縣君王氏墓誌銘 華陰侯妻杜氏墓誌銘 故和義郡君胡氏墓誌銘 故仙源郡君鄭氏墓誌銘 宗室東頭供奉官夫人方氏墓誌銘 單氏夫人墓誌銘	事姑如事其親。 事舅姑以孝、率媵妾、以正訓子孫。 事舅姑以孝、相夫以義、訓子以學、媵妾以慈。 事舅姑盡禮。 事舅姑盡禮、順承其夫。 事其姑裴夫人盡婦道。
謝逸『溪堂集』 卷九	張夫人墓誌銘  吳夫人墓誌銘 彭夫人墓誌銘 江夫人墓誌銘	事舅姑甚孝友、其夫甚敬以和、奉祭祀甚嚴、睦姻族甚有恩。 逮事祖姑及姑。 事舅姑、睦娣姒、撫媵妾和、有禮待內外宗族。 事舅姑奉。
鄒浩『道鄉集』 卷三十七	夫人嚴氏墓誌銘 蓬萊縣君狄氏墓誌銘  高平縣太君范氏墓誌銘	事其伯舅如其舅、撫其前子如其子。 能使舅姑與其孝、娣姒安其和、急難得其施、宗黨稱其賢。 事舅姑、奉祭祀、治家、教子。
鄭獬『邱溪集』 卷二十一	萬年郡主趙氏墓誌銘	事姑以孝謹、娣姒稱其順、妾御撫以仁。
黃裳『演山集』 卷三十四	夫人王氏墓誌銘 夫人葉氏墓誌銘	夫人華于容、介于性、孝于姑、順于夫。 不逮事舅姑為恨幸、而有女公可事矣。
趙抃『趙清獻公集』 卷十	徐夫人墓表銘	盡婦道事舅姑以孝、終身人不見其懈。
張方平『樂全集』 卷三十八	宗室右武衛大將軍黃州刺史令稼夫人 壽昌縣君李氏墓誌銘 右監門衛大將軍仲炎夫人秀撈縣君 李氏墓誌銘 左驍衛大將軍世謐夫人仁壽縣君 安氏墓誌銘 宗室右監門率府副率仲甫夫人 魏氏墓誌銘	事舅姑如父母、事其夫甚恭愿和順之。  事舅姑、謹恪嚴翼如出寒素無怠弛之意。  仁壽奉姑清河郡夫人張氏。婦道甚備供養謹恪未嘗不適其意。 事父母孝事舅姑、順事夫、有禮遇娣姒、謙以和撫下、恩意甚至生大族、
朱長文『樂圃餘藁』 卷十	宋故汝南郡夫人王氏墓誌銘	事舅姑、婉婉聽命不翅寒女。衛國太夫人常愛。
歐陽脩『歐陽文忠公集』卷三十六	萬壽縣君徐氏墓誌銘  長壽縣太君李氏墓誌銘 渤海縣太君高氏墓碣  長安郡太君廬氏墓誌銘	逮事舅姑、紉縫烹飪必、以身蚤暮寒暑飲食必以時姑亡哀毀得疾逾年。 逮事其舅姑。 夫人以孝力事其舅為賢婦。以柔順事其夫為賢妻。 以恭儉均一教育其子為賢母。 其舅姑老事之如其親、其歸寧於父母也。
歐陽脩『歐陽文忠公集』卷三十七	韓國公夫人太寧郡君慕容氏墓誌銘  漳南縣君張氏墓誌銘  胥氏夫人墓誌 楊氏夫人墓誌銘	承其夫以順、事其舅姑以禮、下其妾媵以仁、撫其子無嫡庶以均。 事其姑視日時早暮氣節之寒暑、飲食起居之當進與自否者不少懈。 事其姑不知為婦之勞。 事其姑以孝、而勤友其夫以義。
劉跂『學易集』 卷八	夫人張氏墓誌銘 席府君夫人杜氏墓誌銘	事舅姑盡禮、膳服溫清先意承志、夙夜不怠已。從夫有秩。

蔡襄『蔡忠惠』 卷四十	尹夫人墓誌銘	夫人治家事、夫人事姑勤謹不懈。
劉弇『龍雲集』 卷三十二	壽安縣君張氏墓誌銘	事其舅姑、而婦道之成。
楊時『龜山集』 卷三十一	楊氏墓誌銘	其事舅姑以孝聞、事其夫盡婦順。
王安石『臨川集』 卷九十 卷九十九  卷一百	外祖母黃夫人墓表 揚州進士滿夫人楊氏墓誌銘 曾公夫人萬年太君黃氏墓誌銘  李君夫人盛氏墓誌銘 寧國縣太君樂氏墓誌銘 仁壽縣君楊氏墓誌銘 仙遊縣太君羅氏墓誌銘 曾公夫人吳氏墓誌銘 樂安郡君翟氏墓誌銘 同安郡君劉氏墓誌銘 仁壽縣太君徐氏墓誌銘 鄭公夫人李氏墓誌銘	安事舅姑夫、撫子皆順適。 事其舅愈勞而不懈、承其夫以順、勵其子以善。 不及舅水部府君之養、以事永安之孝事姑陳留縣君。 事舅姑以孝聞。 及歸陳氏、不逮養皇姑矣。 舅姑曰「吾婦之承我也。」夫曰「吾妻之助我也。」 太君有賢行、事皇姑蕭氏順焉。 事皇姑萬壽太君。 舅姑稱之如父母、處娣姒能和以有禮。 舅姑又稱其孝、能相其夫以順、又能畜其婦子以慈。事其舅、而順以相其君。 禮事皇姑稱孝、內諧外附上下裕如。
謝過『謝幼槃』 卷十	朱夫人墓誌銘	事姑孝謹、其從夫以敬、其訓子以嚴、其友娣姒以和、其御童僕以恩。
孫覲『鴻慶集』 卷四十 卷四十一	永嘉郡太君劉氏墓誌銘 宋故何碩人孫氏墓表	夫人事舅姑、相其夫、為賢婦矣。 事尊嫜友娣姒、以相其夫、而畜養其子。
蘇頌『蘇魏公文集』 卷六十二	壽昌太君陳氏墓誌銘 仁壽郡太君陳氏墓誌銘 福清陳氏墓誌銘	逮事其舅衛尉卿能盡孝敬人有稱之。 事姑章敬以順、接娣姒和、以莊待宗戚仁以睦。 事姑能適、其志周旋族屬上下皆得其歡心。
韋驥『錢塘集』 卷十六	崇德縣君朱氏墓誌銘 永壽縣君史氏墓誌銘	事舅姑下叶、娣姒孳孳不懈。 奉舅姑敬、長撫幼避厚處蒲閨門之內一無閒言。
程頤『伊川文集』 卷八	上谷郡君家傳(侯氏)	事舅姑以孝謹。
羅振玉撰『芒洛冢墓遺文』下	宋故族姬趙氏墓誌銘 孺人王氏墓誌銘  故隴西郡夫人董氏墓誌銘	奉舅姑無遺、供祭祀必謹。 事舅姑初喪姑張氏、其後舅繼室以王氏。夫人侍之禮愈到厚意益加勤。 善侍舅姑 三從規範。
闕名撰『江蘇金石志』 金石十	宋故朱君夫人范氏墓誌銘	事舅姑推所、以遇姑姊妹者遇娣姒。
張仲炘『湖北金石志』 金石十	宋通直郎李公夫人時氏墓誌銘	事舅姑如事親、舅沒姑老益勤婦道、姑悅而稱之「曰吾家之賢婦也。」
章惇『東都冢墓遺文』	趙仲伋夫人故彭城縣君劉氏墓誌	事姑以禮、而順愛捨其夫。
羅振玉『東都冢墓遺文上虞』	宋故尚書虞美部員外郎尹公夫人 福昌縣君陳氏墓誌	事舅姑盡孝謹飭不怠。

蕭稷『藝文志』 金石	宋故崇德縣太君段氏墓誌銘	奉姑益謹。
『光緒慈谿縣志』卷五十金石	宋方府君并夫人墓誌銘	祖妣病夫婦侍疾、衣不解帶。
鄭居中撰『民國鞏縣志』卷十七 金石志二	宋宗室士字妻蓬孫君王氏墓誌	事孀姑盡婦道。

南宋 150 人

撰者 文集	墓誌銘	事舅姑
周南『山房集』 卷五	永國夫人何氏行狀	盡于舅姑儻可贖吾之不孝於終身乎。
文天祥『文山集』 卷十六 卷十八	王推官仇氏墓誌銘 齊魏兩國夫人行實	逮事姑兩世左右無違祭葬、以禮相夫子。 事舅姑盡孝、相夫子以儉勤。
李石『方舟集』 卷十七	蔡氏母葬墓誌	盡姑舅之孝、睦於其良為詩書之助。
陳溥良『止齋集』 卷四十八	陳子益母夫人墓銘(林氏)	逮事曾祖姑奉諸祖母以同居。
葉適『水心集』 卷十三 卷十四 卷二十 卷二十一 卷二十四	孟夫人墓誌銘(仲氏) 安人張氏墓誌銘 虞夫人墓誌銘 李宜人鄭氏墓誌銘 夫人王氏墓誌銘	信安郡王(舅)以恭儉律家、夫人尤勤苦敬順。 能順舅之嚴、敬姑之親、所謂婦人之常德也。 事外自舅姑叔季、內外姻戚皆言是嫂。 事舅姑無違、愛子不異庶嫡、遇妾媵尤有恩。 祖姑曹性剛嚴、姑鄭奉事莊慄不敢惰。 夫人助鄭旦暮上食飲、扶持左右。
陳著『本堂集』 卷九十二	江陰教授史君妻陸氏墓誌銘	姑太碩人在堂適所、則下氣怡聲以暢其敬、凡所服非手出不敢慢。
許月卿『先天集』 卷十	戴氏母墓誌銘(胡氏) 李太安人行狀	舅姑垂白髮堂上竭誠盡孝。 事姑如事母、事長姒如事其兄。
朱熹『朱熹集』 卷九十一  卷九十二  卷九十三  卷九十四	夫人呂氏墓誌銘 夫人徐氏墓誌銘 夫人虞氏墓誌銘  潘氏婦墓誌銘(王氏) 太孺人陳氏墓誌銘 宜人黃氏墓誌銘 尚書吏部員外郎朱君孺人祝氏壙記	事舅姑甚得其懽心。 夫人生柔順靜正、父母愛之、既歸、舅姑盡禮。 舅姑年皆甚高、禮法峻整、諸婦少得當其意者。獨夫人左右奉承、禮無違者。 事舅姑、舅姑亦愛之。處娣姒長幼之間、肅穆無間言。及嫁不逮事舅姑。 事舅姑夙夜唯謹、相其夫理。 逮事舅姑、孝謹篤至、有人所難能者。
陳造『江湖集』 卷三十五	安人曹氏墓誌銘	奉舅姑敬、以愛接姒姊穆。
眞德秀『西山文集』卷四十五	林夫人墓誌銘	既嫁舅姑亦先歿、則又喟然曰「吾不及生事吾舅姑矣。」
陳文蔚『克齋集』 卷十二	向夫人墓誌銘 鄭孺人墓誌銘	順奉舅姑謹、御妾媵寬、里巷姻戚皆稱其賢。 事姑友、於娣姒得其懽心不聞有間言。

樓鑰『攻媿集』 卷一百三 卷一百五	孺人俞氏墓誌銘 從妹樓夫人墓誌銘	嫁時舅姑已歿。恨不逮事。 仰奉其姑、謹相夫子。
周必大『周益文忠公集』 卷三十六 卷七十六	曾監酒母孺人劉氏墓誌銘 太恭人司徒氏墓誌銘 段夫人墓誌銘 汀州田使君妻宜人尚氏壙誌	事舅姑孝、待宗族敬、內外交譽間言弗聞。 不逮事舅姑傾資送以贍夫族鄉人義之初該德壽典恩。 姑太安人王氏壽百年矣。夫人與饋不懈歲時。 事姑太夫人與事母同而加敬焉。
度正『性善堂稿』 卷十四	故太原王夫人墓誌銘 郭安人墓誌銘 張孺人墓誌銘	夫人奉養舅姑性嚴毅。夫人左右承順卒無間言。 事舅姑、歲時祭祀特致其謹。 事舅姑、輯睦二姒。內外宗族率皆宜之。
林之奇『拙齋文集』 卷十八	孺人陳氏墓誌銘	其事舅姑順聽、而義撫兒女慈愛、 而嚴處妯娌之間無言。
曹彥約『昌谷集』 卷十五  卷十八  卷二十	長女如範葬記(曹氏) 次女如璧葬記(曹氏) 黃氏夫人墓誌銘 姪女曹氏墓誌銘 梅坡孺人曹氏墓誌銘  王氏壙銘(撰者の妾→妻)	事舅姑、和叔妹 事姑如母、敬夫如賓、和上下如兄弟姊妹。 有婦言婦德、得舅姑意。 逮事舅姑、和易恭敬居喪嚴整內外言限。 以婦道事秦氏(姑)終其養、以妻道事先生畢其敬、 以母道撫其子。 逮事太令人(姑)得歡心、見其誕男子甚喜。
呂祖謙『東萊外集』 卷五	王自得祖母傅氏墓誌銘	姑余夫人、律閨內甚嚴、諸婦屏氣側足候伺顏色、 少當其意者獨。夫人事之順焉。
曹勛『松隱集』 卷三十六	永嘉郡太夫人唐氏墓銘	事舅姑以恭奉、夫以禮、娣姒婣睦稱爲孝婦。
張栻『南軒集』 卷四十一	宣人王氏墓誌銘(繼室)	事姑以恭肅、聞相德慶君(夫)、周睦內外有恩意。
韓元吉『南澗乙稿』 卷二十二	榮國太夫人上官氏墓誌銘	夫人不逮事其舅姑遇歲時薦。
葉夢得『建康集』 卷八	趙夫人慕容氏誌銘	事二姑悉得其歡心、閨門肅然。
劉克莊『後村集』 卷三十八  卷三十九  卷四十  卷四十一  卷一百五十三 卷一百五十四 卷一百五十六 卷一百五十八  卷一百六十 卷一百六十一	李節婦墓誌銘 周夫人墓誌銘 趙孺人墓誌銘 王孺人墓誌銘  陳孺人墓誌銘  劉君方氏壙銘 張碩人墓誌銘 方安人墓誌銘 趙安人墓誌銘 韓母李氏墓誌銘 趙孺人墓誌銘 弟婦方宜人墓誌銘 趙孺人墓誌銘 弟婦林氏墓誌銘 夫人宗氏墓誌銘	事姑、誨子皆應禮法。 逮事祖姑皇舅、尊者稱其孝其壯也。 事夫順、處妯娌和、待妾媵嚴、而慈自以不逮舅姑奉。 事夫之重親尤謹、以柔順處族戚、以慈恕待妾媵、 以謹約持門戶。 事舅尤孝、辭氣容色之間、寒暑饑飽之節、左右體 察毫髮無違。 奉姑謹、蚤起晏眠因得羸疾、孀居介潔不闢戶外。 事姑孝未嘗自逸也。坐立必侍傍、飲食必經手。 事夫敬、然不苟順也。 事皇舅、登八座臨、方面能以禮敬嬪。 安人事舅姑謹以孝。 事姑孝謹、每日吾何以報婦、夫耽書外不屑羣碎。 孺人事舅姑謹、從夫順、訓子嚴、處族戚和。 不逮事舅、姑魏國四十四年尤孝勤。 婦禮恭、舅姑稱其孝、閨範肅族戚欽其賢。 奉姑謹左右、娛侍服勤終身。

卷一百六十三	程孺人墓誌銘 陳處士黃夫人墓誌銘	奉姑謹、事叔妹姑如。 事舅尤孝、敬夫如賓。
張守『毘陵集』 卷十三	太孺人時氏墓誌銘	奉姑周氏恭。
胡銓『澹庵文集』 卷五 卷三十一	先兄民師配安人陳氏墓誌銘	事姑時舅已不逮。事獨姑歐陽夫人、 在夫人文忠族。
	孺人曾氏行狀	姑張氏年高多疾、孺人朝夕膳藥不解、 姑以百歲特封孺人。
劉一止『苕溪集』 卷五十 卷五十一	宋故永嘉郡夫人高氏墓誌銘 徐氏安人墓誌銘	不逮事姑為恨、舅年高奉食飲藥物不少懈。 事舅如父、事姑如母。相夫必以義。
范浚『香溪集』 卷二十二	右通直郎范公夫人章氏合祔誌	事謹奉舅姑孝。
黃榦『勉齋集』 卷三十七 卷三十八	太安人林氏行狀 吳氏夫人墓誌銘	事舅姑以孝謹。 逮事祖姑曾氏、曾氏晚多病、舅及姑高氏奉事、 起居蚤夜不少懈。
趙汝騰『庸齋集』 卷六	朱夫人墓誌銘	事姑文安夫人盡孝。
王十朋『梅溪集』 卷二十九	令人壙誌	逮事舅姑以孝稱、從其夫。
姚勉『雪坡集』 卷五十	譚氏孺人墓誌銘	舅姑尤恪謹、雞初鳴冠帔問起居、三飯奉珍鮮 侍、立食既乃敢去。
包恢『敝帚稿略』 卷六	汪氏墓誌銘	事舅姑得其歡心、舅先大故、事姑尤加恭謹。
胡寅『斐然集』 卷二十六	亡室張氏墓誌銘 吳國太夫人王氏墓誌銘 太孺人李氏墓誌銘	事舅姑未嘗被訶譴、事寅無違言顏色。 事舅姑執婦道、待少師(夫)謹妻禮。 太孺人事姑十六年如一日、不以久倦。
陸游『渭南文集』 卷三十二 卷三十五 卷三十六	費夫人墓誌銘 夫人孫氏墓誌銘 夫人陳氏墓誌銘 留夫人墓誌銘	夫人篤孝君姑以成。 逮事舅姑左右。 事舅姑以孝聞。 舅姑御家嚴、夫人左右無違。
方逢辰『蛟峯集』 卷七	有宋方公翠坡先生方母安人潘氏 墓誌	事舅姑義、處姻族無違、撫育諸男女恩愛如一。
周孚『蠹齋鉛編』 卷二十八	徐氏墓誌銘	常恨不及事舅姑。
王之望『漢濱集』 卷十五	故萬氏夫人墓誌銘	事舅姑以孝謹聞。
劉宰『漫塘集』 卷二十九	故宗氏安人墓誌銘 故澹軒先生艾公及其妻李氏墓誌銘	孝事舅姑、以順其夫。 孝以事舅姑、和以處娣姒、順以事其夫、 嚴以教其子。
	故安人陶氏墓誌銘 故宜人陳氏墓誌銘	事其姑而姑悅。 逮事皇姑、事雖細必親膳服常先意。
馬廷鸞『碧梧芳 集』 卷十九	咸寧郡段太夫人墓誌	不逮事君舅事君姑如事母。

林亦之『網山集』 卷四	孺人鄭氏墓誌	事舅姑也。事夫也。其恭其古者所謂良婦慈母也。
袁甫『蒙齋集』 卷十七 卷十八	甘氏夫人墓誌銘 宜人趙氏壙誌	事尊嫜盡禮、相夫子以義、雖處約其志樂也。 睦娣姒無間言。撫前室子。 魏國夫人(姑)不逮事、正獻公(舅)孝謹。
楊萬里『誠齋集』 卷一百二十六  卷一百二十九  卷一百三十 卷一百三十一	曾正民妻劉氏墓誌銘 林夫人朱氏墓誌銘  夫人歐陽氏墓誌銘  夫人趙氏墓誌銘 夫人李氏墓誌銘 安人王氏墓誌銘 節婦劉氏墓誌銘 太宜人郎氏墓誌銘	逮事零陵公執婦道唯謹、其姑劉氏今年九十矣。 事舅姑如事父母、逮事祖姑陳夫人春秋高齒落。 陳夫人忘勞。姑馮夫人性勤以嚴。夫人必曰「人有一母、吾有二母。」 姑太孺人蕭氏年八十、每夫人上食侍立不去。 太孺人每言及必流涕曰「非我婦也。我女也。」 事舅姑夙夜寅恭。 事舅姑如父母、笑言不聞。 安人不逮事姑。 奉其舅姑、至於潔蠲蘋蘩經紀生業不懈。 事姑孝、姑嘗寢疾適免乳且哺。
張九成『橫浦集』 卷二十	龔夫人墓誌銘	姑及祖姑在堂。夫人朝夕侍膳禮無違者。
何夢桂『潛齋集』 卷十	宋夫人何氏墓誌銘	事舅姑孝奉、宗祜(夫)敬。
曾手『緣督集』 卷二十	劉氏夫人墓誌銘	事舅姑微缺禮見謂蹈婦道。
史堯弼『蓮峯集』 卷十	楊君夫人彭氏墓誌銘	舅姑春秋高多疾、悉夫人夙夜治湯劑進飲食。
王庭珪『廬溪集』 卷四十二  卷四十三  卷四十四  卷四十五  卷四十六	故令人劉氏墓誌銘 故王氏墓誌銘  故段夫人墓誌銘 故彭夫人墓誌銘 故王氏夫人墓誌銘  故孔氏夫人墓誌銘  故李夫人墓誌銘	事舅姑與祖母太孺人唯謹視、兄嫂如舅。 姑窮居二十有八年、病風瘍凡飲食臥起必須人、而夫人朝夕候伺靡不順適其意。 孝謹事其姑稱賢婦、以賓禮遇其夫為賢妻。 事舅姑如事其親。 逮事舅姑、內外歡忻無一異言。舅姑稱之未嘗有一日不滿之色。又能以順相其夫、處其家以勤儉。 祖姑老至百歲封孺人。夫人事之積年不見有苟之容。事姑尤謹。 奉舅姑如事其父母、時不少異也。舅既亡姑老矣。
陳耆卿『筓窗集』 卷八	祝夫人壙誌	入于門不逮事舅獨喜有姑在、蚤莫迎順不以一髮傷、其懷衆謂陳氏有婦矣。
元好問『遺山集』 卷二十五	南陽縣太君墓誌銘(李氏)	夫人事姑孝、拊前夫人子如所生。識者謂「夫人有鳴鳩均一之義焉。」
林希逸『廬齋集』 卷二十一 卷二十二	林孺人墓誌銘 孫夫人墓誌銘	孺人姑盡孝、於賓親盡禮、於鄰里上下盡情、人無親疎遠近皆敬譽之。 養其姑極盡孝、去飾甘菲朝晡應酬不少懈苟完矣。
陳亮『龍川集』 卷三十	劉夫人陳氏墓誌銘 何夫人杜氏墓誌銘	事其舅姑以及其夫者宜其皆可觀。 吾母早奉其姑勤甚。
沈與求『龜谿集』 卷十二	朱夫人墓誌銘	逮事其姑能、先順意適卒以孝婦稱於族黨之間。

劉才邵『樹溪士集』 卷十二 劉才邵『樹溪士集』 卷十二	曾氏墓誌銘 太碩人薛氏墓誌銘 彭氏太孺人墓誌銘 羅無競妻朱氏夫人墓誌銘	逮事厥姑承順無違。 事舅姑以孝、承接上下以禮 夫人以孝事其舅姑、以順相其君子、以慈宜其家人。 逮事祖姑、祖姑垂年苦風眩。夫人日相其姑時、其藥餌起居惟謹、祖姑且死。謂其姑曰「朱新婦柔懿莊靜甚似汝汝善視之平居服飾獨喜簡素。」
孫應時『燭湖集』 卷十二	宜人史氏墓誌銘 戴夫人墓誌銘	事舅姑如事其父母。 奉舅姑惟謹姑其愛之。
孫觀『鴻慶居文集』 卷四十	宋故太淑人劉氏墓誌銘  宋故孫夫人強氏墓誌銘 恭人楊氏墓誌銘	奉尊嫜、相其夫、教其子、賓接內外宗姻、慈哀所使為婦為母皆盡其道。 事舅姑、宣教公(舅)太安人蔡氏(姑)能致其孝。 事舅姑、調酸醎之適酌斟寒燠燥濕之候必盡、其方相其夫得輔佐。
楊簡『慈湖書續』 卷十九	孺人蔣氏墓誌銘	孺人敬事舅姑。
洪适『盤洲文集』 卷七十六	朱安人墓銘	夫人始執箕帚、逮事祖姑以及其姑。
曾手『綠督集』 卷二十五	鍾氏墓誌銘	歸盡婦道、次盡妻道、次盡妯娌道、次盡母道。
趙善括『應齋著』 卷四	吳隱君夫人萬氏墓誌銘	事隱君(夫)父母惟謹油然恭順。
舒璘『舒文靖集』 卷上	竺碩夫妻舒氏壙誌	事舅姑婉、而恭遇長幼畢、而睦相君子慎、而勤嫻親。
徐經孫『矩山稿』 卷五	徐夫人揭氏墓誌銘	養舅姑、相夫子、無遺德其處女諸婦間始終無間言。
吳泳『鶴林集』 卷三十五	盛宜人墓誌銘 吳令人墓誌銘	事舅姑唯謹服非手出。 不逮事舅姑為恨故。
方大琮『鐵菴集』 卷三十五	妣太安人林氏墓誌 李母孺人霍氏墓誌銘  孺人顧氏壙誌	事姑太孺人鄭氏、益以孝謹。 祖妣(姑)性嚴重、侍側必得其懽容乃退、疾亟刲股療焉。蓋其孝篤矣。 事姑鄭安人謹、遇妯娌和。
魏了翁『鶴山集』 卷七十三 卷八十 卷八十七	顧夫人墓誌銘 於夫人墓誌銘 太令人程氏墓誌銘	事大母軒氏 事舅姑敬共夙夜。 太令人不逮事舅、而執喪祭奉、姑章盡禮。
陳宓『龍圖集』 卷二十一	吳氏夫人墓誌銘 王氏夫人墓誌銘 魏國太夫人聶氏行述	夫人事舅姑不懈。 事舅崇道公盡婦道以孝稱、敬夫如賓。 事姑冀國夫人時其飲食寒溫先意承志。
陸增祥『八瓊金』 卷一百十九	周君錫妻鄭氏壙志	事舅姑執禮不懈。
黃瑞『台州金錄』 台錄七	夫人周氏墓誌銘 宋故安人戴氏壙誌	李君(夫)相敬如賓、事舅姑以禮。 奉舅姑惟孝。
清·李遇孫『蒼金石志』 卷六	碩人郭氏墓誌銘	事舅姑如事父母。

嘉善戴咸弼鼈輯 『東甌金石志』 卷六	楚國太夫人周氏墓誌銘	其事姑、姑晚多病、夫人躬親藥餌雖祈寒隆暑昕夕侍側未嘗懈倦宗族稱之。
民国福建金石志 卷十一	宋故昭武戶曹潘公孺人劉氏墓誌銘	孝事舅姑如其父母。

別表 1 4 近親者が記した墓誌銘（北宋 54 人、南宋 76 人）

北宋 妻 19 人			
1	丹陽集	葛勝仲(1144)	妻碩人張氏墓誌銘(49 歳 1122)
2	元豐類藁	曾 鞏(1083)	亡妻宜興縣君文柔晁氏墓誌銘(26 歳 1062)
3	傳家集	司馬光(1086)	叙清河郡君(張氏 60 歳 1082)元豐六年(1083)作
4	安陽集	韓 琦 (1075)	録夫人崔氏事迹與崔殿丞請為行狀(不明)
5	姑溪集	李之儀(不明)	姑溪居士妻胡氏文柔墓誌銘(58 歳 1110)
6	東坡集	蘇 軾 (1101)	亡妻王氏墓誌銘(27 歳 1065)
7	東堂集	毛 滂(不明)	趙夫人墓誌銘(28 歳 1089)
8	東塘集	袁説友(1204)	惠夫人墓銘(31 歳 1175)
9	盱江集	李 觀(1059)	亡室墓誌(陳氏 33 歳 葬 1047)
10	晁衍勛集	晁補之(1110)	錢塘縣君葉氏墓誌銘(47 歳 1080)
11	山谷外集	黃庭堅 (1105)	黃氏二室墓誌銘(孫氏 20 歳 不明)
12			(謝氏 26 歳 不明)
13	横塘集	許景衡(1128)	陳孺人述(34 歳 1108)
14	涵水集	李 復(不明)	恭人范氏墓誌銘(57 歳 1061)
15	龜山集	楊 時(1135)	張氏墓誌銘(42 歳 1088)
16	蘇學士集	蘇舜欽(1048)	亡妻鄭氏墓誌銘(不明 1035)
17	文忠集	歐陽脩(1072)	南陽縣君謝氏墓誌銘(37 歳 1044)
		梅堯臣(夫 1060)	梅堯臣が亡妻を語る言葉を歐陽脩が記す。
18	鞏縣志	舒雅(1009)	宋楚王故夫人馮氏墓誌(32 歳 996)
19	浮溪集	汪藻(1154)	周夫人墓誌銘(1119) 夫・張大夫(不明)
母 8 人			
20	文恭集	胡宿(1067)	李太夫人行狀(75 歳 1043)
21	安陽集	韓琦(1075)	太夫人胡氏墓誌銘(63 歳 1030)
22	盱江集	李觀(1059)	先夫人墓誌(鄭氏 69 歳 1051)
23	後山集	陳師道(1101)	先夫人行狀(龐氏 77 歳 1091)
24	陶山集	陸佃(不明)	邊氏夫人行狀(69 歳 1093)
25	龍雲集	劉弇(1099)	周夫人墓誌銘(68 歳 1088)
26	西溪集	沈遘 陳確書	方夫人墓誌銘(70 歳 1056)
27	傳家集	司馬光(1086)	程夫人墓誌銘(48 歳 1057)
		蘇軾( 1101)	蘇軾、蘇轍兄弟が母の行狀を記した書面により
		蘇轍( 1112)	司馬光が記す。
娘 1 人			
28	盱江集	李觀(1059)	亡女墓銘(李氏 26 歳 不明)
姉妹 4 人			
29	元豐類藁	曾鞏(1083)	仙源縣君曾氏墓誌銘(31 歳 1074)
30	欒城集	蘇轍(1112)	亡姉王夫人墓誌銘(蘇氏 75 歳 1101)
31	蘇魏公文集	蘇頌(1101)	萬壽縣令張君夫人蘇氏墓誌銘(42 歳 1072)
32	『西臺集』	畢仲游(1121)	畢氏墓誌銘(18 歳 1073)

母・叔母 5人			
33	河東集	柳開(1000)	穆夫人墓誌銘(72歳 不明)
34	山谷外集	黃庭堅(1105)	章夫人墓誌銘(67歳 1082)
35	山谷外集	黃庭堅(1105)	叔母章夫人墓誌銘(62歳 不明)
36	龜山集	楊時(1135)	俞氏墓誌銘(72歳 1100)
37	濟南集	李廌(1059~1109)	李母王氏墓誌銘(68歳 1091)
姑 3人			
38	盱江集	李觀(1059)	鄭助教母陳氏墓銘(65歳 1053)
39	高峯集	廖剛(1143)	夫人廖氏墓表(64歳 1069)
40	灌園集	呂南公(1086)	傅夫人墓誌銘(82歳 1077)

姪 嫁 嫂 4人			
41	安陽集	韓琦(1075)	(姪)壽安縣君王氏墓誌銘(39 歳 1069)
42			(嫁)東平縣君呂氏墓誌銘(27 歳 1065)
43			(嫂)安康郡太君陳氏墓誌銘(68 歳 1070)
44	伊川集	程頤(1085)	孝女程氏墓誌(25 歳 1061 程顥の女)
祖母・外祖母 3人			
45	臨川文集	王安石(1086)	外祖母黃夫人墓表(72 歳 1041)
46	郎溪集	鄭獬(1072)	職方員外郎中鮑公夫人陳氏墓誌銘(1056)
47	龜山集	楊時(1135)	楊母朱氏墓誌銘(83 歳 1077)
乳母 保母 妾 3人			
48	東坡集	蘇軾(1101)	乳母任氏墓誌銘(72 歳 1080)
49			保母楊氏墓誌銘(68 歳 1077)
50			妾朝雲墓誌銘(王氏 34 歳 1096)
未婚 娘 4人			
51	臨川文集	王安石(1086)	鄴女墓誌銘(2 歳 1047)
52	二程文集	程顥(1085)	澶娘墓誌銘(7 歳 1077)
53	眉山文集	唐庚(1120)	船娘銘(2 歳 1116)
54	元豐類藁	曾鞏(1083)	二女墓誌銘(3 歳 1061)

南宋 妻 29 人			
1	止齋集	陳傅良(1203)	令人張氏墳誌(50 歲 1195)
2	水心集	葉適(1223)	高令人墓誌銘(52 歲 1211)
3	水心集	葉適 王植(夫)	莊夫人墓誌銘(不明 1206)
4	水心集	葉適 應懋之(夫)	夫人林氏墓誌銘(42 歲 1205)
5	本堂集	陳著(不明)	前妻童氏墓表(37 歲 1252)
6	江湖集	陳造(1203)	安人張氏墓誌銘(67 歲 1198)
7	周益國	周必大(1204)	益國夫人墓誌銘(69 歲 1203)
8	拙軒集	金王寂(不明)	清河張氏夫人墓誌銘(35 歲 1166)
9	昌谷集	曹彥約(1228)	(妾~妻)王氏墳銘(55 歲 1222)
10	東萊集	呂祖謙(1181)	祔芮氏誌(繼室 17 歲 1162)
11	東萊集	呂祖謙(1181)	祔韓氏誌(繼室 27 歲 1171)
12	屏山集	劉子翬(1147)	陸氏孺人墓表(24 歲 1131)
13	後村集	劉克莊(1269)	亡室墓誌銘(林氏 45 歲 1228)
14	後村集	劉克莊(1269)	(繼室)山甫生母墓誌銘(林氏 55 歲 1262)
15	相山集	王之道(1169)	孫宜人墓誌(孫氏 38 歲 1130)
16	浮山集	仲并(不明)	夫人陳氏墓銘(20 歲 1133)
17	梅溪集	王十朋(1171)	令人墳誌(賈氏 55 歲 1168)
18	雪坡集	姚勉(1216)	梅莊夫人墓誌銘(鄒氏 不明 1257)
19	斐然集	胡寅(1156)	亡室張氏墓誌銘(30 歲 1137)
20	渭南集	陸游(1210)	令人王氏墳記(71 歲 1197)
21	絜齋集	袁燮(1224)	夫人邊氏墳誌(不明 1203)
22	蚊峯集	方逢辰(1291)	恭人邵氏墓誌銘(34 歲 1256)
23	漫塘集	劉幸(不明)	前室安人陶氏墳銘(24 歲 1170)
24			繼室安人梁氏墓誌(50 歲 1219)
25	蒙齋集	袁甫(不明)	宜人趙氏墳誌(59 歲 1235)
26	盤州集	洪适(1184)	萊國墓銘(萊國夫人沈氏 61 歲 1179)
27	龍圖集	沈宓(1230)	前室安人梁氏葬葵山墳誌(34 歲 1202)
28	東萊集	呂祖謙(1181)	郭宜人墓誌銘(劉氏 64 歲 1170)
29	東塘集	袁說友(1204)	惠夫人墓銘(31 歲 1175)
母 13 人			
30	水心集	葉適(1223)	母杜氏墓誌銘(54 歲 1178)
31	水心集	葉適 次男・劉允迪	夫人錢氏墓誌銘(80 歲 1191)
32	文山集	文天祥(1286)	齊魏兩國夫人行實(曾氏 65 歲 1278)
33	周益國	周必大(1204)	先夫人王氏墓銘(37 歲 1138)
34	胡澹庵	胡銓(1180)	孺人曾氏行狀(77 歲 1154)
35	絜齋集	袁燮(1224)	太夫人戴氏墳誌(72 歲 1192)
36	蒙川稟	劉黻(不明)	母昌元郡太夫人解氏墓誌(84 歲 1274)
37	龍川集	陳亮(1194)	先妣黃氏夫人墓誌銘(37 歲 1173)
38	攻媿集	樓鑰(1213)	亡妣安康郡太夫人行狀(汪氏 50 歲 1138)
39	盤州集	洪适(1184)	慈瑩石表(郡夫人陳氏 95 歲 1204)
40	竹隱集	趙鼎臣・次男書	東邦憲母李氏墓誌銘(80 歲 不明)
41	後村集	劉克莊(1269)	魏國太夫人林氏墓誌銘(88 歲 1248)
42	先天集	許月卿()	李太安人行狀(60 歲 1255)

祖母	2 人		
43	胡澹庵	胡 銓(1180)	孺人張氏(不明 1126)
44	鶴山集	魏了翁(1237)	祖妣孺人高氏行狀(78 歲 1187)
姑	2 人		
45	北山集	鄭剛中(1154)	外姑墓誌銘(謝氏 63 歲 1136)
46	水心集	葉適(1223)	高夫人墓誌銘(翁氏 58 歲 1192)
叔祖母	1 人		
47	止齋集	陳傅良(1203)	叔祖母韓氏墓銘(75 歲 1180)
娘	4 人		
48	昌谷集	曹彥約(1228)	長女如範葬記(曹氏・柔則 27 歲 1217)
49			次女如璧葬記(曹氏・柔美 33 歲 1224)
50	胡澹庵	胡 銓(1180)	女懿墓誌銘(胡氏 不明 1161)
51	朱熹集	朱 熹(1200)	劉氏妹墓誌銘(朱氏、43 歲 1181)
姊妹	4 人		
52	文定集	汪慶辰(1176)	夫人汪氏墓誌銘(63 歲 1170)
53	周益國	周必大(1204)	亡姊尚氏夫人墓誌(47 歲 1166)
54	竹陰集	趙鼎臣(不明)	李妹十六安人墓誌銘(33 歲 不明)
55	後村集	劉克莊(1269)	仲妹墓誌銘(58 歲 1249)
伯母	叔母	從姑	嫂 姪 從妹 弟婦 乳母 17 人
56	周益國	周必大(1204)	伯母安人尚氏墓誌銘(55 歲 1152)
57	後村集	劉克莊(1269)	叔母方宜人坎誌(60 歲 1208)
58	後村集	劉克莊(1269)	弟婦方宜人墓誌銘(70 歲・1259)
59	昌谷集	曹彥約(1228)	姪女曹氏墓誌銘(不明)
60	攻媿集	樓 鑰(1213)	從妹樓夫人墓誌銘(64 歲 1200)
61	攻媿集	樓 鑰(1213)	(嫂)太孺人蔣氏墓誌銘(86 歲 1202)
62	胡澹庵	胡 銓(1180)	先兄民師配安人陳氏墓誌銘(不明 1177)
63	廬溪集	王庭珪(1172)	(弟婦)劉氏二婦墓誌銘(66 歲 1143)
64			(弟婦)劉氏二婦墓誌銘(59 歲 1144)
65	周益國	周必大(1204)	孟媼葬記(先夫人之乳母 75 歲 1152)
66	鶴山集	魏了翁(1237)	姪女端意墓誌銘(李氏 27 歲 1234)
67	屏山集	劉子翬(1147)	嫂熊氏令人墓表(36 歲 1130)
68	絜齋集	袁燮(1224)	太孺人范氏墓誌銘(80 歲 1222)
69			安人趙氏壙誌(50 歲 1213)
70	蛟峯文集	方逢辰(1291)	方公翠坡先生方母安人潘氏墓誌(34 歲 1256)
71	蒙川稟	劉 黻(不明)	從姑劉氏墓誌(63 歲 1270)
72	龍川集	陳亮(1194)	周夫人黃氏(47 歲 1179)
未婚	娘 3 人		
73	山房集	周南(1213)	長女壙銘(20 歲 1212)
74	後樂集	衛涇(不明)	安娘壙銘(12 歲 1208)
75	遺山集	元好問(不明)	孝女阿秀墓銘(13 歲 1232)
孫娘	1 人		
76	周益國	周必大(1204)	村女壙誌(13 歲 1194)

0001	汝南縣太君周氏夫人墓誌銘			北 1	976	開寶9年	48	15	北 1	943	4	4	0	正五品	縣太君					從六品	開門副使殿中少監				淮南西路無爲軍盧江縣	江南東路江寧府江寧縣	廣接路開	【守節·教育】府君仕爲開門副使殿中少監早卒。四子皆幼、夫人提攜教誨親授經書及其出就外任已通孝經論語矣。	徐鉉、吏部尚書(正二品)	『騎省集』卷三十
0002	宋故穆夫人墓誌銘	叔母		北 1	989	端拱2年	72		北 1	935									從八品	昭義軍節度推官					河北東路大名府館陶縣		【賞贊】我母萬年君僕、叔母擇堂下舉即上手低面聽奉我皇等誠告之。【守節】漢開運元年(944)、開(僕者)叔父諱承贊卒。叔母穆年二十有七、歲居四十五年、歲己丑(端拱2年989)五月歿。	柳開、善書大夫(正八品)	『河東集』卷十四	
0003	宋楚王故夫人馮氏墓誌	妻		北 1	996	至道2年	32		北 1	982					從一品	太師	從一品	開府儀同三司	從六品	朝散大夫					河北東路大名府魏縣	江南東路徽州歙縣	路開		舒雅、妻	『望溪志』卷十八
0004	故平昌郡君孟氏墓銘		○	北 1	1003	咸平6年	43		北 1	978				正四品	郡君				太祖					貞	京畿路開封府開封縣		【賞贊】郡君麗窈窕之容秉肅雍之德。太祖妃	徐鉉、尚書右僕射(從一品)	『騎省集』卷十七	
0005	劉氏太夫人天水縣太君趙氏墓碣銘			北 1	1005	景德2年	86	15	北 1	934	5	3	2	正五品	縣太君					正八品	太常博士	正八品	大理寺丞	永興軍路京兆府	前湖南路潭州長沙縣	路開	【賞贊】夫人既昇歸于劉氏。夫人躬機行以紹伏臘男且就字擇鄰居以示訓女符蓮人結袵襖以申戒鞠育勤苦越十五、而工部從斌贈書策名仕籍稽古幹事爲時聞人蓋劉氏之族、髮夫人而立也。	楊億、翰林學士(正三品)	『武夷新集』卷八	
0006	汝南縣君張氏墓誌銘			北 1	1006	景德3年	37	22	北 1	991	5	2	3	正五品	縣君				正八品	太僕寺丞	諱諱大夫	正五品	殿中丞虞部員外郎	京東東路齊州歷城縣	兩浙路睦安府餘姚縣	路開	【行狀】夫人入其門、茹素小家事、事其姑視日時早暮氣節之寒暑、飲食起居之當違與自否者不少懈。如此十五年如始、錄、凡楊氏之內宗與其外姻賓客之至者如壺家、退視其館空如惟恐人之知也。	歐陽脩、參知政事(正二品)	『文忠集』卷六十二	
0007	祇祕書省校書郎李君妻太原王氏墓誌銘			北 1	1010	祥符3年	正八品		北 1	####	2	2	0							正九品	秘書省校書郎(唐)				河東路太原府	河北西路磁州邯鄲縣	廣接路開		曾鞏、中書舍人(正四品)伯母	『寶鑑·中書舍人』(正四品)伯母
0008	旌德縣太君蔣氏墓誌銘			北 1	1014	祥符7年	43		北 1	989	3	1	2	正五品	縣太君		吳越錢忠懿王	正九品	右班殿直	從八品	太子誥宰府副宰							【賞贊】夫人性柔淑能和其屬人自順服擲珥凡已者常出於使而飾好施雖盡費不以為侈也。	曾鞏、中書舍人(正四品)	『元豐類聚』卷四十五
0009	皇姪康州團練使夫人呂氏墓誌銘		○	北 1	1014	祥符7年	19		北 1	1013						正一品	太子尚書令	正一品	丞相	從五品	團練使				京西北路河南府永安縣		【賞贊】夫人夙秉家訓幼勤女職動。	夏竦、宰相(正一品)	『文莊集』卷二十九	
0010	故順容邵氏墓誌銘		○	北 1	1016	祥符9年																		淮南東路揚州廣陵縣(南渡後)	京畿路開封府開封縣	路開	【賞贊】邵史邵氏生稟嘉慶慶賢秉和。	夏竦、宰相(正一品)	『文莊集』卷二十九	
0011	文正李公魏國太夫人符氏墓銘	繼室		北 1	1018	天禧2年	67	26	北 1	977	6	4	2	正一品	國太夫人							正三品	翰林學士右諫議大夫、朝奉大夫、贊善大夫	河北西路真定府真定縣	河北西路深州藁陽縣	路內	【賞贊】公先夫人即夫人之從祖母姊也。二姪好永溫繼室之賢百兩御婦連協宜家之美一受封武郡郡。	祖無擇、龍圖閣直學士(從三品)	『龍學文集』卷十五	
0012	唐故太原府君夫人彭城劉氏墓銘			北 1	1018	天禧2年	49		北 1	987							從二品	壽州節度使						京東西路徐州彭越縣			【賞贊】夫人麗窈窕之容。夫人雅性冥然自足慈和待物忝依節躬子孫以之。	徐鉉、尚書右僕射(從一品)	『騎省集』卷十七	
0013	故永安縣君李氏墓誌銘			北 1	1021	天禧5年	43	15	北 1	993	4	2	2	正五品	縣君			從一品	尚書令	從六品	朝散大夫尚書判部郎中				京西北路開德府濮陽縣	京西北路孟州河陽縣	路內	【賞贊】夫人昇仲兄今徐州丞相由進士貴數不中第賢少衰。夫人持蠶中物蠶內。陳公文甚驥俱、以名稱京師景德中同年取科第。【行狀】夫人未嘗以兄寵尊其夫族事先夫人能勸遵自持承顏下色無少怠。	尹洙、起居舍人(從六品)	『河南集』卷十四
0014	北海郡君王氏墓誌銘			北 1	1023	天聖元年	37	23	北 1	1009	7	4	3	正四品	郡君			從九品	本州助教	從七品	太常丞				京東東路澶州北海縣	京東東路湖州北海縣	路內	【賞贊】其母曰「自吾女進人吾之內事無所」。而吳氏之姑曰「自吾得此婦吾之內事不失時及其卒也」。太常君曰「舉吾里中有賢女者莫如王氏。於是娶其女弟(妹)以繼室」。而今夫人戒其家曰「凡吾吳氏之內事惟吾女兄之法、是守至今、而不散失夫人有賢」。子曰「蓋孝長文初學明經爲殿中丞、後舉賢良方正直言極諫、今爲翰林學士尚書兵部員外郎、知制誥」。【封号】夫人初用子思道追封福昌縣君、其後長文貴顯以夫人爲請天子曰「近臣吾所寵也。」有諫其可不從乃特追封夫人爲北海郡君。長文号泣頓首曰「臣妾不幸竊享厚祿不得及其母、而天子寵臣以此俾以報其親、臣妾其何以報。」當是時朝廷之士大夫吳氏、之鄉黨鄰里皆咨嗟歎息曰「吳氏有子矣。」	歐陽脩、參知政事(正二品)	『文忠集』卷三十六
0015	太原郡太君王氏墓誌	繼室		北 1	1027	天聖5年	44		北 1	1001	13	7	6	正四品	郡太君			正二品	太尉	從二品	太子少傅	正八品	太常博士太常寺太祝	河北東路大名府華縣	京畿路開封府開封縣	路內	【賞贊】夫人少爲族人所寵愛、關於大家著姓爲相宜文正公日以吾女性孝而淑賢必盡盡力於夫族且其節行易以顯亦足見吾家之法度焉。【封号】景祐(1034~1037)院妃追封太原郡太君	蘇轍、集賢校理	『蘇學士集』卷十五	
0016	唐故文水縣君王氏夫人墓銘			北 1	1028	天聖6年	50		北 1	996	2	1	1	正五品	縣君	60	左司郎中	從六品	禮部郎中					淮南西路無爲軍盧江縣			【賞贊】夫人麗窈窕之容秉明慧之性。	徐鉉、尚書右僕射(從一品)	『騎省集』卷十七	
0017	唐故隴西李氏夫人墓銘			北 1	1029		25		北 1	1022						60	左司郎中	正八品	太子洗馬					河東路太原府			【賞贊】夫人義主組之英發爲秀色鍾姻睦之氣凝爲淑性柔而有則愛而不驕。細組之工、翰墨之外、業自天性能必過人。	徐鉉、尚書右僕射(從一品)	『騎省集』卷十七	
0018	太夫人胡氏墓誌銘	母		北 1	1030	天聖8年	63		北 1	985	2	2	0	正二品	郡太夫人					從四品	太中大夫	正八品	著作佐郎	成都府路成都府成都縣	河北西路相州安陽縣	路開	【學節】夫人生而淑明柔德備書札尤精女工性慈仁。歸信釋氏歷觀經典深達義趣口能誦者十數經部門之內傳教誘人。【行狀】夫人移其孝、以安舅姑珍、其友和、雖疲勤身、以助宗事盡愛。【封号】夫人上奉仁壽(姑、仁壽郡太夫人)、下睦宗壻內外無間言、仁壽愛而禮之相待之意猶甚孺然。	韓琦、宰相(正一品)母	『安陽集』卷四十六	
0019	鄭公夫人李氏墓誌銘(汝南郡太君)			北 1	1031	天聖9年	32	17	北 1	1016	3	2	1	正四品	郡太君	正八品	縣令	從六品	尚書駕部郎中	從六品	尚書祠部郎中	正三品	翰林學士尚書兵部員外郎	兩浙路台州仙居縣	前湖北路安州安陸縣	路開	【行狀】夫人敏於德義、於禮事皇姑稱孝、內膳外附上下裕如。【封号】夫人追封汝南郡太君。	王安石、宰相(正一品)	『臨川文集』卷一百	
0020	隴西郡君李氏墓誌銘			北 1	1031	天聖9年	53		北 1	996	12	10	2	正四品	郡君							正三品	翰林學士他	京畿路開封府陳留縣	京畿路開封府咸平縣	路內	【教育】夫人始終如賓、授諸子孝經古詩方田之數、遵其就學皆未旁而習教誨諱。	宋祁、翰林學士(正三品)	『景文集』卷六十	
0021	故贈太師章公夫人追封鄧國太夫人張氏墓誌銘			北 1	1032	明道元年	正八品	15	北 1	####	1	1	0	正一品	國太夫人			正七品	水部員外郎	從一品	太師	從一品	中書門下平章事	京畿路開封府建安縣	江南西路洪州武寧縣	路開	【賞贊】生而殊姿幼、而明悟既早、而四德未結(結婚)、而六姻是武式章府君。【行狀】夫人移其孝、以安舅姑珍、其友和、雖疲勤身、以助宗事盡愛。	宋祁、翰林學士(正三品)	『景文集』卷六十	
0022	齊氏夫人墓誌銘			北 1	1033	明道2年	17	14	北 1	1030	1	0	1				正三品	翰林學士	正二品	參知政事				前湖南路潭州	江南西路吉州廬陵縣	路開	父·僊：天聖八年(1030)脩以慶文應生、舉中甲科。又明年齊公遂妻以女、公諱僊世爲潭州人、官至工部郎中翰林學士。公以文章取高第以清節爲時名臣爲人沈厚。周密其居家雖無必嚴不少。【行狀】夫人歸其夫不知其家之貴去傳傳、而事其姑不知爲婦之勞。	歐陽脩、參知政事(正二品)妻	『文忠集』卷六十二	



0048	李太夫人行狀	母		北 1	1043	慶曆3年	75		北 1	986	7	5	2		太夫人						正八品	太常博士集賢校理	兩浙路常州晉陵縣	兩浙路常州晉陵縣	輿內	【宣贊】外祖父亡、一子幼尙自帶丁孤苦中使之成就獨立。追之慈盡 內鳴一之愛。【追封】後封沂國太夫人。	胡宿吏部侍郎(從三品)	『文恭集』卷四十八		
0049	故朝國公主石記文	未婚	◎	北 1	1043	慶曆3年	2		北 2	1059								仁宗皇帝							慶歷2~3年(1042~43) 2歲卒 父·仁宗皇帝、母·馮氏(御侍)	張方平、參知政事(正二品)	『樂全集』卷三十八			
0050	宗室右監門率府副率仲甫夫人龔氏墓誌銘		○	北 1	1044	慶曆4年	21	17	北 1	1040	3	3	0		從二品	工部尚書	60	西上閣門使	從八品	右監門率府副率	從七品	右監門率府率	河北西路衛州汲縣	京西北路河南府永安縣	路間	【行狀】夫人姿儀秀靜、性寬惠淑、縈絲組曲盡工功、事父母孝事舅姑、順事夫、有禮溫婉似、謙以和無下、恩惠甚至大族、歸皇族不驕不忌亦婦道之難也。	張方平、參知政事(正二品)	『樂全集』卷三十八		
0051	南陽縣君謝氏墓誌銘	妻		北 1	1044	慶曆4年	37	20	北 1	1027	3	2	1		正五品	縣君		從三品	太子賓客			兩浙路臨安府富陽縣	江南東路宣州宣城縣	路間	慶曆四年秋、予友宛陵梅聖俞來自吳興、出其哭之詩而悲曰「吾妻謝氏亡矣、丐我以銘而葬焉」。予未暇作。居一歲中書七八至、未嘗不以謝氏銘為言。」且曰「吾妻故太子賓客諱濤之女、希深之妹也。希深父子為時聞人而世顯榮。謝氏生於盛族、年二十以婦春凡十七年而卒。卒之夕鏡以嫁時之衣甚矣。吾實可知也。然謝氏怡然處之其治家有常法其飲食器血雖不及、量侈而必精以備其衣無故新而漸澀雖初必潔以完所至官舍雖廣而廡陋而庭宇漸擇必盡以嚴其平居語言容止必怡以和吾聽於世久矣。其出而幸與賢士大夫遊而樂人則見吾妻之怡怡而忘其憂使吾不樂人則見吾妻之怡怡而忘其憂使吾不之助也。夫曰：吾嘗與士大夫語、謝氏多從戶屏竊聽之、聞則盡能而推其才能賢否、及時事之得失皆有條理。吾嘗與或自外辭、而歸必問曰「今日孰與歟、而樂乎、聞其賢者也。」則說否則曰「君所交皆一時賢雋豈其屈已下之耶惟以道德焉。故合者尤寡、今與是人歟而歡耶。」是歲南方早蝗見飛蝗、而歎曰「今西兵未解、天下重困、盜賊暴起、於江淮而天旱且蝗如此吾為婦人死、而得君葬我幸矣。」其所以能安居宜而不困者性謙明而智道理多此類。嗚呼其生也。追吾之貧而歿也。又無以厚焉。諱惟文字可以著其不朽且其平生尤知文章為可貴歟。而得此庶幾以慰其魂且墓。予悲此吾所以請銘於子之勤也。若此予忍不銘。夫人享年三十七用夫恩封京西南路鄧州南陽縣君、二男一女以某年七月七日卒。于高郵楊氏世壽宛陵以貧不能殯也。某年某月某日葬、于湖州之某鄉某原。銘曰「南唐斷谷兮京口之原山蒼水深兮土厚而堅居之可樂兮卜者。日然得肉雖土兮魂氣則天何必故鄉兮然為安。	歐陽脩、參知政事(正二品)	『文忠集』卷三十六			
0052	曾公夫人嘉年麻太君黃氏墓誌銘			北 1	1044	慶曆4年	92	22	北 1	974	7	4	3		正五品	麻太君		從六品	侍御史	諱諸大夫		江南東路江寧府江寧縣	江南西路建昌軍南豐縣	路間	【行狀】二十三歲歸曾氏。不及舅水部府君之養、以事永安之孝事姑四京開封府陳留縣君、以治父舅之家治夫家姑姑之黨稱其所以事姑之禮事夫與夫之黨尊嚴上然孺子慈標子之黨若子然每自戒不處白人善否有問之曰曠為正婦道也。【封号】凡受縣君封者四、蕭山、江夏、遼昌、豐陽、受縣太君封者二曾樞、萬年。	王安石、宰相(正一品)	『臨川文集』卷九十九			
0053	虞曹郎中妻故陳留縣君鄭氏墓誌銘			北 2	1045	慶曆5年	65	16	北 1	996	3	3	0		正五品	縣君	正四品	右千牛衛大將軍	正七品	兵部員外郎	從六品	虞曹郎中	永興軍路寧州定平縣	河北東路恩州清河縣	路間	【宣贊】鄭氏十六歲嫁陳處共上下參和内外德性之尚不妄喜慍以禮防持動道中節自南采路所謂能守法度者陳留君。【封号】陳留君、天禧初以郊禴之慶用朝服之例、封榮陽縣君、前後泛恩進封、管城、永樂、千乘、陳留凡五邑。	胡宿吏部侍郎(從三品)	『文恭集』卷三十八		
0054	新韓賈氏墓誌銘			北 2	1045	慶曆5年	20	20	北 2	1045					正五品					殿中丞		永興軍路同州韓城縣			【宣贊】鄭氏十六歲嫁陳處共上下參和内外德性之尚不妄喜慍以禮防持動道中節自南采路所謂能守法度者陳留君。【封号】陳留君、天禧初以郊禴之慶用朝服之例、封榮陽縣君、前後泛恩進封、管城、永樂、千乘、陳留凡五邑。	韓琦宰相(正一品)	『安陽集』卷四十六			
0055	德清縣君周氏墓誌銘			北 2	1045	慶曆5年	35		北 1	1028					正五品	縣君					著作佐郎	兩浙路湖州長興縣	兩浙路湖州長興縣	輿內	【宣贊】夫有數千亂而僕士好施。夫人常悉力助之以其故至不能自給、而夫人處之自若通子之非出者。	曾鞏：中書舍人事(正四品)	『元豐類集』卷四十五			
0056	渤海縣太君高氏墓碣			北 2	1046	若干年	若干				8	4	4		正五品	縣太君		從六品	兵部郎中	正七品	尚書兵部員外郎	兩浙路宣州宣城縣	兩浙路宣州宣城縣	路間	【行狀】夫人以孝力事其舅為賢婦。以柔順事其夫為賢妻。以恭儉均一教育其子為賢母。【封号】夫人初以夫封文安縣君、後以其子封渤海縣太君。		『文忠集』卷三十六			
0057	安德軍節度使允良第九女石記文	未婚	◎	北 2	1046	慶曆6年	1		北 2	1063							從二品	安德軍節度使								張方平、參知政事(正二品)	『樂全集』卷三十八			
0058	廣陵郡太君墓誌銘(高氏)	繼室		北 2	1046	慶曆6年	83		北 1	981	7	7	0		正四品	郡太君					持郎通判處州	京東東路青州益都縣	京東西路應天府虞城縣	路間	【學問】夫人幼敏悟聞人誦詩書一過耳盡記不忘。性恬泊不衣組練不喜茹葷。【教育】侍郎先娶張氏、有男女六人。夫人賁育教誘過、於己之所出生四子長曰明允、傳學有器識李即公也。節皆先夫人而亡。侍郎既沒。家益蕭索、夫人勞聞諸子之宜、至必解衣為真酒饋便延之從容以請當道義、故七子皆學道士、有聞於時公最初幼自能言。夫人日自課以書使讀四聲作詩賦十七歲舉進士。【封号】始封千乘縣君。既孤二十四年、公登甲科後三年為著作郎即集賢院、以恩封海縣太君。又十年公知制誥拜章乞以一題及封爵食邑換。夫人以郡封、詔從爵色之請自是遂為著例進封廣陵郡。時年八十一。	蘇軾欽、兼集校理	『蘇學士集』卷十五			
0059	右清道率府率世顯夫人高氏墓誌銘		○	北 2	1047	慶曆7年	17	16	北 2	1046	1	1	0				從二品	蒙城節度使	從五品	引進使團練使	從七品	右清道率府率	從八品	率府副率	淮南東路亳州蒙城縣	京西北路河南府永安縣	路間	【宣贊】夫人生而美秀、性且明慧、縈絲設管曲盡、工功絕兼音雅通其妙、溫靜莊肅天宣有裕。	張方平、參知政事(正二品)	『樂全集』卷三十八
0060	亡室墓誌(陳氏)	妻		北 2	1047	慶曆7年	33	16	北 1	1030											太子助教		兩浙路建昌軍南城縣	江南西路建昌軍南城縣	輿內	【宣贊】陳氏處之罔不掌言尤旦晨夕費過或已出斥樞機實之筆盡於勞易殆與威權等時復寒飢肌餓不可忍終無一言族親期會燕衣以往奉饋文殊愛之。【行狀】聞而不耻、事姑雖相性色惟先意之為吾母因愛之。	李觀太子助教(從九品)妻	『直隸集』卷三十		
0061	徐君處士妻周氏墓誌銘			北 2	1047	慶曆7年	49	21	北 1	1019	10	5	5								處士		江南西路洪州東海縣	淮南東路海州東海縣	路間	【教育】周氏幼慧乃使授古女賦七篇習之既。長歸徐氏事上撫下皆有可愛。處士(夫)少學不得志、而歸周氏恥之益欲教其子。凡賓客至其家、周氏必手為具盡意厚進之寒暑未嘗懈也。	黃庶、知康州	『伏櫓集』卷下		
0062	長壽縣太君李氏墓誌銘			北 2	1047	慶曆7年	86	22	北 1	983	6	3	3		正五品	縣太君		正八品	國子博士	從六品	尚書屯田郎中	正七品	職方員外郎太子中書太常博士	前湖南路	京畿路開封府開封縣	路間	【行狀】連事其舅姑、其舅姑嘗稱夫人以誠語歸曰「事我者當如此又以此誠」、其諸女曰「為人婦者當如此其為母也。」【封号】夫人年二十二歸于王氏、用夫封隆平縣君、後以其子徒封長壽縣太君。	歐陽脩、參知政事(正二品)	『文忠集』卷三十六	
0063	皇第八女追封韓國公主石記文	未婚	◎	北 2	1047	慶曆中												仁宗皇帝							慶歷中 卒年齡不明 父·仁宗皇帝	張方平、參知政事(正二品)	『樂全集』卷三十八			
0064	徐國太夫人墓誌銘(和氏)		○	北 2	1047	慶曆7年	56		北 1	1009	16	4	12		正一品	國太夫人	從一品	右僕射從一品太師從一品尚書令	正五品	殿中丞	從一品	侍中英國公	正四品	左千牛衛大將軍右監門大將軍親衛使	京畿路開封府陳留縣/汝儀	京西北路河南府永安縣	路間	【守節】丙辰歲(大中祥符9年=)英公(夫)損體(太夫人)。盡喪過哀常好文翰通曉音律是後不復治習稱未亡人誦貞業事奉金傳之教銘孤幼稚均養如一範居二十年上下無間言者。【封号】乾興初封汝南郡君、明道二年進 宣國夫人、慶曆丁亥孟春感疾。七月二十一日薨於寢。享年五十有六追封陳國太夫人。	張方平、參知政事(正二品)	『樂全集』卷三十八
0065	祁國公宗說第六女石記文	未婚	◎	北 2	1047	慶曆7年	11		北 2	1054							從二品	安遠軍節度使	正四品	左千牛衛大將軍							張方平、參知政事(正二品)	『樂全集』卷三十八		
0066	左龍武衛大將軍信州團練使安國公從古第四女道娘石記文	未婚	◎	北 2	1047	慶曆7年	15		北 2	1050											正三品	左龍武衛大將軍(唐)					張方平、參知政事(正二品)	『樂全集』卷三十八		
0067	鄧女墓誌銘(王氏)	未婚		北 2	1047	慶曆7年	2		北 2	1063											正一品	宰相(王安石)				鄧女者知鄧縣事臨川王某之女子也。吾女生惠與甚吾固疑其成之難也。噫	王安石、宰相(正一品)	『臨川文集』卷一百		

0068	趙宗旦妻賈氏墓誌銘		○	北2	1048	慶曆8年	35	16	北1	1029	10	7	3	正二品	郡夫人			正九品	左班殿直	正五品	密州觀察	正四品	右監門衛大將軍	京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	廣接路開	【學問】夫人柔明俊量備內外姻族恩意熾然。治家尤有法。喜讀書通論語孝經大義。【封号】嫁尋封河內郡君。享年三十五、上聞為觀視朝一日禮賜加享特贈永嘉郡夫人、非常比也。	王珪門下侍郎(從三品)	『華陽集』卷五十三
0069	宋故將仕郎守太子中舍宋公及夫人壽昌縣君江氏墓誌銘			北2	1048	慶曆8年	正八品		北1	####	5	3	2	正五品	縣君	正七品	兼方員外郎	從九品	汝州龍興縣主簿	正八品	太子中舍待仕郎(唐)	正七品	屯田員外郎	福建路建州建安縣	福建路建州建陽縣	州內	【賞贊】夫人善言語有識於家內外靡不規正而姻族信之。	李觀太學助教(從九品)	『直講集』卷三十
0070	安陸侯妻賈氏墓誌銘		○	北2	1048	慶曆8年	36		北1	1030					從五品	國祿使	正九品	左班殿直	從五品	密州團練使								王珪門下侍郎(從三品)	『華陽集』卷五十三
0071	東萊侯夫人平原郡夫人米氏墓誌銘		○	北2	1049	皇祐元年	51	17	北1	1015	9	6	3	正二品	郡夫人	從二品	節度使	正八品	內殿崇班	正四品	左武衛大將軍防禦使博州防禦使	正四品	太子右監門率府率				【守節】夫人將家子有賢。東萊(夫)之亡、諸孤尚幼、夫人治家訓子皆有法。【封号】夫人年十七選配東萊侯、累封平陽郡君。病卒享年五十有一、追封平原郡夫人。	歐陽脩、參知政事(正二品)	『文忠集』卷三十七
0072	宋故崇德縣太君段氏墓誌銘			北2	1049	皇祐元年	62		北1	1005	6	4	2	正五品	縣太君			正三品	集賢院學士	正八品	衛尉寺丞	從七品	供備庫副使溫州節度推官開州開江縣主簿	京西北路鄆州	京西北路鄆州	路內	【行狀】婦人年三十二奉姑益謹、訓子愈嚴、弗御鉛華及廢聲樂惟鹿衣蔬食一志佛事誦竺典(經典)。	蕭穆	『藝文志』金石
0073	皇姪故和州防禦使團陽侯夫人安福縣君王氏墓誌銘		○	北2	1050	皇祐2年	27	17	北1	1040	4	2	2	正五品	縣君	從四品	左武衛將軍	正八品	內殿承制	從五品	和州防禦使	從七品	太子右內率府率同副率				【賞贊】君生十有七歲。歸于宗室故和州防禦使團陽侯克周。既三年封安福縣君(20歲)。夫人能嫁以禮。	劉敞、集賢院學士	『公是集』卷五十二
0074	仙居縣太君魏氏墓誌銘			北2	1050	皇祐2年	64	19	北1	1005	2	2	0	正五品	縣太君	從五品	池州刺史	太子論德	正八品	廣德軍判官	從七品		兩浙路常州	兩浙路常州江陰縣	州內	【守節】太君年十九歸沈氏、歸十年生子而沈君以進士甲科為廣德軍判官以卒。【教育】太君親以詩經論語孝經教兩子。兩子就外學時數歲耳則已能誦此三經矣。其後子為進士。	王安石、宰相(正一品)	『臨川文集』卷九十九	
0075	皇姪右監門衛將軍克淳妻追封仙遊縣君李氏墓誌銘		○	北2	1051	皇祐3年	18	14	北2	1047	1	0	1	正五品	縣君	正一品	司徒	從五品	高州刺史皇城使	從四品	右監門衛將軍	從八品	太子右內率府率副率				【賞贊】婦性溫惠敏、于女工又善書頗知、為文其習若此非世俗及將家所為也。【封号】皇再從長弟之子右監門衛將軍克淳妻李氏、皇祐三年五月庚午感疾、享年十有八、以未及賜邑特詔特以仙遊縣君。	劉敞、集賢院學士	『公是集』卷五十二
0076	朱夫人墓誌銘			北2	1051	皇祐3年	43	19	北1	1027	3	3	0						居縣以長者	從九品	縣主簿	兩浙路臨安府錢塘縣	京西北路鄆州	路間	【賞贊】夫人性剛嚴、家人不敢妄戲笑、而夫人以孝謹。	鄭獬、翰林學士(正三品)	『鄭集』卷二十二		
0077	長沙縣君胡氏墓誌銘			北2	1051		75	27	北1	1003	3	2	1	正五品	縣君			從五品	福州閩、刺史	正八品	太子中舍	從七品	秘書丞縣令	福建路福州閩縣	湖南南路潭州長沙縣	路間	【賞贊】夫人之為母也。以禮義慈嚴教育其子、故其男也。有成而克嗣其世女也。【封号】用其子之恩追封前湖南路潭州長沙縣君。	歐陽脩、參知政事(正二品)	『文忠集』卷三十六
0078	先夫人墓誌(鄭氏)	母		北2	1051	皇祐3年	69		北1	1000	2	2	0						不仕				江西南西路建昌軍南城縣	江西南西路建昌軍南城縣	縣內	【守節】生觀十四年而先君沒。是時家破貧甚屏居、山中城百里水田裁二三畝其餘商陸、故家不食者。夫人剛正有計算寡僮僕、燒糠耕鋤與同其利、盡開農事夜女功斥責所降、以佐財用益月蓋未嘗獲教若鴻靈以免家誼而觀也。	李觀太學助教(從九品)(從九品)母	『直講集』卷三十	
0079	亡女墓誌	娘		北2	1051		26		北1	####								從九品	太學助教				江西南西路建昌軍南城縣	江西南西路建昌軍南城縣	縣內	李觀之長女嫁為陳汝翼妻年二十六死其父傷之不能已乃銘于墓曰「巧以慧兮慎言語之汝家兮畏如鼠人生皆樂汝備苦命之薄兮抑吾故汝來何為何以去墓無子孫久誰護後人知汝之女幸掩汝骨無汝露」	李觀太學助教(從九品)長女	『直講集』卷三十	
0080	延安郡主李氏墓誌銘		○	北2	1052	皇祐4年	43	17	北1	1026	4	3	1	正一品	郡主	從五品	刺史	從二品	節度使	60	開門使	正八品	光祿寺丞大理評事	秦鳳路鞏州隴西縣	京西北路河南府(洛陽)	路間	【賞贊】李氏、太宗皇帝之外孫、眞宗皇帝之甥齊國獻穆大長公主之女也。是歸綏內外悉稱主母。【封号】天聖五年封長壽縣主(17)、以歸今開門使忠州防禦使錢君錫氏。明道年進延安郡封(嫁後6年後)。	蔡肇、端明殿學士	『御明集』卷三十九
0081	上谷郡君家傳(侯氏)			北2	1052	皇祐4年	49	19	北1	1022	6	6	0					正八品	澶州丹徒縣令	從四品	太中大夫		河東路太原府孟縣	京西北路河南府河南縣	廣接路開	【學問】夫人幼而過人婚嫁女功之事無所不能、好讀書史傳知古今、丹徒君愛之。【行狀】十九歸於我東舅姑以孝謹稱。	程頤、國學者	『伊川文集』卷八	
0082	李君夫人盛氏墓誌銘			北2	1052	皇祐4年		23															秦鳳路鞏州隴西縣		路間	【教育】能讀易論語孝經錢子之書、親以教子。【行狀】夫人事舅姑以孝聞、持喪哀廢事節茹食衣以其餘推親黨。	王安石、宰相(正一品)	『臨川文集』卷九十九	
0083	右監門衛將軍夫人李氏墓誌銘		○	北2	1053	皇祐5年	23	15	北2	1045				從七品	崇儀副使	從八品	東頭供奉官	從四品	正八品	右監門衛將軍			京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	廣接路開	【賞贊】夫人年十有五以適配世賢(夫)惟孝與。應以事其親、以往其夫、惟禮與義以正其身、以全其節歸于世賢也。【守節】凡若干年而世賢卒(慶曆年・)。無子夫人自誓不嫁。宗族歎迫其守益堅。凡七年當皇祐五年六月庚辰以卒于寢。享年二十有三。	歐陽脩、參知政事(正二品)	『文忠集』卷三十七	
0084	李夫人墓誌銘			北2	1053	皇祐5年	38	18	北1	1033	10	5	5		正七品	兼方員外郎	從五品	汾州刺史	正八品	國子博士			河北東路永靜軍東光縣	京東西路東平府東平監	廣接路開	【賞贊】夫人年十八乃歸、事姑而秘書公以疾退居里舍者十年、凡其食飲夫人非自烹烹非親調皆不至進疾甚則出其室中物以有所祈請無不至及居喪哀毀過人。	劉軻尚書右僕射(從一品)	『忠肅集』卷十四	
0085	永安縣君謝氏墓誌銘			北2	1053	皇祐5年	90		北1	981	5	5	0	正五品	縣君					正八品	衛尉寺丞	從六品	尚書工部郎中	江西南西路撫州金谿縣			【賞贊】夫人之歸謝而嘗得拜於堂上見其色和其容謹聞其言使而動也。而聞其為婦陳為母慈知其所以享其福祐者其宜也。	曾肇、中書舍人(正四品)	『元豐類聚』卷四十五
0086	雍國太夫人馮氏墓誌銘		○	北2	1053	皇祐5年	67		北1	1004	7	2	5	正一品	國太夫人	從二品	節度使	正六品	西上閣門使	從二品	節度使	從二品	節度使	河北東路大名府	京畿路開封府開封縣	廣接路開	【守節】夫人人生將家孝謹柔明動不踰禮以世族選、為臨汝侯(夫)之配。居十有二年而臨汝侯卒。【賞贊】夫人益自勵、衣服飲食務為薄居處嚴潔、未嘗下堂雖家人亦罕得見嘗誦浮屠書。【封号】夫人臨汝侯惟和(太祖)的孫、節度使)之配。居十有二年而臨汝侯卒。夫人居喪哀毀真宗嘉其行封雍國夫人。皇祐五年(1053)正月癸亥以疾卒。享年六十有七。追封雍國太夫人。	歐陽脩、參知政事(正二品)	『文忠集』卷三十七
0087	聶夫人墓誌(王氏)			北2	1053	皇祐5年	若干											從九品	南城主簿				江南東路歙州	江南東路歙州	州內	【賞贊】夫人宜之為婦孝為妻順為母愛而不弛。【行狀】事姑三十年未嘗帶芥、既自治其家家有法度於鄰里鄉黨咸告以凶以喜以憂若在己然見人乞之絕志於鄙故力不足不能自教厥子必以禮義教辱故克有成。	李觀太學助教(從九品)	『直講集』卷三十	
0088	鄒助教母陳氏墓銘(撰者、李觀的女)	姑		北2	1053	皇祐5年	65		北1	1006								正五品	殿中丞	從九品	助教		江西南西路建昌軍南城縣	江西南西路建昌軍南城縣	縣內	【賞贊】歸于鄭氏生二男裁數歲、而寡姑老子弱、門內外事一介畢委于其躬性嚴正虛之有宜訓謝絕戚意厚誼福其家以不失養。	李觀太學助教(從九品)姑	『直講集』卷三十	
0089	尚書虞部郎中曾府君夫人廣陳縣君朱氏墓誌銘			北2	1053	皇祐5年	44		北1	1027	5	2	3	正五品	縣君			從三品	兵部侍郎	正五品	殿中丞	正八品	光祿寺丞太常寺太祝	淮南東路揚州天長縣	福建路泉州晉江縣	路間	【行狀】夫人入門事舅姑能左右不憚、歲時賀祭必嚴服潔其不敢後、誦婦若素履艱難然、方其夫在州縣而食客嘗清坐用一不給、輒除器室中所有而辨之其享之而退者無不腆之語入而其夫無不足之色若情虛處約然弗煩傳備之教而女巧靜不失下土之懼而家道得皆天性之所有自也。	強至尚書祠部郎中(從六品)	『祠部集』卷三十五



0111	永興尉章祐妻夫人張氏墓誌銘			北 2	1057	嘉祐2年	70		北 1	1005	7	3	4							正九品	永興尉		皆進士	福建路建州建寧縣	福建路建州建寧縣	縣內	【守贊】夫人維能忘其貧所以使其夫能屈於小官而說維能務其生所以使其子能安於幼學而成維能順其性所以居流離顛沛之間而不為悲哀怨憂亂其志也。	曾肇：中書舍人事(正四品)	『元豐類聚』卷四十五
0112	鄆州平陰縣主簿關君妻曾氏墓表			北 2	1057	嘉祐2年	32		北 1	1043	1	0	1			從六品	尚書戶部郎中	太常博士	平陰縣主簿				江南西路建昌軍南豐縣	京東西路鄆州平陰縣	路間	【學問】夫人已不好戲弄、及長喜讀書於女工之事不敢而自能焉。【行狀】養父母、舅姑皆孝、姑久疾晝夜候省未嘗須臾去其側周旋非親謂不以進其於內外屬親族皆感恩人皆以謂宜富貴壽考而卒不得至其所宜有嗚呼其豈非命也。	曾肇：中書舍人事(正四品)	『元豐類聚』卷四十六	
0113	右監門衛將軍夫人武昌縣君郭氏墓誌銘			北 2	1057	嘉祐2年	33		北 1	1042	4	4	0		縣君	正七品	洛苑使	正九品	左侍禁	從四品	右監門衛將軍	從八品	太子右內率府副率	京西北路河南府永安縣	京西北路河南府永安縣	縣內	【學問】夫人聰明孝謹、實能讀史、書、喜浮屠之說。	歐陽脩、參知政事(正二品)	『文忠集』卷三十七
0114	太常博士楊君夫人金華縣君吳氏墓誌銘			北 2	1057	嘉祐2年	73		北 1	1002	10	3	7		縣君	正五品				正八品	太常博士		兩浙路杭州金華縣	兩浙路臨安府錢塘縣	路內	【賞贊】夫人有訓德淑行協、干上下內外無怨。	王安石、宰相(正一品)	『臨川文集』卷九十九	
0115	右屯衛將軍夫人永安縣君慕容氏墓誌銘			北 2	1058	嘉祐3年	25	17	北 2	1050	3	2	1		縣君	從五品	翰林院直學士	正九品	左班殿直	正四品	右屯衛大將軍	從八品	太子右內率府副率	京西北路河南府永安縣	京西北路河南府永安縣	縣內		歐陽脩、參知政事(正二品)	『文忠集』卷三十七
0116	曾公夫人吳氏墓誌銘			北 2	1058		35	24	北 2	1047	4	3	1							正八品	太常博士		江南西路撫州臨川縣	江南西路建昌軍南豐縣	路內	【行狀】夫人事皇姑萬壽太君、承顏色教令一主於順制之衣服飲食盡其力。皇姑愛之如已女、於夫人得轉徙之宜於族人上下通其分今其葬宜得銘祔之墓中於以永延夫人之德無不可者。	王安石、宰相(正一品)	『臨川文集』卷一百	
0117	夫人文氏墓誌銘			北 2	1058	嘉祐3年	82		北 1	994	3	2	1							正八品		潼州判官	潼川府路遂州青石縣	潼川府路合州石梁縣	路內	【行狀】夫人事舅姑以孝、事夫以順、訓子治家、愛而有法、性喜儒學、尤好施。天禧中老儒唐恕善談合理鄙人推為有道。	呂陶、集賢院學士	『淨德集』卷二十七	
0118	河東縣太君曾氏墓誌銘			北 2	1058	嘉祐3年	74		北 1	1002	4	4	0		縣太君			從六品	尚書吏部郎中	正七品	尚書都官員外郎	從七品	秘書丞錄事參軍司戶參軍進士	江南西路建昌軍南豐縣	江南西路撫州臨川縣	路內	【賞贊】夫人於財無所蓄於物無所玩。自司馬氏以下史所記世治亂人豈不肖無所不讀、蓋其明習當世諸談學問知名之士有不能知也。雖內外族親之俾強頑鄙者通知敬憚其為賢、而夫人拊循應接親疎小大皆有禮焉。	王安石、宰相(正一品)	『臨川文集』卷一百
0119	丹陽郡夫人李氏墓誌銘			北 2	1058	嘉祐3年	62		北 1	1014	7	5	2		郡夫人	正二品	吏部尚書	正六品	職方郎中	正二品	太尉	從七品	著作郎大理評事	秦鳳路鳳翔府岐山縣	秦鳳路隴州梁山縣	路內	【守節】文肅薨。夫人居長院不以家事累諸子。雖貴重子學至或遭難與應遺之官則創以庫公約已應據前人。緒業向或有廢故成以虛公約已應據前人。緒業向或有廢故成以才令有聞。夫人端厚沈毅有德量左右勝得寓內其嘗惟無私必聞法度之言天性厚尊卑相好以愛鄰氏。李氏合大族其德孤振聲時無詬或均焉。	王珪、門下侍郎(從三品)	『華陽集』卷五十一
0120	夫人曾氏墓誌銘			北 2	1058		若干				2	2	0										江南西路建昌軍南豐縣	江南西路建昌軍南豐縣	縣內	【賞贊】夫人嘗從兄女也。姓曾氏沈靜謹約不妄笑言通人一日以怒於其內外屬之間孝友慈順無不當於理故與之處者皆愛其死者皆哀嗚呼為女如是足以知其賢又足以知其之祖考以來教行於其家也。	曾肇：中書舍人事(正四品)	『元豐類聚』卷四十六	
0121	仙遊縣太君羅氏墓誌銘			北 2	1058		83		北 1	993	5	4	1		縣太君					從五品	秘書少監	正五品	殿中丞比部員外郎衛尉寺丞縣尉	福建路南劍州沙縣	福建路南劍州沙縣	縣內	【行狀】太君有賢行、事皇姑萬氏順焉。諱此慕其所為後亦皆稱孝婦、經紀內治能勸不懈。	王安石、宰相(正一品)	『臨川文集』卷一百
0122	建陽陳夫人墓誌銘	繼室		北 2	1058		78		北 1	998	4	4	0										福建路建州建陽縣	福建路建州建陽縣	縣內	【守節】余君(夫)有子四人、其二人則夫人之子、夫人之少子實生三歲而余君卒。余氏世大姓也。夫人盡其度以仁先母之子、而使異之四方遊學戒曰「往成汝志必力無以吾貧為恤於是異年十五、歲在外十二年、而後以進士、起家為吏掾見夫人鄉里方此時。夫人閉門窮經無以自存母子相泣聞者慨歎息曰賢哉是母有子食其祿宜也。	王安石、宰相(正一品)	『臨川文集』卷九十九	
0123	皇兄故漳州團練使承訓妻安定郡夫人張氏墓誌銘	○		北 2	1059	嘉祐4年	66	18	北 1	1011	8	5	3		縣太君	從四品	光祿卿	正八品	內殿崇班閤門祗候	正四品	右監門衛大將軍深州團練使	正四品	右屯衛大將軍右千牛衛大將軍左侍禁	江南西路撫州臨川縣	淮南西路無為軍巢縣		【賞贊】夫人大王父王父世儒者皆為禮義能知書又通于音溫柔慈良母也。【封号】明道(1032~1033)中以恩封上谷郡君。皇祐三年(1051)進封安定郡夫人。【皇族】皇妃故和州防禦使歷陽侯夫人安福縣君王氏墓誌銘(皇帝的甥)	劉敞、集賢院學士	『公是集』卷五十二
0124	王夫人墓誌銘			北 2	1059	嘉祐4年	48	23	北 1	1034	2	2	0			從六品	尚書主客郎中	正九品	右侍禁	正八品	秘書省著作佐郎	江南西路撫州臨川縣	淮南西路無為軍巢縣	路間	【賞贊】夫人心莊而行厲、而色婉撫接內外、親疏皆有恩意、而於人終身不校嗚呼其賢如此。	王安石、宰相(正一品)	『臨川文集』卷一百		
0125	雙君夫人邢氏墓誌銘			北 2	1059	嘉祐4年	86		北 1	991	3	3	0			從六品	尚書屯田員外郎	大理寺丞	正七品	尚書屯田員外郎	正七品		淮南西路無為軍巢縣	淮南西路無為軍巢縣	縣內	【賞贊】能理其家使無內憂。	曾肇：中書舍人事(正四品)	『元豐類聚』卷四十五	
0126	江都縣主簿王君夫人曾氏墓誌銘			北 2	1059	嘉祐4年	33		北 1	1044	2	0	2			正八品	太常博士	正九品	試校書郎(唐)				淮南西路建昌軍南豐縣	淮南西路揚州江都縣	路間	【學問】夫人孝愛聰明能談書言古今知、辨人法度之事、巧織練刀尺經手皆絕倫。【賞贊】先君習其職於里中以增王氏。王氏家故貴。曾氏為家婦、而其姑嚴也、擢任家政能精力躬勞苦。	曾肇：中書舍人事(正四品)	『元豐類聚』卷四十六	
0127	宗室丹陽郡夫人任城郡夫人羅氏墓誌銘	○		北 2	1059	嘉祐4年	57		北 1	1020	14	7	7		縣夫人	從三品	左神武大將軍(唐)	正九品	左班殿直		郡王	正四品	左屯衛大將軍	京東西路濟州任城縣	兩浙路湖州丹陽縣	路間	【守節】旦陽(夫)之捐軀者、殆二十年。夫人退尚簡素其服玩無靡麗之飾區處閨事無不有條理。【教育】諸子亦承其母訓以立。	王珪、門下侍郎(從三品)	『華陽集』卷五十三
0128	壽安縣太君呂氏墓誌銘			北 2	1059	嘉祐4年	70		北 1	1007	3	3	0		縣太君	正一品	太子中書令	正七品	尚書虞部員外郎	正七品	尚書比部員外郎尚書方員外郎縣令	京西北路河南府(洛陽)	成都府路成都府華陽縣	路間	【學問】夫人方幼見文字、輒喜於是汎通詩書百家之學。【守節】夫人遂婦我伯父少卿。夫人治家、亦有法蘭內肅然如官廷。不幸少卿暴疾早世。夫人方年三十餘。躬治喪於廣陳。既而攜諸孤往依廬江伯父仲郎之下官。【教育】一日泣謂諸子曰「汝父病且革猶語我且勸勉汝等汝鍾嗣不天何以率遵言諸子號頓感自言願夙夜勉力不敢謀先人之緒業」。夫人於是盡屏珠之飾市書環坐親授經義。日月漸磨卒至有成其後昆弟仕稍進。	王珪、門下侍郎(從三品)	『華陽集』卷五十三		
0129	壽安縣君王氏墓誌銘			北 2	1059	嘉祐4年	53		北 1	1024	8	2	6		縣君	正七品	庫部員外郎	從六品	屯田郎中		少府監		京西北路河南府	淮南西路揚州廣陵縣(南渡後)	兩浙路開	【賞贊】皇姑曰「自是兒有婦內外族人加親而吾食饗甘焉」少府君材能為朝廷所信以至休戚其盡心外事不以家為恤者以夫人為之內也。【學問】夫人好讀書為詩靜專而能諷諭以有禮。吏部君愛之心外事不以家為恤者以夫人為之內也。	陸佃、尚書右丞(正三品)	『陶山集』卷十五	
0130	贈尚尉卿梁公夫人李氏墓誌銘			北 2	1060	嘉祐5年	16				17	8	9			從五品	濠州刺史	從四品	衛尉卿	正七品	尚書比部員外郎太子中舍人		京東西路鄆州須城縣	京西北路河南府		【行狀】夫人入門能服勞隨約如素習然、事實姑終日無惰容、撫諸子入莫知為嫡庶者、衛尉卿客樂施葦、庭中物以佐之其來、而享之於外者人稱所欲而其夫不見不足之色率不知、費自富中出也。	強至、尚書祠部郎中(從六品)	『詞部集』卷三十五	
0131	彭城縣君劉氏墓誌銘			北 2	1060	嘉祐5年		1	1	0	正五品	縣君				從五品	尚書郎	正八品	太常博士	正八品	太常博士	京東西路單州單父縣	京西北路河南府	路間		司馬光、宰相(正一品)	『傳家集』卷七十八		
0132	鄆縣李夫人墓表			北 2	1060	嘉祐5年		3	1	2										大理評事	太常博士		江南西路饒州鄆縣縣	江南西路饒州鄆縣縣	縣內	【賞贊】太君之子以進士起為聞人、而州之士大夫皆曰「是母非獨能教亦其為善也。」	王安石、宰相(正一品)	『臨川文集』卷九十	
0133	李夫人墓誌銘			北 2	1061	嘉祐6年	42	16	北 1	1035	5	4	1		縣君	正八品	國子博士	從六品	屯田郎中	正七品	尚書比部員外郎		兩湖北路茂州汶山縣	淮南西路亳州壽縣	路間	【學問】夫人善讀史記、見古烈女遺事慷慨然興之。【封号】累封壽安縣君	鄭獬、翰林學士(正三品)	『鄭集』卷二十二	
0134	張夫人墓誌			北 2	1061	嘉祐6年	36	16	北 1	1041	9	4	5			從三品	禮部侍郎	正八品	太常博士	從五品	中散大夫	正八品	縣令宣德郎2人縣尉	淮南西路亳州壽縣	京西北路鄆州管城縣	兩浙路開	【賞贊】夫人既歸楊氏(夫)其宗族敬愛之如一。夫人仁慈愛淑、出自天性生髮怡色無絲毫慘忤人意其子玷惡生不知有也。	張來、起居舍人(從六品)	『陶山集』卷五十

0135	曾氏女墓誌銘			北 2	1061	嘉祐6年	20		北 2	1059							正七品	尚書都官員外郎	正八品	大理寺丞				江南西路建昌軍南豐縣	江南西路建昌軍南豐縣	縣內	【賞鑒】生而慧淑於女工不學而能於孝愛天成也。	曾望中書舍人(正四品)嫁	《元豐類鑑》卷四十六
0136	二女墓誌銘(曾氏)	未婚		北 2	1061	嘉祐6年	3		北 2	1076							正四品	中書舍人(曾望)								二女生、而僅予之壽多故其不幸、又天以死所謂命非耶、熙寧十年予爲洪州始以三月庚申喪二女、於南豐之原隙洞穴慶老在右與老在左是爲誌。	曾望、中書舍人事(正四品)	《元豐類鑑》卷四十六	
0137	安府君妻趙氏人墓誌銘			北 2	1061	嘉祐6年	68		北 1	1011	8	4	4				無仕	無仕		正八品	大理寺丞		兩浙路蘇州	兩浙路蘇州	州內	【行狀】既長歸安府君入門、盡婦道舅姑喜、嘗語之日「今若善事我他日當得賢子婦以爲若幸已」	強至尚書祠部郎中(從六品)	《祠部集》卷三十五	
0138	尹夫人墓誌銘			北 2	1061	嘉祐6年	60		北 1	1019	3	2	1				正七品	尚書職方員外郎	正八品	國子監丞				兩浙路常州江陰縣			【賞鑒】少適(父)有數子、而女獨。夫人又少聰警、識圖書、辨音律、故加愛焉。 【行狀】及長婦國子監丞君奎之、晚得官當未仕與。夫人治家事、夫人事姑幼謹不懈、於夫人之族親無慢皆有禮意。	蔡襄、端明殿學士	《端明集》卷四十
0139	望都縣太君倪氏墓誌銘			北 2	1061		85		北 1	994	3	3	0	正五品	縣太君	從六品	南唐主爵郎中	正八品	大理評事					江南東路歙州祁門縣			【守節·教育】高陽君死、池陽宮下。夫人携三子尚幼宣宣城、日夜戒諸子期有所術立。	王珪門下侍郎(從三品)	《華陽集》卷五十
0140	亡妻宜興縣君文系晁氏墓誌銘	妻		北 2	1062	嘉祐7年	26	18	北 2	1054							正六品	尚書駕部員外郎	光祿少卿	正四品	中書舍人		京畿路開封府祥符縣	江南西路建昌軍南豐縣	路間	【賞鑒】余(曾望)時苦食衣染文系(妻)食菲衣敝自若也。 【行狀】事姑適內外屬人、無長少遠近各盡其意仁孝慈恕人有所不能及於擯珥衣服親屬人所無輕推與之不待已足於燕私未嘗見其情容於與人居未嘗見其喜愠折意降色約已以法度學士大夫夫有所不能也。	曾望：中書舍人事(正四品)妻	《元豐類鑑》卷四十六	
0141	楚國太夫人陳氏墓誌銘			北 2	1062	嘉祐7年	71	19	北 1	1010	9	4	5	正一品	國太夫人				從一品	中書門下平章事	正七品	尚書屯田員外郎國子博士大理寺丞	淮南西路壽州壽春縣	河北西路永寧軍博野縣	路間	【賞鑒】夫人莊而仁俊、而禮上承下御無不得宜、故在父母家爲淑女既嫁爲令妻其平、有子爲賢母。 【封号】夫人用公自贈諡縣君、九封而爲南國夫人、用公子加贈國夫人、再封而得楚國夫人。	王安石、宰相(正一品)	《臨川文集》卷九十九	
0142	錄夫人崔氏事迹與崔殿丞請爲行狀	妻		北 2	1062	嘉祐7年		21			8	3	5				從三品	兵部侍郎	從三品	工部侍郎	從一品	開府儀同三司	光祿寺丞太常寺太祝校書郎(唐)	河北東路恩州清河縣	河北西路相州安陽縣	路間	【賞鑒】夫人必欣然贊助惟恐不充此天下之共知而婦人之尤難也。又治家嚴明事無細大處治條理、皆有法度門之內、猶官府然。故璋略無私室之虞、而得專心公家者夫人之力也。 【行狀】歸於韓氏連事夫能盡婦道、姑疾夜躬侍湯藥則夙夜不懈及其亡也。	韓琦宰相(正一品)、妻	《安陽集》卷四十六
0143	仙源郡君趙氏墓誌銘			北 2	1063	嘉祐8年	30	16	北 2	1049	6	0	6	正四品	郡君	正二品	參知政事	正六品	司農少卿	正七品	朝請郎	正七品	朝散郎他	京畿路開封府開封縣	河北東路大名府衛縣	路間	【賞鑒】趙氏生十六年歸王氏以便容稱王氏、故丞相家姻黨數百、而夫人亦名家女、以妙齡執婦道、事尊章時雖嚴、撫幼卑咸遵門閭譽無間言。	范雍補、禮部郎中(從六品)	《通鑑集》卷六十七
0144	梁國郡君王氏墓誌銘			北 2	1063	嘉祐8年	33	17	北 2	1047	8	6	2	正四品	郡君	從三品	尚書禮部侍郎	正五品	殿中丞	正八品	路判官	正九品	右承奉郎人右承務郎人	京東西路應天府虞城縣			【行狀】夫人事姑備盡婦道內外無間言。公室進士第擢爲福建路轉運判官、夫人封同安縣君。 【追封】公室進士第擢爲福建路轉運判官、夫人封同安縣君。嘉祐八年十月二十三日以疾卒、年三十三。後十年公爲龍圖閣直學士、追封太原郡君又封梁國。	范祖禹給事中(正四品)	《范太史集》卷三十九
0145	德清縣君周夫人墓誌銘			北 2	1063		46	17	北 1	1034	7	2	5	正五品	縣君		從三品	戶部侍郎	正七品	屯田員外郎		太廟齋郎		河北西路定州北平縣			【賞鑒】夫人天性柔靜莊重、不妄笑語、爲女工纖素巧緻點蘇、爲花卉蟲魚若生然、又通曉音律。 【行狀】年十七嫁爲北平梁弋妻、連事舅姑恭順得上下觀、舅姑慈愛、服喪六年以孝稱從其夫仕官失宦朝封德清縣君。	劉敞中書舍人事(正四品)	《彭城集》卷三十九
0146	慎夫人墓誌銘			北 2	1063		41	17	北 1	1039	3	2	1			吳越王	正八品	太子中舍					兩浙路衢州	兩浙路臨安府錢塘縣	路內	【銘乞】聞彥長喪其婢安陸鄭某(僕者、鄭某)往弔之。彥長泣曰「哀乎吾婦之亡也」。生無以與令其死奈何幸子之來其巧我十百字、以銘其墳而盡吾之悲也。某銘之、明日彥長走馬持節曰「吾婦慎氏年十七從其先君、在蜀尋年喪其母、及其先君懷與家、嫗孤居服喪因不能、自稱吾之先夫大過之哀其窮遂娶爲吾婦之盡解其族、婦之陳自吾婦之入門見」。某曰「然吾聞夫人死二十餘日、而彥長金帛、內外宗族皆來賀室相拜慶、既而備夫人之不克見也」。	鄭獬、翰林學士(正三品)	《麟溪集》卷二十二	
0147	崔夫人墓誌銘			北 2	1063		57	26	北 1	1032	6	5	1	正五品	縣君					正七品	屯田員外郎						【再嫁】夫人崔氏初嫁大名孫君、孫君諱康、樂安郡王濟貽之後也。以故王孫義氣喜俠盡耗其家資。夫人未嘗新一毫。夫人婦趙氏二十六年至其亡如初婦也。趙君性高嚴、而夫人能以禮順之、諸子不一出、而夫人能以愛均之。 【封号】夫人以祥符八年婚崔陳氏、封萬年縣君、又以其子封寧國縣太君。	鄭獬、翰林學士(正三品)	《麟溪集》卷二十二
0148	寧國縣太君樂氏墓誌銘			北 2	1063	嘉祐8年	75	27	北 1	1015	9	3	6	正五品	縣太君	正七品	尚書職方員外郎	正八品	太常博士	正七品	尚書屯田員外郎	從七品	秘書丞太常博士秘書省著作佐郎	京西北路河南府河南縣	京西北路河南府河南縣	縣內	【再嫁】夫人少知讀書能略識其大指、微諷數篇故博士君(父)屬待愛、而賢之欲有所爲多與之謀。 【行狀】及歸陳氏、不遺養姑姑笑。屯田君二弟皆尚幼也。夫人視親如已子、出處中物以助施、族人游士之負者盡其家盡然也。 【封号】夫人以祥符八年婚崔陳氏、封萬年縣君、又以其子封寧國縣太君。	王安石、宰相(正一品)	《臨川文集》卷九十九
0149	聶夫人墓誌銘			北 2	1063		若干				4	3	1										京畿路開封府雍邱縣			【學問】夫人幼即明悟、不爲嬉戲。七歲讀書史能爲詩、曉音律聰慧過人、性和柔諄靜未嘗懈情色。父母尤賢之故詳擇所宜而歸之其嫁也。	劉敞中書舍人事(正四品)	《彭城集》卷三十九	
0150	龍圖母公墓誌銘(裴氏)			北 2	1063	嘉祐8年	60		北 1	1021																文同：太常博士(正八品)	《丹淵集》卷三十九		
0151	仁壽縣太君吳氏墓誌銘	繼室		北 2	1063	嘉祐8年	66		北 1	1015	10	7	3	正五品	縣太君					正七品	尚書都官員外郎	從六品	尚書工部郎中	江南西路撫州金谿縣	江南西路撫州臨川縣	州內	【學問】夫人好學強記而不倦、其取舍是非有人所不能及者然好問自下於事未嘗有所專也。 【行狀】夫人其平生義實姑甚孝。	曾望：中書舍人事(正四品)	《元豐類鑑》卷四十五
0152	永安縣君李氏墓誌銘			北 2	1063	嘉祐8年	79		北 1	1002	7	4	3	正五品	縣君	從二品	禮部尚書	從二品	刑部尚書				京西北路穎昌府長葛縣	京西北路穎昌府長葛縣	縣內	【行狀】夫人仁孝慈恕言動必擇義理。事父母不違其教事舅姑不違其志夫事夫順、夫人之弟光祿少卿孫卿余妻父也。	曾望：中書舍人事(正四品)	《元豐類鑑》卷四十五	
0153	仁壽縣君張氏墓誌銘	繼室		北 2	1063	嘉祐8年	54		北 1	1027	9	4	5	正五品	縣君			正六品	職方郎中	正五品	殿中丞	正九品	校書郎(唐)他	河北西路相州安陽縣			【賞鑒】張氏性柔靜自幼不妄語笑雅端訓是服逮。歸韓氏備德益修平居端然以法度自處宗親欽式之。	韓琦宰相(正一品)	《安陽集》卷四十八
0154	知處州青田縣朱君夫人戴氏墓誌銘			北 2	1064	治平元年	77	15	北 1	1002	4	4	0									同縣奉天長	皆進士	淮南東路揚州南鄭縣	兩浙路處州青田縣	路間	【賞鑒】夫人受教於姑嘗從事於既嫁少而行修於身老而敦行於家故父母日不遺吾愛。 【行狀】舅姑日能順高志夫受其助、子賴以成其平居深靜有儀法不妄笑言就之色莊而氣仁居貧自薄衣食而厚於施與屬人之孤女爲收嫁者蓋二人云既老矣夫事不廢而婦容蓋恭雖少者有不及也。	曾望：中書舍人事(正四品)	《元豐類鑑》卷四十六
0155	宗室延州觀察使夫人京兆郡君宋氏墓誌銘		○	北 2	1064	治平元年	61	15	北 1	1018	25	12	13	正四品	郡君	從一品	中書門下平章事忠武軍節度使	從八品	東頭供奉官閤門	正五品	延州觀察使	從四品	右領軍衛將軍	京西北路河南府(洛陽)	京西北路河南府永安縣	州內	【學問】夫人人生十年、母教之習、製之事、音律之法、詩書之言、其性聰悟所學輒過人。 【賞鑒】後五年乃嫁四十六年乃卒。夫人端靖謙恭能以禮下人故閤門之中、長幼之序莫不法式嘗觀浮圖書其率度使節無殊樂組之玩。	王珪門下侍郎(從三品)	《華陽集》卷五十四



0178	徐氏夫人墓誌銘	繼室	北2	1066	治平3年	53	21	北1	1034	7	5	2	正五品	縣君		從七品	清道率府	正八品	內殿承制		淮南東路真州揚子縣	河北東路恩州清河縣	路間	【封号】承制君(夫)元配劉氏無子早卒。既升朝故事得封妻為縣君。夫人請先劉氏承制君義而從之故。夫人卒及封。而卒後二年(治平5年1068)以恩始追贈曹昌縣君。	秦觀·大學博士(從八品)	『淮海集』卷三十三		
0179	舅氏華夫人墓誌銘		北2	1066	治平3年	77	21	北1	####	3	0	3	正五品	縣君	正八品	金州石泉令	正八品	衛尉寺丞	郎中		南浙路臨安府餘杭縣	京東西路應天府宋城縣	路間	【實職】夫人自幼至老、嫁道母儀稱于其族人、其族人固當世之所稱美、而夫人有加焉則其賢可計較等語而知也。 【封号】平原、永壽、馮翊三縣君	劉攽·中書舍人事(正四品)	『彭城集』卷三十九		
0180	長安郡太君盧氏墓誌銘		北2	1066	治平3年	92		北1	992	2	2	0	正四品	郡太君				從三品	尚書刑部侍郎	正三品	端明殿學士尚書禮部侍郎	福建路泉州惠安縣	福建路興化軍仙遊縣	路內	【行狀】其舅姑老事之如其親其歸寧於父母也。能使其舅姑不見三日必涕泣而思其事長慈幼既後且劬久而宗族和鄉鄰化其亡也。	歐陽脩·參知政事(正二品)	『文忠集』卷三十六	
0181	徐夫人墓表銘		北2	1066	治平3年	68		北1	1016	5	3	2				從六品	尚書屯田郎中		進士						【行狀】夫人歸進士吳君頤(夫)。盡婦道事舅姑以孝、終身人不見其懈。君以文名于時先夫人二十五年無祿而亡、夫人雖號泣行謁置諸區嚴誓有法。	趙抃·參知政事(正二品)	『清獻集』卷十	
0182	樂安郡君翟氏墓誌銘		北2	1066	治平3年	57		北1	1027	8	5	3	正四品	郡君	從七品	太子左清道率府率	從八品	節度推官	正七品	尚書主客員外郎	正三品	翰林學士軍事判官得作監主簿	京東西路濟州金鄉縣	南浙路臨安府餘杭縣	路間	【行狀】少則賢孝父母稱之、及嫁為婦則舅姑稱之如父母、處婦如能以有禮、審妾御能正、以有仁聞門上下順治。 【封号】始封長安縣君。進京兆、樂安二郡君。	王安石·宰相(正一品)	『臨川文集』卷一百
0183	仁壽縣太君徐氏墓誌銘		北2	1066	治平3年	77		北1	1007	11	4	7	正五品	縣太君				從六品	尚書屯田郎中	正七品	尚書驛方員外郎皆進士	江南東路饒州浮梁縣	江南東路饒州浮梁縣	路內	【行狀】夫人天性麗於孝謹、女功婦事不懈、以敏躬俾有節仁於宗族、故以事其舅、而順以相其君、子而度以睦其子孫、而治以有賢、子大其家具享福終于壽考(長壽)。 【封号】夫人以職方故封金堂、壽安二縣君。又封仁壽縣太君。	王安石·宰相(正一品)	『臨川文集』卷一百	
0184	魏國夫人陳氏墓誌銘		北2	1067	治平4年	63	15	北1	1019	9	6	3	正一品	國夫人		從一品	太師從一品中書令兼從一品尚書令	正一品	司空兼侍中(尚書右僕射兼封魏文獻大學士	正七品	尚書比部員外郎太常博士	利州路開州西水縣	河北西路真定府獲鹿縣	路間	【行狀】夫人既昇康肅公不它擇其歸魏國公。夫人之歸事其姑甚孝凡奉飲食衣衾羹不便利、而時節之過內外親疎皆主于恩人不見其有驕矜優慢之色于是。夫人嫁時車馬與夫珠玉珍奇之玩不數年間費半盡一日。	王珪·門下侍郎(從三品)	『華陽集』卷五十五	
0185	蔡孝康母胡氏墓誌銘		北2	1067	治平4年	61	16	北1	1022	5	4	1						從九品	許州長葛主簿		南浙路常州晉陵縣	淮南東路楚州	廣接路間	【實職】夫人為家而夫不憂也。有姑則繼也。及蔡氏之叔母皆則嚴難為下惟、夫人鵬之曰樂衣之曰吉、蔡氏女子、夫人為其繼母、撫之均一、嫁之則誦曰我非為婦也。 【實職】林氏有賢母曰黃夫人、涇縣主簿權叔集賢院書籍希之祖母也。太常博士集賢校理林堯之母也。 【行狀】夫人家世福人、與林氏同縣。夫人之婦舅姑皆亡恙。又適事祖姑夫人致義。宗族稱之曰孝婦。夫人以十八嫁陳、若干年林氏盛衰三變樂、夫人是賴其所致就詩史所謂不能過也。 【封号】夫人從夫仕宦累朝累封嘉與天長二縣君。其子以文學成名復歸於朝既子夭死。夫人無他。	沈括·翰林學士(正三品)	『長輿集』卷十四		
0186	林氏母黃氏夫人墓表		北2	1067	治平4年	77	18	北1	1008												福建路福州福清縣	福建路福州福清縣	路內	【行狀】夫人家世福人、與林氏同縣。夫人之婦舅姑皆亡恙。又適事祖姑夫人致義。宗族稱之曰孝婦。夫人以十八嫁陳、若干年林氏盛衰三變樂、夫人是賴其所致就詩史所謂不能過也。 【封号】夫人從夫仕宦累朝累封嘉與天長二縣君。其子以文學成名復歸於朝既子夭死。夫人無他。	劉攽·中書舍人事(正四品)、母	『彭城集』卷三十六		
0187	宗室右武衛大將軍黃州刺史令穰夫人壽昌縣君李氏墓誌銘	○	北2	1067	治平4年	19	18	北2	1066	1	0	1	正五品	縣君	從四品	右監門衛將軍	正九品	右侍禁	右武衛大將軍			京西北路河南府永安縣			【行狀】壽昌既歸、事舅姑如父母、事其夫甚恭慈和順之、性出於自然黃貴州之誦學也。英宗靈臺：今皇太后為外族。享年十有九、六月己酉殯(埋殯)於普濟佛寺、八月從英宗皇帝靈臺。	張方平·參知政事(正二品)	『樂全集』卷三十八	
0188	傅夫人墓誌銘		北2	1067	治平4年	22	20	北2	1065							從三品	刑部侍郎	從八品	得作監主簿		京畿路開封府開封縣	京畿路開封府開封縣	路內	【短命】夫人傅氏生於慶曆之丙戌、終治平之丁未、為婦二年、有二嬰兒。顯明年熙寧之戊申八月庚申葬。於開封府四京開封府開封縣。【實職】夫人無鹽、容無操、德其行已也。約其越事也。觀其處家也。	鄭獬·翰林學士(正三品)	『麟溪集』卷二十一		
0189	天長縣君黃氏墓誌銘		北2	1067	治平4年	77		北1	1008	1	1	0	正五品	縣君				正七品	殿中丞屯田員外郎	正八品	太常博士集賢校理	福建路福州福清縣	福建路福州福清縣	路內	【教育】夫人其夫之志其子既就學夫人常夜治絲絃居其旁以勉之至其後子遂以文學名天下。	曾鞏·中書舍人事(正四品)	『元豐類集』卷四十五	
0190	金華縣君范氏墓誌銘		北2	1067	治平4年	32		北2	1053	4	4	0	正五品	縣君				正七品	尚書驛方員外郎	正八品	大理評事河東路太原府太常寺太祝	京畿路開封府開封縣	京畿路開封府開封縣	路間	【良婦】夫人幼鞠于母仁壽郡夫人臧氏、教誨備嘗令德有成、及歸于府君【學問】府君晚而為浮屠老子之學精志勤力將以悟道而永。夫人聞而悅之相與一意戒嘗不息。	劉攽·中書舍人事(正四品)	『彭城集』卷三十九	
0191	樂安郡君范氏墓誌銘		北2	1067	治平4年	53		北1	1032	2	1	1	正四品	郡君				從二品	樞密副使吏部侍郎(從三品)	從七品	秘書丞	京畿路開封府開封縣			【行狀】夫人姓范氏。相國司徒公諱質之曾孫、相國太尉諱文正王公諱旦外孫。今樞密副使吏部侍郎韓公(韓琦)之夫人。初文正公嫁二女適范氏諱令孫、適韓氏是忠憲公(韓億)【孝婦】二家相與恩好甚篤約世為婚姻故。夫人歸于樞密公、夫人端直淑茂天質挺立柔順足自成德正固足以幹事忠憲公治家嚴謹、夫人承意從教備盡婦道及。 【封号】樞密公始封朝夫人封壽昌縣君、及為翰林學士擬封高平郡君、南郊推恩進封樂安郡君。	劉攽·中書舍人事(正四品)	『彭城集』卷三十九	
0192	右監門衛大將軍仲炎夫人秀州縣君李氏墓誌銘	○	北2	1067	治平4年	24		北2	1061	6	5	1	正五品	縣君	從一品	尚書令	從一品	中書令	正四品	右監門衛大將軍	從八品	內率府副率	京畿路開封府祥符縣	京西北路河南府永安縣	廣接路間	【行狀】宗室端徽繼、事舅姑、謹恪嚴密如出寒素無怠弛之意。皇后之姪也。	張方平·參知政事(正二品)	『樂全集』卷三十八
0193	秦國大長公主墓誌銘	未婚	◎	北2	1067	治平4年	8		北2	1077							仁宗皇帝								嘉祐4年~治平4年(1059~1067)八歲卒 父·仁宗皇帝第九女、母·董氏(淑妃)	張方平·參知政事(正二品)	『樂全集』卷三十八	
0194	同安郡君劉氏墓誌銘		北2	1067	治平4年					1	0	1	正四品	郡君				從三品	尚書戶部侍郎			江南西路吉州廬陵縣	江南西路吉州廬陵縣	路內	【行狀】夫人之在父母家既以孝聞及嫁舅姑又稱其孝、能相其夫以順又能當其婦子以慈。 【封号】公當仁宗時、以御史、見聽用聞天章·龍圖·樞密三學士。夫人亦果封為同安郡君。	王安石·宰相(正一品)	『臨川文集』卷一百	
0195	揚州進士滿夫人楊氏墓誌銘		北2	1067	治平4年	61		北1	1024	9	7	2				從七品	著作郎	進士	正八品	縣令進士					【實職】夫人性溫恭靜約事當與否未嘗形於喜愠以止有吾母也。故思其父愈久而猶悲以不逮吾姑也。 【行狀】故事其舅愈勞而不懈、承其夫以順、勸其子以學、而汎接於族人也。	王安石·宰相(正一品)	『臨川文集』卷九十九	
0196	右武衛大將軍黎州刺史世岳故妻安喜縣君李氏墓誌銘	○	北2	1067	治平4年	25		北2	1060				正五品	縣君	從二品	節度使	正七品	供備庫使內殿崇班	正四品	右武衛大將軍		河東路上黨潞州上黨縣	京西北路河南府河南縣	廣接路間	【實職】秦靜亦內外稱之。	王安石·宰相(正一品)	『臨川文集』卷九十九	
0197	右監門衛大將軍世繼故妻仁壽縣君康氏墓誌銘	○	北2	1068	熙寧元年	26	16	北2	1058	1	1	0	正五品	縣君	從五品	量任防禦使	正八品	尚書比部員外郎	從四品	右監門衛將軍		京西北路河南府永安縣			【封号】嘉祐三年(1058)為宗婦、封仁壽縣君。	王安石·宰相(正一品)	『臨川文集』卷一百	
0198	宋夫人墓誌銘	○	北2	1068	熙寧元年	19	17	北2	1066				正五品		殿中丞	從七品									【短命】治平三年(1066)崩于皇叔右監門衛將軍宗室為吳王之孫、而定王允良之子。夫人既歸二年以熙寧元年(1068)三月丙子以疾卒。壽十九歲、明年二月十七日歸于河南府四京河南府永安縣。	鄭獬·翰林學士(正三品)	『麟溪集』卷二十一	
0199	萬年郡主趙氏墓誌銘	○	北2	1068	熙寧元年	60	18	北1	1026	9	3	6	正一品	郡主	從二品	節度使	從二品	節度使	正二品	全紫光祿大夫	正八品	國子博士太子右贊善大夫右衛將軍	京畿路開封府開封縣	京畿路開封府開封縣	路內	【行狀】郡主亦能以謹法自約姑、事姑以孝謹、婦以稱其順、妾御撫以仁、燕賓賓友烹澣有禮之煩縟必親履之、而不厭猶寒家之婦也。	鄭獬·翰林學士(正三品)	『麟溪集』卷二十一

0200	韓刑部妻程氏墓誌銘			北2	1068	熙寧元年	49	19	北1	1038	4	3	1	正五品	縣君			從一品	中書門下平章事	從六品	尚書刑部郎中蘇主簿	從八品	太常寺太祝司法參軍	河北西路永寧軍博野縣	京畿路開封府開封縣	路間	【賞贊】夫人天性靜專、自幼少不安笑言、不起遊戲。 【行狀】及嫁進事舅姑慈孝、婦道維備宗族懷而愛之。 【封号】夫人管仲母(母・陳氏號魏國夫人)入謁禁中、仁宗皇帝以大 臣女錫之冠帔、及刑部君(夫)遂朝封萬年縣君。	劉攽 中書舍人事(正四品)	『彭城集』卷三十九	
0201	沈氏夫人墓誌銘			北2	1068	熙寧元年	45	22	北2	1045	8	3	5				從三品	尚書刑部侍郎	從四品	右諫議大夫		進士	淮南西路和州歷陽縣	淮南東路揚州長興縣	闕接路間	【行狀】夫人為人柔順靜專事父母盡子道。事姑兩浙路湖州長興縣太君賈氏盡婦道、事夫盡妻道、為母及與內外屬人接一皆盡其道、故其處也。愛於其家其嫁也。	曾鞏：中書舍人事(正四品)	『元豐類集』卷四十五		
0202	吳郡君墓誌銘	繼室		北2	1068	治平5年	51	28	北2	1045	7	6	1	正四品	郡君	從五品	太常少卿	從六品	都官郎中	從四品	給事中			江南西路撫州崇仁縣	河北東路大名府	路間	【賞贊】陳氏(先妻)有子六人皆幼夫人撫之己子。	劉軻尚書右僕射(從一品)	『忠齋集』卷十四	
0203	任郎中夫人宋氏墓誌銘			北2	1068	熙寧元年	50		北1	1036	6	2	4				正五品	縣太君		廣陵先生	從七品	職方員外郎			成都府路眉州眉山縣	淮南西路光州光山縣	路間	【教育】夫人教諸子與其甥學至夜分讀書聲未絕。	文同：太常博士(正八品)	『丹淵集』卷四十
0204	壽昌縣太君許氏墓誌銘			北2	1068	熙寧元年	83		北1	1003	4	2	2	正五品	縣太君		正八品	太子洗馬	從五品	太子少卿	正八品	國子博士			兩浙路蘇州吳縣	兩浙路臨安府錢塘縣	路内	【學問】夫人讀書知大意、其兄所為文輒能成誦、父母衣食服御待之而後安。	曾鞏：中書舍人事(正四品)	『元豐類集』卷四十五
0205	右千牛衛將軍仲馬故妻永嘉縣君武氏墓誌銘	〃		北2	1068	熙寧元年	18		北2	1068				正五品	縣君	正九品	左班殿直	正八品	內殿崇班	從四品	右千牛衛將軍			京西北路河南府永安縣			【賞贊】君在襁褓、父母以為婉、及嫁節侯慈仁人稱之。	王安石、宰相(正一品)	『臨川文集』卷一百	
0206	文安郡君陳氏墓誌銘			北2	1068	熙寧元年	56		北1	1030	7	7	0	正四品	郡君		從七品	兵部尚書員外郎	從四品	太中大夫	正八品	奉議郎宣徽郎承務郎他	福建路泉州晉江縣	河北西路衛州汲縣	路間	【學問】夫人幼習惠曾、聞白居易詩一過能誦。 【封号】再封夫人緡川仁壽二縣君、闔門雍穆福祿美矣。而不幸感疾卒。熙寧元年二月十八日也。享年五十有六。韓公(夫)後貴為右諫議大夫、追封夫人緡川郡君、又追封文安郡君、以元豐六年八月甲申薨(死)後15年。	晁補之 禮部郎中(從六品)	『雞肋集』卷六十四		
0207	仁和縣君潘氏墓誌銘	〃		北2	1069	熙寧2年	24	16	北2	1061	5	3	2	正五品	縣君	從五品	平州刺史	從八品	開門祗候	25	禮部尚書右武衛大將軍	正一品	宰相右內率府副率	京西北路河南府永安縣	京西北路河南府永安縣	県内		司馬光 宰相(正一品)	『傳家集』卷七十八	
0208	壽昌縣君王氏墓誌銘		〇	北2	1069	熙寧2年	23	16	北2	1062	3	2	1	正五品	縣君	正六品	東上閤門使	正六品	東上閤門使	正四品	武衛大將軍			京畿路開封府開封縣	京西北路汝州梁縣	闕接路間	【賞贊】年十六而歸宗部、寧事尊敬動有禮法、治家以寬嚴稱在夫室七年、謙柔柔順無嫌妒之行左右有過失、則以理責故未嘗施鞭撻、而衆自畏其嚴門之內、雍雍然無間言此其婦事之宜也。	蘇轍欽、集賢校理	『蘇魏公集』卷六十	
0209	同安郡君狄氏墓誌銘			北2	1069	熙寧2年	69	17	北1	1017	7	4	3	正四品	郡君		從八品	徐州錄事參軍	30	板直學士尚書工部侍郎	正八品	太常博士	前湖南路澧州長沙縣	兩浙路湖州丹徒縣	路間	【賞贊】夫人性柔順父母愛贊之。擇名士宜歸我伯父之室。青年十七能自朝夕勸婦事方侍。	王珪 門下侍郎(從三品)	『華陽集』卷五十七		
0210	比部杜君夫人崔氏墓誌銘			北2	1069	熙寧2年	72	19	北1	1016	11	8	3			正四品	秘書監	從三品	工部侍郎	正七品	尚書比部員外郎	從八品	軍事判官得作監主簿				【行狀】夫人少而賢思為父母所鍾愛。年十九歸之、事舅姑至孝曲盡婦道、皇姑福昌君以嚴婦治內人不堪其勞。 【教育】平居好讀經史佛書既曉其義亦必終身行之復間為歌詩皆有清思善教諸子而均其撫養人莫知其有婦道焉。	范純仁 觀文殿大學士(從二品)	『范忠宣公集』卷十二	
0211	夫人葉氏墓誌銘			北2	1069	熙寧2年	25	20	北2	1064						正七品	都官員外郎	從九品	將仕郎(唐)				福建路興化軍仙遊縣	兩浙路湖州	闕接路間	【行狀】夫人歸而語諸母曰「予不以進事舅姑為恨」幸而有女公可事矣。	黃裳、禮部尚書(從二品)	『東山集』卷三十四		
0212	壽安縣太君張氏墓誌銘			北2	1069	熙寧2年	87		北1	1000	5	4	1	正五品	縣太君		正七品	尚書比部員外郎		尚書比部員外郎	正六品	光祿少卿進士	京東西路濟州鉅野縣	京東西路濟州鉅野縣	県内	【賞贊】諸孫男女三十人、男多已仕、女多已嫁矣。夫人為人、仁厚莊靜、自為女及既嫁、處內外、親尊卑、長幼、親疎之際、無不當於禮、而恩稱之。其長者皆以為善事我、而平居為等夷及少者、莫不願以為歸也。 【封号】夫人初封河北東路恩州清河縣君、累封清河壽安縣太君。	曾鞏：中書舍人事(正四品)	『元豐類集』卷四十五		
0213	壽安縣君王氏墓誌銘			北2	1069	熙寧2年	39		北2	1048	8	5	3	正五品	縣君		從六品	刑部郎中	正七品	尚書比部員外郎				京東東路青州益都縣	河北西路相州安陽縣	路間	【賞贊】余第四姪尚書比部員外郎正彦妻王氏、故相文正公曾之孫、刑部郎中秘閣校理之女也。歸韓氏以淳約之性、職我內事、能持已不自厚而過眾以均。從正彦(夫)崎嶇將官雖流衣薄食未嘗有不滿之色、和睦內外怡怡如也。 【行狀】宗黨賢之、事其姑安康郡太君、年雖少(こえる、こす)二紀(24年間、十二支の一巡り)承順之道終始不懈。 銘曰：王氏之生賢相之家能紹世法不驕以兮德則多美命兮不避富之報其當爾耶	韓琦 宰相(正一品)、姪	『安陽集』卷四十八	
0214	永安縣君張氏墓誌銘			北2	1069	熙寧2年	57		北1	1030	7	6	1	正五品	縣君	從三品	工部侍郎	正七品	鴻臚寺外郎	從六品	祠部郎中	正八品	贊善大夫大理評事太廟齋郎他	京西北路河南府河南縣	江南西路撫州臨川縣	路間	【行狀】張氏歸東稱良婦、事舅姑以孝聞。有三男子四女子幼惟、夫人義範訓誨、皆至成立。 【學問】夫人晚而喜佛書、不飲酒食肉、衣不文繡其處富貴大家而意誠心為所難能者其又可尚也。	劉攽 中書舍人事(正四品)	『彭城集』卷三十九	
0215	趙縣主墓誌銘	未婚	◎	北2	1069	熙寧2年	19		北2	1068																	鄭雍、翰林學士(正三品)宋庠	『麟溪集』卷二十二		
0216	太康縣君商氏墓誌銘			北2	1069	熙寧2年	74		北1	1013	9	5	4	正五品	縣君		正七品	比部員外郎	從六品	尚書郎中	正八品	著作佐郎他	京東東路昌樂縣	淮南西路揚州廣陳縣(南渡後)	路間	【賞贊】夫人為兒童已能自怡異、于孝父母才、于女子之事皆天性無所勉強。 【行狀】既嫁為人深閑不嗜笑誕初嫁事舅姑惟其所任不違以為難孝子孫先之、以孝睦子其庶適也。	沈括 翰林學士(正三品)	『長興集』卷十三		
0217	夏侯夫人墓誌銘			北2	1069	熙寧2年	69		北1	1018							正八品	大理寺丞						京東東路青州臨淄縣	兩浙路蘇州吳縣	路間	【行狀】夫人事舅姑無所愛惡、而仁其家大小宜之方舅氏在微約窮困之時、夫人身仕其為家仰所有無難衣簪珥未嘗違時之好惡而發取一物中年乃至有美田以食有廣廈以居為富家久之。 【守節】既處士(夫)卒、盡推其畜藏券券呼諸子而告之曰而翁好學為善足以遺而曹此可以為養吾聞口矣。或以家事問之終不一應曰吾老妻猶知教養諸子與諸孫俟死而已無以吾告也。	沈括 翰林學士(正三品)	『長興集』卷十四	
0218	聶氏墓誌銘			北2	1070	熙寧3年	54	15	北1	1031	7	4	3							從七品	著作郎知司農寺丞事						【守節】先人(夫)舉進士志不就以沒。 【教育】先妣日夜教諸子讀書、使舅鹽先人之志後十餘年克始行間得一地。	王珪 門下侍郎(從三品)	『華陽集』卷五十七	
0219	安康郡太君陳氏墓誌銘			北2	1070	熙寧3年	68	18	北1	1020	5	1	4	正四品	郡太君	正八品	衛尉寺丞		進士	正八品	著作佐郎	正七品	尚書職方員外郎	京畿路開封府開封縣	河北西路相州安陽縣	闕接路間	【行狀】年十八歸於韓方兄、天寶婉淑淑事其姑秦國太夫人曲盡婦道。...中略...秦國亦而適之適息女也。 【賞贊】正彦(息子)曰「母太君平生行義德無如叔知之詳細叔當以銘」 【封号】始封保寧縣君、次封保寧縣太君、次封安康郡太君。 銘曰惟人之生云胡不道惟進之戚其敦匪易增安康終也特異勇果展益始次墳寺疾生莫測適不能治勞規夫六平勞而贊非福之全事豈斯契慶焉乙酉實為兄誌日月之馳傳待及茲熙寧辛亥之歲又銘焉親友胡可既書其大方是謂無幾	韓琦 宰相(正一品)、甥	『安陽集』卷四十八	
0220	宗室亳州防禦使宗博故夫人曾寧郡君郭氏墓誌銘	〇		北2	1070	熙寧3年	41	18	北2	1047	2	1	1			從一品	尚書令	從二品	安國軍節度使	從五品	亳州防禦使			河東路太原府	京西北路河南府永安縣	闕接路間	【賞贊】承議君曾諱子曰「亡妻婉婉柔依如出寒素之家仰事舅姑旁接內外之宗下撫僮僕之衆治無一人失其意者不幸短折以死」 【封号】元豐六年天子有事於南部、夫人以承議君陞朝恩封仙源縣君(死後13年)。	劉軻尚書右僕射(從一品)累封曾寧郡君。	『忠齋集』卷十四	
0221	虞夫人墓誌銘			北2	1070	熙寧3年	27	19	北2	1062	1	0	1	正五品	縣君			從九品	助教	從七品	承議郎			兩浙路越州山陰縣	兩浙路湖州山陰縣	路間		秦觀 太學博士(從八品)	『淮海集』卷十三	

0222	周氏夫人行狀				北2	1070	熙寧3年	65	26	北1	1031	2	2	0				從六品	吏部郎中		進士	兩浙路越州山陰縣	兩浙路越州山陰縣	縣內	【賞鑒】夫人天性動倫不務華飾。事嫡夫人孫氏(正妻)能以禮不以府君(夫)之愛輒懈也。皇祐中府君卒。夫人尚居山中又十餘年。迨族人析生。夫人已百有(老年)矣。始歸于家謝去。生事而誦淳熙之書以永日。 【守節】夫人始三十七歲而大理君(夫)早世。家益困。諸孤巖然二子長文長卿尚穉未有所識。 【教育】夫人攻苦食淡躬自誨之捐貲幣使就學暮歸必考其業。而隸其記誦之精否平居督戒不得妄與人游常所往來必一時間人每客至。夫人從戶窺之信其欺為親具酒食致延見不厭也。一有非是立誅以絕故二子稍長皆好學。而文典中多以夫人教子為法其後長卿以主簿待。	陸佃尚書右丞(正三品)	《鄧山集》卷十六	
0223	夫人吳氏墓誌銘				北2	1070	熙寧3年	68		北1	1020	7	3	4			正九品	右侍禁	從三品	工部侍郎	正八品	著作佐郎	兩浙路臨安府錢塘縣	襄陽路鳳州	路間	陳襄給事中(正四品)	《古靈集》卷二十	
0224	秦國太夫人竇氏墓誌銘				北2	1070	熙寧3年	88		北1	1000	2	1	1	太夫人	正八品	太子中舍	正七品	比部員外郎	從一品	正一品	丞相兼賢殿大學士	河北西路相州安陽縣	兩浙路潤州丹徒縣	路間	陳襄給事中(正四品)	《古靈集》卷二十	
0225	長壽縣太君楊氏墓誌銘				北2	1071	熙寧4年	81	19	北1	1009	6	4	2	正五品	縣太君			正八品	太常博士	正七品	職方員外郎 留學進士	成都府路彭州濛陽縣	成都府路成都府成都縣	路內	文同：太常博士(正八品)	《丹淵集》卷四十	
0226	太常少卿楊公夫人福昌縣君王氏墓誌銘				北2	1071	熙寧4年	63		北1	1026	4	2	2	正五品	縣君	從一品	中書令	正七品	尚書兵部員外郎	從五品	太常少卿				強至尚書祠部郎中(從六品)	《祠部集》卷三十五	
0227	故錢夫人墓誌銘				北2	1072	熙寧5年	47	15	北1	1040	6	2	4												楊傑禮部員外郎(正七品)	《無爲集》卷十四	
0228	永寧縣君李氏墓誌銘				北2	1072	熙寧某年(→5年)	45	18	北2	1045	3	1	2	正五品	縣君			正五品	殿中侍御史	從八品	錄事參軍	河北西路相州臨漳縣/鄆縣	河北西路磁州潞安縣	路內	晁補之禮部郎中(從六品)	《雞肋集》卷六十七	
0229	文安縣君劉氏墓誌銘				北2	1072	熙寧5年	48		北1	1042	6	6	0	正五品	縣君		正八品	著作佐郎	正八品	太子中允	正八品	太常博士	成都府路蘭州陽安縣	成都府路成都府華陽縣	路內	文同：太常博士(正八品)	《丹淵集》卷四十
0230	萬壽縣令張君夫人蘇氏墓誌銘				北2	1072	熙寧5年	42		北2	1048						正三品	翰林學士	正八品	縣令			兩浙路潤州丹徒縣	淮南東路揚州廣陵縣(南渡後)	廣接路間(短)	蘇頌、太子少師(從二品)	《蘇魏公集》卷六十二	
0231	萬年縣君許氏夫人墓誌銘				北2	1073	熙寧6年	72	17	北1	1018	5	5	0	正五品	縣君		從六品	兵部郎中	正七品	職方員外郎			兩浙路蘇州吳縣	淮南東路揚州江都縣	廣接路間(短)	沈括翰林學士(正三品)	《長興集》卷十五
0232	故仙源縣君陳氏墓誌銘				北2	1073	熙寧6年	28		北2	1063	4	3	1	正五品	縣君		正七品	駕部員外郎	正八品	太子中允			福建路泉州晉江縣			楊傑禮部員外郎(正七品)	《無爲集》卷十四
0233	太師中書令兼尚書令楚國公姐楚國太夫人馬氏行狀				北2	1073	熙寧6年	76		北1	1015	8	4	4	正一品	國太夫人			從一品	太師從一品中書令	正三品	觀文殿學士	京畿路開封府開封縣	京畿路開封府開封縣	縣內	王安石禮林學士(正三品)	《王魏公集》卷七	
0234	畢氏墓誌銘		未婚		北2	1073	熙寧6年	18		北2	1073						從六品	尚書駕部郎中(畢從古)								畢仲游、吏部郎中(從六品)、妹	《西臺集》卷十四	
0235	宗室右龍武軍大將軍萊州團練使克憲妻安壽縣君武氏墓誌銘率勳撰		○		北2	1073	熙寧6年	55		北1	1036	5	3	2	正五品	縣君			正四品	右龍武軍大將軍	從三品	右羽林大將軍(唐)			京西北路汝州梁縣		沈括翰林學士(正三品)	《長興集》卷十五
0236	故廬江田府君夫人趙氏墓誌銘				北2	1073		79		北1	1012	3	2	1										京西南路鄆州南陽縣	淮南西路無為軍廬江縣	路間	楊傑禮部員外郎(正七品)	《無爲集》卷十四
0237	淳于氏墓誌銘		繼室		北2	1073						5	4	1					正七品	虞部員外郎				京東東路濟南府	京西北路鎮昌府	路間	沈括翰林學士(正三品)	《長興集》卷十四
0238	仁壽縣太君魏氏墓誌銘				北2	1074	熙寧7年	正八品	15	北1	####	9	5	4	正五品	縣太君			正八品	大理寺丞	正七品	屯田員外郎 進士他	成都府路成都府成都縣	成都府路成都府成都縣	縣內	呂陶集賢院學士(正三品)	《淨德集》卷二十七	
0239	仙源縣君曾氏墓誌銘				北2	1074	熙寧7年	31		北2	1061	4	2	2			正七品	尚書都官員外郎	正七品	尚書屯田員外郎			京西南路建昌軍南豐縣	淮南東路揚州江都縣	路間	曾鞏中書舍人事(正四品)妹	《元豐類聚》卷四十六	
0240	壽安許夫人墓誌銘				北2	1074	熙寧7年	88		北1	1004	2	1	1				從四品	誥讀大夫				前湖南路衛州衛輝縣	前湖南路衛州衛輝縣	縣內	劉軻尚書右僕射(從一品)	《忠獻集》卷十四	
0241	壽安縣太君何氏墓誌銘				北2	1075	熙寧8年	81	14	北1	1008	3	3	0	正五品	縣太君						留學進士	咸安			文同：太常博士(正八品)	《丹淵集》卷四十	
0242	福昌縣太君李氏墓銘				北2	1075	熙寧8年	78	15	北1	1012	3	1	2	正五品	縣太君								江南東路江寧府上元縣	前湖南路衛州衛輝縣	路間	沈遼將作監主簿(從八品)	《雲溪編》卷九





0294	劉夫人墓誌銘			北2	1085	元豐8年	81	17	北1	1021	9	7	2			正八品	大理寺丞	從四品	金吾衛將軍	正二品	參知政事朝奉大夫	從六品	尚書司勳中朝議郎朝散郎	京畿路開封府開封縣	前湖北路蜀州	路間	【行狀】夫人事其姑，能委曲順其意，嘗侍疾不解。衣累月凡姑所欲不求，而獲所不欲無一至前者，既愈謂家人「日微是婦吾不起矣，命諸女拜之而弗答也。」	蘇軾·翰林學士(正三品)	《東坡集》卷八十九
0295	右千牛衛將軍妻仙源縣君王氏墓誌銘	◦	北2	1085	元豐8年	19	17	北2	1083	3	1	2	正五品	縣君		從五品	國祿使	從四品	右千牛衛將軍			京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	橫接路間	【行狀】君王氏年十七嫁，事舅姑孝，睦夫族曲有禮意，居務簡儉。	范祖禹·給事中(正四品)	《范太史集》卷四十八		
0296	左承議郎妻崇德縣君宋氏墓誌銘	◦	北2	1085	元豐8年	21	18	北2	1082	2	1	1	正五品	縣君	從八品	西頭供奉官	正九品	左侍禁	從七品	右監門率府率			京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	橫接路間	【學問】君性靜慧，喜翰墨，博論浮屠書，戒家人不殺生物。	范祖禹·給事中(正四品)	《范太史集》卷四十六	
0297	夫人王氏墓誌銘		北2	1085	元豐8年	41	19	北2	1063	5	4	1					從六品	朝請大夫	從九品	縣尉			京畿路開封府咸平縣	兩浙路紹安府餘杭縣	路間	【行狀】夫人華于容、介于性、孝于姑、順于夫。	黃裳·禮部尚書(從二品)	《東山集》卷三十四	
0298	長安郡太君高氏墓誌銘		北2	1085	元豐8年	89	19	北1	1015	6	3	3	正四品	郡太君			正六品	東上閣門使	正七品	朝請郎	朝議郎太子中舍國子博士		京西北路穎昌府長社縣	兩浙路湖州丹徒縣	路間	【賞鑒】夫人恭靜和順能成君子之志事，上率下舉動有法，周其族人曲盡禮無不得其歡心，舅姑則曰「順婦也。」姪婦則曰「賢婦也。」六親(父·子·兄·弟·夫·婦、全身內則曰「仁姑也。」)	蘇頌·太子少師(從二品)	《蘇魏公集》卷六十二	
0299	孝女程氏墓誌	未婚	北2	1085	元豐8年	25		北2	1078								正八品	宗正寺丞(程綬)					京西北路河南府河南縣			孝女程氏其第二十九有宋名臣諱羽之後故宗正寺丞綬之女。沒世雖恨其死不恨其未嫁也。其生以嘉祐辛丑九月庚戌，其卒以元豐乙丑二月丙寅。葬於伊川先塋之東，是年十月之酉也。叔父頤誌。	程頤·國學者、姪	《伊川集》卷十二	
0300	董夫人墓誌銘		北2	1085	元豐8年	72		北1	1031	2	2	0							從六品	尚書水部郎中			京畿路開封府開封縣	京畿路開封府祥符縣	州內	【賞鑒】夫人有加其後持永和(姑)之喪及其喪事，春秋皆知禮意慈祥，而不欺善人之善而好施。	黃庭堅·起居舍人(從六品)	《山谷外集》卷八	
0301	單卿夫人張氏墓誌銘		北2	1085	元豐8年	84		北1	1019	5	3	2	正四品	郡君			正八品	太常博士		正八品	通直郎直學士		永興軍路京兆府萬年縣	河北東路德州平原縣	路間	【行狀】夫人家居事繼母、有聞博士(父)為擇對以嫁平原原公婦。而事嚴姑如事繼母、力賞為家不以累、其夫故單公得讀書登進士第，而歸於朝以禮終始。	黃庭堅·起居舍人(從六品)	《山谷外集》卷八	
0302	歸國長公主追封記	未婚	◎	北2	1085	元豐8年	4		北3	1085	4						神宗皇帝									元豐5~8年(1082~1085) 四歲卒 父·神宗、母·朱氏(皇太妃)	范祖禹·給事中(正四品)	《范太史集》卷五十三	
0303	贈祿州防禦使康平侯妻王氏墓誌銘		○	北3	1086	元祐元年	21	15	北2	1080	2	1	1		從五品	國祿使	正八品	內殿承制	從五品	防禦使	正九品	右班殿直	京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	橫接路間	【行狀】夫人王氏在家孝于父母、既嫁又能孝事其姑，性溫靜口不言、人是非常尊稱之曰如老成人。	范祖禹·給事中(正四品)	《范太史集》卷五十二	
0304	仁壽縣君鮑氏墓誌銘		北3	1086	元祐元年	51	15	北2	1050	8	5	3	正五品	縣君					從八品	直翰林院醫官院	從八品	翰林院醫官	京畿路開封府開封縣	京畿路開封府開封縣	縣內	【賞鑒】幼有至性，五歲侍母病不解衣下榻(湯伯)，族人寄之【行狀】及葬父從周以歸直翰林院醫官院君。昭式遺事舅姑其孝不衰焉。為人恭儉衣服惟寄之具取潔。	陸佃·尚書右丞(正三品)	《陶山集》卷十六	
0305	右監門衛大將軍妻王氏墓誌銘	○	北3	1086	元祐元年	20	16	北2	1082	2	1	1		從七品	文思副使	從八品	東頭供奉官	正四品	右監門衛大將軍			京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	橫接路間	【學問】君端嚴聰穎，喜讀書，善為歌詩精于筆札父嘗寄之。	范祖禹·給事中(正四品)	《范太史集》卷四十六		
0306	任夫人墓誌銘		北3	1086	元祐元年	25	17	北2	1078	3	2	1		從六品	尚書都官郎中		進士					潼川府路通縣	江南西路洪州分寧縣	橫接路間	【銘文】吾友廖明略自安陸寓書京師乞予銘，其妻任夫人之墓，其狀曰「任氏塋生十七年，三子男曰青箱、青規、女曰念二，不幸年二十五而卒。性敏慧頗通書，素婉孝仁、在室而樂、先夫人愛之如己子。……」	黃庭堅·起居舍人(從六品)	《山谷外集》卷八		
0307	右監門衛大將軍妻永安縣君夏侯氏墓誌銘	◦	北3	1086	元祐元年	23	17	北2	1080				正五品	縣君	從九品	安陸尉	正九品	右侍禁	正四品	右監門衛大將軍			京西北路河南府永安縣			【賞鑒】君勤孝儉約，夫族宣之、封四京河南府永安縣君		《范太史集》卷五十二	
0308	閻氏墓誌銘		北3	1086	元祐元年	77	17	北1	1026	8	4	4							正八品	太子洗馬	從八品	宣德郎	京畿路開封府開封縣	京東西路瀋州鄆陽縣	橫接路間	【守節】閻氏奉其家事倍加、侯(夫)不恤(亡)而教其男女以職內外有法度。	晁補之·禮部郎中(從六品)	《雞肋集》卷六十六	
0309	趙夫人墓誌銘		北3	1086	元祐元年	31	18	北2	1073	4	3	1								進士			前湖北路安州安陸縣	前湖北路安州安陸縣	縣內	【學問】夫人幼少聰慧，讀書諳詩通其義義說。【行狀】年十八歸李君。夙夜舅姑之所恭順。	黃庭堅·起居舍人(從六品)	《山谷外集》卷八	
0310	黃氏二室墓誌銘(孫氏)	妻	北3	1086		20	18	北2	1084					從三品	龍圖閣直學士				從九品	縣尉			兩浙路嘉州南谿縣	江南西路洪州分寧縣	路間	【賞鑒】黃氏能執婦道，其居室相保惠、教誨有遺善改過之美、家人短長不入。	黃庭堅·起居舍人(從六品)妻	《山谷外集》卷八	
0311	右屯衛大將軍妻平原縣君張氏墓誌銘	◦	北3	1086	元祐元年	28	19	北2	1077	1	0	1	正五品	縣君	正五品	殿中丞	正九品	左班殿直	正四品	右屯衛大將軍			河東路太原府陽曲縣	京西北路河南府永安縣	橫接路間	【守節】屯衛(夫)遭從父諸父姑姊姑執婦禮以見者數十人。君待以和敬一無間言。屯衛損敗既除喪。君尚少父以其無子欲更嫁之。君泣以死自誓不許。	范祖禹·給事中(正四品)	《范太史集》卷五十	
0312	黃氏夫人墓誌		北3	1086		33	20	北2	1073	1	1	0										河北西路南昌縣/豫章	京西北路南昌縣/豫章	縣內	【行狀】年二十母嘗光李夫人以嫁進士陳望。事其姑樂夫人、樂夫人學問明習常稱、夫人事我如我事先姑也。不幸早世年三十有三。樂夫人哭之甚哀一男子曰壽未免於懷樂夫人力救之今寧能知書。夫人沒五年樂夫人損題書。	黃庭堅·起居舍人(從六品)	《山谷外集》卷九		
0313	黃氏二室墓誌銘(謝氏)	妻	北3	1086		26	20	北2	1080	1	0	1					從六品	朝散大夫	從九品	縣尉			河東路汾州介休縣	江南西路洪州分寧縣	路間	【賞鑒】夫人愛敬不倦，侍疾嘗獨不解衣，至於復常 脩禪學定、而不處女工、能為詩、而叔妹不知也。	黃庭堅·起居舍人(從六品)妻	《山谷外集》卷八	
0314	叔母卓夫人墓誌銘	叔母	北3	1086		62		北1	1042	4	2	2										江南西路洪州分寧縣	江南西路洪州分寧縣	縣內	【陳言】叔母卓氏，洪州分寧縣人，處士諱積之夫人。夫人幼喜讀書弄筆墨、父母禁之、與諸女相、夜續侍其寢息乃自課課由是知書事父母居其事父母居其責以純孝聞。年若千猶叔父。叔父性尚醇酒好賓客、客籍喧嘩責解。夫人怡然從令未嘗不盡姑也。叔父平日大率常醉或使過閭閻。夫人承之未嘗不以禮也。夫人嘗謂叔父之不甚醉時課曰「君終日如是使諸子皆法象何以為家。」叔父曰「吾兄弟之子多賢克家者自當不法，我而法彼也。」	黃庭堅·起居舍人(從六品)叔母	《山谷外集》卷八		
0315	辛夫人墓誌銘		北3	1086		若干				2	0	2					正七品	尚書駕部員外郎	從八品	并州軍事推官			京西北路穎昌府陽慶縣	兩浙路湖州丹陽縣	路間	銘曰：道宗告所與游潯漳黃庭堅曰「吾妻不幸蚤世。然其行云云。有足銘者予為我、銘其善遂用其言為銘。」銘曰(夫)：「嗚呼夫人淑慎柔嘉、宜靜宜宴、歸寧外家始從夫子在仕養親視去、舅姑如去、父母為笑言靜好讀書。」	黃庭堅·起居舍人(從六品)	《山谷外集》卷八	
0316	右屯衛大將軍妻崇德縣君張氏墓誌銘	◦	北3	1086	元祐元年	30		北2	1074	3	2	1	正五品	縣君			正九品	左侍禁	正四品	右屯衛大將軍	從九品	三班奉職	京西北路河南府永安縣			【守節】屯衛平、君 家居不樂其生。【行狀】父事母以孝聞。既歸不及其舅、事姑如事母、族人稱焉。	范祖禹·給事中(正四品)	《范太史集》卷五十	
0317	徐王第八女墓記	未婚	◎	北3	1086	元祐元年	3		北3	1101							英宗皇帝	徐王(皇叔)								【行狀】父事母以孝聞。既歸不及其舅、事姑如事母、族人稱焉。	范祖禹·給事中(正四品)	《范太史集》卷五十三	
0318	右侍禁妻王氏墓誌銘	○	北3	1086	元祐元年	18		北3	1086	3	2	1		從八品	西頭供奉官	從七品	供備庫副使	正九品	右侍禁				京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	橫接路間	【賞鑒】王氏當性素明、服膺婦道善於女工、不妄笑語、儉身以禮居、家以儉事、上接下為人所稱。	范祖禹·給事中(正四品)	《范太史集》卷四十五	
0319	右監門衛大將軍妻王氏墓誌銘	◦	北3	1086	元祐元年	23		北2	1081	3	2	1	正五品	縣君	從二品	節度使	正七品	西京左威軍使	正四品	右監門衛大將軍	從九品	三班奉職	京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	橫接路間	【賞鑒】王氏性溫和、動履甚宜其家。	范祖禹·給事中(正四品)	《范太史集》卷四十八	
0320	賀州團練使妻長安縣君侍其氏墓誌銘	◦	北3	1086	元祐元年	37		北2	1067	12	7	5	正五品	縣君	從七品	供備庫副使	正九品	右侍禁	正四品	右武衛大將軍	從七品	右監門率府率	京西北路河南府永安縣			【行狀】君事舅姑孝、閨門雍穆無愆色怨言、治家有常法、飲食衣服器血不為華侈、取適而已。	范祖禹·給事中(正四品)	《范太史集》卷四十八	
0321	贈崇德縣君任氏墓誌銘		北3	1086	元祐元年	27		北2	1077	5	1	4	正五品	縣君			從三品	尚書戶部侍郎		從八品	定州司戶參軍		京東西路曹州定陶縣	福建路泉州晉江縣	路間	【賞鑒】夫人有善行必以告其族、嘗為法家大門處之能無憾於禮義睦睦者宜其為難而尊者取之其善以令其家可美其無憾也。	沈括·翰林學士(正三品)	《長真集》卷十八	
0322	壽安縣太公孫氏行狀		北3	1086	元祐元年	77		北1	1027	4	1	3	正五品	縣太君	從九品	縣主簿	正八品	秘書郎	從五品	中散大夫			京東西路澤州河內縣	兩浙路湖州歸安縣	橫接路間	【賞鑒】夫人尤恭敬敬、夙夜宮事不違、衣服飲食無華好、內外言不交、于備非晨昏定省銘祀銘 銘下堂。	晁補之·禮部郎中(從六品)	《雞肋集》卷六十二	



0350	周夫人墓誌銘	母		北	3	1088	元祐3年	69	18	北	1	1037	7	4	3				世爲巨室	從九品	縣尉	正八品	縣令進士	江西南西路吉州安福縣	江西南西路吉州安福縣	縣內	【守節】君不幸曾未及昏嫁、夫人纔四十餘、未間生業收書萬卷以授諸子。 【賞贊】明年九月二十五日、余(長男)與諸弟奉夫人喪、斬途得沙之黃原陳近、代鄆師立忠公母舅少能知其子必顯文忠出陳陳名義著天下有母之助焉。今天人之子志行問學已知去此安知異日不到前賢此路非特焉。夫人慶亦便知陳陳多賢母也。	劉奎、著作佐郎(正八品)母	『龍雲集』附錄				
0351	左侍禁妻郭氏墓誌銘		○	北	3	1088	元祐3年	24	23	北	3	1087	1	1	0		正四品	左千牛衛大將軍	正七品	左藏庫使	正九品	左侍禁	京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	隣接路間	【賞贊】君生數歲已能承順、父母顏色既長、異父白其母曰「不孝早孤、幼勞無所報惟是不嫁以終養母、母兄不能仰處室。二十三歲、宗室士泉聞其孝行嘆曰吾「母亦奉居歲久幼弟未嘗若得此女爲婦使婦姑共奉甘旨豈不善歟道行媒力請于長安君。長安君感其意事君志而嫁之、遂進士果希左侍禁士被君。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十一					
0352	長安縣君祝氏墓誌銘			北	3	1088	元祐3年	68		北	1	1038	4	4	0	正五品	縣君		正四品	秘書監	正八品	奉議郎	正七品	朝請郎他	京東西路曹州濟陰縣	京東西路曹州濟陰縣	縣內	【行狀】夫人之歸、率其姑以孝、從其夫以禮友、其夫之妹以和、教其子以立己之大方、制制紹繼之事、雖勞必親、類諸畫畫之惠、雖老必勤、女巧婦道、兼修兩得、由是閨閣之內、益治而明、至于不講佛書、不講淫祀、惟儒者禮法是從、皆婦人之所難能者。 【賞贊】元祐三年春先生(夫)患疾幾殆、夫人焚香祈禱以身代死。家人止之不聽俄而疾暴作燔香炉地扶掖就枕已不知人、後六日夫人病寢、而先生疾稍間先生竟愈、而夫人遂不起、時二月二十日也。初夫人之折死也。 【行狀】夫人遺事舅姑、事先生如事父治飲食以進必立侍須臾辭乃去或者以爲過。	呂陶、集賢院學士	『淨德集』卷二十七			
0353	史夫人行狀			北	3	1088	元祐3年	56		北	2	1050	2	1	1		正八品	大理寺丞				進士		前湖北路眉州青神縣	前湖北路眉州丹稜縣	州內	【賞贊】元祐三年春先生(夫)患疾幾殆、夫人焚香祈禱以身代死。家人止之不聽俄而疾暴作燔香炉地扶掖就枕已不知人、後六日夫人病寢、而先生疾稍間先生竟愈、而夫人遂不起、時二月二十日也。初夫人之折死也。 【行狀】夫人遺事舅姑、事先生如事父治飲食以進必立侍須臾辭乃去或者以爲過。	唐庚承議郎(從七品)	『眉山文集』卷五				
0354	右侍禁女墓記	未婚	◎	北	3	1088	元祐3年	2		北	3	1104					正五品	華州觀察使	正九品	右侍禁											范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十三	
0355	右監門衛大將軍之女墓記	未婚	◎	北	3	1088	元祐3年	7		北	3	1099					正四品	鎮海軍節度觀察留後	正四品	右監門衛大將軍												范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十三
0356	右千牛衛將軍第二女墓記	未婚	◎	北	3	1088	元祐3年	1		北	3	1105					正四品	左金吾衛大將軍	從四品	右千牛衛將軍												范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十四
0357	昭州防禦使女墓記	未婚	◎	北	3	1088	元祐3年	5		北	3	1101					從二品	保安軍節度使	從五品	昭州防禦使												范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十四
0358	右監門衛大將軍妻秦州團練使妻金華縣君石氏墓誌銘		◦	北	3	1088	元祐3年	43		北	2	1063	15	8	7	正五品	縣君	從四品	右屯衛將軍	從七品	供備庫副使	正四品	右監門衛大將軍	京西北路河南府永安縣	京西北路河南府永安縣	州內	【行狀】幼專靜不爲嬉戲。長進事舅姑孝、接親族恭、教育子孫均一。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十七				
0359	羅氏墓誌銘	繼室		北	3	1088	元祐3年	53		北	2	1053	8	6	2	正五品	縣太君		正八品	國子博士	正八品	大理評事	正八品	奉議郎直學郎他	京畿路開封府開封縣	京畿路開封府開封縣	縣內	【守節】歸四年產一子而李君(夫)卒。居喪以禮編紀其家事無所、關其母懷之欲使再行、夫人陳義甚高卒不可奪。 【教育】初李君(夫)前配苗氏有男女八人、李君沒而幼、夫人躬親養育於其存非家人不知其有異母出也。及見其次子士賢登朝封壽安縣太君、諸子皆宦學有立女有婦矣。	晁補之、禮部郎中(從六品)	『續助集』卷六十六			
0360	甯氏墓碣			北	3	1088	元祐3年	68		北	1	1038																				晁補之、禮部郎中(從六品)	『續助集』卷六十六
0361	張氏墓誌銘	妻		北	3	1088	元祐3年	42		北	2	1064	12	8	4				陰德不仕			居士	正九品	左班殿直	福建路南劍州將樂縣	隣接路間	【良婦】夫人資靜淑仁謹、於事佛崇善好施、姻族內外貧窶者必歸焉。	楊時龍圖閣直學士(從三品)、妻	『龜山集』卷三十				
0362	左侍禁妻范氏墓誌銘		○	北	3	1089	元祐4年	23	15	北	2	1081	4	3	1		正八品	內殿崇班		進士	正九品	左侍禁	京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	隣接路間	【賞贊】君既歸于鄧州防禦使趙國公之子左侍禁子間。性質溫粹、儀度端雅、喜習筆札尤嗜書史。 【行狀】事舅姑謹孝、姑愛之如己女、中外宗族一無間言。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十一					
0363	右千牛衛將軍妻李氏墓誌銘		○	北	3	1089	元祐4年	21	15	北	2	1083	1	1	0		從四品	衛尉卿		從四品	右千牛衛將軍		京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	隣接路間	【行狀】事舅姑孝、而謹接幼少和、而肅千午(夫)有美才、善爲文章、尤通音律。君間其講讀書史、留意翰墨則稍習當聲樂則終日若有戚容、千午嘉其志忘屏他好自力于學試有司中高選君有內助焉。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十七					
0364	右屯衛大將軍妻安樂縣君陳氏墓誌銘		◦	北	3	1089	元祐4年		15				8	7	1	正五品	縣君	正八品	大理評事	從八品	東頭供奉官	正四品	右屯衛大將軍	京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	隣接路間	【行狀】夫人幼習書未弄進右屯衛大將軍世祚、事舅姑孝謹、撫育子孫、下逮孫御莫敢不肅而皆得其歡心。內外親族莫之者必歸德之、親疏輕重各稱其情人情無間言。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十九				
0365	右侍禁妻翟氏墓誌銘		○	北	3	1089	元祐4年	19	15	北	2	1085					從七品	供備庫副使	從八品	宣德郎	正九品	右侍禁	京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	隣接路間	【行狀】君幼端麗勤于女工組紉之事、承順父母顏色無違、年十五歸事舅姑盡婦道從夫。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十八					
0366	左班殿直妻姚氏墓誌銘		○	北	3	1089	元祐4年	17	15	北	3	1087	1	0	1			從二品	節度使	從八品	宣德郎	正九品	左班殿直	京西北路河南府永安縣			【行狀】事舅姑盡婦道、虛靜門之內肅如也。趙君伯叔兄弟最衆多。君率其長以敬待其幼以下至婢妾皆得其歡心。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十八				
0367	夫人林氏墓誌銘	妻		北	3	1089	元祐4年	79	15	北	1	1025	3	2	1												【賞贊】既葬歸陳君、迄白首作止皆中義理、內外上下安之爲女爲婦爲母爲姑者皆指以法。陳君少有四方志己而所將樂轉拂衣還里門、以詩訓諸子且招書士爲之師。夫人於時善室中物實地築室佐其事無一毫顧惜。	鄭浩、龍圖閣直學士(從三品)	『道鄉集』卷三十七				
0368	右侍禁妻劉氏墓誌銘		○	北	3	1089	元祐4年	19	17	北	3	1087					從四品	左監衛將軍	從七品	供備庫副使	正九品	右侍禁	南浙路台州黃巖縣	京西北路河南府永安縣	路間	【賞贊】君嘗覽婉淑性謙恭、巧于女工、通文史能爲詩。 【行狀】奉舅姑孝、事夫順族人情之。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十八					
0369	趙氏夫人墓誌銘			北	3	1089	元祐4年	28	18	北	2	1079	4	3	1								知秀州	京西南路鄧州南陽縣	南浙路秀州嘉興縣	路間	【賞贊】夫人歸於我其歸也、其母西安君李、有不果見雖使人問衣懷寒往時、食客滿吾門。	毛齊、知秀州、妻	『東堂集』卷十				
0370	李夫人墓誌			北	3	1089	元祐4年	70	18	北	1	1037	5	1	4		從二品	禮部尚書	從六品	工部郎中	正八品	大理寺丞	從八品	宣德郎	河北西路鎮定府真定縣	京畿路開封府開封縣	隣接路間	【行狀】夫人年十有八歸大理君、性純孝敬靜。其事舅姑能先意集事飲食衣服非經其手不以薦而舅姑亦日非新婦之所爲吾食不甘服不安也。 【烈婦】大理君遭判登州卒于官、一男始生夫人獨護其喪還京師、舟人搶舟、而逃夫人正色叱之命取板挈兒以免然家無長男子道遠從者憊夫人能能言之官府稱謂之以寡婦行艱危數千里無敗事而內外始知其才非獨婦人常職而已也。	張集、起居舍人(從六品)	『柯山集』卷五十一			
0371	右監門衛大將軍妻仁和縣君曹氏墓誌銘	繼室	◦	北	3	1089	元祐4年	19	18	北	3	1088	6	2	4	正五品	縣君	正七品	朝奉郎	正八品	奉議郎	正四品	右監門衛大將軍	京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	隣接路間	【學問】君事父母孝、性尚儉素。好讀儒者書、作五七言詩百有餘篇、人多誦之其筆札亦精妙、父嘗曰「此女所配宜得賢君子。」	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十一				
0372	歐陽文忠公夫人薛氏墓誌銘	繼室		北	3	1089	元祐4年	73	20	北	1	1036	11	8	3	正二品	郡太夫人		正三品	溫陵殿學士	正二品	參知政事	正七品		河東路絳州正平縣	江西南西路吉州吉水縣	路間	【賞贊】歐陽氏治其家事文忠所以得盡力于朝而不恤其私者夫人之力也。夫人簡肅公之第四女母曰金城夫人亦賢婦人也。夫人高明清正而敏於事有父母之風夙。歸于歐陽氏、治其家事、享年七十有三、元祐四年八月戊午終于京師。十一月甲申祔、於文忠之塋。夫人始以文忠貴封壽安縣君、八遷爲仁壽郡夫人、復以其子三遷封安康郡太夫人。 【封号】夫人始以文忠貴封壽安縣君、八遷爲仁壽郡夫人、復以其子三遷封安康郡太夫人。	蘇轍、文學者	『東坡集』卷二十五			

0373	壽昌郡太君陳氏墓誌銘	繼室		北 3	1089	元祐4年	74	20	北 1	1035	10	6	4	正四品	郡太君	從一品	相和文忠公	從六品	尚書都官郎中	從六品	尚書駕部郎中	從七品	承議郎承議郎通直郎	利州路開州開中縣	京西北路鄜州	路間	【行狀】夫人遺事其舅衛尉卿能盡孝敬人有稱之。夫人曰「昔我祖姑楚國夫人、之事其姑視夫人也。」 【守節】正議(夫)卒官壽春時諸子猶未冠。家故貧匿無所歸離陽族人以書招之、夫人答曰「吾夫平生未嘗有秋毫取于人、今死未久豈以妻子 錫族屬耶、竟不肯往遂家淮所躬親紡績以自給。」 【教育】教其子以經史文章法書及近代名臣善言懿行、以宣其學久益不倦。...其後三子並舉進士登科。 【封尊】始從夫封馬頰縣君、後用子進德興壽昌二縣太君。夫人曰「汝必欲以此爲孝。」當先嫡夫人故諸子用其言封、前母楊氏爲永嘉郡太君、而夫人之號未及改也。	蘇頌、太子少師(從二品)	『蘇魏公集』卷六十二
0374	吳氏墓銘	繼室		北 3	1089	元祐4年					4	3	1										江南東路饒州樂平縣	江南東路饒州餘干縣	縣內	【賞贊】母生昭康八歲而死、後母適之如母翁他日遠游字見益顯陳母常提携視寒暄渴饑至於成人知時學感母孝教也。	毛齊知秀州	『東堂集』卷十	
0375	安化郡節度觀察留後高密郡公妻德安縣君郭氏墓誌銘		○	北 3	1089	元祐4年	44		北 2	1063	18	9	9	正五品	縣君				正四品	節度觀察留後	正四品	右監門衛大將軍右班殿直三班奉職	京畿路開封府襄邑縣	京西北路河南府永安縣	路間	【賞贊】夫人郭氏性靜。治家有常法、其飲食器血雖不豐侈、而必精以旨其衣無故新弊濯縫紉、必潔以完其語言周旋容止進退必從容以和。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十二	
0376	右監門衛大將軍女墓記	未婚	◎	北 3	1089	元祐4年								正四品		鎮海軍節度觀察留後	正四品	右監門衛大將軍										范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十三
0377	右監門率府率第二女墓記	未婚	◎	北 3	1089	元祐4年	1		北 3	1106				正五品		蘇州觀察使	從七品	右監門率府率										范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十三
0378	右監門率府率第三女墓記	未婚	◎	北 3	1089	元祐4年	1		北 3	1106				正五品		蘇州觀察使	從七品	右監門率府率										范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十三
0379	密州觀察使之女墓記	未婚	◎	北 3	1089	元祐4年	10		北 3	####				正四品		武勝軍節度觀察留後	正五品	密州觀察使										范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十三
0380	右監門衛大將軍之女墓記	未婚	◎	北 3	1089	元祐4年	12		北 3	1095				正四品		鎮海軍節度觀察留後	正四品	右監門衛大將軍										范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十三
0381	右屯衛大將軍妻靜安縣君鄭氏墓誌銘		○	北 3	1089	元祐4年	29		北 2	1078	3	3	0	正五品	縣君	正四品	左衛大將軍	正八品	內殿承制	正四品	右屯衛大將軍	從九品	三班奉職三班奉職	京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	路間	【守節】嫁六年而屯衛卒。夫喪盡哭哀夜止心內慘怛、而寡舅姑親常舒裕、見者不知其抱憂戚也。 【行狀】君歸屯衛爲冢婦、敬事舅姑如事父母、溫和謙謹喜愠不形于色居。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十二
0382	右監門衛大將軍天水郡開國侯妻新安縣君陳氏墓誌銘		○	北 3	1089	元祐4年	62		北 2	1045	25	9	16	正五品	縣君	正七品	祠部員外郎	從九品	縣主簿	正四品	右監門衛大將軍	正四品	右屯衛大將軍右班殿直	江南西路袁州分宜縣	京西北路河南府永安縣	路間	【教育】天水公廷置門下皆宿師老儒。夫人厚具供給諸子皆以藝業稱而諸孫亦舉進士。事母孝氏盡其力母年九十有五而終。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十二
0383	右武衛大將軍文州團練使長女墓記	未婚	◎	北 3	1089	元祐4年	3		北 3	1104				正四品		武寧軍節度觀察留後	正四品	右武衛大將軍										范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十四
0384	宋君夫人史氏墓誌銘			北 3	1089	元祐4年	70		北 1	1037	6	4	2											成都府路成都府成都縣			【行狀】夫人溫淑莊靜事親至孝。歸宋氏、夫人事舅中散公姑壽安郡太君盡禮道、宗族無間言、事夫以禮教子有法安宜處約未嘗慍嘆。 【行狀】君王氏生于富貴天資淑懿。長通事舅姑、盡禮道、治閨門以禮法、奉祭祀敬而嚴恤惻隱意而均。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十一
0385	右武衛大將軍慶州刺史妻德安縣君王氏墓誌銘		○	北 3	1089	元祐4年	39		北 2	1068	14	6	8	正五品	縣君	從五品	團練使	從七品	文思副使	正四品	右武衛大將軍	正九品	左班殿直右班殿直	京西北路河南府河南縣	京西北路河南府永安縣	州內	【行狀】君天資勤敏志于女工、父母愛之。 【行狀】歸宗室右侍禁士嘗(夫)。歲時祠享饋羹必盡恭敬諸如事生宗族稱焉。奉姑孝謹、治家和柔從夫嘗於汜水。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十九
0386	右侍禁妻張氏墓誌銘		○	北 3	1089	元祐4年	24		北 2	1083	1	1	0	正一品		太子中書令	正七品	左憲庫使	正九品	右侍禁			京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	路間	【賞贊】君天資勤敏志于女工、父母愛之。 【行狀】歸宗室右侍禁士嘗(夫)。歲時祠享饋羹必盡恭敬諸如事生宗族稱焉。奉姑孝謹、治家和柔從夫嘗於汜水。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十九	
0387	王氏夫人墓誌銘			北 3	1089	元祐3年	72		北 1	1035	3	2	1				正八品	監獄判官	正八品	萬載縣令	正八品	監官衛令縣主簿	南浙路越州蕭山縣	南浙路越州山陰縣	州內	【長壽】君姑吳氏今爲仁壽縣太君、元祐元年仁壽之壽八十、夫人七十、婢姑同堂爲歲百有五十。	范祖禹、給事中(正三品)	『范太史集』卷十五	
0388	右千牛衛將軍妻永和县縣君張氏墓誌銘		○	北 3	1090	元祐5年	32	15	北 2	1073	12	11	1	正五品	縣君	從六品	工部郎中	正八品	奉議郎	從四品	右千牛衛將軍	正九品	左班殿直右班殿直	京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	路間	【學問】君純粹燕婉淑慎溫柔未嘗、適右千牛衛將軍仲 歸。封永和县君、性樂詩書尤喜屬文。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十二
0389	保寧軍節度觀察留後東陽軍公妻仁壽郡夫人李氏墓誌銘		○	北 3	1090	元祐5年	68	15	北 1	1037	35	16	19	從二品		節度使	正七品	供備庫使	正四品	節度觀察留後	正三品	右千牛衛將軍	京西北路河南府	京西北路河南府永安縣	州內	【教育】夫人持戒絕華飾澹泊綺素若符終身、訓諸子孫以學繼東陽(夫)之業、諸子孫服其教、並飲食飲、經史籍解勤勞數年之業、成於是仲紹仲瑄仲猷仲猷士縱繼登科第、遵侯扶宗嚴改數以相勸勵睦鄰文學之感由夫人之訓也。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十七	
0390	右監門衛大將軍吉洲刺史妻安福縣君王氏墓誌銘		○	北 3	1090	元祐5年	28	15	北 2	1077	7	5	2	正五品	縣君	從四品	左監衛將軍	正八品	內殿承制	正四品	右監門衛大將軍	從九品	三班奉職	京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	路間	【賞贊】王氏年十五歸士載(夫)、爲介婢與其似協力治內、事奉舅姑孝敬報、姻族素順待夫以禮、而敦睦睦睦以嚴而不忘舉身以約而不華。		『范太史集』卷四十五
0391	右武衛大將軍台州刺史妻仁壽縣君曹氏墓誌銘		○	北 3	1090	元祐5年	37	15	北 2	1068	4	1	3	正四品	郡君	正四品	左監衛將軍			從四品	左武衛將軍	從九品	三班奉職	京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	路間	【賞贊】年十五適右武衛大將軍台州刺史士僚、治家循理常以奢儉爲戒、北海侯好義。君尤善之撫諸幼御婢妾皆曲有恩意。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十八
0392	右監門率府率妻劉氏墓誌銘		○	北 3	1090	元祐5年	22	16	北 2	1084	3	2	1			節度使	正七品	供備庫使	從七品	右監門率府率	正九品	右班殿直	京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	路間	【行狀】事舅姑夙夜不懈、閒斥器具以佐率府(夫)與親賓遊賓防聚飲盡未怠。劉殷肉爲粥；君劉殷肉爲粥以進防聚服之異日而盡上其事於宗諸宮稱其孝。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十七	
0393	右武衛大將軍康州團練使妻安平縣君江氏墓誌銘		○	北 3	1090	元祐5年	36	16	北 2	1070	4	2	2	正五品	縣君	司理參軍	從八品	西議供事官	正四品	右武衛大將軍	正九品	右班殿直	京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	路間	【學問】安平縣君與康州(夫)皆好佛書悟空理。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十五	
0394	左班殿直妻王氏墓誌銘		○	北 3	1090	元祐5年	19	16	北 3	1087	1	1	0				從九品	杭州助教	正九品	左班殿直			京西北路河南府	京西北路河南府永安縣	州內	【行狀】君王氏性柔順、事舅姑惟勤能、睦其族人、精于音律女工之事。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十六	

0395	右武衛大將軍嘉州刺史賈同安縣君馬氏墓誌銘		○	北 3	1090	元祐5年	38	17	北 2	1069	8	1	7	正五品	縣君	從三品	左金吾衛上將軍	從四品	右金吾衛將軍	正四品	右武衛大將軍	從九品	三班奉職	京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	胸接路開	【行狀】君沈厚溫純醇靜嚴潔無侈靡之習、姑馮翊君久病侍醫藥、積憂戚成疾未幾、姑沒君執喪哀毀疾益侵。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十二
0396	左班殿直妻楊氏墓誌銘		○	北 3	1090	元祐5年	18	18	北 3	1090	0					正四品	金吾衛大將軍	正九品	左侍禁	正九品	左班殿直			河東路太原府	京西北路河南府永安縣	胸接路開	【賞贊】君性柔和、幼敏悟寡言笑、在家孝父母愛之。年十八元祐五年正月遁、宗室左班殿直士言表、君同年十一月丙子卒。 【行狀】動息婦道、閨門之內上下皆得其歡心姑復愛焉。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十二
0397	長壽縣太君楊氏墓誌銘			北 3	1090	元祐5年	82	19	北 1	1027	4	2	2	正五品	縣太君					正七品	朝請郎	從八品	太學博士他	成都府路眉州眉山縣			【賞贊】大夫(夫)兄弟八人族大口衆、皇舅治家嚴整每稱夫人曰「吾家綱綏」。 【行狀】夫人性仁孝謹甚、錫初鳴立舅姑戶外候待、婢問起居已乃趨中饋具飲食滌器皿必手所親睦姪姪怡如也。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十一
0398	右監門衛大將軍妻壽安縣君張氏墓誌銘		○	北 3	1090	元祐5年	22	19	北 3	1087	1	0	1	正五品	縣君	正四品	節度觀察	從七品	客省副使	正四品	右監門衛大將軍				京西北路河南府永安縣		【行狀】性醇淑閑于容止、奉祭祀無違禮、其家宜之事寡姑朝夕不懈。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十八
0399	右千牛衛將軍妻崇仁縣君高氏墓誌銘		○	北 3	1090	元祐5年	30	20	北 2	1080	7	4	3	正五品	縣君	正八品	內殿承制	從七品	文思使	從四品	右千牛衛將軍	從九品	三班奉職	淮南東路亳州蒙城縣	京西北路河南府永安縣	路開	【賞贊】君宣仁聖烈皇太后之姪也。 【行狀】二十婦事舅姑孝敬。 【學問】教子以義方審讀圖書、尤能翰墨。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十二
0400	華州觀察使妻永福縣君郭氏墓誌銘		○	北 3	1090	元祐5年	45	20	北 2	1065	10	5	5	正五品	縣君	從二品	太子少師	從七品	左清道率府率	正五品	觀察使	正四品	監門衛大將軍 刺史 右監門率府率 右侍禁	河東路太原府	京西北路河南府永安縣	胸接路開	【賞贊】郭氏年二十適華州觀察使仲寂入門、而嫡姪皆喜受歸、而舅姑交愛。 【守節】觀察捐館、守孀育孤凡二十年、左右廢侍常假以顏色、內外親戚不處有薄厚謝儀使治居第皆有條理宗族稱之多取法焉。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十五
0401	左班殿直妻吳氏墓誌銘		○	北 3	1090	元祐5年	22	20	北 3	1088	2	0	2			從六品	朝散大夫	正七品	朝散郎	正九品	左班殿直			京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	胸接路開	【賞贊】君天資聰慧柔順善音律。 【行狀】年二十歸從姑前安郡君入歸禁中賜履敝服。事實姑孝悌婦睦約、于事已至躬自濯漑。 【賞贊】夫人幼敏慧、父仲隱寄之欲以婦士大夫、而地寒未能自致也。故西京作坊使贈金紫光祿大夫宋君若始與其室李夫人。李夫人。聞夫人之風以幣迎之入宋氏。族姻皆稱其懿行。享詞能辭饋問凡時不吝於奉宗不忘於羣。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十八
0402	鄭氏墓誌銘	繼室		北 3	1090	元祐5年	73		北 1	1035	2	2	0	正五品	縣太君					正二品	金紫光祿大夫	從七品	承議郎 壽州觀察推官	淮南東路亳州真縣			【賞贊】夫人幼敏慧、父仲隱寄之欲以婦士大夫、而地寒未能自致也。故西京作坊使贈金紫光祿大夫宋君若始與其室李夫人。李夫人。聞夫人之風以幣迎之入宋氏。族姻皆稱其懿行。享詞能辭饋問凡時不吝於奉宗不忘於羣。 【封号】晉陵縣太君。	黃履堅、起居舍人(從六品)	『山谷外集』卷八
0403	李夫人墓誌銘			北 3	1090	元祐5年	66		北 1	1042	8	6	2					文学		從八品	宣義郎	正八品	衛尉寺丞他皆進士	前湖北路邛州敘縣	前湖北路邛州臨邛縣	州內	【良婦】夫人夙夕事奉、周盡敬禮、諸姑悅其恭婦服其和、宣義君(夫)少從學、不治產、不恤有無、夫人能成其志不累以家事、凡嫁娶伏臘ろう間遺之具、一切處第莫不中禮。	呂陶、集賢院學士	『淨德集』卷二十七
0404	右屯衛大將軍妻吉安縣君楊氏墓誌銘		○	北 3	1090	元祐5年	50		北 2	1058	3	2	1	正五品	縣君	正一品	太子中書令	正四品	左衛大將軍	正四品	右屯衛大將軍	正四品	右武衛大將軍	京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	胸接路開	【賞贊】君幼端重守止有法素靜寡譁言。 【行狀】連右屯衛大將軍仲參、敬其夫如賓客、事實姑以孝聞。 【守節】屯衛早世、君年始二十、母憫其孀獨欲奪志自嫁之、君泣而不許母憫其節不強也。 【教育】自是屏翳珥斤鉛華衣服無、文采晨起擇一室、薰灑誦佛書、桑日必宵素終老不厭樛兒未勝衣倪就學、學書讀夜讀日課稍怠必嚴顏色而訓之。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十一
0405	察院長公主墓誌銘	未婚	◎	北 3	1090	元祐5年	6		北 3	1102							英宗皇帝		神宗皇帝								神宗皇帝之第九女、母曰武美人、生于元豐八年正月庚戌、上即位爲皇妹封嘉國。薨于元祐五年正月壬辰、生六歲矣。上輟視朝三日主、性慧悟已能好書畫、追封察院率先宣福院九年二月己酉祔永厚陵之西原。銘曰「易贊帝妹詩美王姬、其位在中華服有儀、英宗之孫、神宗之子、何彼穠華未訛而止」。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十一
0406	右金吾衛大將軍潭州防禦使之女墓誌	未婚	◎	北 3	1090	元祐5年	21		北 3	1087						正四品	武寧軍節度觀察留後	正四品	右金吾衛大將軍									范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十三
0407	右千牛衛將軍妻夏氏墓誌銘		○	北 3	1090	元祐5年	30		北 2	1078	4	0	4			正七品	龍圖閣學士	正六品	朝議大夫	從四品	右千牛衛將軍			京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	胸接路開	【行狀】君性溫仁柔克、事姑以孝聞、宗族宜之屬疾久不愈戒、其夫曰「母懷以鍼藥煩我無益也。」	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十二
0408	右千牛衛將軍第二女墓誌	未婚	◎	北 3	1090	元祐5年	1		北 3	1107						從二品	崇信軍節度使	從四品	右千牛衛將軍									范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十四
0409	前皇城副使長女墓誌	未婚	◎	北 3	1090	元祐5年	13		北 3	1095						從二品	定國軍節度使	從七品	前皇城副使									范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十四
0410	右武衛大將軍第十女墓誌	未婚	◎	北 3	1090	元祐5年	6		北 3	1102						正五品	虔州觀察使	正四品	右武衛大將軍									范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十四
0411	南陽郡王之女墓誌	未婚	◎	北 3	1090	元祐5年	8		北 3	1100							定王		南陽郡王									范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十四
0412	安康郡太夫人胡氏墓誌銘			北 3	1090	元祐5年	76		北 1	1032	14	12	2	正二品	郡太夫人	從六品	尚書吏部郎中	正九品	右班殿直	正四品	通議大夫	正七品		京畿路開封府開封縣	京畿路開封府開封縣	縣內	【行狀】母朱氏夫人幼失所、怙世父尚書公則愛其容德有異親鞠育之。夫人孝於姑、順於夫、和於姊妹、待上下親疏皆道。其性寬裕凝重雖無必莊未嘗有疾言遽色聞庭自肅。彭城公不殖財產累官列朝而家甚清約。夫人能安之稱家之有無以遠觀賢教諸子有法度故皆謹節自立。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十二
0413	李母王氏墓誌銘	叔母		北 3	1091	元祐6年	68	14	北 1	1037	1	1	0										京畿路開封府開封縣	兩浙路蘇州長洲縣	路開	【賞贊】叔母年十有四歲婚李氏。能盡爲婦之道。白首不娶晚玩佛書能知大義。	李齊、蘇軾門人叔母	『齊南集』卷七	
0414	權孟洲節度推官妻田氏墓誌銘		○	北 3	1091	元祐6年	21	15	北 2	1085	2	1	1			從四品	右金吾衛將軍	從七品	西京左藏庫副使	從八品	節度推官 右班殿直承務郎				京西北路河南府永安縣		既齊運馮翊侯之子孟洲節度推官子椿(夫)。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十八
0415	欽州防禦使妻安康郡君梁氏墓誌銘		○	北 3	1091	元祐6年	58	15	北 2	1048	9	6	3	正四品	郡君	從一品	太子太師	正四品	左驍衛大將軍	從五品	防禦使	正四品	右武衛大將軍 右領軍衛得軍 右監門衛大將軍 右千牛衛得軍 右內率府副率				【賞贊】夫人在家時事父母孝敬、待人寬以和、內外親族無長少皆稱之。 【行狀】既齊運欽州防禦使世表、	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十八
0416	右監門衛大將軍妻孫氏墓誌銘		○	北 3	1091	元祐6年	26	16	北 2	1081	5	3	2			正四品	左監門衛大將軍	正四品	左金吾衛大將軍	正四品	右監門衛大將軍			京西北路河南府永安縣		【行狀】君年十六適、事寡姑盡婦道居家端謹。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十八	
0417	左班殿直妻李氏墓誌銘		○	北 3	1091	元祐6年	21	18	北 3	1088	2	1	1			從七品	左藏庫副使	正九品	右侍禁	正九品	左班殿直			京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永安縣	胸接路開	【行狀】事實姑孝敬嫁之、明年姑病扶侍躬承湯藥、灼臂祈請數日而愈。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十九

0418	左奉議郎妻旌德縣君彭氏墓誌銘		○	北	3	1091	元祐6年	28	18	北	2	1081	7	4	3	正五品	縣君	從三品	右千牛衛上將軍	從七品	左藏庫副使	正八品	右內率府副使奉議郎			京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永寧縣	闕	【宣贊】君幼聰慧端靜精于女巧、歲時為奇巧藏麗、以獻中外尊親、而服用甚質。【行狀】歸奉府、事舅姑勤敬。君治內益清俟雅、尚清素有儒者清風。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十九
0419	壽昌縣太君王氏墓誌銘			北	3	1091	元祐6年	67	19	北	1	1043	6	2	4	正五品	縣太君	正八品	著作佐郎	從三品	尚書兵部侍郎	從三品	正議大夫	從六品	朝奉大夫大理評事	京畿路開封府開封縣	京西北路河南府河南縣	闕	【宣贊】夫人畢力襄大事銳治家慈性仁愛寬厚待子孫遇婢妾無大聲色而閨內自肅平居服節實素歲時祭祀常先諸婦視往滿溫雖老不憚凡家事無改于舊率如。【行狀】夫人遺事太府事舅姑盡禮通、文孝立朝居家細行必謹有漢高石君之風。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十二
0420	三班奉職妻史氏墓誌銘		○	北	3	1091	元祐6年	19	19	北	3	1091	0				正四品	右領軍衛大將軍	從八品	西頭供奉官	從九品	三班奉職			京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永寧縣	闕	【行狀】事舅如父佐夫以法度不欺懈。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十六	
0421	仁壽縣太君吳氏墓誌銘			北	3	1091	元祐6年	86	20	北	1	1025	9	2	7	正五品	縣太君		正七品	尚書職方員外郎	從六品	尚書吏部郎中	正八品	縣令國子博士	福建路建州建陽縣	兩浙路越州山陰縣	闕	【學問】夫人學佛、雖初萌起誦經至日昨乃已蓋更數十寒暑精進如一日也。	陸佃、尚書右丞(正三品)	『聊齋山集』卷十五	
0422	李夫人墓銘(太君)			北	3	1091	元祐6年	72		北	1	1037	9	5	4		太君				從八品	大理丞		集賢校理	運昌	江南西路洪州分寧縣		【守節】夫人安之以相高康州(夫)卒、子稚而寡矣。夫人以喪遷葬豫章。【教育】遺子就學或勸以利夫人曰自我家及兒父時未嘗不宣何用利。其後校理佐於朝名人傳士傾下之然、亦以是致者校理謝不謹為夫人憂夫人曰大者希望汝細向憂焉。【封号】夫人始封壽光校理辭所伴官進封安康郡太君。	陳師道大學博士(從八品)	『後山集』卷十六	
0423	故福昌縣太君李氏墓誌銘			北	3	1091	元祐6年	85		北	1	1024	1	1	0	正五品	縣太君						正六品	朝議大夫	京畿路開封府開封縣	京畿路開封府祥符縣	州內	【宣贊】太君之勤為最多、朝議(子)幼而諱以學問、長而勉以政事、君親教以孝孝行已篤以信義可謂盡母道矣。故朝議歷仕宦近五十年無言行之過者有所自也。	楊億禮部員外郎(正七品)	『無為集』卷十四	
0424	右監門衛大將軍貴州刺史永興縣君程氏墓誌銘		○	北	3	1091	元祐6年	29		北	2	1080	5	2	3	正五品	縣君		從七品	供備庫副使	正四品	右監門衛大將軍	從九品	三班奉職	京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永寧縣	闕	【行狀】君事舅姑、循法度以禮、自防安素雖、儉不喜紛華、教子日皆程課敦序。【宣贊】夫業勤勞中饋盡斤盡其、匿書史以助其、夫之學有古賢女儉戒相成之風。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十一	
0425	渭州觀察使第十二女墓記	未婚	◎	北	3	1091	元祐6年	11		北	3	1098						康王	正五品	渭州觀察使										范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十四
0426	右武衛大將軍處州刺史妻壽光縣君王氏墓誌銘		○	北	3	1092	元祐7年	32	16	北	2	1076	6	6	0	正五品	縣君	從三品	右領軍衛上將軍	正七品	左藏庫副使	正四品	右武衛大將軍			河東路太原府陽縣	京西北路河南府永寧縣	闕	【行狀】君王氏年十六進、事姑盡禮、溫恭朝夕無少懈勤、于家事凡十七年如一。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十一
0427	左班殿直妻呂氏墓誌銘		○	北	3	1092	元祐7年	18	17	北	3	1091	1	1	0				從八品	東頭供奉官	正九品	左班殿直			京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永寧縣	闕	【行狀】事舅至孝、宗族長幼皆得其歡心勉其夫以學宮郎稱。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十七	
0428	贈開府儀同三司昌國公妻同安郡君安氏墓誌銘		○	北	3	1092	元祐7年	56	17	北	2	1053	29	9	20	正四品	郡君	正九品	左侍禁	從八品	東頭供奉官	從一品	開府儀同三司	正四品	右武衛大將軍右內率府副率左班殿直2人	京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永寧縣	闕	【行狀】夫人安氏年十七歸、事舅姑、謹肅治家有法、待內外親屬無貴賤、長幼一以禮、雖過婢妾亦未嘗大聲色、故無不得其歡心、故和義郡夫人昌公之祖母也。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十九
0429	右千牛衛將軍妻崇德縣君郭氏墓誌銘		○	北	3	1092	元祐7年	21	18	北	3	1089	1	0	1	正五品	縣君	正九品	承奉郎			從四品	右千牛衛將軍			京西北路河南府永寧縣			【行狀】郭氏性淡素善書禮勸、孝盡婦道、與夫相待如賓、平居無戲言。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十八
0430	右侍禁妻王氏墓誌銘		○	北	3	1092	元祐7年	28	20	北	2	1084	6	4	2			從七品	文思副使	從七品	供備庫副使	正九品	右侍禁			京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永寧縣	闕	【行狀】不違事舅姑勤孝。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十二
0431	贈華州觀察使奉陰侯永安縣君陳氏墓誌銘		○	北	3	1092	元祐7年	45	22	北	2	1069	4	2	2	正五品	縣君	正六品	右衛尉少卿	正七品	尚書虞部員外郎	正五品	華州觀察使	從四品	右屯衛將軍左班殿直	京畿路開封府開封縣	京西北路河南府永寧縣	闕	【守節】四京河南府永安縣君孫六年而觀察(夫)捐館。【教育】除喪未幾長子右屯衛將軍令顯(長子)亦卒、奉祿亦薄殆無以養給。夫人安于窮約處之不憂輟育幼子令顯盡其勤愛壽居十七年始終如一。令顯既長以左班殿直監秦州稅乃迎侍之、官、夫人教子有素故居觀見稱焉者甚矣。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十七
0432	夫人程氏墓誌銘			北	3	1092	元祐7年	32	22	北	2	1082	2	1	1						從八品	觀察推官			兩浙路常州晉陵縣	兩浙路蘇州興縣	路內	【學問】夫人喜讀書一覽輒成誦、尤篤信經典渙若有得者。	鄧浩、龍圖閣直學士(從三品)	『道潛集』卷三十七	
0433	王氏墓誌銘			北	3	1092	元祐7年	79		北	1	1031	2	1	1	正四品	郡君					從四品	太中大夫	從八品	宣德郎	河北西路南開縣/懷柔	江南東路宣州南陵縣	路間	【教育】夫人豫章王氏、宣德郎知宣州南陵縣事楊淑之母也。南陵為吏有能聲治、事敬畏虛懷友不爭以為夫人之教也。	范祖禹、給事中(正四品)	『山谷外集』卷八
0434	右監門衛大將軍女墓記	未婚	◎	北	3	1092	元祐7年	3		北	3	1107				正五品		金州觀察使	正四品	右監門衛大將軍										范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十三
0435	右監門率府率長女墓記	未婚	◎	北	3	1092	元祐7年	3		北	3	1107				從五品		祁州防禦使	從七品	右監門率府率										范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十四
0436	渭州觀察使第十一女墓記	未婚	◎	北	3	1092	元祐7年	12		北	3	1098						康王	正五品	渭州觀察使										范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十四
0437	右武衛大將軍舒州防禦使第四女墓記	未婚	◎	北	3	1092	元祐7年	15		北	3	1095				從二品		武寧軍節度使	正四品	右武衛大將軍										范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十四
0438	英州防禦使第八女墓記	未婚	◎	北	3	1092	元祐7年	2		北	3	1108				正四品		鎮海軍節度觀察留後	從五品	英州防禦使										范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十四
0439	右武衛將軍興州團練使第七女墓記	未婚	◎	北	3	1092	元祐7年	8		北	3	1102				正四品		武寧軍節度觀察留後	從四品	右武衛將軍										范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十四
0440	右武衛大將軍全州防禦使第九女墓記	未婚	◎	北	3	1092	元祐7年	5		北	3	1105				正四品		武寧軍節度觀察留後	正四品	右武衛大將軍										范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷五十四
0441	右班殿直妻陳氏墓誌銘		○	北	3	1092	元祐7年	23		北	3	1087	2	0	2			正一品	太子中書令	從八品	宣德郎	正九品	右班殿直			利州路南州	京西北路河南府永寧縣	路間	【行狀】君陳氏閬州人。曾祖省華贈太師尚書令兼中書令兼國公、祖亮佐相仁宗贈太師中書令兼尚書令兼國文惠公。父象古右宣德郎。適宗室右班殿直子明韓王之後也。君幼綢繆、長而端麗、巧于女巧、事親母教、未嘗有違命。適以孝彰為萬姑所愛、族人不與不宣之。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十九
0442	鮑氏夫人墓誌銘			北	3	1092	元祐7年	69		北	1	1041	7	7	0				從五品	太常少卿	從六品	尚書屯田郎中	正七品	朝奉郎奉直學士	兩浙路溫州永嘉縣	兩浙路溫州永嘉縣	縣內	【行狀】夫人早失母而祖夫人春秋已高、諸弟尚幼、夫人事大母如母、處家事悉有論。少卿尤鍾愛。既嫁事姑如大母、寢鳴而起率至夜分就寢、姑意有所欲未及言。	陸佃、尚書右丞(正三品)	『聊齋山集』卷十六	
0443	牛氏夫人墓誌銘			北	3	1093	元祐8年	35	15	北	2	1073	10	6	4			正八品	太子中允	正七品	朝散郎	從二品	保寧軍節度使			京畿路開封府	京西南路鄧州南陽縣	路間	【贊婦】夫人十五歲得趙氏、性仁厚委隨謙謹、積二十年一家喜悅共諧日佳乎婦也。【學問】夫人亦能讀孟子論語。	李昉知開州	『東堂集』卷十
0444	左班殿直妻魏氏墓誌銘		○	北	3	1093	元祐8年	24	15	北	2	1084	1	0	1			從三品	左金吾衛上將軍	從七品	左藏庫副使	正九品	左班殿直			京西北路河南府永寧縣			君既昇道宗屬左班殿直士禮。	范祖禹、給事中(正四品)	『范太史集』卷四十六

0445	韓氏夫人行狀 (永嘉郡太君)	母		北 3	1093	元祐8 年	69	15	北 1	1039	4	4	0	正四品	郡太君	從三品	兵部侍郎	從六品	兵部郎中	正八品	國子博士	從六品	朝奉大夫 朝奉郎 奉議郎 蘇州府	京東西路應 天府楚丘縣	兩浙路越州 山陰縣	路間	【賞贊】夫人十五嫁、十六而字子嘉然、孝慈族中老婦杜母自以為不及、平居自事儉薄、不服厚玉珠貝之飾不好。	陸佃尚書右丞 (正三品)	『陶山集』卷十六	
0446	右武衛大將軍鳳州刺史妻永安縣君郭氏墓誌銘	繼室	。	北 3	1093	元祐8 年	38	16	北 2	1071	12	5	7	正五品	縣君	從四品	左領軍衛符軍	正八品	內殿崇班	正四品	右武衛大將軍	從九品	三班奉職2 人蔣酒稅	京畿路開封 府開封縣	京西北路河南府永安縣	橋接路間	【行狀】君郭氏在家事父母孝、及歸鳳州事實姑如事父母。鳳州昆弟衆多君寧兄公下侍諸叔處、姊姪和敬夫族長幼宜稱之。 【賞贊】鳳州性疎財、君約已儉素奉養有節雖脂澤金珠服玩往往斥以用度助家費殆盡不以介懷。	范祖禹 給事中 (正四品)	『范太史集』卷五十二	
0447	楚州防禦使楚國公贈奉國軍節度使夫人宋氏墓誌銘		○	北 3	1093	元祐8 年	52	17	北 2	1058	17	8	9			正一品	太子中書令	從八品	西頭供奉官	從五品	防禦使	正四品	右武衛大將軍 右恭養 左班殿直	京畿路開封 府開封縣	京西北路河南府永安縣	橋接路間	【行狀】夫人事舅姑恭順、接姪姪以和、撫諸子均一。	范祖禹 給事中 (正四品)	『范太史集』卷五十一	
0448	長壽縣太君孫氏墓誌銘			北 3	1093	元祐8 年	79	17	北 1	1031	6	4	2	正五品	縣太君	正七品	尚書刑部員外郎	正八品	太常博士			正七品	朝奉郎 宣德郎 永安主簿	京西北路陳州	京西北路蔡州	路內	【行狀】夫人事舅姑歷事皇姑前後如一、皆以孝聞聚族多親之礼意得宜 叔公(夫)三妹在室、夫人愛養過於已子。	范祖禹 給事中 (正四品)	『范太史集』卷四十三	
0449	陳州觀察使漢東侯妻陳留郡君吳氏墓誌銘	繼室	○	北 3	1093	元祐8 年	74	17	北 1	1036	21	15	6	正四品	郡君	從四品	左羽林衛符軍	從七品	京西左藏庫副使	正五品		正四品	右屯衛大將軍 右武衛大將軍 右武衛大將軍 觀察使 右監門率府率	河東路太原府	京西北路河南府永安縣	橋接路間	【行狀】事實姑盡婦道治家恭勤節儉。侯先娶崔氏有寡妹無子。夫人待之如已妹、人莫知其非親。 【教育】侯養。夫人教子以義傳聞朝廷賓客當世名士舉從之游放子孫以多才顯于宗藩。	范祖禹 給事中 (正四品)	『范太史集』卷四十八	
0450	贈曹州觀察使妻安康縣君王氏墓誌銘		。	北 3	1093	元祐8 年	50	18	北 2	1061	8	5	3	正五品	縣君	從五品	防禦使	從五品	團練使	正五品		從四品	右千牛衛將軍 內殿崇班 左班殿直 右班殿直	京畿路開封 府開封縣	京西北路河南府永安縣	橋接路間	【守節】夫人王氏年十八歸、適陸侯病且卒。 【教育】夫人悲泣感疾勸諸子曰「爾曹幼孤宜力學治身以無辱、先王之訓則吾雖死目且瞑矣。諸子恭慎能如其教庶得十餘年。母永嘉郡太君李氏奉懿皇后之姪也。	范祖禹 給事中 (正四品)	『范太史集』卷四十九	
0451	太子右監門率府率妻張氏墓誌銘	繼室	○	北 3	1093	元祐8 年	27	18	北 2	1084	9	4	5			正五品	觀察使	正八品	國子博士	從七品	右監門率府率	正九品	右班殿直	京畿路開封 府陳留縣/梁儀	京西北路河南府永安縣	路間	【賞贊】事實姑盡禮與人上下雅範。率府好學君常勉之治家有法服用節儉女工不矜巧婦容不尚 侈居則嚴整淡如也。	范祖禹 給事中 (正四品)	『范太史集』卷四十五	
0452	右武衛大將軍策州刺史妻大章縣君花氏墓誌銘	繼室	。	北 3	1093	元祐8 年	27	18	北 2	1084	12	5	7	正五品	縣君			正九品	左班殿直	正四品	右武衛大將軍	從九品	三班奉職	京畿路開封 府開封縣	京西北路河南府永安縣	橋接路間	【行狀】事實姑孝、謹奉祭祀、嚴敬族人以睦、為繼母以慈宗室稱焉。	范祖禹 給事中 (正四品)	『范太史集』卷四十五	
0453	德清縣君胡氏墓誌銘			北 3	1093	元祐8 年	18				4	1	3	正五品	縣君	從三品	兵部侍郎	從四品	光祿卿	光祿卿				兩浙路婺州永康縣	江南西路瑞州新昌縣	路間	【行狀】奉夫有禮、事實姑如父母、皆天資自然非學而強能也。 【學問】讀佛書	韋驥、朝議大夫(正六品)	『錢雅集』卷十六	
0454	李氏墓誌銘			北 3	1093	元祐8 年	22	18	北 3	1089	2	1	1			從三品	龍圖閣直學士	從九品	縣主簿				江南東路路南康軍建昌縣	江南西路洪州分寧縣	橋接路間	【行狀】夫人歸之黃氏成喜、買曰「婦事我順」、娣姪曰「幼姪和少」、且旁者曰「夫人遇我慈也」。	晁補之禮部郎中(從六品)	『錢助集』卷六十六		
0455	左班殿直妻杜氏墓誌銘	繼室	○	北 3	1093	元祐8 年	23	19	北 3	1089	1	1	0			從八品	左清道率府副率	正七品	樞密院兵房副承	正九品	左班殿直			京西北路河南府永安縣		橋接路間	【行狀】君幼聰敏、性賢婉麗、巧於女巧、父母愛之、求昏得公族、事實姑盡孝、閨門肅然。	范祖禹 給事中 (正四品)	『范太史集』卷五十	
0456	節婦夫人吳氏墓誌銘 姪朝議大夫提發遣 開州軍州事王雲撰			北 3	1093	元祐8 年	59	22	北 2	1056	1	0	1			正七品	尚書都官員外郎	正七品	江寧府司錄參軍	正八品	縣令			江南西路撫州臨川縣	江南西路撫州臨川縣	縣內	【節婦】夫人吳氏、撫州臨川人。康陵先生元城王公之妻。先生諱令、字逢原。道德文章名一世、二十八而卒。夫人抱始生之孤、往婦母兄、喪除諸所遭、泣涕自誓、屏居別墅、僅蔽風雨、惡衣糲食、人所不堪。三十有五年、以終其身。源然古之節婦、天下稱之。事姑奉養、唐多曠土。熙寧中、詔募民、嘗鑿治廢隄、復召信民杜詩之跡、衆憐其役之大、煩於是息、暇置數畝、夫人因其兄占田隙旁、慨然謂衆曰「吾非徒自謀、陳與實一州之利。當如是作如是成。」乃蠲汚萊、均澆溉、身任其勞、斲環隄以潞水、雖斗門以洩水壩、化為膏腴、民庶藉賴。而其事亦亦累鉅萬。夫人一毫无私、服用之陳、猶昔也。方且汲汲振振之、周疾與實不能償、則為焚券、德馨日聞、遠邇信服、訟不詣官、決於一言。久之、四境無復凶歲。民深律夫人之惠、相與列言於州、州聞於朝、優賜米帛、而鄉人矜以為榮。得疾卒。年五十九、實元祐八年十二月七日兄家寄土也。	王令、縣令(正八品)	『康陵集』附錄	
0457	左武衛大將軍貴州刺史妻渤海縣君高氏墓誌銘	繼室	。	北 3	1093	元祐8 年	23	23	北 3	1093				正五品	縣君	從四品	左金吾衛符軍	從七品	文思副使	正四品	左武衛大將軍			淮南東路亳州蒙城縣	京西北路河南府永安縣	橋接路間	【行狀】既嫁事實姑如父母、相夫以正而順姑、子以養而慈貴州。前夫人男女十八人、夫人鞠育一如己。出雖處室未易寒暑及卒。男女號慕哀毀一如喪親焉。【賞贊】夫人性淳厚、在父母家柔靜而和、巧于女工善簪紒。	范祖禹 給事中 (正四品)	『范太史集』卷四十九	
0458	鄧夫人墓誌			北 3	1093	元祐8 年	31	25	北 3	1087	2	0	2			從六品	尚書比部郎中	有陰德	從八品	司理參軍			福建路南劍州沙縣	福建路南劍州沙縣	縣內	【賞贊】淑淑柔順莊所以督約其身具備、平居無情容不妄笑語。	劉翥、著作佐郎(正八品)	『龍雲集』卷三十一		
0459	夫人張氏墓誌銘			北 3	1093	元祐8 年	69		北 1	1042	10	5	5			從六品	尚書比部郎中	縣尉	正九品	承事郎	正八品	通直郎	京東西路濟州鉅野縣	京東東路濰州北海縣	橋接路間	【行狀】夫人居家孝謹、事實姑盡禮、膳服溫清先意承志、夙夜不忘已。	劉跽、朝奉郎(正七品)	『學易集』卷八		
0460	右班殿直妻李氏墓誌銘		○	北 3	1093	元祐8 年	20		北 3	1091	2	2	0			正六品	朝議大夫	正七品	朝奉郎	正九品	右班殿直			京畿路開封 府開封縣	京西北路河南府永安縣	橋接路間	【賞贊】君李氏性淳和、動有法則、善書札、通音律寵志于女巧、既嫁以書札音律非婦事絕不復為專奉祭祀勸定省嚴謹初雖未嘗不親動必聽于其夫無所敢專、隨夫監臨于邢州。	范祖禹 給事中 (正四品)	『范太史集』卷五十一	
0461	右監門衛大將軍女墓記	未婚	◎	北 3	1093	元祐8 年	14		北 3	1097								正四品	右監門衛大將軍									范祖禹 給事中 (正四品)	『范太史集』卷五十三	
0462	右武衛大將軍第十三女墓記	未婚	◎	北 3	1093	元祐8 年	2		北 3	1109						從五品	嚴州防禦使	正四品	右武衛大將軍										范祖禹 給事中 (正四品)	『范太史集』卷五十四
0463	左班殿直妻翟氏墓誌銘		○	北 3	1093	元祐8 年	16		北 3	1095	1	0	1			從七品	供備庫副使	從八品	西頭供奉官	正九品	左班殿直			京畿路開封 府開封縣	京西北路河南府永安縣	橋接路間	【賞贊】君幼喪母賴于父。性至孝卓然有立、父命主閨門之事家人裕如也。及長適母兄故華陰侯仲通之子左班殿直士隆。 【行狀】事姑謹而敬治家嚴而理相其夫以正而順中外族人稱之。	范祖禹 給事中 (正四品)	『范太史集』卷四十九	
0464	三班奉職妻安氏墓誌銘		○	北 3	1093	元祐8 年	25		北 3	1086	2	1	1			從七品	供備庫副使	正九品	左班殿直	從九品	三班奉職			京畿路開封 府開封縣	京西北路河南府永安縣	橋接路間	三班奉職妻安氏墓誌銘(卷四十九・p 518)＝右班率職妻安氏墓誌銘(卷四十七・p 502) 【行狀】君在家孝于親順、于長巧于女工、及適趙氏。事實如父母、奉夫如長上、內外親屬無不得其歡心。	范祖禹 給事中 (正四品)	『范太史集』卷四十九	
0465	右監門衛大將軍贈曹州防禦使妻春侯妻長壽縣君杜氏墓誌銘		。	北 3	1093	元祐8 年	29		北 2	1082	6	3	3	正五品	縣君	正七品	皇城使			正四品	右監門衛大將軍			河北西路定州安喜縣	京西北路河南府永安縣	路間	【行狀】君性慧巧善治家、事實姑孝接、親族和、雖嚴禁遇之必以禮。居侯家儉若寒素之族衣服不善華侈嚴逐遊觀之舉、侯以賢稱于宗室夫人有內助焉。	范祖禹 給事中 (正四品)	『范太史集』卷四十九	
0466	右班殿直妻林氏墓誌銘		○	北 3	1093	元祐8 年	26		北 2	1085	1	1	0			從五品	保捷指揮使	從八品	東頭供奉官	正九品	右班殿直			京西北路河南府永安縣		橋接路間	【行狀】君適右班殿直士紹、事實姑孝與姊姪和睦恭儉溫惠治家有法。	范祖禹 給事中 (正四品)	『范太史集』卷四十八	





0518	宗室東頭供奉官夫人方氏墓誌銘		○	北	3	1103	崇寧2年	35		北	3	1086	9	4	5		正九品	右班殿直	從八品	東頭供奉官						京畿路開封府開封縣	京西北路汝州梁縣	胸接路間	【行狀】夫人性柔順、在家勤女工、既嫁事實姑盡禮、順承其夫、睦友、喜誦佛經能行其所戒。	慕容彥達、刑部尚書(從二品)	『撰文堂集』卷十四	
0519	伯紳墓誌銘			北	3	1103	崇寧2年	50		北	2	1071				正五品	縣君	正二品	金紫光祿大夫	尚書司勳郎中	從六品	朝散大夫				京西南路滑州鞏縣	京東路萊州萊陽縣	路間	【賞贊】伯紳天性婉婉以明智尤重厚寡語言。 【封号】元符二年(1099)封太和县君、崇寧二年(1103)六月七日以疾卒。年五十。後十年追贈宣人。	趙鼎臣、長帥	『竹隱集』卷十九	
0520	宗室右侍禁夫人李氏墓誌銘		○	北	3	1104	崇寧3年	28	20	北	3	1096	3	1	2		從四品	右金吾衛將軍	從七品	供備庫副使	正九品	右侍禁				京畿路開封府開封縣	京西北路汝州梁縣	胸接路間	【賞贊】夫人幼敏慧、年二十歸於叔旻、性謹約不喜華侈。	慕容彥達、刑部尚書(從二品)	『撰文堂集』卷十四	
0521	朝散郎李公安人王氏墓誌銘			北	3	1104	崇寧3年	56		北	2	1066	3	2	1	正七品	安人	從六品	尚書駕部郎中	從六品	尚書虞部郎中	正七品	朝散郎	從九品	迪功郎 縣主簿	永興軍路京兆府長安縣			【賞贊】安人性端惠其親鍾愛之異他子。喜誦佛書持。 【封号】恩封崇德縣君。崇寧三年十一月以疾終於襄陽縣官舍。享年五十有六。其後朝廷定命婦封邑視夫人之秩為安人。	劉跂、朝奉郎(正七品)	『學易集』卷八	
0522	宗室東頭供奉官夫人王氏墓誌銘		○	北	3	1104	崇寧3年	31		北	3	1091	14	7	7		從二品	左衛上將軍	從七品	皇城副使	從八品	東頭供奉官				京西北路汝州梁縣			【賞贊】夫人性柔慈事父母孝既嫁上承下撫無不得其歡心。	慕容彥達、刑部尚書(從二品)	『撰文堂集』卷十四	
0523	故仙游郡君鄭氏墓誌銘		○	北	3	1104	崇寧3年	35		北	3	1087	2	1	1	正四品	郡君	從四品	左驍衛將軍	正七品	左藏庫使	從八品	千牛衛將軍	從九品	三班奉職	京畿路開封府開封縣	京西北路汝州梁縣	胸接路間	【行狀】夫人幼聰慧、事父母盡孝、既嫁事實姑盡禮。 【字間】喜誦書能為詩草。	慕容彥達、刑部尚書(從二品)	『撰文堂集』卷十四	
0524	宗室西頭供奉官第四女石記	未婚	◎	北	3	1104	崇寧3年	3		北	3	1119					從二品	建寧軍節度使	從八品	西頭供奉官										慕容彥達、刑部尚書(從二品)	『撰文堂集』卷十四	
0525	宗室內殿崇班第三女石記	未婚	◎	北	3	1104	崇寧3年	7		北	3	1115					從二品	建寧軍節度使	正八品	內殿崇班										慕容彥達、刑部尚書(從二品)	『撰文堂集』卷十四	
0526	故仁和縣君王氏墓誌銘		◌	北	3	1105	崇寧4年	59		北	2	1064	19	10	9	正五品	縣君	正四品	武衛大將軍	正七品	朝散郎	正四品	金吾衛大將軍	從八品	內奉府副事左侍禁	京畿路開封府開封縣	京西北路汝州梁縣	胸接路間	【行狀】夫人在家以孝聞、既嫁事姑如事其親。防禦君(夫)少有譽於官邸。夫人能相以柔順。 【贊母】撫諸子均一人不知嫡庶之異。	慕容彥達、刑部尚書(從二品)	『撰文堂集』卷十四	
0527	趙叔慈妻賈氏夫人墓誌銘		◌	北	3	1105	崇寧4年	50		北	2	1073	4	2	2	正五品	縣君	從四品	右金吾衛將軍	正四品	右屯衛大將軍	從五品	懷州防禦使	正九品	左班殿直	京畿路開封府開封縣	京西北路汝州梁縣	胸接路間	【賞贊】夫人性端靖、平居寡言笑、治家有法、宗姻稱之、封永壽縣君。	慕容彥達、刑部尚書(從二品)	『撰文堂集』卷十四	
0528	宗室舒州防禦使第四女石記	未婚	◎	北	3	1105	崇寧4年	2		北	3	1121					從二品	保平軍節度使	從五品	舒州防禦使										慕容彥達、刑部尚書(從二品)	『撰文堂集』卷十四	
0529	壽昌縣君劉氏墓誌銘	繼室		北	3	1106	崇寧5年	69		北	2	1055	6	3	3	正五品	縣君									京畿路開封府陳留縣			【守節】便君(夫)平、夫人涕泣曰「豈徒吾心有不可耶得不恥。」 【賞贊】夫人嘉事親及起居侍、則夫人謹事其語以之輔佐、便君(夫)教諸子曰「是江氏家法也。」願共守之不懈。	晁說之、徽猷閣待制(從四品)	『嵩山集』卷十九	
0530	孫氏墓誌銘			北	3	1106	崇寧5年	76		北	2	1048	4	4	0							正八品	奉議郎				兩浙路常州宜興縣	兩浙路常州宜興縣	縣內	【教育】夫人必往觀息斷匿若已有之、善教子幼課以讀書、長諄以行己自、熙寧以經術進士夫人之四子相繼擢進士第。	慕容彥達、刑部尚書(從二品)	『撰文堂集』卷十五
0531	延陵吳夫人墓誌銘			北	3	1106	崇寧5年	72		北	2	1052	1	1	0							從五品	中散大夫	從八品	通仕郎		兩浙路衢州西安縣	江南西路撫州臨川縣	路間	【守節】中散公(夫)無恙時夫人上承下比勸、而無怨戚誼愚良皆蒙其賢。中散公捐館舍、而婦夫人集郡君春秋尚、夫人素色以溫之怡聲以問之謂甘旨供七節以率之長樂德之規過也。	謝逸、文學者(詩作)	『東溪堂集』卷九
0532	清源王太君宋氏墓誌銘			北	3	1107	大觀元年	59	16	北	2	1064														京西北路汝州梁縣	京西北路汝州梁縣	縣內	【守節】夫人年十六歸王氏二十二年而寧寧父清臣嘗欲娶而嫁之不可。 【行狀】事其舅嚴中君、姑長安縣君不怠。	畢仲游吏部郎中(從六品)	『西臺集』卷十四	
0533	德興縣君曾氏墓誌銘			北	3	1108	大觀2年	69	15	北	2	1054	4	2	2	正五品	縣君	從六品	尚書戶部郎中	正八品	太常博士	正八品	南城縣令	從八品	通仕郎 文林郎		江南西路建昌軍南豐縣	江南西路建昌軍南城縣	州內	【守節】既再而嫁、嫁九年而廢、廢四十年。年六十九終。夫人性沉重又猜習家法。	鄭澥、龍圖閣直學士(從三品)	『道潛集』卷三十七
0534	甘夫人墓誌銘			北	3	1108	大觀2年	68	18	北	2	1058	5	4	1												劍池	劍池	縣內	【守節】年十有八歸蘇氏為居士諱某之妻。又十八年而居士卒。又三十有二年而夫人卒。夫人躬行便約訓育諸子。姑嘆曰「吾婦純孝人也」。	謝逸、文學者(詩作)	『東溪堂集』卷九
0535	陳孺人述	妻		北	3	1108	大觀2年	34	22	北	3	1096	5	1	4	正八品	孺人			正八品	大理寺丞	正三品	溫政殿學士			兩浙路越州山陰縣	兩浙路温州瑞安縣	路內	【賞贊】孺人為能盡婦道、其事余有札朝夕不少懈、余疑其始嫁然也。	許景衡、資政殿學士(正三品)、妻	『橫塘集』卷二十	
0536	文安縣子碩人范氏墓誌銘			北	3	1108	大觀2年	69		北	2	1057	8	4	4	從三品	碩人		從一品	開府儀同三司	從三品	戶部侍郎	正七品	朝奉郎 承議郎 縣主簿		兩浙路秀州華亭縣	兩浙路紹安府新杭縣	路內	【賞贊】母胡氏定安郡君封号榮國夫人。榮國夫人平、時碩人年十四有四歲、能紀綱家事懷其弟幼撫厚之職自喜讀書如成人。開府(父)每嘆曰「若為男子范氏其不與乎」 【教育】碩人何物能易吾之素耶適率是志教諸子論語毛詩皆習其口所指授而諸子易以立諸女相與鳴鳴而起曰「可不勉哉吾母何吾曹當如何」。	晁說之、徽猷閣待制(從四品)	『嵩山集』卷十九	
0537	夫人廖氏墓表	姑		北	3	1109	大觀3年	64	15	北	2	1060	1	1	0											福建路南劍州順昌縣	福建路南劍州順昌縣	縣內	【賞贊】夫人量肌膚貌凝重、而柔順惠和、而靜靜其訓勸子孫處家事語法、而不復親戚之所為有非是必面折之無後言故小大欽嚮對之慕取同笑語管感於疑似之言怒其余適在側以理譬之隨語釋然嘉歎同笑語管感於疑似之言怒其余適在側以理譬之隨語釋然盡婦人有剛正之氣數決無滯礙與亦未有如夫人比也。	廖剛、工部尚書(從二品)姑	『尚書文集』卷十一	
0538	仁昌縣太君李夫人墓誌銘			北	3	1109	大觀3年	正八品	17	北	2	####	7	3	4	正五品	縣太君		正六品	光祿少卿	正七品	屯田員外郎太常博士(正八品)	正八品	奉議郎他		京西北路孟州河陽縣	京西北路孟州河陽縣	縣內	【賞贊】夫人亦有賢捍禦自減損、而調護門內之人小大由盡、始陪隨君(夫)以治家成名者夫人有助焉。	畢仲游吏部郎中(從六品)	『西臺集』卷十四	
0539	江夫人墓誌銘			北	3	1109	大觀3年	58	18	北	2	1069	9	4	5											江南西路撫州臨川縣	江南西路撫州臨川縣	縣內	【行狀】夫人協贊其夫、以事舅姑。	謝逸、文學者(詩作)	『東溪堂集』卷九	
0540	彭夫人墓誌銘			北	3	1109	大觀3年	若干	18				2	2	0											江南西路撫州金谿縣	江南西路撫州金谿縣	縣內	【行狀】年十有八歸陳氏、陳氏大族合堂同食者不啻數百指、夫人事舅姑、睦姻宗、和、而有招待內外賓族、一以忠誠、不以貧富輕重其心其尤貴、而不能自存者解衣推食以濟之、故死之日哭者數邑相繼也。	謝逸、文學者(詩作)	『東溪堂集』卷九	
0541	彭夫人墓誌銘			北	3	1109	大觀3年	43	19	北	2	1085	9	3	6											江南西路撫州金谿縣	江南西路撫州金谿縣	縣內	【賞贊】夫人聞而喜曰「吾夫與子唯學如此數以家事禮之乎」。訪家人無得以家事相關門門之內一絲一毫皆自經畫、虔敬與諸子得以玩味黃卷為一鄉之君子、夫人之力也。	謝逸、文學者(詩作)	『東溪堂集』卷九	
0542	桂夫人墓誌銘			北	3	1109	大觀3年	57	21	北	2	1073	8	2	6											江南東路信州貴溪縣	江南西路撫州金谿縣	胸接路間	【賞贊】閨門之內、婚姻與宗親宴客應弔一委之夫人。	謝逸、文學者(詩作)	『東溪堂集』卷九	

0543	夫人 葛氏墓誌銘			北3	1109	大觀3年	71		北2	1056	9	5	4					從六品	朝散大夫	從八品	承直郎通仕郎管學士	兩浙路常州江陰縣	兩浙路台州仙居縣	路內	【賞鑒】夫人人生最盛時而幼約柔順不啻寒家子、年十四失所怙事張氏、以孝聞外祖光補細繡尤麗之。姑和義郡太君盧氏有癰疾、夫人侍左右十餘年、寢饋不經心手不以連一日疾遽革大夫雖敬未忘。 【教育】諸子篤志學問重力君邑爲士民欽譽稱人稱顯焉。亦夫人有以助成之也。	鄭浩、龍圖閣直學士(從三品)	『道鄉集』卷三十七		
0544	高平縣太君范氏墓誌銘 (范仲淹的姪)			北3	1109	大觀3年	79		北2	1048	6	3	3	正五品	縣太君			正八品	太子中舍	正八品	衢州西安令	從七品	承議郎蘇尉	兩浙路蘇州吳縣	兩浙路明州鄞縣	路內	【賞鑒】夫人范氏宣政顯太君士諱文正公仲淹之姪女也。夫人日異時當爲擇良婿、其後文正竟其家道用事先意以夫人嫁四明周公師厚、公自衢州西安令、改官田由制置條例司即提舉湖北常平、遷運判易湖南久之通判河南府保州以卒。 【行狀】周公師厚卒。夫人凡三十三年、所以事舅姑、奉祭祀、治家敦子。 【封号】初封蓬萊縣君。後改封南平縣太君。	鄭浩、龍圖閣直學士(從三品)	『道鄉集』卷三十七
0545	壽昌縣太君嚴氏墓誌銘	繼室		北3	1110	大觀4年	72	15	北2	1053	11	8	3	正五品	縣太君	從六品	職方郎中	從八品	軍事判官	正七品	朝請郎	正八品	通直郎通仕郎管進士	兩浙路蘇州	兩浙路常州武進縣	路內	【字問】嘗中秋爲歌詞示子孫、其所稱焉乃陶淵明・白樂天。 【繼室】夫人甫葬陳郡陳強公次元繼其室。 【封号】初封成都府路成都府華陽縣君、後改封壽昌縣太君。	鄭浩、龍圖閣直學士(從三品)	『道鄉集』卷三十七
0546	宋故德興縣君宋氏墓誌銘			北3	1110	大觀4年	67	18	北2	1061	10	4	6	正五品	縣君	正七品	尚書水部員外郎	正七品	尚書比部員外郎	正七品	朝散郎	從八品	宣德郎	京西北路鄜州富平縣	兩浙路衢州開化縣	路間	【賞鑒】夫人無室娶陳氏、承上撫下盡得其驩心、至烹飪雞黍若素習者。 【教育】諸子藝文則口授以孝經論語。	程俱中書舍人事(正四品)	『北山小集』卷三十一
0547	姑溪居士妻胡氏文柔墓誌銘	妻		北3	1110	大觀4年	58		北2	1070																【賞鑒】文柔歸於我、事先人先址能盡其所、以事嫁方數月先人當赴遣官余行從舉子試皆不欲令相遠。文柔曰「君無以我爲重而使君有新婚惜別之議凡晨昏教養我之職也。」	李之儀太學博士(從八品)妻	『姑溪集』卷四十九	
0548	蓬萊縣君趙氏墓誌銘			北3	1110	大觀4年	76		北2	1052	8	5	3	正五品	縣君	正三品	尚書右丞	從四品	太中大夫	從六品	郎中	正八品	儒林郎待仕郎(南)蘇尉	京西北路河南府(洛陽)	京東西路濟州金鄉縣	路間	【繼母】母崇德縣太君孫氏早卒。繼母崇德縣太君閻氏。 【賞鑒】夫人生七歲曉明嘗悟過人言語應付了了可喜既長動容中理不妥笑語擇良士歸之而得上郎郎中真史鄭季公之子趙匹馬。夫人執禮無懈凡門內之事祭祀賓客飲食服用必身先焉。	李昭玘、起居舍人(從六品)	『樂靜集』卷二十八
0549	朱夫人墓誌銘	繼室		北3	1110	大觀4年	37		北3	1091	7	3	4			從八品	宣德郎		處士	正七品	職方員外郎			江南西路撫州金谿縣	江南西路撫州金谿縣	路內	【賞鑒】其姑曰「吾爲陳氏繼室、娶時尚少左右就養俸、吾安其室不惟予子之孝亦予婦之力也。」	謝過、文學者	『竹友集』卷十
0550	夫人 陳氏墓誌銘	再婚		北3	1110	大觀4年	39		北3	1089	10	7	3							從八品	通仕郎	皆舉進士	兩浙路越州山陰縣	江南西路撫州金谿縣	路間	【再婚】夫人陳氏越州山陰人嘗嫁于陳、後乃歸今通仕郎新撫州江南西路撫州金谿縣令姚君棠枕。金谿有男七人皆舉進士女三人。夫人各隨其分極意周旋如已出諸子之悉如前母無恙。	鄭浩、龍圖閣直學士(從三品)	『道鄉集』卷三十七	
0551	郡太君林氏墓銘	母		北3	1110		60		北2	1068	4	4	0	正四品	郡太君								福建路建州建安縣	福建路建州建安縣	路內	【賞鑒】夫人自爲女子於所事不待教而能事父母惟恐失其意願出流莖而不以之自異宗族間每歎以爲不可及皆曰是難其配也。	李之儀太學博士(從八品)	『姑溪集』卷四十九	
0552	季妹十六安人墓誌銘			北3	1111		33	15	北3	1093													河北西路(衛)城	京西北路穎昌府陽陳縣	路間	【賞鑒】既葬爲擇其配得故丞相鄧公諱昇之孫隨從張氏子義。以歸之方是時子義婦母崔夫人在室而所生黃夫人共養左右崔夫人性嚴毅諸婦遠次不敢讎進季妹蚤暮承顏侍謹退從黃夫人使其私恩愛後先弗迫不違兩夫人皆喜曰婦得禮其已。	趙鼎臣、末妹	『竹隱集』卷十九	
0553	夫人 李氏墓誌銘			北3	1111	政和元年	77	19	北2	1053	4	3	1					知永寧軍		居士			河北西路真定府真定縣	京畿路開封府祥符縣	路間	【守節】夫人爲內助實稱有勞、居士沒。 【教育】夫人持門戶嚴緝自力節逾範不以富、故少貶使其子從事學問二子舉進士。	劉跂、朝奉郎(正七品)	『學易集』卷八	
0554	宋故尚書虞部員外郎尹公夫人 福昌縣君陳氏墓誌			北3	1111	政和元年	70		北2	1059	2	2	0	正五品	縣君	從一品	中書令	正六品	衛尉少卿	正七品	尚書虞部員外郎			利州路南州西水縣	京西北路河南府河南縣	路間	【行狀】婦人號尹氏、事實姑盡孝謹前不忘。 【守節】先君福昌縣、男七、夫人年三十四、窮苦困厄、守節自誓撫育幼。 【封号】享壽(之)七十、仁廟朝恩賜冠履、先君金朝受封福昌縣君。	羅振玉	『東都邵家墓道文上虞』
0555	王君夫人毛氏墓誌銘			北3	1111	政和元年	51		北2	1078													兩浙路温州永嘉縣	兩浙路温州永嘉縣	路內	諸銘：吾友良弼得葬其母以鄉八行未數功狀。來諸銘、維母夫人姓王氏、永嘉郡人、年甫及嫁浦同里王氏之壻。 銘曰：才而智成人之望。維其義子克家法、後世夫人之譽永終焉。	周行己本州教授(正八品)	『浮止集』卷七	
0556	東邦德母李氏墓誌銘	母		北3	1111		正八品		北2	####	2	2	0								從八品	宣教郎	秦鳳路鞏州隴西縣	京東西路東平府鄆州中都縣	路間	【賞鑒】喜人來郊鄉行葬其母。告于其友南人趙鼎臣曰「娘母李氏世家隴西之城紀。父來有奇行隱身弗出以其女。歸吾父家貞而喜客來無時至必相歡食醉飽不問家有無吾母欣然解解歸歸以嚮之未嘗以聞告」。 【教育】娘母既嫁、衣食益不足、吾母訓之學而勤以仕數學進士不利志、而欲止吾母曰「汝學未也。」勉之已而起家進士第得官、東歸入園于庭間里周旋歡迎澗澗、吾母不色喜。徐曰「固先人之慶也。」汝何自得之、他日更於雍聘以公事喪、宗族喧罵、吾母謝曰「不職而難宜也。」 【字問】晚節善浮屠書、無坐焚香、讀誦其書、淡然若與世絕者。	趙鼎臣	『竹隱集』卷十九	
0557	席府君夫人杜氏墓誌銘			北3	1112	政和2年	56	18	北2	1074	7	3	4			正八品	大理評事	正六品	朝議大夫	正八品	通直郎			京東西路應天府宋城縣	京東西路鄆州須城縣	路內	【行狀】從夫有秩。	劉跂、朝奉郎(正七品)	『學易集』卷八
0558	朱夫人墓誌銘			北3	1112	政和2年	52	18	北2	1078	6	3	3						陰德不仕					江南西路撫州金谿縣	江南西路撫州金谿縣	路內	【行狀】夫人於倫次爲寡婦、事姑孝謹至於疾痛尙瘳無不察、而家事無大細皆親之、其從夫以敬、其訓子以嚴、其友嫌嫌以和、其御童僕以恩、其言其動無纖毫本不於誠者故陳宗無流疏莫不敢愛之。	謝過、文學者	『竹友集』卷十
0559	任夫人墓誌銘			北3	1112	政和2年	67	25	北2	1070	4	3	1										潼川府路 遂州遂寧縣				【賞鑒】夫人生長富家得全沖和、故婉婉靜溫。	李新、承議郎(從七品)	『跨鶴集』卷二十九
0560	單氏夫人墓誌銘			北3	1112	政和2年	72		北2	1058	9	6	3								進士			兩浙路常州宜興縣	兩浙路常州宜興縣	路內	【行狀】夫人少孤事其母田夫人盡子道、既嫁事其姑裴夫人盡婦道。	慕容彥達、刑部尚書(從二品)	『橫文堂集』卷十五
0561	宋奉議郎羅人曾氏墓誌銘			北3	1113	政和3年	35	16	北3	1094	2	0	2								正八品	奉議郎		江南西路建昌軍南豐縣	兩浙路衢州開化縣	路間	【賞鑒】幼靜寡事言不好戲劇等。	程俱中書舍人事(正四品)	『北山小集』卷三十一
0562	田孺人墓誌銘			北3	1113	政和3年	58	16	北2	1071	6	2	4					從二品	銀青光祿大夫文思使			從八品	從事郎	永興軍路京兆府	京西北路河南府(洛陽)	路接路間	【守節】孺人年二十七。既終其夫之喪。父母欲奪而嫁之。孺人守義不許。 【行狀】事其舅姑及重親高義、衛國太夫人(姑)寡居、而老以嚴閑。	畢仲游吏部郎中(從六品)	『西臺集』卷十四
0563	朝議大夫郭公室人周氏墓誌銘			北3	1113	政和3年	74		北2	1057	8	3	5	從六品	宜人					正六品	朝議大夫	正二品	樞密院事通仕郎				【賞鑒】周氏初朝議未仕方苦學尚行。而夫人之父周君隱居、讀書慕蜀莊之為人、無子獨生夫人愛之。夫人歸之時舅姑在室、夫人執婦禮躬躬一備郭氏法度、及治平中朝議舉進士第。宦遊四方夫人佐佐清慎慎謹。	程俱中書舍人事(正四品)	『北山小集』卷三十一
0564	吳夫人墓誌銘			北3	1114	政和4年	79	15	北2	1050	5	4	1	從三品	太碩人					正三品	正率大夫			京畿路開封府開封縣	京西南路鄆州南陽縣	路間	【賞鑒】夫人既笄而嫁爲侍中萊公孫、正率大夫南陽張公諱宗望之妻、草原原王元儼之女。夫人蓋太宗皇帝所自出也。而又家故權臣夫族皆貴公子門地寵(名)當。 【行狀】夫人既歸終穆道、佐子觀泰儉禮備、身不自知其貴、事姑舅備四十年竭誠盡孝左右奉侍如一日心不自知其勞。 【封号】夫人榮會朝廷更定封爵配太碩人。	趙鼎臣	『竹隱集』卷十九
0565	朱君夫人陳氏墓誌銘			北3	1114	政和4年	75	19	北2	1058	8	7	1										兩浙路温州平陽縣	兩浙路温州平陽縣	路內	【賞鑒】婦能身服其尊訓以佐助其夫子凡所以善宗族周旋之悉如其上世所爲雖中年寡居亦守此不備所以及令人皆稱其爲良家善族以及令人皆稱其爲良家善族何其天資淳懿與其父循學長者素所教訓之力與朱氏爲一時之會也。	周行己本州教授(正八品)	『浮止集』卷七	
0566	吳夫人墓誌銘			北3	1114	政和4年	57		北2	1075	7	4	3										京西北路河南府新安縣	京西北路河南府新安縣	路內	【賞鑒】夫人生而量端奇穎、漸(父)教以詩書筆墨而黠女工居無可。夫人于筆墨女工皆善諸豪爭聘之謝笑曰「吾有一女愛甚、于男所不足者非財也」。	汪藻朝議閣學士(正三品)	『浮止集』卷二十八	

0567	韓氏夫人墓誌銘			北	3	1114	政和4年	72		北	2	1080	6	3	3					正八品	奉議郎		正七品	尚書司勳員外郎校書郎(唐)	淮南東路滁州全椒縣	淮南東路滁州全椒縣	縣內	【實贊】夫人長無嗣又佐其夫、教義諸子解規其讀書、節已率以淑安游、子故多賢。	許翰、資政殿大學士(正三品)	『嘉陵文集』卷十二	
0568	崇德縣太君王氏墓誌銘			北	3	1114		84		北	2	1048	13	8	5	正五品	縣太君	從六品	尚書駕部郎中	正二品	金紫光祿大夫	從六品	正六品	朝議大夫朝散郎軍事推官	河北西路真定府真定縣	南浙路臨安府餘杭縣	路間	【守節】金紫(夫)捐館時夫人尚少家於舒州、時夫人季父學元為淮南轉運使欲再遣夫人。夫人辭曰寧死不可自是屏章珥不肉食日一飯以脫。 【教育】老聞問諒經史純子極乎、釋老陰陽卜筮之書。 【封号】壽考(長壽)、康定初(1040)以子封度德縣太君。改封崇德縣太君。	見說之、徽猷閣待制(從四品)	『崇山集』卷二十	
0569	馮氏墓銘			北	3	1115	政和5年	73	16	北	2	1058	6	5	1									江南西路院興府靖安縣	院興府靖安縣	縣內	【教育】子皆夫人教之訓嚴色衣冠取法焉。 【行狀】皇真春秋高而盲、夫人行立必掖曳必、嘗姑有風痺疾、夫人視臥起進則俯背畢世不懈。二弟稱其孝行。	釋惠洪、國明禪師	『石門文字禪』卷二十九		
0570	夫人陳氏行狀			北	3	1115	政和5年	77		北	2	1056	2	2	0		正七品	職方員外郎	從八品	曹州法曹參軍	正八品	奉議郎	從八品	宣教郎	京畿路開封府開封縣	江南東路欽州欽縣源鄉	路間	【教育】夫人二子日榮日壽、少學句翰墨。皆夫人親指授、有法度程其日之功並雅寒創畫不置也。故陳公崇寧二年(夫人68)進士第今為宣教郎。	汪藻、顏頤閣學士(正三品)	『浮溪集』卷二十四	
0571	太孺人王氏墓誌銘			北	3	1116	政和6年	77	17	北	2	1056	6	2	4	正八品	孺人	從七品	承議郎(唐虞)	從七品	正八品	奉議郎	福建路漳州府漳浦縣	泉州路梁山梁溪縣	路間	【實贊】太孺人年殆十有七歲喪夫族。太孺上無舅姑宣遺之叔仲季皆少而沈氏(祖母)春秋高諸甥姪及內外族親來歸奉養者間老日器四子舍送養與供給室家太孺人家婦也。船婦善幼女也。政和五年春發惠州決番禺緣舟浪濤而女於是平、生明年至江陵寓居。居人世二百三十有三日。其母察氏、持而哭之曰兒玉也。	鄭俠(朝奉郎(正七品)) 孫觀(承議郎(正七品))	『西塘集』卷四			
0572	船婦銘	未婚		北	3	1116	政和6年	2		南	1	1132						從七品	承議郎	從七品	正八品	奉議郎					唐庚、承議郎(從七品)	『眉山文集』卷四			
0573	宋故族短趙氏墓誌銘			北	3	1116	政和6年	26		北	3	1108	2	1	1		從二品	崇信軍節度使	從七品	武翼郎	正九品	保義郎					【實贊】鄭氏(夫)嘗曰此兒吾家白眉宜得賢女以配時。夫人之夫樂賓客然以廉而仁居無積資義閑居、洛陽賓客過門無虛日。夫人出室中物以助樽俎之奉。 【行狀】事舅姑無違、供祭祀必謹。	羅振玉	『芒洛墓志遺文』		
0574	翁季女墓誌銘(翁氏)	未婚		北	3	1116	政和6年	15		北	3	1119						從六品	朝奉大夫(翁彥深)								彥深先事貽書哀陳許某、而諸孫日寧死孝也。	許翰、資政殿大學士(正三品)	『嘉陵文集』卷十二		
0575	徐太令人葛氏墓誌銘			北	3	1117	政和7年	73	15	北	2	1059	6	3	3	從四品	太人	正二品	吏部尚書	從七品	承議郎	正五品	中大夫	正七品	朝議郎通仕郎太常寺主簿	南浙路常州府江陰縣	江南東路江寧府上元縣	隣接路間	【實贊】葛氏族大且賢凡女子許字必求天下名士、令人既賢辭戀願女處。性尚嚴令人奉養姑訓諸婢皆無殊髮髻便服纖絳之氣。 【封号】夫恩封永昌縣君、以子恩封晉寧縣太君、再封太令人。	葛勝仲(國子祭酒(從四品))	『丹陽集』卷十四
0576	永嘉郡太君劉氏墓誌銘			北	3	1117	政和7年	77	18	北	2	1058	8	5	3	正四品	郡太君			從六品	朝議大夫	從六品	朝議大夫	福建路建州建安縣	福建路建州建安縣	縣內	【行狀】夫人事舅姑、相其夫、為賢婢矣。又平有子上書納祿名勳朝延天子寵嘉之璽書五色班首錦綸閣卷來觀而息為里中壽母可謂賢也。	孫觀、翰林學士(正三品)	『鴻慶集』卷四十		
0577	秦人范氏墓誌銘	妻		北	3	1117	政和7年	57	19	北	2	1079	5	2	3		正七品	尚書度支部員外郎	正七品	朝散郎	正五品	中大夫	從九品	持仕郎(唐)2人	永興軍路京兆府長安縣	永興軍路京兆府長安縣	縣內	【實贊】予(夫)宦仕家甚富。秦人年雖少資性純重服用樵素約、而經理內事又勤。故子得昇非走逐於外事、歲時燕享必求潔宿儒積美平中謹行之終身不懈。	李復、中大夫(從三品)、妻	『澹水集』卷八	
0578	宋故承簡郎知楚州張公碩人范氏墓誌銘			北	3	1118	政和8年	77	16	北	2	1057						正二品	參知政事	正二品	參知政事	從四品	文林郎	兩浙路蘇州興縣	永興軍路同州韓城縣	路間	【守節】鄉張碩(夫)元祐間(1086~1093)以承議郎知楚州捐館時、夫人(26~32)的聞家故貧。夫人晚乃有田幾百頃。 【封号】夫人歸命服後以夫恩封壽昌縣君、繼以兄丞相恩封和義郡君、晚以例易碩人。	見說之、徽猷閣待制(從四品)	『崇山集』卷十九		
0579	孫令人墓誌銘			北	3	1118	政和8年	57	18	北	2	####	1	1	0	從四品	令人	正三品	光祿大夫	從四品	欽哉閣待制	從八品	文林郎	京西北路鄆州管城縣	河北西路相州安陽縣	隣接路間	【行狀】年十八適韓氏。入門執婦道甚專。事其姑置婢人屏氣鞠躬求其意之所欲而迎承之碩人老病凡膳羞羹餌增損非其躬所謂嘗進也。	趙鼎臣	『竹隱集』卷十九		
0580	孺人王氏墓誌銘			北	3	1118	政和8年	58	18	北	2	1078	10	6	4	正八品	孺人	從五品	中散大夫	從九品	督城縣主簿	從七品	承議郎					【行狀】夫人性至孝事父母、既嫁以其所以事父母、事舅姑初喪張氏、後其舅繼室以王氏。夫人侍之禮刻而厚意益加醇。 【實贊】天資孝謹少少如、成人屯田(父)淮其配對。伯父(劉鈞)年八歲時作賦誦諫如實生再上。金鑾科聲名籍籍。先娶邢昌石氏早亡。屯田(父)以次碩人歸焉。太碩人之嫁劉氏也。 【行狀】事舅姑惟其所適亦其夫如實嚴祭服厚宗族睦姻黨恩妾御子其族適嫡子諸嫡猶其母動靜。	劉一止 教文閣直學士(從三品)	『蒼雪文集』卷五十一	
0581	太碩人傅氏墓誌銘	繼室		北	3	1118	政和8年	78		北	2	1058	10	4	6	從三品	太碩人	正三品	尚書樞方員外郎	從六品	朝議大夫	正四品	通議大夫朝議郎修職郎	兩浙路越州山陰縣	福建路建寧府浦城縣興興	隣接路間	【實贊】夫人年十六歸於陳氏。其事實姑以孝聞、事其夫盡婦順、晨昏奉甘旨必身親之不少懈、雖中外無間言。夫亡勸其子以學卒克有立。	楊時、龍圖閣直學士(從三品)	『龜山集』卷三十一		
0582	楊氏墓誌銘			北	3	1119	宣和元年	89	16	北	2	1046	5	2	3					從五品	太常少卿						【學問】安人幼師儒凡疑難編事一見、龍能聽講書、默記不忘、父母奇之。 【實贊】族一年而振叔(夫)金進士第、安人年甚少之官處家事雖老於治家者不過也。	程俱(中書舍人事(從四品))	『北山小集』卷三十二		
0583	宋故安人戴氏墓誌銘			北	3	1119	宣和元年	44	17	北	3	1092	3	2	1	正七品	安人										【學問】夫人資性慈和治家、自幼讀西方聖人之書、能得其要。 【教育】夫人日為具常富室無儉色、又以論語、孟子躬授其子、夜然膏火日鏤初規其讀書、不以寒暑變也。	許翰、資政殿大學士(正三品)	『嘉陵文集』卷十二		
0584	韓夫人墓誌銘			北	3	1119	宣和元年	68		北	2	1068							居士	正八品	奉議郎										
0585	宋故朝散郎孺人鄭氏墓誌銘			北	3	1119	宣和元年	59	19	北	2	1079	2	1	1	正八品	孺人			從九品	瑛州安仁縣主簿	正七品	朝散郎					【實贊】實諒書公治家嚴肅。孺人奉侍勤謹家事。銀青每稱曰「吾家孝婢也。」	劉黝海	『金石苑』	
0586	周夫人墓誌銘	妻		北	3	1119	宣和元年						2	1	1	從六品	宜人			正八品	國子博士		從九品	持仕郎(唐)	前湖南路衡州安仁縣	前湖南路衡州安仁縣	縣內	【行狀】宜人周氏性淑茂淑。歸于我者十年、舅姑以為孝、宗族以為順。 【封号】宜人初封。榮德縣君後今封宜人。	汪藻、顏頤閣學士(正三品)	『浮溪集』卷二十八	
0587	代族兄宗魯作母侯夫人行狀			北	3	1120	宣和2年	79	17	北	2	1058	6	3	3													鄭剛中、資政殿學士(正三品)	『北山文集』卷七		
0588	太宜人蕭氏墓誌銘			北	3	1120	宣和2年	78	17	北	2	1059	3	2	1	從五品	太宜人				農桑弗仕	從六品	朝散大夫	司錄	福建路建州	福建路建州	縣內	【行狀】太宜人奉舅以孝、助其夫、以順治其家、以慈和幼婦門之內、雍穆穆有間言。太宜人有以輔德之也。	廖剛(工部尚書(從三品))	『高客文集』卷十一	
0589	宋故龍圖閣直學士黃氏墓誌銘			北	3	1120	宣和2年	59	19	北	2	1080	11	4	7	從五品	朝散大夫	尚書右丞	正三品	朝散大夫	從六品	朝散大夫	從八品	大學博士持仕郎(南)魁	福建路邵武軍邵武縣	江南東路鎮州德興縣	隣接路間	【學問】夫人幼師儒絕人、讀書日數萬言輒了其義、凡女子之事不學、而能及長齡淵淵莊動必依諸節、以事父母者曲盡其意雖過尤尤於老莊之書、右丞公與夫人語未嘗不歎息以為不可及也。	李綱(兵部侍郎(從三品))	『梁谿集』卷一百七十	
0590	宋故太孺人阮氏墓誌銘			北	3	1120	宣和2年	84		北	2	1054	7	4	3	從七品	太孺人	從七品	承議郎	從九品	主簿	從七品	承議郎					【實贊】太孺人者至於不用筆墨袖中以刀出古今法書如重規矩矩不出入機變髮者惟太孺人之能也。	見說之、徽猷閣待制(從四品)	『崇山集』卷二十	
0591	族兄巨中陳王氏姚氏合葬誌(姚氏)			北	3	1121	宣和3年	41		北	3	1098								士人								鄭剛中、資政殿學士(正三品)士	『北山文集』卷七		
0592	宋故安人劉氏墓誌銘			北	3	1121	宣和3年	18		北	3	1121	3	3	0	正七品	安人	正三品	光祿大夫	從六品	朝議大夫	正七品	朝議郎	從九品	連卣郎也	福建路福州懷安縣	南浙路處州遂昌縣	隣接路間	【實贊】夫人朝夕往來承事柔聲怡色曲盡禮意兩堂交相稱譽、至於接婦過溫姻皆得其懽心內外無間言、朝請從仕安於色服動中諒體體繕修之事以奉賓客至老不倦其教子嚴甚未嘗以顏色假借雖諍諫以恩慰婢妾髮怡怡如也。	李綱(兵部侍郎(從三品))	『梁谿集』卷一百七十
0593	宋故孺人邵氏墓誌銘			北	3	1121	宣和3年	若干					3	2	1	正八品	孺人			不仕	正八品	奉議郎						【實贊】孺人天姿靜淑入門事尊章曲盡孝順接姻族恩意周洽外舅白魯氏(夫)得賢婢	張守(資政殿學士(正三品))	『毘陵集』卷十三	

0594	妻碩人張氏墓誌銘	妻		北3	1122	宣和4年	49	19	北3	1092	4	2	2	從三品	碩人			正七品	朝散郎	從四品	國子祭酒	從八品	從事郎迪功郎	兩浙路常州宜興縣	兩浙路常州江陰縣	州內	【賞贊】夫人事先人盡孝衣服食飲親在視寒燠早晏之節愈久滋益恭於財肅自節縮。 【行狀】奉皇姑溫國夫人、事先人盡孝	葛勝仲：國子祭酒(從四品)妻	『丹陽集』卷十四	
0595	宋太令人陳氏墓誌銘	母		北3	1122	宣和4年	84		北2	1056	9	3	6	從四品	太令人			秘閣校勘				正七品	朝奉郎文林郎迪功郎	淮南東路通州			【賞贊】夫人生而靜默不妄一語、出財贖罪開輔殆終身、不見喜怒之色、所不自足者西岳方聖人之書目之而未極其微也。	是諒之、徵猷閣待制(從四品)	『嵩山集』卷二十	
0596	族兄巨中嫂王氏姚氏合葬銘(王氏)			北3	1122		49		北3	1091								從九品	緡雲縣尉					兩浙路婺州金華縣	兩浙路婺州金華縣	縣內		鄭剛中：資政殿學士(正三品)士、嫂	『北山文集』卷七	
0597	吳國夫人陳氏墓誌銘			北3	1123	宣和5年	54		北3	1087	5	5	0	正一品	國夫人			從六品	朝散大夫奉議郎	正一品	丞相	正七品	尚書司部員外郎奉議郎直學士	兩浙路睦州建德縣	京東西路徐州彭縣	路間	【行狀】夫人事舅姑孝、教子義、通儒便有恩、敬夫如賓、治家如官不府。 【封号】丞相彭城郡徐公處仁之夫人陳氏、以宣和五年(1123)正月己卯薨。年五十四。 越三年(靖康元年1126)彭城公薨。夫人歷封溫·福·陳·吳四國夫人。	汪藻：觀閣學士(正三品)	『雪溪集』卷二十八	
0598	故昭容吉氏墓誌		○	北3	1123	保大3年	33		北3	1108				正二品	昭容	正八品	壽陽縣令	正八品	海州懷仁縣令		徽宗			兩山	京畿路開封府開封縣			【賞贊】昭容吉氏麗瑪姬之質富班女之文治絲毫以股勤宮功有。	徐鉉、尚書右僕射(從一品)	『騎省集』卷十七
0599	宋故何碩人孫氏墓表(仁和縣君)			北3	1124	宣和6年	71	21	北2	1074	4	3	1	正五品	縣君					從六品	朝奉大夫	正七品	朝奉郎承務郎	江南西路袁州分宜縣			【行狀】言笑不聞、嫺房居不出堂戶。事寡嫂友娣姒、以相其夫、而畜養其子、上承下御、逾五十年閨門欣欣無怨咎一辭。 【封号】碩人以大中故自仁和縣君三封至宜人、昌辰登朝加號令人再命而令封。	孫觀、翰林學士(正三品)	『鴻慶集』卷四十一	
0600	安人王氏墓誌銘			北3	1124	宣和6年	74		北2	1068	11	4	7			正七品	兵部員外郎	正八品	太常博士	正五品	中大夫	正七品	朝奉郎	兩浙路越州蕭山縣	江南東路歙州歙縣	兩浙路開封府開封縣	【行狀】安人勤舅姑之義也。成人長子偕擢紹聖四年進士第、安人饗其祿二十餘年、偕于內行甚修事。自朝奉公歿即致家政、于其終終日晏坐誦佛書求出世間法雖寒暑不置也。 【封号】安人盡禮巧恩于朝再錫命書以有今封安人。	汪藻：觀閣學士(正三品)	『雪溪集』卷二十八	
0601	張太安人王氏墓誌銘	姑		北3	1125	宣和7年	89	17	北2	1053	10	7	3	從六品	太安人	從四品	千牛衛將軍	正九品	左班殿直	正八品	通直郎	從七品	觀察御史奉議郎從事郎直學士	河東路太原府武進縣	兩浙路常州武進縣	路間	【行狀】事姑欽愛兼至凡尊雖行若、姻戚過與咸慶、其姑得孝婦治專家政。	葛勝仲：國子祭酒(從四品)	『丹陽集』卷十四	
0602	曾氏墓誌銘			北3	1125	宣和7年	52	27	北3	1100	9	4	5			從八品		宣德郎						江南西路吉州太和縣	江南西路吉州萬安縣	州內	【賞贊】夫人生於禮義之家。日親國史凡彤管懿實皆耳飽。而日然父母亦異之曰「爲吾女求對稱當得佳士」遂歸於郭氏。 【行狀】逮事舅姑承順無違。	劉才邵、吏部尚書(正二品)	『樞溪居士集』卷十二	
0603	曹夫人何氏墓誌銘			北3	1125	★撰者生存年	79		北2	1064	7	3	4											兩浙路婺州金華縣				唐士貽	『靈巖集』卷七	
0604	宋故尚書吏部員外郎鄭公安人錢氏墓誌銘			北3	1126	靖康元年	59	18	北2	1085	10	3	7	正七品	安人		從八品	通判軍事判官	正七品	尚書吏部員外郎	正八品	奉議郎從政郎					【學問】安人幼則秀悟、父母早世、能自力女功事、閒則學書誦詩。【賞贊】歸鄭氏時年尚幼舅姑太宜人御寒。安人侍起居惟謹無故未嘗去左右太宜人寢疾安人嘗問與不解衣者半年宗族稱其孝。	程棁：中書舍人奉(正四品)	『北山小集』卷三十二	
0605	楊氏女弟墓石書丹(鄭氏)			南1	1127	建炎元年	31		北3	1114	2	1	1	正八品	攝人			正九品	承事郎		進士			兩浙路婺州	兩浙路婺州	州內	【學問】鄭氏年七歲誦書寫字、稍長能屬對吟詩習音樂。	鄭剛中：資政殿學士(正三品)	『北山文集』卷七	
0606	何氏考妣墓表(鄭氏)	母		南1	1127	建炎元年	70		北2	1075	4	3	1					從九品	持仕郎(舊)				兩浙路婺州金華縣	兩浙路婺州義烏縣	州內	【賞贊】有姑歸義焉何氏幼便慎淑克相其夫而何氏以昌即夫人也。夫人鄭氏具有懿範賓客君得以彷彿敦敦孝安遠而廣名譽。	鄭剛中：資政殿學士(正三品)	『北山集』卷十五		
0607	吳國太夫人王氏墓誌銘	母		南1	1128	建炎2年	75		北2	1071	5	5	0	正一品	國太夫人			從一品	太師	從二品	少師	從二品	銀青光祿大夫實文閣直學士明州觀察使武經大夫	京西北路河南府(洛陽)	京畿路開封府開封縣	兩浙路開封府開封縣	【行狀】既嫁事舅姑執婦道、待少師謹妻禮、懿淑婉愉貴室儀之、族黨中外無間毀者。少師晚訓子加嚴撫庶弟厚制家之務暨誓有法使聯姻舊婢咸得其歡心。 【封号】初特封安康郡夫人、後封安定郡太夫人。子堯列職西清軍詞號較下、一日徽宗皇帝召見便殿觀問庭園安否。再拜再謝以壽康奉。翌日親御繪畫書永國太夫人。疾薨享年七十有五、體吳國太夫人。	胡寅、徵猷閣直學士(從三品)	『斐然集』卷二十六	
0608	有宋迪功郎朱公夫人解氏墳誌			南1	1128	建炎2年	75		北2	1071	3	3	0						從九品	迪功郎				兩浙路温州永嘉縣	兩浙路温州永嘉縣	縣內	【賞贊】夫人左右君子動循、禮法婦姒、之門恬然一體。		『永嘉縣志』卷二十二	
0609	朱夫人墓誌銘			南1	1128	建炎2年	53		北3	1093	3	3	0							正七品	武功大夫	正八品	歙武郎承德郎承節郎謹貢進士	兩浙路湖州安吉縣	兩浙路湖州安吉縣	縣內	【賞贊】夫人幼而在靜暨誓有家法。父母愛之爲擇良配得同里潘侯師仲歸焉。 【守節】歸十年三男子、潘侯卒時夫人盛年、既終喪更改適、夫人聞之慟絕、自誓弗許然、二子甫勝衣、其季在襁褓、未能誰何也。 【行狀】夫人之歸逮事其姑能、先順意適卒以孝婦稱於族黨之間、事其夫恭謹如侍遇嚴賓客、雖極寵釋怡怡如也。	沈與求、翰林學士(正三品)	『龜谷集』卷十二	
0610	恩平郡夫人劉氏墓碑			南1	1129	建炎3年	63		北2	1084	7	4	3	正二品	郡夫人					正七品	武功大夫	正八品		京畿路開封府開封縣	河東路代州	路間	【教育】夫人行實而感周南之詩、夫人能勉、其君子以正字應書法謹約。	劉一止、數文閣直學士(從三品)	『苕溪集』卷四十八	
0611	孫宜人墓誌	妻		南1	1130	建炎4年	38	17	北3	1109	5	3	2	從六品	宜人					從六品	朝奉大夫			淮南西路無爲軍巢縣	淮南西路無爲軍巢縣	州內	【賞贊】太夫人(姑)喜曰「兒婦歸吾無憂矣」	王之直、朝奉大夫(從六品)、妻	『梧山集』卷二十九	
0612	熊氏令人墓表			南1	1130	建炎4年	36	20	北3	1114	7	2	5	從四品	令人			正七品	朝奉郎	從三品	侍郎	從九品	承務郎	福建路建州建陽縣	成都府路成都府樂安縣	路間		劉子昂、朱熹門人、嫂	『屏山集』卷九	
0613	宋故永嘉郡夫人高氏墓誌銘			南1	1130	建炎4年	77		北2	1071	6	2	4	正二品	郡夫人			正九品	承事郎	從五品	中奉大夫	從六品	朝請大夫	南徐	兩浙路湖州安吉縣		【賞贊】夫人莊靜淑懿、自少小不爲戲劇女工之節獨玩意筆硯間泛觀六經諸子讀其大指。 【行狀】不逮事姑爲恨、舅年高奉食飲藥物不少懈。 【封号】夫人初封永和縣君、改封令人、後以子彥昭(右朝請大夫兩浙路轉運判官)贈永嘉郡夫人。	劉一止、數文閣直學士(從三品)	『苕溪集』卷五十	
0614	陸氏攝人墓表	妻		南1	1131	紹興元年	24	18	北3	1125	1	0	1	正八品	攝人			正六品	率直大夫					兩浙路越州	成都府路成都府樂安縣	路間		劉子昂、朱熹門人、妻	『屏山集』卷九	
0615	宋故迪功郎權知袁州分宜縣事李公夫人胡氏墓誌銘			南1	1131	紹興元年	39		北3	1110	2	2	0							從九品	迪功郎			江南西路吉州廬陵縣	23廣南東路韶州曲江縣	兩浙路開封府開封縣	【賞贊】攝人從父兩室醫隱文忠公之族。攝人與羅氏帥今衡州教授兄份皆留陽甥也。	胡誥、工部侍郎(從三品)	『胡澹庵文集』卷五	



0639	杜氏太孺人墓誌銘	母		南	1	1143	紹興 13年	66	15	北	3	1092	2	2	0	從七 品	太孺 人			正七 品	朝散郎			正八 品	通直郎 修職郎	京西南路襄 陽府宜城縣 縣丞	福建路福州 懷安縣	路間	【守節】 笄年歸寡教公孤平。誓志自無二子、為師慈而以僕儀其家其子克立。理恪謹佛 書。	李石、太學博 士(從八品)	『方舟集』卷十七
0640	族嫂陳氏墓誌銘	母		南	1	1143	紹興 13年	68		北	3	1093	11	5	6				從五 品	中奉大 夫					南浙路 婺州 金華縣	南浙路 婺州 金華縣	縣內	【賞贊】 夫人雍容其間言笑慎禮則起居康寧規矩動微中散公之家世風流如在也。	鄭剛中、盜政 殿學士(正三 品)	『北山集』卷十五	
0641	劉氏二婦墓誌銘	繼室		南	1	1143	紹興 13年	66		北	3	1095	2	1	1					鄉貢進 士					江南西路吉 州安福縣	江南西路吉 州安福縣	縣內		王庭珪教文閣 學士(正三品)、 弟姪	『廬溪文集』卷四 十六	
0642	趙夫人慕容氏誌銘			南	1	1143	紹興 12年	65		北	3	1096	7	2	5						正六 品	朝議大 夫	正七 品	朝奉郎 承奉郎				【宗室】 夫人姓慕容氏。河南人。河南郡王延釗之曾孫、祖某、父彥彝、母王氏。夫人 幼在東籬等。叔父尚書公諱彥達為擇配時朝儀大夫趙君諱望之。 【行狀】 事二姑悉得其歡心、閨門肅然。 【守節】 朝議君以所生夫人捐館憂毀傷。夫人方生三十躬蹈艱苦保養諸孤擇名備以訓子	葉夢得、秘書 丞(從七品)	『建康集』卷八	
0643	劉氏二婦墓誌銘	繼室		南	1	1144	紹興 14年	59		北	3	1103	3	2	1										江南西路吉 州安福縣	江南西路吉 州安福縣	縣內	【賞贊】 二婦恭儉和柔嚴饋饗於內佐之耳自為女至於為婦以至舅姑沒數十年飲食笑語相 煥熱無一日隔也。紹興甲子舉二棍合葬。銘曰「二女(劉氏二婦)同居及其長而有歸也。 又相為似以相其夫故其終也。」	王庭珪教文閣 學士(正三品)、 弟姪	『廬溪文集』卷四 十六	
0644	英氏墓誌銘			南	1	1145	紹興 15年	78	21	北	3	1088	4	3	1										前湖南路潭 州湘潭縣	前湖南路潭 州湘潭縣	縣內	【賞贊】 夫人於記饋賓客之奉親服烹飪實站甘食則喜甚蘇餅則懼不違處管為姑製衣燈育 小汗通夕不能寐姑初不之責也。	胡寅、歐歆閣 直學士(從三 品)	『斐然集』卷二十 六	
0645	太碩人薛氏墓誌銘	母		南	1	1145	紹興 15年	84		北	2	1079	1	1	0	從三 品	太碩 人	從四 品	大理卿		從六 品	朝奉大 夫			河東路絳州 正平縣	江南西路吉 州廬陵縣	路間	【賞贊】 夫人天資靜婉慧解夙成。朝議君(子)特器異之常語。家人曰「先公簡肅諸女皆 得所歸至如王宣徽世凱顯尊榮。儲世尤以為榮而加獎焉。今此女懿淑有儀度不減。諸 姑非名族佳士不輕與也。」 【行狀】 夫人事舅姑以孝、承贊上下以礼、感得其宜通奉君(夫)之仕也。 【封号】 元祐間宣仁聖烈皇后與政外家命婦歲時入賀。夫人進對詳宣仁嘉之錫以冠 帔又封家國郡君。蓋異數也	劉才邵、吏部 尚書(正二品)	『梅溪居士集』卷 十二	
0646	宋故太孺人朱氏墓誌銘	母		南	1	1145	紹興 15年	72		北	3	1091	5	2	3	從七 品	太孺 人			正四 品	中書舍 人	從八 品	宣敷郎		南浙路湖州 烏程縣	南浙路湖州 烏程縣	縣內	【賞贊】 太孺人自幼承家範詔製則惟微惟勤米鹽靡室帛紡績之杼閨而熟見之人或聞 之能焉。	劉一止、教文 閣學士(從三 品)	『蒼溪集』卷五十	
0647	右通直郎范公夫人 章氏合祔誌			南	1	1145	紹興 15年	71		北	3	1092	7	5	2			從九 品	將仕郎 (唐)	從六 品	朝奉大 夫	正八 品	通直郎	從八 品	承直郎	京畿路開封 府開封縣	京畿路開封 府開封縣	縣內	【守節】 我叔父捐館。夫人郤家事聽其子曰「清心託西佛書嗜善施濟涉以梁杓起病以 藥石仰死。」 【行狀】 事謹奉舅姑孝。	范浚、學者	『香溪集』卷二十 二
0648	沈氏考妣墓誌銘(吳氏)	母		南	1	1146	紹興 16年	59		北	3	1105	7	7	0										南浙路常州 無錫縣	南浙路常州 無錫縣	縣內	【學問】 長則數以孝經論語問說古今易曉故事授名千里纔十歲。	韓元吉、龍圖 閣學士(正七 品)	『南窗甲乙稿』卷 二十	
0649	代從兄作伯母事述(蘇氏)	母		南	1	1147	紹興 17年	76	19	北	3	1090	6	6	0	從五 品	太宜 人							正七 品	朝奉郎 右從事郎 承奉郎 右進功郎	成都府路眉 州眉山縣	江南西路建 昌軍南豐縣	路間	【封号】 享年七十有六。封太宜人。	曾協	『雲莊集』卷五
0650	安人汪氏墓誌銘			南	1	1148	紹興 18年	69	15	北	3	1094	3	3	0	正七 品	安人	正八 品	奉議郎	從四 品	太中大夫	從七 品	武節郎	正九 品	登仕郎(唐) 承節郎	京西北路河 南府新安縣	京西北路河 南府新安縣	縣內	【賞贊】 安人入俞氏。無幾何時而舅姑皆歿。安人資管範輔佐其夫事燕嘗持門戶有健丈 夫所不能為者。而武節安人之年未冠未笄也。 【封号】 錫命書封曰安人仍賜冠帔。	汪藻、顯謨閣 學士(正三品)	『荆溪集』卷二十八
0651	樞密院計議錢君孀夫人呂氏 墓誌銘			南	1	1148	紹興 18年	49	18	北	3	1117	4	3	1	正七 品	安人	正四 品	中書舍 人	從六 品	右朝請 大夫	正七 品	朝奉郎	從九 品	迪功郎	京畿路開封 府開封縣	江南西路袁 州宜春縣	路間	【賞贊】 夫人躬服儉約經紀家事無不自得之色觀其所以處生死者如此則其當通堂之際因 其所傷者歟。 【封号】 景封至安人。	汪應辰、端明 殿學士	『文定集』卷二十 三
0652	王夫人墓誌銘			南	1	1148	紹興 18年	55	18	北	3	1111	7	5	2				正八 品	太儀寺 丞	從八 品	從事郎	從八 品	從政郎 迪功郎	金陵	金陵	縣內	【賞贊】 夫人智識明辨有賢士大夫所不能及者。靖康末、山東亂。士大夫流離爭驅田宅 去鄉里或請于夫人。夫人曰舅姑在遠而我獨其本業可乎、且謂吾夫向不知聽之晉江間之 害曰真吾妻也。	汪藻、顯謨閣 學士(正三品)	『荆溪集』卷二十八	
0653	令人施氏墓誌銘	繼室		南	1	1148	紹興 18年	94		北	2	1072	11	8	3	從四 品	令人	正五 品	殿中丞	正七 品	朝奉郎	正七 品	朝請郎	正八 品	奉議郎 通仕郎 從奉郎 迪功郎	南浙路常州 晉陵縣	南浙路常州 晉陵縣	縣內	【再嫁】 令人在父母家。即以孝友聰明聞。年十七適胡氏適年而嫁。會中舉求繼室。備 國中寡如令人之量。少師亦以非中舉無足當令人者乃擇其志歸之。令人入孫氏。 【賞贊】 中舉元配王氏有子致人。令人專其家政六十八年養生送死冠婚賓祭之用尊卑長 幼之序皆有成規非其財一毫不私也。一輩從同居五世合補廕二千指。男女十五人孫若曾 孫元孫六十餘人。壽九十四。東南士大夫治家教子以令人為法其壽考康寧子孫蕃衍閨門 雍睦兼諸福有之則自宋興二百年間如令人者殆一二見也。 【封号】 中舉大夫與庭臣之繼室以夫封縣君者。二以子封宜人 恭人令人者三以年賜冠帔 者。	汪藻、顯謨閣 學士(正三品)	『荆溪集』卷二十八
0654	宋故令人傅氏墓誌銘			南	1	1148	紹興 18年	52		北	3	1114	5	4	1	從四 品	令人				正五 品	中大夫	從八 品	從事郎 通仕郎 迪功郎	河北東路大 名府清平縣	河北東路大 名府清平縣	縣內	【賞贊】 令人入 鄒氏奉尊 姬室賓祭接遇恩人皆有儀法。當是時中大夫少銳於令。令人斥 翳珥簪遺。 【封号】 令人凡五封而賜今號。	孫觀、翰林學 士(正三品)	『鴻慶居士文集』 卷四十	
0655	故萬氏夫人墓誌銘			南	1	1149	紹興 19年	67	15	北	3	1097	6	3	3										南浙路瑞安 府樂清縣	南浙路瑞安 府樂清縣	縣內	【行狀】 夫人未笄歸里人居王君。事實姑以孝謹聞。 【賞贊】 夫人嘗於見聞亦知書史能道其梗槩事以古今篇詠口授兒輩居家有法度盤盂必 正衣冠無少長一過以禮見僅儀儀情容嚴於內外之分族屬非至親不接也。	王之望、參知 政事(正二品)	『東溪集』卷十五	
0656	宋故秦國夫人王氏墓誌銘			南	1	1149	紹興 19年	54	19	北	3	1114	4	3	1	正一 品	國夫 人	從一 品	尚書左 僕射	從三 品	正議大 夫	從二 品	保寧軍 節度使	從八 品	宣徽郎 承奉郎 朝直郎	南浙路蘇州 長洲縣	南浙路蘇州 長洲縣	縣內	【賞贊】 夫人姿相豐端容止整明雖生長富貴而稱習名教尚然若寒家妻人子昭慈居瑤 華。與吳王亦捐館者。而少傳公名宦未立家益。夫人斥奩中物助資祭一簪不留漸衣菲食 御之無慙色。建炎中昭慈復大號推恩外家蒙服容車號封大國貴貴一時淡然若固有之不以 為泰可謂賢也。 【封号】 夫人用公貴自碩人。進嘉國夫人。加號衛國·丹徒·楚國。更五命得今封秦國 夫人。	孫觀、翰林學 士(正三品)	『鴻慶居士文集』 卷四十
0657	安人胡氏墓誌銘			南	1	1149	紹興 19年	73		北	3	1094	4	3	1	正七 品	安人	正八 品	真州判 官		正七 品	朝奉郎	從九 品	迪功郎 金鄉西尉 進士	南浙路睦州 壽昌縣	南浙路睦州 壽昌縣	縣內	【賞贊】 安人節行純備方髫髻時淑靜嚴雅不習游弄不為嬉笑戲言。	范浚、學者	『香溪集』卷二十 二	
0658	宋故呂恭人胡氏墓誌銘			南	1	1149	紹興 19年	68		北	3	1099	4	4	0	從五 品	恭人			正三 品	宣寧大 夫	正六 品	奉直大 夫	從九 品	迪功郎	前湖北路鄂 州崇陽縣	福建路泉州 晉江縣	路間	【賞贊】 太夫人入呂氏門內逾千指上自姑嬪下至媼御事尊慈附育幼幼無一不當其意者香 軟錦肥膩仕省器治香食接銀宗姬管中節法觀。 【封号】 太夫人以夫貴凡三命賜號宜人。婦(男子人の次男)登朝乃得今封太夫人。	孫觀、翰林學 士(正三品)	『鴻慶居士文集』 卷四十
0659	永嘉郡太夫人唐氏墓銘	母		南	1	1150	紹興 20年	85	17	北	2	1082				正二 品	郡太 夫人			正八 品	內殿崇 班	從五 品	果州團 練使	京西北路綏 昌府長社縣			路間	【行狀】 事實姑以奉奉、夫以禮、婦敬禮稱為孝婦。	王洋、歐歆閣 直學士(從三 品)	『東坡集』卷三十 六	
0660	李夫人墓誌			南	1	1150	紹興 20年	62	20	北	3	1108				從六 品	尚書比 部郎中	從九 品	淮寧縣 尉	從七 品	觀蔡御 史				淮南東路楚 州山陽縣	福建路興化 軍莆田縣	路間	【賞贊】 夫人從之舉如、撫字敦育、族黨無二言。		『東坡集』卷十四	

0661	王氏墓誌銘			南	1	1150	紹興 20年	63		北	3	1105	3	2	1				前湖南路潭州湘潭縣	前湖南路潭州湘潭縣	縣內	【實錄】王氏歸卹如學女事於續姑紹節海補修蓋肅備晚治。既歸虎臣、虎臣遯序有才俊稱及親老不復求仕以經術教授。病且而竟持喪。王氏能傳其姑某志氣寬浹。夫志治喪事詎信微乎足形遷葬。姑蓋老王氏於其衣被飲食寢興必躬親之凡二十年未嘗懈。	胡寅、徽猷閣直學士(從三品)	『斐然集』卷二十六								
0662	饒川太夫人卓氏行狀			南	1	1150	紹興 20年	71		北	3	1097	3	2	1				京東東路密州蓋縣	福建路興化軍莆田縣	路間	【守節】夫人少失父。母諸昆擇配以繼室。陳公(夫)早卒。夫人閉門終居二十四年。曾諸子舉雖所居近市不以貧故令離利。晚年從鄉里以甲課童第鄉人服其子之精學。而尤多夫人之能教也。	黃公度、秘書正字	『知稼餘集』下								
0663	楊國夫人趙氏墓表			南	1	1150	紹興 20年	44		北	3	1124	9	3	6	10	國夫人	從五品	中奉大夫	正六品	奉直大夫	從二品	遼寧軍節度使	從六品	朝奉大夫宣教郎	兩浙路臨安府臨安縣		【教習】夫人於古詩書能通其讀日夜課諸子以學敬專志。【實錄】卑棲過屬人皆盡恩禮。平居笑語不閉。	孫觀、翰林學士(正三品)	『鶴慶居士文集』卷四十一		
0664	李集妻楊氏			南	1	1151	紹興 21年	36	18	南	1	1133	5	3	2						咸寧		【宣贊】高宗貴妃姪女(宋史史後傳高宗貴妃有張劉二氏。而楊氏無傳。)	清、黃本驥、	『古詩石華』卷二十八							
0665	晉安黃夫人墓誌銘			南	1	1151	紹興 21年	78	20	北	3	1093	4	3	1		從九品	縣尉	處士			晉安	福建路福州懷安縣		【實錄】夫人自幼聰慧過人親執孝先生夫婦事鍾愛之。擇所宜配年二十歸處士治家漸漸有條理歲時祀事心勞取敬唯謙恭謙遠近當得其儀心。	張元幹、作少監(從六品)	『廬川歸來集』卷十					
0666	故李夫人墓誌銘			南	1	1151	紹興 21年	54	25	北	3	1122	3	1	2				江南西路吉州吉水縣	江南西路吉州廬陵縣	州內	【字賢】夫人幼從父兄學道可誦。晚大歸翁長因覽古烈女傳輒能誦說始末。謂其父曰「今之為婦」。【實錄】夫人性孝慎自矜仰時節黨粹其孝其歸於段氏也。	王庭柱、敷文閣學士(正三品)弟豫	『蘆溪文集』卷四十六								
0667	宋故魏國太夫人向氏墓誌銘	母		南	1	1151	紹興 21年	63		北	3	1106	8	4	4		正一品	國太夫人	從一品	開府儀同三司	正六品	朝議大夫	從二品	保靜軍節度使	從七品	武德郎承議郎宣義郎承務郎	京畿路開封府開封縣	京畿路開封府開封縣	縣內	【封尊】二子登明登道封魏國太夫人。次男、貴佐=右承議郎、直敷文閣賜紫金魚袋。三男、真仁=右宣議郎、直敷文閣賜紫金魚袋。	劉一止、敷文閣直學士(從三品)	『宣溪集』卷五十
0668	伯母安人尚氏墓誌銘	伯母		南	1	1152	紹興 22年	55		北	3	1115	8	4	4		正七品	安人	從四品	太中大夫	從六品	朝議大夫					河北西路相州安陽縣	江南西路吉州廬陵縣	路間	【實錄】生而淑慧長而秉剛蓋異之。夫人之淑德懿行當求巨筆勒。	周必大、太子少傅(從二品)、伯母	『周益國文忠公集』卷三十六
0669	孟鳩葬記			南	1	1152	紹興 22年	75		北	3	1095	5	4	1				京東西路東平府東平縣								京東西路東平府東平縣			【教習】君諱實善言笑平居於人無畦畛之怨惟喜讀書子教。初以子奏賜冠服從夫。	周必大、太子少傅(從二品)	『周益國文忠公集』卷三十六
0670	孟鳩葬記			南	1	1152	紹興 22年	75		北	3	1095	5	4	1				京東西路東平府東平縣								京東西路東平府東平縣			飲酒：始婚年三十五已受戒。屏棄酒時、時取佛書誦之。亦不深泥、名相契敬趨陶然自樂、如是者數十年。	周必大、太子少傅(從二品)	『文忠集』卷三十六
0671	彭氏太孺人墓誌銘	母		南	1	1152	紹興 22年	106		北	2	1064	4	3	1		從七品	太孺人									江南西路吉州吉水縣	江南西路吉州廬陵縣	州內	【行狀】夫人以孝事其舅姑、以順相其君子、以慈宜其家人、則婦道也。妻道也。母道也。【封尊】夫人年九十餘、遼郊祀崇恩封太孺人。	劉才邵、吏部尚書(正二品)	『梅溪居士集』卷十二
0672	太孺人李氏墓誌銘			南	1	1153	紹興 23年	76	21	北	3	1098	6	4	2		從七品	太孺人									桂林	桂林	縣內	【行狀】太孺人事姑十六年如一日、不以久倦。【封尊】齊通籍奉寧縣、遼郊祀敕令恩追贈其父右承事郎、而封太孺人今號。	胡寅、徽猷閣直學士(從三品)	『斐然集』卷二十六
0673	令人羅氏墓表			南	1	1153	紹興 23年	36	22	南	1	1139	6	2	4		從四品	令人									福建路南劍州劍浦縣	福建路南劍州劍浦縣	州內	【實錄】令人性儉約謙下、好禮法、有節度。嫁時室中有簪色帔衣、忌日輒被以素帛、稱慰如舊。常所服禮儀、如民間法。	朱熹、實文閣待制(從四品)	『歸菴集』卷九十
0674	羅無競妻朱氏夫人墓誌銘			南	1	1153	紹興 23年	72		北	3	1099	14	9	5		從九品	迪功郎	進士								江西西路吉州吉水縣	江南西路吉州廬陵縣	州內	【字門】夫人幼年喜讀孝經女訓諸書略能通其大意。【行狀】連事祖姑、祖姑垂年苦風眩。夫人日相其姑時、其黨與起居惟謹、祖姑且死。謂其姑曰「朱新婦承託莊靜甚似汝善視之平居服節禮喜頤養。」日「吾所以慰容承祀取不芳潔過是而難離非吾志也。」	劉才邵、吏部尚書(正二品)	『歸菴居士集』卷十二
0675	楊君夫人彭氏墓誌銘			南	1	1153	紹興 23年	60		北	3	1111	1	0	1				成都府路成都府新都縣								成都府路成都府新都縣			【守節】楊君既沒。舅姑春秋尚多疾。夫人夙夜沾濡而進飲食求以順適其意無不盡得以怡然不啻如。	史龜鑑、文學者	『蓮峯集』卷十
0676	宋故孫夫人強氏墓誌銘			南	1	1153	紹興 23年	76		北	3	1095	11	6	5		正八品	大理評事							從八品	從政郎	兩浙路常州晉陵縣	兩浙路常州晉陵縣	州內	【宣贊】宣教君舅女九人。而曾氏出者二男一女。孺人教無如一。孺人性儉動能自刻苦曾師金玉喜讀佛書寒暑不廢。【行狀】姑張氏年高多疾。孺人朝夕膳藥不解。姑以百歲封孺人。	孫觀、翰林學士(正三品)	『鶴慶居士文集』卷四十
0677	孺人曾氏行狀	繼室		南	1	1154	紹興 24年	77		北	3	1095	9			正八品	孺人										江南西路吉州廬陵縣	江南西路吉州廬陵縣	縣內	【宣贊】宣教君舅女九人。而曾氏出者二男一女。孺人教無如一。孺人性儉動能自刻苦曾師金玉喜讀佛書寒暑不廢。【行狀】姑張氏年高多疾。孺人朝夕膳藥不解。姑以百歲封孺人。	胡銓、工部侍郎(從三品)	『姑蘇龐文集』卷三十一
0678	故段夫人墓誌銘			南	1	1155	紹興 25年	84		北	3	1089	16	4	12		從七品	承議郎		廬陵秀才							江南西路吉州廬陵縣	江南西路吉州廬陵縣	縣內	【字門】夫人自幼習見其父、出入蘇黃之門、言論倜儻遠能誦蘇黃之文皆上口而通其大意、至於六經國語等書皆涉獵焉。二子皆雲壩廩而忽先決科擢人第之者 疑其母之贊也。【行狀】夫人初以孝謹事其姑稍賢婦、以資謙退夫為賢妻、以詩書自教其、而識其子之與遊者皆偉人可謂賢母婦人之德莫隆、於此故略其細行而誌之。	王庭柱、敷文閣學士(正三品)	『蘆溪文集』卷四十三
0679	陳氏考妣墓銘(潘氏)	母		南	1	1155	紹興 25年	76		北	3	####	8	3	5		正八品		奉議郎		正七品	朝散郎奉議郎					福建路福州閩縣	福建路福州閩縣	縣內	【守節】太安人某居時年踰三十(6)諸子幼。太安人擇當家務經紀有條理歷難艱辛無厭色日進諸子就學寒暑不少懈、性嚴重不言笑某處事有體諸論時經綽旨。【封尊】紹興丙寅郊祀以一朝(長男)升朝議恩賜右承事郎。三封至右奉議郎。潘氏封太安人。	張九成、禮部侍郎(從四品)	『橫浦集』卷二十
0678	王夫人墓誌銘(張氏)			南	1	1155	紹興 25年	90		北	2	1083	7	4	3		從八品		文林郎		從八品						兩浙路江東軍州	兩浙路江東軍州	縣內	【宣贊】夫人少而端靜、自歸夫家協和內外大小歡悅、姪有幼而孤者、夫人撫之猶子。夫人福壽康寧享年九十乃卒。	薛季宣、大理寺主簿	『約齋語錄』卷三十三
0681	夫人徐氏墓誌銘			南	1	1156	紹興 26年	55	18	北	3	1119	6	3	3		從八品		從政郎		從八品						兩浙路溫州瑞安縣	兩浙路溫州瑞安縣	縣內	【宣贊】夫人生來順靜正、父母愛之。【行狀】事舅姑盡禮。晨夕敬門衣服食飲樂樂之宜、而節適之舅姑未食不取食、未寢不取寢。姑性嚴重、事有不可其意、終日不擇、左右莫能近。	朱熹、實文閣待制(從四品)	『歸菴集』卷九十一
0682	夫人員氏墓誌銘			南	1	1156	紹興 26年	48		北	3	1126	4	2	2							仁壽縣					成都府路眉州眉山縣			【宣贊】夫人秦若獨教諸子甚力日、「詩書吾家衣鉢也。」	員興宗、著作侍郎(從七品)	『乃華集』卷二十二
0683	故呂氏宜人墓誌銘			南	1	1156	紹興 26年	55		北	3	1119	6	5	1		從六品	宜人		正七品	朝議郎	從六品	朝奉大夫				河北西路衛州新鄉縣	江南西路吉州安福縣	路間	【宣贊】宜人性冲淡不棄也。宜人大族德性柔淑樂助使能以法度自勸於閨闈上而下應無終究不滿其意。【宗室】左朝奉大夫前通判吉州軍州事趙公名伯璣之宜人呂氏、世居衛州之新鄉諸自時有(欽)人贈金紫光緒大夫諱持者皆皇祖也。奎封縣長官諱樂者皇祖也。朝議郎通判忻州鎮無黨者皇考也。	王庭柱、敷文閣學士(正三品)	『蘆溪文集』卷四十五

0684	徐氏安人墓誌銘			南 1	1156	紹興 26年	59		北 3	1115	6	4	2	正七品	安人	從三品	正議大夫	正二品	吏部尚書	正七品	戶部員外郎	從八品	從政郎迪功郎	兩浙路蘇州吳縣	兩浙路蘇州吳縣	縣內	【賞贊】安人生有容姿性謙通敏母吳國夫人葛氏知其非凡女子也。 【行狀】事舅如父、事姑如母。相夫必以義。	劉一止、數文閣直學士(從三品)	『蒼溪集』卷五十一
0685	鄭宜人墓誌			南 1	1157	紹興 27年	60	15	北 3	1112	6	4	2	從六品	宜人	從六品	朝請大夫	正八品	江陵丞	從六品	朝請大夫	從八品	從事郎迪功郎得仕郎(唐)	兩浙路睦州建德縣	前湖北路前門軍長林縣	路間	【賞贊】嫁不以世姻而聘尊卑之禮謹謹雖道不見缺虧省問僕寒仰擇何疾退則歸鄉鄰蠶桂之事宗族稱焉。 【學問】宜人在家嘗焚香不流俗、習書圖史嚴戒之書。 【封号】四十有五年從夫爵封自攝人為宜人。	洪邁、觀文殿大學士(從二品)	『鑑湖文集』卷七十五
0686	宋故太淑人劉氏墓誌銘	繼室		南 1	1157	紹興 27年	74	18	北 3	1101	5	4	1	從三品	太淑人	正九品	承事郎	從六品	朝奉大夫	從八品	承直郎	從三品	數文閣直學士通直郎儒林郎宣義郎	淮南西路壽州壽春縣	兩浙路湖州烏程縣	路間	【賞贊】太淑人入韓氏門無諸幼如已出雖家人不知其異母之子也。 【行狀】奉尊嫡、相其夫、教其子、實掖內外宗姻、慈哀所使為婦為母皆盡其道。 【封号】數文閣(子)登朝由卿寺攝承郎進位八坐。太淑人以子貴更七封而賜今號太淑人。	孫覿、翰林學士(正三品)	『鴻慶居士文集』卷四十
0687	朱安人墓銘			南 1	1157	紹興 27年	84		北 3	1091	2	2	0	正七品	安人					從八品	右宣教郎	正七品	左朝奉郎	江南東路饒州樂平縣			【行狀】夫人始執笄帶、連事祖姑以及其姑節、連寒暑燥滋進甘苦唯謹有疾視漿湯液不去側縫初家流之事必躬親之人故稱為夏氏孝婦。 【封号】子恩封太攝人、又進太安人。	洪邁、觀文殿大學士(從二品)	『鑑湖文集』卷七十六
0688	趙孺人墓銘	繼室		南 1	1158	紹興 28年	38	18	南 1	1138	2	2	0	正八品	攝人				湖南部使者	江西部使者							【守節】洪善卿之繼室。凡十三年而寡(夫人)。【宗室】有宋賢宗室女出自、永熙梁蓋漢之六世孫。	洪邁、觀文殿大學士(從二品)	『鑑湖文集』卷七十五
0689	王氏夫人墓誌銘			南 1	1158		68	18	北 3	1108	7	5	2							從六品	朝奉大夫			江南西路吉州廬陵縣	江南西路吉州廬陵縣	縣內	【賞贊】生十八年而歸黃氏。時袁方清苦、藏生事、而夫人宦家厚家慈孝尸之故嘗得以肆職業。 【行狀】事實姑與祖母太攝人唯謹視、兄嫂如舅姑、又能協于上下內外春秋記事尊謹必遵。 【教育】胡氏家法尤凡閨閣職之所宜執者無一事廢墜、是待續姑不以家事拂其心而得盡力于學少子 【封号】夫人自紹興丁巳(7年・1137)以冬賜恩封攝人(33)。隆興甲申(2年・1164)上初郊加贈令人。卒後6年。	胡銓、工部侍郎(從三品)	『胡澹庵文集』卷二十四
0690	故令人劉氏墓誌銘			南 1	1158	紹興 28年	54	23	南 1	1127	9	4	5	從四品	令人	從三品	吏部侍郎	從五品	中散大夫	從三品	兵部侍郎	從九品	承務郎	江南西路饒州饒縣	江南西路吉州廬陵縣	路內	【行狀】連與氏有姑及祖姑在室。夫人朝夕侍膳禮無違者。夫其為女為婦為姑、皆克盡其道可謂賢矣。 【學問】淑人幼不嬌弄、暗誦孟孟諸子書知婦人法度之事。刀尺縫紉不學而工。 【教育】前夫有子四愛均。	王廐珪、數文閣學士(正三品)	『鑑湖文集』卷四十二
0691	楚國太夫人周氏墓誌銘	母		南 1	1158	紹興 28年	82		北 3	1094	1	1	0	正一品	國太夫人	正四品	監門衛大將軍	正七品	武肅大夫	從三品	龍圖閣直學士			京畿路開封府開封縣			【行狀】其事迹、姑晚多病。夫人躬親與煎餅新寒隆暑朝夕侍側未嘗懈倦宗族稱之。		『東甌金石志』卷六
0692	錢夫人墓誌銘			南 1	1158	紹興 28年	74		北 3	1102													兩浙路婺州義烏縣	兩浙路婺州義烏縣	縣內	【行狀】連與氏有姑及祖姑在室。夫人朝夕侍膳禮無違者。夫其為女為婦為姑、皆克盡其道可謂賢矣。 【學問】淑人幼不嬌弄、暗誦孟孟諸子書知婦人法度之事。刀尺縫紉不學而工。 【教育】前夫有子四愛均。	張九成、禮部侍郎(從三品)	『橫浦集』卷二十	
0693	俞淑人墓誌銘	繼室		南 1	1158	紹興 28年	57		北 3	1119	4	4	0	正三品	淑人	正六品	朝請大夫	從三品	數文閣直學士	正三品	龍圖閣學士	正九品	承奉郎承務郎	兩浙路湖州安吉縣			【賞贊】建炎三年冬(1129)、金人渡江大焚殺、獨胡氏所居鄉鄰大聚落如平時、鄉人謂聚攝人積善是賴。宣和年(1125)子紹銓、攝人命股堂上諸子諸孫皆嘗擇於前肅然鼎鑪一色。 【封号】前夫有子四愛均。	洪邁、觀文殿大學士(從二品)	『鑑湖文集』卷七十七
0694	攝人張氏墓誌銘	祖母		南 1	1158		65		北 3	1111	5	2	3	正八品	攝人								江南西路吉州廬陵縣	江南西路吉州廬陵縣	縣內	【賞贊】建炎三年冬(1129)、金人渡江大焚殺、獨胡氏所居鄉鄰大聚落如平時、鄉人謂聚攝人積善是賴。宣和年(1125)子紹銓、攝人命股堂上諸子諸孫皆嘗擇於前肅然鼎鑪一色。 【封号】前夫有子四愛均。	胡銓、工部侍郎(從三品)	『胡澹庵文集』卷三十	
0695	靖州推官張廷傑妻			南 1	1159	紹興 29年	50		南 1	1127	6	3	3			正四品	通議大夫	從六品	朝請大夫	從八品	靖州推官			前湖北路岳州平江縣	兩浙路蘇州吳縣	路間	【賞贊】夫人組紉晚晚為能已嫁則奉尊嫜力盡諸耳隱微懿行微細黨有所不知子。	周必大、太子少傅(從二品)	『周益國文忠公集』卷三十六
0696	白宜人墓誌銘			南 1	1159	紹興 29年	72		北 3	1105	12	10	2	從六品	宜人			正一品	宰相			從八品	文林郎修職郎	淮南西路壽州壽春縣	江南東路饒州饒縣	路間	【封号】逝三受封宜人	洪邁、觀文殿大學士(從二品)	『鑑湖文集』卷七十六
0697	宋故太宜人葛氏墓誌銘	母		南 1	1160	紹興 30年	87	30	北 3	1103	2	2	0	從六品	宜人					正八品	通直郎		兩浙路紹興府餘姚縣	兩浙路紹興府餘姚縣	縣內	【學問】太宜人夫婦危坐相對、多誦經史用古人胎教之說。 【教育】沂(長男)生而資性敏悟、絕人曾教之甚嚴。汾(次男)嘉好亦如其兄。客過其門問諸課讀之聲。嘆曰「有是夫也、有是婦也、有是子也。」沂未弱冠試補太學為撰首。紹興五年中進士甲科。自是率親就賓官舍。官舍二十八年。以所為尚書師退。 【封号】郊祀恩封太安人。明年肅仁皇太后軍八十之慶、加今封(太宜人)。	劉一止、數文閣直學士(從三品)	『蒼溪集』卷五十一	
0698	趙孺人年氏墓誌銘			南 1	1160	紹興 30年	68		北 3	1110	4	2	2	正八品	攝人								潼川府路資州資中縣			【守節】攝人年逾三十夫死。男女幼稚、族黨有為勢位者所誘誘以再適。攝人守義其堅諸者且雖喪喪氏初亦欲求去。 【賞贊】錢氏錢某郎三舍進士樞之妻而惠父母也。樞以善法恩當補官不就惠夫舉進士甚力父子以處相繼為善士則其婦應母慈道可知矣。石以惠夫故且吾祖錢甥也。	清・黃本驥、	『古詩石華』卷二十八	
0699	錢氏太攝人墓誌銘	母		南 1	1160	紹興 30年	67		北 3	1111	2	2	0	從七品	太攝人								潼川府路資州	潼川府路資州	州內	【賞贊】錢氏錢某郎三舍進士樞之妻而惠父母也。樞以善法恩當補官不就惠夫舉進士甚力父子以處相繼為善士則其婦應母慈道可知矣。石以惠夫故且吾祖錢甥也。	李石、太學博士(從八品)	『方舟集』卷十七	
0700	韓謙仲妻李氏墓誌銘			南 1	1161	紹興 31年	51	18	南 1	1128	8	4	4				從九品	迪功郎	正九品	忠翊郎			京東西路東京府東平縣			【學問】夫人耽佛書日孜孜然、既畢讀有光燭室、咸以為異。	胡銓、工部侍郎(從三品)	『胡澹庵文集』卷二十五	
0701	袁氏墓誌銘			南 1	1161	紹興 31年	56	20	北 3	1125	4	1	3			正八品	大理寺丞									【賞贊】二十以歸記厥詩惟孝惟謹有嚴舅姑歸記賓客時節物須由(闕)以內有閑不論日彼有求人所緣為難家所無猶當念力而自量節而也於德雖天之良實婦之職告我始婚人有弟兄如手足同財共生豈無他人乘言易肆斥其私權以端以烹辦事有初聘婦而監審番佛書焚明前旦先其園醫計及新儀儀檢走趨趨無敢亂。	李石、太學博士(從八品)	『方舟集』卷十七	
0702	彭夫人墓誌			南 1	1161	紹興 31年	66	21	北 3	1116	6	6	0	從六品	朝奉大夫	從九品	迪功郎				國學首解進士			江南西路吉州廬陵縣	江南西路吉州廬陵縣	縣內	【守節】攝人年逾三十夫死。男女幼稚、族黨有為勢位者所誘誘以再適。攝人守義其堅諸者且雖喪喪氏初亦欲求去。 【賞贊】錢氏錢某郎三舍進士樞之妻而惠父母也。樞以善法恩當補官不就惠夫舉進士甚力父子以處相繼為善士則其婦應母慈道可知矣。石以惠夫故且吾祖錢甥也。	胡銓、工部侍郎(從三品)	『胡澹庵文集』卷二十五
0703	故孔氏夫人墓誌銘			南 1	1161	紹興 31年	67	23	北 3	1117	5	3	2							從九品	縣尉		江南西路饒江軍新淦縣	江南西路吉州廬陵縣	路內	【行狀】祖姑老至百歲封攝人。夫人人事之積年不見有苛慢之容。事姑尤謹。	王廐珪、數文閣學士(正三品)	『鑑湖文集』卷四十五	
0704	范孺人墓誌銘			南 1	1161		若干				2	2	0	正八品	攝人								成都府路崇慶府	成都府路崇慶府	州內	【賞贊】攝人不得食夫子之祿而隨其所施今未艾也。	李石、太學博士(從八品)	『方舟集』卷十七	
0705	皇甫孺人墓誌	繼室		南 1	1161		81		北 3	1098	1	1	0	正八品	攝人								成都府路成都府雙流縣	南康軍都昌縣	路間	【賞贊】歸黃君諱某為繼室。先娶程生瑞南幼程卒。母撫愛璋(子)。	李石、太學博士(從八品)	『方舟集』卷十七	
0706	蔡氏母葬墓誌			南 1	1161		79		北 3	1100	1	1	0										成都府路彭州			【行狀】盡姑舅之孝、睦於其長為詩書之助。順淑柔惟慈惟敬不姑息於摩撫諸節而惠施於里鄰族黨無他苦惱一日呼子婦終下謂猶子雍允。婦日而善歌歌以送我以卒。	李石、太學博士(從八品)	『方舟集』卷十七	
0707	女齡墓誌銘(胡氏)	繼室		南 1	1162	紹興 32年					8	3	5				從三品	工部侍郎		鄉貢進士			江南西路吉州廬陵縣			【賞贊】胡氏嫁六年(卒)、生一男、無前室子均。	胡銓、工部侍郎(從三品)	『胡澹庵文集』卷二十五	
0708	宜人蔣氏墓誌銘			南 2	1163	紹興 元年	61	15	北 3	1117	5	3	2	從六品	宜人					從六品	朝散大夫		榮州使君也	潼川府路嘉定府	潼川府路榮定府	兩接路間/嚴短	【學問】宜人諱某字某、甫葬歸夫公。宜人生長閨門、不獨女則於傳子史以及子及美樂天東坡語皆成誦。 【封号】贈攝人、再贈宜人、又贈宜人。皆以子及其父而以夫及其婦恩秩之序禮也。	李石、太學博士(從八品)	『方舟集』卷十七
0709	譚思順母龍氏墓誌銘			南 2	1163	隆興 元年	79	19	北 3	1103	6	3	3										前湖南路衡州茶陵縣	前湖南路衡州茶陵縣	縣內	【賞贊】夫人夙以溫淑稱善得婦道年四十六。	胡銓、工部侍郎(從三品)	『胡澹庵文集』卷二十五	
0710	田氏墓誌			南 2	1163	隆興 元年	79		北 3	1102	4	2	2							正四品	中書舍人他		成都府路眉州眉山縣	成都府路崇慶府	路內	【學問】文靖母姓田氏、通六經子史諸書晚讀佛書、於性理自能悟入預告其子以死日至日危坐不亂如浮屠之教二子其出也。	李石、太學博士(從八品)	『方舟集』卷十七	

0711	蘇茂母穆氏墓誌銘			南2	1163	隆興元年	若干					2	2	0						從九品	承信郎進士	成都府路彭州				【賞贊】婦性吝嗇寡、及鄰里之難犬而哀取、至農佃之勤給獨而不薄意誠而不吝不吝、又以其餘及釋老二數穀米金帛贈士女知布施法無算是又可書也。	李石、太學博士(從八品)	『方舟集』卷十七			
0712	太令人郭氏墓誌銘	母		南2	1164	隆興2年	76	北3	1106	6	4	2	從四品	太令人	從九品	縣主簿	正九品	保義郎		從六品	朝散大夫	京畿路開封府開封縣	兩浙路臨安府餘杭縣	路間			【賞贊】夫人天性沈靜不事華侈雖世居簪紱然未嘗輒向時好故親族內外咸知其賢。以紹興二十一年金進士第則又諱之日舉非止一第也。【宗室】夫人唐汾陽王之後也。子寧開封、曾大父諱某為監主簿、大父諱某為縣主簿仕不致顯、考則諱師厚、娶皇族漢王宮仲愈之女、為保義郎、而不喜出仕、僅游里閭以琴酒自適。	韓元吉、龍圖閣學士(正七品)	『南澗甲乙稿』卷二十二		
0713	湯教授母潘夫人墓誌銘			南2	1164	隆興2年	73	北3	1109	6	2	4	正八品	攝人					正八品	教授	從八品	從政郎	兩浙路婺州金華縣	兩浙路婺州金華縣	縣內		【賞贊】攝人幼明悟其在傳織紉組紃而藝父母愛之尤。夫人至忘其疾於內外姻屬承趨聲接無一聞言以病告者說珥珞服亡所愛。【封号】紹興二十九年正月朔旦天子稱慈寧宮勞問兩年以差受寵有族者父若母慶賜有加攝人。	呂祖謙、秘書閣著作郎(從七品)	『東萊集』卷十		
0714	郭氏夫人家傳			南2	1164	隆興2年	86	北3	1096	3	2	1															清·劉豐海『金石苑』				
0715	故王氏夫人墓誌銘			南2	1165	乾道元年	77	19	北3	1107	8	3	5				進士	從九品	明州奉化主簿				江南西路吉州安福縣	江南西路吉州安福縣	縣內		【學問】老儒王邁道(父)初以詩禮論語等書自教、夫人讀數過輒成誦耳聞目染不待勸誘。【教育】夫人長子曰思文始就外學日誦千言。夫人夜具短檠手自縫紉而勉之誦聲琅然響徹鄰壁縣僚聞而歎嗟常語于家以激勵其子弟而稱夫人之賢也。【行狀】違事舅姑、內外歡忻無一異言。舅姑稱之未嘗有一日不滿之色。又能以順相其夫、處其家以勤儉、至於奉賓客軍馬恩、至則屏國中物無吝惜。	王庭珪、數文閣學士(正三品)	『廬溪文集』卷四十四		
0716	越國太夫人郭氏墓誌銘	母		南2	1165	乾道元年	71	21	北3	1115	5	5	0	正一品	國太夫人	正三品	宣奉大夫	正六品	奉直大夫	從一品	開府儀同三司	從五品	惠州團練使武功大夫成忠郎	京畿路開封府開封縣	京畿路開封府開封縣	縣內		【賞贊】夫人盡婦道敬無毫毫違顏見稱實。【封号】享年七十有一。累封福國夫人。以昭祖(次男)通紹祀恩加封越國太夫人。	胡銓、工部侍郎(從三品)	『胡澹庵文集』卷二十六	
0717	程給事母宣人胡氏墓誌銘			南2	1165	乾道元年	75	北3	1108	5	3	2	從六品	宣人					從六品	朝散大夫	正四品	給事中	江南東路徽州歙縣	江南東路徽州歙縣	縣內		【學問】宣人慈惠盡教四德兼茂知今通釋氏書常敬仰其賢。	周必大、太子少傅(從二品)	『周益國文忠公集』卷三十六		
0718	柴夫人墓誌銘			南2	1165	乾道元年					3	3	0						從一品	開府儀同三司	從七品	閩門宣贊舍人致武郎忠訓郎	京畿路開封府開封縣	金陵			【賞贊】夫人入門嘗宣之(後)德。治內事斬新無一毫亂殺武敬焉。【守節】毅武公(夫)既沒。夫人拊育諸子甚至時以公所教諸子者督之不專於慈也。【宗室】始毅武公(夫)居金陵、聞夫人之賢難焉。時毅武公已貴內外宗族甚夥。夫人入門嘗宣之終。	周季、黃州教授(從八品)	『露齋鉛刀編』卷二十八		
0719	清河張氏夫人墓誌銘	妻		南2	1166	大定6年	35	14	南1	1145	2	2	0	正五品	縣君	正八品	秘書郎				中都副留守	從八品	供奉班祿候	河北東路恩州清河縣	京東西路東平府鄆州中都縣	路間		【賞贊】夫人性敏而靜恭執婦道門肅然言動有法實。【封号】平後五年進封太原縣君。	金玉叔、	『拙軒集』卷六	
0720	亡姊尚氏夫人墓誌			南2	1166	乾道2年	47	16	南1	1135	8	5	3			從四品	太中大夫	正七品	朝請郎	從八品	宣教郎			河北西路相州安陽縣	江南西路吉州廬陵縣	路間		【賞贊】夫人天性敏悟知書達物理嫁時雖少已能代。嗟夫人之賢行多矣。今不能盡著獨紀其大略如此後世其有考焉。	周必大、太子少傅(從二品)、姊	『周益國文忠公集』卷三十六	
0721	吳隱君夫人萬氏墓誌銘			南2	1166	乾道2年	78	18	北3	1106																	【行狀】夫人萬氏少而賢為婦。事隱君(夫)以父母惟謹油然恭順。	趙希括、學者	『應齋雜著』卷四		
0722	攝人陳氏墓誌銘			南2	1166	隆興丙戌	30	19	南1	1155	2	1	1	正八品	攝人	正七品	朝請郎	正七品	朝請郎	正九品	承奉郎			福建路福州侯官縣	福建路福州侯官縣	州內		【行狀】夫人其事舅姑順職、而義撫兒女慈愛、而嚴處姑嫂之間無言。應接內外曲盡情愴、各得其驩心實令淑也。	林之奇、校書郎(唐)(正九品)	『拙齋文集』卷十八	
0723	王自得祖母傅氏墓誌銘			南2	1166	乾道2年	75	北3	1109	5	2	3										義烏王	從九品	將仕郎(唐)	兩浙路婺州義烏縣	兩浙路婺州義烏縣	縣內		【行狀】姑余夫人、律例內甚嚴、諸婦屏氣側足候伺顏色、少當其意者獨。夫人事之順焉。	呂祖謙、秘書閣著作郎(從七品)	『東萊外集』卷五
0724	曾時仲母王氏墓誌銘			南2	1166	乾道2年	49	南1	1135	6	4	2												江南西路吉州廬陵縣	江南西路吉州廬陵縣	縣內		【賞贊】夫人觀曾氏(夫)之宜則知。夫人能傾資以奉其寡之寡客。觀觀樂之能教子則知夫人之有助。觀行中(4男)之文則知夫人之賢。	楊萬里、寶訓閣學士(正三品)	『誠齋集』卷一百二十六	
0725	曹氏令人墓誌銘			南2	1167	乾道2年	68	19	北3	1118	5	2	3	從四品	令人	正七品	左藏庫副使	從二品	節度使	從六品	工部郎中							【賞贊】令人贊其夫其居官臨民御下持法通事明敏以嚴而令人佐其親工部嘗客其游多四方名士某為豆量有移以具須其往來至於投閑居官蓋如一日未嘗以閑為辭而應者卒之用令人蓋以愛其廉而以舊嘗副其求也。	李石、太學博士(從八品)	『方舟集』卷十七	
0726	令人壙誌(賈氏)	妻		南2	1168	乾道4年	55	南1	1131	5	3	2	從四品	令人					正三品	龍圖閣學士		國學生	兩浙路瑞安府樂清縣	兩浙路瑞安府樂清縣	縣內		【行狀】令人歸于我(僕者·王十朋)。違事舅姑以孝稱、從其夫。【封号】初封恭人、再封令人。	王十朋龍圖閣學士(正七品)、妻	『梅溪後集』卷二十九		
0727	尚書吏部員外郎朱君攝人			南2	1169	乾道5年	70	18	北3	1117	4	3	1	正八品	攝人					正七品	尚書吏部員外郎	從九品	迪功郎	江南東路徽州歙縣	江南東路徽州歙縣	縣內		【守節】先君卒、嘗年(子)才十有四。攝人辛勤撫教、俾知所向。不幸既長而愚、不達世用、宜病困憂、人所不堪、而攝人處之怡然。違事舅姑、孝謹篤至、有人所難能者。	朱熹、實文閣待制(從四品)	『晦庵集』卷九十四	
0728	攝夫人權唐誌			南2	1169	乾道5年		19			2	1	1															【賞贊】夫人幼天性凡女工之百巧。夫人類能為以一藝名工者。	陸增祥、翰林院修撰	『八瓊金』卷一百十四	
0729	榮國太夫人王氏墓銘	母		南2	1169	乾道5年	78	北3	1109	9	6	3	正一品	國太夫人	從七品	供備庫副使	正八品	內殿崇班	從二品	崇德郎	昭慶軍節度使	正七品	朝請郎承務郎	京畿路開封府開封縣	京畿路開封府開封縣	縣內		【宗室】宋皇叔故贈昭慶軍節度使追封雍寧公諱士敏之夫人王氏、世開封人、五世祖仁瞻左右都督有功臣密副使、曾祖潤卿贈右金吾衛大將軍、祖公孫供備庫副使、父·儲內殿崇班。夫人崇班次女也。【賞贊】夫人訓諸子忠婦謹門之內無如也。【封号】封令人。歷永嘉·大寧·永寧三大夫人。進封榮國。	林之奇、校書郎(唐)(正九品)	『拙齋文集』卷十八	
0730	處氏母墓誌銘			南2	1169	乾道4年	77	北3	1110	6	1	5									從九品	將仕郎(唐)						【守節】夫蚤世、二十三年自以未亡人、剝膚補綴輟時應對俾李門偏業有盛不衰茲亦三者自然之得至於忍而能決使而能施靜而能應有達於佛氏之權者非一毛不肯取予無辜此姪性命不忍路雖乃自謂目雖雖然可捨了至死不亂雖烈夫大不及也。	李石、太學博士(從八品)	『方舟集』卷十七	
0731	高侍郎夫人墓誌銘(王氏)			南2	1170	女探者沒年	81	12	北3	1101	3	3	0						從三品	吏部侍郎	從八品	修職郎承務郎	京西北路汝州梁縣	淮南西路和州歷陽縣	路間		【早婚】太夫人諱靜明、廬州梁縣人、姓王氏、年十有二歸高氏、生三男子。【守節】侍郎(夫)喪時子長尚幼。凡子長學行卓然、能自獨立不墜其家聲母夫人實教之也。	張孝祥、學者	『干湖集』卷二十九		
0732	夫人汪氏墓誌銘			南2	1170	乾道6年	63	19	北3	1126	3	3	0					正四品	通議大夫					江南東路信州上饒縣	江南東路信州上饒縣	縣內		【行狀】夫人吾姊也。姓汪氏、信州玉山人。父諱某、贈通議大夫。母魯氏、追封淑人。夫人年十有九嫁同縣程某。躬使服勤人所難堪、而夫人安之性質溫直未嘗為色辭以欺人也。蓋嘗曰吾老且衰欲教家事而供養。人亦以爲宜嘗其報嘗未及而以乾道六年九月己丑卒。年六十有。三子男三人、長克勤、次克和、次克成。孫男八人、女三人。其孫得將以七年十月二月壬寅、墓夫人于玉山之巔田社、來諱銘。嗚呼其哭吾兄南期月而又哭吾姊也。子然此身雖幸而僅存、亦何聊哉。銘曰、其艱其勤以終其身、咨爾後人尚能踵其親。	汪應辰、端明殿學士姊	『文定集』卷二十三	
0733	(潘氏)郭宜人墓誌銘(劉氏)	妻		南2	1170	乾道6年	64	北3	1124	14	8	6	從六品	宜人		太子	正五品	左中大夫	從六品	戶部郎中	從九品	迪功郎	兩浙路常州	武興				夫【銘乞】戶部公之配郭宜人墓既葬二年、戶部以書來、諱曰「郭翁老而哭喪墓草再易矣。吾要四十年代予勞之不可忘也」諸子相從讀學履履裝爵皆宜人均之一德所形見也。	呂祖謙、秘書閣著作郎(從七品)	『東萊集』卷十	

0734	林夫人朱氏墓誌銘			南2	1170	乾道6年	63		北3	1125	4	3	1										從九品	承務郎	兩浙路温州瑞安縣	兩浙路温州瑞安縣	縣內	【行狀】夫人事父母以孝聞。及歸林氏為家婦。事舅姑如事父母。遺事祖姑陳夫人春秋尚齒。陳夫人忘焉。姑馮夫人性勤以嚴日以昧爽視家政。夫人必曰「人有一母、吾有二母。」	楊萬里、寶謨閣學士(正三品)	『誠齋集』卷一百二十六	
0735	費夫人墓誌銘			南2	1171	乾道7年	55	17	南1	1133	4	2	2								從八品	宣敦郎			江南東路廣德軍建平縣			【行狀】夫人篤孝君姑以成。其夫之賢蓋有古列女風至臨死生之變而不以動心則雖學士大夫有弗及者然求其所以能至是者亦自孝敬。【賞贊】乾道八年而作銘者君之友吳陸某也。銘曰「嗚呼有宋孝婦費夫人之墓」	陸游、章寧閣待制(從四品)	『渭南文集』卷三十二	
0736	趙夫人墓誌銘			南2	1171	乾道7年	52	20	南1	1139	5	3	2								鄉貢進士				兩浙路温州瑞安縣	兩浙路温州瑞安縣	縣內	【賞贊】二十餘來歸事字尊親時節其服食飲饌各以意恭嗔無驕缺不自事游跡惟寂寞之謂勝潔必致訓齊兒女莊如文人至今僅碑則以意及雖婦氏其行應銘敢以謹按。	陳得良、寶謨閣待制(從四品)	『止齋集』卷四十七	
0737	曾監酒母孺人劉氏墓誌銘			南2	1171	乾道7年	93		北3	1096	6	5	1	正八品	孺人						從八品	文林郎	從八品	修職郎迪功郎	江南西路臨江軍新淦縣	江南西路吉州吉水縣	路內	【賞贊】夫人幼服姑鞠長聞婦道。【行狀】事舅姑孝。待宗族敬。內外交譽聞言弗聞。	周必大、太子少傅(從二品)	『周益國文忠公集』卷三十六	
0738	新韓氏誌	繼室		南2	1171	乾道7年	27		南1	1162	2	0	2							正六品	尚書左司郎中	從七品	秘書閣著作郎	京畿路開封府開封縣	兩浙路婺州	路間		呂祖謙、秘書閣著作郎(從七品)妻	『東萊集』卷十		
0739	義烏陳錫母朱氏墓誌銘			南2	1172	乾道8年	64	19	南1	1127	7	5	2											金陵	福建路漳州龍溪縣		【賞贊】母氏資勳佐佐家君。理內事。自始歸至髮有二色。猶不怠於訓子尤篤。嘲雖鄉里。大抵不失其驕心。	呂祖謙、秘書閣著作郎(從七品)	『東萊集』卷十一		
0740	安人張氏墓誌銘	繼室		南2	1172	乾道8年	39	24	南1	1157	2	1	1	正七品	安人	正二品	金紫光祿大夫	正七品	朝散郎	正七品	朝請郎				淮南西路和州	京畿路開封府雍邱縣	路間	【賞贊】夫人性靜專。且知書能誦佛經習于世。故學族人人敬之宜為長史記也。	韓元吉、龍圖閣學士(正七品)	『南園甲乙稿』卷二十二	
0741	南夫人陳氏墓誌銘			南2	1173	乾道9年	48	17	南1	1142	9	3	6												兩浙路婺州義烏縣	兩浙路婺州義烏縣	縣內		陳亮、建康府判官(正八品)	『龍川集』卷二十九	
0742	金華汪仲儀母王氏墓誌銘			南2	1173	乾道9年	51		南1	1140	12	6	6								從七品	承議郎			從九品	將仕郎(唐)	兩浙路婺州金華縣	兩浙路婺州金華縣	縣內	呂祖謙、秘書閣著作郎(從七品)	『東萊集』卷十一
0743	先祖黃氏夫人墓誌銘	母		南2	1173	乾道9年	37		南1	1154	3	3	0									從七品	武經郎			兩浙路婺州永康縣	兩浙路婺州永康縣	縣內		陳亮、建康府判官(正八品)、母	『龍川集』卷二十九
0744	金華戚如圭母周氏墓誌銘			南2	1174	淳熙元年	62	18	南1	1130	5	4	1										從九品	迪功郎	兩浙路婺州金華縣	兩浙路婺州金華縣	縣內	【賞贊】夫人少紓其勤。夫人曰「吾職也」。	呂祖謙、秘書閣著作郎(從七品)	『東萊集』卷十一	
0745	夫人許氏墓誌銘			南2	1174		27	19	南2	1166	2	1	1												福建路建寧府政和縣	福建路建寧府政和縣	縣內	【賞贊】夫人生而靜淑、治絲枲絲皆過人。	朱熹、宣文閣待制(從四品)	『晦庵集』卷九十二	
0746	宜人丁氏墓誌銘			南2	1174		49		南1	1143	8	3	5	從六品	宜人									從六品	朝散大夫	兩浙路温州永嘉縣	兩浙路温州永嘉縣	縣內	【賞贊】始入門時舅姑皆無恙。晨昏無違禮。內睦鄉鄰。諱婦諸姑。外接親戚、朝鄰里、恩義俱備。重輕有別。於是吾族稱爲賢婦。	朱熹、宣文閣待制(從四品)	『晦庵集』卷九十三
0747	金華時漫母陳氏墓誌銘			南2	1174						5	4	1												兩浙路婺州金華縣	兩浙路婺州金華縣	縣內	【教育】其子見里有節書者。歸有彩色。夫人出簪珥直數十萬。俾爲工費。且曰、吾家非窮空也。特欲汝世異日見此書不忘吾此意耳。夫人沒後。諸子爲予誦之。輒涕下不能禁。庶幾有成其志者。	呂祖謙、秘書閣著作郎(從七品)	『東萊集』卷十三	
0748	盛夫人墓誌銘			南2	1175	淳熙2年	63	18	南1	1130	12	8	4	正八品	孺人	正八品	通直郎				正八品	通直郎			兩浙路徽州歙縣	兩浙路台州寧海縣	路內	【賞贊】孺人資淑重孝敬不見。姑文安郡夫人尤愛之。淳熙乙未(1175)秋七月二十八日卒。享年六十有三。明年(1176)以塋葬鄉諸人。	樓鑰、中書舍人奉直學士(正四品)	『攻媿集』卷一百	
0749	徐氏墓誌銘			南2	1175	淳熙2年	68	18	北3	1125	8	4	4										從八品	從政郎承信郎	兩浙路蘇州興縣	兩浙路蘇州興縣	縣內	【行狀】夫人性倜儻歸愈氏。常恨不及事舅姑。凡四時之祭雖病必親課五十戰如一日曰「非是無以自盡也。」	周冲、真州教授(正八品)	『露齋鉛刀編』卷二十八	
0750	胡夫人呂氏墓誌銘			南2	1175	淳熙2年	48	19	南1	1146	3	2	1												兩浙路婺州永康縣	兩浙路婺州永康縣	縣內	【賞贊】夫人自能勞苦以取其舅姑歡心諸姪之幼小者撫視加慈惻焉。	陳亮、建康府判官(正八品)	『龍川集』卷二十九	
0751	章夫人田氏墓誌銘			南2	1175	淳熙2年	53	20	南1	1142	6	3	3												兩浙路處州縉雲縣	兩浙路婺州永康縣	路內		陳亮、建康府判官(正八品)	『龍川集』卷二十九	
0752	惠夫人墓銘	妻		南2	1175	淳熙2年	31	21	南2	1165	4	2	2								進士	正二品	參知政事		兩浙路常州建安縣	福建路建州建安縣	路間	【賞贊】君生於良族。族諸老言「君裁十歲知事父母敬長而孝益謹父嘗有瘧疾。君憂甚不自省食息事候伺親則膳服憂慙恚躬之病未間則焚香泣下暮夜敬情不知夕之竟也。」	袁詒友、參知政事(正二品)	『東塘集』卷二十	
0753	方夫人誌	繼室		南2	1175	淳熙2年	48	31	南1	1158				正七品	朝散郎	正七品	朝散郎	從八品	從事郎						桐廬	兩浙路婺州武義縣		【守節】生三十有一年而歸於先君。又十一年先君即世。是時伯姊五歲、祖平財四歲。夫人提攜鞠育更歷艱苦十有八年於後伯姊始出適迪功郎曾某。祖平亦始得隨安府司戶參軍未及祿養。	呂祖謙、秘書閣著作郎(從七品)妻	『東萊外集』卷五	
0754	張氏墓表	母		南2	1175	淳熙2年		6	5	1	從七品	太孺人	從一品	太子太師	從六品	朝散大夫	正八品	吉州教授	從八品	進士				淮南西路安慶府	江南西路建昌軍南豐縣	廣接路間	【賞贊】夫人自貴族入門解選動便不忽細故在敬而順喜怒不見於色小大無間言信道既敦教子持家弗隳厥訓晚歲家益謹。夫人秉德有常非其所勉強也。	張栻、吏部侍郎(從三品)	『南軒集』卷四十一		
0755	宜人王氏墓誌銘	繼室		南2	1175	淳熙2年	58		南1	1135	3	2	1	從六品	宜人		提舉利州路峽平事	正八品					從九品	迪功郎	兩湖北路安州安陸縣	路間	【行狀】事姑以恭肅。聞相德慶君(夫)、周睦內外有恩意。【守節】德慶君(夫)歿、處家事嚴整。教子有法度。	張栻、吏部侍郎(從三品)	『南軒集』卷四十一		
0756	水寧郡夫人孫氏墓誌銘			南2	1175	淳熙2年	73		北3	1120	7	2	5	正二品	郡夫人				正四品	中書舍人	從六品	朝議大夫朝請郎			江南東路池州石埭縣	江南東路池州石埭縣	縣內	【賞贊】夫人幼而敬事父母以孝。	樓鑰、中書舍人奉直學士(正四品)	『攻媿集』卷一百二	
0757	梁國夫人管氏墓誌銘	繼室		南2	1175	淳熙2年	72		北3	1121	10	5	5	正一品	國夫人	正九品	承事郎	正九品	承事郎	正二品	參知政事	正八品	通直郎宣義郎從事郎		兩浙路處州龍泉縣	兩浙路越州會稽縣	路內	【賞贊】夫人其季女也。生有淑德。族姻稱其婉婉。李公(夫)聞而聘之。夫人嫁不及舅姑以為恨。歲時祠祀而潔嚴敬。凡海澨烹飪之事、必身親之、比老愈篤。諸子女多出元配黃氏。夫人有子二男二女。而撫愛均一、人無間言。	朱熹、宣文閣待制(從四品)	『晦庵集』卷九十二	
0758	易氏夫人墓誌銘	繼室		南2	1175	淳熙2年	77		北3	1116	7	6	1										正八品		州學教授司戶參軍迪功郎鄉貢進士	河北東路大名府成安縣	河北東路大名府成安縣	縣內	【守節】夫人歸二十有八年而劉君卒。諸孤藐然、一時強有力者肆兼并生理、殆盡人私愛之。【教育】夫人呼諸子戒之曰「汝父少德後必必有興者。吾惟盡教汝用成先志免當曹、以詩書起門戶豈不足處也。」	胡鉉、工部侍郎(從三品)	『胡澥庵文集』卷二十四
0759	浩齋先生劉公向夫人墓誌銘			南2	1175	淳熙2年	63		南1	1130	4	3	1							從七品	武經郎			京畿路開封府開封縣	江南西路吉州安福縣	路間	【守節】先生(夫)卒。夫人身任家責撫訓諸孤量其男若女若孫之婚嫁者七人。夫人天性愉和與妯娌睦睦有沒者哭之盡哀又有二年教其子得中治第歸隱之安且享矣。	楊萬里、寶謨閣學士(正三品)	『誠齋集』卷一百二十七		
0760	李母曾氏墓誌銘			南2	1175	淳熙2年	78		北3	1115	3	2	1												江南西路吉州廬陵縣			【教育】母曰「汝學而未就是否憂也。」學就而身未享豈憂哉。母不知書而善點誦釋氏語。	楊萬里、寶謨閣學士(正三品)	『誠齋集』卷一百二十六	

0761	夫人鄧陽氏墓誌銘			南2	1176	淳熙3年	50	18	南1	1144	5	4	1						從八品	修職郎			江西南西路吉州廬陵縣	江西南西路吉州廬陵縣	縣內	【行狀】姑太孺人壽氏年八十、每夫人上食侍立不去。太孺人每言及必流涕曰「非我婦也、我女也。」 【教育】夫人訓諸子以學問每夕吹燭視其讀書點聽古人語。時若有得曰某書某語殆謂其事耶往往結合文意至驚警瑣與衣履以遺其子使從四方名氏游。次子歲年十七薦名禮部。 【賞鑒】夫人能處禮孝義哀死字孤為子求師擇友日夜進其業而教其女以婦事智詒於成不幸得年不長四十有九而卒。 【封号】祖平(子)進朝祥以宗祀恩贈從事通直郎。夫人亦追封孺人。	楊萬里、寶謨閣學士(正三品)	《誠齋集》卷一百二十六	
0762	呂從事夫人方氏墓誌銘			南2	1176	淳熙3年	49	21	南1	1148	2	1	1	正八品	孺人	正七品	朝散郎	朝散郎	從八品	從事郎			桐廬	京西北路河南府河南縣		陸游、章卓閣待制(從四品)	《渭南文集》卷三十六		
0763	王給事母安人徐氏墓誌銘	母		南2	1176	淳熙3年	69	22	南1	1129	4	3	1		太安人					正四品	給事中 考功郎		南浙路處州青田縣	南浙路處州青田縣	縣內	【賞鑒】太安人慈祥勁釋有容德待嫌姘以談御婢妾以恩少監母與客語輒耳屬於屏既歸枚教曰某賢可與游其不然勿親也。 【封号】從其子官於朝者五年劾躬擇臨江漢報初以乾道九年(1173)冬祀恩封太孺人(66)。至是壽進封太安人。	周必大、太子少傅(從二品)	《周益國文忠公集》卷三十六	
0764	通直劉君裴夫人墓誌銘	繼室		南2	1176	淳熙3年	正八品		北3	####	5	2	3				正七品	武功大夫	正八品	通直郎	從八品	太常寺主簿	京畿路開封府祥符縣	江西南西路吉州廬陵縣	路間	【賞鑒】通直君(夫)自元配離氏、夫人沒。家道不振。夫人始佐通直君嘗冠婚戴蔽蔽轡。初劉氏自江西徙京師。建炎南徙流離貧困。夫人之歸也。通直輩從兄弟來者日益衆。夫人麗於骨肉之義待之有盡禮無盡費「與亂而骨肉之散者於此吾所樂也。」 【賞鑒】胡氏女既歸其姑殊愛之。義直(夫)亦更折節自愛婦又事事可人意以綏仲故相傳聞里義直(夫)晚於家事乃有不自得於中者時時以杯酒自放婦蓋愛之亦不敢傷其意也。 【行狀】安人鍾母事父母孝。葬歸夫家胡氏。族大少長率禮法。事姑時賢已不逮。事獨姑國婦夫人、在夫人文史族。	楊萬里、寶謨閣學士(正三品)	《誠齋集》卷一百二十六	
0765	章婦胡氏墓誌銘			南2	1176	淳熙3年	36		南1	1158	2	2	0									南浙路處州縉雲縣			陳亮、建康府判官(正八品)	《龍川集》卷二十九			
0766	先兄民師配安人陳氏墓誌銘			南2	1177	淳熙4年		15			7	5	2	正七品	安人				從八品	宣教郎			江西南西路吉州太和縣	江西南西路吉州廬陵縣	州內	胡誥、工部侍郎(從三品)	《晦庵文集》卷五		
0767	夫人呂氏墓誌銘			南2	1177	淳熙4年	56		南1	1139	1	1	0					正八品	刺浦令	從九品	吉州吉水縣尉		福建路南劍州劍浦縣	福建路南劍州劍浦縣	縣內	【守節】夫人以孀婦抱弱子、持守門戶、奉承宣歙、和輯上下、內外斬斬無間言。 【行狀】事舅姑甚得其懷心。	朱熹、實文閣待制(從四品)	《晦庵集》卷九十	
0768	林宜人墓誌銘			南2	1177	淳熙4年	68		南1	1127	6	1	5	從六品	宜人			從四品	數文閣待制	從六品	朝奉大夫	得仕郎(唐)	江西南西路吉州廬陵縣	江西南西路吉州廬陵縣	縣內		《晦庵文集》卷二十四		
0769	汪夫人曹氏墓誌銘			南2	1177	淳熙4年	79		北3	1116	4	2	2					從八品	從事郎			南浙路婺州金華縣	南浙路婺州金華縣	縣內	【守節】主簿(夫)沒時夫人年方四十四、男女二女皆幼。夫人輔理門戶節有範法過者不知其家居也。晝夜自躬其勞以導其男子於學女子非女功不輟焉。	陳亮、建康府判官(正八品)	《龍川集》卷三十		
0770	周叔離夫妻前輝墓誌銘(黃氏)			南2	1177	淳熙4年	正八品		北3	####	3	0	3									南浙路婺州永康縣	南浙路婺州永康縣	縣內	【長壽】叔離(夫)得年七十有六。晏然進至寶淳熙己亥(6年1179)八月之六日也。先是其妻黃氏以丁先是其妻黃氏以丁酉(淳熙4年1177)七月九日薨。年八十而卒。夫妻以壽終可。	陳亮、建康府判官(正八品)	《龍川集》卷二十七		
0771	姚支原李氏母懿姑(方氏)			南2	1178	考沒年	70	20	南1	1128	2	1	1						從八品	文林郎		福建路興化軍莆田縣	福建路興化軍莆田縣	縣內	【賞鑒】夫人內緒懷中若以為己子孀扶養每欲出於其手晝日飲食之則懼之寢是女殆歲終往往通人意終不知為何他所出也。	林光朝、中書舍人(正四品)	《艾軒集》卷九		
0772	母杜氏墓誌	母		南2	1178	淳熙5年	54		南1	1142	5	4	1									南浙路温州瑞安縣	南浙路温州永嘉縣	州內	【賞鑒】夫人人生十餘年、則能當其門戶勞辱之事矣。孝敬仁善、異於他女子。夫人無生事可治、然適管理其微細者、至乃括落麻道行織之、僅成端匹。人或笑夫人之如此、夫人曰：「此吾職也。不可廢。其所不得為者命也。」踰居是二十餘年、留人耳目所未嘗見聞者、至如風所稱之婦人、不足道也。	葉進、實文閣待制(從四品)母	《水心集》卷二十五		
0773	周夫人黃氏墓誌銘			南2	1179	淳熙6年	47	14	南1	1146	5	3	2									南浙路婺州永康縣	南浙路婺州永康縣	縣內	陳亮、建康府判官(正八品)母	《龍川集》卷三十			
0774	萊國墓銘(萊國夫人沈氏)	妻		南2	1179	淳熙6年	61	16	南1	1134	12	9	3	正一品	國夫人	從五品	左中奉大夫	從八品	太學博士	從二品	觀文殿大學士	從七品	承議郎 奉議郎 文林郎 宣敷郎 承奉郎	南浙路常州無錫縣	江南東路鎮州樂平縣	路間	【賞鑒】夫人性和易口不道人長短故中外婦姁咸近終始無違言昏妬叔姪五盡心不諱勞(勞瘁)忤忤。	洪邁、觀文殿大學士(從二品)妻	《盤洲文集》卷七十七
0775	潘叔度妻朱夫人墓誌銘			南2	1179	淳熙6年	34	27	南2	1172	5	2	3			從四品	司農卿	正四品	中書舍人				南浙路明州鄞縣	南浙路婺州金華縣	路內	【賞鑒】皆稱夫人之賢、及歸。踐職職過所聞。叔度自律甚嚴。人當其意。夫人獨事之順焉。其於子者女。叔度不獨言其美均愛。又旁各其厚於慈也。	呂祖謙、秘書閣著作郎(從七品)	《東萊集》卷十三	
0776	謝齊氏誌	繼室		南2	1179	淳熙6年	17		南2	1180							從六品	右文殿修撰	從七品	秘書閣著作郎			南浙路婺州	南浙路婺州	州內	呂祖謙、秘書閣著作郎(從七品)妻	《東萊集》卷三		
0777	鄱陽王安母程氏墓誌銘	繼室		南2	1179	淳熙6年					6	4	2	正八品	孺人					從九品	迪功郎		江南東路鎮州德興縣	江南東路鎮州德興縣	縣內	【賞鑒】吾母獨未以為足。安未敢以是為報也。三十年間、齒經拘畏。雖無能短長。鄉之耆者。以其不叛於子。稱稍道子弟從安游。安始少自戢。而吾母則仁矣。 【封号】淳熙二年、天子稱賜使壽官。賜高年者爵誥人貴始封。後三年十月二十六日以疾卒。	呂祖謙、秘書閣著作郎(從七品)	《東萊集》卷十三	
0778	金華游玠母陳氏墓誌銘			南2	11正八品	淳熙7年	58	17	南1	####	8	5	3					貢士	從九品	迪功郎			南浙路婺州金華縣	南浙路婺州金華縣	縣內	【教育】教諸子尤力。玠(母陳氏之長子)游海。絳補炮梁。米鹽靡匿。悉出吾母之手。南得一官。未及致歸塗之喪。	呂祖謙、秘書閣著作郎(從七品)	《東萊集》卷十三	
0779	陳氏母林氏埋銘			南2	11正八品	淳熙7年	86	18	北3	####	4	2	2									福建路興化軍莆田縣	福建路興化軍莆田縣	縣內	【守節】年十八嫁同郡洙水君陳氏五十一、而廢其治產若數子不翅如男子所為者嚮也。	林亦之、學者	《綱山集》卷四		
0780	叔祖母韓氏墓銘			南2	11正八品	淳熙7年	75	28	南1	####	1	0	1									南浙路温州永嘉縣	南浙路温州永嘉縣	縣內	【教育】夫人中處與外絕諸子讀書。	陳傅良、寶謨閣待制(從四品)	《止齋集》卷四十七		
0781	宜人趙氏墓誌銘			南2	11正八品	淳熙7年	若干				9	3	6	從六品	宜人	正六品	奉直大夫	從六品	朝議大夫	從六品	朝議大夫	從九品	迪功郎得仕郎(唐)	南浙路處州龍泉縣			羅歸、知郭州朱憲門人	《羅郭州小集》卷四	
0782	黃氏墓誌銘	繼室		南2	11正八品	淳熙7年	40		南1	####	3	2	1									江西南西路撫州臨川縣	江西南西路撫州臨川縣	縣內	【賞鑒】銘曰「世居臨川其姓則黃曰(諱)之之女少慧且長謂殊愛之擇配至詳樂緩其歸繼室于宋歲時祭祀必齋戒肅有親有賓帥具有常儀繼二子」	陸九淵、台州崇道觀	《象山集》卷二十八		
0783	黃夫人墓誌(繼室)	繼室		南2	11正八品	淳熙7年	64		南1	####	5	1	4									江西南西路撫州臨川縣	江西南西路撫州臨川縣	縣內	【賞鑒】姑幼時祭祀賓客酒飯茹離靡不躬親潔潔致潔調劑致道奉承獻獻其敬敬其勤勞中饋殆如一日。	陸九淵、台州崇道觀	《象山集》卷二十八		
0784	李母孺人霍氏墓誌銘			南2	11正八品	淳熙7年					6	4	2	正八品	孺人							福建路寧平司鈐官			方大璋、字學士	《徽庵集》卷三十五			
0785	喻夫人王氏改葬墓誌銘			南2	11正八品	淳熙7年					6	4	2												陳亮、建康府判官(正八品)	《龍川集》卷二十九			
0786	安人王氏墓表			南2	1181	淳熙8年		15			7	2	5	正七品	安人	正二品	金紫光祿大夫	正六品	朝議大夫		正八品	通直郎從政郎	成都府路成都府華陽縣	成都府路成都府華陽縣	縣內	【賞鑒】夫人自幼以專靜才明稱於其家、年甫歸陳范君諱權。夫人居家儉約、不以出內絕故累其君子。	朱熹、實文閣待制(從四品)	《晦庵集》卷九十	
0787	安人史氏墓誌銘			南2	1181	淳熙8年	30	20	南2	1171	5	2	3	正七品	安人							朝議郎				魏了翁	《龍山集》卷八十一		
0788	劉氏妹墓誌銘	娘		南2	1181	淳熙8年	43	21	南1	1159	4	2	2								從九品	得仕郎(唐)	江南東路歙州歙縣婺源縣	成都府路成都府華陽縣	路間	【賞鑒】為人質實易良、自幼不見其有妄言嗔色。年二十有一以劉氏、佐廖集(夫)理家事、勤約不懈。無教諸子、愛而有節。其退下有恩惠、門內之治類如此。	朱熹、實文閣待制(從四品)娘	《晦庵集》卷九十一	

0789	徐韓趙氏墓誌銘			南2	1181		27	南2	1181							從二品	節度使	從七品	武翼郎							南2	浙路婺州永康縣	南2	浙路婺州永康縣	縣內	趙氏嫁して日後に卒。	陳亮、建康府判官(正八品)	『龍川集』卷二十九			
0790	先伯知縣先伯母孀人墓銘			南2	1181	淳熙8年	46	南1	1153	7	4	3	正八品	孀人						從六品	朝請大夫						南2	浙路平江府崑山縣	南2	浙路平江府崑山縣	州內	【封号】公(夫)仕體朝請大夫妣沈氏封宜人。	衛湜、奉知政事(正二品)	『後集集』卷卷十七		
0791	宜人姚氏墓誌			南2	1181	淳熙8年	77	北3	1122				從六品	宜人						從八品	文林郎	正八品	奉議郎				福建路泉州永春縣	福建路興化軍莆田縣	路內	【賞贊】夫人為法則剛、而身為良婦為良母。 【封号】歲在庚辰寅以郊霽封孀人、自後建隆間及慶壽封宜人、實千載一日也。	林亦之、學者	『綱山集』卷四				
0792	孀人鄭氏墓誌			南2	1181	淳熙8年	86	北3	1113	4	0	4	正八品	孀人													福建路興化軍莆田縣	福建路興化軍莆田縣	縣內	【行狀】事舅姑也。事夫也。教其忝其古者所謂良婦慈母也。 【封号】淳熙年遠慶壽、以其子與鄉書封孀人	林亦之、學者	『綱山集』卷四				
0793	孫夫人周氏墓誌銘			南2	1181		42	南1	1157	1	1	0															南2	浙路婺州永康縣	南2	浙路婺州永康縣	縣內		陳亮、建康府判官(正八品)	『龍川集』卷二十九		
0794	宜人王氏墓誌銘			南2	1182	淳熙9年		17			4	3	1	從六品	宜人					從六品	朝奉大夫	從六品	朝請大夫	從八品	宣教郎承務郎通判			南2	浙路慶元府松陽縣	南2	浙路眉州眉山縣	路間	【賞贊】宜人治家嚴而有法、歲時祭祀、先旬月戒具、至期齋肅、每事必親、雖疾亦強起、中饋酒食之事、蓋終身不以讓人。教子孫甚嚴、未嘗假以言色、而視其飲食、時其寒煖皆有條里。	朱熹、宣文閣待制(從四品)	『晦菴集』卷九十二	
0795	劉夫人陳氏墓誌銘			南2	1182	淳熙9年	51	南1	1150	6	3	3															南2	浙路婺州金華縣	南2	浙路婺州金華縣	縣內	【賞贊】今年春、劉之夫夫人疾既病矣。然猶往來不輟朝記夕省孀孥之不可以頃刻已者問其故則曰「吾母之志也」 【行狀】事其舅姑以及其夫者宜其皆可觀、而其詳不備、而具也。	陳亮、建康府判官(正八品)	『龍川集』卷三十		
0796	宜人林氏墓誌銘			南2	1182	淳熙9年	45	南1	1160				從六品	宜人						從三品	通奉大夫						南2	浙路温州平陽縣	福建路福州長溪縣	路接路間	【賞贊】宜人嫁奉貴且盡而劉氏姑死吾父至無以買棺槨哀亂計不知所出宜人泣謂曰不有吾舅上一金釵乎舅之而棺具與宗之為太學諸生也。使遺之金若干兩日吾所紡績得此以資汝與宗之得樹立其身以答元母者宜人之賜也。	陳傅良、寶謨閣待制(從四品)	『止齋集』卷四十七			
0797	叔祖居士并張夫人墓誌銘			南2	1182	淳熙9年	78	北3	1122	7	5	2															南2	浙路明州鄞縣	南2	浙路明州鄞縣	縣內	【賞贊】夫人幼儉靜專克相夫子。早歲居貧甚夫人心計有餘。夫人治家之要也。	樓鑰、中書舍人事(正四品)	『攻媿集』卷一百		
0798	王安郡夫人周氏墓誌銘			南2	1182	淳熙9年							正二品	郡夫人	正七品	朝散郎	從六品	朝奉大夫	從二品	鎮青光祿大夫	成都府路成都府華陽縣	成都府路成都府華陽縣	州內	【守節】鎮青卒。于丁潭川倉司。夫人三十有二、諸子皆幼送終治葬。無一不盡自後專意教子晝夜不息。文學鎮青學行以爲法。故諸子益自刻苦相繼應孝子紹節遂登淳熙十四年進士第。	樓鑰、中書舍人事(正四品)	『攻媿集』卷一百九										
0799	太恭人司徒氏墓誌銘	繼室		南2	1182	淳熙9年	85	北3	####	4	2	2	從五品	太恭人						正六品	朝議大夫	從九品	迪功郎得仕郎(唐)				淮南東路海州	淮南東路海州	州內	【學問】太恭人自幼聰慧過人通儒釋書。 【行狀】歸高氏、不遺事舅姑禮宜送、以睦夫族鄉人義之初紹德壽典恩。 【教育】高君先娶趙氏生二子二女、太恭人惟生司農人見其均一莫知為各母也。 【封号】恩封太孀人、郊禮封太恭人。	周必大、太子少傅(從二品)	『周益國文忠公集』卷七十六				
0800	夫人虞氏墓誌銘			南2	1182	淳熙9年	正八品	北3	####	4	4	0								從八品	宣教郎						福建路建州建陽縣	福建路建州建陽縣	縣內	【賞贊】夫人少長聰明、議義理、不樂為世俗華靡事。往來兩家、愛敬由盡、恩義兩得、兩家父母皆憐之。 【行狀】擇其配以歸江公入門時、舅姑年皆甚高、禮法峻整、諸婢少得當其意者。獨夫人左右奉承、禮無違者。凡調羹烹飪之事、既躬服其勞、而薪火之節、亦必謹候候、務為敏給、以稱微指。	朱熹、宣文閣待制(從四品)	『晦菴集』卷九十二				
0801	陳子益母夫人墓銘(林氏)			南2	1183	淳熙10年	64	南1	####																		南2	浙路温州平陽縣	南2	浙路温州平陽縣	縣內	【行狀】歸為家婦連事曾祖姑奉諸祖母以同居、祖行無在者又奉吾父與世父母同居凡五十年矣。	陳傅良、寶謨閣待制(從四品)	『止齋集』卷四十八		
0802	曾正民妻劉氏墓誌銘			南2	1183		51	南1	####	10	5	5				知滑州	從九品	將仕郎(唐)										江南西路吉州永新縣	湖南路永州零陵縣	路內	【賞贊】夫人九歲喪母。伯父廣猷閣待制公寵以爲己女。及笄擇對望於賓客州記錄事謝唐臣。唐臣以故人客陳令之子。今惠州文學曾君敬學對故歸於曾氏。 【行狀】夫人遭事陳院公(舅)歿歸道唯謹、其姑劉氏今年九十矣、夫人每謂姑婦曰「勝日不為樂、以娛老人顧畜於財乎」故其姑特愛之。以娛老人顧畜於財乎」故其姑特愛之。	楊萬里、寶謨閣學士(正三品)	『誠齋集』卷一百二十六			
0803	魏安人胡氏行狀			南2	1183	淳熙10年	68	南1	####	5	4	1					正七品	朝散郎										淮南西路無為軍無為縣	南2	浙路蘇州吳縣	路間	【賞贊】夫人之歸太夫人年已高。泉使公(夫)事母孝恣、以太夫人飲食起居事屬、夫人曰「家事無大於此也。」	袁淑友、奉知政事(正二品)	『東塘集』卷二十		
0804	太孀人邵氏墓表			南2	1183	淳熙10年	71	南1	####	5	3	2	從七品	太孀人														南2	浙路婺州金華縣	江南西路臨江軍清江縣	路間	【賞贊】夫人能左右以敬、無常事焉。家既成、時君(夫)遂用法度嚴內外、文學訓子孫、立信務興、稱重鄉閭。夫人又能奉承以恪、無過志。	朱熹、宣文閣待制(從四品)	『晦菴集』卷九十		
0805	青陽夫人墓誌銘			南2	1183	淳熙10年																					成都府路仙井監并研縣	成都府路崇慶府	路內	【賞贊】夫人幼讀書了大義、於是行其所知自處儉薄而不以宣愛其姑舅親 雖而不以事累其子外父母家而一意立禮氏門戶太安人 雖服非其手調茶澣綌不以進親客室。	陸游、寶章閣待制(從四品)	『渭南文集』卷三十三				
0806	蘇孝女墓銘			南2	1183	淳熙10年	22	南2	####								正七品	尚書左右司員外郎			進士												金元好問尚書員外郎(正七品)	『龜山集』卷二十五		
0807	蕭希韓母彭氏墓誌銘			南2	1183																							江南西路吉州廬陵縣	江南西路吉州廬陵縣	縣內	【教育】能教子而不逮於有就也。	楊萬里、宣謨閣學士(正三品)	『誠齋集』卷一百二十六			
0808	太宜人毛氏墓誌銘	繼室		南2	1184	淳熙11年	58	南1	####	5	2	3	從五品	太宜人	從五品	中奉大夫	正六品	朝議大夫	從七品	武義郎	正八品	修武郎							南2	浙路衢州龍泉縣	南2	浙路衢州龍泉縣	縣內	【賞贊】夫人幼有令聞善女工習詩書。武義任確寶鎮。而與其前配王氏有男子二人矣。 【守節】武義任確寶鎮。而與其前配王氏有男子二人矣。夫人歸焉。僅十年而武義即世。夫人在南二十有七。生二男一女子。日課釋老經、刺繡其像製為幡幃置其萱室用祈。 【封号】夫人以長子陳朝列封太宜人。壽聖慶典封太宜人。	韓元吉、龍圖閣學士(正七品)	『南澗甲乙稿』卷二十二
0809	孟夫人墓誌銘(仲氏)			南2	1184	淳熙11年	52	南1	1150	6	5	1	正三品	正奉大夫	從六品	朝議大夫	正七品	朝奉郎	從八品	宣義郎承奉郎得仕郎(唐)	淮南東路揚州	南2	浙路常州無錫縣	路接路間/最短	【學問】夫人諱壽暹、六歲誦周南詩、通其意、識度過人。 【行狀】信安郡王(舅)以恭儉得家、夫人尤勤苦敬順、事夫訓子、率用寒素。精義諸類先生長者之言當家事精密有斷近智士大夫所為也。	葉適、宣文閣待制(從四品)	『水心集』卷十三									
0810	陸孀人墓誌銘			南2	1185	淳熙12年	74	南1	1129	7	3	4	正八品	孀人	正九品	承奉郎	從九品	迪功郎	從七品	承議郎								南2	浙路越州山陰縣	淮南東路揚州高郵縣	路接路間/最短	【賞贊】孀人年若干嫁為承議郎知梧州南鄉桑公莊之妻。端靖淑柔讀書略知大義。自其在父母家已得孝名。見治絲麻織纈與共事法官與。孀人焉承議既歸主簿以亂故不克北歸因寓近縣山中凡四十年間雖出仕歲滿輒歸居山之日多於在官衣食曾不足孀人處之超然自幼奉佛法戒繫終身不犯管帶行近法(什可)通老蘇門子孫。	陸游、寶章閣待制(從四品)	『渭南文集』卷三十三		
0811	故太淑人葉氏行狀			南2	1185	淳熙12年	82	北3	1121	9	3	6	正三品	淑人			從三品	通奉大夫	從四品	敷文閣待制朝奉郎從政郎	福建路建州建安縣	福建路建州建安縣	縣內	【學問】夫人聰悟閑靜未五歲女工已輕解直學儒兄弟課可讀日記數百言楊母導學日讀書非吾女所先者當先婦道而輔以剪製縫紉可也。 【守節】通奉卒。夫人在僅臨三十。居處守志...有田二百畝、薄入儉出...訪師之良者買『書史』閱虛堂。	袁淑友、奉知政事(正二品)	『東塘集』卷二十										
0812	劉夫人何氏墓誌銘			南2	1186	淳熙13年	53	南1	1150	6	3	3															南2	浙路婺州義烏縣	南2	浙路婺州義烏縣	縣內	【賞贊】夫人志意醇醇語言明朗過親族上下不問貧富貴賤皆有恩紀大率似其父而不類婦人女子然面人之飲而不自飲終日言笑而無可擇之言聞諸行雖處子不能過豈其得陰之正德而無其幽客之氣耶此亦婦人之傑也。	陳亮、建康府判官(正八品)	『龍川集』卷三十		
0813	潘氏孀墓誌銘(王氏)			南2	1186	淳熙13年	33	南2	1172	1	1	0			正六品	朝議大夫	正八品			從九品	將仕郎(唐)							南2	浙路婺州金華縣	南2	浙路婺州金華縣	縣內	【行狀】年十有九而嫁、移所以事親者事舅姑、舅姑亦愛之。處婦姑幼之間、肅穆無間言。脚下寬而有節、為人靜莊莊重、素敬信實。於婦功不才、然不務為組紵華靡之習。所以謙謙然、安貧約、又有人所難。 【教育】嘗讀論語、大學、中庸、孟子諸書、略通大義。	朱熹、宣文閣待制(從四品)	『晦菴集』卷九十二	
0814	何夫人杜氏墓誌銘			南2	1186	淳熙13年	54	南1	1151	9	5	4																南2	浙路婺州東陽縣	南2	浙路婺州東陽縣	縣內	【行狀】吾母早奉其姑勤甚、晚歲復迎外王母、以歸義示諸子以孝也。	陳亮、建康府判官(正八品)	『龍川集』卷三十	

0815	姚清英母夫人墓誌銘(沈氏)			南2	1187	淳熙14年	若干					1	1	0	正八品	攝人															兩浙路婺州金華縣	兩浙路婺州永康縣	州内	【封号】怡(子)入太學高宗皇帝慶寧恩得封攝人。(高宗1107~1187、在位1127~1162)	陳亮、建康府判官(正八品)	『龍川集』卷三十				
0816	太孺人臧氏墓誌銘	母		南2	1187	淳熙14年	87	北3	1118	5	3	2			從三品	太孺人						從六品	朝散大夫	從六品									兩浙路常州江陰縣	兩浙路常州江陰縣	県内	【守節・教育】大夫(夫終、諸子皆幼、夫人悉罷廢故所治生事、獨躬外田數十畝、曰「耕此、教若曹耳。」雖甚貧、而能儲之積少、以供賓祭、待問進、人不覺其力之不逮也。葬土之材否、使其子擇而後從。必令執書、從旁曰：「我婦人也、不能知書之義。觀其玩誦反覆、清切不撓者、深於學之驗也。」	葉適、實文閣待制(從四品)	『水心集』卷十三		
0817	祖妣攝人高氏行狀	祖母		南2	1187	淳熙14年	78	南1	1127	9	7				正八品	攝人				從九品	迪功郎												成都府路瀘江縣	成都府路瀘江縣	県内		魏了翁、祖母	『鶴山集』卷八十八		
0818	薛翁婦墓誌			南2	1188	淳熙15年	54	南1	1152	3	3	0																					兩浙路台州寧海縣				劉宰、太常丞(從七品)	『易齋集』卷二十八		
0819	夫人李氏墓誌銘			南2	1189	淳熙16年	47	19	南1	1161	3	3	0				正三品	監政殿學士					從九品	承務郎	從八品	修職郎承事郎							兩浙路紹興府上虞縣	江南西路吉州廬陵縣	路間	【守節】季永官金陵不幸早世。夫人才三十有三撫羣幼泣且誓之死靡他不御鉛澤不服華侈飾諸孤從師就學比其長也。【行狀】事實姑如父母、笑言不聞。	楊萬里、寶謨閣學士(正三品)	『誠齋集』卷一百二十九		
0820	竺碩夫妻舒氏墳誌			南2	1189	淳熙16年	65	20	南1	1144	7	4	3																				兩浙路慶元府奉化縣	兩浙路慶元府奉化縣	県内	【行狀】事實姑婉、而悉遵長幼事、而睦相君子慎、而幼嫺親。【合葬】年二十而嫁、事碩夫三十有八年、而歿後七年、當淳熙己酉(16年)五月四日而歿。越三年二丙午合葬。于居室之左壽家塋碩夫之墓。	舒璠、徽州教授(正八品)	『舒文靖集』卷上		
0821	黃夫人樓氏墓誌銘			南2	1189	淳熙16年	35	22	南2	1176	1	1	0																				兩浙路婺州義烏縣	兩浙路婺州義烏縣	県内		陳亮、建康府判官(正八品)	『龍川集』卷三十		
0822	夫人趙氏墓誌銘			南2	1190	紹熙元年	38	16	南2	1168								正七品	武翼大夫															京西北路河南府永安縣	江南西路吉州廬陵縣	路間	【行狀】事實姑夙夜哀苦。【賞號】其理家有綱有條下至醯醢脂米鹽塵索絳紵繡絳必躬必手入不知其天宗之貴也。	楊萬里、寶謨閣學士(正三品)	『誠齋集』卷一百二十九	
0823	太孺人陳氏墓誌銘	母		南2	1190	紹熙元年	68	17	南1	1139	8	3	5		從七品	太孺人					學者	正九品	承奉郎	從七品	承議郎									福建路建州建陽縣	福建路建州建陽縣	県内	【賞號】太孺人佐以助敏、持家儉而有法。訓督諸子甚嚴、至待姻黨、遠鄰曲、則又戚有恩意。少時喪其親、哀慕不懈。【行狀】及嫁不遺事實姑、而歲時烹享執事必親訖事常嗚咽流涕、晚好浮屠法得其大指。	朱熹、實文閣待制(從四品)	『晦庵集』卷九十三	
0824	凌夫人何氏墓誌銘			南2	1190	紹熙元年	51	19	南1	1158	1	1	0																				兩浙路越州諸暨縣	兩浙路婺州浦江縣	路内	【守節】暨(子)失父、時母方二十、而嫡及生暨則毅然誓不再適、父母欲奪其志、而不可亦未知暨之必成立也。【教育】余(撰者・陳亮)言暨(子)、母好讀書知義理、於先祖妣治生之際能迎其意、而奉承之於先父既死之後能廢琴不撫以撫其孤敬上恤下內外親屬皆有恩意而慕居不自謂能也。	陳亮、建康府判官(正八品)	『龍川集』卷三十		
0825	朝議大夫吳公开碩人姚氏墓誌銘			南2	1190	紹熙元年						5	4	1	從三品	碩人							從六品	朝議大夫	正七品	朝議郎							兩浙路台州黃巖縣	兩浙路台州仙居縣	州内	【封号】朝議大夫吳公娶姚氏封夫人、先公六年卒累贈碩人。	韓維、中書舍人事(正四品)	『攻媿集』卷一百七		
0826	祖母鄭氏墓誌	母		南2	1190	紹熙元年					7	3	4		從七品	太孺人							從九品	將仕郎(唐)									兩浙路慶元府奉化縣	兩浙路慶元府奉化縣	県内	【守節】先君(夫)游太學十有六年。太孺人躬提家政謹無違者。先君無祿蚤世、太孺人訓鞠孤幼勉勵。【良婦】太孺人鄭氏訓鞠孤幼勉勵。有亡使男有室女有家繕治居處備言燕私。【封号】有宋紹熙元年正月十有六日、先妣太孺人鄭氏歿。	舒璠、徽州教授(正八品)	『舒文靖集』卷上		
0827	太宜人蕭氏墓誌銘	母		南2	1190	紹熙元年	87	北3	1121	8	3	5			從五品	太宜人								從八品	修職郎民義郎承事郎									江南西路吉州	江南西路吉州廬陵縣	州内	【賞號】太宜人以勸侯實家以詩礼進子湘聞益茂家政。太孺人再封太夫人。新天子御極湛恩寵三封太宜人。	楊萬里、寶謨閣學士(正三品)	『誠齋集』卷一百二十八	
0828	太孺人王氏墓誌銘	母		南2	1191	紹熙2年	81	15	北3	1125	6	3	3		從七品	太孺人																		江南西路撫州崇仁縣	江南西路撫州崇仁縣	県内	【賞號】進崇仁之王氏暨歸葬於居士繆公昭字公著。攝人在家為淑女既嫁為賢婦訓子持家為令母為慶門中外僕僕聞里師仰豈可然是有德焉而其宜貢之純詣誠趣之高遠足以行之故也。	陳達、淮南安撫使(正三品)	『江長公集』卷三十五	
0829	夫人張氏墓誌銘			南2	1191	紹熙2年	51	15	南1	1155	6	3	3							從九品	迪功郎													前湖南路潭州湘潭縣	前湖南路潭州攸縣	州内	【學問】夫人嘗而嘗敏辨、而婉婉接孝經女訓於其祖墓通大義。	楊萬里、寶謨閣學士(正三品)	『誠齋集』卷一百三十一	
0830	宜人黃氏墓誌銘			南2	1191	紹熙2年					11	6	5		從六品	宜人							從八品	宣義郎	正八品	州教授文林郎							福建路福州侯官縣	福建路漳州龍溪縣	路内	【行狀】事實姑夙夜唯謹、相其夫理、家事甚樸節、躬劬儉以衣食、撫教諸子甚恩。【學問】初好佛書、讀誦評說、終日忘倦。	朱熹、實文閣待制(從四品)	『晦庵集』卷九十三		
0831	安人張氏墓誌銘			南2	1191	紹熙2年	75	南1	1134	4	3	1			正七品	安人	從八品	博士							從九品	承事郎								兩浙路臨安府	兩浙路臨安府	州内	【學問】夫人自幼讀蒙求・孝經、盡出從先生、夜歸就膏火、親課其勤惰、至雞鳴乃得睡、既長立猶然。博士後試禮部、為天下第一、有爵於朝、封夫人至安人、俞氏之門光顯矣。【賞號】能順實之嚴、敬姑之親、以義盡家、合其孝慈、所謂婦人之常德也。蒙求：書名。三卷。唐的李漸の著。古書から古人の逸話を類集し、四字句の韻語を標題として記列しやすくした初學者用教科書。	葉適、實文閣待制(從四品)	『水心集』卷十四	
0832	夫人鄭氏墓誌銘			南2	1191	紹熙2年	55	南1	1154	7	2	5																						江南西路臨江軍新淦縣	江南西路臨江軍新淦縣	県内	【賞號】夫人於姑壻間序為下陳凡膳羞牢醴頃刻而辦仲平得優游晚歲與親實相親悅雖其家之肥。	楊萬里、寶謨閣學士(正三品)	『誠齋集』卷一百三十	
0833	太宜人鄭氏墓誌銘	母		南2	1191	紹熙2年	85	北3	1124	9	5	4			從五品	太宜人									從三品	兵部侍郎迪功郎贈實進士									江南東路寧國府宣州縣	江南東路寧國府宣州縣	県内	【行狀】事姑孝姑、嘗獲疾通免乳且哺、子且執事於膳於羹躬躬匪置嘗弗遺姑見其勤論遺之曰汝自須人扶吾小愈母久苦汝。太宜人曰敬諾然終不斯須離也。【封号】享年八十有五。太宜人生長備素歸大家見其子冠冠為都使者又以高宗忘福慶恩三封至太宜人。	楊萬里、寶謨閣學士(正三品)	『誠齋集』卷一百三十一
0834	太令人方氏墓誌銘	母		南2	1191	紹熙2年	77	南1	1132	7	2	5			從四品	太令人	從五品	中散大夫					正九品	承事郎	從六品	朝散大夫							福建路興化軍莆田縣	福建路興化軍莆田縣	県内	【賞號】夫人自幼隨而裕淑而恪事親嚴孝嘗欲祝髮為比丘以報鞠育親力止之。既嫁奉事尊章肅恭誠至時其飲食起居色義無違星姑濟南郡夫人多疾罕能中其意者獨非、夫人不和食非夫人不視日躬定省侍面悅或經月方少懈濟南疽於腰幾殆夫人吮血乃愈每稱其孝為宗族。【封号】初適今天子正位儲官以子登朝三過慶壽恩需自攝人。累封太令人。	楊萬里、寶謨閣學士(正三品)	『誠齋集』卷一百二十九		

0835	夫人錢氏墓誌銘	母	南 2	1191	紹熙2年	正八品	南 1	####	4	4	0				從九品	承務郎	正八品	定海丞 吳江掌教 婺州	南浙路台州 臨海縣	南浙路温州 永嘉縣	路內	同年劉使君、與余素舊、其守永嘉、常減騎數出、支坐熟語、良策也。一日、忽棧然灑涕而稱曰：「吾母錢海錢氏、三王之孫也、而以付闕關。外妯早喪、祖曰：『家事惟女之任。』事益理矣。』然而舅若姨皆曰：『恩我者姊也。』故爲女而幸。吾父信書而已、至生業、則曰：『惟爾母之體。』業益進矣。然而伯叔姊妹各有承襲、不自己出也。故爲姊而順。諸子方抱抱、所習皆口授、不以煩師。其從師實訊反覆、曰：『其書也、其未書也。』師不敢慢、子不敢惰、賴以有立。故爲母督而明。凡此略嘗實行、不敢增損云也。不幸以紹熙辛亥年、明年而葬於黃巖縣龍鳴山、三十年矣。然而哀不止、悲不釋、向謂也？吾母平時壽八十矣、兄允元不及及、允迪定海丞、弟允武吳江簿、而允濟掌教婺州。蓋茲、年之高、養之澤也！今不肖孤忝母餘蔭、有誼於朝、假使者節從二千石後、而親不吾待矣。一朝之家、聚而也；一餉之祿、極米也；於吾母不加毫末。若夫華木岑蔚、山靈興伏、而關不以詔銘、斯則罪之大者。是故深慘慙痛而關於子、不知淚之積滯也。」余不識夫人、而誦其夫曰承務郎諱祐雅、力衆善麗學至老、不以家自違者也。歲允迪(次男)厚而敏、曩允武(三男)果而通、若使君信道執德終始不遷、則固余良友矣。	葉連、實文閣待制(從四品)	『水心集』卷二十三			
0836	安人王氏墓誌銘		南 2	1192	紹熙3年	61	南 1	1148	5	5	0	正七品	安人	正三品	溫政殿學士		正七品	朝奉郎	從九品	迪功郎	淮南西路無爲軍無爲縣	淮南東路亳州壽縣	廣接路開	【行狀】安人不違事姑、歸先夫城關而之政一出經理仰義父禮備育諸幼盡。	楊萬里、實誼閣學士(正三品)	『誠齋集』卷一百三十	
0837	太夫人戴氏墳誌	母	南 2	1192	紹熙3年	72	南 1	1138	6	4	2				進士	正八品	儒林郎 鄉貢進士	南浙路明州鄞縣	南浙路明州鄞縣	縣內	【學問】外祖父始修儒業教子有法度、以夫人聰明靜專素嘉書讀可敬也。太夫人助之始學則教之書寫口授音韻必審長則明以達業朝夕誦讀自抄錄自古人言行前載典型與。	袁崇、國子祭酒(從四品)母	『契齋集』卷二十一				
0838	呂夫人夏氏墓誌銘	繼室	南 2	1192	紹熙3年	64	南 1	1155	3	2	1								南浙路婺州永康縣	南浙路婺州永康縣	縣內	【賞贊】夫人年二十有七嫁同邑呂君師愈。呂君先娶夏氏生一男一女而歿。蓋夫人同族女兄也。夫人節密於內課女工甚悉以輔成呂君之志。又贊呂君教其前母之子約必使自見於士林取其女若夫屋旁使能自昌其家蓋繼爲人母者之所難也。	陳亮、建康府判官(正八品)	『龍川集』卷三十			
0839	高夫人墓誌銘(高氏)	姑	南 2	1192	紹熙3年	58	南 1	1152	4	2	2	正七品	安人						南浙路温州永嘉縣	南浙路温州永嘉縣	縣內	【賞贊】夫人智能通南北之俗、自文編工作、下至炊爨煩瑣、皆身親之、豫嘗有無、乃具衣食。外人所有、不立毫分羨幸意。謹與自己出、惟恐人不我僕也。	葉連、實文閣待制(從四品)	『水心集』卷十四			
0840	徐氏墓誌銘		南 2	1192	紹熙3年	78	南 1	1132	4	2	2								南浙路慶元府慈谿縣	南浙路慶元府定海縣	州內	【賞贊】劉氏(夫)姊承以順適以義基以禮遵。	陳達、淮南安撫使(正三品)	『江湖長翁集』卷三十五			
0841	太夫人董氏墓誌銘	母	南 2	1192	紹熙3年	81	南 1	1129	5	3	2	從五品	太夫人			正六品	奉直大夫	從三品	實謀閣直學士 司農少卿 朝議大夫	南浙路衢州西安縣	南浙路衢州西安縣	縣內	【賞贊】初皇姑某氏、性銳且急、里人以為難事惟。夫人能得其歡心、姑被末疾、起居飲食非人不動。夫人夙興問安否。	楊萬里、實誼閣學士(正三品)	『誠齋集』卷一百三十一		
0842	叔母張氏墓誌銘		南 2	1192	紹熙3年	65	南 1	1145											江南西路吉州廬陵縣	福建路福州閩縣	廣接路開	【封号】少卿君(長男)甫冠遂以進士起家。夫人享其義蓋三十有六年果封至太夫人。	曾守、朝散大夫(從六品)	『歸潛集』卷二十			
0843	夫人孫氏墓誌銘		南 2	1193	紹熙4年	53	南 1	1155	7	5	2				正八品	奉議郎	從八品	宣義郎	從八品	文林郎	南浙路越州山陰縣			【教育】夫人幼有淑質、故趙健康明誠之配李氏(李清昭)以文辭名家、欲以其學傳夫人。時夫人始十餘歲、謝不可曰才藻非女子事也。宣義(父)奇之乃手書古列女事數十授夫人。夫人日夜誦服不廢。	陸游、實章閣待制(從四品)	『渭南文集』卷三十五	
0844	前室安人陶氏墳誌銘		南 2	1193	紹熙4年	24	南 2	1190							正四品	太常卿			南浙路秀州嘉興縣	南浙路湖州金壇縣	路內	【賞贊】陶氏令儀淑質歸於劉某三年而卒。	劉宰、太常丞(從七品)、前妻	『晏雅集』卷三十二			
0845	太夫人李氏墓誌銘	再嫁	南 2	1193	淳熙4年	74	南 1	1137	5	2	3	從五品	太夫人	從二品	感德軍節度使	正六品	奉直大夫	從六品	朝請大夫	從八品	從事郎 迪功郎	京畿路開封府開封縣	河北西路相州安陽縣	廣接路開	【再嫁】初適符寶郎錢端義。生一女子矣。而寡爲朝請大夫秘閣修撰公寵室公名璋字美成。	韓元吉、龍圖閣學士(正七品)	『南澗甲乙稿』卷二十二
0846	孺人賀氏墓誌銘		南 2	1193	淳熙4年				5	3	2	正八品	孺人					從九品	迪功郎		江南西路吉州永新縣	江南西路吉州永新縣	縣內	【賞贊】姑廢居二十餘年孺人晨昏盡極內之事寔命無迭絕與丙辰米豆斗斛錢履有餘積。孺人諒致政日鄉有戲爭積而不散非仁也。	楊萬里、實誼閣學士(正三品)	『誠齋集』卷一百三十	
0847	熊氏墓誌銘		南 2	1194	紹熙5年	71	南 1	1138	3	3	0								江南西路撫州崇仁縣	江南西路撫州崇仁縣	州內	【賞贊】既葬歸崇仁與君。夫人淑業高適守之孺行之果其寵於教子古敬妻孟母因應如是而起家。	陳達、淮南安撫使(正三品)	『江湖長翁集』卷三十五			
0848	楊夫人墓誌銘		南 2	1194	紹熙5年	68	南 1	1147	2	2	0						正八品	奉議郎 從事郎	南浙路婺州武義縣	南浙路慶元府新鄉縣	路內	【守節】楊氏年二十有一而嫁。二十有三而字(生亡)。二十有六而寡。寡四十有三。六十有八年。	陸游、實章閣待制(從四品)	『渭南文集』卷三十四			
0849	村女墳誌	孫娘	南 2	1194	紹熙5年	13	南 3	1199						從二品	太子少傅	從六品	朝請大夫							【賞贊】平國老雙周某孫女村娘。父編今朝請大夫行大理司直、母宜人劉氏。	周必大太子少傅(從二品)孫娘	『周益國文忠公集』卷七十六	
0850	楊夫人墓表(楊氏)		南 2	1194	紹熙5年	68	南 1	1144	2	2	0						正八品	奉議郎 從事郎	南浙路婺州武義縣	京東西路東平府東平縣	路內	【守節·教育】蒙君死、夫人年二十六、子長日晷、三歲、幼穉也始生。蒙氏畏兵南徙、以貧、教授不自業、人謂夫人：「當奈何？」夫人曰：「吾義家蒙氏人謂夫人：「當奈何？」夫人曰：「吾義家蒙氏、復何難！」。二子稍長、盡賣房中物買小宅、為娶婦立家室。時 登有大儒呂公、夫人告二子曰：「爾學不成、無庸歸也。」二子或經年不得見夫人。既而先後登進士第、皆爲時所知、量尤有文名。夫人三十喪其夫、不嫁終身訓二子使有立。	葉連、實文閣待制(從四品)	『水心集』卷十四			
0851	梁國太夫人上官氏墓誌銘	母	南 2	1194	淳熙5年	85	南 1	1127	4	4	0	正一品	國太夫人	正三品	光祿大夫	正五品	中大夫	從三品	戶部侍郎	從六品	朝奉大夫 朝奉郎 承議郎 通直郎	福建路邵武軍邵武縣	成都府路眉州丹棱縣	路內	【行狀】夫人不違事其舅姑過歲時應、祭稱家有無必具以潔與其夫均感慕不翅如違事者嘗歎曰吾爲君家婦凡事死違事生也。	韓元吉、龍圖閣學士(正七品)	『南澗甲乙稿』卷二十二
0852	汀州田使君妻		南 3	1195	慶元元年	58	南 1	1153	1	1	0	從六品	宜人	從四品	國子祭酒	從七品	承議郎	從六品	朝奉大夫	從九品	將仕郎(唐)	河北西路相州安陽縣	江南西路南安軍南康縣	路內	【賞贊】宜人生既長和順幼微知書達理女兄鍾愛。	周必大、太子少傅(從二品)	『周益國文忠公集』卷七十六
0853	安人盧氏墓誌銘	再嫁	南 3	1195	淳熙6年	64	南 1	1148	3	3	0	正七品	安人				正八品	復州教授	從九品	迪功郎	南浙路衢州江山縣	南浙路衢州信安縣	廣接路開/嚴短	【再嫁】周君不幸即世。夫人提其孤孫其柩由數千里。歸居且十年不忍去其姑之左右遺終姑喪。乃若有所不容者。夫人之母徐嘆曰「吾女無所託矣。必託于士之賢者。庶幾其肯從焉。而攸久失其配託。以料人歸徐氏功素薄子生業。夫人治家勤儉有法授其姊妹和。以盡禮凡祭祀賓客人莫知其莫。撫其前氏二子如己出己乃自生子文卿也。	韓元吉、龍圖閣學士(正七品)	『南澗甲乙稿』卷二十二	

0854	林太淑人袁氏墓誌銘	母	南	3	1195	慶元元年	76	17	南	1	1136	5	4	1	從三品	太淑人	正六品	朝議大夫	正九品	登仕郎(唐)	正四品	通議大夫	正八品	寺丞正九品登仕郎(唐)	兩浙路明州鄞縣	兩浙路明州鄞縣	縣內	【教育】淑人既順達其意又自課諸兒讀書聲琅琅、終日特達甚悅界以所佩魚曰「而子後必有達者」。 【守節】通議官中節而卒。淑人于是年二十七、甯守節堅確誓無他志東通方切意以特達之責備。嘗數韓愈門戶凋落欲振起之教子、蓋鮮名儒碩儒使諸益所以培植磨厲者。甚備後其子祖治以學行材議忝司農守三部為時間人贊母之教義顯其功勞矣。	袁崇、國子祭酒(從四品)	『契窗集』卷二十一				
0855	孺人俞氏墓誌銘		南	3	1195	慶元元年	75	20	南	1	1140	5	3	2									正三品	宣事大夫	正九品	承事郎承務郎	兩浙路婺州東陽縣	兩浙路婺州東陽縣	縣內	【行狀】孺時寡姑已歿。恨不違事。【賞贊】孺人之教子真有義方非夫富貴以為悅者也。	樓鑰、中書舍人事(正四品)	『攻媿集』卷一百三		
0856	碩人郭氏墓誌銘		南	3	1195	慶元元年	55	20	南	1	1160	3	2	1	從三品	碩人														【行狀】碩人事舅姑如事父母。碩人能順承其意勤儉自力食無美味衣不飾綵至待賓客。	李道孫	『梧雪金石志』卷六		
0857	張令入墓誌銘		南	3	1195	慶元元年	50	25	南	2	1170	6	2	4	從四品	令入		政和2年進士	紹興30年進士	正四品	中書舍人	從九品	迪功郎承務郎	兩浙路温州永嘉縣	兩浙路温州瑞安縣	州內	【賞贊】夫人父兄皆儒先生、自幼陶染詩禮聞事、絕異於他女。其夫有學行文詞經世之業、遠近宗從登門請義、通日夜、屢寒暑、室內常無坐處。夫人愛其弟特甚。弟死久、諱不告。過時而後哭之、慟絕、遂得疾。慶元元年八月二十二日且午、曰：「伯伯何在？吾今死、不可不與別。」薄暮、伯氏至、夫人曰：「新婦婦笑。」夫撫之曰：「得無記曠昔所得於論語、孟子乎？」諱之再三而嘆、年五十。封令入。 【銘語】夫以書來曰：「吾夢泉臺盛服出布帷、問焉往？」曰「往兒子墓」、意屬子銘也。」又曰：「常日不樂、未曾破聲色、其女問何以能忍？」曰：「我豈無氣性者耶！但病上墓誌不得、故不為爾。」然則夫人之期於後遠矣、奈何足以銘！銘曰：同其夫之志意兮、眇道古而遠今。有逝而不違兮、有微而莫尋；人所不知兮、夫人知心。嗚呼！所謂好合兮、所謂瑟琴。老至不倦、夫也弗任。山則壽矣、勸此產陰。	葉道、宣文閣待制(從四品)葉道的友人・陳傳良的妻	『水心集』卷十四					
0858	洪氏孺人墓誌銘		南	3	1195	慶元元年	若干					8	4	4	正八品	孺人							從八品	司理		某縣	某縣		【賞贊】孺人為多子在夫家克勤儉盡謀養祭舅女工掌自約不私所有報親姻無廢禮無遺課不失恩知人緩急周其乏惟力有謀焉。 【行狀】歸盡婦道、次盡妻道、次盡姑壻道、次盡母道、寂後盡姑道、必取・必大・必得・必強・必增蓋其所出子也。	陳造、淮南安撫使(正三品)	『江湖長翁集』卷三十五			
0859	鍾氏墓誌銘		南	3	1195	慶元元年	51		南	1	1162	2	0	2															【行狀】歸盡婦道、次盡妻道、次盡姑壻道、次盡母道、寂後盡姑道、必取・必大・必得・必強・必增蓋其所出子也。	曾守、朝散大夫(從六品)	『絳書集』卷二十五			
0860	陳夫人墓誌銘		南	3	1196	慶元2年	36	18	南	2	1178	4	2	2										從八品	修職郎		昌陵	兩浙路台州臨海縣		【賞贊】婦道相事唯謹和上下嚴內外敬無違性行靜正不愧屬漏不悅華節夙夜服勤。 【宗室】夫人陳氏、昌隆宗室燕懿王七世孫。脩職郎慶元府錄事正簿名師共字南之妻也。	楊綱、寶謨閣學士(正三品)	『慈湖遺書』卷十八		
0861	夫人周氏墓誌銘		南	3	1196	慶元2年	84	19	南	1	1131	8	4	4					從九品	迪功郎	從八品	文林郎		皆學進士	兩浙路台州臨海縣	兩浙路台州臨海縣	縣內	【賞贊】夫人幼敏情女紅之事不俟訓而能父母愛之。 【行狀】年十九歸同里文林郎李君。李君相敬如賓、事舅姑以禮。	黃瑞	『台州金石錄』卷錄七				
0862	蕭孺人黃氏墓誌銘		南	3	1196	慶元2年	71		南	1	1143	4	2	2	正八品	孺人										從九品	迪功郎		兩浙路杭州湖口縣	兩浙路杭州新喻縣	路內	【賞贊】孺人失怙恃猶能博覽羣書兩歲經手抄帙恆往往多成誦。	曹蔭約、兵部尚書(從二品)	『昌谷集』卷十八
0863	夫人劉氏墓銘		南	3	1196	慶元2年	59		南	1	1155	2	1	1														兩浙路吉州安福縣	兩浙路吉州安福縣	縣內	【學問】夫人自其孺時精恭明淑。父文遠授孝經內則訓列女傳一讀成誦奇之。	楊萬里、寶謨閣學士(正三品)	『誠齋集』卷一百三十二	
0864	宜人史氏墓誌銘		南	3	1197	慶元3年	59	19	南	1	1157	8	4	4	從六品	宜人									從六品	朝奉大夫	從九品	迪功郎	兩浙路明州鄞縣	兩浙路紹興府餘姚縣	路內	【學問】宜人史氏其賢異甚少而讀書義理、如懸男子父母奇愛之。 【行狀】年十九歸於我。事舅姑如事其父母。 【封号】初以文惠王(父)故特封孺人。李公(夫)遂鄞鄞封宜人。再封宜人。	孫應時、黃觀尉	『甌湖集』卷十二
0865	令入王氏墳記	繼室	南	3	1197	慶元3年	71		南	1	1144	6	6	0	從四品	令入									從四品	寶章閣待制			成都府路崇慶府	兩浙路越州山陰縣	路間	本文「於慶令入王氏之墓。中大夫人山陰陸某妻、蜀郡王氏享年七十有一。封令入以宋慶元丁巳歲五月甲戌。七月己酉葬焉。君舅少傅、君姑魯國夫人墓之南岡。有子、子處、烏程侯、子龍、武康尉。子儉、子坦、子布、子華。孫元禮、元敏、元開、元用、元雅。曾孫阿是幼未名。」	陸游、寶章閣待制(從四品)妻	『渭南文集』卷三十九
0866	安人張氏墓誌銘	妻	南	3	1198	慶元4年	67		南	1	1149	2	2	0	正七品	安人									正三品	淮南安撫使		鄉貢進士	淮南東路揚州高郵縣	淮南東路揚州高郵縣	縣內	【賞贊】始嫁莫不以婿備為福。安人獨陰自喜某嘗嗜書	陳造、淮南安撫使(正三品)	『江湖長翁集』卷三十五
0867	太孺人劉氏墓誌銘	母	南	3	1198	慶元4年	86		南	1	1130	6	2	4	從七品	太孺人									正八品	奉議郎			兩浙路吉州太和縣	兩浙路吉州太和縣	縣內	【學問】太孺人自幼兼志警敏、父授以『孝經』『論語』『孟子』一過能誦尋通大義終身不忘父之愛異諸女。 【封号】淳熙年歲(喪男)貴諸太常間亦舉中侍試太學生員。明年(淳熙11年)壽聖皇太后壽節降天子年百官率屬上千萬歲壽上自公卿大夫下進士之管與計備者。其父母皆行封有差於是歲之母賜紫結衣軸封太孺人。	楊萬里、寶謨閣學士(正三品)	『誠齋集』卷一百三十一
0868	方夫人墓誌銘		南	3	1199	慶元5年	83	15	南	1	1131	3	2	1										從九品	迪功郎		進士	福建路福州閩縣	福建路福州閩縣	縣內	【賞贊】夫人生有令姿溫淑而高潔。年十三喪其母吳氏。佐迪功君治家事勤以篤友兄弟敬以和。年既寡適同里進士林君松。 【守節】年二十有六而林君卒。事其姑、如事父友其夫之友弟如在室之兄弟。而守節毅然又有人所不能及者焉。	黃榘、朱熹門人	『勉齋集』卷三十八	
0869	太宜人李氏墓誌銘	母	南	3	1199	慶元5年	85		南	1	1132	2	0	2	從五品	太宜人											正七品	朝請郎	兩浙路吉州安福縣	兩浙路吉州安福縣	縣內	【行狀】未笄嫁同邑曾君嘉謀、後贈朝請郎。方婦時朝請之祖妣、妣劉氏、父序昌、母許氏、四親俱無恙。宜人恪勤婦道、咸得其歡心相繼壽終協贊祭禮無違者。 【封号】朝廷遣禮部壽禮一賜冠敕三封至太宜人。 【遊覽】朝請(夫)卒。從臾山官道四方、淳熙甲辰(1184・70)、淳熙丙午(1186・72)、淳熙甲寅(1194・正八品)※結婚年節「未笄」	周必大、太子少傅(從二品)	『周益國文忠公集』卷七十六
0870	吳氏夫人墓誌銘		南	3	1199	慶元5年	85		南	1	1132	3	2	1														福建路福州懷安縣	福建路福州閩縣	州內	【行狀】遺事祖姑曾氏、曾氏晚多病、舅及姑高氏奉事、起居晝夜不少懈。夫人承其意雖先之舅姑「此吾事也。」	黃榘、朱熹門人	『勉齋集』卷三十八	
0871	朱夫人墓表		南	3	1199	慶元5年						10	7	3											正一品	丞相魏國公	正八品	都昌令				【賞贊】夫人是朝吾之子非夫人所生者凡三人、夫人撫之無差髮異意飲食衣服必先其夫若子不足則嘆空器衣敝襦袍也。	黃榘、朱熹門人	『勉齋集』卷三十八
0872	節婦劉氏墓銘		南	3	1199	慶元5年	26		南	2	1191	2	1	1														兩浙路吉州安福縣	兩浙路吉州安福縣	縣內	【賞贊】其夫以苦學廢疾按至三年竟不起云是時寡姑俱存而子未時也。里之人曰夫亡時依子幼嗚希是能安其室而嘔歸乎。 【行狀】奉其舅姑、至於孝謹踴躍經紀生業不懈。	楊萬里、寶謨閣學士(正三品)	『誠齋集』卷一百三十一	
0873	夫人陸氏墓誌銘		南	3	1200	慶元6年	67	15	南	1	1148	4	3	1												正八品	通直郎		福建路建寧府浦城縣/興興	兩浙路撫州金谿縣	路間/最短	【賞贊】夫人幼有美質懿行、既笄嫁金谿人故通直郎黃君實。 【守節】黃君仕至靖州軍事判官以歿。夫人持家教子有法度順享齊燕合禮嫁娶不苟里中多種之過疾雖風不亂起坐鬱鬱正衣冠。	陸游、寶章閣待制(從四品)	『渭南文集』卷三十七
0874	從妹樸夫人墓誌銘		南	3	1200	慶元6年	64	18	南	1	1154	6	4	2			正六品	朝議大夫	正七品	朝散郎					正七品	朝散郎			兩浙路明州鄞縣	兩浙路明州鄞縣	縣內	【貞婦】夫人性資聰慧容止端莊幼閑禮度動有儀矩尤勤婦功且精其能。夫人亦有內助之稱焉。(行狀)夫人姓樸氏名某字相之。曾祖常左朝議大夫景贈金紫光祿大夫、祖昇徽散騎常侍學士左朝議大夫景贈少師、父道右朝散郎。世為明之鄉人。母安人陳氏。既歸石氏(夫)、仰奉其姑、盡相夫子。	樓鑰、中書舍人事(正四品)從妹	『攻媿集』卷一百五
0875	戴夫人墓誌銘(戴氏)		南	3	1200	慶元6年	47		南	2	1171	2	2	0														兩浙路台州黃巖縣	兩浙路台州黃巖縣	縣內	【賞贊】初、少雲外恭華、中易直、儂婦一縣、客自天台臨藩者多稱之、少雲必留張飲、餽問淹客、窮日夜夜與娛樂。夫人暨坐裏向、杯酒酣適、凡體道之物、親自經手。飲飲、少雲鼻息鼾解、夫人吹燈起、捲帘內外、寢酒具如昨矣。	葉道、宣文閣待制(從四品)	『水心集』卷十七	
0876	留夫人墓誌銘		南	3	1200	慶元6年	70		南	1	1148	4	1	3														河北西路中山府曲陽縣/棠山	兩浙路衢州西安縣	路間	【教育】夫人相之而廣之學識卓然關於世者抑又夫人教誨之力也。 【行狀】舅姑御家嚴、夫人左右無違。	陸游、寶章閣待制(從四品)	『渭南文集』卷三十六	

0877	魏國太夫人蕭氏行述	母	南	3	1200	慶元6年	81	南	1	1137	9	5	4	正一品	國太夫人				正七品	武顯大夫	從一品	尚書右僕射	正六品	奉直大夫 朝議大夫 奉議郎 宣教郎 承事郎	福建路泉州晉江縣	福建路興化軍莆田縣	路內	【行狀】夫人歸家素貧、有女弟未嫁。夫人即盡斥奩中裝略無靳色。事姑黃國夫人時其飲食寒溫先意承志。黃國獲疾躬自煮藥、藥必先嘗。	陳忠、朱憲門人	『龍圖集』卷二十一
0878	太安人方氏壙記	母	南	3	1201	嘉泰元年	79	南	1	1137	13	8	5	從六品	太安人						正八品	修武郎	正八品	達直郎 修職郎 從事郎 保義郎 成忠郎 迪功郎 承節郎	兩浙路慶元府慈谿縣	兩浙路紹興府餘姚縣	路內	【賞贊】太安人孝慈淑明德宜家惠下無愆子孫衆多競爽。太安人方氏、句章慈溪人。家世長者、父固、母嚴氏。太安人以宣和癸卯歲二月初九日生、及昇歸故修武郎台州兵馬都監趙公伯。 【封号】拜封孺人。晚以子過婦類恩加今太安人。	孫應時、黃巖尉	『獨湖集』卷十二
0879	莫府君夫人墓誌銘(黃氏)		南	3	1201	嘉泰元年	69	南	26	南	1	####	3	1	2										兩浙路慶元府慈谿縣	兩浙路紹興府餘姚縣	路內	【守節】夫人年二十有六歸莫府君。夫不幸早世夫人始三十屏膏沐自閑寧保抱其一子二女。訓飭使就學知禮法身日夜紡績補紉處大族間承上接下無間言。子叔履既長託父舊薄始析爨移如也。母子綿衣惡食勤劬自營亦不事縫刀競什一而家用日饒學族荷重色里欺其賢明謂晚福未艾也。	孫應時、黃巖尉	『獨湖集』卷十二
0880	安人曹氏墓誌銘		南	3	1201	嘉泰元年	64	南	1	1155	7	3	4	正七品	安人										兩浙路婺州東陽縣	淮南東路揚州高郵縣	臨揚路間	【行狀】事舅姑敬、以愛接娣姒、以順施於中外歸重無間。【賞贊】治家保謹師事區處不御以嚴而不失節度家以益撫其所以奉慈嘗延賓旅必躬親之量備辦集皆知其志而莫自奉取足而已衣楚楚則傲然耳目玩好若焉焉。	陳達、淮南安撫使(正三品)	『江湖長翁集』卷三十五
0881	宜人閻人氏壙記		南	3	1201	嘉泰元年	60	南	1	1159	8	4	4	從六品	宜人					太學名士	從六品	朝奉大夫	從八品	文林郎 承務郎 迪功郎 得仕郎(唐)	兩浙路紹興府餘姚縣	兩浙路紹興府餘姚縣	縣內	【賞贊】宜人為婦為母之賢可知已里人。宜人閻氏、先世自吳徙家越之餘姚。曾祖修、祖嘉謨、皆長者。父誦達太學名士。宜人生紹興之壬戌、為故朝奉大夫知婺州趙公師龍之配。三封至宜人。	孫應時、黃巖尉	『獨湖集』卷十二
0882	劉氏夫人墓誌銘		南	3	1201	嘉泰元年	59	南	1	1160	1	0	1												江西西路吉州廬陵縣			【行狀】事父母孝、事舅姑敬謹見謂翁姑道。幸子友(夫)有仁族姻禮實有不睦無告乏意授力取遺棄而瞽其決幽以內事無鉅細望如也。	曾手、朝散大夫(從六品)	『綠窗集』卷二十
0883	太孺人賜冠 韓氏墓誌銘	繼室	南	3	1201	嘉泰元年					6	6	0	從七品	太孺人	從七品	秘書丞								成都府路成都府華陽縣	成都府路永康軍青城縣	路內	【賞贊】孺人婦母道而始終。	魏了翁	『鶴山集』卷七十
0884	孺人劉氏墓誌		南	3	1202	嘉泰2年	29	南	2	1189				正八品	孺人	從六品	朝散大夫	從七品	承議郎	從九品	迪功郎				兩浙路杭州鄞縣	兩浙路明州鄞縣	路內			趙中金石記卷四
0885	前室安人梁氏葬榮山壙誌	妻	南	3	1202	嘉泰2年	34	南	2	1192	2	2	0	正七品	安人	從一品	太師魯國公	正一品	右丞相少師		朱憲門人	從九品	承務郎	福建路泉州晉江縣	福建路興化軍莆田縣	路內			陳忠、朱憲門人妻	『龍圖集』卷二十一
0886	太孺人蔣氏墓誌銘	母	南	3	1202	嘉泰2年	86	南	1	1134	5	4	1	從七品	太孺人	正二品	金紫光祿大夫	從六品	朝請大夫		提舉福建市舶	從七品	承議郎	兩浙路明州鄞縣	兩浙路明州鄞縣	縣內	【賞贊】太孺人蔣氏與有養之節、而婦道盡矣則又過之其可以無紀乎。	樓鑰、中書舍人事(正四品)、建	『攻媿集』卷一百五	
0887	宜人宣氏壙記		南	3	1202	嘉泰2年	65	南	1	1155	6	3	3	從六品	宜人						從六品	朝散大夫	從八品	從事郎 迪功郎	兩浙路紹興府餘姚縣	兩浙路紹興府上虞縣	州內	【賞贊】宜人子孫鍾厚克守素風門庭泊然不遑有可有贊母也。宜人宣氏、其先世自越山陰徙家餘姚。曾祖殿、祖殿、父祿德皆以儒行重於鄉宜人生紹興戊午三月初吉葬故朝散大夫提點廣南西路州獄趙公庭瑞。	孫應時、黃巖尉	『獨湖集』卷十二
0888	淑婢陳氏墓誌銘		南	3	1202	嘉泰2年	63	南	1	1157	6	1	5			從九品	承節郎								江西西路撫州臨川縣			【賞贊】朱婦淑女也。朱母淑婢也。朱姑淑母也。	曾手、朝散大夫(從六品)	『綠窗集』卷二十
0889	太安人林氏墓誌銘	母	南	3	1202	嘉泰2年	71	南	1	1149	4	3	1	從六品	太安人								從六品	朝奉大夫	福建路福州長樂縣	福建路南劍州沙縣	路內	【賞贊】夫人目睇承父兄教、以自淑未笄德性成柔嘉惠和謹然。見諸聲氣間父母諄其將內則也。	曾手、朝散大夫(從六品)	『綠窗集』卷二十六
0890	判院方公孺人鄭氏壙志		南	3	1202	嘉泰2年	79	南	1	1141	4	4	0	正八品	孺人	從六品	虞部郎中		貢士				判院	武校尉		南田		【守節】夫僅四十有一歿。時諸孤幼稚。夫人一意幼稚及大成人婚嫁以序晚歲。	方大猷進學士祖母	『鐵庵集』卷三十五
0891	益國夫人墓誌銘(王氏)	妻	南	3	1203	嘉泰3年	69	南	1	1153	1	1	0	正一品	國夫人	從五品	中散大夫	正六品	大理少卿	正一品	宰相		從六品	朝請大夫	兩浙路平江府崑山縣	江西西路吉州廬陵縣	路間	【賞贊】夫人聰敏南湖女工備業下至書笑無不洞曉然非所好惟以孝友靜順為心。【封号】紹興十六年封孺人、二十三年封宜人、二十八年封宜人、淳熙九年十二月、先君捐館十二年純誠厚祀恩封太令人、十三年高宗慶澤封太夫人、紹興五年壽聖皇太后慶壽恩封太夫人、慶元五年光宗聖體清安天子行慶于下封信安郡太夫人、六年明堂恩進封太母郡、嘉泰三年母進封安康郡不及拜四年正月癸酉以疾薨。	周必大、太子少傅(從二品)妻	『周益國文忠公集』卷七十六
0892	夫人邊氏壙誌	妻	南	3	1203	嘉泰3年		19			8	4	4								從四品	國子祭酒	從八品	從事郎	兩浙路明州鄞縣	兩浙路明州鄞縣	縣內	【賞贊】夫人敬過之奉上捐下服勤不懈。男兒八人自乳其七叔紹慶藥節通禮甚無頃刻不樂于心無室靡不至之處自言吾之心為子兒之身兒小不安終日抱持未嘗置之衽席旁之他人也。	袁袞、國子祭酒(從四品)妻	『契齋集』卷二十一
0893	段夫人墓誌銘		南	3	1203	嘉泰3年	69	南	1	1152	7	4	3												江西西路吉州廬陵縣	江西西路吉州廬陵縣	縣內	【行狀】歸葬歸李氏。族大而富、夫人竭力成其家、姑太安人王氏壽百年矣。夫人與歸不懈歲時。 ※結婚年齡「歸葬」	周必大、太子少傅(從二品)	『周益國文忠公集』卷七十六
0894	孺人王氏墓表		南	3	1203	嘉泰3年	44	南	2	1177	5	3	2	正八品	孺人	從九品	迪功郎	正九品	承事郎	正八品	通直郎				京東東路澧州北海縣	京東東路澧州北海縣	縣內	【賞贊】孺人承上接下盡敬明恕既沒哭之皆哀。	陸游、宣章閣待制(從四品)	『渭南文集』卷三十九
0895	亡妣安康郡太夫人行狀	母	南	3	1204	嘉泰4年	95	南	1	1128	11	9	2	正二品	郡太夫人	正三品	正奉大夫	正六品	朝請大夫	正六品	朝請大夫	從七品	承議郎 登仕郎(唐) 文林郎	兩浙路明州鄞縣	兩浙路明州鄞縣	縣內	【賞贊】亡妣妣汪氏諱凝通字正柔。明之鄉人。曾祖元吉不仕、祖洙明州教敷累贈正奉大夫、父思邈左朝議大夫仕為太府少卿直隸開累贈少卿。妣翁人王氏累贈經國夫人。【封号】紹興十六年封孺人、二十三年封宜人、二十八年封宜人、乾道三年封孺人、淳熙九年十二月、先君捐館十二年純誠厚祀恩封太令人、十三年高宗慶澤封太夫人、紹興五年壽聖皇太后慶壽恩封太夫人、慶元五年光宗聖體清安天子行慶于下封信安郡太夫人、六年明堂恩進封太母郡、嘉泰三年母進封安康郡不及拜四年正月癸酉以疾薨。	樓鑰、中書舍人事(正四品)、母	『攻媿集』卷八十五	
0896	故太原王夫人墓誌銘(王氏)		南	3	1204	嘉泰4年	69	南	1	1153	3	2	1								從一品	太原王			潼川府路遂寧府長江縣	江西西路臨江軍清江縣	路間	【行狀】夫人臨海王氏。嫁為朝奉郎池州趙耆婦妻。嘉泰四年六月二十二日卒。	廖正、禮部侍郎(從三品)	『性善堂稿』卷十四
0897	夫人王氏墓誌銘		南	3	1204	嘉泰4年					9	5	4								正七品	朝奉郎			兩浙路台州臨海縣	兩浙路臨安府餘杭縣	路內	【行狀】夫人臨海王氏。嫁為朝奉郎池州趙耆婦妻。嘉泰四年六月二十二日卒。 【賞贊】祖姑曾性剛廉、姑鄭奉事莊悍不取憎。夫人夫即鄭旦暮上食飲、扶持左右。 【賞贊】夫人前後事舅姑無違、愛子不異庶、遇妾嚴方有恩。	葉達、宣文閣待制(從四品)	『水心集』卷二十四
0898	李宜人鄭氏墓誌銘		南	3	1204		75	南	1	1147	10	10	0								從六品	朝請大夫			京東西路徐州	京西北路開德府陽陽縣	路間	【守節】李議沒、子孫遵其德、貧賤百五十人、合堂共、令堂而和、贈分而同。新嶺之郊、以為是北方民族能存其舊風、可效而行者也。林君(夫)晝夜讀書攻文、高吟嘯、絕不知家事、事一聞夫人。	葉達、宣文閣待制(從四品)	『水心集』卷二十一
0899	夫人林氏墓誌銘		南	3	1205	開禧元年	42	南	2	1181	2	1	1					從二品	簽書樞密院事	從八品	宣教郎 通判				兩浙路婺州永康縣	兩浙路婺州永康縣	縣內	夫人四十二、開禧元年七月、從夫知寧國縣。卒嘉定二年十二月某日、葬游仙靈巖。子三德。女婦辰州司戶王傑。 夫【銘乞】應君(夫)以書來曰：「林氏恭約苦節、在羣(屯)之衆和樂；慈子、訓之嚴；操下、撥之恕。虛室日、未嘗降堂序。觀察有智、能助其夫、非止以婦職為順也。夫世之欲榮官顯仕者、無不致厚其妻者。而士亦有固窮甘約、肅於於生存之前、所以厚之不在彼而在此也。故雖掛壁懸馬革、肅於於生存之前、而不若片文隻字斯石、漫滅於零落之後。林氏之死、倘不辱而賜以銘、則是所以厚之者不使獨而此得、而某致薄之過可以洗矣。」余讀而悲之。 據者：昔予在金陵、雅聞君能治寧國、號令清省、絕少督帑、民愛信之、異口同聲。余以病瘵、捨舟山行、始謁君、見其質性沖泊、器宇明睿、侃然鎔邑中、量過其任者也。	夫人林氏墓誌銘	『水心集』卷十六

0900	戴夫人墓誌銘			南 3	1205	開禧元年	45	南 2	1178	1	0	1								南 3 路衢州 南 3 路紹興府 餘姚縣	路內	【行狀】戴氏幼約端靜、事舅姑惟謹姑其愛之。 【賞贊】府君生理素薄而收蓄過用常不給。戴氏輒留服珥以進無吝色。府君益喜曰「真吾家婦也。」	孫應時、黃巖尉	『蜀湖集』卷十二			
0901	夫人樊氏墓誌銘			南 3	1206	開禧2年	84	南 1	1137	6	4	2					從八品	宣教郎	江南西路吉州永新縣	江南西路吉州永新縣	縣內	【賞贊】夫人以爲吾門亦得賴焉。及少長女工婦儀未習而能事親左右無違。及笄歸英臣。夫人佐英臣 仰事俯育凡紀祀燕享侍迎慶弔婚姻之事一皆身任之。	陸游、寶章閣待制(從四品)	『渭南文集』卷三十八			
0902	莊夫人墓誌銘	妻		南 3	1206	開禧2年				5	3	2							南 3 路婺州金華縣	南 3 路婺州金華縣	縣內	【賞贊】莊氏歸立之(夫)二十餘年、一切以勞自當、而奉天子於學、故立之不爲膏省而家事自治、歎異矣！夫母於子能使之學、古今常道、歸於夫能勸其學、非今也。古人之事也。母之於子有祿利、故使之學、非必賢母而後能也。	葉連、寶文閣待制(從四品)	『水心集』卷十六			
0903	於夫人墓誌銘			南 3	1206	開禧2年												武校尉	南 3 路台州黃巖縣			【行狀】事舅姑敬共夙夜。	魏了翁	『鶴山集』卷八十			
0904	王夫人墓誌	繼室		南 3	1207	開禧3年	70	南 1	1156	4	2	2		正七品	尚書金部員外郎	從三品	正議大夫	從八品	修職郎	前湖北路常德府桃源縣	前湖北路常德府桃源縣	縣內	【賞贊】夫人間之性明淑貞文義旁備醫卜之說又善播義少病疾年七十忽得疾遂不可。	樓鑰、中書舍人事(正四品)	『攻媿集』卷一百七		
0905	宋母墓銘(王氏)			南 3	1207	開禧3年	74	南 1	1151	2	2	0		從七品	秘書丞				嚴陵	江南西路隆興府新建縣		【守節】三十而寡。長子 堯幾十有二、次林即修叔生五歲。王氏泣曰「女不謹謹乎信婦德也」。 【學問】王氏通詩禮史傳不爲辭章見世之婦。若女以文章華衿傳於人者、以爲非處逆順事安然。	楊綱、寶謨閣學士(正三品)	『慈湖遺書』卷五			
0906	霍氏墓誌銘			南 3	1207	開禧3年	45	南 2	1180	6	3	3					從八品	節度推官	正八品	修武郎	南 3 路常州武進縣	南 3 路潤州丹陽縣	路內	劉宰、太常丞(從七品)	『晏雅集』卷二十八		
0907	承議郎孫君并太孺人張氏墓誌銘	母		南 3	1207	開禧3年	83	南 1	1142	4	3	1	從七品	太孺人						南 3 路紹興府餘姚縣	南 3 路紹興府餘姚縣	縣內	【賞贊】太孺人質性莊重雪膏動以古人自律孺人事之如賓終始。	孫應時、黃巖尉	『蜀湖集附編』卷下		
0908	叔母方宜人坎誌	叔母		南 3	1208	嘉定元年							從六品	宜人									【賞贊】姪時先君故歿、曾祖母、祖母尚亡恙、伯叔、父、姑、妯娌暨聚慶合巹。先母未嘗少寓意、更自課麻桑籍葛之事較節薄味見者不識爲士大夫妻也。	劉克莊、中書舍人事(正四品)叔母	『後村集』卷三十七		
0909	安娘壙銘	未婚		南 3	1208	嘉定元年	12	南 3	1214								正二品	參知政事					【賞贊】安娘某之第二女也。歿年止十二、嗚呼是可哀也。	衛湜、參知政事(正二品)	『後樂集』卷十八		
0910	胡夫人薛氏墓誌銘			南 3	1208	嘉定元年	正八品	南 1	####	5	5	0					從六品	起居舍人		進士	南 3 路温州永嘉縣	南 3 路温州永嘉縣	縣內	【賞贊】少喪年且五十、猶未有仕宦意。夫人與之偕一室、時臥適飲食、而已人疑少寢、內室樂故不輕出不知其貧也。少嘗監湖州酒放車卒官、家益空。夫人治如平日、不使其子間有無。已而子宗、子守相次登進士第、以能文有學爲名士、師友必於四方、在家如處子、里巷人不識面、未嘗謁州縣也。 【婚姻】少嘗夫人曰薛氏、起居舍人微言之女。二家永嘉望姓、世相婚姻、少嘗於夫人實內外兄弟。	葉連、寶文閣待制(從四品)	『水心集』卷十五	
0911	錢子是請誌並徐氏墓			南 3	1208															南 3 路建德府淳安縣			【賞贊】徐氏家傳紀其孝敬燭癸事如見族人事有難決就問一言而定聞闕不嚴。	楊綱、寶謨閣學士(正三品)	『慈湖遺書』卷五		
0912	祝夫人壙誌			南 3	1209	嘉定2年				4	3	1								南 3 路台州臨海縣	南 3 路台州臨海縣	縣內	【行狀】入手門不遺事舅姑喜有姑在、蜜裏迎順不以一雙僮、其僕衆謂陳氏有婦矣。 【賞贊】予家故貧惟以詩書自命君臭味實協嗚呼無間言性仁且怡不爲富貴馳也。竊內事咸有條理此族姻親身也。	陳善猷、國子監司業	『貧富集』卷八		
0913	陳虛士姚夫人墓誌銘			南 3	1210	嘉定3年	59	南 2	1186	5	1	4							從八品	從事郎	南 3 路台州臨海縣	南 3 路台州臨海縣	縣內	【賞贊】吾母以儉治家、而吾父忘其不足也；以謹治躬、而親覽疑其有餘也；左腕乳癰、右手縫繡、男以冠、女以笄而不知其生男之爲素族也。	葉連、寶文閣待制(從四品)	『水心集』卷二十五	
0914	南陽縣太君墓誌銘	繼室		南 3	1211	大安3年	56	南 2	1175	6	4	2	正五品	縣太君			從五品	朝列大夫	正八品	樞密院判官	河東路平定軍平定縣	河東路平定軍平定縣	縣內	【行狀】夫人事姑孝、捐前夫人子知所生。讀者謂「夫人有鳴鶴均一之義焉。」	金元好問尚書員外郎(正七品)	『龜山集』卷二十五	
0915	高令人墓誌銘(高氏)	妻		南 3	1211	嘉定4年	52	南 2	1177	3	3	0	從四品	令人			從九品	京山尉	從四品	寶文閣待制	淮南東路亳州蒙城縣	南 3 路温州永嘉縣	路間	夫著：蒙城高氏、六歲、父爲京山尉、能助其母、思父輒涕泣、父歸乃已。從知蒙山縣、父思慮所不及、必左右之。爲余妻、實喜甚、聞一聞、終日不開聲。親饋粥盞十餘盤、魚肉醢菜略具。人或以爲難。官視祿上下、月儲以奉舅、次伯叔意從、無餘。所食者、太湖蔥、城東乾芥蕪。服飾進止常嚴然、見者皆尚其華整、不知其故洗刷而然也。晚歲、三子始育、始有宅居、稍墾田、不市肆、然自處一如其初。蓋其剛簡無欲、余所僅、其靜室有智、余所服、其多能而易解、緩急中程、識事本末、大抵余所宜以爲家也。 嘉定四年十二月初十日、年五十二卒。五年三月二十日、葬觀音觀後山、余觀音自特立嚮行之士、無所復望於世、而旅泊其身以苟免者、固已衆矣。是不足悲也。然而嘗亦不夫順親戚之舉而爲之託焉！今余非取謂特立而嚮行之也。然既老而休、且病且衰、且暮且盡、而高氏迫不余待、遂棄余、以是使余無順親和戚而爲之託也。是亦不足悲乎！銘曰：千世之遠兮、百年之長。天寬而地闊兮。此爲何祥。	葉連、寶文閣待制(從四品)妻	『水心集』卷十八	
0916	舒夫人墓誌銘			南 3	1212	嘉定5年	78	南 1	1180	3	3	0								南 3 路婺州永康縣	南 3 路處州松陽縣	縣內	【賞贊】太夫人一言日夜刻厲用能以子雲之筆札孔璋之書畫撥癘瘵倖遇以事之生之養不過百年而死之事與山川相爲久其無憾矣。	洪咨燾、翰林學士(正三品)	『平齋集』卷三十一		
0917	長女壙銘(周氏)	未婚		南 3	1212	嘉定6年	20	南 3	1210								從八品	從事郎			淮南東路滁州山陽縣	淮南東路滁州臨淮縣	路內	【行狀】盡于舅姑僅可饒吾之不孝於終身乎。	周南、從事郎(從八品)	『山房集』卷五	
0918	永國夫人何氏行狀			南 3	1212	嘉定5年	91	南 1	1139	1	1	0	正一品	國夫人	正八品	大理評事	正九品	登仕郎(唐)			淮南東路滁州山陽縣	淮南東路滁州臨淮縣	路內	【行狀】盡于舅姑僅可饒吾之不孝於終身乎。	周南、從事郎(從八品)	『山房集』卷五	
0919	梅婆孺人曹氏墓誌銘	繼室		南 3	1212	嘉定5年	56	南 2	1174	6	4	2	正八品	孺人							江南東路南康軍都昌縣	江南東路南康軍都昌縣	縣內	【行狀】孺人、以嫁進事秦氏(姑)終其養、以要進事先生(夫)畢其敬、以母道撫其子。	曹彦約、兵部尚書(從二品)	『昌谷集』卷十八	
0920	林夫人陳氏墓誌銘			南 3	1212	嘉定5年	74	南 1	1156	4	2	2								南 3 路温州平陽縣	南 3 路温州平陽縣	縣內	【賞贊】林君(夫)盡夜誦書攻文、高吟嘯、絕不知家事、事一聞夫人。夫人能師無爲有、久而若自然、夫之父又母焉。【守節】其後歸死喪、歲盡、田日盡、夫死猶力課其子學不怠。	葉連、寶文閣待制(從四品)	『水心集』卷二十一		
0921	劉夫人墓誌銘(劉氏)			南 3	1212	嘉定5年	64	南 2	1166	2	2	0		正四品	給事中		泉州府監	從六品	朝散大夫		南 3 路温州永嘉縣	南 3 路温州永嘉縣	縣內	夫人佐其夫有恩、清卿(夫)病八年、一飯皆自煮。內事無鉅細不整、家行無纖髮不備。欲舉禮上、儉紀通明。若是而遊乎方之外可也、非爲適者也。	葉連、寶文閣待制(從四品)	『水心集』卷十七	
0922	安人趙氏壙誌			南 3	1213	嘉定6年	50	南 2	1179	2	1	1	正七品	安人			正七品	武節大夫	從七品	武經郎	從九品	承信郎	南 3 路明州鄞縣		【賞贊】安人趙氏密性淑淑志爲善無驕暴侈泰之心事舅姑載祇載肅相夫子柔而正夙夜警戒有古嫂婦風雅素吉錫米堪密密補組之事皆身親之殆有甚于寒女又遇下有恩無嫌妒行尤婦人所難能武經于是妻以家政一無所預而得以專其精神助修職業安人之內助爲多。 【封号】開禧二年(1206)大審軍案封孺人。嘉定五年(1212)郊恩封安人。	袁裝、國子祭酒(從四品)弟嫁	『梁簡集』卷二十一
0923	號皇郡太君墓銘(梁氏)	母		南 3	1213	貞祐元年	51	南 2	1179	5	3	2	正四品	郡太君	正四品	定遠大將軍	從四品	宣武將軍		從三品	正議大夫尚書戶部員外郎	江南西路江州康寧縣		【賞贊】夫人天性孝友幽睦族屬內外無間言侯於諸弟妹皆當於擇記夫人彌縫輔助成得其稱。 【學問】夫人在父母家已知讀書作字有楷法。	金元好問尚書員外郎(正七品)	『龜山集』卷二十五	
0924	黃氏夫人墓誌銘			南 3	1213		49	南 2	1183	3	3	0		正七品	朝散郎	正七品	朝奉郎				江南東路南康軍都昌縣	江南東路南康軍都昌縣	縣內	【行狀】年十九歸于蕭氏。有婦言婦德、得賢姑意。	曹彦約、兵部尚書(從二品)	『昌谷集』卷十八	





0979	亡室墓誌銘(林氏)	妻		南 3	1228	紹定元年	39	19	南 3	####	3	2	1				知沅州	從六品	朝請大夫	正四品	中書舍人	從九品	迪功郎	福建路福州福清縣	福建路興化軍莆田縣	路內	【賞贊】君節縉嘗薪水未嘗我是不能使人知已也。	劉克莊、中書舍人事(正四品) 妻	『後村集』卷三十七	
0980	孺人吳氏墓誌銘			南 3	1228	紹定元年	94		南 1	1152	3	2	1	正八品	孺人						從九品	迪功郎			兩浙路臨安府新溪縣	兩浙路臨安府新溪縣	縣內	【賞贊】孺人晚益堅強視聽不少衰耄期而堅強累百未必一有之必含脂癯瘠戲滿前而後僅以舒孺人身見五世家教百殆矣。	洪咨夔、翰林學士(正三品)	『平齋集』卷三十一
0981	孺人鄭氏墓誌銘			南 3	1228	紹定元年	51		南 3	1195	7	2	5	正八品	孺人								修職郎得仕郎(唐)					【學問】孺人少習經傳至釋老諸書皆口誦心記多識。	劉克莊、中書舍人事(正四品)	『後村集』卷三十七
0982	吳氏夫人墓誌銘			南 3	1228	紹定元年	58		南 2	1188	4	3	1					從五品	汀州刺史			正八品	從仕郎從政郎得仕郎(唐)	福建路興化軍莆田縣	福建路興化軍莆田縣	縣內	【守節】整居二十年、實歿姑老盡婦禮如初嫁時。夫人長子宦遊。夫人不忍去、侍側盡教諸子、夜課婦工、寒暑不變。 【行狀】夫人事實姑不備。	陳宓、朱熹門人	『龍圖集』卷二十一	
0983	故孺人項氏墓誌銘	繼室		南 3	1229	紹定2年	37	15	南 3	1207	4	3	1	正八品	孺人			從九品	迪功郎	從七品	承議郎	從八品	從事郎	兩浙路台州黃巖縣	兩浙路台州臨海縣	州內	【學問】孺人寡室淑慧女工不待教、而能六歲從句讀、師授內則女誡列女傳及韓柳歐蘇諸詩文歷耳輒成誦、稍成深居無事取司馬公家治通鑑讀之世治忽人賢不再必要。 【賞贊】既葬適所宜歸得今武進大夫承議郎賜緋魚袋陳公。孺人起寒素歸大家主理、而行人門而蘭族實歎。大夫前室童氏二男一女皆長孺人既至以婚嫁為已任盡中物多以昇其女事實姑盡孝敬。 【封号】孺人以實慶軍恩始封。	劉宰、太常丞(從七品)	『漫齋集』卷三十	
0984	鍾孺人墓誌銘			南 3	1229	紹定2年	57	16	南 2	1188				正八品	孺人									兩浙路臨安府臨安縣	兩浙路臨安府臨安縣	縣內	【賞贊】孺人里中家人子耳嚴初機杼之心外無它志習而芳節自誓嘗明日烈恨於天性天然。	洪咨夔、翰林學士(正三品)	『平齋集』卷三十一	
0985	周夫人墓誌銘			南 3	1229	紹定2元年	86	17	南 1	1160	7	5	2									從八品	從事郎卿貢進士	江西南西路隆興府豐城縣	江西南西路隆興府豐城縣	縣內	【賞贊】夫人賢如孟母、淑如陶母、成家如巴寡婦、合於圖史之載、而余筆力衰情不能有以發也。 【行狀】遺事姑室賢、尊者稱其孝其仕也。	劉克莊、中書舍人事(正四品)	『後村集』卷三十八	
0986	觀安人墓誌銘			南 3	1229	紹定2年	87		南 1	1160	2	2	0	正七品	安人	從八品	清海軍觀察推官				正九品	承奉郎	從七品	承議郎	福建路興化軍莆田縣			【教育】安人歸林氏夫實、子幼實敬誨育情誼兩篤。承奉公厚德至稱鄉閭二子備學書科卿安人力也。	劉克莊、中書舍人事(正四品)	『後村集』卷三十八
0987	故寄國太夫人胡氏行狀	母		南 3	1230	紹定3年	78	22	南 2	1174	4	2	2	正一品	國太夫人						正三品	端明殿學士					【宗室】胡氏族本陳隆別、而居潭之湘潭歲久仍為望族。夫人之大王父某、王父某、父某皆實貴禮部。王父勳授台州文學。年二十有二歸於故端明殿學士趙公諱方是。	劉宰、太常丞(從七品)	『漫齋集』卷三十五	
0988	陳太孺人墓誌銘	母		南 3	1230	紹定3年	74		南 2	1174	2	2	0	從七品	太孺人	正八品	朝陽令										【賞贊】姑曰「忝雖有禮法不當吾婦乎」、族戚相語曰「溫良無忌刻不當如其嫂」。	劉克莊、中書舍人事(正四品)	『後村集』卷三十八	
0989	故章氏孺人墓誌銘			南 3	1230	紹定3年	63		南 2	1185	5	2	3	正八品	孺人					從八品	修職郎			兩浙路常州武進縣/延陵	兩浙路湖州金壇縣	路內	【賞贊】吾母柔而正靜而恭謹。吾父吾時父母俱亡悉吾母與吾父力貧、以養大父沒、而家益寸唐大母年鑑九十吾母佐吾父爨菽飲水無一日不究其歡是其盡事姑之道非有關於世故之大者乎。	劉宰、太常丞(從七品)	『漫齋集』卷三十一	
0990	故令人湯氏行狀			南 3	1230	紹定3年	69		南 2	1179	6	3	3	從四品	令人					從六品	文殿修撰	正八品		兩浙路湖州金壇縣	兩浙路湖州金壇縣	縣內	【賞贊】令人姿稟明睿文內外通讀而能以婦道節已以事奉勉其夫敦誥以成其子可謂賢矣。	劉宰、太常丞(從七品)	『漫齋集』卷三十五	
0991	江陰教授史君妻陸氏墓誌銘			南 3	1230	庚寅	41		南 3	1207	11	6	5			從九品	迪功郎	正六品	朝請大夫	正八品	江陰教授			兩浙路明州鄞縣	兩浙路明州鄞縣	縣內	【教育】重教能讀書了大義以名聞素風婉婉自則父母鍾愛之心不與凡子獨善幼弟孫森秀景正早親世科方諸時後劉利聽權者棖棖手揮之去有以氏之女德為言意獨契既而諸誦匠監公亦喜而曰可為吾媳矣。 【行狀】姑太碩人荏堂進所、則下氣怡聲以輔其教、凡所服非手出不敢備。	陸蒙、秘書監(正四品)	『本堂集』卷九十二	
0992	夫人徐氏墓誌銘			南 3	1230	庚寅					1	1	0							從八品	明官博士			兩浙路衢州龍遊縣	兩浙路衢州信安縣	州內	【賞贊】父死、母得嫁姑子之富者。夫人許未成服、聞知其故、號慟殯、絕、久而後蘇、家乃止不敢言。終喪、徐扣其意、夫人曰：「為富人妻、我不願也。」必明使聘焉。 【守節】既歸、必明忽暴得疾、不食柴立、親戚為夫人憂。夫人曰：「已許嫁矣、死生從夫、復何道！」必明貧甚、約弟治家而身遠出。弟有餘粟、析之別村、棄夫人破屋中、一婢閉門、機杼自若。遺其夫書曰：「柿木一株、綠陰滿庭、是足以當、吾子母念！」必明嘗以白金付之。夫人問所從、讀曰：「某人隨某事婦、以為謝。」夫人大怒、投於地曰：「我以子為賢、而若是！」亟具殯！」行殯、必明出其書、教學所得也。乃已。然則必明以母逐其夫、夫人以剛佐其潔、夫婦皆一世之偉、可敬已！夫人以庚寅十二月卒。某年月日、葬西安縣浮石鄉港橋。克勤自立尤苦、且不讓事夫人、而獨記其言行、曰：「懼不得也。」銘曰：夫勇退兮妻剛貞、德既同兮年宜并。風增逝兮風悲鳴、刻辭幽兮慰子情。	葉連、實文閣待制(從四品)	『水心集』卷十六	
0993	妣太安人林氏墓誌	母		南 3	1231	紹定4年	75	24	南 2	1180				從六品	太安人	通判福州		國論									【學問】父教以女誡。父卒、每展卷感泣、事母楊氏以孝謹稱。 【行狀】事姑太孺人鄭氏、益以孝謹。	方大琮、直學士、母	『鐵庵集』卷三十五	
0994	陳孺人墓誌銘			南 3	1231	紹定4年	46	27	南 3	1212	2	2	0	正八品	孺人									福建路福州福清縣			【學問】孺人少嘗慧備釋書多所通古今佳文章皆記誦父母艱於擇對。 【行狀】事實尤孝、辭氣容色之間、寒暑節餽之節、左右體察毫髮無違。 【賞贊】孺人姑嫜為法性儉實無炫服珍飾惟於祭祀賓客極其隆備。寒齋將棄官事祠告黃輿公、公曰與若婦謀之寒齋、以告孺人曰此吾素心也。	劉克莊、中書舍人事(正四品)	『後村集』卷四十	
0995	李節婦墓誌銘			南 3	1231	紹定4年	56		南 2	1193													福建路興化軍莆田縣			【行狀】事姑、諸子皆遵禮法、持身如玉非歲時祭享不帥容服無游俱則述姑嫜常見面、蓋十年而姑沒、二十年而子娶及見孫男二女三人於是昔之疑之者莫不悖伏敬嗟仰其入高其節也。 【守節】紹定辛卯(4年・1231)李寡居二十有八矣。四月己卯病卒。年五十六。	劉克莊、中書舍人事(正四品)	『後村集』卷三十八		
0996	齊國夫人潘氏納壙誌			南 3	1231	紹定4年	88		南 1	1161	11	5	6	正一品	國夫人	正七品	朝請郎宣徽郎承奉郎得仕郎(唐)	從八品	宣義郎	從一品	尚書右僕射	正六品		兩浙路處州青田縣	兩浙路處州青田縣	縣內	【追封】乾道三年先公雋雋初封孺人、乾道年封安人、淳熙年封宜人、紹熙年封恭人、慶元年封令人、慶元年封碩人、嘉定年恩封顯安郡太夫人、嘉定年封吉國太夫人、嘉定年封衛國太夫人、嘉定年封齊國太夫人、自後雖屢贈命以貴為大不便易也。	李遇孫	『括蒼金石志』卷七	
0997	江夫人巢氏墓誌銘			南 3	1231	紹定4年	86		南 2	1163	10	6	4										江南東路南康軍			【銘乞】子遠(孫)事親命持相妣夫人巢氏、言行一編擇且泣請余銘、允謫。謫然有古賢妃淑女風。 【賞贊】夫人相夫子、以禮春秋紀事必潔必誠、閨門千指權樞(ボウチ)靜幼靜順(ライ)靜睦不齊。	袁甫、國子祭酒(從四品)	『蒙齋集』卷十七		
0998	孝女阿秀墓銘(元氏)	未婚		南 3	1232	開興元年	13		南 3	1237								正七品		尚書員外郎							【賞贊】孝女阿秀率直大夫尚書令史秀容元好問第三女也。	元好問尚書員外郎(正七品) 娘	『遺山集』卷二十五	
0999	恭人楊氏墓誌銘			南 3	1232	紹定5年	64		南 2	1186	2	2	0	從五品	恭人						從七品	四川制置副使			潼川府路昌州昌元縣	成都府路彭州	路內	【銘謚】予(選者・魏了翁)同年進士、今四川制置副使・趙觀若彥(夫)、得紹定六年二月某甲子葬。恭人楊氏於彭州。扶來諸銘而觀焉、以進申之曰「吾婦世家宦中使昌元、曾大父說、大父師中、父驥、母杜氏。吾婦十歲喪母、克自隸隸凡女工酒漿之事、罔不畢誠。吾達母吾婦之姑也。」	魏了翁	『龜山集』卷八十二







1074	母昌元郡太夫人解氏墓誌	母	南 3	1274	咸淳 10年	84	南 3	1208	4	3	1	正二 品	郡太 夫人							正二 品	吏部尚 書	正二 品	吏部尚書 實奉簡特制	兩浙路瑞安 府樂清縣	兩浙路瑞安 府樂清縣	縣內	【賞鑒】解氏(妻)與劉氏(夫)世為姻且鄰。先母以慈惠靜動。 【封号】獻於庚戌榜補太學以壬戌榜興縣舍撰擢奉常第先母封孺人(72)。既暨召試官職 除正字遷校書郎兼福密院編脩官通郊禮封安人。壬申試吏部侍郎、陞侍讀封太令人 (82)。甲戌典貢舉試吏部尚書封太淑人(84)	劉駭、吏部尚 書(正二品)、 母	『蒙川遺集』卷四
1075	齊魏兩國夫人行實(曾氏)	母	南 3	1278	祥興 元年	65	南 3	1234	7	4	3	正一 品	國夫 人										京西北路 順昌府泰和 縣	江南西路吉 州廬陵縣	路間	【行狀】事舅姑盡孝、相夫子以儉勤。	文天祥、宰相 (正一品)、母	『文山集』卷十八	